

死神に鎮魂歌を

seven74

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死者蘇生兵士「NEVER」第一号にしてNEVER部隊のリーダー、大道克己。部下達と共に、悪の仮面ライダーエターナルとして風の街《風都》を恐怖のどん底に叩き落とした彼はしかし、二人で一人の仮面ライダーによって倒された。

だが、彼の運命はここで終わらなかった。

目覚めた彼が目にしたものは、見た事もない怪物に人々が襲われる世界。

そこで出会ったシンフォギアを纏う少女達と共に、彼は仮面ライダーとしてノイズとの戦いに巻き込まれていく。

『あの日』に失ったなにかを取り戻す為、死人の兵士は『永遠』の記憶を解放する！

「さあ、地獄を楽しみなッ！」

目次

呪縛解放砲塔カ・デインギル ———— 永遠の刹那を生きる巫女

『永遠』の目覚め ———— 1

吹き始める風 ———— 8

片翼の剣 ———— 20

幻想の凍炎、蘇る神槍 ———— 33

冷たく燃える憤怒 ———— 53

永遠の蒼炎と灼熱の緋炎 ———— 66

雨の中で ———— 78

忘れてはいけない記憶 ———— 93

禁句にして聖句 ———— 112

私は私のみままで ———— 126

それぞれのすべき事 ———— 143

覚醒の刻 ———— 158

信じる心の大切さ ———— 173

『U』の記憶を持つ男 ———— 190

それが武器なのであれば ———— 208

裏切り、裏切られて ———— 227

私ト云ウ炎ハ猛リ、狙撃手ハ蒼キ引キ金ヲ引ク ———— 248

解き放て、叛逆の銃士の記憶ッ！ ———— 265

動き出す者達 ———— 276

繋いだ手だけが紡ぐもの ———— 292

交差する想い ———— 304

少女が受け継いだ夢 ———— 317

双翼のウイングビート ———— 332

響くは希望の歌ッ！ その名はシンフォギアッ！

理想郷の巨人

夜明けを告げる歌

戦姫絶唱しないシンフォギア（永遠の刹那を生きる巫女編）

407

神威表明星艦フロンティア — 彼方へ翔ける神船 —

終焉の神槍

イクシード、起動（アクティブ）

古の残滓

二人の終焉（フィーネ）

教室モノクローム

道具の在り方

『進化』の過去

進化する怪物

静かに剥かれる牙

進化（イクシード）は止まらない

人ならざるヒトの願い

失われた『陽だまり』

心を押し殺して

歪んだ極光

歪曲する陽だまり／貫く覚悟

デイスティニーアーク

自由を目指して

吹き荒れる翠風

彼方（フロンティア）へ至る者

683

670

657

641

626

615

602

586

574

560

548

534

524

508

494

481

466

434

418

388

367

351

始まりの歌（バベル）

698

遙か彼方、星が音楽となった………かの日

714

G 編設定集

743

戦姫絶唱しないシンフォギア（彼方へ翔ける神船編）

749

純然魔導錬金アルケミック・カルト

エターナル&W 純真な

る騎士と魔法少女

Wの参戦／奇跡の殺戮者

756

死神E／絡繰りの騎士団

784

急襲のF／装者達の黄昏

803

懐かしきM／運命に導かれた者達

820

Kの哀しみ／眠りの幼姫

831

Dの策略／死霊の世界より

847

暴虐のS／フォールン・フェアリー

867

蘇るG／Project IGNITE

880

Iの完成まで／双璧の装者

897

G s a w H e a v e n / E d g e W o r k s

911

Iの始動／抜剣

922

集いしF／苛烈なる呪律

940

復活のA／銀腕・アガートラム

951

Eへの疑惑／彼女は裏切り者？

967

Sを取り戻せ／弱さを強さに

982

Hの苦難／向き合う勇氣

993

遠きP／男達の契約

1005

Zの共鳴／J u s t L o v i n g X - E d g e

1017

Tの苦悶／夢の途中

1031

Eの復活／『進化』の戦士	1042
D登場／狂気の英雄	1053
Kの覚悟／呪われし記憶	1063
Fの最期／ガイアイグナイト	1074
C飛翔／夢に羽撃け	1085
黒剣士T／暗黒の疾風	1098
Sの目的／遭遇	1112

呪縛解放砲塔カ・デインギル —— 永遠の刹那を生
きる巫女 ——

『永遠』の目覚め

六枚の翼を広げた、人々の声援と風都の風を受けて奇跡の変身を遂
げた戦士の両足が胸元に叩き付けられる。

「これが……ッ！ そうか、これが………」

「そう、それが『死』だ。大道克己」

無限にも等しい希望が詰まった一撃を受けた凄まじい衝撃が全身
を走る中、かつて自分が『兄弟』と呼んだ男の声が、今の自分に迫っ
て来ているものの名を告げる。

「久しぶりだな……死ぬのは………」

常人ならば二度感じる事のない『死』の感覚を感じる彼は、死に対
する恐怖を抱く事はなかった。

彼は久しぶりに経験する死を感じながら高笑いをしながら爆発し、
使用していた全てのT2ガイアメモリと共に風の都に散ったのだっ
た。

これが、死者蘇生兵士『NEVER』第一号にしてNEVER部隊
のリーダー、そして『永遠』の名を冠する戦士だった男、大道克己の
最期だった。

—— だが、それは新たな戦いの幕開けに過ぎなかった。

草木の臭いが鼻腔をくすぐり、ゆつくりと瞼を持ち上げる。

視界に入り込んでくる日差しに開きかけた目を細め、片腕で太陽光を遮断する。

(……………？　なんで、腕があるんだ……………？)

ごく当たり前に片腕を動かしたが、派手に爆発した以上、腕どころか全身が原型を留めていないはずだ。それがなぜこうして原型を留め、場所も《風都タワー》ではなく、森林に変わっているのだろうか。一瞬『死後の世界だからか？』と考えはしたが、『そんな事はないか』と頭を振る。

自分がこれまで犯してきた事を考えれば、死後に自分が行くべき場所はこのような日差しが差し込んでいる森林などではなく、悪鬼羅刹が闊歩する地獄だという事くらい、あの二人に敗北する前から考えていた。

とりあえず立ち上がって服の汚れを払い落としてから森林を抜けると、眼下には街が広がっていたが、

(やはり、《風都》ではないか)

その街には、自分が部下達を率いて襲った巨大な風車が特徴的な塔がなかった。

となると、ここはいったいどこなのか、という疑問が浮かんでくる。だが、いくら考えても答えなど一向に出てくるはずもなく、思考を中断した克己は情報収集の為に街へ足を踏み入れるのだった。しかし、そこで彼を待ち受けていたのは、

「『ノイズ』に『特異災害対策機動部』か。また謎が増えたな」

新たな謎だった。

聞いた話によると、『ノイズ』とは人間のみを標的とする、人類を脅

かす認定特異災害。通常兵器をものもしないその体に触れた人間は一瞬で炭素の塊と化してしまう、早い話が人類の天敵である。そして、そんなノイズに対抗すべく創設されたのが『特異災害対策機動部』である。

彼らの役割は、ノイズが出現した際にはその近辺にいる人々の避難誘導やノイズの進路変更を行い、時間経過でノイズが自発的に消滅した後は被害状況の処理といったものであるが、通常兵器しか投入できない以上、それが効かないノイズに対する決定打がないのが現状らしい。

いかに死人であるNEVERといえども、その体は人間のもの。一度触れられれば例に漏れずに炭素となってしまうだろう。現状、ノイズが出現した際の対処法は、『ノイズが消えるまでの間、シエルターに隠れてやり過ごす。それができないのであればひたすら逃げる』しかない。

だが、もし……、『もし』の話であれば、

「こいつが使えるかもしれないな」

手元にあるガイアメモリを見て、克己はそう零した。

あの時、自分が敗北したと同時に砕け散ったはずの『永遠』の記憶を内包したガイアメモリと、それを差し込むロストドライバー。それらが今、自分にはある。

なぜそれらが手元にあるのかという謎もあるが、いい加減わからない事に悩むのは飽きた。

エターナルメモリの能力は主にT2以前のガイアメモリの機能停止だが、ドーパントが相手ではない以上、期待はできない。だが変身には使えるし、あの姿になればノイズに対抗する事も出来るだろう。

「ん？」

丁度エターナルメモリを懐にしまった頃、足元になにかが当たる感

覚が走った。足元に視線を落とすと、そこにはサッカーボールが転がっていた。そして視線を上げれば、目の前にはサッカーボールと自分を見つめる少年の姿が。

「これはお前のか？」

サッカーボールを手にとって尋ねる克己に、こくりと頷く少年。「そうか」と答えてサッカーボールを渡すと、少年は感謝の言葉を述べてから遠巻きにこちらを見ていた少年達の元へ戻り、サッカーを再開した。

(あの二人は、こういつた世界を護っていたのか)

楽しげにサッカーとしている彼らをなんとなく見つめていた克己の脳裏に、あの《風都タワー》で戦った二人が浮かぶ。

二人で一人の仮面ライダーとして自分と死闘を繰り広げた彼らは、こういった幸せに満ち溢れた世界を護っていたのだ。それに対して自分は、いつたいなにをしていたのだろうか。そう思った瞬間、克己の脳裏に『あの日』の光景が思い浮かんできた。

巨大な箱庭から脱出し、自由を手に入れられるはずだった者達が死んだ日。「せめて」と救おうとした命さえ、この手から零れ落ちたあの日。

きつと、あの日からだろう。自分が根本から『死神』に成り果てたのは。

——だが、もしもあの時、彼らを救う事ができていたのなら。自分はきつと、なれていたのかもしれない。本当の意味での………

「に、逃げろッ！ ノイズだッッ!!」

「…………ッ!?!」

突然の悲鳴に顔を上げると、先程までの幸せな世界から一転して、恐怖に染め上げられた世界が広がっていた。

逃げ惑う人々の奥には、明らかに人間とは思えない外見を持つ異形の『なにか』がいた。その『なにか』に触れられた人間があつという間に炭素の塊となつて消滅する様子が見え、その『なにか』がノイズであると瞬時に理解した克己が早速懐から取り出したロストドライバーを腰に着けようとした、その時だった。

どこからともかくバイクのエンジン音が轟き、反射的にその音がした方へ視線を向ける。

蒼い髪を靡かせてバイクを運転するその少女が凄まじい速度でノイズの集団へと向かつていくのが見え、克己は思わず目を見開いた。

丸腰の状態でノイズの集団に突っ込んでいくなど自殺行為に等しい行いであり、聞こえる事はなくても自然と彼女を止めようとした瞬間、

「Imyuteus amenohabakiritron」

美しい声が克己の耳朶を震わせると同時に、蒼髪の少女を眩い光が包み込む。少女を包んだ輝きを乗せたバイクがノイズの群れに突っ込み、その奥にあつた障害物にぶつかったのか、爆発音と共に黒煙が立ち昇る。

そして、その黒煙を周囲のノイズごと切り裂き、一人の戦姫が現れる。

「ツ！」

美しい声色で歌を歌いながらノイズとの戦闘を始める少女を呆然と見ていた克己だったが、彼女とノイズ達がいる場所からは別の場所からやって来たノイズが見え、その標的にされていたのは、先程サツカーを楽しんでいた少年達と、彼らの家族だと思われる男女だった。

大人達は我が子達を抱えて走っているが、子どもとはいえそれなりの重量を持つ人間を抱えながら逃げるのは困難であり、あと少しもない内に追いつかれてしまうだろう。

「いけない……ッ！　ぐ……ッ!?!」

手にした剣でノイズ達を斬り捨てていた少女も彼らの存在に気付いて助けに行こうとするも、彼女を襲うノイズの数が多くとても間に合いそうにない。

遂にスタミナが切れてしまったのか、彼らの動きがどんどん遅くなっていく。それに比例して彼らとノイズ達の距離が狭まっていき、蒼髪の少女も悔しげに歯噛みしかけたその時、

——彼らに迫るノイズの前に、彼は立っていた。

「お、おじさん………?」

先程サッカーボールを渡した少年やその友人、家族達が見つめる中、克己は振り返る事なく告げる。

「死にたくなかったら、そこを動くな」

脅すように吐き出されたその言葉に思わず身を強張らせた彼らの前で、克己は懐から取り出したロストドライバーを腰に着ける。ロストドライバーから伸びたベルトが自動的に克己の腰に巻き付いたのを確認してから、克己は続いて懐からエターナルメモリを取り出した。

『エターナル!』

——なぜ、自分は死なずにここにいるのか。

——なぜ、失われたはずの力があるのか。

——なぜ、自分は彼らの前に立つのか。

その答えは、今はまだわからない。でも、彼らと同じように戦えば、きつと答えは見えてくるはずだ。

「変身ッ！」

エターナルメモリを差し込んだスロットを倒すと、『エターナル！』と再び音声が流れ、彼の全身を白を基調とした鎧が覆い、その上に漆黒のマントが被さる。

変身が完了すると同時に発生した青白い波動が周囲を囲うノイズ達を吹き飛ばした。

「な、なんだ、あれは……ッ!?!」

迫り来るノイズ達を切り裂きながらも驚愕する少女と、背後にいる大人達に抱えられた少年達のキラキラとした視線を受けながら、その戦士は目の前のノイズに向けて立てた親指を下に向ける。

「さあ、地獄を楽しみなッ！」

吹き始める風

「なんだ、あれは………ツ!？」

特異災害対策機動部二課の指令室に、司令官の風鳴弦十郎の驚愕に染め上げ上げられた声が響く。

追い詰められた人々を襲おうとしたノイズの集団の前に立ちはだかった、黒いマントを靡かせる謎の白い戦士。コンバットナイフに酷似した武器を駆使してノイズ達を次から次へと切り裂いていく彼の正体を探ろうとすぐに解析を急がせるが、どこからも彼の正体を告げられる者はいなかった。

「アウフヴァツヘン波形が検出されないとすると、あれは聖遺物ではないのか……?」だが聖遺物ではないのなら、いったいどうやってノイズを……」

モニターには相変わらず右手の武器でノイズ達と交戦している謎の戦士の姿が映し出されており、「いったい何者なのだ」と弦十郎は一人呟いた。

———多少動きに鈍りがあるが、深刻なものではない。戦闘は問題なく続行できるだろう。

人型ヒューマンノイドノイズをコンバットナイフ型の専用武器、エターナルエッジで切り裂く動作で変身後の状態を把握した克己———否、仮面ライダーエターナルは改めて周囲のノイズを確認する。

薄々感じてはいたが、やはり数が多い。自分一人ならそう時間をかけず殲滅する事は可能だろうが、それは自分の背後で震えている人々を見捨てればの話だ。

だが、そのような事を彼らは是としなかっただろう。彼らならば、どのような状況でも救える命は救おうとするはずだ。

(武器は一振り、敵は多数。はッ、丁度いいハンデだ)

以前傭兵として活躍していた頃に依頼された要人警護で、このような状況になった事がある。部下の一人がミスを犯した結果、敵の武装集団に包囲されるという事態になったが、あの時も手元にある武器を駆使して依頼を達成したものだ。そして今の状況は、それに似ている。

「踊るぞ、死神のパーティータイムだ」

マント——エターナルローブを翻し、家族を襲おうとしたヒューマノイド型ノイズを蹴り飛ばした後、体を紐上に変換して特攻してきたカエル型ノイズをマントで防御する。

あらゆる熱・冷気・電気・打撃を無効化できる能力を持つエターナルローブに阻まれたカエル型ノイズが、自らも巻き込んで消滅させるはずだった標的を捉える事なく消滅していき、その名残である炭素の塊を蹴散らして次々と襲い来るノイズ達を薙ぎ倒していくと、

「——克己ちゃん、受け取ってッ！」

聞き覚えのある声が聞こえて思わず顔を上げると、なにかが落ちてくるのが見えた。

瞬時にそれが小さな物体である事を理解し、目の前の人型ノイズヒューマノイドを蹴りつけて宙返りをすると同時に落ちてきていたそれを手に取って確認する。

「ほう、これは使えるな」

相手方のノイズは連携を行ってこないために体力は有り余っているが、護衛戦は長期戦に持ち込まれると面倒になってくる。そんな状況を打破するのに、このメモリは打ってつけだ。

先程聞こえてきた聞き覚えのある声については後々考えるところとして、エターナルはすぐに左手に持った『それ』をエターナルエッジのマキシマムスロットに差し込み、その記憶を解放する。

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

「はあッ！」

一角獣のような形をした『U』の文字が描かれているメモリ、ユニコーンメモリの記憶を読み取ったエターナルエッジを振るうと、そこから飛び出した青白い刃状のエネルギー波が前方のノイズ達をまとめて消滅させた。

「伏せろッ！」

エターナルの叫びに合わせて一斉に伏せた人々の上を青白い斬撃が飛んでいき、そこから迫っていたノイズ達も消滅させる。

周りにいたノイズ達が凄まじい速度で殲滅させられていく様子の間近で見っていた人々が先程まで抱いていた恐怖はゆっくりと、しかし確実に希望に変わっていく。

しかし、そんな彼らを嘲笑うかのように、一つの巨影が太陽光を遮った。

「…………ツ!?　ぐあ…………ツ！」

空間が歪むようにして現れたノイズ、強襲型ノイズが上空から地上のノイズ達を攻撃していたエターナルを殴り飛ばしたのだ。

エターナルローブで防御する事も出来ずに殴り飛ばされたエターナルが地面にめり込んだ体を起き上がらせると、持ち上げられた強襲型ノイズの足が悲鳴を上げる人々に下ろされようとしているが見えた。

すかさず彼らの前に飛び出し、強襲型ノイズの足を食い止める。だ

が、自分の何倍もの大きさを誇る強襲型^{ギガ}ノイズの足はそう簡単に押し返せるものではなく、僅かながらにエターナルが押され始めていた。

「お、おお……ッ!!」

思わず膝をつきそうになるが、そうやってしまえばこの重さに耐えられなくなる。耐え切れなくなったが最後、自分の後ろにいる人々の命はない。

『なんとしてでも、押し返す』。その気持ちを抱いて強襲型^{ギガ}ノイズに踏み潰されまいとしていた、その時——

「頑張れッ！ 負けるなッ！」

「おじさん、頑張つてッ！ 悪いノイズをやっつけてッ！」

「……ッ！」

後ろから、声援が飛んできた。

心の底から恐怖しているはずなのに。「死にたくない」と叫びたいはずなのに。子どもも大人も関係なく、自分に「頑張れ」と、そう叫んでいる。

——その時、不思議な事が起こった。

彼らの声に励まされるように、全身に力が漲ってきたのだ。自分の体から湧き上がっているのに、自分のものではないような感覚。

彼らの声援を受ける自分はまるで、あの二人のような………。

「おおおおおおおおおおッッッ!!」

雄叫びを上げたエターナルが全身から湧き上がる力を両腕に集中させると、あれ程重かったはずの強襲型^{ギガ}ノイズが容易く押し返され、地響きと共に倒れる。

「今の俺は、負ける気がしないな」

ゆっくりと起き上がろうとする強襲型ノイズにトドメを刺すべく、エターナルはロストドライバーから引き抜いたエターナルメモリーをエターナルエッジに差し込む。

『エターナル・マキシマムドライブ！』

強襲型ノイズから吐き出された小型ノイズ達を切り裂きながら走る。迎撃を試みようとするも今のエターナルにとっては無意味に等しく、迎撃に動いたノイズから順に炭素の塊へと変わっていく。

やがて全ての小型ノイズを消滅させたエターナルは大きくジャンプ。起き上がった強襲型ノイズの顔面目掛け、強力な跳び回し蹴り――

――《エターナルレクイエム》を喰らわせた。

「地獄に行ったら、この名を告げる。俺は……………」

着地したエターナルは強襲型ノイズに向けて立てた親指を下に向け、地獄で待つ悪鬼羅刹に伝えるべき名を口にする。

「大道克己。仮面ライダー……………エターナルツ！」

彼が名乗りを上げた直後、強襲型ノイズの全身が黒ずんでいき、炭素の塊と化して消えていった。

――ノイズとの交戦から数十分後。特異災害対策機動部の者と思われる男女が事態の收拾の為に現れた。

彼らは手慣れているかのようには、もう元がノイズか人間かわからなくなってしまう炭素の塊を処理。現場に部外者が立ち入らないように警備するなどの各自に与えられた役割をこなしている。当然、克

己が護った人々の保護もその例に漏れない。

生き残った大人達はなにやら一人の女性からタブレットを見せられながら色々と説明を受けている。だが、彼らの子ども達にとつてはその話は退屈そのものだろうし、仮に聞いたとしても理解できるものでもないだろう。

だが、今はそれよりも、

「こいつがなければ危なかったな」

このユニコーンメモリがなければ、目の前で生き残れた事に安堵している人々の内何人かは死んでいただろう。だが、なぜユニコーンメモリがああもタイミングよく落ちてきたのだろうか。

いや、違う。恐らくは、渡されたのだ。自分以外にガイアメモリの使い方を知っている誰かによって。

それに、あの時間こえた声。あの声には、聞き覚えがある。という
かありすぎる。

(……………まさかな)

自分以外のNEVERがこの街にいるなんて、あり得ない。自分は過去の幻影を追っているのか、と頭を振ってその考えを消去すると、一人の少年が歩いてきた。あの時、サッカーボールを返した少年だ。その後ろには女性がついており、顔立ちが似ている事から恐らく母親だろう。

「よお、坊主。怪我は無かったか？」

「うん！ おじさんのお陰だよ！ 本当にありがとう！」

「この度は本当にありがとうございました。なにかお礼をしたいのですか……………」

「礼は必要ない。そんな事の為に前達を護ったわけじゃないからな」

「で、ですが……………」

「その礼に費やす努力は、そいつの為にする事だな」

礼を断固として拒否した克己は「坊主」と母親から少年に視線を移す。

「母親を大事にしてやれ。誰よりもお前を『護りたい』と思ってるのは、他でもない親なんだからな」

「うん！　今までよりもずっと、お母さんを大事にする！」

「もちろん、お父さんもでしょ？」

「うん！　じゃあね、おじさん！」

「言い忘れていたが、俺は『おじさん』じゃない。『お兄さん』だ」

ブンブンと大きく手を振りながら母親と共に去っていく少年を見送りながら、「母親か……………」とポツリと呟く。

自分にも、ああして母親と手を繋いで家に帰った過去があった。そう、NEVERとして活動している間に記憶は数々の死によって上書きされていったが、確かにあったのだ。愛する家族と共に過ごした、幸せな日々が。

(そのなによりも大切なはずだった、かけがえのない大切な母^{ひと}を、俺はこの手で……………)

無言で開かれた手をじっと見つめる。もし、先程のようにこの街で人々を救い続けければ、少しは罪滅ぼしになるだろうか。そんな甘い話はないとわかっている。どうしてもそう考えてしまう。

もし本当にそれで母が、大道マリアが喜んでくれるのなら、自分は変われるのかもしれない。死神から、それ以外の『なにか』に……………。

(……………それもいいかもしれないな)

ふつ、と微かに笑みを浮かべて立ち上がった克己が歩き出そうとすると、その前に黒服の男達が立ちはだかった。

「俺に何か用か？」

「貴方をこのまま帰すわけにはいかない」

黒服の男達の間から進み出てきたのは、先程ノイズと交戦していた蒼髪の少女。彼女は黒服の男達に怯む事無く自分を見つめてくる克己を真正面から見据えて言葉を続けた。

「貴方には特異災害対策機動部二課まで同行してもらおう」

「……嫌だと言ったら？」

「最悪の場合、実力行使で」

「……………少し考えさせてくれ。そう身構えなくてもいい。別に逃げようだなんて考えちゃいない」

「……………いいだろう」

「助かる」

近くにあつたベンチに腰掛け、克己は思考を回転させる。

ノイズは通常兵器が効かず、その対処法は『逃げる』事のみだったはずだが、目の前にいるこの蒼髪の少女は——これには自分も含まれるが——あろう事かノイズに立ち向かい、退治してみせたのだ。恐らく公には発表する事できない対抗策なのだろう。もしああいった武器が普及しているのであれば、警察なり自衛隊なりがそれを使用して戦うはずだ。となると、先程生き残った大人達の前にはいた女性は、彼らに今回目撃した事を外部に漏らさないようにする為にタブレットで色々と説明していたのだろう。

ノイズが出現してから蒼髪の少女が駆け付けてきたという事は、彼女は『誰か』からの命令を受けてやって来たはずだ。その『誰か』とは間違いなく、彼女にとって立場が上に当たる人物だろう。恐らくそ

ここには、ノイズが出現位置を予想、または把握できる機器などが揃っているはずだ。ノイズと交戦する少女に対して状況説明も行っているだろう。すると当然、モニターなどで少女の様子も把握しなければなくなる。

それに彼らはノイズを相手取っているのだ。もしかしたら監視カメラの映像も映し出せるかもしれない。もしそれが可能ならば、ユニコーンメモリを受け取る際に聞こえたあの声の主が本当にこの街にいるのであれば、監視カメラの映像から見つけられる可能性も出てくる。

それと別に気になっているのは、自分がああ巨大なノイズに踏み潰されそうだった時に人々の声援によって湧き上がってきた、あの不思議な力だ。

彼女が所属しているであろう特異災害対策機動部二課に行けば、今まで感じた事の無かったその力がなんなのか、自分が求める答えを得る為にはなにが必要なのか、それらを知る切っ掛けになる出来事が起きるかもしれない。

「……いいだろう。俺をその特異災害対策機動部二課に連れて行ってくれ」

一通り思考を回転させてベンチから立ち上がった克己に頷いた蒼髪の少女は克己と共に黒服の男の一人が運転する車に乗り込み、現場を後にして特異災害対策機動部二課へと向かっていくのだった。

「——ようこそ！ 特異災害対策機動部二課へ！」

《私立リディアン音楽院》と呼ばれる女子校の地下。少女に連れられた克己を迎えたのは、盛大なクラッカーの音だった。

全員が完全に歓迎モードである事は流石に予想できていなかった。克己が目を見開いていると、彼らの中でも特に克己を歓迎している様子のガタイのいい男性が手を差し出してきた。

「まずは自己紹介だな。俺は風鳴弦十郎。この特異災害対策機動部二課の司令官を務めている」

自己紹介した弦十郎に倣って克己も自己紹介し、差し出された手を握ると、「冷たッ!」と弦十郎が思わず口にし、慌てて克己に謝罪して後ろに下がる。

「私は出来る女こと天才考古学者の櫻井了子。よろしくね」

次にやって来たのは眼鏡をかけた女性であり、彼女とも握手を交わす克己だったが、

(この女、なにか裏があるな)

長い間死地を駆けた経験からか、彼女がなにかを抱えている事さぐに見抜いた。その『なにか』まではわからないが、碌なものではない事くらいは理解できた。

「ところで克己君。早速聞きたい事があるのだが……………」

自分と握手した手を見つめて「冷たかった……………」と呟いている了子に対し、彼女には用心しておくべきだ、と克己が心に刻み付けていると、そんな事など露知らずに弦十郎が声をかけてくる。

「君が変身した『仮面ライダーエターナル』という姿、そしてそれに変身する際に使用した道具について教えてもらいたい」

そういった質問をするのは当然といえば当然だろう。ノイズに対抗できる手段がほとんど存在しない彼らからしたら、克己が変身する白い戦士の事は是が非でも知りたいはずだ。だが、なんの見返りなし

に教えるわけにもいかないのもまた事実だ。

「いいだろう。では交換条件として、その女がノイズとの戦闘の際に身に着けた鎧について教えてもらおうか。こちら側の情報を渡すんだ。拒む道理はないだろう？」

「わかった。ではまず、こちらから話すでしょう」

蒼髪の少女——弦十郎の姪っ子の風鳴翼がノイズとの戦闘の際に身に着けた鎧は『シンフォギア』と呼ばれ、その基となるのは世界各地の神話や伝承に登場する、現代では再現不可能な異端技術の結晶『聖遺物』の欠片であり、それを身に纏う者の戦意に共鳴して、特定の旋律を奏でる事でその真価を発揮する。現状の『唯一ノイズに對抗できる武器』だが、その強大すぎる力が故に日本の現行憲法に接触しかねないため、その存在はシンフォギアを纏う『装者』共々国家機密とされている。

翼が纏うシンフォギアは『天羽々斬』あめののはばきり。日本神話に登場する須佐之男命が八岐大蛇を退治した時に用いた神剣である。

シンフォギアの説明が終われば、次は『仮面ライダーエターナル』の説明だ。克己が自分が知りうる限りの情報を提示すると、最初にその話に喰いついたのは了子だった。

「記憶を内包したメモリっていうのはわかったけど、『永遠』に『一角獣』の記憶なんて、いったいどうやって内包するのよ……。他のメモリの話を聞く限りは全部が全部こういうのじゃないっていうのはわかったけど、それでも訳がわからないわ……………」

「だが、克己君が最初から所持していたのはエターナルメモリだけだったという事は、ユニコーンメモリはどこから……………」

「可能性の話ですが、この街に散らばっているのかもしれない。ドライバーが無ければ変身できないとはいえ、集めておいた方が良いでしょう。」

「うむ。メモリが集まれば、その記憶を解放できるエターナルの強化

もできるだろう。味方が強くなるのは頼もしい。すぐに搜索を開始しよう。——ところで、克己君」

「なんだ？」

「君が我々に力を貸してくれるのは嬉しい。だが、なぜすぐに了承できたんだ？」

「なぜすぐに了承できた、か……………」

顎に手を当てて少し考えてから、克己は口を開く。

「俺は、答えが欲しいんだ」

「答え？」

「なぜ俺はここにいるのか、なぜ俺にこの力があるのか、その答えを知りたいんだ。そしてその答えを得る切っ掛けが、ここにあると考えたからだ」

「なるほど……………。うむ、なら君がその『答え』を得られるまで、我々も君と共に戦おう！俺達大人は後方支援しかできないが、それでも君達をバッチリサポートしてみせる！」

「頼んだぞ、ボス」

ドンツ、と握り拳を胸に叩き付けた弦十郎に、克己は不敵な笑みを浮かべてそう口にするのだった。

——こうして、『永遠』の名を持つ死神の物語は始まる。

——この先になにが待ち受けているのか、それはまだ誰にもわからない。

——そう、今はただ、『運命』に導かれていくだけである。

片翼の剣

克己が正式に二課に所属する事が決定した日、克己は弦十郎から「戸籍を作らないか」という提案を受けた。

NEVERの克己にとって戸籍などあるはずもなく、克己本人にとっては戸籍など別にどうでもいい事だったので、二課の一員として働く以上、戸籍はあつた方が良いという弦十郎の意見には賛成だったので、戸籍は弦十郎に頼む事になった。

そして現在、克己は新しく作られた戸籍に書かれた職務を遂行していた。それは――

「今日から体育授業の講師を務める事になった、大道克己だ。よろしく頼む」

そう、体育教師である。

先日のノイズ戦において、人々を護りながらも周囲のノイズを一掃してみた克己の身のこなしは二課の誰もが目にしていた者であり、克己に体育教師を務めさせる事に反対する者など一人もいなかった。

試しに運動神経の確認の為に幾つかのテストを行い、その中には現役の自衛隊でさえも音を上げるものもあつたのだが、克己はこれらを難なくクリアしてしまつたのだ。おまけに指導も完璧なため、『これはもう確定でいいだろう』と全会一致で承認された。

それからというもの、平時は《私立リディアン音楽院》の体育教師、ノイズ出現時には『仮面ライダーエターナル』としてノイズ退治に向かうのが克己の日課となつた。

初日はもちろん生徒達に良い印象を持たれてはいなかったが、彼の授業を受けている内に生徒達も徐々に心を開いていき、今ではすっかり人気者になっていた。

「私、初めて大道先生を見た時は『男の人に教わるってなんか嫌だな』って思ってたんだけど、今ではそんな事考えてた自分を殴ってや

りたいぐらい大道先生が好きになっちゃった！」
「わかる！ ちよつと近寄りが見たい雰囲気なのがアレだけど、質問すればちゃんと教えてくれるよね！」
「でもさ、ちよつと教え方が厳しくない？ 教え方が軍人っぽいつていかなんというか………」
「何言ってるのよ。そこがいいじゃん！ 厳しい分、達成した時にはちゃんと褒めてくれるし、褒められたら『ああ、私頑張った！』って思えるんだもん！」

今日も学校のどこかで女子生徒達が克己の話をしているが、当の本人はそんな事など全く気にしていなかった。

「――二課に所属したのは正解だったな。俺一人ではこの街の状況を把握するのは不可能だったし、時間はかかっているがT2ガイアメモリの回収も進んでいる」

場所は学校から変わり二課。持て余されていた部屋を弦十郎から与えられた克己の前には、四本のT2ガイアメモリが置かれていた。

（アクセル、バード、ダミーにフアングか。適合者は今のところいないようだが、それに越した事はないな）

T2ガイアメモリにはそれぞれのメモリの適合者と強く引かれ合う性質を持っている。適合者以外の人間がT2ガイアメモリを使用してもその能力を発揮する事はないが、厄介なのはT2ガイアメモリと適合者が出会ってしまった時だ。

人間がドライバーなしにガイアメモリの力をその身に宿す方法は、『生体コネクタ』を介して自分の体にガイアメモリの力を注入するものである。ガイアメモリを販売していた組織『ミュージアム』は、ガイアメモリの購入者に拳銃型装置でそのガイアメモリ専用の生体コ

ネクタを施術するのだが、T2にはその過程が必要ない。

一度出会ってしまえば最後、T2ガイアメモリは生体コネクタ無しで適合者の体内に侵入。適合者をドーパント化させてしまう。

二課が調査してもドーパントが出現したという話は聞かないが、それでも適合者がT2ガイアメモリと出会うのは時間の問題だろう。

ただでさえノイズによる被害が出ている中にドーパントまで出てくるとなると、その被害は甚大なものになるだろう。

(万が一ドーパントが出現した時には、その相手は俺がするとしよう)

自分を除いてドーパントの相手をできると考えられるのはシンフォギア装者だけだが、その翼はドーパント戦を経験した事が無い。もしノイズとドーパント、この両者が同時に出現した際は、ドーパントの相手は自分が務める事にしよう。それに、これは一石二鳥とも考えられる。

旧来のガイアメモリであれば話は別だが、T2ガイアメモリはドーパントを倒してもメモリブレイクされる事が無い。ドーパントを倒せば、適合者の体内にあったT2ガイアメモリが排出される。それが戦闘に使えるようなものであれば、即座に戦力とする事ができる。

決して慢心しているわけではないが、エターナルの力はドーパントを軽く凌駕しているため、敗北などありえないだろう。

(昔は人間の欲望を利用して《風都》の連中にT2ガイアメモリを集めさせたが、この街だとそうはできないよな)

どこにあるのかわからない以上、簡単な方法は街の住人を操って集めさせる事だが、そんな事をすれば弦十郎達が黙っていないだろう。二課から追放されるのは可能な限り避けたい。自分が二課に協力すると決めたのは、自分の求める答えを探す以外にもある。それは――

「なんだ？」

司令室からの通信が来たので応答すると、今回の雇い主の声が聞こえてきた。

『ノイズが現れた！ 至急、現場に向かってくれ！』

「了解だ、ボス」

雇い主の男の声に立ち上がった克己は、目の前のT2ガイアメモリの内二本のメモリを手に取り、自室を出る。

『場所は海岸近くの工場地。翼が向かったが、数が多い。援護に回ってくれ』

《私立リディアン音楽院》から出ながら弦十郎からノイズの出現位置など情報を教えてもらい、大方把握した克己が通信を切ろうとした直後、

『———それと、君からの『頼み』についてだが』

通信機越しに告げられた弦十郎の言葉に、克己は思わず足を止めた。

『それらしき人物が監視カメラに映っていた。君と同じ服装の男女だ』

「……人数は？」

『二人だ。残りの二人の搜索もしたいところだが、申し訳ないがノイズの対処が先だ』

「いや、それを聞けただけでも良い収穫だ」

止めた足を動かし、克己は現場へと向かう。その足取りはどこか軽

く、顔には僅かながら笑みが浮かんでいた。

『アクセル・マキシマムドライブ!』

腰に装着したロストドライバーのマキシマムスロットに差し込んだアクセルメモリに内包されている『加速』の記憶を解放する。マキシマムドライブは仮面ライダーに変身している状態より些か威力は劣るが、生身でも使用する事ができる。

「仮面『ライダー』と名乗っているのにバイクがないのは、我ながらおかしいな」

『あら、だったら貴方専用のバイクでも作ってあげようかしら?』
「機会があれば頼む。さて、行くか」

常人では決して出せる事のない速さで走り出した克己は、ノイズの出現した場所へと向かう。

——その頃、工場地では天羽々斬を装着した翼がノイズと交戦していた。

彼女の背後にはこれまで斬り捨ててきたノイズ達の残骸があるが彼女も無傷という訳ではなく、その体には無数の傷がついていた。

『翼、今克己君をそちらへ向かわせた。今回も以前のように数が多い。苦戦するようなら克己君が駆け付けけるまで……………』

「その必要はありません。私だけで対処できます」

通信機越しに聞こえる叔父の声を無視して、翼は胸の内から湧き上がる歌を歌いながらノイズを斬り捨てていく。

自分を困んだ人^{ヒューマンノイド}型ノイズとカエル^{クワカエル}型ノイズが自らの体を紐上に変換して特攻してくる。翼はそれらを躲す度にカウンターを入れて

いき、その度に彼女の周りには黒い桜花が散っていく。しかし全てを回避する事は出来ず、所々に傷を負っていた。

「はああああっ！」

だがそれで止まるほど、剣は軟ではない。

逆立ちすると同時に脚部に刃を展開。そこから横回転する事で繰り出す技、『逆羅刹』でノイズ達を切り裂いていく。次々とノイズを炭素の塊に変えていく彼女を叩き潰そうとして強襲型ノイズが拳を振り下ろすが、彼女はすんでのところで回避。上空に飛び上がると共に周囲に展開した大量の剣の切っ先が眼下のノイズ達に向けられる。

一気に上空から落下させた大量の剣によつて貫かれたノイズ達が消滅する中、地面を蹴るように走り出した翼は前方にいるもう一体の強襲型ノイズを斬り捨てるべくアームドギアを巨大化させようとするが、

『フアング・マキシマムドライブ！』

「オラアッ！」

工場の屋根から飛び出してきた人影が、右手に握ったコンバットナイフで強襲型ノイズを切り裂いた。爪で切り裂かれたかのような傷痕を中心に全身を黒く染め上げて崩れていった。

「獲物を横取りしたか？ それはすまなかつたな」

「……大道」

エターナルローブを翻して振り抜いたエターナルは、自分を睨むように見つめてくる翼の体を眺め、溜息を吐いた。

「無茶な戦い方をしたな。お前はここから撤退しろ。後は俺が片づける」

「なんだと……う？」

「お前については既に調べ上げている。自分がアイドルだという自覚があるのなら、とつとそれ以上の傷を負う前に帰れ」

「……私は剣だ」

「いいや、お前は人間だ。お前の歌は戦いだけに使う為のものじゃない」

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

一角獣の力を宿した拳から放たれたドリル状のエネルギー波が大量のノイズ達を真正面から吹き飛ばし、残り数体となったノイズを青白い斬撃で消滅させる。

ノイズが全滅した事がオペレーターから告げられ、一気に緊迫した空気が緩みかけた指令室だったが、その視線はモニターに映し出されている二人に向けられていた。

「お前の過去は知っている。二年前にライブ会場で起きた惨劇。あの時にお前が相方を失った事もな」

変身を解除した克己が、同じく武装を解いた翼を真つ直ぐに見据える。

二年前、翼がある人物と共に結成したツイングヴォーカルユニット『ツヴァイウイング』のライブ中に出現した大量のノイズによって引き起こされた、死傷者・行方不明者が合わせて12874人にのぼる程の大惨事。その被害者の中には翼の相方の名もあり、翼と同じくシンフォギア装者だった彼女は、ライブ会場に現れたノイズ達を一気に消滅させる為、最大最強の攻撃手段『絶唱』を使用した。結果、彼女は絶唱による絶大なバックファイアのダメージが原因で死亡したのである。

「大切な者を失った気持ちは計り知れない。だが、いつまで過去を見続けているつもりだ？ そんなに相方————天羽奏が大事

だったか？」

「……………お前に、なにがわかるツ！」

叫んだ翼が克己の胸倉を掴む。その声色は震えており、瞳からは今にも涙が零れ落ちそうになっていた。

「そうだ。奏は本当に、本当に大切な人だったんだ……………。奏がいたから、私は変われる事ができた」

シンフォギア装者として戦い始めた頃の翼は自分の境遇を悲観的に捉えており、また性格も暗かった。

そんな彼女を変えたのが、天羽奏だった。彼女に励まされ、共に生活する内に翼は自分の使命に気付き成長する事ができた。二人で『ツヴァイウィング』として共に歌ったあの日々は、本当に素晴らしいものだったのだ。

「そんな奏を失った時の私の気持ちかわかるかツ!? 私にとって、奏は私の『光』そのものだったんだツ！ この気持ちがお前にわかるのかツ!? 答えろ、大道克己ツ!!」

何度も克己の体を揺さぶりながら尋ねてくる翼に、克己は、

「わからないな。これっぽっちも」

冷たく、そう言い切った。

「俺はその場にいなかったし、天羽奏が絶唱をしたのも彼女の勝手だ。それは、当時その場にいたお前が一番知っているはずだ」

「でも、私は……………、奏無しには……………」

嗚咽を漏らしながら俯く翼に、克己はある問いかけをする。

「翼、なぜ歌を歌う？　なぜ剣を取る？　今のお前が思っている事、そのままに答えろ」

「私が歌う理由……………？　……………それは……………」

しばしの沈黙の後、翼はその問いかけに答えた。

「この国を、護る為だ」

ハッキリと自分を見て答えた表情は、嘘偽りのないもの。それを見て克己は失望したように「そうか」と答え、

翼を、殴った。

『克己ッ！』

君付けを忘れる程の怒りの籠った弦十郎の言葉を無視して、克己はなぜ自分が殴られたのかわからないといった表情で自分を見上げる少女を見下ろす。

「わかるか？　今、お前は裏切ったんだ。お前の大切な人を。お前の『光』を」

「裏切った……………私が……………？」

「それだけじゃない。お前の歌を好きでいる連中さえも、お前は裏切っている。過去に囚われ過ぎた結果だ。今のお前は未来を見ようとしていない。過去の輝きに惑わされたんだよ。なあ、なんで今を生きるお前が、未来を見ていないんだ？　これから作られていく未来より、なぜ消えていくしかない過去を見ているんだ？」

屈んで翼と目線を合わせた克己は、頬に当てられている左手を握って自分の胸に押し当てた。

「なにを……………、……………ツ!?!」

反射的に彼の手を振り解こうとした翼だったが、彼の手が恐ろしい程に冷たい事に驚き、そして、本来なら感じるはずのものが感じられない事に息を呑んだ。

「こんな俺でも、未来を見ている。お前はどうか？ お前は未来を見ているか？ 未来を、欲しているか？」

「わ、私、は……………」

口を何度も開閉させて答えられないでいる翼に、克己は怒鳴った。

「……………生きてるんだろう？ お前はまだツ！」

「……………ツ！」

どれだけ涙を流そうと、過去は変わらない。過去は過去のまま消えていくのみだ。

だったら、求めろ。未来を。

まだなにも決まっていない、未来をツ！

「過去が消えていくなら、俺はせめて明日が欲しいツ！ だから俺は足掻き続けてるんだよツ!!」

克己の言葉が脳内で何度も反復する。

ドクンツ、と心臓が、彼にはないものが強く鼓動するのを感じた。

「過去に抗え、翼。お前がなぜ歌うのか、その意味を理解するその時が、お前が抗った瞬間だ」

立ち上がった克己が、手を差し伸べてくる。その手を取ろうとして、翼は自分の体に起きた異変に気付いた。

「? どうした?」

「すまん……………、腰が抜けた」

多くの衝撃を受けたからだろうか、腰が抜けて立てなくなった翼に一瞬呆然とした克己だったが、やがて「仕方ないな」と翼を抱え上げた。

「うええッ!? だ、大道ッ!?」

腕を太ももの裏に、もう片方の腕を腰よりも少し上の背中に回されている状態——所謂お姫様抱っこをされた翼の顔がボツと赤くなる中、克己は司令部に通信を行う。

「ボス、遅れて報告するが、ノイズの殲滅を完了した。これより帰投する」

『あ、ああ。気を付けて戻ってこい』

『あらあら、羨ましいわね〜♪』

克己がお姫様抱っこをするとは予想していなかった弦十郎の動揺した声、了子の茶化するような声を聞きながら歩き始めると、案の定「お、下ろしてくれッ!」と翼が暴れ始めた。

「今下ろしても歩けないだろ。大人しくしてろ」

「~~~~~ッ!」

反論しようにも克己の言っている事は事実なため、暴れるのをやめた翼は彼に余計な負担をかけない為に克己の首に自分の腕を回し、大人しくお姫様抱っこされるのだった。

「……………すまなかった。顔を殴ったりして」

「ん……大丈夫だ、大道の責任じゃない。……………大道」

「なんだ？」

「……ありがとう。私が戦う意味は、奏にほとんど依存していた。これからは、私自身が決めるんだな。何の為に、私は歌を歌うのかを」

「その答えは、案外近くにあるかもしれない。注意深く探す事だな」

「ああ、そうさせてもらう」

月明かりが照らす中、翼は自分の背中に回された手をちらりと見る。

(……………温かいな)

寒気がする程冷たかった彼の手は、なぜか今はとても温かかった。

「——来たか、克己君」

疲れていたのか、本部に戻る途中に眠ってしまった翼を念の為にメデイカルルームに預けてきた克己が司令室に入ると、弦十郎が出迎えてきた。

「ああ。さあ、早く見せてくれ」

「もちろんだとも。……………モニターに映してくれ」

弦十郎の指示に従い、キーボードを叩く音が響く。

やがてモニターに監視カメラの映像が表示され、最初は粗かった映像が徐々に鮮明になっていき、二人の男女の顔が露になる。

「彼らに見覚えはあるか？」

「ああ……………、もちろんだ」

「では、彼らの名は？」

今でも信じられない。彼が、彼女が、こうしてこの街にいるだなんて。

心に湧き上がる温かいなにかを感じながら、克己は彼らの名を口にした。

「泉京水に、羽原レイカ。あいつらは………俺の部下だ」

幻想の凍炎、蘇る神槍

——私にとって、『歌』とはなんだろうか。

二課の廊下を歩きながら、翼は思考を巡らせる。

大道克己に自分の無茶な戦い方を責められ、『奏を裏切った』と告げられたあの日からというもの、翼は自分がなぜ歌うのかという問いを繰り返していた。

（私は幼き頃よりこの身を剣として鍛え上げてきた。この国を護る防人として、それを脅かすノイズを殲滅せしめる為に、この剣——

——天羽々斬を手にとった）

胸から下がるペンダントに手を当てる。これこそ、ノイズと戦う為に振るう剣にして、この国を護る鎧。これを振るい、ノイズを駆逐する為に必要なものこそ『歌』であるのだが、その意味を理解できなくて刃も鈍るといふもの。

シミュレーションルームでの仮想ノイズとの戦闘でも、自分の胸になにかがつかえていような気がしてまるで集中できない。

答えが見えそうで見えない、このもどかしい現状をなんとかしたいのに、その方法が全く思いつかない。

マネージャーにして二課のエージェントの緒川慎次に聞いてみても、

『それこそ、翼さん自身が見つける事だと思いますよ』

と返されてしまった。

（誰かに頼って答えを与えてもらうのは駄目だ。それでは昔の私と変わらないではないか）

それでも、いざ自分と向き合うとなるとどうすればいいかわからな

いのが現状だ。なにか、自分が自分と向き合えるような切っ掛けがあればいいのだが――

「……ッ！…この音は……ッ！」

突如として廊下に響き渡るサイレン音。この音は最近何度も聞いてきた、本来であれば聞き慣れたはいけないもの。

すぐに司令室へ向かうと、既にそこは緊迫した空気に満ちており、そこかしこからキーボードを叩く音が聞こえてくる。

「叔父様、これは………」

「来たか、翼。ノイズが現れた、場所は市街地だ。早速、克己君と一緒に現場へ――」

「市街地に、ノイズと異なる高出力エネルギー反応を検知ッ！ その数、三つッ！」

「なんだとッ!？」

自分の声を遮って報告された情報に驚愕した弦十郎の隣で了子が即座にオペレーターに叫ぶ。

「波長の照合はッ!？」

「照合、完了しましたッ！ これは………アウフヴァアツヘン波形ですッ！」

「アウフヴァアツヘン波形だとッ!？ という事は………」

アウフヴァアツヘン波形。聖遺物、または聖遺物の欠片が歌の力によって起動する際に発生するエネルギーの特殊な波形パターン。それが検出されたという事は………

(まさか………)

翼がモニターに目を向ける。すると、それを待っていたかのようにモニターに検出されたアウフヴァツヘン波形の源の名が表示される。

《code：GUNGNIR》
「GUNGNIRだとオツ!？」

弦十郎の驚愕に染め上げられた声を皮切りに司令室内にどよめきが満ちる。

『ガングニール』。一度投げれば必ず標的を貫き、自動的に所有者の元へ戻るとされる、北欧神話の主神オーディンが振るう神槍。
しかし、その聖遺物の名は、

(でもあれは、奏の……………)

二年前のツヴァイウイングのライブ会場で起こった惨劇によって失われたはずの聖遺物の名前。翼の相手だったシンフォギア装者、天羽奏が纏っていたシンフォギアの名前だ。

モニターに映し出されたその名を目にした翼の心は凄まじい衝撃を受けていたが、体は自然とガングニールのエネルギーが検出された場所へと向かっていった。

「おい、待てッ！」

いきなり司令室を出ようとしている翼を追おうと克己が振り返ろうとした直後、ガングニールの名が表示されているモニターにある映像が表示された。

監視カメラの映像だろうか、震える小さな女の子の前で自分の体に起こった変化に驚いている少女が映っている。外見を見るに、あれがガングニールの装者だろう。だが、克己の意識は彼女に向けられてはいなかった。

伸縮自在の両腕を鞭のようにならせる、月明かりのような黄色い

体色を持つ怪人に、口元や体つきが女性のそれである、赤い体色の火炎のような怪人。

(あいつらは、まさかッ!?)

克己が驚愕に身を強張らせる中、 GANG ニールの少女の両隣に立つ二体の異形は眼前のノイズ達の戦闘を開始した。

——時は聖遺物 GANG ニールが起動する前日まで遡る。

「ええっと、今日の晩御飯に必要な食材はコレで全部だっけ？」

「うん。だけどごめんね、響。買い出しに付き合ってもらっちゃって……」

「全然大丈夫だよ！ あ、荷物は私が持つよ」

「ありがとう、響」

スーパーから出てきた黒髪の少女——小日向未来の持っ

ていた食材が詰め込まれたビニール袋を受け取った少女——

立花響は、未来からの感謝の言葉に「えへへ」と朗らかに笑う。

「このくらいへいき、へっちゃらだよ。だって、未来が美味しいご飯を作ってくれるんだもん。これくらいはしないとね」

「もう、響ったら。そんな事言われたら頑張りたくなっちゃうじゃない」

二人して笑い合って歩き始めると、「そういえば」と未来が今日起こった出来事を口にする。

「今日も響、授業に遅れたよね。今日はどうして遅刻したんだっけ？」
「えっとね、猫を助けてたの。高い所には登ったけど、降りられなくて

困ってるようだったからさ」

「それ、この前もしてなかった？ また助けたの？」

「もちろんだよ。困ってるようだったからほっとけなくて」

響の趣味は『人助け』である。今回はどうにかして木に登った猫を降ろそうとしていた同級生の頼みを聞いて猫を助けはしたのだが、その結果授業に間に合わずに遅刻。なんとか気付かれないように生徒の列に入ろうとするも結局教師にバレてしまい、雷を落とされてしまったのだ。ちなみに響が《私立リディアン音楽院》で猫を助けた結果授業に遅れたのはこれで二回目である。

「人助けをするのは良い事だけど、それも程々にしないといけないよ。ただでさえ響の成績はあまり良くないんだから、ちゃんと勉強に集中しないと」

「うっ、痛い所を突かれた……………。うう、私ってやっぱり呪われてるのかな」

がくりと肩を落としたその時、響の胃が大きな鳴き声を上げた。反射的に腹部を押さえて周りの人々に聞かれていないか辺りを見渡す響の姿に、未来は思わず笑い声を漏らす。

「……………ごめん、ちょっとそこのコンビニでおにぎり買ってきてもいい？」

「大丈夫だよ。でも買い過ぎないようにね。帰ったら夕食なんだから」

「は〜い！」

そうしてコンビニに入った響がものの数分で出てくると、その手にはツナマヨと明太子おにぎりが握られていた。響からすれば今すぐにも食べたかったが、道路の真ん中で食べるのはいかがと思うという未来の意見に従って、近くの公園に腰かけて食べる事にする。

だが、そこには――

「もう、お金が無いんじゃないや食べ物を買えないじゃない！ この公園にも一応食べれる植物とかはあったけど、もう限界よッ！」

「うるさい、黙って。いや、やっぱ喋ってて。あんたが喋ってれば少しは空腹を紛らわせるかもしれないから」

「んまあ、貴女ってば酷い人！ 貴女がワタシの声で空腹を紛らわせている間、ワタシのお腹は現在進行形でどんどん減っていくのよ？」

「ああもう、お風呂に入りたい。出来る事ならベッドも欲しい。傭兵の私達にそういうのは似合わないってわかってても、それでもやっぱり欲しい。水はもううんざりなのよ、水は」

「おっしやるとおりだわああああッ！」

『食べ物を下さい』と書かれた段ボール箱に後ろでひたすら大声で叫ぶ男性と、その隣でうんざりした様子で腹部を押さえている女性がいた。黒を基調とした服を着込んでいる二人の表情はやつれており、特に男性の方は女性よりも酷かった。女性に言われた通りに叫び続けたのが原因だろうか。

「あつ、もう周囲からの視線が痛いッ！ ワタシ達を完全に不審者だと思ってる目だわアレッ！ いいわよ、そんなに見たいなら気が済むまで見ればいいじゃないッ！ あ、でも警察は呼ばないでくださいお願いします」

「いきなり声のトーン落とさないで。ほら、叫ぶ」

「痛いッ！ 皆さん、これをやめてほしければ食べ物を恵んでください
ああああああいッッ!!」

げしつ、と蹴られた男性が再び叫び始める。

周りからの視線を物ともせずには叫び続ける彼の周りにはいる人々はあからさまに彼らを避けるように通り過ぎていき、彼の『食べ物を恵んでほしい』という要望に応える人はいなかった。――否、

ここに一人だけいた。

「あの、これで良ければ……………」

他とは違い、自ら進んで彼らに近付いていった響からおずおずと差し出されたおにぎりを見て、先程まで叫び声をあげていた男性は一瞬で口を閉じ、女性の視線もおにぎりに釘付けになる。

「嘘、本当にくれるの?」

「お腹減ってるんですね? 手元にあるのはこれぐらいしかありませんが、それでもいいのなら……………」

「……………あんだ、『神』って言われた事ない?」

「え? な、ないですけど……………」

「でもワタシ達にとって貴女は神、救世主よッ! 本当にありがとうッ!」

「あつ、こら! そっちは私のものよッ!」

二人は響から受け取ったおにぎりを飲み込むように頬張り、ものの数秒で完食した二人の顔には生気が戻っており、その表情は幸せに満ちていた。

「本当にありがとう、貴女はワタシ達の恩人だわ。なにかお礼をしたいんだけど、この通りなにも持ってないの。本当にごめんね」

「こいつと考えてる事が同じってのは癪に障るけど、本当にごめんなさい。お礼がしたいは私もだけど、本当になにもないから……………」

「いえいえ、大丈夫ですよ。私、人助けが趣味なんです。私がした事で誰かが喜んでくれれば、私は嬉しいんです」

「んまあ、聞いた? この子、凄いイケメンだわ。女なのにイケメンオーラがたっぷり放出してるわッ!」

「あんたはもう喋んなくていい。またお腹減らすわよ」

「あら、辛辣。——改めて言うけど、本当にありがとう。助

かったわ。それに、なんだか貴女とはまた会いそうな気がするわ。良ければ名前を教えてくださいませんか？」

「立花響です。《私立リディアン音楽院》の生徒です」

響が自己紹介をすると、今度は二人が自己紹介を始める。

「響ちゃん、良い名前ね。ワタシは泉京水。そしてこっちが――」

――

「羽原レイカよ。よろしくね、響」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

「ええ、それじゃあ私達は行くわね。探さなきゃいけないものがあるから」

「あつ、それなら……」

私も、と言い出しかけたところで京水がチツチツと立てた人差し指を左右に動かす。

「悪いけどこれはワタシ達ができるべき事。響ちゃんは手伝わなくて大丈夫よ。それに……」

響の肩を掴んだ京水が響を180度回転させる。不思議なまでの手の冷たさに「ヒエッ」となってされるがままに回転させられた響の目には、少し離れた所から自分を見つめてくる未来の姿が映った。

「あの子、貴女がワタシ達と話してる間、ずっと心配そうに見てたのよ？ 早く戻って安心させてあげなさい」

「は、はい」

「それならよし！ それじゃあ、バイバイ！」

ひらひらと手を振って夕方の街へ向かっていく彼らに、響は「さようならッ！」と彼らの姿が見えなくなるまで手を振り続けたのだっ

た。

「——なんか、改めて思い返してみると凄い人達だったなあ」

翌日の《私立リディアン音楽院》の食堂。響はそう呟きながら白米を口に含んだ。その前でドレッシングがかけられた野菜を食べた未来が、心配そうに響に尋ねてくる。

「あの時名前を教えちゃってよかったの？ それに学校の名前まで……」

「うん。あの後私もそう思ったんだけど、不思議と大丈夫だって思えてさ」

「根拠は？」

「よくわからないんだけど、あの人は悪い事はしないって思えるんだよね。もしやってたとしても、根はきつと優しい人達だと思ったの」

「まあ、そこは私も否定しないけどさ……」

そこで未来は「そういえば」と食事を中断して話題を変える。

「今日発売の翼さんのCD、人気が凄くて品切れ続出だって」

「そりゃ、翼さんの新曲だもん……って、ええッ!? 本当にッ!? たたたた大変だあッ!」

「う・そ。響ってば朝からずつと翼さんのCDの事話してたでしょ？ 驚いてる響ってば可愛いなあ♪」

クスクスと笑う未来にぷくうと頬を膨らませる響。

そう、今日は風鳴翼の新曲が収録されたCDの発売日なのだ。雑誌によると今回は初回特典の充実度が高いようで、それをなんとしても手に入れたい響にとってはそのCDが放課後まで売り切れていな

いかが心配で堪らないのである。

響が翼のファンになった日。それは奇しくも、あの二年前のツヴァイウイングのライブ会場にノイズが大量発生した日だった。

当時家庭の事情で未来が来れなくなってしまったため、一人でライブを観る事になった響だったのだが、その後のツヴァイウイングの曲に一瞬で魅せられたのだ。

しかし、そこに大量のノイズが出現し、事態は急変した。

周囲から聞こえる絶望の叫びが聞こえる中、響はノイズと、ノイズから人々を護るべく立ち上がった天羽奏と風鳴翼の戦いに巻き込まれ、胸に深い傷を負ってしまった。

通常ならばあり得ない形状をした、フォルテの傷は今でも胸に残っている。

その時から響は、あの時いつたいなにが原因であのような惨劇が起こってしまったのか。あの時翼達が纏っていたものはなんだったのか。それが気になって仕方なかった。

翼に会えればあの時の事を訊けるかもしれない。響がこの学校に入学した理由の一つに、それはあった。

すると、噂をすればなんとやらか。その本人が食堂に足を踏み入れてきた。

「ねえ、風鳴翼よ……………」

「芸能人オーラ出まくりで、近寄り難くて——」

「孤高の歌姫といったところよね」

「え、翼さんッ!?!」

思わず椅子から立ち上がって見ると、確かに風鳴翼がそこにいた。その姿を視界に収めるや否や、彼女の前に躍り出る響。

「……………あ、ああ、あの、その……………」

しかし、自分がなにを言おうとしていたのかをすっかり忘れてしま

い、しどろもどろになってしまった。

(ど、どどどどうしよう、心の準備……。二年前のお礼……。違
う、私、訊かないと……………)

「……………頬、ついてる」

「え……………?」

翼が自分の頬を突きながら言ったその言葉に理解できずに呆けて
いると、未来が小声で自分の頬にご飯粒がついている事を教えてくれ
た。

「……………あ。ああ……………ッ!」

「食事は落ち着いて食べる事だ」

すぐに頬についたご飯粒を取っている間に翼は隣を通り過ぎて
いってしまった。それでも声をかけよう振り返った響の前には、

「あ、見て! 大道先生よ!」

「凄いなあ、先生。翼さん相手に普通に話しかけてる」

「私にはあんな事できないなあ……………」

そこには新任の体育教師、大道克己と会話している翼の姿があつ
た。なにやら『答え』がどうのの話をしており、翼はなにか思い詰め
ているような表情をしていたが、それに対して克己は色々とアドバイ
スをしたりしていた。

(次こそは、必ず!)

そう意気込んで、翼は席に戻って食事を再開する。

しかし結局、それ以降翼と話せるチャンスが訪れる事はなく、今日
の授業は終了してしまった。

「——はあ、はあ、特典♪ はあ、はあ、CD♪」

だが響は、いつまでもそれをずるずると引きずりはしなかった。学校が終わってしまえば、後は自由だ。今日は翼のCDの発売日。初回特典の充実度が高いとなれば、これを買わない手はない。

夕陽が眩しい街中を、響はCD屋まで意気揚々と走っていたのだが、次の瞬間見えたものに足を止めざるを得なくなった。

「え……………、これって……………」

眼前に広がる光景に愕然とする。破壊された建築物、地面に落ちて夕陽の光を反射するガラス片。

そしてなにより響の注意を引いたのは、あちこちに存在する小さな黒い塊。

それはまさしく、ノイズに触れられた人間達の成れの果てだった。

(そういえば未来、最近この近くでノイズが出たって言ってたっけ……………。だったら早く、ここから逃げないと……………ッ！)

「きゃあああああッ！」

「……………ッ!? 悲鳴ッ!」

慌てて踵を返して来た道を戻ろうとしたところに響いた悲鳴に振り向いた響は、危険を顧みずに悲鳴が聞こえてきた方向へ走り出した。

「——まったく、いつになったら見つかるのよ」

いかにもなにかありそうな茂みを掻き分けるも、そこにあるのはガラタくらいで目当ての物が見つけられなかったレイカが舌打ち交

じりに呟くと、その後ろで路地裏から出てきた京水が「仕方ないじゃない」と返す。

「いくら二十六本あると言っても、この街中からあの二本を見つけ出すのは至難の業よ。でもきつと、あの子達もワタシ達と再会するのを心待ちにしてるはずよ。なにせ、T2ガイアメモリは適合者と引かれ合うんだもの」

懐から取り出したジーンメモリ、アイスエイジメモリを見つめる京水に、レイカは隣の茂みを掻き分けながら口を開く。

「……………あんたに訊くのはこれで二度目になるけど、本当に克己を見たの？ 見間違いだったりしない？」

「ワタシが克己ちゃんを見間違えるですって？ それこそあり得ないわよ！ このワタシが克己ちゃんを見間違えるはずないじゃない！」

見た事ない街で、聞いた事ない連中が人間を襲う所だけど、それだけは断言できるわ」

「ま、それもそうよね。……………これもハズレね」

茂みに隠れていたキーマメモリを懐に仕舞う。適合しないT2ガイアメモリなどレイカにとって無価値なのだが、京水の言葉が事実なら、このメモリも克己の力になるはずだ。

自分達は間違いなく、あの風が吹き続ける街で本当の死を迎えたはずだ。そのはずなのに、気付いたら知らない街にいた。京水とレイカは互いが目覚めてからしばらくしてから再会したのだが、その時に京水は「克己を見た」と言ったのだ。

まさかと思いなながらも話を聞いてみると、その克己らしき人物は彼らがよく知る姿、仮面ライダーエターナルへと変身し、人々を襲う謎の存在ノイズと交戦したらしい。それも、逃げ遅れた人々を護るように。

「克己ちゃんが彼らを護ったのは、きつとなにか理由があるはずよ。もしかしたら、『あの日』のような出来事を繰り返さない為かもしれないわ」

「私が言うのもアレだけど、『死神』に成り果てた克己が人を護るなんて、ついに頭がイカれたのかしら」

「むしろ、その逆じゃない？ もしかしたら克己ちゃんは、正義の心に目覚めたんじゃないかしら？ この街に来てからというもの、NEVER特有の残虐性が和らいでいくのが身に染みてわかるもの」

京水の言う通り、この街に来てから二人にあつた残虐性は徐々に鳴りを潜めていつているのだ。ついでに言えば、人体蘇生酵素も必要なくなっている。

「人体蘇生酵素あが必要ないっていうのは嬉しいわあ！ 自由になれたって感じがするもの！ これからは活動限界とか気にせず行動できるわ！」

「つべこべ言っていないで、あんたもT2メモリを探す！」

「はあい」

そうして再びT2ガイアメモリも搜索を開始する二人であったが、その瞬間、彼らの耳に悲鳴が届いてきた。

「今の悲鳴は……………ッ!?!」

「行ってみましようッ！」

メモリの搜索を中断して悲鳴が聞こえた道に入ると、そこには今にもノイズの集団に襲われかけている女の子の姿があつた。

「大変ッ！ 助けなくちゃッ！」

「いや、待ってッ！」

レイカが今すぐにも駆け出そうとした京水を制止させた直後、ノイズに襲われかけた女の子を一人の少女が救い出した。

「嘘ッ!? あれ、響ちゃんじゃないッ!?」

「え? あ、京水さん、レイカさんッ!」

「こつちよッ! 早くッ!」

少女の手を握った響を連れて走り出したレイカは、同じく走り出そうとしていた京水に振り向く。

「京水、あんたはノイズの足止めでもしておきなさいッ!」

「ワタシ一応貴女の先輩なだけドッ!? もう、しょうがないわねッ!」

立ち止まった京水がどこからともなく取り出した鞭を振り回してノイズを弾き飛ばそうとするが、なんの能力も持っていない鞭ではやはりノイズにダメージは通らない。鞭を纏めて、しばしノイズと睨み合った京水は――

「……………うん、無理ッ!!」

と、踵を返してレイカ達と共に逃走する事を選んだ。

「ちよつと! 少しは攻撃ぐらいして時間稼ぎなさいよッ!」

「その攻撃が効かないんじゃないよッ! 流石に三度目の死は勘弁よッ! イケメンが相手なら話は変わるけどネッ!

それで? ワタシ達は今どこへ向かってるわけ?」

「……………地平線の彼方へッ!」

「さあ行こうッ! ……………って、なに言わせるのよッ! それノープランって事じゃないッ!」

「うるさいッ! とにかく逃げるのよッ! ああもう、ヒートメモリ

があれば、あんな奴らなんてすぐに倒せるのにッ！」

背後にノイズ達の気配を感じながら走る四人だったが、ノイズの集団は諦める事なく彼らを追い続ける。

道中待ち伏せされるような事があったが、その度に京水かレイカが他三人を先に行かせ、追いついていたが、徐々に響と女の子の体力が切れ始めてきた。

そして遂に、体力が底をついた女の子が転んでしまった。

「あ……………ッ！ 大丈夫ッ!？」

「お、お姉ちゃん……………ッ！ もう、逃げられないよお……………ッ！」

「大丈夫よ、ワタシがおんぶしてあげる。行きましようッ！」

「響、貴女は大丈夫？」

「少し辛いですけど、へいき、へっちやらですッ！」

そう言って走り出す響だが、肝心のシエルターから離れてしまっている。今からそこへ向かおうにも、道中にはノイズがいる。今から向かうのは不可能だ。

(……………? あれは……………)

その時、電柱の影に隠れているが二本のUSBメモリのようなものが見えた。そういえば先程、レイカがメモリについてなにか叫んでいたような気がする。

「なにしてるのッ!? 早く来なさいッ！」

「は、はいッ！」

電柱の傍で屈んでいた響にレイカが叫ぶ。とにかく、今は逃げるのが最優先だ。

しかし日が完全に暮れた頃、遂に四人は工場地でノイズに追い詰められてしまった。

「どうしよう、このままじゃヤラれちゃうわよワタシ達……………ッ！」
「どうと言われても、戦えないんじゃないでしょうか……………」

せめて響と女の子だけは、と響達の前に立つ二人の前にいる大量のノイズは、じりじりとこちらに向かって来ている。

「……………お姉ちゃん。私達……………死んじゃうの……………？」
「……………ッ！」

きゅっ、と女の子に制服の裾を掴まれた響は、大丈夫と言い聞かせるように女の子の手を強く握る。しかし、それでも一度その言葉を聞いてしまえば考えられずにはいられなかった。

(死ぬ……………？ 死んじゃう……………？ 私達、ここでノイズに……………)

対抗できる手段は無い。このままでは遅かれ早かれ、自分達はノイズに殺される。

嫌だ。死にたくない。まだやりたい事はたくさんある。こんなところで死ぬなんて、そんなの——

『——生きるのを諦めるなッ！』

その時、二年前のあの場所で、自分を護ってくれた人の声が聞こえた。瞬間、響の心を呑み込もうとしていた闇が、瞬く間に消えていった。

(……………あの日、あの時、間違いなく私は、あの人に救われた)

—— 絶望になんて、負けられない。

(私を救ってくれたあの人は、とても優しく、力強い歌を口ずさんでいた……………)

—— まだ心は砕けちゃいない。

(私に出来る事を……………。出来る事が、きつとあるはずだッ！)

—— 諦めるな。立ち上がれッ！

「お、お姉ちゃ……………」

「—— 生きるのを、諦めないでッ！」

—— 立ち上がって、その手に掴めッ！

(とても、優しく、力強い、歌がッ！)

—— 未来を掴む、希望の光をッ!!

「—— B a l w i s y a l l N e s c e l l g u n g n
i r t r o n」

迸る、黄金の光。

隣の女の子と突然の事態に振り向いた京水とレイカの視線を受け
る中、彼女の胸を中心に放出されていた光の奔流が収まると、響は全
身に走る激痛に四つん這いになる。

「ぐ、が……………ッ！ あああああ……………ッッッ!!」

響の背中から飛び出した機械のようなものが繰り返し彼女の体内を出入りしていく。それが一回、また一回と繰り返されていく内に、彼女の体は白い鎧に包まれていく。

そして、最後に飛び出した機械が響の体に入り込んだ時、そこには、白い鎧に身を包んだ、響の姿があった。

「嘘オツ!？」

「い、いったいなにが起こったというの……………ツ!？」

衝撃的な出来事が目の前で起こった事に口をぽかんと開ける京水達だが、最も驚いていたのは響の方だった。

「え、えええツ!? 私、どうなっちゃってるのツ!？」

「お姉ちゃん、カツコいい……………ツ!？」

「もう、なによ貴女ツ! 変身できるなら最初から言いなさいよツ! でもカツコいいのが見れたから良しとするわツ!」

「きつとその姿なら、奴らの相手も出来るはずよ。私達も戦いたいところだけど、メモリが無いんじゃないでしょうか……………」

「あの、そのメモリって、これの事ですか……………?」

そうやって響が取り出したのは、先程電柱の影に隠れるように置かれていた二本のメモリ。それを見た二人は、

「嘘オツ!？」

と、声を揃えて叫ぶのだった。

「あ、あんた、これをどこでツ!? ……………いいえ、今はそれを聞いてる場合じゃないわよね」

「メモリがあれば、ワタシ達も戦えるツ!」

響からメモリを受け取った二人は彼女の左右に立ち、メモリのス
イッチを押す。

『ヒートー!』

『ルナー!』

『熱』の記憶を内包したメモリ、ヒートメモリを手にしたレイカは、
それを左の鎖骨に押し当て、『幻想』の記憶を内包したメモリ、ルナメ
モリを手にした京水はそれを自らの額に押し当ててみる。

自動的に出現した生体コネクタを介して彼らの体内に入り込んだ
T2ガイアメモリの力が解放され、彼らを異形の者へと変えていく。

「えええッ!?!」

「うわぁ……………ッ!」

変身が完了し、炎のような赤い体色に女性的な体を持つ怪人『ヒー
トドーパント』、メモリの色と同じ黄色い体に伸縮自在な腕を持つ怪
人『ルナドーパント』にその姿を変えた二人は目の前のノイズに対し
て構えを取る。

「ノイズちゃん達く、たっぷりお仕置きしてあげるわよッ!」

「さっきはよくも追っかけ回してくれたわね。お返しに……………燃や
し尽くしてあげる!」

言うが早いか、二体のドーパントはノイズに攻撃を仕掛け始めるの
だった。

冷たく燃える憤怒

克己が外に出ると、本部のバイク車庫からバイクに乗って飛び出した翼の姿が見えた。

エンジン音と共に少しずつ遠ざかっていく背中には明らかな動揺が感じられ、克己はすぐにアクセルメモリのマキシマムドライブを発動させて翼の後を追う。

「……ッ!? だ、大道ッ!?!」

バイクに乗っているのにも関わらず、自分と並走している克己の姿を視界の端に捉えた翼が運転を誤らないように注意しながら克己を見ると、彼の口元には笑みが浮かんでいた。

「お前が歌を歌う理由。その答えを導くヒントが現れたようだな」

「……あれからというものの、私はずっとその事について考えてきた。結局、答えは出なかったがな。………大道、ヒントを得るくらいならば、別に構わないだろう?」

「ああ、もちろんだ。それに俺も、あそこに向かう理由ができた」

「その理由とは?」

「仲間がいた。それも二人だ」

十字路を右折し、目的の工場地へと向かう。

「薄々、期待はしていた。こうしてあいつらが現れたのなら、俺はあいつらに会う必要がある。………いや、会わなければいけない」

「……どんな人達なんだ? 貴方の仲間というは」

「本人を前に『男』と言ったら怒られかねないが、一人は意気揚々と行動を起こすような奴で、もう一人は格闘技のセンスがある、いい女だ。

———それにしても、あの二人が行動を共にして、しかも子どもを護っているなんてな。ここに來てから俺も同じ事はしたが、俺自

身も含め本当に意外だよ」

「どうして、そう思えるんだ？」

「俺達が昔、それと真逆な事をしていたからだ」

「……………ッ!? それは、まさか……………」

坂道を上る中、克己は自分達がかつては傭兵として生き、多くの命を奪ってきた事を翼に話した。だが、自分達がNEVERだという事は伏せておいた。それは、まだ話すべき事ではない。そう、今はまだ……………。

「幻滅したか？ お前の……………、いや、お前達の仲間がどうしようもない殺人者である事に」

その言葉は、翼だけに向けられたものではない。彼らの会話を聞いているであろう、二課本部にいる弦十郎達にも向けられているのだ。

『初めて見た時、君の素人とは思えない超人的な身体能力には目を見張ったが、それが原因だったのか』

「ボス、お前はどうか？ この殺人者を、お前達とは相容れない存在である俺達を、これまでと変わらず手元に置けるか？」

『……………確かに君達は、決して人に誇れるような事をしてきた人間ではないのだろう。君達がしてきた事は、決して赦されるものではない』

しかし通信機越しに聞こえてくる弦十郎の声は、決して失望や幻滅を感じさせるものではなかった。それどころか、むしろ彼らのそういったところも受け入れるような口調でさえあった。

『だがそれは、あくまで『世間』の視点から見た場合だ。俺は、俺達は違う。決して君達を捨てたりはしない。なぜならば、我々は信じているからだ。君も、まだ見ぬ君の仲間達にも、その心には熱く燃える正

義の心があるとッ！」

「ボス……………」

『君達は我々の仲間だ、大道克己。血塗られた過去であろうと、それがどうしたッ！ それでも我々は、君達を『仲間』と呼び続けようッ！ お前達もそうだろうッ!?!』

弦十郎の呼びかけに、司令室にいた全員の『はいッ!!』と答える声が聞こえた。

「…………私も、叔父様達と同じだ。大道、貴方は私達の仲間で、私達は貴方の味方だ。たとえその身が血に塗れた修羅のものであろうと、その心は紅蓮の炎のように熱く燃え上がっていると、私は知っている」

隣を走る翼も、彼らの存在を受け入れる。心が冷え切っているものであれば、先日のように自分を叱咤する事は無かつただろうし、自分の事など全く視野に入れず、ただ冷酷に、冷徹に、それこそ機械のように事に当たっていただろう。

だが克己は、間違っていたであろう自分を叱ってくれた。まだ、自分が歌う理由はわからないが、それでも自分は、風鳴翼は、間違いなく彼に助けられたのだ。

昔は、自分は一人だと考えていた。しかし、あの日克己が自分を叱られ、『過去に抗え』と言われたあの時から、自分は彼を、『仲間』と考えるようになったのだ。

「翼……………」———「フ、フハハハ……………ハハハハッ！」

顔を押しさえ、高笑いをあげる死人。突然笑い出した彼を直に、またはモニター越しに見つめる翼達に、彼はひたすら笑う。

「お前達、恐ろしいまでにお人好しだなッ！ ここまでのお人好しを見たのは生まれて初めてだッ！ 恐ろしすぎて笑ってしまうよッ！

ハハハハハッ！」

だが……………、と高笑いをやめた克己の顔には、感謝の情が浮かび上がっていた。

「ありがとう。こんな俺を、俺達を受け入れてくれて。だから、その恩に応えよう。——命令をくれ、ボス」

『……………うむッ！』

滅多に見られない彼の笑顔に、不思議と笑顔になっていた弦十郎は、克己と翼に命令を下す。

『翼、克己君ッ！ 至急工場地へと向かい、新たなシンフォギア装者達と合流次第、彼らと共にノイズを殲滅せよッ!!』

「了解ッ!!」

克己は走力を上げ、翼はエンジン音を轟かせて工場地へと向かっていくのだった。

——一方その頃、工場地では、

「さあ、ワタシの可愛い手下達、行ってらっしゃあ〜いッ！」

京水が変身したルナドーパントが召喚した三体のT2マスカレイド・ドーパントがノイズ達を殴り倒していき、その奥ではレイカの変身したヒートドーパントが周囲のノイズを火炎を纏った回し蹴りで丸ごと炭素の塊に変えていた。

「す、凄い……………ッ！」

響が感心しているのも束の間、二人が取り零したノイズ達が迫ってくる。それに対し、響は素人ながらも構えを取る。

「お、お姉ちゃんッ！」

「大丈夫ッ！ せいッ！」

震える女の子を後ろに回し、拳を突き出す。するとどうだろうか、殴り飛ばされた人型ノイズが一瞬にして炭素の塊となってしまうたではないか。

(も、もしかして私、ノイズをやっつけたの……………?)

「お姉ちゃん、凄いッ！ ノイズを倒しちやったッ！」

突き出した拳を見つめっていると、恐怖が少しだけ和らいだのか、女の子が嬉しそうに飛び跳ねる。だが、響が倒したのは大量のノイズの内の一体に過ぎない。ルナドーパントとヒートドーパントが相手をしていても、数が多いのはどうしようもない。その証拠に何体かがこちらに向かってきているし、その中には強襲型ノイズの姿もあった。

「殿はワタシに任せてッ！ レイカ、貴女は響ちゃん達を連れてここから離れるのよッ！」

「わかったッ！ さあ、こっちへッ！」

「わ、私も戦いますッ！」

「あんた、素人でしょ？ あいつを助けに行ったところで足手纏いになるだけだわ。それに大丈夫よ。あいつはあんな奴らに殺られるよ。うなタマじゃないから」

「あらあ？ 貴女ってそういう女だったかしら？ いきなり『タマ』だなんてえっちよッ！」

「そっちの『タマ』じゃないわよッ！ あんたはふざけてないでノイズの相手をしろッ！」

「貴女、先輩と後輩の関係ってわかってるッ!？」

ヒートドールパントに文句を垂れ流しながらも、ルナドールパントは「こつちよッ！ かかってらっしやいッ！」とノイズを誘導し、しつかりと囷としての役割を果たしていた。

ルナドールパントがノイズ達を引きつけている間に、ヒートドールパントは響達を連れて出来るだけ工場地から離れようとするが、別方向から追ってきたノイズ達が行く手を阻んできた。

「下がってッ！ はあッ！」

ヒートドールパントが足技を駆使して前方のノイズ達を蹴散らしていく。前方にいたノイズ達はあつという間に炭素の山へとその姿を変えていったが、次のノイズが襲い来る。

「……………ッ！ 京水の奴、取り逃がしたわねッ！」

他のノイズとは違う大きな足音を立てて工場の影から強襲型ノイズが現れた。響達の前に飛び出したヒートドールパントが強襲型ノイズを打ち倒すべく引いた右足に炎を宿したその時、

「レイカさんッ！」

「なによ……………って、嘘でしょ……………」

響の声に振り向くと、反対方向からも強襲型ノイズが迫って来た。すぐにこの挟み撃ちから脱出する為の道を模索するが、厄介な事に三人を挟んだ強襲型ノイズが大量の小型ノイズを吐き出してきた。

「……………これはまずいわね」

強襲型ノイズ二体だけならまだしも、大量の小型ノイズまで加わってしまったとなると、響と一緒に戦ったとしても女の子を護れる未来

が見えない。最悪、女の子を見捨てればなんとかなるかもしれないが、そんな事は出来ない。

自分達が響と女の子を護っているのは、空腹で苦しんでいたところを響に助けてもらったからだ。それなのに、彼女が護ろうとしている命を見捨てるのは、彼女から受けた恩を仇で返す事になってしまう。それは、決して赦されるものではない。

——— なんと少しでも押し通るッ!!

右足の炎の火力を上げ、迫り来るノイズの集団を蹴り飛ばそうとしたその瞬間、ヒートドープントの耳になにかが響いた。

「——— I m y u t e u s a m e n o h a b a k i r i t r o n」

『エターナル!』

「変身ッ!」

美しい歌声に、聞き慣れた変身音。後ろで「この声は……………ッ!」と響が漏らした途端、三人の前後に二つの影が降り立つ。

「あ……………ッ!」

響の前に降り立ったのは、二年前ライブ会場で響を救い、そして散った歌姫天羽奏の相方にして、ツヴァイウィングの片翼、風鳴翼。そして、ヒートドープントの前に降り立ったのは、彼女達の命の恩人にして、そして自分を殺した男、仮面ライダーエターナルこと大道克己。

「克己、なの……………?」

「話は後だ。手を貸せ」

エターナルも、ヒートドープントに対して思うところがあるのだろうが、今はそんな事を考えている場合ではない。

「つ、翼さん……………」

「貴女はここでその子を護ってなさい」

前方のノイズに剣を構えた翼は、背後でエターナルエッジを構えるエターナルに声をかける。

「そちらは任せるぞ、大道」

「ああ。——踊るぞ、死神のパーティータイムだ」

翼とエターナルが走り出し、それぞれの得物を振り翳してノイズに斬りかかる。

「——ッ！」

その胸より湧き上がる歌を口ずさみながら手元の剣を大型化させての一撃——『蒼ノ一閃』がノイズ達を斬り捨てていき、その名残である炭素の塊を蹴散らして迫ってくるノイズ達の頭上にジャンプする。周囲に出現させた剣の雨で地上の小型ノイズを消滅させた後、翼は投擲した剣を巨大化させて繰り出す技——『天ノ逆鱗』で強襲型ノイズを串刺しにし、その巨体を黒い砂へと変えるのだった。

「オラアッ！」

その後方、ノイズの集団の中心へ降り立ったエターナルが繰り出した回転斬りで周りにいたノイズ達が消滅させると、強襲型ノイズから吐き出された小型ノイズ達が紐状に変換した体で特攻してくるが、それは屈んだエターナルの背中を踏み台にジャンプしたヒートドープの跳び回し蹴りと同時に発生した炎の波によって相殺させられる。

「意外だな、レイカ。俺も人の事は言えないが、お前がNEVER以外の人間を助けるとはな」

ヒューマノイド
人型ノイズを殴り飛ばしたエターナルの隣でカエル型ノイズを踏み潰したヒートドローパントが横目にエターナルを見る。

「それはこっちのセリフよ。あんた、こういう事をするようには見えなかつただけど？」

「こっちにも事情があつてだな、追々話す。京水はどうした？」

「殿を任せてたの。そろそろ来ると思うんだけど——」

「克己ちゃああああああんツ!!」

「……………噂をすれば、だな」

工場の屋根から飛び降りてきたルナドローパントが前方のノイズ達を薙ぎ倒してエターナルに走り寄ってくる。

「嘘嘘嘘ッ！ 本ツ当に克己ちゃんだわツ！ やっぱりワタシの見間違いやなかつたのねツ！ ユニコーンメモリ、役に立ってる？」

「やっぱり、あれはお前だったのか。ああ、あの時は助かった。色々話をしたところだが、今はこいつらの排除が先だ」

「こっちが引きつけたノイズちゃん達は全部やつつけたわ。ここにいる奴らが最後よツ！」

「それなら、手っ取り早く片づけるとするか」

「ええツ!!」

三方向に分かれ、それぞれの方向に存在するノイズ達を一掃し始める。

ルナドローパントが振り回した伸縮自在の腕が、ヒートドローパントの蹴りから放たれる火炎が小型ノイズを消滅させ、そしてエターナルのマキシマムドライブが強襲型ノイズを消滅させた事によって、この場

に出現したノイズは残らず殲滅されたのだった。

「——では、機密制限の同意については二課で受け持ちますので、皆さんには引き続き炭素化したノイズの回収をお願いします」

その後、事態の回収をしに自衛隊と二課が現れ、炭素化したノイズの回収が慌ただしく進められ、二課の職員が今回響達に護られていた女の子の母親に機密制限についての説明をしている中、そこから少し離れた所では克己が京水とレイカの二人と話をしていた。

「……………そうか、他の二人は見つからなかったか」

「ええ、T2メモリの回収と一緒に探しはしたけど、結局見つからなかったわ。剛三ちゃんも賢ちゃんも、いったいどこにいるのかしら……………」

この場にはいないNEVER部隊のメンバーの名前を口にした京水は、髭の生えた顎に手を当てて考え込む。

堂本剛三。NEVER部隊随一のパワーファイターにして、T2メタルメモリの適合者。ロッドを愛用していた彼は生身でも風都を護る仮面ライダーと渡り合える程の怪力の持ち主でもあった。

芦原賢。生前はアメリカの特殊部隊SWATの隊員だったスナイパーにして、T2トリガーメモリの適合者。口数が極端に少なく、ゲーム感覚で物事を考える癖があるが、その実力は折り紙付きである。

「あいつらの事だ。きつとどこかで俺達を探しているはずだ。なるべく早く見つかるよう、こっちも頑張る必要があるな」

京水達がここにいる以上、彼らもこの街のどこかにいるはずだ。なぜそう思うのか、と訊かれると返答に困るのだが、敢えて言うのであ

れば『勘』である。

「それにしても、あんたがノイズから人々を護る組織に所属しているとはね。特異災害対策機動部二課、だっけ？ あんたの話聞く限り、そのボスは優しい人のようだけど、本当に信用できるの？」
「ああ。裏表のない男だった。これまで色んな人間を見てきたが、彼程信用できる男は他にいない。当然だが設備も充実している。生活に困る事は無いぞ」

「それって、いつでもお腹が空いた時にご飯を食べれるって事ツ!？」

ガシツ、と京水に肩を掴まれた克己が、自分の肩を掴む手とぐつと迫ってきた京水の顔を交互に見る。

「もしかして克己ちゃん、毎日そこでご飯食べてたのツ!? お風呂にも入ってたのツ!？」

「あ、ああ………………。それがどうした?」

「ズツツルううううういッ!! ワタシ達がずっと食事とお風呂を求めて彷徨ってる間に、克己ちゃんだけ良い思いしてただなんてッ!」
「……………。確かに少し臭うなぐツ!？」

克己の声が途中で呻き声に変わったのは、京水と違って生粋の女性であるレイカが彼の足を踏んづけたからである。

京水が離れても相変わらずぐりぐりと爪先で抉り続けるレイカの足から自分の足を引き抜き、じりじりと痛む足を押さええて呻き声を漏らす克己だったが、いきなり視界が大きく揺らいだ。

周囲からの視線を感じながらもぐらぐらとする頭を押さええていると、顔面を中心に鈍い痛みが走っているのに気付いた。痛みから察するに、蹴られたのだろう。

顔を上げると、「ちよつとッ!」と叫んだ京水を一睨みで黙らせたレイカと視線が合った。

「克己、なんであんなが蹴られたか、わかる？」

「それは……………」

俯く克己。

レイカが自分を蹴る理由。そんなの、わからないはずが無い。自分
はあの風の街で、一人の仮面ライダーに敗北した彼女を殺害したの
だ。仲間にして命の恩人である克己に助けを求めてやって来たと言
うのに、その彼に殺された彼女の痛みは、決して計り知れるものでは
ない。

「私の怒り、この程度で収まるものだと思わない事ねッ！」

明らかな憤怒の籠った蹴撃が叩き込まれた克己の体が大きく吹き
飛ばされた様子に周囲がどよめき、それでも尚レイカは克己を蹴り飛
ばそうと再び足を引くが、二人の間にシンフォギアが解除された響が
割り込んできたため、その足が振るわれる事は無かった。

「ま、待ってくださいッ！ いきなりなにするんですかッ！」

「そこを退いて。私はこいつが殺したいぐらい憎いのよ」

「それでもあんまりですよッ！ 私、誰かが傷つくのはもう見たくな
いんですッ！」

「だったら、あんだごと——」

「そこまでです」

レイカが響ごと克己を蹴り飛ばそうとした瞬間、ポンツ、という音
と共に現れた緒川があつという間に彼女を拘束してしまった。

「は、放せッ！」

「すみませんね、これも仕事なんです」

「大丈夫か、大道？」

拘束を解こうとするレイカを押さえつけている緒川の隣に歩み出た翼の手を握って立ち上がると、翼は克己を睨み上げているレイカ、動揺している京水、そして響へと視線を移していく。

「貴方方には特異災害対策機動部二課まで同行してもらいます」

「え、ええッ!?」

「ちよつとオッ!? なによこれッ!?」

翼の後ろに控えていた黒服の男達によって頑丈な手錠を嵌められたレイカ達。

「克己ちゃんッ!? これはいつたいなんなのよッ!? まさか……………」

「違うぞ。万が一の対策としてだ」

「克己イ……………ッ!」

手錠をかけられたため、それまで彼女を拘束していた緒川が離れた事によって立ち上がったレイカだったが、抵抗する様子は見せなかった。もし暴れたとしても、すぐに緒川によって拘束されるであろうと理解しているのだ。

「すまないな、レイカ。話は後でしよう。……………頼む」

「……………ああ」

克己に頷いた翼からの指示を受けた黒服の男達がレイカ達を車の中に連れ込み、特異災害対策機動部二課へと連行していくのだった。

永遠の蒼炎と灼熱の緋炎

二課に連行され、克己の時と同じように盛大に響達を歓迎した弦十郎達に思わず彼女達が呆気に取られ、響がその体にシンフォギアを初めて纏った影響が出ていないかを確認する為に了子にメデイカルルームで検査されている頃、司令室では弦十郎、翼、京水が他の職員達と共にモニターを見つめていた。

モニターに映っている、街の中心地を模倣したシミュレーションルームで対峙しているのは、大道克己と羽原レイカ。

響がメデイカルルームへと連行されていった後、周囲の歓迎ムードなど全く気にせず、克己が弦十郎にシミュレーションルームの使用許可を要請したのだ。

克己曰く、「彼女とはケリをつける必要がある」と。

その瞳に宿った意思を見抜いた弦十郎がシミュレーションルームの使用を許可し、感謝した克己はレイカと共にシミュレーションルームへ入り、それ以降睨み合っている。

「克己ちゃん、レイカ……………」

ここに来る途中に、京水はレイカから、彼女の最期がどういったものかを告げられていた。その時、自分はWやアクセルとは違う仮面ライダーと戦っていたためにその場面に立ち会う事は出来なかった。

レイカが言うに、彼女を殺害した時、克己は彼女に「用済みだ」と言ったようだが、それでも京水は考えられずにはいられない。

(レイカ……………、きつと克己ちゃんは、あの時貴女を……………)

あの頃の克己は完全に『死神』に成り果てていたが、それでもどこかに、彼本来の優しさがあつたとしたら、その時にこそ彼の優しさが、彼女を『介錯する為に』彼の体を動かしたのだろうと、京水は信じていた。

その瞬間、モニターに映し出された彼らが動き出した。

「——克己、私はあるが憎い。どれだけ考えても、私はあるが殺したくてたまらない。だけど、それは出来ない。あんなならまだしも、私にはその力が無い」

街の風景を模倣したシミュレーションルームの中心で、レイカは自分の前に立つ克己を睨む。

不死身の兵士として生み出されたNEVERではあるが、マキシマムドライブを受けてしまうと話が変わってくる。その痛みを、体が消えていく恐怖を、レイカは知っている。それなのに、徐々に感覚が消えていく体を引きずりながらも助けを求めた相手に殺された事が、彼女の怒りを限界まで高めていた。

「だから、私が満足するまで戦って。この怒りが消える、その時まで。もちろん手加減は無しよ。あんたも、殺す気がかかってきて」

「もちろんだ。——いくぞ」

ほぼ同時に走り出す。

肺に溜まった息を軽く吐き出しながら繰り出された蹴り上げを弾いた克己がお返しとばかりに繰り出した蹴撃を叩き落とし、顔面を貫かんと迫る拳を弾いたレイカの後ろ回し蹴りを伏せて回避する克己。頭上から聞こえるレイカの左足が切り裂いた空気の悲鳴が止むよりも前にレイカの体勢を崩そうと足払いを仕掛けるが、それが一歩分体を引く事で躲したレイカの跳び回し蹴りが克己を吹っ飛ばす。

背中から倒れた克己は両足を回転させる事でレイカの追撃を免れ、両足を回転させた際の遠心力で起き上がる。

「ふ、はッー」

「ぐう……………ッ!?!」

次々と繰り出される蹴りを防ぎ切った克己のジャブが顔面に叩き込まれ、脳が振動してふらつくレイカに何発もの拳のラッシュが襲い掛かる。ぐらつく視界に克己が拳を突き上げる態勢が入ったレイカの体が反射的に動き、上半身を後ろに傾ける。突き上げられたアツパーがレイカの鼻先を掠め、肌が切れる痛みが走る。彼の胴体を踏み台にバク宙する事によって彼から距離を取ったレイカが懐からT2ヒートメモリを取り出し、同様に克己も懐からエターナルメモリを取り出す。

「まだよ………ッ！　まだ私の怒りは収まらないッ！」

『ヒート！』

「それなら、もつとぶつけてこいッ！　変身ッ！」

『エターナル！』

レイカが投げたT2ヒートメモリが彼女の鎖骨に吸い込まれていき、エターナルメモリが差し込まれたスロットが倒される。

変身が完了する前に互いに互いに距離を詰めて取っ組み合った二人の姿が瞬く間に変化していき、炎を纏う怪人と化したレイカがエターナルに変身した克己の脇腹を蹴ろうと足を振り上げる。エターナルはそれを防御すべく自分の脇腹と彼女の足の間に腕を移動させるが、突如として軌道を変えたレイカの炎を纏った蹴撃がエターナルの顔面に迫った。

フェイントに成功したブラジリアンキックがエターナルの側頭部に叩き込まれ、続けて逆の足から回し蹴りがエターナルの顔面に直撃する。さらに反撃は許さぬとばかりに繰り出された二撃目の回し蹴りもエターナルを捉え、蹴り飛ばされたエターナルの回転した体が地面に落ちる。

真上を向いたエターナルの視界に踏み下ろされようとした右足を転がって回避して立ち上がったエターナルが炎を宿した拳を受け流し、懐に潜り込んで突き上げた肘がヒートドーパントの顎に入り、大

きく仰け反った彼女の胸元に胴回し回転蹴りが決まった。

倒れている自分の胸倉を掴んで立ち上がらせたエターナルのパンチに吹っ飛ばされたヒートドローパントは腕のバネを利用して跳ぶように起き上がってから、その回し蹴りで接近してきていたエターナルを蹴り飛ばす。

「燃え尽きろ……………ッ！ はあッ！」

「ふんッ！」

回し蹴りによって放たれた大量の火炎弾をエターナルロープで防いだエターナルの右足に青白い炎が纏わりつく。ヒートドローパントも自らの右足にこれまでとは段違いの熱量を持つ灼熱の炎を纏う。

「はあああああああああッッッ!!」

ほぼ同時にジャンプしてからの跳び蹴り。空中で激突した二色の炎は猛獣のように互いを喰らい尽くそうと争い始める。

周囲に緋と蒼の衝撃波を飛ばして空中で拮抗していた二人だったが、ついにその拮抗が崩れる時が訪れた。

「が、は……………ッ!!」

腹部に緋炎を纏った右足が叩き込まれたエターナルが地面を削つていき、完全に止まった頃には、その変身は解除されてしまっていた。

「これで終わりよ」

腹部を押さえて上半身を起こそうとした克己に、再びヒートドローパントの右足が迫る。

モニターから彼らの戦いを見守っていた弦十郎達は、彼女の業火を纏った右足が克己の顔を焼き尽くす光景を幻視し、その内の何人かは

悲鳴を上げてモニターから顔を背ける。だが、いつまで経っても克己が蹴られた音が聞こえる事は無く、恐る恐るモニターに視線を戻すと、そこには自分の真横で止められた右足を全く動じずに見つめている克己と、変身を解除したレイカの姿が映っていた。

「最後に殺意が消えるとは、お前も甘くなつたな」

「あんたの顔が、私が足を止めると確信してたのがうざくて止めたのよ。逆に確信してなかったら、迷わずその頭を蹴り碎いてたわ。それと、これで私の怒りが収まったとでも思ってる？　むしろ、あんたを蹴られなかった自分に対する怒りが加わったわ」

「だけど、とレイカは克己に手を差し伸べる。

「あんたの苦痛に呻く声が聞こえたから、少しは許してあげる」

「お前、いい趣味してるな」

「あら、私をこんな風にしたのは誰だったっけ？」

「……………記憶に無いな」

「嘘おっしやい」

「イタタタッ！」

足を踏みつけられる痛みに堪らず苦しみの声を上げた克己を見るレイカの目にはしかし、先程の言葉とは裏腹に、怒りはどこにも無かった。

「———というわけで、聖遺物の事はみんなにはナイシヨよ」

その後、安心した様子で克己達を迎えた京水とレイカ、そしてメデイカルチェックを終えて戻ってきた響の三人に了子が聖遺物についての説明を終え、次に響の纏ったシンフォギアについての説明を始めようとしたが、シンフォギアを初めて起動した負荷の影響で疲れ

切っていた響の様子に気付いて、今日はこれ以上の説明はやめておくことになった。

「響君、一つだけ注意してほしい事がある。今日の出来事、特に君の力の事は誰にも話さないでくれ」

翼と緒川に連れられて二課から寮に戻ろうとした響に、弦十郎が声をかける。

「え……………誰にも、ですか？」

「シンフォギアの存在は大きすぎる……………知ってしまった相手を危険に巻き込まれかねない」

「危険……………それって……………」

「……………人質とされる可能性などだ。家族や友人、親しい者程、命にかかわる危険性がある」

その言葉を聞いた時、響の脳裏には真っ先に親友にして自分にとっての陽だまりである少女の姿が浮かんできた。自分の力が誰かに知られてしまったら、彼女に危険が迫ってしまう。そう思うと、自分が手にしている力がどれ程危険なものであるかが痛い程理解できた。

「俺達が護りたいのは機密ではなく、人の命だ。君を強制する事は出来ないが……………よく考えてほしい」

「……………はい」

目を伏せて頷いた響が翼達に連れて行かれた後、弦十郎は響にひらひらと手を振っていた京水達に視線を移す。

「君達の事は克己君から聞いている。頼れる部下だと聞いていたが、どうやらその通りのようだな」

「当ったり前じゃない！ なにセワタシ達は克己ちゃんに選ばれたの

よ。そんじよそこらの傭兵とは一味も二味も違うわ。——
それにしても貴方、良い体してるじゃない。剛三ちゃんともいい勝負
してるわあ!」

京水が服越しでもわかる程鍛え上げられた弦十郎の二の腕を突くと、弦十郎も嬉しそうに力こぶを作る。

「そう言われると嬉しいな。司令官という立場上、この体を活用する
機会はあまりないが、それでも非常時に対応できるように鍛えている
んだ」

「ううんッ! 素晴らしい筋肉ねえッ! 惚れ惚れしちゃうッ!」

「うるさいわよ、おっさん。普通に話すならともかく、そんな口調で話
さないで。気持ち悪い」

「筋肉素人はお黙リッ! あんたには筋肉の素晴らしさはわからない
わッ!」

レイカを一喝した京水は、再び弦十郎の筋肉に目を奪われかける。
しかし次の瞬間、自分に向けて放たれた言葉に赦されざる禁句がある
事に気付いた。

「ちよつと待ってッ! さつき貴女なんて言ったッ! 『おっさん』ッ
!?! 『おっさん』って言ったわねッ!」

「その通りよ。気付くのが遅いのよ、変なおっさん」

「そ、変なおっさ………『変なおっさん』ッ!?! 進化したわねッ!
『おっさん』から『変なおっさん』にッ!! 貴女、このレディーに対し
て最大の侮辱をッ!! ムツキーツツツ!!」

目をあらん限りに見開いてからの激怒に染まった声が司令室に響
き渡り、その場にいた京水とレイカ以外の面々が笑い声を漏らした。

それに「なんなのよ貴方達ッ! それに克己ちゃんまでッ!」と苦
言を叫んだが、すぐにこほん、と咳払いをして気持ちを落ち着かせる

と、疑問に思った事を弦十郎に尋ねる。

「でも、いったいどうやってそこまでの筋肉を？　そこまでの肉体になるには、かなりの鍛錬が必要だと思うけど」

「知りたいか？　それこそズバリ、『飯食って、映画観て、寝る』、だ」「え？」「」

弦十郎の返答に、京水どころかレイカと克己も呆気に取られた。三人の中で最も弦十郎と関わった時間が長い克己も、前々から弦十郎の肉体については気になっていたのだが、この答えは流石に意外過ぎた。

「え？　え？　本当に？　本当にそれだけで？」

「ああ。この三つこそ、男の鍛錬。これさえ出来れば、君もこの肉体を手に入れる事が出来るぞ。さあ、君もレッツチャレンジだッ！」

「弦十郎く？　どこに指差してるのよ」

「どこかでこれを見ている者達にだッ！」

「なに言ってるのよ」

あらぬ方向に指を差している弦十郎の頭を叩いて突っ込む了子。

「それで本題に入るけど、私達特異災害対策機動部二課は、貴方達に協力を要請したいの。貴方達も知ってる通り、ノイズに対抗できる術はシンフォギアと、貴方達の持っているガイアメモリだけ。当然、報酬もきっちり払うわ。なにせ人類の天敵を相手に戦ってもらうんだもの。貴方達にとっても、悪い話ではないと思うんだけど………」

「そんなの、了承するに決まってるじゃない！　克己ちゃんと離れて活動するなんて、ワタシ嫌よッ！」

「ようやくリーダーと会えたのよ。受けない道理は無いわ」

「ふふっ、そう言ってくれるって信じてたわ。それじゃあ、改めて自己紹介ね。私は櫻井了子よ。で、さつきバカやってたのが」

「風鳴弦十郎だ。よろしく頼むぞ、京水君、レイカ君」

「俺からも歓迎しよう。――ようこそ、特異災害対策機動部二課へ」

「泉京水よ。よろしくねッ！」

「私は羽原レイカ。これからよろしく、ボス」

こうして、京水とレイカは特異災害対策機動部二課に所属する事が決定となった。

残りのNEVERは、あと二人。

（――なんで、あいつに GANG ニールが………ッ！）

あの後響を寮まで送り届けた翼は、二課のシャワールームで今日の出来事を思い返していた。

二年前のあの日まで、ずっと一緒に歌い、戦い、そして生活してきた相棒の GANG ニールが、なぜあんな一般人の手に渡ったのだ。

『二人一緒なら、なにも怖くないな』

かつて、奏が口にした言葉を思い出す。そうだ、ずっと一緒だったのだ。どんな時も自分の隣には奏がいて、その手にはいつも、あの槍が握られていたのだ。

それなのに、あの少女は訳もわからずに、自分の親友の物だった GANG ニールの力を振り回していた。

やめろ、それをお前が振るうな。それは、お前なんか使っていない力じゃない。それは、その GANG ニールは………ッ！

「あら、先客がいたのね」

「……………ッ！」

突然の声に振り返ると、自分と同じく全裸になっている女性が立っていた。

「貴女は、確か大道の……………」

「羽原レイカ。今日からここに所属する事になったの、よろしくね」

隣のシャワーユニットに入り、シャワーを浴び始めるレイカ。隣から聞こえるシャワーの音に自分ももう少し浴びようと思ってシャワーを浴びていると、ふと先程モニターから見た、克己との戦いを終えた後の彼女の様子が思い浮かんできた。

「……………仲がいいんですね、大道と」

「克己の事？ なに言ってるのよ、私と克己は仕事の同僚であって、お友達なんかじゃないわ。それともなに？ もしかして嫉妬してる？」

「い、いえ！ そのような事は決して……………ッ！ 剣である私に、嫉妬などは似合いませんッ！」

「剣、ね。どうしてそこまで、貴女は自分を『剣である』と考えるの？」
「……………」

一瞬、「この国を護る為」と答えかけたが、それは克己に否定されてしまっている。答えられないままにいる翼に、次の言葉が投げかけられる。

「貴女が黙ってるのは、響……………というより、あの子が纏っていたシンフォギアが原因？」

「それは……………」

「合ってるのね。奏かのじよについてはボスから教えてもらっているわ。大事な親友が使っていたものを他人が使っているのは、確かに抵抗あるわよね。私もヒートが誰かに使われてとなったら、すぐにぶっ飛ばして取り返したくなるわ」

「羽原さんは、大道と殴り合って気持ちの整理をしましたが、私もそれ

をするべきですか?」

「さん付けはやめてよ、むずがゆい。それに話し方もため口で結構よ。……………それで質問の答えだけと、私達のやり方はオススメしないわね。あれは私達だからこそ出来る事。貴女が響相手にやったら、間違はなく彼女を殺してしまうわ。貴女も彼女が GANG ニールを使っている事を嫌がっているとはいえ、彼女を殺してまで奪い取ろうって魂胆じゃないでしょう?」

「その通りなのだが、私としては、どうしても奏の事を思い出してな……………」

「本当に大切なのね。彼女との思い出は」

「ああ、奏がいてくれたから、私は変わる事が出来た。奏がいなくなっただけからは、私はずっと自分の歌う意味が『国を護る為』だと思ってきたが、それは大道に『違う』と切り捨てられてしまったよ。それからというもの、私はずっと自分の戦う意味を探しているのだが、どうしても見つからなくてな……………」

「答えが見つからない、ねえ……………」

そこでシャワーを止めたレイカは、今もシャワーを浴びている翼に自分が考えている事をそのまま言葉に変えた。

「翼、自分と向き合いなさい。自分がなぜ歌を歌うのか、それを一番理解しているのは貴女自身よ」

「自分と、向き合う……………」

「そう。それにね、貴女は独りじゃないの。周りを見てごらんなさい。貴女の周りには、たくさんの人がいるのよ。克己が来るまでの貴女は独りで戦っていたようなものだったらしいけど、これからはしっかり頼る事ね。そうすれば、貴女の探す『答え』も、多少は見つかりやすくなると思うわよ」

「……………ありがとう。参考にしてみる」

「どういたしまして。————— だけど、見なくていいものもあるのよ」

シャワーを止め、タオルを体に巻いてシャワーユニットから出るレイカ。長い期間を傭兵として過ごし、NEVERである彼女の聴覚は、真っ直ぐこの部屋に向かってきてきている足音を捉えていた。そして、その主が誰であるのかも。

「見なくていいもの？ それはいつたい……………」

「すぐにわかるわ。あ、一応タオルで体を隠してなさい」
「？」

首を傾げるも言われた通りに近くに置いておいたタオルを体に巻くと、シャワールームの扉が開いた。

「レイカツ！ 一人でシャワーなんて水臭いわねえくツ！ ここは一つ、女と女の話でも——」

「あんたはどう足掻いてもおっさんだろうがツ!!」

「ぎゃあああああああツツツ!!」

レイカの蹴り上げが股間に直撃した京水の絶叫が二課全体に響き渡った。

雨の中で

翌日、授業を終えた響は二課からの連絡を受けて本部に来ていた。今回呼び出された理由は、シンフォギアを使う事を出来る響に協力を要請するというものだ。

人類の天敵であるノイズに対抗できる術は皆無に等しく、克己と彼の部下達の協力もあってなんとか対抗できているが、それでもノイズによる被害がでてしまうのは認めざるを得ない。

これは特異災害対策機動部二課、ひいては日本政府の意見である。そこで二課の司令、弦十郎は新たなシンフォギア装者となった響に協力を要請したのだ。だが、それを承諾するか否を決める前に、響には一つ気になる事があった。

それは、自分が持つているであろう聖遺物、ガングニールはどこにあるのか、というものである。

シンフォギアと聖遺物についての説明は昨日受けているが、それによれば、シンフォギアを身に纏い、ノイズと戦う戦士である適合者は、基本的に自身と適合した聖遺物の欠片をペンダント状に加工して持ち歩いているはずだ。例にするならば翼と、今は亡き彼女の相棒にして響をノイズから護った奏がそうである。

それに対して弦十郎達の答えは、その場で話を聞いていた者達を驚愕させるに値するものだった。

「まずはこれを見てほしいの。これは昨日、私がメデイカルチェックの際に撮ったX線写真なんだけど、よく見てみて。ほら、ここ」

まず最初に了子が、彼らの前に出した響のX線写真の心臓付近を指差す。そこには明らかに、普通人間の体内には存在しないはずの、なにかの破片が複数写っていた。

「調査の結果、この破片はかつて奏ちゃんが身に纏っていた第三号聖遺物、ガングニールのものである事が判明したわ。奏ちゃんの置き土

産ね」

(……………ッ！ やはり、あれは奏の……………)

薄々、感じてはいた。あれ程の時を共に過ごしたのだ。翼は初めてガングニールのシンフォギアを纏っている響を見た時、彼女の鎧から僅かながら懐かしさを感じ取っていたのだ。きつとなにかの間違いだとその時はすぐにその考えを捨てたが、それでもこうして事実として告げられると、翼の心には例えようの無い感情が満ちていた。

「く……………ッ！」

ギリツ、と歯軋りをした翼が司令室から走り去る。弦十郎はその背中から感じられる複雑に絡み合った感情を感じ取って目を伏せるが、響に声をかけられてそちらに意識を向ける。

「私の中には、奏さんのガングニールがあるんですよね？」

「うむ。君の中にはあるのは、紛れも無い奏君のガングニールだ」

「これがあれば、ノイズを倒せるんですよね？ みんなを、救えるんですよね？」

ガングニールの破片が埋まっている胸元に手を当てる響に弦十郎は頷く。

「だったら私、やりますッ！ 私の、いいえ、奏さんの力が、誰かの助けになるんですよね？ この力でみんなを護る事が出来るのならッ！」

そうと決まれば、と響は司令室を出ていき、取り残された者達は顔を見合わせる。

「相変わらずの行動力ねえ。ホント、羨ましいわ。だけど猪突猛進を

貫き過ぎているのは少し戴けないわね」

「そうね。『人助けをしたい』という気持ち自体は素晴らしいものだとは思えるけど、その為に自分を顧みないのは駄目ね。救ったとしても、響自身が傷ついたら元も子もないわ。それか、本当に自分の事なんて眼中にないのかも……………」

「ちよつと、それって危なくない？ 下手すると今までのワタシ達よりも危険な状況に身を置くかもしれないじゃない。それと克己、貴方もなにか言つて——あれ、克己ちゃん？」

京水が克己を見ようと視線を動かすが、司令室に克己の姿はどこにも無かった。

(わかってる、あいつはなにも悪くない。それでも、この感情は……………)

「翼」

司令室から出てすぐ廊下で佇んでいた翼が振り向くと、そこには克己が立っていた。

「私もまだまだだな……………。彼女はなにも悪くないとわかっているのに、私の中では『あれは奏のものだ』と叫んでいる自分がある。これではお気に入りの玩具を取られて駄々を捏ねる赤子のようないか。こんな感情、わたし 剣には必要ないはずなのに……………」

「また自分を剣に例えたな、翼。いいか？ 前にも言ったが、お前は『剣』じゃない、『人間』だ。少なくとも、人に誇れない仕事をこなしてきた俺達と比べればな」

「だが、それは大道達の話であつて、私は……………」

「一人で背負うのはやめておけ。いつまでもそうしていると、いつか自分への重圧で潰れるぞ。頼れよ、俺達を。俺達が信用できないのなら、ボスや緒川に頼れ」

「……………なんだか、レイカみたいな事を言うな」

大道のセリフに、昨日シャワールームでレイカに言われた事を思い出す翼。あの時の彼女も、今の彼と同じ事を口にしていた。

「ほう、レイカが。あいつも今のお前に思うところがあるんだろうな。それ程までに、お前は他人から心配されているんだぞ？　口に出さずとも、ボスもきつとそうだ。なにかしらで、お前を手助けしようとしているだろう。……………話を交えるぞ」

そこで一旦翼についての話は打ち切り、克己は新たなシンフォギア装者、立花響についての話を口にした。

「翼、お前は立花響に対してどんな気持ちを抱いている？　ああ、別に全部語れという訳じゃない。今のお前が、ハッキリと断言出来る事さえ口にするればいい。形容出来ない事を口にしても、余計頭を混乱させるだけだからな」

「私は、彼女を戦わせるべきではないと思う。幼少より鍛錬してきた私と違って、立花響はごく普通の生活を送ってきた少女だ。そんな彼女が戦場に立つても、まともに戦えるとは到底思えない」

この前まで一般人だった響に、ノイズとの交戦が務まるはずなどない。もしそれが出来ていたら、彼女には恐ろしい戦闘の才能が存在する事になるだろう。だが、初戦の様子を見ればわかる通り、彼女はシンフォギアの力を制御出来ていない。そんな彼女を戦場に立たせても、足手纏いになるのは火を見るよりも明らかだ。

「そこは俺も同意見だ。流石に素人を戦地に送り出す程、俺も鬼畜じゃない。だが、これだけは断言出来る。彼女はきつと、誰に止められようと戦地に赴くだろう。京水達から話は聞いているが、あの異常なまでの行動力は表面だけ見れば素晴らしいものだろうが、その反

面、彼女は自分を顧みない。自分が戦いの素人と理解していても、救える命があれば是が非でも救いに行くだろう。たとえば、その代償が『自らの死』であったとしても」

「なら尚更、行かせる訳には……………」

「聞いてなかったのか？ 『彼女は、誰に止められようと戦地に赴く』。お前が止めたとしても、彼女は止まらない。ならば、俺達がすべき事はなんだ？」

「立花を……………護る？」

翼の返答に、「その通りだ」と頷く克己。

「止めても無駄だというのなら、護るしかない。お前からすれば彼女と同じ場所で戦うのは御免だろうが、そこだけは了承してくれ」
「……………わかった」

翼がこくりと頷いた瞬間、電動スライド式の扉から響が姿を見せた。

「あ、翼さんッ！」

「……………なんだ？」

「あの、私、戦いますッ！ 戦いに関しては丸つきり素人ですが、頑張りますッ！ なので、これからよろしくお願いしますッ！」

そう言つて響は翼に手を差し出す。だが、翼は彼女の手を一向に握ろうとせず、やがてその手から目を逸らしてしまった。

「あの、握手は流石に凶々しいと思いますけど、良ければ一緒に戦えればと……………」

目を逸らした翼に響が細々と口を開いたその時、本部内にけたたましいサイレンが鳴り響いた。

「――本件を我々二課が預かる事を一課に通達しろッ！ 出現座標は……………」

「特定完了しましたッ！ モニターに表示しますッ！」

「くッ、近い……………ッ！」

今回のノイズが出現した場所、そこは二課の本部がある《私立リディアン音楽院》よりそう遠く離れていない場所であった。幸い、近辺の住人は既に一課によって避難しているようだが、早急に手を打つのが吉というものである。

「迎え撃ちますッ！」

「私も……………ッ！」

「待つんだ、君はまだ……………ッ！」

「私の力が誰かの助けになるんですよねッ!? 克己先生達みたいな力やシンフォギアでないと、ノイズと戦えないんですよねッ!? だったら私、行きますッ!!」

司令室から出ていった翼を追って司令室から出ようとした響の背に弦十郎の声がかげられるが、響は振り向き様にそう叫んで司令室から出て行ってしまった。

「響ちゃんはワタシ達に任せて。飢えていたワタシ達を救ってくれた恩、そう簡単に返せるものじゃないわッ！」

「と、言うわけだ。翼も渋々だが響を護ると約束してくれた。ボスは引き続き、ボスにしか出来ない仕事を果たしてくれ」

「……………頼んだぞ」

「了解だ。行くぞ、お前達。奴らに地獄を見せるぞ」

京水とレイカを連れて克己が出ていき、弦十郎と了子が残される。

「心配？ 響ちゃんの事が」

「あの子は翼と違って、これまで一人の一般人として生活してきた。なあ、了子。『困っている誰かを救う』という気持ちは素晴らしいものだが、その為だけに、以前まで一般人だった少女が戦地に赴けるというのは、果たして『普通』と言えるのか？」

普通なら、少しは躊躇するところだろう。一歩間違えば大怪我、最悪死ぬかもしれない場所に向かっていく時、誰しもが一回はその足を止める。だというのに彼女は、全く躊躇する様子を見せずに戦地へ向かっていった。

そんな彼女の在り方は、『狂気』に等しいのではないか。

「つまり、あの子もまた私達と同じ、こっち側という事ね……………」

——一方、道路に出現したノイズの前に立つ翼は、先程の響の言葉を思い出していた。

『私、戦いますッ！ 戦いに関しては丸つきり素人ですが、精一杯頑張りますッ！ なので、これからよろしくお願いしますッ！』

（奏の力を手に入れただけで、あいつはなにを強気になっているんだ……………ッ！ そんなまともな覚悟も出来ない奴に、戦場に立つ資格は無い。戦場に立ち、敵を討つのは防人だけだッ！）

眼前のノイズを見据え、胸元のペンダントを握り締める。

「I my u t e u s a m e n o h a b a k i r i t
r o n n」

紡がれる聖句。光に包まれていく獲物を貫こうと紐状に変化した

ヒューマノイド
人型ノイズ達が迫るが、それを光の奥から振るわれた刀がまとめて消滅させた。

「斬り捨てるッ!!」

強く踏み出してからの一閃。自分達との距離を一気に縮められたノイズ達が反応すら出来ずに消滅していき、翼は次のノイズを仕留めるべく走り出す。

『翼ッ！ 克己君達を待たずに戦闘を始めるなッ！ 君一人でその数を捌き切るのは難しいッ！ ここは克己君達と合流してから——』

「私だけで充分ですッ！」

通信機から聞こえる弦十郎の提案を却下してノイズを相手に立ち回るが、思うように調子が出ず、少しずつペース配分が出来なくなっていた。

そんな彼女に、カエル型^{クッロール}ノイズが彼女を喰らおうと大きく口を開いて迫ってくる。

(気を急いたか……………ッ！ これは躲せない……………ッ！)

「こんのおおおおおおおッ!!」

しかし次の瞬間、真横からガングニールを纏った響が翼に迫っていたノイズを飛び蹴りで吹き飛ばし、一瞬で消滅させてしまった。

「こんな感じですか、レイカさん？」

「ええ、まだ粗いところはあるけど、初めてにしては上出来よ」

「翼ちゃん、無理はしない事よ。ワタシ達も手伝うわッ！」

(……………ッ！)

来てしまった。自分が時間をかけてしまったから、戦場に立たせるべきでない者を立たせてしまった。

(全て、私の無力が原因だ……………)

「立てるか、翼」

「……………ああ」

隣に歩み出てきたエターナルの手を握って立ち上がる。そこからはエターナル達の到着もあつて戦況は大きく変わり、出現した大量のノイズは彼らによつてももの数分で駆逐されたのだった。

(倒しはした。倒しはしたが……………。あの時、あいつが来なかったら……………)

だが、戦闘が終わつても翼の気分は晴れなかった。あの時、響が助けに入らなければ、自分は間違はなく大怪我を負っていた事だろう。こういう時は素直に感謝すべきだろうが、複雑に絡み合った感情がそれを阻む。

「翼さんッ！」

その時、響が自分の前まで走り寄つてきた。自分の気持ちも知らないで、戦いが終わった事、自分が無事である事を安堵した表情で。かつての相棒の鎧を、その身に纏つて。

「私、今は足手纏いかもしれないけど、一生懸命頑張りますッ！ だから、私と一緒に戦つてくださいッ！」

(『戦う』……………？ 私が、お前と……………？)

その言葉を、軽々しく口にするな。その戦場で言葉を吐けるのは、真に覚悟を決めた者だけだ。お前のような奴が、遊び半分で口にして

いいものではない。

「……………そうね」

右手に握った刀の切っ先を、響に突きつける。

「貴女と私、戦いましょうか」

「え……………、ふえ……………?」

訳がわからないといった表情で狼狽える響に、刀を突きつけながら彼女を見つめる翼。彼女達の様子に気付いたルナドーパントが二人の間に割って入ろうとするが、エターナルが軽く右手を上げる事で制止させる。

「克己ちゃん、あのままじゃ二人が……………ツ！」

「翼に彼女を殺そうとする意志は感じられない。殺し合いに発展する事は無いはずだ。だが、万が一という事もある。念の為に準備はしておけ」

「……………わかったわ」

遠くから克己達が見つめる中、翼は響の手に視線を向ける。

「さあ、構えなさい。貴女のアームドギアを」

「アームド……………ギア?」

「アームドギア、シンフォギアを纏う者の覚悟の形よ。貴女が真に戦場に立つ覚悟を持っているのなら、アームドギアは応えてくれるはずよ。さあ、早く出しなさいッ！」

「わ、わかりませんよ、アームドギアの出し方なんて……………」

申し訳なさそうに俯く響に対し、やはり、と思う翼。

こんな、戦いに対する覚悟も無い少女が、アームドギアなど出せる

はずが無い。遍く恐怖を退け、真に戦場に立つに足る覚悟を持った者の手にこそ、アームドギアは現れる。自分の手には刀の形として現れ、奏の手には槍の形として現れた。

彼女が本当に覚悟を決めているのなら、先の戦いでもアームドギアを振るって戦っていただろう。だが、響はそれを持っておらず、徒手空拳とも呼び難い戦い方でノイズを倒していた。

ノイズを屠る力はある。だが、覚悟が足りない。そんな状態では、遅かれ早かれ破滅するだけだ。

「ア、アームドギアの構え方なんてわかりませんよッ！ わからない事をやれって言われても、わからないものはわからないんですッ！」

まだシンフォギアを装備して間もない響に『アームドギアを構えろ』と言うのは酷である事は自分でも理解している。だが、どうしてもそう言わずにはいられなかった。

（本当に、どうして貴女が奏のガングニールを受け継ぐ事になったの？ なんて、貴女なんかはその力を振るっているの………ッ!?）

認めない。認められない。お前んかがガングニール奏のカを振るうのを、認めてなるものかッ!!

「お前みたいなのが、いったい奏の………、奏のなにを受け継いでいるというのッ!? 答えなさい、立花響ッ!!」

衝撃を受けて固まる響の前で、大きくジャンプした翼がアームドギアを投擲する。そして巨大化したアームドギアの柄を蹴る事で相手を貫く大技——『天ノ逆鱗』が響に迫った。

「……………ッ！」

「いけないッ！」

「止めるわよッ！」

その様子を遠くから見守っていた三人が弾かれたように動き出す。目配せをするだけでそれぞれの役割を確認した三人だったがしかし、それよりも速く動く人影があった。

「ぬうんツ!!」

三人よりも速く、それこそ電光石火の如き速度で響を貫かんとしていた巨大な剣の前に立った男——弦十郎は深く腰を落とし、それから拳を突き出し、

——あろう事か、翼の天ノ逆鱗を真つ向から止めてみせた。

「な……………ツ!?!」

「え……………?」

「二はあああああああッ!!?!?」

「おおおおお……………はあッ!!」

さらに凄まじい事に、天ノ逆鱗の衝撃を全身を介して足元へ流すと同時に大剣を粉碎し、彼が受け流した衝撃はその足元を一気に吹き飛ばした。

「翼ッ！」

大剣を粉碎した際の衝撃波に体勢を崩した翼の体をエターナルが抱え、ゆつくりと地面に下ろす。

「な、なによあれ……………。あんなの、人間って言えるの……………?」

京水、あんたはわかる……………?」

「わっかんないわよッ！ あの一撃を生身で受け止めるなんて、いつ

「たい何者なのよ……………ツ!？」

レイカ達が衝撃の光景に頭を抱えている前で軽く息を吐いた弦十郎が、翼の大剣を粉碎した右手を握ったり開いたりする。

「まったく、なにをやってるんだお前達は」

「いや、あんたこそなにやってんのよ」

「この靴、高かったんだぞ？　いったい何本の映画を借りれると思ってるんだ」

「え、気にするところ？」

自分のセリフにレイカと京水がそれぞれツツコミを入れている事も知らずに、弦十郎はギアを解除した翼に向き直る。

「……………らしくないな、翼。狙いもつけずにぶっ放したのか？　それとも……………」

続けてなにかを告げようとした弦十郎だったが、翼の目元を見た瞬間、吐き出されかけた言葉はどこかへ消えてしまった。

「お前、泣いて……………」

「泣いてなんかいませんッ！」

弦十郎が破壊した道路に通っていた配水管が破壊された影響で大量の水が雨のように降りしきる中、翼は弦十郎に向かって叫ぶ。

「風鳴翼はその身を剣と鍛えた戦士です……………だから……………ツ!」

「翼……………」

拳を固く握り締めている翼の姿に、克己は息を呑む。

翼が自分を『剣』と例え続けるのは、それが自分が生きてきた証であつたからだ。私情を押し殺し、ただノイズを屠り続ける防人であれと自分を鍛え上げてきたからこそ、翼は『自分が剣である』事に固執し続けているのだ。そんな彼女に、自分はなにをしてやれるのだろうか………。

「翼さん………。」

変身を解除した克己に支えられる形で立っている翼に歩み寄った響は、自分の胸元に手を当てて続ける。

「私、自分が全然ダメダメなのはわかっています。この力の意味も、今はわかりません。だから、これから一生懸命頑張つて………。」

天羽奏の GANG ニール、全てを貫くとされる神槍の力。それらの意味を理解できていない響は、それでもなにかを言わなければと考える。

自分の趣味は『人助け』だ。目の前で肩を震わせ、荒い呼吸を繰り返す彼女の助けになれるような事を口にしなければならぬ。

だが、哀しいかな。ある人間が『この人を助けなければ』と思つて取つた行動が、必ずしも当人にとって救いであるとは限らないのである。

「奏さんの代わりになつてみせますッ！」

「………ッ!!」

体は、勝手に動いていた。

「………え?」

乾いた破裂音に、自分の頬に走る痛みから、自分が翼に打たれた事

に気付いた響が翼を見る。

翼は、頭上から降り注ぐ配水管から噴き出た水の雨の中でもわかる程、その瞳から涙を零していた。

忘れてはいけない記憶

あれから一ヶ月。あの一件からというもの、翼と響は擦れ違ったままだ。

響の方はなんとかして翼に謝罪しようとして何度もそれを切り出すタイミングを見計らっていたが、話しかける事は出来ても、まともな会話をするには至らなかった。

シミュレーションルームでの訓練でさえも、響は戦いの素人、翼は単独行動ととても連携を取れるような状態ではなかった。

相手がノイズでなくとも、チームで戦う以上連携は必要不可欠だ。全員が各々の欠点をカバーした時こそ、チームは完成へと至れるのだ。

そんなある日、了子から『今日、ミーティングを開くわよ』というメールが届いた。

「……………では、全員揃ったところで、仲良しミーティングを始めましょう♪」

目の前にいるメンバー、主に響と翼がとても『仲良し』と呼べないような空気である事を敢えて無視し、了子がミーティング開始を告げる。

「さて、まずはモニターを見てくれ。これは、ここ一ヶ月にわたるノイズの発生地だが……………、響君、これを見て思う事は？」

「ん……………いっぱいですね」

「ははは、その通りだ。さて響君、ノイズについて、君が知っている事を教えてくれ」

「テレビのニュースや学校で教えてもらった程度ですが……………」

ノイズとは無感情に、機械的に人間のみを襲い、炭化してしまう特異災害。時と場所を選ばずに現れては周囲に被害を及ぼし、戦う術を

持たない人間はシエルターに避難して時間経過でノイズが消えるまで待たなければならぬと、響は自分が知っている限りの情報を話した。

「意外と詳しいな」

「えへへ、今纏めているレポートの題材なんです」

弦十郎に褒められて頭を搔く響。その様子に、翼は僅かに拳を握る力を強めた。

「でも、ノイズと一般人が出くわす確率って、通り魔と出会う確率よりも低いんでしょ？ これに表示されている出現位置を見るに、明らかに異常だと思えるんだけど……………」

ノイズの出現位置が表示されているモニターに視線を移すレイカ。一般人が通常生活の中で通り魔に遭遇する確率は約1700万分の1と考えられている。これを宝くじに例えたとするならば、宝くじで1等7億円当選する確率とほぼ同じである。それなのに、この一か月でのノイズの出現頻度は高すぎる。

「レイカちゃんの言う通り、このノイズが出現頻度はハッキリ言って異常よ。ノイズの発生が国連の議題に上がったのは13年前からだけど、観測そのものはそれこそ太古の昔からあったわ」

「世界各地にて語られる神話、伝承に登場する数々の異形はノイズ由来のものが多いだろう」

「だとすると、そこに何らかの『作為』が働いていると考えるべきでしょうね」

「という事は、誰かが意図的にノイズを出現させているというわけか？」

「そんな……………、いったいどうして……………」

もし、その仮説が正しいのならば、なぜその『誰か』は人類の天敵であるノイズを出現させて周囲に被害を与え続けているのだろうか。頭に浮かんできたその疑問に響は苦悶するが、今はミーティングの最中である事を思い出してすぐに周りの声に耳を傾ける。

「ここ二ヶ月のノイズ発生の中心点は、我々の真上。《私立リディアン音楽院》です。サクリストD——『デュランダル』を狙って、何らかの意思がこの地に向けられている証左となります」
「デュランダル……………」

翼から聞き慣れない単語を聞いた克己達が首を傾げる。

「あの、デュランダルっていったい……………」

響の問いに答えるのは、オペレーターの一人である女性——
「友里あおい。冷静かつ真面目な性格の持ち主で、主に情報処理を担当している。響にとっては、初めて GANG ニールを纏った時、『温かいものどうぞ』と手渡されたココアがなにかと印象に残っている。」

「この二課の司令室よりもさらに下層。『アビス』と呼ばれる最深部に保管され、日本政府の管理下にて我々が研究している、ほぼ完全状態の聖遺物。それがデュランダルよ」

続いてデュランダルの説明をするのは、あおいと同じく、情報処理を担当する男性オペレーターの藤堯朔也。持ち前の桁外れの情報処理能力を活かし、通信管制の他に情報収集・分析など多岐な業務をこなす男だ。

「翼さんの天羽々斬や響ちゃんのガングニールのような欠片は、力を発揮するのにその都度装者の歌を必要とするけど、なんの破損もない完全状態の聖遺物は一度起動すれば常時100%の力を発揮する。」

そして、それは装者以外の人間も使用できるであろうとの研究結果が出ているんだ」

「それが、私の提唱した櫻井理論ツ!! だけど、完全聖遺物の起動には相応なフォニックゲイン値が必要なのよね」

「む、難しすぎてよくわからない……………」

「要するに、莫大な歌の力がカギになって完全聖遺物が起動するって事よ。スマホで説明するなら、『歌の力』が電源ボタン、『完全聖遺物』が本体ってところね」

「なるほど! よくわかりました!」

「あれから二年。今の翼の歌であれば、あるいは……………」
「……………」

弦十郎の言葉に翼が歯噛みする。

「でも、そもそも、起動実験に必要な日本政府からの許可って下りるんですか?」

「いや、それ以前の話だよ。安保を楯に、米国が再三のデユランダル引き渡しを要求してきているらしいじゃないか。起動実験どころか、扱いに関しては慎重にならざるを得ない。下手を打てば国際問題だ」

「まさかこの件、米国政府が糸を引いているなんて事は……………」

「調査部からの報告によると、ここ数ヶ月で数万件にも及ぶ本部へのハッキングを試みた痕跡が認められているそうだが、流石にアクセスの出所は不明。それらを短絡的に米国政府の仕業とは断定できないが……………」

「風鳴指令、お話中のところすみません」

「ん? ……………ああ、もうそんな時間か」

弦十郎の言葉を遮った緒川が翼に視線を向ける。

「翼さん、今晚はアルバムの打ち合わせが入っています」

「ほえ?」

「え？　どういう事？」

響や京水が首を傾げる中、「なるほど」と克己が頷く。

「俺が体育教師であるように、お前の表側の仕事はそれか」

「はい。表の顔では、アーティスト風鳴翼のマネージャーをやっています。あ、そういえば、まだこれをしていませんでしたね」

どうぞ、と緒川から差し出されたのは、翼のマネージャーである彼の身分を表す名刺だ。それを受け取った克己は、自分も表向きではあるが仕事に就いている身なので自分の名刺を緒川に差し出す。俗に言う、名刺交換というやつだ。

「わあ、名刺貰うなんて初めてですッ！　こりやまた結構なものをもっともッ！」

「私達も受け取る必要ってあるのかしら……………」

「イケメンから名刺を貰えるなんて嬉しいわあッ！　じゃあ、ワタシはお返しにとっておきのベーゼを……………」

「丁重にお断りさせていただきます」

「それでは、お先に失礼します」

飛びかかる勢いで迫ってきた京水を軽く受け流した緒川を背景に翼は弦十郎達に頭を下げ、司令室を出ていった。

「翼がいなくなった以上、話は続けられないな。ミーティングはここまでにしよう」

「私達を取り囲む脅威は、ノイズばかりじゃないんですね……………」
「うむ、哀しい話だな」

二課が相手取っているのは人類共通の天敵であるノイズだけでは無い。同じ人間が運営する米国だって彼らにとっての相手であり、も

しデュランダルを奪われてしまえばどう利用されるかわかったもんじやない。最悪、新たな戦争の火種として軍事利用される可能性も存在するのだ。

NEVERが『不死身の兵士』として数多の国の血塗られた依頼を受け続けてきた過去を持つているが故に、克己達はそれがどれだけ周囲に不幸を呼ぶものであるかを、この場の誰よりも理解していた。

「そう心配しなくても大丈夫よ。なんてったってここは、テレビや雑誌で有名な天才考古学者、櫻井了子が設計した人類守護の砦よ。異端にして先端のテクノロジーが悪い奴らなんて寄せつけないんだから♪」

「あはは、頼りにしてます」

了子と響が楽しげに笑い合っているが、その横にいる克己達はデュランダルについて会話していた。

「完全聖遺物デュランダル………。欠片の天羽々斬や GANG ニールでさえあの力だっというのに、本来の力をそのまま引き出せるなんて危険すぎるわね」

「しかも、一度起動すれば一般人でも使用可能なんですよ？ そんなのが敵国に渡ったら堪ったもんじやないわ。完全聖遺物の複製は不可能でも、大本があれば劣化でもその力を宿した武器は作れるだろうから、尚更渡すわけにはいかないわね」

異端技術を秘密裏に研究しているのは日本だけではないだろう。他の国だって研究しているはずだ。ひよっとしたら、自分達の知らない技術だって生まれているのかもしれない。そんな相手にデュランダルを奪われでもしたら、世界のパワーバランスは間違いなく崩れ去る。ものによっては完全聖遺物一つで世界征服だって可能かもしれないのだ。

「この一連の騒動の主犯も、その目的も知らないが、どうせ碌なものではないだろう。止めてみせるぞ、必ず」

「……………あんたって、ホント丸くなったわよね。まるで別人みたい」「失望したか?」

「まさかッ！ ワタシ達はいつだって克己ちゃんの味方よッ！ ここにはいない賢ちゃんや剛三ちゃんも、そう思ってくれてるに違いないわッ！」

三人はこの騒動を引き起こした主犯と、その目的の阻止を誓い合い、改めて二課の元で活動すると決心したのだった。

——翌日。

「翼」

授業が終わり、生徒達がそれぞれの放課後を楽しむべく慌ただしく帰寮の準備を進める中、克己は例に漏れずに帰りの支度をしていた翼に声をかけた。

「……………なんだ?」

「話がある。残ってくれるか?」

「……………いいだろう」

今日は放課後に用事は無いため、翼は彼に頷き、他の生徒達が帰るまで教室に残り続けた。そして、翼のいる教室から生徒の姿が消え、外から聞こえてくる声も小さくなってきた頃、克己は翼の前の席に腰を下ろした。そこに座っている生徒が見れば悶絶ものだったが、そんな事は彼らには関係ない。

「単刀直入に訊く。お前が『剣』として生きる事に固執する理由はなん

だ？」

「それは前にも答えたはずだ。『国を護る為だ』と。申し訳ないが、その答えはまだ見つけられていない……………」

「そつちも重要ではあるが、今俺が訊いているのは、『なぜお前が『剣』として生きようと思ったか』だ」

「なぜ、私が『剣』として生きよう……………？ それは……………」

そこで一旦言葉を区切った翼は、少しだけ脳内で考えを巡らせてから口を開く。

「……………お父様に、認めてもらいたかったからだ」

「父親に？」

問い返してくる克己に頷く。

「お父様は、『お前は風鳴家に相応しくない人間だ。即刻この家から出ていけ』と言った。幼少より日々鍛錬してきたのに、お父様からそう言われた時は本当に悔しかった。だから私は、風鳴の家を出てひたすらに己を鍛え上げてきたのだ」

全ては、自分を否定した父親に自分を認めてもらう為。父親と生活したという記憶が無い克己に、父親に否定された彼女の気持ちは理解できない。だがそれでも、これだけはわかった。

——この少女は、紛れも無い一人の少女で、自分と同じ、人の子なのだ。

「そう思ってる時点で、お前は『剣』ではないな」
「なんだと？」

「父親を見返したい」。その気持ちは本物の剣には宿らないものだ。真に剣になるというのなら、感情を捨てる必要がある。だが、そんな事は出来ない。そう、人間である以上はな」

「なら、私は感情を捨ててやる。それが、真の剣になる道なら——」
「馬鹿な事を言うなッ!!」

突然怒鳴り声を上げた克己にビクツと体が跳ねる。口を半開きにしている自分を見つめる彼の瞳に宿るのは、怒りと、それ以上の哀しみだった。

「感情を捨てると言ったな、翼。人間として、最も必要な感情を捨てる
とッ!!」

「……………そうだ。大道が私を『剣ではない』と言うのなら、私はお前に
そう言わせる要因を排除する」

「……………ッ!!」

心底怒りが湧く。この少女はなにを言っているんだ。

感情を捨てるだど? ふざけるな。それは、自分が人である事を捨
てる事と同義だ。

「……………翼。俺の過去を教えてやる。今お前が言った事と関係のあ
る話だ」

そこで克己は、自分の過去を語る事に決めた。この少女の考えを変
えるには、生半可な言葉では駄目だ。

「俺達が傭兵である事は以前伝えたな。だが、俺はお前達にまだ隠し
ていた事がある」

「隠していた事だど?」

「——俺達が、死人である事だ」

教室内に流れ始める静寂。たった数秒でも、永遠のように感じられ
る沈黙の中、翼の脳内はひたすらに混乱していた。

(死人……………、死人だと言ったのか？　だが、大道はこうして私と話して……………、……………ッ！)

目の前の克己の姿を眺め、机の上で握り締められた拳が視界に入ったその時、自分が初めて彼に怒られた日の出来事がフラッシュバックした。

(大道の手は、冷たかった……………。それに、心臓も……………)

人間は生きている以上、その中心部である心臓は絶えず鼓動を刻んでいなければならない。だが、あの時大道に手を取られて触れた彼の体からは、その生命の鼓動が一切感じられなかったのだ。そんなの、『自分は死んでいる』と言っているも同然ではないか。

「大道……………、お前達は、いったい……………？」

震える声で尋ねる。それに対し、克己はハッキリと答えた。

『『NEVER』。命無き死者を特殊な酵素で蘇らせる事によって誕生した、ヒトの形を取った兵器。『死を超えた者』とも呼ばれている、死にぞこない共だよ』

「NEVER……………」

彼らの名を我知らずに繰り返す翼に、克己はNEVERの説明を始める。

NEVER。正式名称、NE^ネCR^クO^ロ O^{オー}VER^{バー}。人体蘇生酵素によつて蘇った、不死身の兵士。身体能力の飛躍的な上昇に加え、戦場で兵士の身を竦ませる死の恐怖を完全に克服した、最強の兵士。マキシマムドライブを受けない限りは無敵の彼らはしかし、日が経つにつれて生前の記憶・人間性を喪失していき、そうして出来た穴を埋める

ように残虐性が増していく。克己はその影響で、母親から送られた、生前の自分にとっては宝物であったであろう歌を忘れた過去を持っている。

そんな存在になり、仲間達と共にチームを組んで生活していたある日、一人の少女との出会いから始まった戦いを切っ掛けに、自分の心は死んだ。

「救おうと思った命は、全てこの手から零れ落ちたよ。あれからだ、俺が『死神』に成り果てたのは」

その後、自分達とはある街にて、そのこの住人を全て自分達と同じ怪物そんざいに作り替えようと、狂気に塗れた計画を実行した。結局、それはその街を護る戦士によって阻止されてしまったが、そこは今の話には関係ない。

自分が翼に語るべきなのは、その前に自分が犯した大罪、そう
……………

「俺は、お袋を殺した。この手で、自分を産んでくれた親を撃ち殺したのさ」

「……………ツ!! その時のお前は、なにも、なにも思わなかったのか……………ツ!!? 自分の母親を殺したというのに……………ツ!!?」

「ああ、なにも。そういった感情さえも、あの頃の俺には無かったからな。それに加え、俺は自分の部下であるレイカさえも『用済み』として処分した。あの時だって、俺はなにも感じなかったよ」

レイカの異常なまでの克己への憎悪はそれが原因だったのかと、翼はシミュレーションルームでのレイカと彼の戦いを思い出す。

「わかるか、翼。感情を捨てるって事はな、お前が剣になる為の道じゃない。お前を『怪物』に作り替えようとする、悪魔の囁きさ」

克己が翼を強い眼差しで見つめてくる。その視線から目を逸らそうにも、まるでヘビに睨まれたカエルのように体が動かない。

「翼、これは忠告だ。今すぐにその考えを捨てろ。俺と同じ道を辿る事になるぞ。俺はもう手遅れだが、お前はまだ、忘れたくない大切な思い出を覚えているはずだ」

「私の、大切な思い出……………」

「そうだ。もしかしたら今のお前が忘れているだけで、お前を家から追い出した父親と作った、大切な思い出もあるかもしれないだろう？ それを、忘れたくはないだろうか？」

その時、翼は思い出す。まだ自分が物心ついて間もない頃、テレビで見た歌手の歌を真似した時があった。

『ははは、翼は歌が上手いなあ』

『お父様！ 私、おつきくなったらいっぱい歌を歌って、みんなを笑顔にしたい！ そうしたら、みんな幸せになれるでしょ？』

『それはいいな。おつきくなったら、私にもその歌を聴かせてくれるかい？』

『もちろん！ お父様、大好き！』

『私も大好きだぞ、翼』

それは、風鳴翼が唯一楽しむ事が出来たもの。訓練に明け暮れる中でも、決して忘れられなかった、私が大好きだったもの。

では、なぜ父親は代々この国を護る為にその命を捧げてきた家系から自分の娘を追放したのか。ずっとわからなかった答えを、今の自分は容易く理解する事が出来る。

「お父、様……………」

彼は、自分を嫌ってはいなかったのだ。娘の夢を叶えるには、風鳴

家はあまりにも環境が悪すぎる。そう思った彼は、自分がこの家から出ていくようにしたのだ。それを知らずに、自分は家を出ていつて……………」

「親は、子の幸せを願うものだ。お前も、愛されていたんだな」
「ひっ、うっ、うあああああ……………ツ!!」

涙が止まらない。あの時、親の気持ちも知らずに家を出ていった自分が許せない。あの時の父親は、自分以上に苦しい思いをしていたというのに、当時の自分は、その気持ちを全く理解していなかったのだ。

（お父様は、私を嫌ってなんてなかった……………。むしろその逆で、私を、愛してくれてたんだ……………ツ！ なのに、なのに私は……………ツ!!）

両手で顔を覆って涙を流し続けていると、肩を叩かれる。手を顔から話すと、涙で歪んだ視界に、一枚のハンカチが映った。

「だから言っただろ？ お前は剣じゃない。どこにでもいる、普通の女の子だ。じゃなきゃ、そうして大泣きしたりしないだろ？」
「ぐすっ……………そう、だな……………」

克己からハンカチを受け取り、涙を拭う。それでも、まだ涙は止まらず、瞳から涙が零れる度に、翼はそれを拭い続けた。それを克己はなにを言うまでもなく、彼女が泣き止むまで静かに待っているのだった。

そして数分後、そこには顔を真っ赤に染め上げて突っ伏している翼の姿があった。

「不覚だ……………。もう18なのに、子どものように号泣してしまっ……………」

「いいんじゃないか？ たまには子どものように泣くのも」
「泣いてる時はいい。だけど泣き止んだ後が恥ずかしいんだッ！」
「そうか？ 常にノイズとの戦いを予期して訓練に励むお前より、今のお前の方が可愛げがあつて、俺は好きだけどな」
「くくッ!! ええい、さっきのは忘れろッ！ 忘れてくれえッ!!」
「イタッ！ お前、教師に向かってなにを………痛い痛いッ！
死者でも痛みは感じるんだぞ、やめろッ！」
「お前が忘れるまでやめられるかッ！ このッ！ このッ！」

ポカポカと大道の頭を殴りつける翼と、頭を押さええて防御する克己。誰もいない教室ですつと繰り広げられると思われた攻防はしかし、通信機から流れた緊急用のアラームによって中断させられた。

——ノイズが出現したとされる地下鉄入口に京水とレイカが到着すると、そこには既に響の姿があつた。しかし、いつものような明るい表情などではなく、どこか哀しそうな表情をしていたが。

「響ちゃん、どうしたの？」

「あ、いえ………。少し、考え事を………」

響が俯いて京水に答えるが、特徴的な足音を聴きつけて地下鉄入口の階段を見ると、そこからノイズが登ってきているのが見えた。

「来たわよ、話は後にしましょう」

「は、はいッ！」

京水達はガイアメモリを取り出し、響は胸の内から湧き上がる聖句を詠唱する。

『ルナ!』

『ヒート!』

「———— Balwisyall Nescell gunn
ir tron」

そうしてルナドーパント、ヒートドーパント、そしてガングニールの鎧を纏った響がノイズの集団へと攻撃を仕掛けていく。

まともな訓練を受けていない響の繰り出す攻撃はどれも単純なパンチやキックなどで、徒手空拳もお手の物であるルナドーパント達からすれば目を覆いたくなるような隙の多さだが、それでもノイズへの効果は抜群で、彼女に殴られ、蹴られたノイズ達はすぐに炭化して消えていく。だが、まだ彼女を一人で戦わせるわけにはいかず、ルナドーパント達は自分達に向かってくるノイズの相手をすると同時に、死角から響に襲い掛かろうとしていたノイズ達も片っ端から消滅させていった。

『報告だ。小型ノイズの中に一回り大きな反応が見られる。まもなく翼と克己君が合流するから、それまで持ちこたえてくれ。くれぐれも無茶はするなよ』

「それって、言わずもがなあれよね?」

ヒートドーパントが指差す先にいたのは、他の個体と違ってブドウ状の房を身につけたノイズだ。

「あら、なんだか美味しそうなものつけてるわね。触っても炭化しないのなら食べてみたい」

「アホな事言うな。きつとなにかあるはずよ」

三人の前にいたブドウ型ノイズが体を震わせると、その体から離れた幾つかの球が三人に向かい、三人が身構えた直後、それは突如として爆発した。

「爆発なんて聞いてないわよッ！」

予想外の攻撃に崩れ落ちる瓦礫に対処できなかつたルナドーパントが、自分にのしかかっている瓦礫を吹き飛ばして立ち上がる。その頃には既に、ブドウ型ノイズは他の小型ノイズの集団の奥で飛び跳ねていた。もしあれが地上に出てしまえば、並の小型ノイズ以上の被害が出る事になってしまうだろう。

「響ちゃん、レイカツ！ 早くあいつを追わないとッ！」

「わかつてるわよ……………ッ！ さあ、行くわよ、ひび……………ぎゅ！」

瓦礫を押し退けて起き上がったヒートドーパントが響に手を差し伸べようとするが、彼女の異変に気付いてその手を引っ込める。

「……………見たかった。流れ星、見たかったッ！」

「え、ちよ、響ッ!？」

地面を蹴り碎いて小型ノイズの群れに飛び込んだ響が、圧倒的なまでの暴力でノイズを蹂躪し始める。その戦い方は先程よりも荒々しく、まるで自分を制御できていないかのようなものだった。

「未来と一緒にッ！ 流れ星、見たかったッ!!」

カエル型ノイズを、まるで絹を引き裂くように千切り捨てたその姿に、ルナドーパント達は言い知れぬ危機感を覚える。

「あんた達が、誰かの約束を侵し、嘘の無い世界を、争いの無い世界を……………なんでも無い日常をッ！ 略奪すると、言うのならッ！」

二体の人型ノイズの頭を掴み、地面に叩きつけるようにして消滅

させる。

「ちょ、ちょっとまずいんじゃないのあれッ!? レイカ、貴女はあいつを追ってッ! 響ちゃんは私にッ!」

「頼んだわよッ!」

響がひたすらに己の怒りのままに暴れ回り、意味もなく壁を殴ったりしている光景に嫌な予感がしたルナドーパントが伸ばした両手で響の体を拘束。響が身動きを取れなくなっている内に、ヒートドーパントがブドウ型ノイズを追う。だが、両者の間に存在する小型ノイズの数が多く、思うように距離を縮められない。そして遂に、ブドウ型ノイズは頭上に向かって自分の体から切り離した球を飛ばし、天井に大穴を作ってしまった。

「しまった………ッ!」

舌打ち交じりの声をあげてブドウ型ノイズを追おうとするヒートドーパントだったが、その足は途中で止める事になる。

太陽が沈み、静謐な雰囲気を感じさせる月と星々が照らす夜空に、一筋の光が見えた。

「……………流れ、星……………?」

夜空に煌めく一条の光を目撃したのは、ルナドーパントによって拘束されていた響もだった。

だが、それは断じて流れ星などではなく、風鳴翼と仮面ライダーエターナルが纏う光である。

「はあああああッ!!」

翼の蒼ノ一閃とエターナルの蒼炎を纏った急降下キックが直撃し

たブドウ型ノイズは、超強力な攻撃を二つも受けた事によって、塵一つ残す事なく消え去った。

「美味しいところだけ持っていったわね、克己」

「む、これで最後だったのか？ 随分と味気ないな」

自分達の攻撃の影響で舞い上がった砂埃を軽く叩いて落としていくと、ブドウ型ノイズが開けた穴から響とルナドーパントが出てきた。

「翼さんッ！」

自分に背を向けて周囲に異常が無いかを確認している翼に、響は声をかける。

(私だってやれるのに……私にだって……ッ！)

自分も素人ではあるが装者だ。この手にはノイズを屠る力が宿っている。覚悟が無いと言われても、それでも自分はこの力でノイズを倒したい。だって、自分にも――

「私だって、護りたいものがあるんですッ！ だから……」

だが、それ以上の言葉が思いつかない。その様子に「まだまだね」とヒートドーパントが肩を竦めた、その時だった。

「――『だから』？ で、どうすんだよ？」

どこからともなく聞き慣れない声が聞こえ、一気に警戒心を強めた翼が声の主を探す。

「誰だ……………ッ！……………ッ!？」

そして、見つけた。二人の男を引き連れ、月明かりの下を歩んでくる一人の少女を。

「それは……………まさか……………」

彼女が纏っている白い鎧には、見覚えがある。

あれは二年前のライブで起きた惨劇の折に消失したとされる、デユランダルと同じ完全聖遺物。その名も、

『ネフシユタンの鎧』……………ッ!？」

そして、克己達も翼と同じように驚愕していた。

謎の少女の背後に立つ、二人の男性。髪をオールバックに纏めた男性に、ロッドを装備した、大きく胸を開けた男性。

「お前達は……………賢に、剛三か……………?」

自分達と同じNEVERにして、自分の部下だったはずの二人は、敵意の籠った目で克己達を睨みつけた。

禁句にして聖句

「へえ、あんた、この鎧の出自を知ってたんだ？」

「二年前………私の不始末で奪われたものを忘れるか。なにより、私の不手際で奪われた命を忘れるものかッ！」

ネフシユタンの鎧。それは二年前のツヴァイウイングのライブと並行して秘密裏に行われていた起動実験の中心だった、現在二課のアビスに保管されているデュランダルと同じ完全聖遺物。突如として出現したノイズによる惨劇の折に行方不明となっていたはずだが、それが今や、自分の前にある。

(まさかこうして、ガングニールとネフシユタンの鎧が私の前に揃うとは………)

ネフシユタンの鎧を纏う少女に向けたアームギアを握る力を自然と強める。目の前の少女は自然体であるにも関わらず、その身から迸る威圧感が、彼女が只者ではない事を証明している。

(だが、その次に気になるのは………)

少女への警戒を緩める事無く、視線を背後にいる二人組の男性へ向ける。

所々に違いこそあるが、彼らが着ているのは間違いなく克己達と同じ服装。という事は、彼らも克己の部下なのだろうか。ではなぜ、彼らはあの少女に付き従い、彼らにとってのリーダーであるはずの克己がいるこちらに敵意を向けているのだろうか。

「賢、剛三。どうしてお前達がそこにいる」

「こつちにも事情つてもんがあるんだよ。すまねえな、克己」

「そういうわけだ。だが、我々の目的は殺し合いではなく、その少女

と、リーダー達の持っているガイアメモリだ」

オールバックの男——芦原賢の視線が響へと向けられる。

「響ちゃんとかガイアメモリを？　いったいどういう事よ」

「そいつの存在が気になるってんで、うちの依頼主が依頼してきたのさ。メモリについても同じだ。お前達の様子を見るに、そっちにも依頼主がいるようだ。だが、依頼主が違えども、慣れ親しんだ連中だ。こつちもあんま騒ぎは起こしたくないしな」

「大人しくその少女とメモリをこちらに渡してくれ。殺し合いはしたくない」

『「断る』と言ったら？』

「……………気は引けるが、実力行使だ」

「話は終わったか？　だったら始めるぞ」

両手に握った刃の鞭を地面に叩き付け、翼達もそれぞれの得物を構える。

まさに一触即発。どちらかが動き出せば即戦闘が開始すると言っても過言ではない空気が周囲に満ちる中、一人だけその空気に疑問を抱いていた者が彼らの間に割って入ってきた。

「み、皆さん待ってくださいッ！　相手は人ですよッ！　話し合いをすればきつと——」

「戦場でなにを馬鹿な事をッ！」

「ハモったな」

「ハモったわね」

見事にネフシユタンの鎧の少女と翼の声が重なり、両者に板挟みにされた響の体を強張らせた。

「はははッ！　随分と甘い考えだな、今回のターゲットはッ！」

「難易度はイージー……いや、リーダー達がいるからハードか？
だがネフシユタンの鎧も視野に入れるとなると、ノーマルか」

「黙れよお前らッ！ さっさと始めるぞッ！」

「やれやれ、せっかちなお嬢さんだ事。ま、言われずともそのつもり
だったけどなッ！」

ロッドを持った男——堂本剛三が懐から『M』の文字が描
かれたメモリを取り出し、賢は『T』の文字が描かれたメモリを取り
出す。

『メタル！』

『トリガー！』

投げ飛ばされたT2メタルメモリが剛三の背中から、そしてT2ト
リガーメモリが賢の右の掌から体内に侵入し、彼らの姿を異形のもの
へと変えていく。

剛三は銀色の体色を持った金属質な体の怪人——『メタル
ドーパント』に変身し、賢は頭部にスコープ状の単眼を持ち、右腕は
ライフル状に変化した専用武器トリガーマグナムと一体化した青い
怪人——『トリガードーパント』へ変身した。

「よおっし、いくぜえッ!!」

「ゲームスタート」

トリガードーパントがトリガーマグナムから青い光弾を発射する
のを合図に、戦闘が始まる。

「切り刻まれちまいなッ!!」

不規則な動きで迫ってくる鞭を紙一重で躲した翼の刀が少女の首
へと振るわれるが、少女も攻撃を躲して翼を軽く蹴り飛ばす。一発蹴

られただけなのに全身に響くような鈍痛に、開いた口から唾が吐き出される。

(これが……………完全聖遺物のポテンシャルなのか……………ツ!?)

「ネフシユタンの力だなんて思わないでくれよな。あたしのでっぺんは、まだまだこんなもんじゃねえぞ?」

立ち上がった翼に続けて二本の鞭が襲い掛かるも、それをルナドーパントが両手で弾いた。

「改めて見ると、貴女いい顔してるじゃない。もっと近くで見せて頂戴ッ!」

伸縮自在な両手で拘束しようとするルナドーパントだったが、それを転がって回避した少女が振るった鞭が逆にルナドーパントを拘束した。

体をギチギチと縛り付ける刃の鞭の痛みに、ルナドーパントは翼に忠告すべく声をかける。

「つ、翼ちゃんッ! こいつ、強いわッ! 特に、縛りがね……………ツ

! 嫌いじゃないわあ……………ツ!!」

「気持ち悪いんだよ、オカマ野郎ッ!」

「いつてきまあああああすツ!!」

ジャイアントスイングの要領で振り回されたルナドーパントが遠くの茂みへ消えていく。その様子に「あいつ、相変わらずだなあ……………」と呆れ笑いを浮かべたメタルドーパントは、改めて自分と対峙するヒートドーパントに槌状に変化したメタルシャフトを突き付ける。

「レイカも大分丸くなったな。子どもを護る為に戦おうとするなんて

よ」

「あの子には恩があるのよ。知ってる？ 死にかけの体に与えられる食事の快樂。あれはまさしく、天国に行きそうになるような程の快樂よ」

「はっ、知らねえよッ！」

振り下ろされたメタルシャフトを躲したヒートドーパントの連続蹴りがメタルドーパントの胴体に叩き込まれていき、メタルドーパントが数歩後ずさるが、蹴られた箇所を軽く叩いて歩み出す。

「温いなッ！ もっと熱くならねえと、俺は倒せねえぞッ！」

「相変わらず頑丈な体ね……………。いいわ、その体溶かしてあげるッ！」

紅蓮の炎を纏ったヒートドーパントの右足と横薙ぎに振るわれたメタルシャフトが激突し、周囲に衝撃波と火の粉を飛び散らせる。そして、そこから少し離れた場所では後退しながら光弾を放つトリガードーパントを、エターナルローブで光弾を防ぎながらエターナルが追っていた。

「その程度で俺を倒せると思ってるのか？ 俺の部下にしては随分と甘い考えだなッ！」

「相変わらずのチート性能……………。少しは相手の事も考えてくれないか？」

「部下でも今は敵だ。俺がそこまで甘い奴だとも思ってるのか？」

「いや、それでこそ俺達のリーダーだ。だから……………」

エターナルがエターナルエッジで斬りつけようとしたその時、一瞬だけから空きになった胴体にとりガードーパントの光弾が撃ち込まれた。

「ごちらも、本気でいこう」

一瞬だけ見えた死角を突いて攻撃する辺り、流石元S W A T隊員というべきか。火花を散らして後ずさるエターナルに次々と光弾を撃ちながら距離を取っていくトリガードパント。

「どんなに固い敵でも、どこかに弱点はある」

「ははは、それでこそ賢だ……………ツ！」

着弾した位置を擦り、エターナルエッジを構え直したエターナルは、再びトリガードパントが放った光弾を切り裂きながら走り出した。

そして、そんな彼らの戦いに、響は拳を握り締めていた。

(なんで……………、みんな戦ってるの……………？ 同じ人間同士なのに、こんな、殺し合いを……………)

誰もが本気で相手を殺そうと攻防を繰り返す中、響だけはひたすらに、彼らの戦いに不満を抱く。

戦場に自分のような気持ちを持つ者はいない。それは合っているのだろう。

だがそれでも、認められないものは認められなかった。

「あんたはこいつらの相手でもしてなッ！」

その時、鞭を巻き付けた翼を投げ飛ばした少女が一人だけ戦いに参加できていない響を視界に収めが、取り出した不思議な形状をした杖から光が放つ。すると、その光から響を囲むような形でノイズが現れた。

「え……………ノイズが、操られて……………？ どうしてツ!？」

「それがこの『ソロモンの杖』の力なんだよ。雑魚は雑魚らしく、ノイズでも戯れてなッ！ おっとッ！」

「戦いの最中に余所見とは、よっぼど自信があるようだなッ！」
「当然だろ。このあたしがテメエなんかに負けるかッ！」

少女が斬りかかってきた翼の相手を再開し、響は自分を囲むノイズと戦闘を開始しようとした瞬間、茂みから飛び出してきたルナドープアントが響の背後に立つ。

「なんかピンチみたいだったから、加勢してあげるわッ！」

「助かりますッ！」

そして二人は自分達を囲むノイズの集団に攻撃を仕掛けた。

素人ながらもノイズとの戦いに少しは慣れてきている為、少しだけであれば単独で戦わせても問題は然程感じさせるものになっており、その成長に嬉しそうに鼻を鳴らしたルナドープアントだが、二人が自分達を囲むノイズ達を倒した直後、

「ぐ苦勞さん。ほらほら、まだ後がつかえてるぞ」

少女が再びソロモンの杖からノイズを出現させてきた。今度はダチョウのような姿をしたノイズだ。

「ちよつとッ！ 頼んでもないのにおかわりなんて酷いじゃない
……………つて、あぁッ！」

「嘘ッ!？」

驚いている間にダチョウ型ノイズが嘴から噴射した粘性の液体が二人をその場に拘束し、二人は身動きを取ろうにも液体の粘性が強く、全く動けない。

「う、動けない……………ッ!」

「ワタシ達をどうするつもりッ!? いやらしい事するつもりでしょッ!? エロ同人みたいにッ! エロ同人みたいにッ!!」

「やかましいんだよ teme エはッ! ………………ッ!」

拘束されながらも体をくねくねさせて叫ぶルナドーパントに少女が叫び返した途端、逆立ちした状態で横回転しながら迫った翼の剣が少女の鎧を斬りつけ、微かに火花を散らせた。

「二人にかまけて、私を忘れたかッ!」

「このッ!? お高く留まるなッ!」

地面についている翼の手を切り刻もうとした鞭を腕のバネだけで飛び上がって躲すも、それを狙っていた少女のもう一本の鞭が翼の右足に絡まり、地面に叩き付けた。

「ぐうううッ!」

「のぼせ上がるな人気者。誰も彼もが構ってくれると思ってるんじやねえッ!」

倒れ伏した翼の頭を踏みつける少女。

圧倒的な実力差。この少女は、生身でもネフシユタンの力に振り回されない程の強靱な戦闘能力があるだろう。だがそれでも、翼は戦いを諦める事は選ばない。

「鎧も仲間も、あんたにや過ぎてんじやないのか?」

「だとしても、諦め切れるかッ!」

少女から離れるや否や、上空から大量の剣を急降下させて反撃する。

「無駄な足掻きをッ！」

飛び退いて上空から降り注ぐ剣の雨を躲した少女は、鞭の先にエネルギーを集中させる。

「喰らいやがれッ!!」

翼が着地した瞬間を狙って繰り出された、鞭を振るって超高出力のエネルギー弾を投擲する技——『NIRVANA GEDON』が翼に迫る。

「翼ッ！」

「……………ッ!? 大道ッ!?!」

だが、トリガードーパントを蹴り飛ばしたエターナルがエネルギー弾の前に立ちはだかり、エターナルローブで防御する。しかし、巨大なエネルギー弾はエターナルローブの防御すら突破しそうな程の威力を誇っており、その恐るべき威力にエターナルは目を見開く。

「翼ッ！ 行けッ！」

「ああッ！」

エターナルの肩を踏み台にジャンプすると同時にエネルギー弾が爆発し、マント越しに襲ってきた衝撃波がエターナルを吹き飛ばした。

「はあああああッ!!」

「がは……………ッ！」

上空から大型化したアームドギアからの一撃、蒼ノ一閃が直撃した少女が大きく吹き飛ばされる。

「クソ……………ッ！ やりやがったなッ！」
「まだだッ！」

バックステップで翼の斬撃を躲し、鞭で攻撃を仕掛ける少女。それを掻い潜り、再び肉薄する翼。何度も振るわれる刀を躲し、時に反撃を繰り出していく少女だったが、遂に翼の一撃が鎧に直撃し、背後の木に叩き付けられた。

「終わりだッ！ ………………ッ!？」
「そいつはこっちのセリフだッ！」

翼が少女にトドメを刺そうと上段斬りの構えを取った瞬間、少女は左手に握っていた鞭の先端に先程翼に撃ったエネルギー弾を生成し、それを叩き付けるように翼に喰らわせた。

「ぐあああああッ!!」

零距离からの超威力のエネルギー弾を受けて吹き飛ばされた翼に少女が近付く。

「ふん、まるで出来損ない。欠片の聖遺物が完全聖遺物に敵うものか」
「……………確かに、私は出来損ないだ」
「あん？」
「この身を一振りの剣として鍛え上げてきたはずなのに、あの日、私は無様にも生き残ってしまった……………」

二年前の惨劇が思い起こされる。護るべき者達を護れず、自分を変えてくれた光さえも喪った。あの日程、自分を恥に思った日は無い。あの日、自分にもっと力があればと、何度悔いた事か。

「だが、それも今日までの事。奪われたネフシユタンの鎧を取り戻す事で、この汚名を雪がせてもらおうッ！」

「そうかい。脱がせるものなら脱がして……………ッ!? なッ、動けない……………ッ!?!」

立ち上がった翼に鞭を叩き付けようと動かそうとした手が動かず、自身の身に起きた異変に気付いた少女は、自分の影に一本の小刀が刺さっているのが見えた。

相手の影に小刀を刺す事で、その動きを封じる技——『影縫い』である。

「月が出ている内に、決着をつけましょう……………」

目の前に立つ翼の覚悟を決めた顔を見て、少女の脳裏に一つの単語が浮かび上がる。

「……………まさか、歌うのかッ!? 『絶唱』をッ!?!」

絶唱。装者が持つ攻撃手段の中でも、最大にして最強の威力を誇る技。一度それを歌えば、並の敵など全てが塵と化すその攻撃はしかし、その絶大な威力の代償として装者に想像を絶する反動を与える。反動で受けるダメージは装者の適合係数によって変わるとされているが、それでも絶唱を歌った本人にとっては大ダメージである事に変わりはない。

「立花響ッ！」

拘束され、身動きが取れない状態の響に叫ぶ。

「防人の生き様……………覚悟を見せてあげるッ！ 貴女の胸に焼きつけなさいッ！」

「翼さん……………」

「やらせるかよ……………好きに……………勝手に……………ツ！」

影縫いの拘束を解こうと足掻く少女を前に、翼は禁断の聖句を口にし始める。

「———— Gatrandis babel ziggurat
edenal Emustolronzen fineel
baral zizzl」

「やめろ……………やめろんだ、翼ツ!!」

ゆつくりと少女に近付いていく翼に、エターナルが駆け寄る。だが途中でその足は止まり、まさかと思つて影を見ると、そこには少女と同じように、自分の影にも小刀が刺さっていた。さらに周りを見れば、自分以外の面々も影縫いを使われており、身動きが取れなくなっていた。恐らく、千ノ落涙と同じ要領で上空から人数分の剣を降らせて拘束したのだろう。

（是が非でも邪魔させないつもりか……………ツ！　そこまでしても、お前は歌うのか……………ツ!?!）

止める事なく歩を進めていく翼の背に、何度も絶唱をやめるよう叫ぶ。だが、彼女はそれに対し頷かない。

（大道。お前は私に、私にとっての『歌』とはなんなのかを思い出させてくれた）

————目の前の少女との距離が、気が遠くなるような距離に感じられる。

（嬉しかった。『歌を歌う』って事が、とても楽しかった事を思い出せ

て)

—— 父親に褒められた。今の自分が訊けば耳を塞ぎたくなるようなものだったのに、あの時の彼は笑っていて、あの頃の自分も笑っていた。

(私は悪者だな。折角教えてもらったのに、それを無駄にしようとしている……………)

—— でも、許してくれ。私はどうしても、護りたいんだ。

(お父様が愛し、私が愛した『歌』で、みんなを護りたいんだ)

遂に、少女の元へ辿り着いた。

凄まじい恐怖だろう。自分が撃ったエネルギー弾の何倍も強力な攻撃を繰り出そうとしている者が、自分の目と鼻の先にいるのだから。

(さようならだ、大道。私に、歌の楽しさを思い出させてくれて、ありがとう)

条件は整った。

聖句きんくの詠唱は完了した。

—— 瞬間、全てが吹き飛ぶ。

翼を中心に発生した衝撃波が、周りにいた総てを呑み込む。敵も味方も関係なく、なにもかもを吹き飛ばした衝撃波が止むと、その中心地には巨大なクレーターが出来ていた。

「つ、翼……………」

NEVERの体に感謝すべきか。どれ程の攻撃を受けても耐え抜ける耐久力を備えた肉体を起こしてクレーターに向かう。

「翼……………ッ！ 翼ッ!!」

クレーターの中心で倒れていた翼を助け起こし、彼女の体を見て愕然とする。

「……………ッ!! これが、これが絶唱なのか……………ッ!? こうなる事を知っていながら、お前は歌ったのか……………ッ!?!」

その時、少し離れた所からドアの開閉音が聞こえ、弦十郎と了子が駆け寄ってくる。

「無事かッ！ 翼ッ！」

克己に抱えられた翼に声をかける弦十郎。その声に目が覚めた翼は、大量の血を吐き出しながら口を開く。

「……………私とて、人類守護の務めを果たす防人……………。こんなところで、折れる剣じゃありません……………」

その言葉を最後に、翼の全身から力が抜ける。

「おい……………、おい、翼……………? 翼ッ!!」

「了子君ッ!!」

「わかってるわよッ!!」

了子が救急車の手配を急ぐ中、克己は気を失っている翼に何度も声をかけ続けた。

私は私のままで

「貴女が気に病む必要はありませんよ。命に別状はありませんでしたし、絶唱は翼さんが自ら望み、歌ったのですから」

翼が《私立リディアン音楽院》近くの病院に緊急搬送された後、病院の休憩室では響達は緒川から話を聞いていた。

自分が未熟で、覚悟も決められていなかったから、翼は絶唱を使つたのだと、全てを自分の責任に考えている響を見かねた緒川が声をかけたのだ。

「……………ご存じとは思いますが、以前の翼さんはアーティストユニットを組んでいました」

「ツヴァイウイング、ですよね」

「その時の翼さんのパートナーが天羽奏さん。今は貴女の胸に残る、ガングニールのシンフォギア装者でした」

そこで緒川は、翼の元パートナーだった奏の過去を語った。

ノイズに襲撃された聖遺物発掘チームの唯一の生き残りだった彼女は、家族の命を奪ったノイズへの復讐心に取り憑かれていた。だが、当時は克己達がいなかったためにノイズへの対抗策がシンフォギアしかなく、奏はそれを纏うに値する適合係数を持っていなかった。しかし、諦めきれない奏は二課の協力を受けて過度の訓練と過剰な薬物投与の末に、文字通り血に塗れながらも、遂にガングニールを起動。晴れてシンフォギア装者となって翼と共にノイズ退治を始めた。

最初こそは怒りのままにノイズを退治し続けていたが、ある日瓦礫から救い出した自衛官の男から、『自分達の歌は誰かを救う事が出来る』事を知り、それからの奏は己の歌を『護る為の歌』とし、ノイズを殲滅する為ではなく、誰かを救う為に歌い続けた。

その過程で生まれたのが、翼とのアーティストユニット、ツヴァイウイングである。

「二年前のあの日、奏さんはノイズに襲撃されたライブの被害を最小限に抑える為に、絶唱を解き放ったんです」

「絶唱……………あの女の子も言っていた……………」

先程戦ったネフシユタンの鎧を纏った少女の言葉を思い出す。あの時、翼がこの世のものとは思えない程の美しい声で紡いだ歌は、その『絶唱』というものなのか。

「絶唱は装者への負荷を厭わず、シンフォギアの力を限界以上に解き放つ術です。ノイズの大群を一気に殲滅せしめました。同時に奏さんの命も燃やし尽くしました……………」

適合係数によってバックファイアの威力が変わる絶唱は、元からシンフォギアを纏えた翼でさえあの有様になったのに、元々適合係数が低かった奏が使ったとなると、その威力は翼のそれを軽く凌駕する。結果、奏の肉体は絶唱のバックファイアに耐え切れず、その体は塵となって消えていったのだ。

（奏さんには、そこまでの覚悟があっただんだ……………。生き残った人達を救う為に、自分の命すら顧みないで……………）

「……………奏さんがいなくなり、一人になった翼さんはその穴を埋めるべく、自分を殺し、一振りの剣として生きてきました。そして今日、翼さんはその使命を全うすべく、死ぬ事すら覚悟して、絶唱を歌いました……………」

そこで響は、絶唱を歌う前に彼女が自分に言った言葉を思い出した。

戦場は生半可な覚悟で来ていい場所などではなく、本当に死んでも構わないと決意した者だけが立てる場所であると、翼は自分に叫んだのだ。

「不器用ですよ。同じ世代の女の子が知ってしかるべき恋愛も遊びも覚えず、ただ剣として戦ってきたんです。でもそれが、風鳴翼の生き方なんです」

「でも……………、そんなの、酷すぎます」

人としての生き方ではなく、ただ国を護り、ノイズを屠る剣として生きる道を選んだ翼の人生を、響はそう評価した。だが、それ以上に酷いのは、そんな彼女の事も考えずに、奏の代わりになろうとした自分だ。

「私は翼さんの事をなにも知らないで、『一緒に戦いたい』なんて、『奏さんの代わりになる』だなんて……………」

「僕も、貴女に奏さんの代わりになってほしいなんて思っていない。誰もそんな事は望んでいません」

「そうよ。誰かの代わりになる事なんて、できはしないわ」

「誰かの代わりになろうとしても、なりきれない。それが人間なのよ。あの時、響ちゃんが言った事は、彼女を救わず、余計苦しめてしまったわ。でもね、誰かの助けになろうとする心意気は素敵なものよ。その心を忘れては駄目」

レイカと京水の言葉に頷いていると、「皆さん」と緒川が口を開く。

「僕からのお願い、聞いてもらえますか？」

「え……………」

「翼さんの事を、嫌いにならないでください。翼さんを、世界に一人ぼっちになんてさせないでください」

それは、長年二課のエージェントとして、翼のマネージャーとして彼女と過ごしてきた者の願い。孤独に生き、戦い抜いてきた翼には、彼女を支える仲間が必要だ。本当に独りになった瞬間、風鳴翼という

少女は壊れてしまうだろう。

「はい……………」

「当たり前よ。仲間を独りにするなんてナンセンスよ」

「その通りね。翼ちゃんを独りになんてさせないわ」

その願いに響達が頷くと、京水が頭上の天井を見上げる。

「それに、ワタシ達以上に翼を支えようとしている人もいるしね」

——京水が見上げた先にある病室では、全身を包帯に巻かれて眠っている翼と、それを前に拳を握り締めている克己の姿があった。

(また……………また俺は、喪うのか……………?)

絶唱がどういったものであるかを知っていたにも関わらず、それを歌おうとした翼を止める事が出来なかった事を、克己は強く悔やんでいた。

幸い、医師は命に別状はないと言っていたが、それでも克己は安心できない。状態が悪化する可能性だって無いわけではないのだ。

「死神なんかには、誰かを救う事は過ぎた事だというのか……………ッ！
クソッ！」

太もみに拳を叩き付け、顔を両手で覆っていると、背後から「克己君」と声をかけられた。

「ボス……………」

「随分と自分を責めているようだな。そこまで、翼を止められなかつ

た事が悔しいか？」

よっこいせ、と椅子に腰を下ろした弦十郎に頷く克己。

「まあ、その通りだ」

「……………」

「叔父のお前なら知ってると思うが、本当のこいつは可愛らしい女の子だな。泣く時には泣くし、怒る時には怒る。それはいつもの翼でも見れるものだが、殻の無い、ありのままの彼女のそんな顔を見た時、『ああ、こいつも『人間』なんだな』って思ったよ」

『剣』ではなく、『少女』としての翼か。奏君がいなくなってから俺もしばらく見ていかなかったな。俺は、俺でさえ見る事が出来なかった本当の翼を、ごく短期間で見る事が出来た君が羨ましい」

「そう言われると、少し嬉しいな。俺のような奴でも、こういう事が出来るんだって思える」

「……………君はよく自分を謙遜するな。なにかあったのか？」

「知りたいか？」

「君の判断に任せよう。嫌なら無理しないでいい」

「……………」

少し考えた後、克己はゆっくりと口を開いた。

「……………昔、ある少女を救おうとした時があつたんだ。当時の俺はレイカ達だけを仲間だと認識していたが、そんな俺に『こいつだけでも救う』と思わせた女が、そいつだった」

「だけど、自分はその子を救えなかったと、克己は彼女を抱き留めた両手を見下ろす。

「目の前でだ。彼女の仲間達もみんな殺された。犯人は始末したが、それでも俺の心は晴れなかった……………いや、晴れる云々の話じゃな

いな。あの日、あの時、俺の心は死んだんだから」
「……………」

「不思議だな。長年恐怖を感じなかったのに、今では痛い程わかる。俺は今、恐怖している。翼を喪う事を、俺は怖れている」

震える両手を組む。

ああ、そうだ。俺は怖れているんだ。翼を喪う事を。救おうとした少女を、再び喪ってしまう事を。

「翼に覚悟があつたのは理解している。こいつは一度戦場に立てば、必ず『剣』として戦うって事も。はは、本当、俺は醜いな。翼の事を心配しているつもりが、自分の心がまた死ぬ事を恐れているなんて」「我が身の可愛さを優先するのは人として当然の事だ。真に自分より他人を優先できる人間なんて、そう多くないだろうな」

「責めないのか？ 姪よりも、自分の心配をしている俺に」

「『当然の事だ』と言っただろ？ 責めるつもりはないさ。それに、君には感謝してるんだ」

「感謝？」

聞き返してきた克己に頷いた弦十郎は、眠り続けている翼を見る。

「君が来てからというものの、翼の雰囲気が変わってな。張り詰めているには張り詰めているんだが、君が来る前より、少し和らいでるんだ。周りから見れば微かな変化でも、俺にとっては本当に嬉しかった。彼女を変えるのは叔父の俺の役目だと思っていたが、どうやらそれは思い上がりだったみたいだな」

「ボスも思い上がるのか」

「当たり前だろ？ 俺とて人の子だ。何度だって間違え、何度だって悩むとも。全く、誰が『生きとし生ける者の中で最強の男』だ。俺はそこまで完璧じゃないし、俺より強い人間だって探せばいくらでもいるだろうに！」

「生身で装者の攻撃を粉碎してのけた男より強い奴がいたらそれこそ問題だろ。仮にそいつが敵にでもなったりしたら、俺達に勝ち目は無いかもしれん」

「言ってくれるなあ、人を怪物みたいに」

軽く克己の背中を叩いて小さく笑う弦十郎だったが、次の瞬間には表情を変え、真正面から克己を見つめてくる。

「克己君。折り入って頼みがある。聞いてくれるか？」

「なんだ？」

自分を見る克己に、弦十郎は深く頭を下げた。

「翼を護ってくれ。俺達はサポートは出来ても、ノイズと戦う力は無い。故に、現場で頼りになるのは翼と一緒に戦う君達だけだ。その中でも克己君。俺は、君に翼を頼みたい。君のエターナルの力は、必ず翼を護ってくれると信じている。この通りだ」

「……………わかった。翼は、俺が護る。だから、安心して俺達のサポートをしてくれ、ボス」

「……………ありがとう、克己君」

顔を上げた弦十郎に頷いた克己は、懐からエターナルメモリを取り出す。

「エターナル。翼を、護ってくれるか？」

試作品の段階から運命によって引き合わされたエターナルメモリが、己の適合者の問いかけに答えるようにほんのりと温かくなるのを感じると、克己はそれを翼の手に握らせた。

「流石に俺は夢の中までは行けないからな。お前が護ってくれ、エ

ターナル」

「このメモリから、なにか聞こえたりしているのか？」

「なにも聞こえないさ。でも、なんとなくわかるんだよ。このメモリがなにをしたいのかをな」

「つくづく不思議だな、ガイアメモリというのは」

弦十郎は翼の手に握られたエターナルメモリを見つめる。

「そういえば、君達を襲ったネフシユタンの鎧の反応が計測された瞬間、その背後にレイカ君達と同じ反応が二つあったのだが、まさか……………」

「ああ、俺の部下だ。理由は不明だが、どうやら二人はあの少女と協力関係にあるらしい。ボス達が検出したとされるエネルギーは、二人がドーパント化した際に放出されたものだろう」

「ドーパント……………？　それが、レイカ君達に変身した存在の名なのか？」

「ん？　ああ、そういえば、ガイアメモリについては説明したが、まだドーパントの説明をしていなかったな。すまない。二人が自己紹介した時に済ませておくべきだったな」

「いや、こちらも聞くタイミングを逃したのが悪かった。二課に戻り次第、教えてくれるか？」

「もちろん」

立ち上がった克己と弦十郎が病室を後にし、二課本部へと向かう。

「話が変わるが、ボス。響の事なんだが」

「なんだ？」

「授業や戦いを通してわかったんだが、あいつが武器を持って戦うのは無理だ。素手での戦い方が似合う。ボスは出来るよな、徒手空拳」

「ああ、ジャンルは様々だが、一通り覚えているぞ」

「だったら、響に教えてくれるか？　出来る事なら俺達が教えたいと

ころだが、俺達のそれは人を殺す為のものだ。人を護る戦い方なら、ボスの方がよく知っているとと思う。頼まれてくれるか？」
「もちろんだとも。俺に任せてくれ」
「ありがとう、ボス」

——ここは、どこだ……………？

水中にいるかのような浮遊感を全身に感じながら、翼は辺りを見渡す。

初めて出てきた言葉は、『真っ暗』だ。その言葉が指す通り、周囲にはなにもなく、ただ暗黒の世界が広がっている。

——私は、死んだのか？

記憶は、克己に抱えられて、心配そうに自分を見つめてくる彼らになにかを言ったところで途切れている。限界を超えた形容し難い激痛に意識を持つていかれて、気が付けばこの場所にいたが、ここが俗に言う、あの世というやつなのだろうか。

——だったら、もういいのかな……………。このまま、逝つたとしても……………。

最後は自分の我が儘みたいなものだったが、自分は防人としての務めを果たせたのだろう。務めを果たせたのなら、もう現世うつしよに留まる意味も無い。

——本当にいいのか？

一瞬、そう考えた自分に問いかける。本当に自分はこれで満足なのか。本当に現世に未練は無いのか。本当に、あちらへ行ってもいいの

か。

……まだ、まだやりたい事がある……。それは

それは、歌を歌う事。不器用な父親が愛してくれた歌で、みんなを護りたい。みんなを笑顔にしたい。それが、私が求めた……。

瞬間、足をなにかに引っ張られる。

足に違和感を感じて視線を動かしてみれば、そこには一本の青白い手が、自分の足を掴んでいるのが見えた。

振り解こうとしても、その手は一向に自分の足を放す気配は見せず、さらに恐ろしい事に、それが伸びてきている深淵から、次から次へと新たな手が伸びてきて、翼を深淵に引きずり込もうとしてくる。引きずり込まれてしまえば、もう二度と戻ってこられない予感がし、必死に上へ登っていかうとするも、周囲の空間を搔く腕も掴まれてしまう。

嫌だ。死にたくない。まだ、まだ生きたいッ！ 誰か、誰か助けて……。ッ！！

遂に顔面さえも無数の手によって覆われかけた途端、

「任せろッ!!」

聞き覚えのある声と共に、なにかが切り裂かれるような音が聞こえた。全身から気味の悪い手に掴まれている感覚が消え失せると、再び翼を深淵に引きずり込もうと無数の手が伸びてくるが、今度はそれを緑色の風が吹き飛ばした。

「大丈夫か、翼？」

自分の前にやって来て、武装を解除した少女は、翼の記憶の通りの笑顔を浮かべてる。その少女を、翼は知っている。いや、知っているどころではない。

だって彼女は、彼女の名は……………

「奏……………ッ！ 奏えッ!!」

「うおっとッ！」

抱きつかれた奏が、自分の胸に顔を預けて大泣きしている翼をよしよしと撫でていると、今度は聞き慣れない声がそれを諫めた。

「イチヤつくのはそれぐらいにしておきなさい。時間が無いんだから」

「む、少しは翼との再会を楽しませてくれよ」

頬を膨らませて抗議する声を聞いて翼が奏の視線を追うと、そこには白衣に身を包んだ、見覚えの無い女性がいた。

「貴女は……………？」

「初めまして、風鳴翼。私は……………」

胸元に手を当て、女性は己の名を告げる。

「大道マリア。大道克己の母親よ」

——二課本部にて、克己が弦十郎達にドーパントについての説明を終えると、弦十郎は険しい表情で目の前の机に置かれたガイアメモリを見下ろす。

「適合者の体内に侵入し、メモリに封じられた事象の力を解放させる

事によって誕生する怪人がドーパントか……。レイカ君達の場合は、レイカ君が『熱』、京水君が『幻想』の力を宿したからああした姿になったのか。となると、ネフシユタンの鎧の少女が連れていた二人組は……………」

「賢の場合は『引き金』の記憶を解放してトリガードーパントに、剛三の場合は『鬪志』の記憶を解放してメタルドーパントよ。適合者なだけあって、その力は私達と互角かそれ以上。戦い方次第では、私のように克己にも勝てるかもしれないわね」

「仮面ライダーすら倒すなんて……………。どれだけ強力なのよ、ドーパントってというのは……………。そんなのが街中に現れでもしたら……………」

ノイズと外国からのハッキング以外にも対処すべき問題が増える事に子頭を抱える。ガイアメモリの搜索は彼女を筆頭にしたチームによって行われているが、レイカ達が二課に所属する日から音沙汰が無くなっていった。既に適合者と出会ってしまったという可能性もあるが、その場合はドーパント化する事で街になんらかの被害が出ているはずだ。となると、適合者ではない誰かがメモリを回収しているという可能性が出てくる。

「賢ちゃん達が集めてるって可能性とかありそうじゃない？ あの子達、響ちゃんとワタシ達のメモリを狙ってたわよね？」

「響とガイアメモリに、なにか関係があるって事？ でも、特にそういった関係……………は……………」

「……………？ レイカちゃん？」

「……………ねえ、おかしくない？ 私のヒートも、あんたのルナも、どっちとも最初に見つけたのは私達じゃないわ。最初に見つけたのは……………」

「え？ ま、まさか……………」

「え？ え？」

レイカと京水の視線が響に向けられる。

「ねえ、響。初めて貴女がこの二本を手にした時、なにか感じたりしなかった？」

「え？ と、特になにも……。でも、なんかあるなって、直感的にわかったんです。ノイズがすぐそこまで来てたから逃げなきゃって思ってたのに、取らないといけなくて気持ちになって……」

「どういう事だ？ まさか、響君が君達よりも先にメモリを見つけたのか？」

「その通りよ。だけど、響が適合者ならこのメモリの内片方が必ず彼女をドーパント化させたはずよ。でも、ヒートもルナも、響じゃなくて私達をドーパント化させた。いったいどういう事なの……？」

「この街に来た事で、メモリになんらかの変化が起きたという事か……？」

克己が思考を巡らせるも、やはりその原因はわからない。自分が言った通り、この街に来た事でメモリの性質が変化したのか。それともなにか、別の原因があるのか。

「だが、メモリの性質が変化したからといって油断はできない。出来る限り迅速にメモリを回収しておくべきだろう。メモリの力を聞く限り、たとえ出現したドーパントが一体だとしても、引き起こされる被害はノイズのそれよりも大きなものであると予想されるからな」

「でもよかった。響ちゃんがドーパント化しなくて……」

ごく普通の人間がガイアメモリを挿した場合、その力の強大さ故に暴走したり、依存症になったりしてしまう。簡単に言えば麻薬中毒者のようになってしまうのだ。

もしも自分達のメモリの内一本が響をドーパント化させていたとしたら、考えるだけでも恐ろしい。

「だが、響君がメモリをレイカ君達よりも先にメモリを入手したのも事実だ。もしもの可能性として、メモリが響君をドーパント化させるかもしれない。響君の精神力を鍛える特訓メニューを考えておくべきだな」

「は、はいッ!」

「それじゃ、今日はもうお開きにしましょうね。もう夜も遅いし」

「うむ。課題は増えたが、我々の成すべき事は変わらない。各自、ゆっくり休んでくれ」

こうしてミーティングは終了し、波乱の一日は幕を下ろしたのだった。

——翌日。《私立リディアン音楽院》にて、響は芝生に腰を下ろして物思いに耽っていた。

(私が強くなるには、どうすればいいんだろう?)

昨日の戦いで、自分はノイズの相手で精一杯だったのに、克己達はノイズの何倍も強力な者達を相手取っていた。特に翼は、自分の使命を果たさんと、己が命すらも顧みずに絶唱を解き放った程だ。

世間には、風鳴翼が過労で倒れたと公表されている。二課と日本政府の情報操作の賜物だ。

だが、翼は目を覚ませば再び戦地へ赴くだろう。なら、それまでの間に自分は強くなっておくべきだ。翼達の足を引っ張らないような程の力を手に入れ、戦場に立つに相応しい覚悟を決めておく必要がある。

「響?」

名前を呼ばれて顔を上げると、親友の未来が立っていた。

「どうしたの？ 最近一人でいる事が多いけど……………」

「そ、そうかな？ そうでもないよ？ 私、一人じやなんにも出来ないし、この学校だって未来が進学するから……………」

「……………響、無理してるんじゃないの？」

笑って誤魔化そうとしても未来には筒抜けだったらしく、やるだけ無駄だと感じた響は膝を抱える。

「……………やっぱり、未来にはわかっちゃうよね。でもごめん……………、もう少し一人で考えさせて」

「……………あのね、響。どんなに悩んで考えて、出した答えで一步前進したとしても、響は響のまままでいてね」

「私のまま……………？」

それはきつと、何気ない一言だったのだろう。未来本人でさえ、特に深い意味もないまま口にした言葉だったのだろう。

「変わってしまうんじゃない、響のまま成長するんだったら、私も応援する。だって、響の代わりはどこにもいないんだもの」

「未来……………」

彼女にとっては何気ない言葉だったとしても、その言葉は響の心に強く響いた。

「……………ありがとう、未来。私は、私のまま歩いていけそうな気がする」

立ち上がり、未来に微笑む。

そうだ。無理に変わる必要なんてない。ただ自分の思う、自分にとって正しいと思える道を進んで、成長すべきなのだ。

(私は、私のまま強くなりたい。ううん、強くなるんだ……………ッ！)

暗く澱んでいた気分が晴れやかになっていくのを実感していると、未来が少し申し訳なさそうに声をかけてきた。

「あのね、響。一つだけ、謝らせて」

そう言つて未来が取り出したスマホには、流れ星が煌めいている夜空の動画が流れていた。

「これ、流れ星の動画。この前一緒に見られなかったから、撮つてたんだ。すぐに言えなくて、隠し事みたいになつちやつて……………」

「そ、そんなッ！ 約束を守れなかった私が悪いんだし、未来が謝る事なんて無いよッ！」

「ううん、私、響には隠し事とかしたくなかつたから……………。ちよつと心苦しかったの」

「隠し事……………」

「私、響には二度と隠し事とかしたくないな」

「私だつて、未来に隠し事なんてしない、よ……………」

ついそう返してしまつたが、響は未来に隠し事をしていた。それは当然、シンフォギアの事である。しかし、それを喋ってしまったら、目の前の親友に危険が及ぶかもしれない。出来る事なら今すぐにでも話してしまいたかつたが、それを状況が許してくれない事に、響の気持ちは微かに暗くなってしまう。

「うん、ありがとう、響」

朗らかに笑つて、未来が去っていく。その笑顔は響にとって、余計な罪悪感を募らせるものでしかない。だが、それは逆に、響に『未来を護りたい』と強く思わせるものでもあつた。

あの笑顔を、失うわけにはいかない。護るんだ、必ず。

(その為には……………ッ！)

そして学校が終わり、休日になった頃。

「師匠、指導お願いしますッ!!」

響は弦十郎の家に足を運んだのだった。

それぞれのすべき事

郊外の屋敷にて、少女の絶叫が響き渡る。

「まったく……………貴女に期待した私が馬鹿だったのかしら？ 百歩譲ってもメモリの回収を失敗したのは許してあげるけど、まさか『融合症例』の回収も失敗するなんて」

「あ……………う……………ッ！」

装置に拘束されて項垂れている銀髪の少女を冷ややかに見つめるのは金髪の女性。一糸纏わぬ裸体でいるのに、それを全く恥に思っていないように振る舞う彼女は、項垂れた少女の顔を掴んで自分と視線を合わせる。

「ネフシユタンの鎧を使っておきながら、なんの成果も無しに帰ってくるなんて、流石にこの私も驚いたわよ。どうして手ぶらで帰ってこれたのか教えてくれる？ クリス」

「……………あたしが、相手を舐めていたからだ……………」

掠れた声で、昨夜克己達の前に現れた、ネフシユタンの鎧を纏っていた少女——雪音クリスは昨日の出来事を思い返す。

自分が相手にした風鳴翼の纏うシンフォギア、天羽々斬と、自分が纏うネフシユタンの鎧のスペックはこちらの方が上だった。だが、相手は自分の命を顧みる事なく、装者にとつての禁断の攻撃手段である絶唱を解き放ち、自分達を撤退するまでに至らせた。

絶唱の絶大な威力に傷ついた彼女の体を、驚異的な再生能力を備えたネフシユタンの鎧が浸食しようとしてきたため、すぐに鎧を脱ぐ羽目になったが、それさえなければ、自分達の任務は果たせていたはずだ。

「その舐めた結果がこれよ。次は徹底的に役目をこなしなさい」

「……………なあ、フィーネ」

クリスの目が、金髪の女性——フィーネに向けられる。

「これで……………いいんだよな……………？ お前に従ってれば、あたしはあたしの目的を果たせるんだよな……………？？」

「……………ええ、その通りよ。貴女が私の言う通り動いてくれれば、貴女の目的も自ずと完遂されるわ。だから、貴女は黙って私の言う事を聞いていればいいのよ」

「が……………あああああああッ!!」

レバーを下ろした事で発生した電流がクリスの体内で暴れ回る。

「覚えておきなさい、クリス。人を繋ぐのは『痛み』よ。絆なんかで人は繋がれない。そんなもので出来た繋がりは容易く切れてしまう」

「ぐ……………うう……………ッ！」

「さて……………」

フィーネの視線がクリスから、離れた場所で彼女達の会話を聞いていた二人組に声をかける。

「貴方達もこの子と同じ罰を受けてもらおうかしら？ 昨日の失態は

この子だけのものじゃないし」

「ケッ！ 相変わらず胸糞悪い女だぜ。お前もそう思うだろ、賢？

……………賢？」

「……………フィーネ」

剛三の言葉を見殺した賢がフィーネに詰め寄る。扇情的かつグラマラスな肉体を持つ彼女に決して情欲を抱く事なく詰め寄ってきた彼を、フィーネは臆する事無く見上げる。

フィーネの視線の先にあった賢の表情は、燃え盛る憤怒に彩られて

いた。

「今すぐクリスを解放しろ。あんなのは見ていられない」

「あら？ あれは私と彼女なりのスキンシップよ。ぽっと出の貴方に指図される筋合いは無いわ」

「ふざけるな……………ッ！ クリスはまだ子どもだぞッ！ それなのにあんな……………ッ！」

項垂れる少女の姿が見るに堪えず、固く握り締めた拳から血が垂れてきている事にすら気付かないまま賢はクリスの元へ向かい、彼女を拘束している枷を外す。

「賢……………」

電流で痺れた体では立てず、生まれたての小鹿のように崩れ落ちるクリスを支えて立たせる仲間を剛三が見つめっていると、フィーネが溜息を吐いた。

「シラケるわね。……………いいわ、今日はもう食事にしましょう」

「……………」

「賢……………」

既に料理が並べられたテーブルに向かっていくフィーネの背中を睨む賢の手の力が微かに強まるのを感じ、クリスは自然と彼の手に自分の手を重ねていた。

「……………大道の……………母親……………？」

翼が自分の目の前に浮かぶ女性……………大道マリアを見つめると、彼女は目を伏せて首を振った。

「母親……………って言いはしたけど、実を言うと、私は母親失格なのよ。息子に対して、倫理に反する事をしてしまったわ」

「大道を……………NEVERに変えた事ですか？」

「知ってるのね。自分の秘密を明かす程、克己は貴女を信用してるのかしら？」

「信用、ではありませんね。大道が私に自身の過去を語ったのは、私が間違った道を歩もうとしたからです」

「間違った道？」

首を傾げた奏とマリアに、翼はなぜ克己が自分に己の秘密を明かしたのかを説明した。

「……………私がいなくなっただけから、無理させちゃったみたいだな……………ごめん、翼……………」

説明を受けて申し訳ない気分になった奏が頭を下げると、翼は慌てて彼女の頭を上げさせる。

「奏は悪くなんかないよ。全ては私の責任なんだから……………」

「克己は、貴女に自分達と同じ道を歩んでほしくなかったのね。私の知っている克己はもう心が死んでいただけ、貴女達と同じ時間を過ごした事で、克己の心にも変化が起こったのかしら」

「大道のおかげで、私は忘れてはいけない記憶を思い出す事が出来た。彼には、本当に感謝している」

翼の口から克己への感謝の言葉が出てきた事にマリアは驚き、そして喜びに目元を拭った。

「ああ……………克己が、誰かに感謝されるなんて……………」

「おいおい、泣くなよマリアさん。さ、さっさと渡すもん渡しちやおう

ぜ」

「ええ、そうね……………」

「渡すもの……………」

首を傾げた翼に、マリアは白衣のポケットから二本のメモリを取り出す。

一本は『C』と書かれたメモリに、なにも書かれていない真っ白なメモリ。それらを受け取った翼に、マリアは言う。

「それらは、貴女の新たな力。貴女の背を後押ししようとする、地球の意思。行きなさい、風鳴翼。貴女はまだ、こっちに来ていい人間じゃない」

その言葉と共に、翼の体が引き寄せられるように上昇していく。上昇するにつれて徐々に姿が小さくなっていく二人に手を伸ばす。

「奏ッ！」

翼の叫びに顔を上げた奏は、翼が彼女の生前によく見た、太陽のような笑顔を浮かべていた。

「翼、無理に気を張りすぎるなよ。いつも思ってたけど、お前は少し押しただけで折れちまいそうだからな。少しは柔らかくなるのもいいんじゃないか？」

別れを哀しむように顔を伏せるが、それも一瞬の事ですぐに顔を上げる。

「私はもう無理だけど、翼はまだ、みんなに歌を歌う事が出来る。戦う事ばかり優先していた剣は、もう終わりにしようぜ？」

手を伸ばし続ける翼に、奏は大きく手を振る。

「笑えよ、翼。そっちにはお前のファンが、お前の歌を待っているはずだろ？ みんなの前で泣き顔を晒すのか？」

翼から見て徐々に小さくなっていく奏は、彼女に絶えず言葉を送り続ける。

「歌うんだ。翼。『戦い』の為じゃなく、『笑顔』の為の歌を。それこそが、風鳴翼が本当に歌うべき歌だ」

最後に奏は、翼に向けた握り拳を、自分の胸に押し当てる。

「自分に正直になれ、翼。そして、いつか聴かせてくれよ。正直になった、？ 偽りの無い、ありのままのお前の歌を。……………頑張れ、翼ッ！ 私はいつも、お前の心の中にいるからなッ！」

その言葉を最後に、翼の視界は真っ白な光に包まれ――

「……………ッ!!」

翼は、病室で目を覚ました。

(今のは、夢……………？ それとも……………？)

先程まで自分が見ていたものがなんだったのかを考えていると、両手にそれぞれなにかが握られている感覚を覚える。痛む体を起こして見てみると、そこには克己が使っているエターナルメモリと、彼の母親から受け取った二本のメモリが握られていた。

——翼が目覚めた頃、二課のシミュレーションルームでは響が修行に励んでいた。

数日前に弦十郎に弟子入りした響は、弦十郎と共に様々な映画を鑑賞し、その都度その映画の出演者達の戦い方を参考に弦十郎の監督の下、己を鍛錬し続けてきた。

そして今日、対人戦のスペシャリストである克己達を呼んで模擬戦を行う事になり、今は京水と模擬戦をしていた。

「このッ！」

「く〜ね〜くね〜くね〜♪ く〜ねくね〜くねくね〜♪ 効かないわよッ！ ぬ〜るぬる〜ぬるぬる〜♪ 来なさいー！」

何度も突き出される拳を言葉以上に体をくねくね動かして躲していく京水のカウンターの衝撃を利用して彼から距離を取った響が構えを取る。

「師匠ッ！ この人海藻みたいにぬるぬる動いてきも……………攻撃が当たりませんッ！」

いくら攻撃を繰り返しても当たらない事に苛立ちを感じつつ弦十郎に叫ぶと、京水が彼女の言葉に聞き捨てられない単語が紛れていたのに気付いて叫ぶ。

「貴女今なんて言おうとした？ 『気持ち悪い』って言おうとしたわねッ!? でも途中で言い換えてくれたから許してあげるわッ！」

「手当たり次第に攻撃しても躲されるだけだ。だが、いくらぬるぬる動くといっても、全ての攻撃を回避出来るというわけではない。稲妻を喰らい、雷を握り潰すように打つべしッ！」

「最後の言葉の意味がわかりませんッ！ でも、やってみますッ！」

拳を握り直した響がパンチやキックで上手く京水の体を誘導して

彼に一発でも攻撃を命中させようとするが、彼女の行動を数手先まで読んでいる京水には全く通用せず、遂に京水が攻勢に出た。

「甘いわよッ!!」

紙一重で響の攻撃を回避した京水に鳩尾を殴られた響が殴り飛ばされる。

「あッ! やっちゃったッ! 響ちゃん、大丈夫ツ!？」

「だ、大丈夫……………です……………。それと、参りました……………」

模擬戦であるため手加減をされているとはいえ、殴り飛ばしてしまった事に罪悪感を感じた京水に笑って返す響に改めて彼女が大丈夫かを確認してから京水は彼女に手を差し伸べた。

「ワタシに勝とうなんて百年早いわよ。でも、ボスのアドバイスを受けてからの戦い方は凄かったわ。これまでやった事無かっただろうに、すぐにそれを物にし始めた。貴女、戦闘センスずば抜けているわね」

「あ、ありがとうございます……………」

京水の手を借りて立ち上がった響が軽く体を動かし、それほど動きに支障が無い事を確認していると、レイカが彼女の体を突き始める。

「貴女、子どもなのに凄い頑丈なのね。手加減しているとはいえ、京水の一撃を喰らってもピンピンしてるなんて」

「攻撃を受ける瞬間に体を後ろに逸らしたんです。直撃は避けられなくても、それで少しはダメージを軽減できるので」

「あの一瞬でか? 凄まじい反射神経だ。いったいどうやってこの短期間に?」

「師匠が見せてくれた映画で学びました!」

「映画……………本当に観るだけで強くなるの……………う？」

「興味あるか、レイカ君。だったら今すぐ……………」

「遠慮しておくわ。私はこのままでいいし」

キラキラと目を輝かせ始めた弦十郎の誘いをレイカが断ると、弦十郎は少し残念そうに肩を竦めたが、すぐにある考えを思いつく。

「克己君、京水君、レイカ君。良ければ俺と戦ってくれないか？」

「俺達に？ 響の相手をするならわかるが、なぜボスの相手を？」

「さっきの模擬戦では京水君が手加減していたが、実戦で相手に手加減される事はまず無い。俺が相手なら君達も本気で来れるだろうと思っただけ。響君も軽く殺気を感じ取れるようになってる事だから、本気の殺気の籠った攻撃を俺に浴びせてくれ。一応言っておくが、変身は無しだ」

「あら、それは少し意外ね。ボスなら変身した私達も軽くないなせるんじゃないの？」

「それは買い被り過ぎだ。俺とてまだ死にたくはないからな」

「またまたご謙遜を。じゃあ、始めましょうか」

部屋の端に向かう響と入れ替わりに歩いてきた弦十郎の前に、克己達三人が揃う。

「よく見ておきたまえ、響君。今から彼らが、本当の『殺気の籠った攻撃』を見せてくれるぞ」

「は、はいッ！」

構えを取る弦十郎に対し、克己達も構えを取る。

「胸を借りるぞ、ボス」

「弦十郎ちゃんの力、ワタシ達に見せてもらおうよッ！」

「手加減無しで、殺す気で行くわ」

「ああ、かかってこいッ!!」

三方向に分かれた三人に、弦十郎は拳を握った。

——数時間後、司令室には頭を抱えている三人の姿があった。

「ねじ伏せられた、わね……………」

「前から強いとは思ってたけど、あんなの『強すぎる』なんて言葉で言い表せないわよ……………」

「流石だな、ボス……………」

「なに、君達も凄かったぞ。響君も、その後の戦い方は実によかったぞ」

弦十郎があおいから受け取ったスポーツドリンクを飲んでいた響に視線を向けると、響は少し疲れた顔で苦笑した。

「私なんてまだまだですよ。克己先生達の殺気に体が竦んじやいましたもん。でも、めげませんッ！ 絶対に克服してみせますッ！」

「頼んだぞ、未来のチャンピオンッ！」

「はいッ！」

弦十郎に励まされた響が拳を握って頷く様子に、京水は少し目を伏せる。

「それにしても、哀しいわね。こんな子どもがノイズと戦わなきゃならないなんて。出来る事ならワタシ達大人が対処すべきなのに……………」

「確かにその通りだが、そうは問屋が卸さないのが世の常だ。外国に協力を要請しようにも、相手が対価としてシンフォギアについての情報を提示しろだの、日本政府が研究している聖遺物のデータ、または

そのものを渡せだのを要求してきそうだ。現にアメリカはハツキングを仕掛けてきている。是が非でもシンフォギア、聖遺物についての情報を手に入れたいんだろうな」

ノイズの脅威が無ければ、響も普通に勉強したり友達との楽しい時間を過ごしていたはずだ。だが、現段階でメモリの力を自在に操れる自分達以外にノイズに真っ向から対抗できる武器がシンフォギアしか無い以上、それを纏う事が出来る翼や響にはどうしてもノイズと戦ってもらわなければならぬ。この戦いに参加するか否かの判断は当人達に委ね、彼女達はノイズと戦う道を選んだが、京水はそんな彼女達を憂いていたのだ。

「子どもは自由に遊んで、笑って、泣いて、成長していくべきなのよ。それをこんな、一歩間違えれば死んでしまう戦いに投じなきゃいけないなんてね……………」

「それは傲慢つてもものよ、京水。これは響が決めた事。私達がとやかく言う事は出来ないわ」

「ええ、そうよね……………」

そんな彼らの会話を聞いていた響はスポーツドリンクの入ったペットボトルの蓋を閉めて彼らの前に立つ。

「あの、ありがとうございます。私達の事、心配してくれて」

「いいのよ。レイカも言ったけど、これは貴女達が決めた事。ワタシの言った事はただの傲慢から来るもの。ごめんなさいね、貴女達は覚悟を固めて戦うって決めたのに」

「いえ。私は護りたいだけなんです。この何気ない日常を。みんなが笑って暮らせる、当たり前だけど、とても大切な日々を……………」

「……………ホント、貴女ってば男前ね。いいわ、そこまで言うんだもの。ワタシは絶対に貴女達を護るわ。克己ちゃんとレイカもそうだしよっ。」

頷いた二人に「ありがとうございます」と響が頭を下げると、この場にいるであろう人物がいない事に気付く。

「あれ？　そういえば、了子さんは？」

「了子なら政府のお偉いさんに呼び出されてな。本部の安全性、および防衛システムについての説明義務を果たしに行っている。もうすぐ戻る頃だと思っただが……………」

「し、司令ツ！　緊急通信ですツ！」

弦十郎の言葉を遮って報告された内容。それは、了子が会う予定だった人物、広木防衛大臣が殺害されたというものだった。

「……………た〜いへん長らくお待たせしました〜。なに？　そんなに寂しくさせちゃった？」

幸いにも、了子は通信機が壊れていたので通信を取れなかっただけだったらしく、大事には至らなかつた事に一同はホッと胸を撫で下ろしたが、事態が急変している事に間違いは無かつた。

《私立リディアン音楽院》、厳密にはその地下に存在する二課を中心にして頻発しているノイズ発生の事例から、日本政府はこれをアビスに保管されている完全聖遺物デュランダルが強奪目的の下に行われているものと決定。場所が割れてしまっているため、これ以上デュランダルはアビスに保管する事は出来ない。そこで政府は、二課にある命を下した。

「永田町最深部の特別電算室。通称『記憶の遺跡』。そこを新たな保管場所として、デュランダルをそこへ運搬する……………」というのが、今回我々に与えられた任務だ」

「場所がバレてるから仕方ないとは思うけど、それでもここ以上に安

全な場所なんて無いんじゃないかしら？」

異端にして先端技術の結晶体であるとも言える二課本部なら、たとえ襲撃されても迎撃は充分可能だと考えられるが、弦十郎はその考えを首を振って却下する。

「なにを言ったとしても、所詮俺達は木っ端役人。お上の意向には逆らえないさ……………」

「移送日時は明朝0500。詳細はこの機密資料に記載されています。みんな、開始までに目を通して置いてね〜」

「いいか、あまり時間は無いぞッ！各自持ち場へついて準備を進めるんだ」

「響ちゃん達は予定時刻まで休んでおいて。貴女達の仕事はそれからよ」

「わかりましたッ！」

「二課了解ッ！」

各自が果たすべき準備を進めていく間に、時間はあっという間に過ぎていった。

——そして、作戦実行当日。二課では最終ミーティングが行われていた。

今回の任務はデュランダルを強奪しようとしている相手を攪乱する為、デュランダルを乗せた護送車と、それを護る護衛車を四台用意し、記憶の遺跡に一直線に向かうというものだ。これには永田町へ向かう必要があるため橋を使うが、既に広木防衛大臣殺害班を検挙するという名目で検問を配備している。つまり、一般人に被害を及ぼす事無く運搬任務が行えるのだ。

これで、了子考案の運搬作戦、名付けて『天下の往来独り占め作戦』である。

「道中ノイズやネフシユタンの鎧の少女、そして二体のドーパントによる妨害が予想される。その際は君達を頼らせてもらおう」

常人では太刀打ち出来ない力を備えた相手には、こちらもそれと同じ相手に対抗すべし。響達には彼女達が出現した際の相手を務める事となっている。

「それと克己君。作戦実行に当たり、君にはこれを」

弦十郎の合図に従ってモニターに表示されたのは、白を基調とした車体に蒼炎のグラデーションが施されたバイク。ヘッドライトは仮面ライダーエターナルの複眼、その上部の装飾はEを横倒しにしたようなものになっている。

『マシンエターナル』。君の許可を得て了子君達が設計した、大道克己および仮面ライダーエターナル専用バイクだ。時速は600km。君のベルトを基にハンドル部分にはマキシマムスロットを取り付けており、これを使用してのマキシマムドライブの負荷はこのバイクが肩代わりしてくれる」

「前から依頼はしていたが、まさか、こんなに早く完成するとはな」

翼を初めて叱ったあの夜、二課に帰った頃に了子が『克己専用のバイクを作る』と言い出し、克己はそれを承諾したのだ。克己は彼女と初めて会った時から彼女に警戒心を抱いており、今バイクが完成したという話を聞いた時も、準備に時間の大半を費やす事になってしまう状況を狙ったのではないかという考えもある。

全てのメモリを支配する力を持つエターナルに変身していれば他メモリのマキシマムドライブを使用しても負荷はかからず、もしかかったとしても、そこはNEVERの肉体。死にそうなものだとしてみても、痛みには慣れている。むしろ、『自分は生きている』と錯覚出来る

嬉しいぐらいだ。

だが、この雰囲気の中で受け取り拒否なんて到底出来るものではなく、弦十郎も自分がバイクを使う事を視野に入れて配置を考えている事だろう。

相手の思惑に乗せられているという事には些か、いやかなり不快感を感じるが、状況が状況だけに、克己は全く悪感情を感じさせる事無く弦十郎からカギを受け取った。

ちなみにエターナルメモリについては既に緒川を介して翼から返してもらっている。その時、克己は緒川からエターナルメモリ以外にもT2サイクロンメモリとイニシャルがなにも書かれていないメモリを受け取ったが、自分が渡した覚えの無いメモリを翼が持っている事にはなにか意味があるはずだと考え、翼に返しておくようにと緒川に伝えている。

「配置についてだが、響君と京水君は了子君の運転する護送車に乗り、克己君とレイカ君は四台の護衛車と共に護送車の護衛だ。俺はヘリで上空から異変が無いかを確認する。他のメンバーはここで異常が無いかを探ってくれ」

司令室にいる者達からの了承の声に頷いた弦十郎は拳を高く突き上げる。

「さあ、ミッション開始だッ!!」

ここに、天下の往来独り占め作戦は決行されるのだった。

覚醒の刻

二課の本部を出発地点に任務を開始して橋に乗った頃も、響は辺りへの警戒を緩めずに視線を動かしていた。

(まだノイズは見当たらない。だけど、いつ出てきてもいいように準備してないと……………)

ノイズを始めとした、常人では相手が出来ない勢力に対抗できるのは自分達だけだ。そういった相手が現れた場合は迅速果断に対処せねばならないという強い意志を感じさせる目で周囲を見渡していると、後部座席に座っていた京水が口を開く。

「そんなに気を張らなくてもいいのよ？ なにも戦うのは貴女だけじゃないんだからね」

「は、はい」

「それにね、こういうのはワタシ達の方が経験あるわ。ワタシ達が赴く場所には、敵は必ず姿を隠しているものだったの。だからね、了子ちゃん」

「なにかしら？」

京水に名を呼ばれた了子がちらりとルームミラーで京水を見ると、京水はニコニコとした笑顔を崩さないまま言った。

「左に避けないと死ぬわよ？」

その言葉に反射的に了子がハンドルを切った瞬間、車の真横を掠めていった光弾が後部の護衛車に直撃した。

「外したか」

道路から見える建物の頂上。そこで舌打ち交じりに吐き捨てたのは、右腕のトリガーマグナムから光弾を撃ったばかりのトリガードーパント。真に警戒すべきは外でバイクに乗っている克己とレイカであり、まず倒すべきなのは彼らであるはずなのに、トリガードーパントは了子を狙って光弾を発射した。だが、それは了子の直観か、それとも誰かの助言か、どちらかは定かではないが躲かされてしまった。

「だが、次は外さん」

再びトリガーマグナムに顔を当て、頭部のスコープで狙いを定める。標的はもちろん、櫻井了子。

「これで、ゲームオーバーだ」

そう言うや否や、トリガーマグナムの銃口から撃ち出された光弾が了子の頭部へ吸い込まれるように飛んでいった。

『大丈夫かッ!』

「ええ、京水ちゃんの助言が無かったら危なかったけどねッ!」

「……………ッ! また来ますッ!」

遠くから迫ってくる光弾に気付いた響の叫びに合わせ、了子がハンドルを切る。またしても目標を取り逃がした光弾が道路を穿ち、数秒の間隔を経て次々と新たな光弾が飛んでくる。

『了子君、悪い知らせがある』

「あら、この状況でさらに悪い知らせ? 聞きたくないけど、聞かせてもらおうかしらッ!」

『本部からの報告だ。君達より数百メートル先に一つの巨大なエネルギー』

ギーが検知された。ガイアメモリのエネルギーだ。今君を狙っているのがトリガードーパントだとするなら、その先で待ち受けているのは……………」

「剛三ちゃんねッ！ 来るわよッ!!」

京水がT2ルナメモリを取り出したのと時を同じくし、前方の道路に亀裂が入り、一気に崩れ始めた。

「……………」崩れるオツ!!」

弦十郎からの通信を了子達が受けていた時、彼女達の前方ではメタルドーパントに変身した剛三が槌に変化したメタルシャフトを振り下ろし、了子達がやって来るであろう道を衝撃で破壊した。

遠くで大きなものが爆発した轟音が聞こえて、任務を果たしたかと思つた瞬間、崩れ落ちていく瓦礫の間を黄色い腕を生やして掻い潜ってくる車が視界に入った。

「京水か……………ッ！ だったら、俺自ら落としに……………ッ!?!」

メタルシャフトを担いで了子達の乗る車を海に叩き落としてやろうと動き出そうとしたメタルドーパントだったが、瓦礫と瓦礫の間を縫うように飛んできた炎が見えた瞬間、反射的に迎撃態勢を取る。

「はあああああッ!!」

炎を撒き散らして姿を現したヒートドーパントの蹴りとメタルドーパントのメタルシャフトが激突する。拮抗に勝利したのはメタルドーパントで、弾き飛ばされた

ヒートドーパントだったが、すぐに体勢を整えて背後の瓦礫を蹴り碎いてメタルドーパントの懐に潜り込み、連続で鋼鉄の体に灼熱の蹴

撃を浴びせた。

「ここは任せるぞ、レイカ」

「任さなさい」

メタルドーパントを蹴り飛ばした隙に瓦礫の雨を脱出した護送車とマシンエターナルに乗った克己が二人を置いて走り去っていく。

「待ちやがれッ！」

メタルドーパントが護送車に向かって空中からメタルシャフトを投擲するも、それは護送車に命中する事無くヒートドーパントに蹴り返される。

「悪いわね。あんたの相手は私よ」

「だったらテメエを潰して追うまでだッ！」

両足に炎を纏わせたヒートドーパントに、メタルドーパントはメタルシャフトを振り回して迫るのだった。

「――今度はノイズだッ！　クソッ！　立て続けに来るなッ！」

「それだけ、相手もデユランダルを求めてるって事かしらねッ！」

弦十郎からの報告を聞いて周囲を見渡すも、ノイズの姿は見えない。だが、目視は出来なくとも攻撃を受けているのは明らかだ。破壊され、打ち上げられた瓦礫の雨を潜り抜けていくと、前方に大量のノイズが見えた。

「このまま進んでッ！　あいつらはワタシが相手するわッ！」

「頼むわよッ！」

天井を壊して飛び出したルナドーパントが召喚したバイクに乗った五人のT2マスカレイドドーパントと共にノイズの大群を攻撃し、車一台通るのに十分な道を拓き、そこを了子の運転する護送車が突っ走っていく。

「この展開、想定していたよりも早いかもッ！ 護衛が一気に減っちゃったわよッ！」

『橋の上にいるノイズは京水君が相手しているので全部だが、目視出来ないノイズはまだ残っているッ！』

「そんなの、わかってるわよッ！」

護送車など簡単に押し潰せてしまいうぐらいの大きさを誇る瓦礫を躲し、回避を予測して迫ってくる光弾を間一髪で避けていると、弦十郎から新たな情報が与えられる。

『下水道だッ！ ノイズは下水道を使って攻撃してきているッ！ 回避ルートをナビへと転送した、確認してくれッ！』

了子がナビを確認すると、目的地に設定されている場所に眉を顰める。

ナビに表示されている目的地は、工場地帯だった。

「……………弦十郎君、そのルートはちよつとヤバいんじゃない？ この先にある工場で爆発でも起きたら、デュランダルは……………」

『わかっているッ！ ノイズが護送車を狙い撃ちしてくるのは、デュランダルを損壊させないように制御されているとみえるッ！ ドーパントも同じだろうッ！ 狙いがデュランダルの確保であるなら、敢えて危険な地域に滑り込み、攻め手を封じるって算段だッ！』

「……………ッ！ 了子さんッ！」

弦十郎と会話している事で注意力が一瞬散った頃を狙うかの如く光弾が飛んでくるが、それはエターナルに変身した克己がエターナルエッジを振るって切り裂く。

「助かったわよ、克己ちゃん。……………それで、勝算は？」

『思いつきを数字で語れるものかよッ!』

司令官にあるまじき言葉だが、長い間風鳴弦十郎という男と関わってきた了子は、それでこそ彼らしいと思つて笑顔になる。

「了解……………弦十郎君を信じてあげるわッ!」

言うが早いか、橋を渡り終えるや否やアクセルを強く踏み込んで一直線に工場地帯に入った。

響と克己はすぐに周囲の様子を窺うが、ノイズの気配は感じられない。

「やったッ! 狙い通り追つてきませんッ! このまま逃げ切り……………」

「……………そうはさせるかよッ!」

「……………ッ!? 響ちゃん、掴まってッ!」

しかし、安心するのも束の間、聞き覚えのある少女の声がどこからともなく聞こえ、了子が勢いよくハンドルを切る。その時、先程まで護送車があつた場所に刃の鞭が叩き付けられ、地面を抉り取った。

「い、イタタ……………響ちゃん、無事かしら? 車から抜け出せそう?」

「はい、どうにか……………あッ!」

了子の助けを借りて車から抜け出すと、エターナルエッジを構えたエターナルの前に立つネフシユタンの鎧を纏った少女の姿が見えた。その傍らには、トリガードーパントも立っており、響達に銃口を向けている。

「二人は俺に任せろ。響、お前はデュランダルを」

「響ちゃんッ！」

「はいッ！……………うッ！ 了子さん、これ、重い……………ッ！」

了子からデュランダルの入ったケースを受け取った響だが、その重さは想像以上のもので、とても持って逃げられるものではなかった。

「だったら、いつそこにそれを置いて、私達は逃げましょう？」

「そんなの駄目ですッ！」

「そりやそうよね。……………響ちゃん、前ッ！」

「え？ わあああッ！ の、ノイズがッ！」

言われるがまま前を見てみれば、少女の召喚したノイズが紐状に変形して向かって来ていた。ガングニールを纏おうにもこの距離では間に合わず、エターナルも二人の相手でこちらに使う余力は無い。

「……………しようがないわね」

身構える響達を、爆煙が包み込む。だが、いつまで経っても自分の体に異変が起きた感覚は訪れず、恐る恐る目を開けると……………

「え、了子……………さん……………？」

広げた右手から紫色の波動を出して、今まさに自分達を炭化させようとしてきていたノイズを消滅させている了子が見えた。

「響ちゃん、貴女は貴女のやりたい事を、やりたいようにやりなさいッ！」

「……………は、はいッ！ 私、歌いますッ！」

彼女の力について考える時間など無い。今は彼女の言う通り、自分のやるべき事をやるだけだ。

「———— Balwisyall Nescell gunn
ir tron」

聖句を口ずさみ、響は GANG ニールの力をその身に纏ってノイズの前に立つ。

（師匠や克己先生達との特訓の成果、どこまで出せるかわからないけど……………了さんとデュランダルは、絶対に護ってみせるッ！）

走り出し、まず飛びかかってきたカエル型クローレルノイズを殴り飛ばし、続けて襲い来る人型ヒューマンノイドノイズを蹴り飛ばす。

（ヒールが邪魔だッ！）

ノイズを蹴り飛ばした右足を地面につけた時の違和感に、すぐにそれがヒールによるものだと気付いた響は、ノイズの集団を震脚を二回繰り返す事で一掃すると同時に両足のヒールを破壊した。

「こいつ、戦えるようになってるのかッ!? ……………だが、それがどうしたッ！」

前回戦った時よりも動きに素人さを感じさせなくなっている響の姿に目を見開いた少女が、エターナルの相手をトリガードパンツに任せて響の前に立ちほだかる。

「今度はあたしが相手だッ！ 今日こそはものにしてやるッ！」
(……………ッ！ 来るッ！)

少女が振るった二本の鞭を飛び退いて回避し、一気に至近距離に迫って拳を突き出す。それを紙一重で避けた少女の足を受け止めて投げ飛ばすも、少女はすぐに左手に握った鞭を響に叩き付けた。回避が間に合わないと悟った響の体が自然と防御の態勢を取ったお陰でダメージを軽減出来たものの、殺し切れなかった衝撃に響の体は軽く吹き飛ばされる。

「多少戦えるようになった程度で、このあたしと対等だなんて思っ
てんじやねえぞッ！」

立ち上がったところを狙って来た鞭を避けた響は、自分と彼女の実力差を改めて思い知る。特訓したとはいえ、自分の力はまだ彼女の領域には届いてはいないのだ。

(まだシンフォギアを使いこなせていないッ！ どうすればアームドギアを……………ッ！)

少女の攻撃を回避し、どうしても避け切れない攻撃はなるべくダメージを受けないように受け流し、時に反撃を繰り返している響の姿を見ていた了子の耳に、聞き慣れない異音が届いた。

異音が聞こえてきた方向を見てみれば、デュランダルを収納しているケースのランプが点滅していた。デュランダルに異変が起きている証拠である。

「デュランダルの封印がッ!? あ……………ッ！」

ケースをこじ開けるように飛び出し、空中で停止したのは、石色の

巨大な剣。響達の視線さえも奪ってみせたその剣こそ、完全聖遺物デュランダルである。

「響ちゃんのフォニックゲインに反応し、覚醒したというのツ!？」
「こいつがデュランダル………ツ!」

少女は上空に浮かぶ剣を見て、鞭を握る力を強める。
あれさえあれば、かのじよファイネは自分を認めてくれる。もう二度と、自分が独りになる事は無い。

「そいつは、あたしが貰うツ!」

ジャンプした少女の手が、デュランダルの柄に伸びる。あと少しで柄に指先が触れかけた、その時、

「渡す、ものかあッ!」

僅かに遅れながらも少女に追いついた響が彼女を押し退け、柄を握り締めた。否、握ってしまった。

「う、うううううううッ!」

凄まじい力の奔流が全身を駆け巡り、寧猛な破壊衝動が心を蝕んでいく。押し寄せる津波のようなそれを阻む精神力をまだ持ち合わせていない響がそれを耐え切るなど不可能であり、その結果は当然………

「あああああああッ!!」

——『暴走』である。

(こ、この力の高まりは……………ッ!? まともを受け止めなんてしたら……………)

空を貫かんとばかりに黄金の光柱を立てるデュランダルから迸る圧倒的なまでの力に気圧された少女が離脱する為に足に力を籠めた瞬間、全身を黒く染め上げた響の瞳が少女を捉えた。

「ひ……………ッ!」

「うああああああッ!!」

恐怖に体が凍り付いたように動かなくなってしまった少女に、理性を失った響が衝動のままにデュランダルを振り下ろす。

自身を包み込もうとする必殺の光の前に成す術無く佇む少女の手を誰かが引つ張った瞬間、

——光の剣を中心に大爆発が起きた。

(これがデュランダル……………)

爆発した工場の残骸を一課と二課が処理している中、了子はデュランダルによって破壊された光景を眺めていた。

今日工場で働いている者はいなかったため、死傷者が出る事は無かったのが不幸中の幸いだろう、でなければ、今自分の傍で眠っている少女の心は完全に壊れていた事だろう。

(悔しいけど、作戦は中止せざるを得ないわね)

了子の思った通り、デュランダル移送計画は中止。デュランダルは再びアビスに保管される事となった。

——一方、郊外の屋敷近くの棧橋では、クリスが悔しさに
歯噛みしていた。

(完全聖遺物の起動には相応のフォニックゲインが必要だとフィーネは言っていた。あたしがソロモンの杖の起動に半年かかずらった事を、あいつはあつという間に成し遂げた。そればかりか、無理矢理力をぶっ放してみせやがったッ！ 化け物めッ！)

怒りと悔しさに任せて欄干に拳を叩き付ける。頑丈な造りのそれに拳を叩き付けた痛みが走るが、クリスはそれを無視して振り返る。

「おい、なんであの時、あたしを助けた」

クリスの前にいるのは、剛三に肩を貸してもらっている賢。響がデュランダルを振り下ろした際に起こった爆発からクリスを庇ったので、今の彼はボロボロになっている。

「傭兵のあんたにとって、あたしなんかは見捨てて当然な相手のはずだ。なのはどうして、あんたはあたしを……………」

「……………剛三、頼む」

「……………おう」

「おい、待ってッ！ 賢、剛三ッ！」

クリスの呼びかけに答えず、二人は屋敷に向かっていく。その背を見送っていると、背後に誰かがいる事に気付いて振り返る。

「……………ッ！ 気配を消してご登場かよ」

フィーネはなにも言わず、ただクリスを見つめてくる。サングラス越しでもわかる彼女の気持ちに気付いたクリスは、その手に持ってい

たソロモンの杖を押し付けるようにフィーネに渡した。

「あら、ソロモンの杖を私に返してしまって、本当にいいのかしら?」
「こんなもんなんかに頼らなくても、あんたの言う事くらいやってやらあッ!」

先の戦いを思い返す。完全聖遺物の起動に半年かかった自分と違い、一瞬で起動させた少女。彼女をねじ伏せなければ、自分はフィーネに捨てられてしまう。それはクリスにとって、最も恐れる事だった。

「あいつよりも、あたしの方が優秀だって事見せてやるッ! あたし以外に力を持つ奴は、全部この手でぶちのめしてくれるッ! それがあたしの目的だからなッ!」

「恩を仇で返すつもり? 彼、貴女を助けてくれたんじゃないの?」

フィーネの視線がクリスの背後、屋敷に向かっていく賢を見て問いかける。

「それでもだ。まずはあの装者と仮面ライダー達を叩き潰してからだ」

「まあ、好きにきなさい」

どうしても良さそうに返したフィーネが屋敷に歩を進め、クリスもその後を追おうとする。すると、なにかが風に乗って足元に落ちてきた。

大部分が赤く染まり、裏返しになっているが、大きさに写真だろうか。反射的にそれを拾って表面を見てみると、

「……………ッ!? なんだよ、これ……………ッ!」

今よりもいくらか若く見える賢と――既に乾いた血で顔がよく見えなくなってしまうているが――彼の妻と娘らしき人物が写っていた。

「――こんなものですか」

右手で掴んだ男性職員の顔から吸い取るものを吸い尽くし、投げ捨てる。のっぺらぼうのように顔に必要なはずのパーツを全て失った男が壁をずるずると滑り落ちていく音を小耳に挟みながら、「ふむ」と両手を握ったり開いたりし、最後に近くにあった鏡を見る。

「これが私ですか。いやはや、ガイアメモリとは実に面白い」

左側が欠けて、左右非対称になっている頭部の仮面に手を当てて面白がる彼だが、その声に抑揚は全く感じられない。

「そういえば彼女からの連絡では、このまま待っていても無駄という事でしたか。ならば仕方ありませんね。シンフォギアと仮面ライダーの力、是非とも見てみたかったです、無い物ねだりはやめておきましょう」

自分が顔を奪った者達の間を滑るように歩き、彼は出口へと向かう。

今回二課に与えられた任務はデュランダルを記憶の遺跡に移送するというものであったが、それは響の予期せぬ暴走により中止となった。それは、今考えてみると幸運だったのかもしれない。あのまま続けていたとしたら、デュランダルは間違いなく奪われていただろう。

「それにしても、この私と適合したのが『理想郷』の記憶とは、世の中は不思議なものですな」

変身を解いて独り呟いた青年は、アタツシユケースを手記の遺跡から出て行くのだった。

信じる心の大切さ

(暴走するデュランダル之力。なんにもかも全部を壊したくなる、あの強烈な衝動……………)

突き出した拳でサンドバッグを揺らす中、響は先日の出来事を思い返す。

デュランダルを手を取った瞬間から記憶は無かったが、その後の自分がなにをしたのかは、本部に帰った後に弦十郎達からモニターで見せてもらっている。その時の自分は完全に理性を失って、ただ身も心も呑み込んだ破壊衝動に操られるように工場地帯を破壊した。弦十郎達からの話によれば死傷者はいないと事だったが、それでも響は、あの時の自分が未熟だった事を悔やんでいたのだ。

(怖いのは、それを制御出来ない事じゃない。それを人に……………あの子に向けて、躊躇いも無く振り抜いた事。私がいつまでも、弱いばかりにッ!)

「そうだッ! 自分の思いを拳に乗せ、真っ直ぐに突き出せッ! ラストッ! 大地すらねじ伏せる渾身の一撃を叩き込めッ!」

「はい、師匠ッ! はあああッ!」

拳に今の自分の思いを乗せ、一気に突き出す。これまで以上の渾身の一撃を受けたサンドバッグが大きく揺らぎ、弦十郎は「そこまでッ!」と言って響のサンドバッグ打ちの終了を告げる。

「サンドバッグ打ちはここまでッ! ご苦勞だったな、響君」

「はあ……………はあ……………師匠ッ! 続きをお願いしますッ!」

自分が強くなる為には、もっと多くの鍛錬を積まなければならない。休憩も挟まずに次の特訓を要求する響だったが、弦十郎は首を横に振って拒否した。

「いや、今日の特訓はここまでだ。響君、君にはある事を頼みたい」
「頼みたい事？」

「翼の見舞いに行ってもらいたい。俺はこの後、少し用事がある。俺が行きたいのは山々なんだが、俺の代わりに行ってくれないか？」

「もちろんですッ！ では、早速……………」

「待て、響君」

やるべき事は決まった。すぐに翼が入院している病院へ向かおうとすると、弦十郎に呼び止められた。

「響君、病院に行く前に、君にこの言葉を送らせてもらおう」

「はい、なんででしょう……………」

「相手と対峙した際、振るべき正しい拳というものは、己と向き合い、対話した結果導かれるものだという」

「……………」

弦十郎の言っている事がよくわからず、首を傾げる響に、弦十郎は彼女にわかりやすく伝える。

「大いに迷い、悩む事だ。迷いこそが己を育て、強く大きく育てる為の糧となるッ！」

「全然わかりませんッ！ でも、頑張つて悩んでみますッ！」

わかりやすく伝えたつもりだったが、それでも響にはよくわからないう事だったらしい。だが、それでこそ響だと思つて笑つて彼女を送り出した弦十郎は、懐からスマホを取り出して、電話帳からある人物の名前をタップする。

『はあい♪ 出来る女で評判な櫻井了子です♪ どうしたのかしら、弦十郎君。まさかこの時間から飲みのお誘い？ だったら私、こ

の前貴方が教えてくれたお店がいいわね♪』

聞こえてきたのは、いつものように上機嫌な様子で電話に応じた了子の声。だが、それに対し弦十郎の口から吐き出されたのは、緊急時を除けば友人に対してまず使わない、真剣な言葉だった。

「了子君、君に訊きたい事がある」

『あら、貴方が私に質問なんて珍しいじゃない。で、いったいなにを訊きたいのかしら？ 答えられる事ならなんでも答えてあげるわよ？』
「そうか。なら……………」

そこで一旦言葉を区切り、弦十郎は了子に尋ねる。

「……………」 『カ・ディングル』 というものを知っているか？」

翼が入院している病室の前に辿り着いた響が扉を開けて最初に目を奪われたのは、衣服や下着などが散乱した病室だった。あまりの散らかりように一瞬翼が誘拐されてしまったのではないかと考えてしまったが、病室の端に転がっていた下着を片づけている克己と、真っ赤になった顔を両手で覆っている翼を見て、この有様は決して誘拐などではなく、ただ単に翼が片づけられない性分だったのだと悟った。

部屋の片づけをしている克己を手伝ってある程度スペースを確保して椅子に座り、口を開く。

「でも、意外でした。翼さんはなんでも完璧にこなすイメージがありましたから」

「……………ふ、真実は逆ね。私は戦う事しか知らないのよ」

「また翼はそういう事を言う」

克己が顔を顰めるが、翼は緒川以外の男に下着類を片づけられた事に対する気恥しさから心の中が空っぽになっていたので、まともな答えを返せなかった。だが、すぐに彼方へと飛んで行っていた感情を手繰り寄せて思考を開始させる。

「大道、これは私が持っておくべきかしら？ それとも……………」

そう言って克己にT2サイクロンメモリと空白のメモリを取り出して見せると、克己は「いや」と首を横に振る。

「T2メモリは適合者と引かれ合う。響の時もそうだったが、強制的に適合者をドーパント化させたりはしないようだな。それはお前が持っておけ」

「でもこれは、お前の母親の……………」

そこで翼は、自分の言葉に克己がピクリと眉を動かした事に気付く。

「……………なんでお前が、サイクロンが俺のお袋のものだって知ってる？ 俺は一度も、お前にその話をしていないはずだ」

「実は……………」

翼は自分が目覚める前、どこかわからない場所で、大道マリアと名乗る人物からこれら二本のメモリを受け取った事を説明した。説明を聞き終えた克己は腕組みをして俯く。

「……………そうか、お袋に会ったのか。だったら尚更、お前が持っておくべきだ」

「でも……………」

「皆まで言わせるな。俺には、サイクロンを使う資格が無い。お前にそれを渡したのが地球ほしの意思だというのなら、きつと意味があるはずだ」

「……………わかった」

二本のメモリを持つ手を冷たい手で優しく包み込んだ克己に頷き、翼はそれらを枕の隣に置き、響に視線を移す。

「立花」

「は、はい」

「今はこんな状態だけど、報告書は読ませてもらっているわ。私が抜けた穴を、貴女が良く埋めているという事もね。でも、だからこそ聞かせてほしいの。貴女の戦う理由を」

ノイズとの戦いは遊びではない。一つ選択を誤れば、それが死に直結する事だつてあり得る。それに加え、ネフシユタンの鎧の少女と彼女に付き従う二体のドーパントも敵として立ちはだかっているともなると、彼らと戦う彼女が戦死する可能性はノイズのみと戦っている時の何倍も大きくなっているはずであり、これまでの間に幾多の死線を潜り抜けている響なら、その事も当然わかつているはずだ。それでも戦いに臨むという事は、きつと彼女にも自分と同じ、『戦う理由』があるのだと考える翼に、響が答える。

「よく、わかりません……………。私、人助けが趣味みたいなものだから、それで……………」

「それで？ それだけで？」

「私には特技とか人に誇れるものなんて無いから、せめて、自分に出来る事でみんなの役に立てればいいかな……………」

そこで言葉を区切り、窓の外に広がる青空を見る。

「……………でも、切っ掛けは、やっぱりあの事件かもしれません」

そこで響が思い出すのは、二年前のライブの惨劇。あの日、あの時、あの場所で、自分は一人の少女に命を救われて、その力は今、彼女に生かされたこの身に宿っている。

「あの事件で、奏さんだけじゃなく、たくさんの方が亡くなりました。でも、私は生き残って、今日も笑ってご飯を食べたりしています。だからせめて、誰かの役に立ちたいんです。明日もまた笑ったり、ご飯を食べたりしたいから」

あの日、自分が彼女に助けられたから、今の自分がいる。なら、今度は自分が、あの時の自分と同じ状況に陥っている人々を助ける番だ。自分が『生きている』というのは、日常ではあまり感じられないものであるが、一度非日常を体験すると、『生きている』事がとても素晴らしいもののように思えてくるのだ。

生きる事の幸せを、響は知っている。だからこそ、彼女は命を懸けて護り抜くのだ。

「私、護りたいものがあるんです。それは、なんでもなかったあの日常。誰もが友達と笑い合って、時々泣いて、それでもまた笑って、楽しく生活する……………。そんな当たり前だけど、なによりも大切なものを、私は護りたいんですッ！」

笑顔で自分の気持ちを口にした響をしばらく見つめ、フツ、と翼が笑う。

「貴女らしい、ポジティブな理由ね」

「なんでもなかったあの日常、か……………」

かつて死闘を繰り広げた二人組を思い出す。彼らも、こういった気

持ちで自分達に立ち向かってきたのだろうか。長らく非日常に身を置いていた自分にはわからない感覚だ。自分も、響の言うそれを意識して戦う事で、彼らと同じ目線で物事を見る事が出来るのだろうか。

「……………でも、私はデュランダルに触れて、暗闇に呑み込まれかけました」

デュランダルの柄を握っていた両手を見下ろし、あのなにもかもを破壊したくなるような衝動を思い出す。

「気が付いたら、人に向かってあの力を……………。私がアームドギアを上手く使えていたら、あんな事にもならず……………」

「……………戦いの中、貴女が思っている事は？」

「私が思っている事……………。それは……………」

ノイズに襲われる恐怖を、自分は知っている。あの時奏が自分を救っていなければ、ここに自分はいなかっただろう。ならば、救うのだ。自分と同じ恐怖を感じさせない為に、命の恩人から受け継いだシンフォギア^ちでッ！

「……………ノイズに襲われている人がいるなら、一秒でも早く救い出したいですッ！ 最速で、最短で、真っ直ぐに、一直線で駆け付けたいッ！ そして、もしも相手がノイズでなく『誰か』なら……………」

ネフシュタンの鎧を纏っている少女も、克己の仲間だったはずの二人組も、なにか理由があつて敵になっているはずだ。でも、彼らとの戦闘を響は望んでいない。

ノイズに言葉は通じない。でも彼らは、自分と会話する事が出来る。分かり合えるはずだ、自分達は。

「どうしても戦わなくっちゃいけないのかってという胸の疑問を、私の

思いを、届けたいと考えていますッ！」

ハッキリと自分の思いを吐き出すと、翼は響をじっと見据えて口を開く。

「……………今、貴女の胸にあるものを、出来るだけ強くハッキリと思い描きなさい。それが貴女の戦う力……………立花響のアームドギアに他ならないわッ！」

「私の、アームドギア……………」

響が翼の言葉を深く心に刻み付けていると、ポケットに入れていた通信機から緊急事態を告げるアラームが鳴り響く。

『ネフシュタンの鎧の少女が現れた。現在、京水君とレイカ君が市街地から近くの森に誘導してる。早速現地へ向かってくれッ！』

「あの子が……………ッ!? わかりましたッ！」

「賢と剛三はいるのか？」

『いや、今回はネフシュタンの鎧の少女だけだ。頼んだぞ、お前達ッ！』

「どうやら、貴女が思いを届けたい相手が来ているようね。行きなさい。行って胸の思いをぶつけてきなさいッ！」

「はいッ！ 翼さん、行っていきますッ！」

病室から飛び出していく響に克己も続こうとすると、翼に呼び止められる。

「大道。私が歌う理由、やっとわかったよ」

「ほう、それは？」

振り返る克己に、翼は自分の胸に手を当てて、自分が歌う理由を告げた。

「みんなを笑顔にする為……………それが私の、風鳴翼が歌う理由だ」
「……………ようやく見つけられたな、翼」

翼の前に立ち、頭を撫でる克己。

「合格だ。ならこれからは、その為に歌うんだな」

「ああ。……………なあ、大道」

「ん？」

踵を返した克己に、翼は克己に撫でられた頭を擦りながら言う。

「また、撫でてもらってもいいかな？ 頭を撫でられていると、なぜだか安心するんだ」

「……………死人に撫でられる事に抵抗を感じないのであれば、いつでも」

「約束だぞ？ 破ったりしたら、許さないからな」

「ほう？ 随分と可愛いセリフじゃないか」

「う、うるさいッ！ さっさと行ってこいッ！」

「ああ、行ってくる」

右手をひらひらと振って、克己は病室から出て行った。

「約束……………約束か……………」

病室に残された翼は、立てた小指を見つめる。

「どうせなら、指切りでもしておくべきだったかな？ その方が、もっと約束の重要性を伝えられたかも……………」

などと、子どもじみた事を口にするのだった。

——一方その頃、ルナドーパントとヒートドーパントは森林の中でネフシユタンの鎧の少女の相手を相手をしていた。

「今日の晩御飯の買い出しに出かけてただけなのに、なんでこうも休日を楽しませてくれないのかしらッ！ 貴女、ワタシ達に恨みでもあるのッ!？」

「うるせえッ！ 力を持つ奴らは全員ぶつ潰してやるッ！ あたしに見つかったテメエらが悪いッ！」

「見境ないのねッ！ 悪いけどそういうの、ワタシ嫌いよッ！」

ルナドーパントの両腕と二本の鞭が互いを弾き合い、鞭の猛攻を潜り抜けた右腕の攻撃を少女を避けると、背後に回っていたヒートドーパントが少女を蹴り飛ばした。

「その程度で私達を倒すつもり？ 悪いけど、私達はそう簡単に倒せる相手じゃないわよ」

「うる……………せえッ!!」

起き上がるると同時に鞭の先端に作り出したエネルギー弾を投擲する。それをジャンプして回避したヒートドーパントの跳び蹴りを両腕を交差させて受け切ると、今度はルナドーパントの両腕が巻き付いてきた。

「あの夜のお返しよッ！ 喰らいなあゝゝさいッ!!」

「うおわッ!？」

ジャイアントスイングの要領で少女を振り回したルナドーパントが少女を投げ飛ばす。だが、飛ばした方角にあったのは、森から少し離れた道路だった。

「ちよつと、あんたッ！ なにやってんのよッ！」

「やっちゃったッ！ ごめんなさいッ！」

「だったらさっさと行ってこいッ！」

「行ってきまあ〜すッ!!」

炎を纏ったヒートドーパントの蹴りを受けてルナドーパントが道路まで飛んでいく。

空中でバランスを整えたルナドーパントが綺麗なフォームで着地すると、目の前に一人の少女がいる事に気付く。

後頭部に結んでいる大きなリボンがチャームポイントな響の親友、小日向未来である。

「あら、未来ちゃん？ どうしてここに？」

「え？ ど、どうして私の名前を……………」

「えッ!? み、未来ッ!？」

困惑する二人に病院からマシンエターナルに乗ってきた響が駆け寄ろうとするも、道路にネフシユタンの鎧の少女が降り立ったのですぐに臨戦態勢に入る。

「テメエらも来たかッ！ 丁度いい、ここで全員纏めてお陀仏にしてやるッ！」

「未来ちゃんッ、危ないッ！」

未来を抱えて飛んできた鞭を躲すが、少女は間髪入れずにもう一本の鞭で車を投げつけてくる。

着地したルナドーパントと、彼に抱えられた未来目掛けて車が迫ってくるが……………

i r t r o n

聖句と共に GANG ニールの鎧を纏った響が、車を受け止めた。

「助かったわ、響ちゃんッ！ あ……………」

思わずそう叫んだルナドーパントだったが、自分に抱えられていた未来が GANG ニールを纏って車を受け止めている響を見ている事に気付いてすぐに彼女の目を塞ごうとするも、既に後の祭りである。

「響……………」

「……………ごめんッ！」

「どんくせえのが、いっちょ前に挑発のつもりかよッ！」

まずは未来から離れた場所に少女を誘導しなければいけない。そう思っただけで森に走り出した響を少女が追っていく。

「ま、待ってッ！ 響ッ！」

「京水。未来を安全な場所へ」

「わかったわ」

未来を抱えたルナドーパントが走り去っていく中、未来はずっと響の名を呼び続けていた。

「喰らいやがれッ！」

「くう……………ッ!?!」

一方、森林では出来るだけ未来から距離を取ろうとしていた響に少女の鞭が叩き付けられていた。

「どんくせえのが、やってくれるッ！」

顔面から倒れ込んだ響の前に少女が降り立つと、響は少女から受けた攻撃による痛みを堪えながら立ち上がる。

「どんくさいなんて名前じゃないッ！ 私は立花響15歳ッ！ 誕生日は9月の13日で血液型はO型ッ！ 身長はこの間の測定では157cmッ！ 体重は………もう少し仲良くなったら教えてあげるッ！」

「はあッ!?」

いきなり自己紹介し始めた響に啞然とする少女に構わず、響は自己紹介を続ける。

「趣味は人助けで好きなものはご飯&ご飯ッ！ あと………彼氏いない歴は年齢と同じッ！」

「な、なにをとち狂ってやがるんだお前………」

「私達は、ノイズと違って言葉が通じるんだから、ちゃんと話し合いたいッ！」

こうして会話できるという事は、話し合いだって出来る。だから戦いをやめて少女と話そうとする響だったが、彼女は聞く耳を持たない。

「なんて悠長ッ！ この期に及んでッ！」

少女は同時に二本の鞭を振るうが、響はそれを素早い身のこなしで躲していく。

(あたしの攻撃を凌いでいやがる………ッ!? こいつ、なにが変わったッ！)

以前戦った時よりも明らかに成長している響に対する警戒心を強める少女に、響が叫ぶ。

「話し合おうよッ！ 私達は戦っちゃいけないんだッ！ だって、言葉が通じていれば人間は——」

「——うるさいッ！ わかり合えるものかよ、人間がッ！ そんな風に出てきているものかッ！」

人はわかり合えない。それを身をもって体験した過去を持つ少女にとつて、響の言葉は夢物語に過ぎないもので、それを信じている彼女を、少女はどうしようもなく許せなかった。

「気に入らねえ気に入らねえ気に入らねえ気に入らねえッ！ わかっちゃいねえ事をペラペラと知った風に口にするお前がッ！ お前を引きずってこいと言われたが、もうそんな事はどうでもいいッ！」

先端にエネルギー弾を作り出した二本の鞭を握り締め、大きく振り上げる。

「お前をこの手で叩き潰すッ！ 今度こそお前の全てを踏み躪ってやるッ！」

「そうは……………」

「させないッ!!」

投擲されるエネルギー弾を、響の前に降り立ったエターナルのエターナルエッジが切り裂き、ヒートドープアントの灼熱の蹴撃が蹴り碎いた。

「まだまだッ！ 持ってけ、ダブルだッ！」

だが、少女はすぐにもう一発のエネルギー弾を飛ばしてくる。だが

今度は、それを未来を安全な場所まで送り届けたルナドーパントが両腕を叩き付けて破壊した。

「信じる心を持つ事。それはとつても大事な事よ、響ちゃんツ！」

「響、今こそ翼の言葉を思い出す時だ。さあ、その手に握れ。お前のアームドギアをツ！」

「はいッ！ はあああああああああッ！」

自分の胸にあるものを強くイメージし、響は右手に力を籠める。その手に眩い輝きが満ちていく様子を目にした少女は、彼女がアームドギアを手にしようとしている事に気付く。

「きゃあッ!?!」

だが、失敗したのか光は響の手の中で弾け、響は尻もちをついてしまふ。

(これじゃ駄目だ………………。翼さんのようにギアのエネルギーを固定できないッ！ でも、エネルギーはあるんだ。アームドギアを形成出来ないなら—————)

—————そのエネルギーを、そのままぶつけるだけだッ！

「それ以上、させるかよおッ！」

前に飛び出し、地を這う蛇のように迫ってくる鞭を受け止める。

(最速で、最短で、真っ直ぐにッ！ 胸の響きを、この思いを、伝える為にッ！)

「うああ……………ッ!?!」

少女が驚愕している隙を突いて、一気に鞭を引つ張って彼女を引き寄せてからの――

「おりゃああああッ！」

「くは……………ッ！」

強く踏み込んでからの正拳突きが、少女を殴り飛ばした。

「君がどんなに私の思いを否定しようと、私はそれを信じ続けるッ！」

絶対に――

腹部を押さえながら起き上がる少女に、響は拳を握り締めて叫ぶ。

「――絶対に、夢物語なんて言わせないッ!!」

瞬間、響の全身を眩い輝きが包み、それに響が驚いていると、背後からも驚愕の声が上がった。

「えッ!? えッ!? なによこれえッ!」

振り返ってみれば、ルナドーパントの全身も響を包むものと同じ光に包まれており、彼の体から小さな光球が出てきたかと思うと、それが響の体内に吸い込まれていった。

その時、心臓が一際強く鼓動するのを合図に全身に力が湧いてくる感覚に襲われ、思わず蹲る。

(なに、これ……………ッ!? 体が、熱い……………ッ!)

まるで体内でマグマが煮えたぎっているように熱くなり、全身に激痛が走る一瞬、視界に夜空に輝く三日月が映る。

「が、あ……………ッ！ あああああああッ!!」

叫び声を上げた、響の全身から黄金の輝きが放出される。それが収まり、その場にいた全員が見たのは――

「なに……………これ……………?」

右目の網膜に三日月のマークが映し出され、月の模様が描かれたスクリーンを足元まで伸ばし、そして髪の毛を腰まで伸ばした響の姿だった。

『U』の記憶を持つ男

(なんだよ……………あの姿……………ッ!?)

目の前の少女の変化に目を見開く。

アームドギアらしき武器は見当たらない事から、それがアームドギアであるという可能性は考えられないが、響の全身からはそれと似たような力を感じられる。アームドギアを形成せず、ただ姿のみを変化させる。考えられない事だが、これは明らかに――

――ギアを変化させやがったのかッ!? どんだけ化け物なんだよ、こいつはッ! ……………ぐッ!?)

立ち上がろうとした時、全身に鋭い痛みが走る。自己修復機能を備えたネフシユタンの鎧がクリスの体を自身と同一化する事で治療しようとしているのだ。このままだと食い破られかねない。

(なら、食い破られる前にカタをつけるだけ……………ん?)

ふと、気付く。なぜ、こんな隙だらけの自分に彼女は追撃してこない? これまでの戦いで、自分がどれ程の強敵かは響達も知っていないはずだ。なら、なぜ追撃してこないんだ。

響達を見ると、なんと響が仲間達に「私にやらせてください」と頼み込んでいた。仲間達は心配そうに響になにかを言っていたが、最後には響に任せる事を承諾して後方に下がっていき、響が前に入る。

(自分一人でも、あたしに勝てるって言いてえのかッ!?)

目の前で追撃する気配を一片も見せない響に、クリスは怒りの叫びを上げる。

「お前、馬鹿にしてるのか？ あたしを……………雪音クリスをッ！」

「……………そっか、クリスちゃんって言うんだ」

「なッ……………」

戦場に立っている事を忘れていたかのような笑顔で返事をした響に、思わず呆気に取られる。

「ねえ、クリスちゃん？ こんな戦い、もうやめようよッ！ ノイズと違って、私達は言葉を交わす事が出来るッ！ ちゃんと話をすれば、きつとわかり合えるはずッ！ だって私達、同じ人間だよッ！」

人と人が繋がれる事を信じてやまない瞳で自分を見つめてくる響に、クリスはさらに怒りを募らせていく。

「……………お前、くせえんだよ。嘘くせえ……………ッ！ 青くせえ……………ッ！ お前は絶対に、ぶっ潰してやるッ！」

差し伸べられた手を振り払うようにクリスは二本の鞭を振るい、響に攻撃した。

いきなり攻撃された事に防御が間に合わなかった響が一步後ずさり、このまま押し切ろうとクリスは再び鞭を振るおうとするが、ネフシユタンの鎧の修復機能による激痛に膝をついてしまう。どうやら、予想以上に鎧の回復速度が速いらしい。

——それなら、奥の手を使うまでッ！

「ぶっ飛べよッ！ アーマーパージだあッ！」

身に纏う鎧を周囲に放出する形で脱ぎ捨てる事によって発生した土煙の中、クリスはこれを口にする事に強い忌避感を覚えながら——

「Killter Ichivalttron」

「聖詠を口ずさんだ。」

「——新たなアフヴァツヘン波形検出ッ！」

「なんだとッ!？」

新たな聖遺物の反応を確認したオペレーターの言葉に、司令室が騒然とする。

先程ガングニールになんらかの変化が起きた事ですぐに調査を始めさせた直後に新たな聖遺物の存在を告げる言葉に驚愕した弦十郎達の前に、今回検出されたアフヴァツヘン波形の根源の名が表示される。

《code: ICH^イHA^チIVA^イLV^イAL^ル》

「イチイバル……………だとオツ!？」

イチイバル。それは北欧神話に登場する神ウルが使用していたとされる弓であり、十年前に失踪したとされていた聖遺物の名前である。

(失われた第二聖遺物までもが、向こう側に渡っていたというのか……………ッ!)

拳を握り締め、弦十郎はモニターで響の前に立つクリスを見つめた。

「——歌わせたな。あたしに歌を歌わせたなッ！」

自分や翼と同じ鎧を纏ったクリスが、響達に両手に持ったクロスボウを向ける。

「教えてやる……………あたしは、歌が大っ嫌いだッ！」

クロスボウから撃ち出された十本の矢は響どころかその後方にいるエターナル達にも襲い掛かる。

振り返った響は、胸から湧き上がってくる、歌とは異なる力を発動させる。

すると、エターナル達の前に現れたもう一人の響が彼らに迫っていた矢を全て弾き飛ばした。

「嘘ッ!? これって分身ッ!」

「これって、まさかルナメモリの……………ッ!」

「克己先生達に手出しはさせないッ!」

誰かに教えられなくても、この身に宿ったガングニール以外の力の使い方は自然と理解出来る。

(本当は戦いたくないけど、やるしかない……………ッ!)

走り出した響から二人の響が左右に現れ、三方向からの同時攻撃を仕掛ける。クリスは僅かにそれに動揺するが、攻撃の手を緩める程ではない。

「舐めるなッ! 見せてやる……………これがイチイバルの力だッ!」

アームドギアをガトリング砲に変化させる事で繰り出す技――

――『BILLION MAIDEN』が左右から迫る響の分身を消滅させ、響を吹き飛ばした。

「——ッ！」

全てを破壊し尽くさんとする意思を感じさせる歌を口ずさみながら撃ち出される弾丸を響が弾きながら後退していると、彼女の前に降り立ったエターナルがエターナルローブで弾丸を防御し始めた。

「克己先生ッ!？」

「どうやら、今のお前はルナメモリの力を使えるようになってるよ。うだな。だが、完全には扱いきれてないように見える。悪いが加勢させてもらうぞ」

「はあああッ！」

ルナドーパントを踏み台にジャンプしてクリスの上を取ったヒートドーパントの跳び蹴りをガトリング砲を交差させて防ぐクリス。

「歌を嫌ってるくせに、中々良い歌じゃない。あんた、本当は歌が大好きなんじゃないの？」

「んな訳あるかッ！」

撃ち出された弾丸をクリスを中心に弧を描くように走って避けていくと、ルナドーパントがT2マススカレイドドーパントを召喚してクリスに向かわせてくる。

「響ちゃん。なにかを召喚する時はね、そこに本物がいる事をイメージするのよ。貴女が召喚した貴女は決して『偽物』じゃなく、『本物』である事を強く意識しなさいッ！」

「は、はいッ！」

響がクリスを囲む形で三人の自分を召喚すると、彼女達はそれぞれ違う動きでクリスに攻撃を仕掛けていく。

「鬱陶しいんだよッ！　ぶっ飛べえッ！」

だが、クリスが腰部アーマーから追尾式小型ミサイルを飛ばす技――
『CUT IN CUT OUT』を使用した事で、彼女を囲んでいた三人の響とT2マスカレイドドーパントは倒されてしまう。

「ああ……………ッ！」

「……………やっぱり、響ちゃんはエネルギーを集中させるのは不得意みたいね。だったら今度はその力を体に纏わせるのはどうかしら。貴女には分身を作るより、体でぶつかつた方が良いかも」

「悪いけど、そう簡単に練習台になつてくれる相手じゃないわよ、あの子」

その時、エターナル達目掛けて小型ミサイルが一斉に襲い掛かつてきた。クリスが腰部アーマーから小型ミサイルを発射する技――

――『M E G A D E T H P A R T Y』である。

回避も防御も許さないと云わんばかりの数の暴力が彼らを飛ばそうとしたその時――

「そこまでだッ！」

夕焼けの空から落ちてきた巨大な物体が、全ての小型ミサイルから彼らを護つた。

「なんだこりや……………、盾……………？」

「―――剣だッ！」

大地に突き立った巨大な剣の柄の上に立っていた翼が足元の剣を元の大きさに戻し、クリスに斬りかかった。

「翼さんッ！」

間一髪で頭上からの斬撃を躲した翼に響達が駆け寄る。

「翼さん、体の方は……………」

「まだ本調子ではないが、軽く戦える程度には回復した。……………手を貸してくれるか？」

「……………ッ！ もちろんですッ！」

思わぬ増援からかけられた言葉に心が晴れやかになった響が、翼達と共に構えを取る。

「ふん、死に体でおねんねと聞いていたが、足手纏いを庇いに現れたか？」

「違うな。もうなにも、失うものかと決めたのだッ！ 行くぞ、立花ッ！」

「はいッ！」

笑顔で答える響に頷く翼。この時、ついに翼は響が覚悟を決めた戦士であり、共に戦場に立つに相応しい友であると認めたのだ。

「助っ人と言えども、所詮は死に体ッ！ ここで全員纏めてゲームオーバーだッ！」

「それが事実か否か、その目で確かめるがいいッ！」

クリスが撃ち出した弾丸を響達が散開して回避し、前に走り出した翼が掻い潜っていく。

(あたしの弾幕を、掻い潜ってきただとッ!?)

「震える指で引き金を引こうとも、狙いを定めるには能わずッ！」

「このッ！ うらあああッ!!」

周囲からの攻撃を掻い潜りながら翼の動きを予想してクリスは引き金を引くが、翼はそれを全て回避し、時には弾いたりしながら着実にクリスと距離を縮めて剣を振り上げた。

「しまった………ッ!？」

以前戦った時と動きがまるで違う翼に動揺したクリスが攻撃を躲した結果バランスを崩してしまい、尻もちをついてしまう。

「これで王手だな」

首筋に切っ先を当てる翼だが、クリスの目に諦めの色は見えない。

「お前と私達は刃を交えるべき間柄ではないと信じたい。お前にはその聖遺物について問い質さなければならない。本部まで同行願おうか」

「誰が行くかよッ!」

「………ッ!」

右手のクロスボウから撃ち出した矢を翼が防御している隙に彼女から離れるが、すぐに自分が彼女の仲間達に囲まれている事に気付く。

「リンチは趣味じゃない。大人しく降伏したらどうだ?」

「降伏なんて選択肢、あたしが選ぶわけ………ッ!？」

腰部アーマーからミサイルを撃ち出そうと構えた瞬間、突如として上空から襲ってきたなにかがクリスの武装を破壊した。

「なんだよ、これ………。どうしてノイズが………ッ!？」

「――命じた事も出来ないなんて、貴女はどこまで私を失望させるのかしら……………」

この場にいる誰のものでもない女性の声が聞こえ、全員がその声が聞こえてきた方向を見ると、こちらを見下ろしてくる金髪の女性がいた。そして、その手にはソロモンの杖が握られていた。

「いきなりなにすんだよ……………ファイネッ！」

「ファイネ？　ファイネって確か……………」

「楽曲の終止を表す用語の名前よ。どうやら、親玉の登場ってわけね」

全員が見上げる中、ファイネは心底失望した目線をクリスに注ぎ続ける。

「呆れたわ。私はそこにいる小娘を連れて来いって命じたはずなのに、それを潰そうとするなんて。こんな簡単な事も果たせないの？」
「なんでそこまでこいつに拘るんだよ……………ッ！　こんな奴がいなくたって、戦争の火種くらいあたし一人で消してやるッ！」

自分の胸に手を当て、クリスはどこか哀しさと嫉妬を感じられる声で叫ぶ。

「そうすれば、あんたの言うように人は呪いから解放されて、バラバラになった世界は元に戻るんだろッ!？」

(呪い……………？　呪いとはいったいなんだ……………？)

聞き慣れない単語についてクリスに訊こうとしたその時、ファイネは深く溜息を吐いた。

「丁度いい機会ね。クリス、もう貴女に用は無いわ」

「な、なんだよ、それ……………ッ！　おい、ファイネッ！」

叫ぶクリスを無視してファイネが片手を持ち上げると、クリスが脱ぎ捨てたネフシユタンの鎧が光の粒子となって彼女の手に集まり、やがて消えてしまう。

「本来ならノイズの相手をしてもらうべきだけど、今日は彼の相手をしてもらおうわ」

そこでファイネは、エターナル達の目からは見えない背後を振り返り、そこにいるであろう誰かに声をかける。

「紹介するわ、仮面ライダー、ドーパント、そしてシンフォギア装者諸君。彼が今回、貴方達の相手を務める男よ」

そう言つて左に避けたファイネの背後から現れたのは、白い服装に身を包んだ男性。その服装に、エターナルと彼の部下のドーパント達が息を呑む。

「貴方……………ッ！ その服装は……………ッ！」

「おや、この服装をご存じで？ もしや、過去に我々と関わり合いになつたとか？」

「ええ、その通りよ。思い出すだけでも虫唾が走るけどね……………ッ！」

ルナドーパントとヒートドーパントが全身から殺気を迸らせ、その様子に驚愕する響達の前で、二人以上に殺気を漲らせているエターナルが得物をその男に向ける。

「忘れるものか……………ッ！ あの男でなくとも、地獄に叩き落とすてやる……………ッ！」

これまで以上の憤怒と怨嗟を感じさせる声で、エターナルは頭上の男の所属する組織の名を口にする。

「――――殺してやるぞ……………『財団X』ッ!!」

言うが早いか、三人はその男に飛びかかる。彼は目の前から迫り来る三つの死に対し――――

「自己紹介もさせてくれないとは、余程我々は貴方方の恨みを買ってしまったようだ」

全く動じておらず、むしろゆったりとした動作で懐から一本の黄金のメモリを取り出した。

『ユートピア!』

男の手から滑り落ちた『理想郷』の記憶を内包したメモリが、まるで自我を持つように自動的に彼の腰に巻かれたベルトに差し込まれ、彼を異形の存在へと変化させる。

瞬間、彼に向かっていた三人の体が吹き飛ばされ、地面に叩き付けられた。

「大道ッ!」

「京水さんッ! レイカさんッ!」

倒れている三人に響達が駆け寄る中、フィーネは彼らに背を向ける。

「それじゃあ、いつかまたお目にかかりましょう。尤も、生きていたらの話だけだ」

フィーネが姿を消し、道路からユートピアドーパントが専用武器『理想郷の杖』を手に彼らの前に降り立つ。

「さて、貴方方がどういった戦いをするのか、私に見せてください」
「臨むところ……………ッ！」

軽く杖で左手を叩きながらゆっくりと歩いてくる彼から感じる絶対的なオーラに僅かに気圧されながらも、翼が走り出す。

「やあああッ！」

病み上がりでありながらも、長年の鍛錬によって鍛え上げられた腕から振るわれる斬撃。並のノイズであれば集団であろうと一撃で全てを塵に変える程の威力を誇るそれを――

「これは……………予想外ですね」

「な……………ッ！ ば、馬鹿な……………ッ!？」

――ユートピアドーパントは、軽く杖で受け止めていた。

「以前のダメージがまだ残っているようですね。なら、貴女に用はありません」

「ぐ……………ッ!？」

突然襲って来た謎の重圧に、翼はその場に跪く。立ち上がるどころか、押し潰されないように踏ん張る事で精一杯な状態の翼を残し、今度は響に向かっていく。

「聖遺物とガイアメモリの力の融合ですか。来なさい」

「よくも翼さんを……………ッ！」

「だ、駄目よ響ちゃんッ！ 行っちゃ駄目ッ！」

ルナドーパントの制止を振り切って、響がユートピアドーパントに殴り掛かる。

「はッ！ やあッ！」

「ふむ……………」

連続で突き出された拳を片手で受け止め、その力量を量るユートピアドーパント。反撃にと繰り出された杖による打撃を躲すと、響は先程ルナドーパントから受けたアドバイス通り、分身を生み出すエネルギーを全身に巡らせる。

「喰らえッ！」

「むう……………ッ!？」

ゴムのように伸びたパンチが顔面に叩き込まれ、予想外の攻撃に対処が遅れたユートピアドーパントが僅かに後ずさる。そこへすかさず響が足や腕を伸ばして追撃を加えていくが、徐々にユートピアドーパントもその攻撃に慣れていき、最後には響の攻撃を全ていなしながら彼女に近付いていき、杖で殴り飛ばした。

「この……………ッ！」

「よくも響ちゃんと翼ちゃんをやってくれたわねッ！」

今度はヒートドーパントとルナドーパントだ。ルナドーパントが向かわせた五人のT2マスカレイドドーパントを吹き飛ばした際に出来た隙を突いてルナドーパントの両腕が迫るが、ユートピアドーパントはそれを容易に受け流し、続けて飛んできたヒートドーパントの蹴りも受け止めると、理想郷の杖を振るって二人の体を浮かび上げ、勢いよく地面に叩き付けた。

「仮面ライダー。次は貴方です」
「はあッ！」

エターナルエッジを駆使しての攻撃を受け止めたユートピアードーパントの杖をエターナルローブで防ぐ。一度距離を取ってからエターナルローブで体の大部分を隠し、ユートピアードーパントの攻撃に合わせてカウンターを繰り出してダメージを与えていく。

「中々骨がありますね。そうでなくてはつまらない」
「ぐう……………ッ!？」

カウンターの際に露出する胴体になにも握っていない左手からの衝撃波を受けて吹き飛ばされたエターナルは、立ち上がると同時にスロットから引き抜いたエターナルメモリをエターナルエッジに挿し込む。

「ならば、こいつはどうだ？」
『エターナル・マキシマムドライブ!』
「……………ッ!？ これは……………ッ!？」

エターナルメモリのマキシマムドライブは他のメモリの機能を半永続的に停止する力を持つ。T2ガイアメモリにはその力はあまり適用されないが、ユートピアードーパントが動きを止めたという事は、彼が使用しているメモリはT2ではない証拠だ。

「貴様はあの時、俺が殺したはずだ。地獄から蘇ったのなら、もう一度地獄に叩き落としてやる……………ッ！」

身動きが取れないでいるユートピアードーパントに、エターナルがトドメを刺そうと走り出し、跳び回し蹴りを繰り出す。

エターナルの必殺技は直撃した。変身解除の途中で絶大な威力の

跳び回し蹴りを叩き込まれれば、いかにユートピアドーパントといえど無事では済まない。

——そのはずだった。

「馬鹿な……………ッ!？」

なんと、ユートピアドーパントは彼の跳び回し蹴りを受けたにも関わらず、起き上がったのだ。だが、エターナルレクイエムは流石に堪えたらしく、僅かに呻き声を漏らしていた。

「やってくれましたね……………ッ! ですが、私を倒すにはまだ足りない……………ッ! おおおおおおおおッ!!」

全身に黄金の輝きを纏い、錐揉み上に回転しながらの跳び蹴りがエターナルに直撃した。

「が、あ……………ッ! はあ……………ッ!!」

変身が解除された克己がユートピアドーパントの攻撃を受けた胸元を押さえて悶える。相手が仮面ライダーではなくドーパントである事が不幸中の幸いであり、いかにそれが致死の一撃だろうと、マキシマムの力を宿した攻撃でない限りはNEVERである克己の身を滅ぼす事は出来ない。

「仮面ライダーもこの程度ですか。それと、私は死んでなんかいませんよ。今もこうして生きています」

自分の胸をトントンと叩いたユートピアドーパントは克己に続ける。

「それに、貴方には感謝しているんですよ、仮面ライダー。貴方のベル

トがあつたから、フィーネはこのガイドライバーを作る事が出来たんですから」

「なん……………だと……………ッ!？」

自分のロストドライバーが財団Xに新たな力を与えてしまった事に驚愕している克己から視線を外し、ユートピアドーパントはクリスに顔を向けた。

「最後は貴女ですね、雪音クリス」

「……………ッ!」

ユートピアドーパントに視線を向けられ、クリスが身を強張らせる。

「フィーネは貴女を用済みと切り捨てた。なら、貴女とそのシンフォギアは我々の手元に置くとしましょう」

「に、逃げて……………クリスちゃん……………」

「あ、ああ……………ッ!」

自分を苦戦させた者達をあつという間に退けたユートピアドーパントから距離を取るように、クリスは一步、また一步と後ずさっていく。しかしそうやって開いた距離は、ユートピアドーパントが歩を進める事で縮んでしまう。

「貴女の希望とは、いったいどういうものなのでしょうかね……………?」

「ひッ!」

ついに距離を詰めたユートピアドーパントの手が、クリスの顔を覆う。瞬間、クリスは全身からなにかが吸い取られていく感覚に襲われた。

それは、希望。彼女がなぜ生きるのか。なにが彼女を突き動かすのか。それら全てを、目の前の怪物は奪おうとしている。

(やめろ……………取るな……………取らないでくれ……………ツ！ それを取られたら、私はいったい、なんの為に戦ってきたんだ……………ツ！ フィーネに、従ってきたんだ……………ツ！)

不意に、クリスの脳裏にとある男女の姿が浮かぶ。

それは、幼い頃自分を庇って命を落とした、両親の姿。彼らは戦地でも絶やす事の無かった笑顔で、自分の名を呼んでいる。それすらも、希望の一部としてユートピアドーパントに奪われようとしている。

(取らないで……………ツ！ パパとママを、取らないでよ……………ツ！)

彼らの姿が徐々に黒く染め上げられていく。それが嫌で堪らなくて、クリスは我知らずに叫ぶ。

「誰か……………助けてくれええええツ!!」

嗚咽交じりの叫びが森に響き渡った瞬間、

「——クリスツ!!」

頭上から降り注いだ光弾が、クリスからユートピアドーパントを引き剥がし、茂みから飛び出した影が両手で握った槌でユートピアドーパントを殴り飛ばした。

「クリスツ！ クリスツ!!」

自分を抱え起こしている蒼い体を持つ怪人から聞こえる声に、クリスは微かに瞼を持ち上げる。

「け、賢……………？」

「賢ッ！ こいつら運んで行くぞッ！」

遠くから聞こえる声に頷いた賢が変身を解除し、スモークグレネードを投げてユートピアドーパントの視界を奪う。その隙に駆け出す賢の腕の中で、クリスの意識は深い闇の底へ落ちていくのだった。

それが武器なのであれば

「——メデイカルチェックの結果が出たわよ。外傷は多かったけれど、深刻なものが無くて助かったわ」

二課では了子のメデイカルチェックを受けた翼と響が、その結果に耳を傾けていた。

翼はユートピアドーパントの重力操作に耐え続けた結果、元々十全ではなかった体がさらに疲弊、響は GANG ニールとルナメモリの両方の力を使用した事による疲労と判断された。幸い、二人のそれは充分に休息を取れば問題は無いらしいので、それに二人は一先ず安心する。

万全じゃない状態で出撃した無茶をした翼は弦十郎に怒られはしたが、以前と違って響を半人前ながらも戦場に立つに相応しい戦士であると認め、今度出撃する時は援護くらいなら出来るといふ話を受け、響は彼女に認められた事を嬉しがっていた。

「響ちゃんの心臓にある GANG ニールの破片が、前より体組織と融合しているみたいなの。その一撃一撃が絶唱に匹敵する攻撃力を引き出す驚異的なエネルギーと、ダメージを受けてもすぐに全快する回復力はそのせいかもね」

「融合………ですか？」

聖遺物と人間の融合という情報に目を細める翼達だが、了子が軽々しく話題に出したので大事ではないと判断する。この中で最も聖遺物に詳しいとすれば了子だろうし、メデイカルチェックで装者達の状態を確認し、彼女達が出撃させるか否かの判断を弦十郎に伝えるのは彼女の仕事だ。問題が起こるようであれば、彼女はこの情報を軽々と口にしたりはしないはずだ。

「そういえば、今日響ちゃんが纏った新しいギアについて聞かせても

らいたいわね。変化しても元のガングニールのフォニックゲインは検出されていたから、完全に別のギアに切り替えたわけではないようにだけど……………」

「分身や伸縮自在の四肢……………。間違いなくルナメモリの力だな」

「それは私も同感です。あの時、立花の網膜にはルナメモリのインシヤルが浮かんでいましたから」

「ワタシのルナメモリが響ちゃんに力を貸したって事かしら？ そういえば響ちゃんって、ワタシ達より先にメモリを見つけてたわよね。それが関係しているのかしら？」

「そうになると、私のヒートも彼女のギアを変化させるかもしれないって事？ でも、そんな事ってあり得るのかしら？」

「その可能性は否定出来ないぞ。T2以前のメモリの話だが、過去にあるドーパントが複数のメモリを挿入してそれらの能力を使用したという記録がある。彼の場合はガイアメモリの法則を度外視した手段だったが、響の場合は恐らく……………」

「元から複数のメモリに適性があった体質だった、って事ッ!? そんなのってあり得るのッ!？」

聞いた事の無い事例に驚愕するレイカは、次に疑問に思った事を克己に尋ねる。

「でも、あんたが例に挙げた男って、最後はメモリの過剰使用で死んだって話じゃない？ いくら適性があるからって、これからも響がルナの力を使い続けて、仮に私のメモリの力も使えるようになったら……………」

最悪、死んでしまうのではないかという不穏な考えを抱いていたレイカだったが、克己はそれを否定する。

「翼がサイクロンとブランクメモリをプロフェッサー・マリアから受け取った時、彼女はそれを『地球の意思』と言ったらしい。もしかし

たら、この地球そのものが響をバックアップしているかもしれない。もしこれが正しいのなら、響はリスク無しでメモリの力を使えるはずだ。とんでもない話だが、聖遺物の力や現代じゃ再現不可能な異端技術の結晶が存在しているこの時代だ。あり得なくも無いんじゃないか？」

地球の力がどれだけ強力なものかはガイアメモリが証明している。それを使用して戦うレイカだって、それを理解しているはずだ。

「地球そのものが力を貸すなんてね。響ってば、もしかしたら物凄い切り札ジョーカーなのかもね」

「ジョーカーだなんて、私はそこまで凄いものじゃ……………」

照れ隠しのつもりか、頭を掻いている響をじっと見つめていた了子がそうだと手を合わせてこの場にいるメンバーを見渡す。

「ねえねえ、良かったら新しい GANG ニールの名前を決めましょ？」

『ルナの力を宿した GANG ニール』じゃ変でしょ？ そうねえ……………」

顎に手を当て、少し考え込んだ了子は頭に浮かんできた名前の内、これだと思った名前を口にした。

『『GANG ニール・ルナクロス』っていうのはどうかしら？ クロスは『交わる』という意味もあってね、翼ちゃんと擦れ違いながらもこうして絆を結んだ響ちゃんらしいとは思わない？』

「あら、カッコいい名前じゃないッ！ 嫌いじゃないし、むしろ好きよッ！」

「GANG ニール・ルナクロス……………良い名前ね。気に入ったわ。響はどう？」

「はいッ！ 私も気に入りましたッ！」

「よし、では今後からルナの力を纏ったガングニールを『ガングニール・ルナクロス』と呼称しようッ！」

弦十郎に全員が頷き、話はメデイカルチェックに戻る。

「……………そういえば、克己ちゃん達はよかったの？　メデイカルチェックを受けなくて」

「俺達の体は常人よりも強靱な耐久力を備えている。いかに致命傷といえども、俺達は止まらないさ」

「でも……………」

「私達の事は気にしなくていいわよ。それより今は……………」

「あの男……………財団Xについて話さないかね」

「財団Xという組織名は知っている。確か、科学研究財団として活動しているはずだが……………」

「それはあくまで表向きの財団Xだ。裏社会に活動する組織は数あれど、二課が^{おまえたち}本当の奴らを知る事はまず無い。調査の最中知るか、向こうから接触してこない限りはな」

ソファーに背を預けていた克己が両手を組み、目の前の机を囲むように配置されたソファーに座っている弦十郎達に財団Xについて説明し始めた。

「財団X。ボスの言った通り、表向きでは科学研究財団として名を馳せている団体だが、その実態は強力な兵士を手に入れる為に様々な組織、個人に援助を行う闇の組織だ。目的の為なら手段は選ばず、必要とあれば非人道的行為にさえ手を出す……………死の商人さ」

「二度ワタシ達は、財団Xの支援を受けたとある組織が運営する村で、そこに囚われていた人達を助け出そうとした事があったわ。でも、結果は残酷なものだったわ……………」

「それって、まさか……………」

「全員殺されたわよ。私達の目の前で。そこのボスが予め彼らに仕掛

けを施していたの。村から出た瞬間、彼らの命を奪うような、悪魔の仕掛けをね」

「そんな……………」

「なんと下劣な……………ッ！」

口元に手を当てる響の隣で翼が拳を太ももに叩き付ける。彼女達から見て左側のソファアに座っている弦十郎は、以前病室で聞いた克己の過去と、今語られた彼らの過去にあった出来事を照らし合わせていた。

（そうか……………。以前、克己君が話した過去とは、その事だったのか）

「その組織のボスが彼らに仕掛けを施す事が出来たのは、財団Xが奴に与えたガイアメモリの力故だ。そして、それを作ったのももちろん……………」

「財団X、というわけね。貴方達の話聞く限りだと、彼らが支援した相手がどれだけ人殺しをしようと、彼らは全く悪びれていない。それどころか……………」

「貴重なデータが取れて万々歳、と喜ぶだろうな」

「なんで、そんな酷い事を……………ッ！」

「それを平然とやってのけるのが、財団Xという組織だ。そして今回俺達の前に現れた男……………。俺は一度、奴に会った事がある。使ったメモリも同じものだった」

「そのメモリとはどんなものだ？」

「ユートピア。『理想郷』の記憶を内包したガイアメモリだ」

「じゃあ、その能力は……………」

了子の質問に、克己は過去の彼と出会った時を思い出す。

「……………そういえば、俺から希望を奪おうとしてきたし、重力を操って俺の動きを止めてきた。能力は『触れた相手の希望を奪う』、『重力

操作』といったところか」

「あの時襲ってきた重圧感はそれが原因だったのか……………」

「重力操作はわかりますけど、希望を奪うっていう能力はイマイチピンと来ませんね……………。希望を奪われたら、いったいどうなってしまうんでしょうか……………」

「……………少しいいか？」

顎に手を当てた弦十郎に克己達の視線が集まる。

「どうしたの、弦十郎君？」

「以前、デュランダル移送計画を実行した事は君達の記憶にも新しいだろう。結局妨害されて中止になってしまったが、それから数時間後にある情報が入ってきたんだ」

次に弦十郎が口にしたのは、二課に入ってきた情報はデュランダルを移送する予定だった《記憶の遺跡》に関する情報だった。

「実はあの後、《記憶の遺跡》にいた職員の内数名が意識不明の重体となったという情報が入ってきてな。原因は不明。持病も無いとされていた。原因不明とされている事を除けば日常でもよくあるニュースなんだが……………これを見てくれ」

胸ポケットから取り出した写真が机に置かれ、それを見た全員が息を呑んだ。

なんとその写真に写っている人々は、誰も彼もがのっぺらぼうのように顔のパーツを全て失っていたのである。

「監視カメラには偽装された映像が流れていた。それを止め、本来の映像を確認してみたところ、被害者の顔を片手で掴んでいるユートピアドーパントの姿が映っていたんだ。克己君からの聞いた彼の能力と照らし合わせてみれば、自ずと答えはわかる」

「希望を奪われた人間は、その証拠として顔を奪われる……。どこが『理想郷』だッ！　こんなのが『理想郷』の力なのか……。ッ!?」

「でも、どうして私達にこの事を黙っていたの？　こんなの、わたしたち一二課が真つ先に解決すべき事件じゃない」

「……。すまない。翼はまだ回復していないし、響君はデユランダルを振るつた影響で眠っている。克己君達も事後処理を手伝っていたから、それを話せるタイミングを逃してしまったのだ」

頭を下げる弦十郎だが、克己達はそんな彼を責めず、了子が彼に顔を上げさせた。

「みんなを気遣っていたのね。本当なら『なんで早く言わなかった』ってのはっ倒してやりたいところだけど、そういうところが貴方らしくて素敵よ?」

「了子君……。私も、あの後すぐにそういう情報が入ってきたら死んじやいそうです……。」

「気遣う事も上に立つ者としての務め。実に叔父様らしい」

「了子の言う通り、そういうところがボスらしい。お前らもそう思うだろう?」

克己に京水とレイカが頷くと、弦十郎は改めて「すまない」と一言謝ってから、写真を胸ポケットに仕舞う。

「でも、そうになると心配です。あの人がいつまた人を襲うかわからないんですから……。」

「ユートピアメモリの性能を改めて確認する為に人を襲う可能性があるかも知れない。でも、この街の住人全員を護る事は出来ない……。」

「悔しいが、その通りだ。だが、部下や情報網を駆使して奴の情報を集

める事は出来るかもしれん」

「……………そういえば、未来は大丈夫なんですか？」

「お友達に関しては心配しなくても大丈夫よ。緒川君達から機密保護の説明を受けたら、すぐに解放されるわよ♪」

「はい……………」

一先ず未来が安全だという事に響は安心するが、その表情は晴れなかつた。

(未来……………)

隠し事はしないと約束したのに、黙ってシンフォギアを纏って戦っている自分を見て、彼女はなにを思っているのだろうか、響は親友について考えるのだった。

(……………なんでだよ、フィーネ……………)

ユートピアドローパントに希望を奪われかけたところを響達と一緒に賢達に助け出されたクリスは、重い足取りで夜の街を歩いていた。

あの装置に繋がれて痛みを与えられるのは嫌だったが、それでも自分を受け入れてくれたフィーネに切り捨てられたクリスは、ふと後ろを歩く二人に声をかける。

「なあ、フィーネは本当に、あたしを捨てたのか？」

「襲われたくせにまだ信じられねえのか？ お前は捨てられたんだよ、クリス」

「そう簡単に信じられる程、あたしは出来てねえんだよ。……………お前達はどうしてあたしについてくるんだよ。捨てられたのはあたしだけで、お前達は捨てられてないはずだろ？」

「財団Xが関わっていた事がわかった以上、もう彼女に従うつもりは

無い」

「あの女、奴らと組んでいた事を俺達に黙ってやがった。前からどこかに俺達が集めたメモリのデータを送っていた事は気になってたが、まさかその相手が財団Xだなんてなッ！」

吐き捨てるように言った剛三が近くの電柱を殴りつける。持ち前の怪力によって殴られた箇所が僅かに凹んだ事に気付かぬまま、三人は歩を進める。

「どうするよ、賢。俺達が見つけたメモリは全部奴の手元にある。なんとかして取り戻さねえとまずいぞ」

フィーネの取引相手は米軍だけかと思っていたが、財団Xも関わっていたとなると話は変わってくる。米軍であれば手に入れた技術を他国に流出させる事は無いだろうが、財団Xは支援している相手に惜しげも無くガイアメモリの情報を提供するだろう。そうなることで、無辜の人々がガイアメモリを使用した犯罪の被害者になってしまう可能性が出てくる。

フィーネがガイアメモリの情報を財団Xに提供し始めたのは賢達が彼女の下で動くようになってからだろうが、この短時間で財団Xはガイアメモリ専用のドライバを開発するまでに至っている。

ドライバが作られてしまった以上、もう量産を止める事は出来ないだろう。だが、メモリの情報はフィーネの手元にあるメモリを全て回収してしまえば、少しではあっても情報の流出は防げるはずだ。

「せめてゾーンさえあればなあ。あれを克己に渡せたら万々歳なんだが……………」

『地帯』の記憶を内包しているT2ゾーンメモリには物体移動能力が備わっている。それさえ手に入れば後はエターナルに変身した克己に使用してもらおう事で残りのメモリを回収する事が出来る。だが

彼らが集めたメモリの中にそれは無く、今もこの街のどこかに存在しているのだろう。

「だが、なにもゾーンが無ければメモリを回収出来ないわけじゃない。今度ファイネに会った時に奪えるだけ奪うだけだ」

「おう！ んじゃ、そうと決まれば早速——」

ファイネのところへ向かおうと言い出そうとした剛三だったが、腹部から空腹を訴える声が聞こえて突き上げかけた拳を下ろした。

「駄目だ………腹減った………。こんなんじゃあの屋敷に突撃出来ねえ………」

腹部を押さえて項垂れる剛三に呼応するように、クリスと賢の腹の虫も唸り声を上げた。

「腹減ったなあ………。なにか食べたいところだけど、あたし金なんて持ってねえし………」

「金に関しては大丈夫だ」

「あん？」

声を揃えて二人が賢を見ると、その手にはファイネから与えられたスマホが握られていた。

「ガイアメモリ捜索に出る時、ファイネから貰ったものだ。道中腹を空かした時に食料を買えるように電子マネーが入っていた」

「おい、大丈夫なのかよ。GPSとかでバレたりしたら最悪だぞ」

「大丈夫だ。搭載されていたGPS機能は解除したし、怪しい部分は取り除いておいた。どうやったかは秘密だ。さて、なにが食べたい？」

「俺はおにぎりで。具はなんでもいいぜ」

「クリスは？」

「……………あんばん。あと牛乳」

「了解」
「ラジャー」

近くのコンビニで賢が買ってきた夕食を公園で食べ始める。

「……………なあ」

最後に口に含んだあんばんを牛乳で一気に飲み込んだクリスが、自分を挟む形で食事を取っている二人に声をかける。二人は相変わらず食事を続けていたが、その様子からちやんとクリスの話を聞いていると感じたクリスは、自分の抱く疑問をぶつける。

「前にも訊いたけど、なんであたしを助けてくれたんだ？ 向こうにいる仮面ライダーとかはあんたらの元同僚だから助けるのもわかるけど、どうしてあたしまで……………」

「そういう事なら賢が答えるべきだな。俺はお前を救おうとしていた賢に従っただけだし」

「そうなのか？」

「……………ああ」

横から覗き込んでくるクリスに頷く賢。それを見て、クリスはふと、以前見た彼とその家族が写った写真を思い出す。

「……………もしかして、あたしをあんたの娘と重ねているのか？」

「……………やっぱり、そう思うのか？」

横目で見てくる賢に頷く。

髪の色は自分とは違う色だったが、彼の妻に抱えられている子どもの顔立ちは、どこか自分と似ていた。彼が自分を助けるのは、自分に娘の面影を重ねていたからなのかと、クリスは考えているのだ。

「違うと言えば嘘になる。なにせ、もう会えないんだ。妻にも娘にも」
「……………それって」

嫌な想像が出来てしまったクリスだったが、賢は首を振ってそれを否定した。

「いや、生きている……………かもしれない」

「かもしれないって……………。随分と曖昧な返事だな。じゃあ、なんで会いに行かずに傭兵なんてやってんだよ」

「……………捨てたからだよ、彼女達を。いや、『捨てざるを得なかった』と言った方が正しいが……………」

「な、なんだと……………ツ!？」

思わず立ち上がったクリスが賢の胸倉を掴んで揺さぶる。

「お前の家族なんだろうツ!? なんで捨てたりなんかしたんだよツ!？」

誰だって、自分の家族より優先すべき事なんて無いはずだ。自分を庇って命を落とした両親だって、余程の事じゃない限りは自分と遊んでくれていた。それなのにこの男は、家族を捨てて傭兵になったと言う。それがクリスの怒りを燃え上がらせていた。

「やめとけよ、クリス。そいつは……………いや、俺達とはある事情から色んなものを捨ててきたんだよ。そいつみたいに家族を捨てた奴だっっていれば、俺みたいに仲間を捨てた奴だっっている。俺達がいた部隊は、そういった連中の集まりだったんだよ」
「でも……………ツ!？」

クリスが反論しようとした瞬間、近くから子どもの泣き声が聞こえて辺りを見渡す。すると遠くのベンチで泣いている少女と、その前で

立つ少年が見えた。

「おいこらッ！　弱い者をイジメるなッ！」

二人の様子から、少年が少女をイジメて泣かせていると考えたクリスが少しだけ威嚇するように声を荒げて二人に近付くと、少年が顔をこちらに向けてきた。

「え、イジメてなんかないよッ！　父ちゃんがいなくなっ一緒に探してたんだけど、もう歩けないって……………」

「ふええ……………だって、だって……………ううう……………。お父さん、どこおッ！　うわああああんッ！」

涙や鼻水でぐしゃぐしゃになってはいるが、顔を上げた少女の顔立ちは少年と似ていた。どうやら、彼の言っていた事は本当だったらしい。

「ああもう、泣くなっッ！　クソッ！　こういう時どうすりゃいいんだよ……………ッ！」

大声で泣く少女にどう接するべきかわからずクリスがおろおろとしていると、少女の前に賢が立ち、彼女と同じ目線になれるよう屈んで視線を通わせる。

「大丈夫だ、俺達と一緒に探してやる。だから泣くな」

そう言っってポケットから取り出したハンカチで少女の顔を拭くと、少女は震えた声で賢を見る。

「ほ、本当……………?」

「本当だ。クリスもいいだろ?」

「あ、ああ……………」

「ねえねえ、お姉ちゃん、おてて繋いでッ！ おじさんもッ！」

「はあッ!? なんであたしが……………」

「駄目……………」

「わかったから泣くなッ！」

断ろうとした途端にうるうるすると両目に涙を溜め始めた少女に慌てながらもクリスは彼女の左手を握り、賢は右手を握った。

「わッ！ おじさん冷たいッ！ 氷みたいッ！」

賢の手の冷たさに一瞬驚くも、すぐに笑顔になった少女に賢も笑顔になっている様子を見ていた剛三は、自分の隣に立つ少年を見下ろす。

「坊主はどうする？ 俺と手え繋ぐか？」

「おじさんデカいから繋げないよ」

「だったらこうだなッ！」

「え？ わあッ!？」

少年を肩に乗せて体を動かしながら、剛三は少年に口を開く。

「お前は親父を探すんだな。早く親父を見つけてこいつを安心させろ」

「う、うん」

「よしッ！ それじゃあ、出発だッ！」

迷子になった二人の父親を捜すべく歩き出す。その最中、クリスはどうすれば今自分や賢と手を繋いでいる少女の気持ちを明るくできるかを考え、ある行動を実行した。

「……………ふん♪ ふんふんふん……………♪」

それは鼻歌である。元になった歌など無い、即席で考えた歌ではあるが、音楽界のサラブレッドである彼女が歌うそれは、少女の気持ちを晴れやかにするのに充分だった。

「わあ……………。お姉ちゃん、歌好きなの？」

「んなわけねえだろ。歌なんて大っ嫌いだ。特に、壊す事しか出来ないあたしの歌はな……………」

「それは違うぞ、クリス」

被虐的に呟いた言葉を賢に否定され、クリスはキツと賢を睨む。

「なんでだよ、賢。あたしの歌は壊す事しか出来ねえんだよ。今日だって、あいつらに……………」

「それはお前が、『自分の歌はなにかを破壊する為にある』と思っているからだ。武器というものは、それを取る者によって善にも悪にもなる。お前にとつての武器が歌であるなら、『自分の歌は誰かを救う為にある』と考える。そうすればお前の歌は、破壊ではなく救済を行うものになる」

「俺達を使うガイアメモリだって、使い方によっちゃ人を傷つけられるが、逆に人を救う事だって出来る。それはお前も見てきたはずだぜ、クリス」

思い起こされるのは、数日前のデュランダル移送の妨害作戦と今日の出来事。ドーパントに変身した賢と剛三は妨害作戦ではその力で二課の職員らの命を奪い、今日の戦いではクリス達を救って撤退した。

彼らの言葉に嘘は無い事は、クリスも理解していた。

(でも、あたしは……………)

「あッ、父ちゃんッ！」

その時、剛三に肩車されていた少年が父親を見つけた。彼が指差した方向には彼らの名を叫んで駆け寄ってくる男性がいた。

「お前達……どこに行つてたんだッ！ ん、この方々は……？」

子ども達を抱き締め、クリス達を見る父親に少女が説明する。

「お姉ちゃん達が一緒に迷子になってくれた♪」

「違うだろ、一緒に父ちゃんを探してくれたんだ」

「すみません、ご迷惑をおかけしました……。ほら、三人にお礼は言ったのか？」

「ありがとう！」

父親に促されて子ども達が頭を下げ、感謝の言葉を言い、二人の元気な姿にクリスは自然と笑顔になる。

「仲、いいんだな。……そうだ。そんな風に仲良くするにはどうすればいいのか、教えてくれよ」

「そんなのわからないよ。いつも喧嘩しちゃうし」

「喧嘩しちゃうけど、仲直りするから仲良しく♪ それに……」

少年に抱き着いた少女がクリス達を見上げる。

「お姉ちゃん達も仲良しでしょ？ 私にはよくわからないけど、お姉ちゃん達、とても仲良しに見えたよ？」

「そ、そうか？ お前がそう言うんなら、そうかもしれないな……」

他人と仲良くなる方法がわからないクリスマスは自分よりも遙かに年下の少女の言葉にも頷いてしまう。

「本当にありがとうございました。さあ、帰るぞ」

「うんツ！ バイバクイツ！」

勢いよく手を振って父親に連れられて帰っていく子ども達に手を振り返していると、賢が口を開いた。

「……………クリスマス、聞いてくれるか？」

「なんだよ？」

「『お前に娘を重ねていない』と言えば嘘になるが、それでも、俺はお前の笑顔を見たいんだ」

今も手を振り続けている子ども達を見つめながら続ける。

「子どもには笑顔が一番。泣き顔なんて見たくないし、辛い事も感じさせたくない。でも、生きていく以上、辛い目に遭うのは必然。その中には意図せず襲い掛かってくるものもある。俺は可能な限り、そういったものから彼らを護りたいんだよ」

子どもは宝だからな、と微笑んだ賢に、「ま、そういうこった」と剛三が続く。

「お前の歌が壊す事しか出来ないのなら、俺も同じさ。力に任せて全部ぶっ壊すのが俺のやり方で、昔はそれだけだったさ。でも、今の俺はその力を『誰かを救う為』に振るっている。俺に出来たんだ。俺よりも柔軟な考えが出来るお前なら出来るはずだぜ？」

「本当に、あたしにも出来るのか？」

「出来るさ、クリスマスなら」

バシッとクリスの肩を叩いて笑う剛三に頷く賢。その二人の間に挟まれながら、クリスは自分の胸に手を当てる。

(私にも、護れたりするのか……………？ みんなの命を……………)

そして次に思い浮かぶのは、先程の少女の言葉と、あのシンフォギア装者の言葉。

『喧嘩しちゃうけど、仲直りするから仲良しく♪』

『ちゃんと話をすれば、きつとわかり合えるはずッ！ だって私達、同じ人間だよッ！』

(話をすれば……………わかり合えて、仲直りできるのかな……………。あたしと、フィーネも……………)

もしそれが出来るなら、自分達も仲直り出来るかもしれない。だったら自分は、彼女と仲直りすべきだ。

「……………賢、剛三」

クリスは二人を順に見つめながら、今後の予定を話した。

「明日、フィーネのところに行く。あたしは、フィーネと仲直りしたい。お前達もフィーネに用があるんだろ？ 付き合ってくれよ」

「丁度いい機会だ。了解した」

「でも、危なくなったらお前の首根っこ掴んですぐに撤退するぞ。それでもいいな？」

「……………ああ、頼む」

「だが、今日はもう遅い。どこか休める場所を探そう」

歩き出した三人は街外れに廃れたマンションを見つけ、そこで休む事に決めた。

そして夜が明け、三人はフィーネのいる屋敷へと向かうのだった。

裏切り、裏切られて

「確かにこちらからの依頼ではあるけれど、仕事が杜撰すぎると言っているのよ」

屋敷の外に広がる海を背景にフィーネが苛立ちを含んだ声色で電話の相手に返す。

現在フィーネが相手しているのは米国政府の下で働く者達。彼らはフィーネに協力する代わりにソロモンの杖などの聖遺物のデータを渡せと要求してきているのだが、支援の仕方がどうにもおかしい。まるでわざとフィーネの足がつくように行動しているように感じられるのだ。

尤も、フィーネは既にある男によってその正体は見破られてしまっているのだが。今はそれを語るべき時ではない。

「足がつけばこちらの身動きが取れなくなるわ。まさか、それも貴方達の思惑というのなら——」

それからフィーネと通話相手の口論は続き、最終的にフィーネが自分から切る形で通話を終了させると、彼女の様子を眺めていた財団Xのエージェント——ユートピアドールパントこと加頭順が抑揚を感じさせない口調で話しかけてきた。

「その様子から察するに、米国政府は貴女に責任を被せるつもりですよですね」

「まったく、米国の犬はうるさくて敵わないわね。うるさいから聖遺物じゃなくて、ガイアメモリの情報を渡そうかしら」

「財団Xとしての立場から言わせてもらえば、それはやめてもらいたいですね。情報の独占というものは商売敵に対して強いアドバンテージが取れますから」

ガイアメモリの情報を有しているのが財団Xだけであれば、彼らと同じように軍事兵器などを売りに商売している組織に対して優位に立てる。が、その逆も然りで、ライバル組織が自分達に無い情報を持っていると向こうが優位に立つてしまう。いくら世界各地の裏で暗躍しているといつても、所詮は組織。満足に商売出来なければ運営や兵器開発に回せる資金が尽きてしまうのだ。

「私とお金が無いと困りますからね。資金が無くては満足な食事も出来ませんし」

「生命の気配が感じられない貴方からそんな言葉が出るなんてね。ずっと人間のふりをしている機械だと思ってたわ」

「財団Xの職員は基本そうですよ。みんなこういった顔です」

自分の感情を全く表さない顔を指差して笑う順だが、口元は笑っていても目が笑っていないので返って不気味に見える。

「みんながみんな同じ顔、ね。想像したくないわ」

「それで、これからどうするのです？ 財団Xわたしが言うのもアレですが、彼らは貴女から齎される情報を全て手に入れるまで貴方にしがみつきますよ。少し時間が立てば、また先のような電話がかかってくるでしょうね。彼らを黙らせるとすれば……………」

そこで順が見たのは、机の上に置かれたアタッシュケースに納められた十数本のメモリ。克己達の持っているメモリを除いたほぼ全てのメモリがそこに収納されており、窓から差し込む光がそれらに反射してまるで宝石箱のように輝いて見えた。

「まるで人を魅了する禁断バンドラボックスの箱ね。いつその事、本当に渡しちやおうかしら？」

「おや、あのイチイバルの少女ではないんですね。用済みと切り捨てたので、てつきり彼らに渡すものかと」

およそフィーネらしくない言葉に意外と感じた順を見る事無く、フィーネは外に広がる海を眺める。

「私も意外に思ってるわ。用済みと切り捨てたくせに、あの子を向こうに渡そうって気持ちにならないのよ」

目的の為なら手段は選んでいられないし、その過程として多くの惨劇も生み出してきたフィーネにとっても、この気持ちは意外だったのだ。

「私も遂に焼きが回ったのかしら。駄目ね、こんなんじやあの方の隣になんて一生立てないわ。それもこれも、全部あの男のせいよ」

「あの男とは？」

「二課の司令官よ。あの男ったら、私の正体に気付いてるくせに殺さなかつたんだもん。本当に馬鹿馬鹿しい。一瞬でも隙を見せでもしたらすぐに殺してやるわ」

「おや、恐ろしい。随分と貴女の恨みを買っているようだ。……………」

話をあのイチイバルの少女に戻しますが、米国に売らないのであれば、我々に売ってははどうです？」

「我々って……………財団Xに？」

「ええ、財団Xにです。貴女が真に彼女を用済みと言うのであれば、米
国政府の代わりに我々が買い上げて——」

「——あたしを商品みたいに言うんじやねえッ！」

その時、怒号と共に扉を蹴破ってクリスが部屋に入り、突然の来客に二人の視線が向く。

「さっきから話を聞いてりやペラペラペラと……………ッ！ あたしはあんたらの道具なんかじゃねえッ！ 用済みだからって切り捨てやがって……………、あんたらもあたしを『物』のように扱うって言

うのかよッ!？」

「……………」

哀しみと怒りに染まった文句を叫び続けるクリスを、フィーネは黙って見つめている。

「あんたに協力すれば、争いの無い世界が作れるって聞いたから、あたしは今まであんたに尽くして来たってのに、その結果がこれかよッ！」

「……………確かに、私はそう言って貴女を引き入れたわ。だけど、考えてごらんなさい。貴女のやり方じゃ、争いを無くす事なんて出来はしないわ」

「な……………ッ！」

絶句するクリスに、フィーネは続ける。彼女の幻想を否定し、現実を教えるように。

「精々一つ潰して、新たな火種を二つ三つばら撒く事くらいかしら？」

「あんたが言った事じゃないかッ！ 痛みもギアも、あんたがあたしにくれたものだけが——」

「私の与えたシンフォギアを纏いながら、毛ほどの役にも立たない人間に用は無いわ。わかったらさっさと立ち去りなさい」

「いえ、それは困ります」

その時、フィーネの前に出た順がクリスの頭から爪先までを品定めするように視線を這わせた。その視線に嫌悪感を感じて思わず両腕で自分の体を抱き締めるクリスに、順は彼女を歓迎するように両腕を広げた。

「我々に利益を齎してくれる者が護衛もつけずに現れたのです。あのドーパント達がないのは些か残念ですが、無い物ねだりはしない主

義ですので、貴女だけでも連れていく事にしましょう」

トリガードーパントとメタルドーパントとの戦闘データが取れない事を少しでも残念がりながらも考えを改めた順がガイアドライバーを腰に巻く。

「全ては、財団Xの為に」

ユートピアメモリを取り出そうと懐に手を入れようとしたその時

「———そうはさせねえぜッ！」

剛三と賢がフィーネの背後にあったガラスを割って侵入してきた。予期せぬ強襲に怯んだ二人の間を歩いて賢が彼らを蹴り飛ばし、剛三はその間にガイアメモリが収納されたアタッシュケースを回収する。

「おのれ……………ッ！ 不意打ちとはやってくれるッ！」

不意打ちを受けた事に苛立ったフィーネがソロモンの杖からノイズを出現させる。

「カ・ディングルは完成しているも同然。もうお前達に固執する理由はない」

「カ・ディングル……………?」

聞き慣れない単語に目を細める三人にフィーネは不敵な笑みを浮かべる。

「貴方達は知りすぎてしまったわ。だから———」

フィーネの全身を光の粒子が浮かび、それらは彼女の全身を包み込んで一つの鎧へと変化する。

それはクリスがイチイバルのギアを起動するまでの間身に纏っていた、ネフシユタンの鎧。だが彼女から発せられる威圧感クリスの比になっていないものであり、それに三人が身構えた瞬間――

「消えなさい」

三人がこれまで感じた事の無い殺気を纏った二本の鞭が彼らに襲い掛かってきた。

爆音と共に彼らを爆煙が包み込むが、

『メタル！』

『トリガー！』

「Killter Ichaival tron」

煙が晴れた先には二体のドーパントと、彼らに護られるように立つイチイバルのシンフォギアを纏ったクリスがいた。

「悪いがこっちにやり合う気は無いんでね。退散させてもらうぜツ
！」

メタルドーパントが地面にメタルシャフトを叩き付けて巻き起こした爆煙が彼らの姿を隠し、フィーネがノイズを突撃させるも煙の向こうから聞こえる発砲音から、トリガードーパントによってノイズが全滅したという事を悟る。

「……………逃がしてしまったようですね。自分達だけでは勝てないと悟ったのでしょうか。敵ながら賢明な判断です」

賢に蹴り飛ばされた際にメモリを取り出そうとしてしていた手からメモリが飛んで行つてしまい、ユートピアドーパントに変身し損ねた順がパチパチとこの場から去った三人に賞賛の拍手を送る隣で、フィーネはソロモンの杖から新たにノイズを出現させる。

「逃げてもそれがどこへかはわかり切っているわ。さて、いつまで逃げ続けられるかしらね？」

「——ビンゴですッ！ 雪音クリス、16歳」

監視カメラが捉えたクリスの姿をモニターに表示した藤堯が彼女の詳細を弦十郎達に告げる。

「過去に選抜されたギア装着候補の一人ですが、2年前テロに巻き込まれて以来、行方知れずとなっていました」

「……………それがまさか、イチイバルと共に敵の手に渡っていたとは」「聖遺物を力に変えて戦う技術において、我々の優位性は完全に失われてしまいましたね」

「敵の正体、フィーネの目的は……………」

その時、弦十郎の隣でモニターを見ていた了子が気分が沈んでいる同僚達を励ますように口を開いた。

「深刻になるのはわかるけど、うちの装者は二人とも健在。頭を抱えるにはまだ早すぎるわよ？」

「本当に大丈夫か？ 響君、翼」

「少し疲れはありますが、大きな怪我はありませんし、大丈夫ですッ！ 疲れはご飯をいっぱい食べて、ぐっすり眠れば大丈夫ですッ！」

「私も万全とは言えませんが、立花の援護くらいは出来そうです」

「そんなに心配しなくても大丈夫だ。もし二人が危険な状況に陥った

ら、俺達が護る」

「頼んだぞ、お前達」

弦十郎達はノイズが跋扈する戦場で戦う事は出来ない。よって必然的に現場でピンチになった響達を救えるのは、彼女達と同じくノイズに対抗できる術を持った克己達だけである。弦十郎に克己達が頷いている横で、響は自分にとっての帰るべき場所である少女を思い浮かべていた。

——翌日、克己が《私立リデイアン音楽院》の廊下を歩いていると、翼を連れた響に屋上に誘われた。どうやら自分達以外には聞かれたくない話らしく、響の誘いに了承した克己は彼女達と共に屋上に登る。

「私、自分なりに覚悟を決めたつもりでした。護りたいものを護る為、シンフォギアの戦士になるんだって。……………でも、駄目ですね。小さな事に気持ちが悪されて、なにも手につきません。私、もっと強くならなきゃいけないのに……………。変わりたいのに……………」

以前、響は親友である未来にシンフォギアを纏って戦っているところを見られてしまった。隠し事をしないという約束を破った彼女に対して憤りを感じた未来は昨晚響を責め、それが原因で響の覚悟が揺らいだのだろう。

それは克己と翼も知っており、響はそんな彼らに相談したくて声をかけたのだ。

そうして彼女の話聞いた翼は、響に自分の考えを吐露した。

「その小さなものが立花が本当に護りたいものだとしたら、今のままでもいいんじゃないかな……………。立花は、きっと立花のまま強くなれる」

「翼さん……………」

「人間は個々の考えを持つ生き物だからな。喧嘩なんて誰だってする。でも、それを経験する事でより仲を深める事が出来るのもまた人間だ。寄りを戻せない程の喧嘩だったら俺達にはどうする事も出来ないけど、一度喧嘩したぐらいなら大丈夫なんじゃないか？ なにもこれが初めてってわけじゃないだろ？」

「克己先生……………」

「……………奏や大道のように人を元気づけるのは難しいな」

「いや、俺だって同じさ。誰かを元気づけるなんて、全然やった事無いからな」

少し哀しそうに翼が呟くに自分も同じだと言う克己だが、そんな二人の言葉を響が否定した。

「そんな事ありませんッ！ 前にも私、同じような言葉で親友に励まされたんですッ！ ……………それでも私は、また落ち込んでいます。駄目ですよ〜」

少し遠くを見つめていた響だったが、「それより」と話題を変える。

「翼さん、まだ痛むんですか？」

「大事を取っているだけ。気にするほどでは無い」

「そっか、よかったです」

翼の体には、未だに以前の戦いで使用した絶唱のダメージが残っている。装者が有する攻撃手段の中でも絶大な威力を誇る絶唱であるが、そのバックファイアも凄まじいものであり、数日経った今でも翼はまとも体を動かせないでいるのだ。

「絶唱による肉体への負荷は絶大。まさに他者も自分も、総てを破壊し尽くす『滅びの歌』。その代償と思えば、このくらい安いもの」

「絶唱……………滅びの歌……………。……………でも、でもですね、翼さんッ！」

なに不自由なく動く自分の体を動かしながら、響は翼に言う。

「2年前、私が辛いリハビリを乗り越えられたのは、翼さんの歌に励まされたからですッ！ 翼さんの歌が、滅びの歌だけじゃないって事……………聴く人に元気をくれる歌だって事、私は知っていますッ！」

「立花……………」

「だから早く元気になってくださいッ！ 私、翼さんの歌が大好きですッ！」

それに、と響は克己へと視線を移した。

「克己先生も、私の悩みに真摯に向き合ってくれましたッ！ 経験が無いなら、私が相手になりますッ！ 私、自分で言うのもアレですが、結構悩みやすいタイプなんでッ！」

克己と翼が目を合わせ、一瞬の間を置いて笑い始める。それにぽかんとしている響に、二人は笑いながら言葉を交える。

「ふふ、まるで私達が励まされているみたいだな」

「まったくだ。ハハハハハ」

「え、あれ……………？ はは、あはははは」

それから三人は屋上でしばしの間笑い続けるのだった。

しかしそれも束の間、彼らの耳にノイズの襲来を告げる警報が届いた。

「……………は……………？」

見慣れない天井を視界に入れたクリスが上半身を起こす。自分は確か、賢達と共にフィーネの屋敷から逃げる最中に彼女の差し向けたノイズ達と一晩中戦い続けたはずだ。最後のノイズを倒した後の記憶が無いから、その間にこの場所に運ばれたのだろうか。

「よかった、目が覚めたのね」

「……………ッ!? お前は……………ぐうッ!?」

「あッ、駄目よ。まだ休んでなきゃ……………」

突然声をかけてきた見慣れない少女から距離を取ろうとした途端に痛み出した箇所を押さえて呻くクリスを少女が寝かせる。

「落ち着いて。貴女の仲間が病院は嫌だって言ったから、知り合いの家を貸してもらっているの」

「仲間……………? そうだ、二人はどうした……………?」

「ここにいますぜ」

扉を開けて剛三が部屋に入り、次に部屋に入ってきた賢が少女に頭を下げる。

「ありがとう、貴女のおかげで助かった」

「いえいえ、目の前に倒れている人達がいたら、助けるのは当たり前ですよ」

「クリス、俺達はこいつ……………小日向未来に助けてもらったんだぜ? ちゃんとお礼言えよ」

「あ、当たり前前だろ。その……………助けてくれて、ありがとう……………」

「どういたしまして。……………ちゃんと休んで、元気になってね」

「……………お前、なんの訊かないんだな……………」

突然現れたであろうボロボロの自分達を見て、彼女がなにも疑問を抱かずにここに連れてきたとは考えにくい。なのに彼女は自分達にないも尋ねてこない。その事を不思議に思ったクリスマスが未来を見ると、未来は顔を伏せた。

「うん。……………私は、そういうの苦手みたい」

「困り事か？ だったら相談に乗るぜ？」

「え？」

俯かせていた顔を上げる未来に、剛三が言う。

「俺達を助けてくれた恩だ。今日会ったばかりの連中に相談なんて気が引けるだろうが、なにか返してやんねえと気が済まねえんだ。なあ、教えてくれよ。お前はなにもに悩んでんだ？」

「……………実は……………」

未来はぼつりぼつりと、自分の悩み事を三人に打ち明けた。

なによりも大切な友人と喧嘩してしまった事。向こうにも事情があったのはわかっているのに、素直になれなくて擦れ違ってしまったている事。それを話している間、三人は黙って彼女の話を聞いていた。

「私は今までの関係を壊したくなかったのに、一番大切なものを壊してしまったの。向こうの事情が事情なだけに、私に黙ってるしかなかったのに、私はその気持ちを理解出来なくて……………」

「誰かと喧嘩、か……………。あたしにはよくわからない事だな」

「友達と喧嘩した事無いの？」

「……………友達、いないんだ」

「え？」

今度はクリスマスが俯き、掛布団をぎゅつと握って自分の過去を話す。

「地球の裏側でパパとママを殺されたあたしは、ずっと一人で生きてきたからな。友達どころじゃなかった……………」

「そんな……………」

「やっとあたしを理解してくれると思った人も、あたしを道具のように扱うばかりだった。誰もまともに相手してくれなかったのさ……………ッ！」

次に思い出すのは、幼少期に両親を喪った後に出会った大人達との時間。出来る事なら思い出たくもない記憶を、今のクリスは思い出していた。

「大人はどいつもこいつもクズ揃いだッ！ 痛いと言っても聞いてくれなかった……………。やめてと言っても聞いてくれなかった……………ッ！ あたしの話なんて、これっぽっちも聞いてくれなかった……………」

クリスの話を賢達が黙って聞いていると、クリスは「なあ」と未来を見る。

「お前、その喧嘩の相手、ぶつ飛ばしちまいな。どつちが強えのかハッキリさせたら、そこで終了。とっとと仲直り。そうだろう？」

「えッ!? 出来ないよ、そんな事。でも……………ありがとう、氣遣ってくれて……………あ、えくと……………」

言い淀んだ未来の様子に、まだ自分が自己紹介していない事に気付いたクリスが、彼女に己の名を告げる。

「……………クリス。雪音クリスだ」

「優しいんだね、クリスは。私は小日向未来。もしもクリスがいいのなら……………」

未来はクリスに手を差し伸べる。

「……………私は、クリスの友達になりたい」
「……………」

驚いた様子で未来の顔と差し出された手を交互に見るクリスは、やがて「……………悪い」と小さく呟いた。

「あたしは、まだ誰かと友達になれるような奴じゃないんだ。その握手は、まだ取っておいてくれ」

「……………うん、待ってるよ。それじゃあ私、おばさんの手伝いに行ってくるね」

この家の主であろう女性の元へ向かう為に扉に近付いた未来は、そこで振り返ってクリスを見る。

「クリスは大人に良い印象を持ってないようだけど、賢さん達には感謝してほしいな。二人とも、クリスの事を凄く心配してたんだよ?」

言い残し、部屋から出て行く未来。そこから流れる静寂を破ったのは、クリスに頭を下げた剛三だった。

「すまねえ、クリス。お前がそんな事を思っていたのに、お前に近付いたりなんかして……………。嫌な思いさせちまっただろうな……………」
「やめてくれよ、剛三。確かにあたしは大人が嫌いだ。でも……………」

掛布団で少しだけ赤くなった顔を隠し、クリスは細々と呟いた。

「お前達は、別だ」

面と向かって言うのが恥ずかしいのか、こちらを見ずにそう言った

クリスに賢と剛三は顔を合わせ、一瞬の間を置いて笑い始めた。

「な、なんだよツ！ あたしなにか変な事言ったかツ!?」

「いや、クリスにしては随分と可愛げがあると思つてな。ハハハハッ！」

「くくくッ！ 笑うな笑うなツ！ これでも喰らえツ！」

腰に触れていた枕を掴み上げて投げ、それが顔面に直撃した剛三が倒れた瞬間、ノイズの襲撃を告げる警報が鳴り響いた。

「三人とも、早く外にッ！ 急いでッ！」

焦った様子で扉を開けてきた未来に促されて外に出ると、そこには逃げ惑う人々の姿があった。

「おい、いったいなんの騒ぎだ？」

「なについて……………ノイズが現れたのよツ！ 警戒警報知らないの？」

「急いで逃げようッ！」

「ノイズが……………？ く……………ッ！」

「あ、クリスッ!? どこに行くのッ!? そっちは……………」

「悪いな、未来。お前はさっさと逃げろ。こいつは俺達の出番だッ！」

もし今回出現したノイズが、自分達を抹殺する為にフィーネが召喚したのだとすれば、これは自分達の責任である。ならば、ノイズは自分達が倒すべきだと走り出す。クリスの後を追って剛三が走っていき、賢もそれに続こうとすると、未来に呼び止められた。

「賢さんと剛三さんって、もしかして克己先生の……………」

「克己を知っているのか？」

「は、はい。大道克己。私達の先生で、いつも貴方達と同じ服装をしています」

「……………そうか。それなら、克己にこれを渡してほしい」

賢は右手に持っていたアタツシユケースを未来に渡す。

「それを持って逃げる。いいか、それは絶対に奪われてはならないものだ。白い服の男と金髪の女に気を付ける。わかったらさっさと行けッ！」

「は、はいッ！」

他の人々が逃げていった方角に未来もアタツシユケースを抱えて走り出し、賢はクリス達を追うべく走り出した。

（……………馬鹿だ……………、あたしつてばなにやらかしてんだ……………ッ！）

その頃、クリスはノイズに触れられたであろう人間が変化した炭素の塊を前に崩れ落ちていた。

「あたしがしたかったのは、こんな事じゃない……………ッ！」

いつだってそうだ。自分がした事は善い方へ転がった事など一度も無く、決まって悪い方へ転がってしまう。今回もそうだ。自分がソロモンの杖を起動させたりなんかしたから、関係ない市民まで危険な目に遭わせてしまった。

「哀しむのは後だ、来たぞッ！」

クリスが顔を上げると、ノイズの集団が獲物を求めてこちらに向かって来ているのが見えた。

「来たな、ノイズども。あたし達はここだ……………だから、関係ない奴

らのところになんて行くんじゃないやねえッ！——Killt
er Ic……………げほ、げほッ！」

イチイバルギアを纏う為の聖句を口にしようとするが途中でむせてしまい、ノイズに先手を取られてしまった。だがそれは、彼らが許さない。

「俺達を……………」

『メタル！』

「忘れるな」

『トリガー！』

クリスを狙って特攻してきたノイズを、彼女の前に飛び出した二体のドーパントが殴り飛ばした。だがノイズは前方から迫って来ているだけではなく、上空からも迫って来ていた。

「しま——」

「——ふんッ！ とあッ！」

だが、上空から来たノイズはクリスの前に降り立った人物が彼女を抱えて攻撃を躲すと同時に、道路を捲り上がらせた事によって作った壁を破壊して散弾の如く破片を飛び散らせてノイズを吹っ飛ばした。

「な……………ッ!？」

「マジかよ……………ッ!？」

「大丈夫か？」

「え？ あ、ああ……………」

およそ人間技とは思えない技で道路を破壊したその男は、平然とした態度でクリスの安全を確認し、クリスがそれに対して頷くと、「よかった」と男は笑みを浮かべた。

だが、ノイズはまだ残っている。見たところ、その男はシンフォギアやメモリを持っていないようだ。

「下がってな、おっさん」

呼吸は安定している。軽く息を吸い、聖句を口ずさむ。

「Killter Ichai val tron」

イチイバルのシンフォギアを纏ったクリスは男の背後にいたノイズを撃ち抜く。

「ご覧の通りさッ！ あたし達の事はいいから、他の奴らの救助に向かいなッ！」

「だが……………」

「さっさと行け、おっさんッ！ あんたの力なら、逃げ遅れた奴らを救うなんて朝飯前だろッ!？」

「ここは俺達に任せろ」

「行くぞお前達ッ！」

メタルドーパントとトリガードーパントを引き連れて、クリスはノイズを誘導すべく走り出す。

「俺達を殺す為なら一般人を巻き込んでも構わねえってかッ！ どこまでいっても許せねえなッ！」

「結局あたしは、道具としてフィーネに捨てられたって事かよ……………ッ！」

ハチの巣にしたノイズが変化した炭素を蹴散らしながら舌打ち交じりに零すクリスの頭上からノイズが変化した槍が降ってくるが、それをトリガードーパントが撃ち抜いて消滅させる。

「危険な女だとは思っていたが、まさかここまでとはな」

「前までは無駄な騒ぎを起こす気は無かったそうだが、俺達が逃げた途端に本性曝け出してきやがったな。……………クリスッ！」

言われるがままに足を止めた瞬間、クリス目掛けて凄まじい速さで車が飛んできた。

「ちよつせえッ！」

手元のクロスボウから撃ち出された十本の矢が車に突き刺さり、爆発させる。

「なんだッ!? いきなり車が飛んできたぞッ!」

「——見つけましたよ、イチイバルの装者」

ゆつたりと、しかし隙を全く見せない歩みで黒煙の中から現れたユートピアドーパントに三人が身構える。

「炙り出しというのは楽でいいですね。対抗する術を持たない者達は逃げるか死ぬかで、術を持つ者はこうして現れる。そして、意思を持たない兵士を操るというのもまた面白い」

「……………? こいつらを差し向けてきたのはフィーネじゃないのか?」

「はい。今回は私がノイズを召喚しました。あの人は貴方方の事などどうでもいいと言っていました、私はその装者に用があるので」

「ハッ！ 連れて行ったらどんすんだよ? シンフォギアを纏うにはそれを起動出来るくらいの才能が無いと駄目なんだぜ? お前の仲間になんか奴がいるとは思えねえから、宝の持ち腐れだと思っぜ?」

「確かに、我々の中にシンフォギアを纏える者などいないでしょう。ですが、その装者を手に入れば話は別です」

クリスの持つクロスボウから、そこから撃ち出された矢によって爆破された車の残骸を見、三人に視線を戻す。

「ここまでの破壊力です。量産が出来ないのはかなり惜しいですが、恐らくこの世に一つしかない商品です。一点ものというのもたまにはいいものです」

「なんだと……………ッ！」

「世界各国がこぞつて欲しがる異端技術に、それを纏う美少女。兵器として、または愛玩用として欲しがる者達は多くいるでしょう。さぞかし高値で売れるでしょうね」

「こ、このクス野郎……………ッ！ 人の事を道具としか考えてねえッ！」

嬉々として語るユートピアドーパントの姿に怒りの炎をふつふつと燃やすドーパント達だが、それ以上に怒りを感じている人物が彼女の前にいた。

「……………そんな事の為に、あたしを捕まえようとして、その為に、関係ない連中を巻き込んだのかよ……………ッ!?!」

「巻き込まれたのは不運と言わざるを得ませんね。ですが、彼らの死は無駄ではありません。こうして貴女と会えたのですから」

「テメエ……………ッ！」

自分の中でなにかが切れた音が聞こえ、クリスはクロスボウをユートピアドーパントに向けた。

「テメエだけは絶対に許さねえッ！ ここでぶっ潰してやるッ！」

「フッフ……………潰せるものなら潰してみなさい。今度こそ、貴女を手に入れてみせましょう」

クロスボウから放たれた矢を躲し、ユートピアドーパントは三人に襲い掛かった。

私ト云ウ炎ハ猛リ、狙撃手ハ蒼キ引キ金ヲ引ク

二課からの通信を受けて克己のバイクに乗せられた響が現場に向かっていると、そう遠くない場所から少女の悲鳴が聞こえてくる。

「……………ッ!? ………………克己先生、止めてくださいッ!」

その悲鳴が誰のものをすぐに理解した響がバイクから降り、悲鳴が聞こえてきた建設中の建物へと向かっていく。その様子をみてまさかと思つた克己は自分の後を追って来たレイカ達に指示を送る。

「レイカ、響を頼む」

「わかつたわ」

「あら、ワタシは行かなくていいの?」

「響が向かった場所は建設途中の建物だ。伸縮自在なお前の腕はそういった場所には不適切だ。お前にはこっちの手伝いを任せたい」

「あら、ワタシってば期待されちゃってる? だったら頑張らないとねッ!」

レイカのバイクから克己のバイクへと乗り換え、京水はレイカに手を振る。

「それじゃあね〜♪ 響ちゃんになにかあつたら、承知しないわよッ!」

「私はそんなへましないわよ。早く行きなさい」

サムズアップしてレイカが走り去っていき、克己達はノイズが出現した現場へと急行するのだった。

———まだ鉄骨などが設置されている建物内に入った響が

辺りを見渡すが、自分以外の人の姿は無い。

誰かいないかと声を上げようとした瞬間、頭上からなにか物音が聞こえて上を見る。

(……………ツ！ ノイズツ！)

頭上にいたのは無数の触手を持つノイズ、タコ型ミリアタボノイズである。

その時、響の腕を誰かが掴んで物陰に引っぱり込んだ。声を上げるよりも早く口を塞がれた響が自分の背後にいる人物を見ると、唇に人差し指を立てて「静かに」と伝えてくる親友の姿があった。

親友が無事である事に喜ぶ響に、未来はスマホを取り出して見せる。

『静かに。あれは大きな音に反応するみたい』

(そっか。それで未来、私の口を塞いで……………)

『あれに追いかけて、ふらわーのおばちゃんここに逃げ込んだの』

(おばちゃんがいるの？ どこに……………)

よくお世話になっっている食事処で働く女性を探すと、気を失っているのか、彼女はここから少し離れた場所で倒れていた。今すぐ助けに行きたいところだが、あそこに向かうまでの間にタコ型ミリアタボノイズに気付かれてしまうだろう。気付かれずに辿り着けたとしても、彼女を助ける為にはシンフォギアを纏わなければならないが、その際に聖詠を口にする必要があるので、どの道気付かれてしまう。

その時、自分が来た方向から足音が聞こえる。反射的にそこを見ると、克己の指示を受けて響を追って来たレイカが立っていた。すぐに頭上のタコ型ミリアタボノイズに気付いてメモリを取り出そうとする。しかしその寸前、自分を見る響に気付いて声を上げかけるが、彼女からジェスチャーで静かにするようにと伝えられ、ジェスチャーから頭上のノイズが音に反応する種類だと理解したレイカが物音を立てずに彼女

達の隣へ移動する。

『その服、克己先生と同じものですよね』

『克己を知ってるの？ それもそうよね。その制服、あいつがいる学校のだし』

そこでレイカは未来の後ろに置かれているアタツシユケースに視線を奪われ、それがなにかを尋ねる。

未来が伝えてくるに、それは克己に渡してほしいと芹原賢という人物から託されたものだという。

(賢が克己に渡すもの………？　じゃあ、その中に入っているのは

今でこそ賢は自分達と敵対しているが、かつては自分達と共に数多の戦場を駆けた仲間だ。そんな彼が克己に渡すものといえば、それは一つしかない。

(———ガイアメモリッ！)

数は不明だが、アタツシユケースに入れるくらいだ。それ相応の数のガイアメモリが納められているに違いない。これを克己に渡す事が出来れば、こちらの戦力は大幅に強化される。

思わずアタツシユケースに手を伸ばしかけたが、今はそれどころではないとタコ型ミリアタボノイズの様子を窺う。

未来からの情報によると、ノイズの近くには女性が倒れているらしい。だが助けに行こうにも、響がシンフォギアを纏う為にも、レイカがドーパントに変身しようにも、必ず音が出てしまう。これでは女性を助けられない。

どうすべきかと悩んでいると、隣からタコ型ミリアタボノイズが反応しない程度に抑えられた小さな会話が聞こえてきた。

「……………私、響に酷い事した。今更許してもらおうなんて思っていない。……………それでも、一緒にいたい。私だって戦いたいんだ」
「だ、駄目だよ、未来……………」

「どう思われようと関係ない。響一人に背負わせたくないんだ」

まさかと未来に顔を向けた瞬間、未来はバツと立ち上がり――

「私、もう迷わないッ！」

――わざとタコ型ミリアタポノイズに聞こえるように声を張り上げた。

当然、タコ型ミリアタポノイズがそれに反応しないはずが無く、走り出した未来を追って建物から出て行った。

「なんて無茶を……………ッ！」

触れられた時点で即死なのに、それを承知で囿になった未来に駆け出す。

『ヒート！』

「響、そこで倒れてる人とアタツシユケースは任せたわよッ！」

「はいッ！」

もう音を気にする必要は無い。T2ヒートメモリを体内に挿し込んでヒートドローパントに変身したレイカは未来に攻撃しようとしたタコ型ミリアタポノイズの触手を火炎弾で消滅させた。

「走ってッ！ 早くッ！」

「は、はいッ！」

ヒートドローパントの怒号に背を押されるように速度を上げた未来をタコ型ミリアタボノイズがまだ無事な触手で捕らえようとするが、それは建物の壁を蹴って接近したヒートドローパントの蹴りを側頭部に叩き込まれた事によって消滅した。

だが安心するのも束の間、ヒートドローパントをノイズの集団が囲む。さらに厄介な事に、もう一体のタコ型ミリアタボノイズが未来を追い始めた。

「邪魔よ、消えなさいッ！」

灼熱の炎を纏った両足でノイズを蹴散らしていくが、その数は減るどころかどんどん増えていく。

「チツ、ムカつくわねえ……………ッ！ 燃やし尽くすッ！」

突撃してきた人型ヒューマンノイドノイズを蹴り飛ばしていると、ガングニールのシンフォギアを纏った響がノイズを殴り飛ばしてきた。

「おばちゃんとアタツシケースは緒川さんに預けてきましたッ！」

私は未来のところに行きますッ！」

「了解。絶対に護り切るのよッ！」

「レイカさんも無事でッ！ 後で会いましょうッ！」

徒手空拳でノイズの壁を破壊しながら未来の後を追う響に群がろうとしたノイズを、ヒートドローパントは火炎弾で消滅させた。

（……………シンフォギアで誰かの助けになれると思っていたけど、それは思い上がりだッ！）

飛びかかってきた人ヒューマノイド型ノイズを殴り飛ばし、速度を緩める事無く走る続ける。

（助ける私だけが一生懸命じゃない。助けられる誰かも、一生懸命ツ！）

無力な人々はただ助けを待っているわけじゃない。なんとかして生き残ろうと、迫り来る死の権化から逃れる方法を模索し続けているのだ。そんな当たり前の事を、自分は今まで忘れてしまっていた。

『——生きるのを諦めるなッ！』

本当の人助けは自分一人の力では成し得ない。だからあの日、自分の命の恩人はその言葉を叫んだのだ。

（今ならわかる気がするッ！ だから、助けられる誰か……………未来の為にッ！）

「ぎゃああああッ！」

「未来ッ！」

見つけた。疲れ切っているはずなのに、それでも自分を追う脅威から逃れようと走っている彼女との距離を、響は縮めていく。

（私が誰かを助けたいと思う気持ちは、惨劇を生き残った負い目なんかじゃないッ！ 二年前、奏さんから託されて、私が受け取った……………気持ちなんだッ！）

——助けるんだ。未来を、私が本当に護りたい人を……………絶対にッ！！

「未来うううううッ！！」

なによりも大切な、陽だまりの名を叫んだその時、響の全身を紅の輝きが包み込んだ。

——ここで、終わりなのかな——

タコ型ミリアタボノイズから逃げ続けている間にどんどん体力が削られていく中、ふとそういつた考えが浮かんでくる。

これはきつと、罰なのだろう。絶対に壊したくないものを、勝手な感情で壊してしまった自分へ、神様が下した天罰。

(だけど、それでも………ッ！)

それでも、この足は止めない。止めてはならない。

こんなところで死ぬのは御免だ。だって、まだ——

——響と流れ星を見ていないッ！——

大好きな人との大事な約束は必ず果たす。その為になら、悲鳴を上げてこの足だって動かせるッ！

限界を超え、再び走り出した未来は背後から来る触手をジグザグに動きながら避けていくが、崖の近くに体が寄ったところで一本の触手が彼女の真横を穿ち、その衝撃で体が崖に放り出されてしまった。

「きゃああああッ！」

全身を襲う浮遊感と、視界を埋め尽くす橙色に焼かれた空に、自分の体が宙に浮いている事に気付く間にも、体は重力に引き寄せられて地面へ吸い込まれていく。この高さでは、間違いなく死ぬ。

(折角頑張ったのに、これじゃ——)

「未来うううううッ!!」

その時、下り坂から飛んできた響が、未来の体を抱き留めた。

「響……………ッ!」

「よかった、間に合ってよかったッ! ごめん、遅くなっちゃってッ!」

着地した際の衝撃から未来を護るようにして着地した響だが、その分の衝撃が襲ってきて呻き声を漏らす。

「だ、大丈夫?」

「うん、大丈夫ッ! 未来と話したい事色々あるんだけど、その前に……………」

自分達の前に浮かぶタコ型ミリアタゴノイズから未来を庇うように響が立つと、彼女から発せられていた光が強くなる。

「あいつを倒して、未来を護らせてッ!」

力強く叫んだ響の武装が、彼女の叫びに答えるように変化している。

灼熱の業火を思わせる色が変わったガントレットとブーツに備え付けられたパワージャッキ部分は陽炎のように揺らめき、ヘッドギアも炎のような形状に変化し、右目の網膜にはヒートメモリに描かれていた『H』の文字が浮かび上がる。

灼熱の武装形態に変化したガングニールギアを構えると、彼女を囲むようにノイズが現れるが、今の彼女が負ける可能性など、万に一つもありはしない。

「私のこの灼熱の想いッ！ 止められるものと思わないでッ！」

力を籠めた右腕に纏わりついた炎の渦を放つと、前方にいたノイズ達が一気に灰燼と化して消えていく。続けて後方から迫るノイズに左手を向け、彼女の瞳が強く発光すると同時に起こった爆発がノイズを吹き飛ばした。

「響ッ！」

「……………ッ！」

未来の声に頭上を見上げてみれば、そこからタコ型ミリアタボノイズが無数の触手を駆使して二人を捉えようとしてきた。

「掴まってッ！」

「え？ きゃあッ!?!」

未来を抱え上げた響は脚部のパワージャッキから発生させた火炎の爆発による勢いを利用しての速度でその攻撃を躲す。

「これでトドメッ！」

未来を降ろし、四肢に宿った炎とノイズを焼き払った際に広がった炎を右足に収束した響が飛び上がり、

「はあああああッ!!」

ドリル状に変化した炎を纏った右足での急降下キックがタコ型ミリアタボノイズを貫き、一瞬の間を置いた後、風穴を開けられたノイズは炭素と
なって消滅した。

「やったあ、響ッ！」

「おわつとつとつとつとツ!？」

自分達に迫っていた脅威が消えた事に満面の笑みで飛び込んできた未来を抱き留めるも、勢いが強すぎて後ろの坂道を転がってしまふ。

転がっていた二人の体が止める頃には響の武装も解除され、元の制服に戻ったおり、痛む箇所を擦りながら二人は起き上がる。

「イタタ……………大丈夫？　未来」

「響こそ……………大丈夫？」

起き上がった二人が互いの顔を見合わせると、自分達が改めて無事だという事を再認識し、軽く笑い合った。

「ごめんね、巻き込んだじゃって、大丈夫だった？」

「ううん、それを言うなら私が飛びついたのが原因だもの。ごめんね、響」

それと、と未来ははにかむように笑って続ける。

「ありがとう。響なら絶対に助けに来てくれるって信じてた」

「……………ありがとう。未来なら絶対に最後まで諦めないって信じてた。だって、私の友達だもんッ！」

朗らかに笑う響の顔を見て、涙ぐんだ未来が彼女の胸に顔を預けた。

「怖かった、怖かったの……………ツ！」

「私も、凄い怖かった……………」

泣き声を上げ始める未来の頭を、響は安心させるように優しく撫でる。

「私、響が黙っていた事に腹を立ててたんじゃないのツ！ 誰かの役に立ちたいって思ってるのは、いつもの響だからツ！ でも、最近はずいぶん辛い事苦しい事、全部背負い込もうとしていたじゃないツ！ 私はそれが堪らなく嫌だったツ！ また響が大きな怪我をするんじゃないかって心配してたツ！」

二年前のあの事件の後、胸に大きな傷を負った響はしばらくの間病院で眠り続けていた。そんな響を傍で見続けていた未来にとって、今のように響が自ら死地へと向かっていくのは忌避感を感じるものだったのだ。

「だけどそれは、響を失いたくない私の我が儘だツ！ そんな気持ちに気付いてたのに、今までと同じようになって……………出来なかったの……………」

「未来……………。それでも、未来は私の……………ぷっ」

未来の顔を見て、唐突に笑い出す響。

「え？ なにツ！ 真面目な事言ってる時に笑うなんてツ！」

「あははッ！ だってさあツ！ 髪の毛ボサボサ、涙でぐちゃぐちゃッ！ なのにシリアスな事言ってるしッ！」

「んもうツ！ 響だって似たようなものじゃないツ！」

腹を抱えて笑い転がる響に頬を膨らませ、未来は自分と同じように汚れている響に文句を言うと、レイカが彼女達を見つけて近寄ってくる。

「その様子だと護れたみたいね。……………って、ふふっ、二人とも凄

顔してるわね」

呆れたように笑ったレイカがスマホを取り出して二人の顔を撮る。

「ほら、これが今の貴女達よ」

「うわあ、凄い事になってるうツ!? これは呪われたレベルだ………ツ！」

「私も想像以上だった………」

そこで再び顔を見合わせて笑い合う二人につられて、レイカも笑い声を漏らすのだった。

「ぐは………ツ！」

時間は克己達が二手に分かれて行動し始めた頃に遡る。杖を叩き付けられたメタルドーパントが店内に吹っ飛ばされ、彼の体を数々の商品が覆い尽くしていくが、それを退かして立ち上がったユートピアドーパントに立ち向かう。

「うらららあああああッ！」

「タフな方ですね」

スツと体を逸らしてメタルシャフトを避けたユートピアドーパントにクリスとトリガードーパントの弾が直撃して数歩後ずさるが、大したダメージにはならなかったようで平然とした様子で二人に向かってくる。

「チツ、化け物め………ツ！」

「侮れないな………」

重力操作の能力で飛んできた瓦礫を躲したトリガードーパントの光弾をユートピアドーパントが杖で弾き落とすと、立ち上がったメタルドーパントがユートピアドーパントを羽交い絞めにした。

「今だッ！ 俺に構わず撃てッ！ 心配するな、俺は頑丈だからよッ！」

「だったら、お言葉に甘えてッ！」

腰部アーマーから小型ミサイルを展開したクリスの『MEGA DETH PARTY』とトリガーマグナムから撃ち出された無数の光弾がユートピアドーパントに直撃する。

甲高い爆発音と共に黒煙が立ち昇る。

「これなら……………ッ！」

仕留めたと思った瞬間、二人の間を通り過ぎて行つたメタルドーパントが地面を削り、変身が解除されてしまう。

「やってくれましたね。彼を盾にしなければダメージを受けていたところでした。では、反撃といきましょうか」

「なんだ……………これ……………ッ!？」

「体が……………動かん……………ッ！」

見えないなにかがのしかかってくるような重圧に膝をついた二人を、ユートピアドーパントは杖を握っていない左手から繰り出した衝撃波で吹き飛ばした。

杖を弄ぶユートピアドーパントから這いずつても逃走を図ろうとするクリスはシンフォギアの武装が解除されており、微かな笑い声と共にユートピアドーパントが彼女に手を伸ばそうとするが、その体に変身が解除された賢がしがみ付いた事で手を引つ込めざるを得なくなつた。

「クリス、逃げろッ！」

「く……………ッ！ 邪魔をしないでほしいですねぇッ！」

賢に膝蹴りを喰らわせて引き剥がそうとするが、それでも賢は彼の拘束をやめようとはしない。

「うらああああッ！」

必死にしがみ付く彼に続くように、剛三が雄叫びを上げて走り出し、持ち前の怪力から繰り出されるパンチをユートピアドーパントの顔面に叩き込んだ。

「ぐう……………ッ！ なぜ、そこまでして彼女を護るんですか？ 貴方方にとって、彼女はなんなのですか？」

「へっ、そんな事……………」

「決まっているだろ……………」

ボロボロになりながらも、二人は拳を握り締め――

「――俺達が護るべき、一つの命だッ!!」

そう叫び、ユートピアドーパントを殴り飛ばした。

「行け、クリスッ！ 俺達がいっつを止めている内に……………」

「止められませんよ、ドーパントでない貴方方では」

「が……………ッ！」

「むう……………ッ！」

杖を捨て、両手で二人の首を掴んだユートピアドーパントが彼らを持ち上げる。

「丁度いい機会です。貴方方の希望も戴きましよう」

「ぐあああああッ!!」

「賢……………ッ！ 剛三……………ッ！」

全身に青白い電流のようなものが走る二人の名前を悲痛に叫ぶクリスに、彼らは苦しみながらも「逃げろ」と言ってくる。

普通なら、彼らの言う通り逃げるべきだろう。だが彼らは、フィーネやユートピアドーパントと違って自分を『護るべき命』だと思ってくれている。自分を、人だと言ってくれているのだ。

受けた恩は返す性分だが、その相手は自分が忌み嫌う大人達。そんな彼らを助ける事を、自分の心が認めてくれるだろうか。否、認めない。それどころか、「惨たらしく死んでくれ」とすら叫んでいる。

だが、それとは対照的に「彼らを助けろ」と叫ぶ自分がいる事も、クリスは知っている。

二つの感情が争い、その場を動けなくなっている間にも、二人はユートピアドーパントによって苦しめられている。

「どうしてそこまで抗うのですか。さっさと貴方方の希望を渡しなさい」

「渡す……………かよ……………ッ！ あんな……………哀しい顔した奴……………俺達がほつとけるわけ……………ねえだろ……………ッ！」

「俺達は……………今までたくさん命を奪ってきた……………だがッ！俺達は……………決めたんだッ！ これまで奪ってきた命に負けないくらい……………多くの人を救うと……………ッ！」

必死に抗いながら、二人は続ける。

「そう決めたのによお……………ッ！ 子ども一人救えないようじゃ……………誰も救えねえじゃんか……………ッ！」

「救ってやるさ……必ず………ッ！　そして、教えてやるんだ………ッ！　お前の未来は………輝いているんだって事をなッ！」

「な………ッ!?　ぐあ………ッ!」

その時、ユートピアドーパントの全身から火花が飛び散り、二人の首から手が離れる。

「馬鹿な………ッ!?　希望が奪い切れなかつただと………ッ!」

「へへっ、俺達に希望なんて無いっと思つてたけどよ。あつたみてえだな、賢?」

「そのようだな、剛三」

不敵な笑顔で頷き合つた二人の背に、クリスは小さく呟く。

「………ありがとう、二人とも」

「あん?　当たり前だろ?　どれだけ血塗られた過去があつてもな、お前は前に進めるんだ。いつまでも後ろを見続けてるんじゃねえぞ」

「俺達に未来は無い。なら、未来があるお前達を護るだけだ。それが俺達の務めだ」

「務め………」

その言葉を脳内に反芻させる。あの日、戦火に焼かれて死んでいった両親も、それを胸に抱いて、あの地獄に足を踏み込んだのだろうか。逃げようと思えばいつでも逃げられたのに、それでも彼らはあの場に留まつて、難民達に笑顔を与えていたのだろうか。

「……………それなら、あたしだって……………ッ!」

「さ、あいつが怯んでるうちに早く逃げるぞ」

「……………いや、あたしは逃げない」

「はあッ!?　なに言つてんだッ！　俺達じゃ勝てねえんだよッ！　ど

うやって……………」

「あたしがやる。お前達は見ててくれ」

ユートピアドーパントは危険だ。一瞬でも油断すれば敗北は明らか。だがそれでも、クリスは前に踏み出す。

その体は、蒼色に輝いていた。

「逃げるなんて選択肢はな、この雪音クリスには似合わねえツ！」

ペンダントを握り締め、クリスは聖詠を唱う。

「Killter Ichai val tron」

そしてクリスの全身を覆ったのは普段と異なる蒼いイチイバルであり、クロスボウの代わりに白い線の走った蒼いマグナムを両手に持ち、左目の網膜には『T』の文字が浮かび、右肩からダメージを軽減するマントを羽織ったものになっていた。

「みんなから希望を……………未来を奪おうとする奴は、あたしが全部撃ち抜いてやるツ！」

解き放て、叛逆の銃士の記憶ッ！

「それがフィーネの言っていたシンフォギアとガイアメモリの融合ですか。ガングニールの装者とは異なる姿のようですが、それと似た力を感じますね」

試しにと浮遊させた瓦礫を飛ばすも、クリスはマントでそれを防ぐ。シンフォギアを纏っていても直撃すれば骨折は免れられない速度を誇る瓦礫だったが、マントの防御力はその攻撃力を凌駕しており、全くの無傷だったクリスは二丁のマグナムの引き金を引く。

「……………ッ!? ぬう……………ッ!?」

光速に迫る勢いで撃ち出された光弾が直撃し、ユートピアドーパントが十数メートルも吹っ飛ばされた。想像以上の速度に反応出来なかったユートピアドーパントが煙を上げる胸元を押さえながら立ち上がると、クリスは再び引き金を引く。

即座に杖を振るって光弾を弾くが、続けて発射された光弾が再び体に命中した。

「やっつけてくれますね……………。ですが、イチイバルは遠距離特化型のシンフォギア。近距離戦は不得手でしよう」

目にも留まらぬ高速移動でクリスに接近してから杖で殴り飛ばす。飛んできたクリスの体を受け止めた賢が剛三と共に再びドーパントに変身しようとするが、その手を掴んだクリスが首を振る。

「あたしにやらせてくれッ！ あいつはあたしが倒さなきゃ気が済まねえんだよッ！」

幸い、手元の武器はマグナムで小回りが利くし、反動も抑制されて

いて撃ちやすい。

再び引き金を引いて光弾を発射するが、ユートピアドーパントは近くのトラックを盾にしてそれを防ぐ。

「隠れてねえで出てきやがれッ！」

連続で光弾を発射してトラックを爆破させると、その黒煙を突っ切ってきたユートピアドーパントはクリスの体を重力操作で浮かび上がらせて地面に叩き付けようとするが、先程受けたマグナムの光弾の倍以上の衝撃が襲ってきて吹っ飛ばされる。

「落とされる前に撃ちまえばこっちのもんだッ！」

スナイパーライフルに変形させたマグナムを元に戻して上半身を起き上がらせたユートピアドーパントに向ける。

二つの銃口から光弾が撃ち出される。それを躲したユートピアドーパントは再び高速移動でクリスを殴り、続けて左手から衝撃波を繰り出そうとするが、それは咄嗟にクリスが引っ張ったマントによって防がれる。

「抗ってくださいね。その力、戦争で使えばどれ程役立てる事か」

「あたしを物扱いすんじゃないやねえッ！ 財団Xおまえたちの事は賢達から聞いてるぜ。色んな闇組織を支援している死の商人だつてなッ！ そんな奴らにあたしと、このイチイバルは渡せるかッ！」

戦争がどれだけ残酷なものかは、自分がよく知っている。自分の他にも、戦争で家族を奪われた者は大勢いる。大切な者を喪った哀しみを知っている彼女だからこそ、それを激化させる技術を提供する財団Xに対する怒りと嫌悪感は一層強い。

「あたしはフィーネに言われるがままに、ソロモンの杖を起動させた。

それが戦争を無くすどころか、新しい戦いを始める事も知らずにッ！
ソロモンの杖が起動したのが原因で家族と死に別れた奴だっているはずだ。その原因があたしにあると考えると、自分が憎くて憎くて堪らねえッ！　いつそ自殺しちみたいくらいきッ！」

でも、それは逃げだ。自分は、間接的に自分が殺してきた人々から逃げたくない。逃げ出したら、理不尽に命を奪われた彼らに申し訳が立たない。

「きつとあたしは、地獄に落ちるんだろうな。パパとママのいる天国なんて、こんなあたしにや似合わない。でも、あたしは悪人のまま一生を終えるつもりはこれっぽっちもねえよ」

もう手遅れだが、自分は罪を自覚出来た。だが、それに気付いて尚悪行を重ねるつもりなんて更々無い。

自分が犯した罪は、自らの手で償う。それは人として当然の事であり、今ここに立つ雪音クリスという名の人間もまた、例外ではない。

「ぶっ潰してやるよ、この世にのさばるクソツタレな連中を。あたしが味わった哀しみを、これ以上誰かに与えない為にッ！」

その時、今度は銀色の輝きがクリスを包み、剛三のメタルメモリが強く輝き始める。

メタルメモリから飛び出した銀色の光球がクリスの体に入り込むと、彼女の纏ったイチイバルの武装が変化する。

蒼のマグナムは銀色を基調とした緋色のラインが走ったガントンファアに変化し、外見は狙撃手のようなものから一変して上半身は胸元を開けたドレスアーマーを着込み、左目の網膜に『M』の字が浮かび上がっている姿に変化したクリスに感嘆の声を漏らしたユートピアドーパントに、クリスは両手に持ったガントンファアから光弾を発射した。

「二つのメモリの形態を持つ装者ですか。これは面白いですね」
「喰らいやがれッ！」

振り下ろされた右手のガントンファアを杖で受け止め、左拳を腹に捻じ込もうとするも、それは左手に持ったガントンファアによって弾かれる。ユートピアドーパントの体を蹴って跳躍した際にガントンファアから発射された光弾がユートピアドーパントに着弾し、数歩後ずさると懐に潜り込んでからのガントンファアの先端で突き飛ばす。さらに追い打ちとして開いた距離を跳び蹴りで縮めると同時に蹴り飛ばし、もう一回跳び蹴りで怯ませると左手のガントンファアを回転させてユートピアドーパントに叩き付ける。

「こいつでトドメだッ！」

ガントンファアを地面に叩き付けると、その衝撃波は前方のユートピアドーパントの足元を爆発させて彼の体が打ち上げられる。落下してくるユートピアドーパントに一瞬の途切れも無く発射した光弾を命中させると、クリスは自分に宿るガイアメモリの記憶を『闘士』から『引き金』へ切り替える。

自分に力を貸してくれるメモリの力の切り替えなんてやった事無いのに、不思議な事にクリスはそれが長年やって来た事のように出来る。

「もう、お前達に『物』みたいに扱われて堪るかッ！」

両手のマグナムを合体させてバスターライフルにする。

そしてクリスは、自身がイチイバルを纏う際に聖詠が脳裏に浮かんでくるのと同じような感覚で浮かんできた単語を口にする。

「マキシマムドライブ」

その単語に応えるように、バスターライフルの内部から絶大なエネルギーが充填されていく。

照準を定める。大丈夫。離れていようと撃てる。なにせ自分は、イチイバルに選ばれた人間だからッ！

「受け取れよ、化け物。こいつがあたしからの、叛逆プレゼントだッ！」

銃口から放たれる巨大な蒼紅のレーザー——『TRAITOR's ROAR』がユートピアドーパントを呑み込んだ。

数秒に及ぶレーザー光線が消え、全エネルギーを使い果たしたバスターライフルを手にするクリスの前に、数十メートル先にユートピアドーパントが墜ちてきた。

「あの攻撃を喰らっても生きてんのかよッ!? とんだバケモンじゃねえかッ！」

全身から黒煙を立ち昇らせるユートピアドーパントは武装が解除されたクリスと、彼女に力を貸したメモリの持ち主である二人を見る。

「シンフォギア装者にガイアメモリ……………侮れませんね……………ッ！ いいでしょう……………、今日はこのところで彼女に免じて退散しましょう。では、またいつか……………」

これ以上の戦闘続行は不可能と察したのだろう。持ち前の高速移動で、ユートピアドーパントは三人の前から姿を消した。

「ふう……………。なんとか切り抜けたようだな……………」

「だな。ノイズの姿も見えねえし、さっさと帰るか。立てるか？」

クリスの手を引いて立ち上がらせると、「待つてくれ」と声をかけられる。

「あんたは……………」

「俺の名は風鳴弦十郎。特異災害対策機動部二課の司令官だ。君達に話がある」

「あの時のおっさんか。俺達になんの用だ？」

「俺は君達を二課に保護したいと考えてる。もちろん、君達の安全は保障するし、生活に必要なものも全て提供しよう」

「嬉しいお誘いだが、いったいどういう魂胆だ？ お前がフィーネと違つて信頼出来ない相手ではない事はなんとなくわかるが」

「……………スマートではないが、それに答える前に一つ確認したい。君達はクリスの両親を知っているか？」

「バイオリン奏者の雪音雅律と声楽家のソネット・M・ユキネだろ？」

「聖遺物の起動には相応のフォニックゲインが必要だったから保護したつて、フィーネが教えてくれた」

最初はそう説明されたが、今となつては『保護』とは名ばかりで、事実は『拉致』だと考えられるが。

隣でクリスが「なんで話してんだよ……………」と零す中、弦十郎は「その通りだ」と言う。

「二人が難民救済活動中に内戦で命を落としたのが八年前。残された一人娘……………クリス君は国連軍によって保護され、日本に輸送される事となつたんだ」

「よく調べているじゃねえか。そういう詮索、反吐が出る」

「当時の俺達は適合者を探す為に、音楽界のサラブレッドである君に注目していてね。天涯孤独となつた君の身元引受先として、手を挙げたのさ」

「こつちでも女術ぜげんかよ……………」

「ところが、クリス君は帰国直後に消息不明になり、二課からも相当数の捜査員が駆り出されたが……………」

結果は散々。保護対象の少女は見つからず、この件に関わった者のほとんどが死亡、あるいは行方不明となり、この捜査は中止となつてしまつたのだ。

「今思えば、あれはフィーネが仕組んだ事だつたんだろうな。おかげで、今ではこの任務を受けている捜査員は俺だけになつたよ」

「……………なにが言いたいんだ、おっさん」

「俺はな、君を救い出したいんだ。引き受けた仕事をやり遂げるのは、大人の務めだからな」

「……………務め、か」

以前の自分なら、その言葉を馬鹿馬鹿しいと一蹴しただろう。だが、体を張つてユートピアドーパントから自分を護ろうとしてくれた賢達の姿を先程見たばかりのクリスにとっては、その言葉を一蹴する気にはなれなかつた。

「これが俺が君達に接触した理由だ。君達の事も克己君から聞いている。良ければ君達も二課に来てくれないか？」

「克己とまた同じ場所で働けるつてのはいいんだがな。一つ心配事が……………」

「あんたはあたしの親かッ！ 一人でも大丈夫に決まつてるだろッ！」

バシツと叩かれた頭を押さえた賢が、クリスを一人にする事に対する不満の理由を口にした。

「あのドーパントはお前が俺達のガイアメモリの力を使ってやつと撃退出来たんだ。また戦つて勝てる保証はどこにも無いんだぞ」

「それにあいつが逃げた先にいる奴とすりやフィーネだろ？ お前どうやってあのバケモン共を相手すんだよ」

「そ、それは……………」

「待ってくれ。君達が撃退したドーパントというのは、こういう者ではなかったか？」

確認の為に胸ポケットから取り出したユートピアドーパントの写真を見たクリス達が頷くと、弦十郎の顔色が少し明るくなる。

「ユートピアドーパントを撃退するまで追い詰めたのか。彼は俺達が対処すべき相手だったんだ。撃退とはいえ、そこまで追い詰めてくれた事には感謝したい。本当にありがとう」

「あいつはあたしらの獲物だ。あたしがソロモンの杖を起動させなかったら、あいつはフィーネに関わらなかったはずだからな」

「いや、どちらにしろ、財団Xはフィーネに接触したはずだ。……………フィーネの詳細は今も調査中だが、響君達の話の聞くにネフシユタンの鎧を手に入れている事はわかっている。戦闘になれば、必ず使用してくるだろう」

「なんだ？ まさか、フィーネのいるところに殴り込むつもりか？ 言っちゃなんだが、おっさんがあいつらに勝てる未来は見えねえぞ？」

「いつ俺一人で行くと言った？ 克己君達を連れて行く。響君も連れて行きたいところだが、あの子はフィーネの姿を見たら足手纏いになってしまうから、連れて行かない」

撤退するまでに追い込まれていてもユートピアドーパントは強力だろう。それなら、かつて彼と交戦した経験があると言う克己と、その部下であるレイカ達に相手をしてもらう。そしてフィーネの相手は――

「俺がやる」

「はあッ!? アホかおっさんッ!? フィーネはあたし以上にネフシユタンの鎧を使いこなしてるんだぞッ!? 勝てるわけがないッ!」
「それでも、俺は彼女と戦わなければならぬ。事後処理は優秀な部下に任せるとして、俺は今回の事件の首謀者である彼女を止めなければならぬんだ」

どうやら目の前の男は本気でフィーネと戦う覚悟を決めているようで、その気迫に押し負けた三人は彼を止める事は不可能だと悟って深く溜息を吐いた。

「……………仕方ねえ。ついてこいよ、あいつらが拠点にしてる屋敷まで連れてってやる」
「すまない、助かる」

頭を下げて感謝した弦十郎は、ポケットからスマホを取り出して克己達に連絡を取り始めた。

——その頃、フィーネが拠点にしている屋敷では、クリスのマキシマムドライブを受けて全身に多少の傷を負った順が、手元のユートピアメモリを見つめていた。

「派手にやられたわね。遠くから見ただけで滑稽だったわ」
「見てたなら助けてもらいたかったところですね。貴女であれば、私がああのレーザーに呑み込まれる前に助けられたはずですけど」
「地獄の炎が凍ったら助けてあげるわよ」
「おや、それは残念」

言葉とは裏腹に残念がる様子を微塵も見せない順は、先程までクリスと繰り広げていた戦闘を思い返す。

「ガイアメモリはまだ未知の力を秘めている。それを再認識させられましたよ、今回の戦いは」

「それは結構。貴方も十分な戦闘データを上に送れた事でしょうね」

「ええ、貴女が作ったこのT3ガイアメモリは私の体によく馴染みます。おかげで素晴らしいデータが送れました。……………そして」

閉ざされた扉を見て、順はガイドドライバーに、フィーネが賢達が集めたT2ガイアメモリを解析して作り上げたT3ユートピアメモリを挿し込んでユートピアドーパントに変身する。

「また、新たなデータが送れそうですね」

衝撃波で扉を吹き飛ばすと、そこから十数人の黒服の男達が現れて拳銃を向けてくる。

「アメリカの犬ね。遂に武力行使で聖遺物のデータを奪いに来たというところかしら」

「目的はどうでもいいのです。どんな目的にせよ、彼らはもう、ここから逃げられないのですから」

こちらに拳銃を向けてくる者達の中で最も自分との距離が近い男の前に移動したユートピアドーパントは彼の顔を驚掴みにし、一瞬にして彼の希望を奪い取った。

顔のパーツを全て失った男を投げ飛ばし、続けてその隣に居た男からも希望を奪い取る。

「貴方の希望も、そして貴方の希望も、全ての希望を私の力に変えてみせましょう」

「う、撃てッ！ 撃てえッ！」

隠し切れない恐怖を顔に表し、男達が拳銃を発砲する。その全ての

弾丸がユートピアドーパントに命中するが、彼の体に傷がついた様子は無く、ユートピアドーパントは相手に恐怖を与える笑い声を漏らしながら二人の男から希望を奪う。

「フ、フフフ……………フハハハハッ！」

全身に力が漲る。その感覚が愉快で堪らなくて、ユートピアドーパントは笑い声をあげる。

「さあ、寄越しなさい、貴方方の希望を。なに、無駄にはしませんよ。そう、全ては……………」

両腕を広げ、ユートピアドーパントは残りの男達に近づいていく。

「——私の望む理想郷の為に」

財団Xの利益をなによりも優先して考える彼にとってはあり得ない事を口にしたのにも関わらず、彼はいたって普通の事を口にしたような態度で男達に襲いかかった。

『理想郷』とは名ばかり。まるで怪物ね……………」

目の前で練り広げられる阿鼻叫喚の地獄を眺め、フィーネはポツリと呟くのだった。

動き出す者達

弦十郎達がクリスの案内に従って屋敷に到着し、奇襲に注意しながら廊下を進んでいくと、扉が吹き飛ばされた部屋を見つける。

「これは……………」

「酷いな……………」

部屋に転がっている顔を失った黒服の男達を発見し、彼らの脈を確かめるも、それを確認した弦十郎が首を振って彼らが殺害された事を告げる。

「微かだが温かい。どうやら少し前まで彼らは生きていたのだろう。だが、殺された。傷口が無いところを見るに、殺つたのはユートピエか……………」

遺体に切り裂かれた傷痕が無い事から、ネフシユタンの鎧を纏っているフィーネが彼らを殺した可能性は除外され、ユートピアドーパントが彼らを殺したと考えられる。ユートピアドーパントが希望どころか命まで奪い取つたのは口封じの為だろうか。すると、弦十郎の部下の一人がなにかに気付いて弦十郎に声をかけた。

弦十郎は自分の名を呼んだ部下の前にある顔の無い遺体に置かれている張り紙に視線を落とす。

『I Love You SAYONARA』か……………」

口紅かなにかで書かれたであろう赤い文章を読み上げ、張り紙を手取る。

瞬間、張り紙についていたピアノ線が引っ張られ、仕掛けられた爆弾が連鎖的に爆発した。

轟音と共に頭上から大小様々な瓦礫が降り注いでくるが、ここにい

るのはそのほとんどがそれなりの訓練を積んできた者達。各々が反
射的に動いて押し潰されかねない程の大きさの瓦礫を避けていき、彼
らの中でも遥かに鍛え上げられた肉体を持つ弦十郎は拳を突き上げ
た衝撃波で頭上の瓦礫を破壊した。

「全員無事かッ!？」

すぐに仲間達の安否を確かめる弦十郎に全員が頷くと、剛三が彼が
粉碎した瓦礫の欠片を見て驚愕していた。

「うへえ、なんて力だよ……………。おっさん、本当に人間か？」

「人間だよ。ごく一般的なおっさんさ。それより、お前達も大丈夫か
？」

「あ、ああ」

信じ難いと言いたげな表情でもクリス達が頷くと、弦十郎は瓦礫が
散らばる周囲を見渡して溜息を吐いた。

「中々味な真似をしてくれたな。フィーネもドーパントの姿も無いと
なると、もうここにいる理由も無いな。俺達はこれから本部に戻る
が、お前達も……………無理だよな」

「ああ、悪いけど、一緒には行けない」

申し訳なさげにクリスが返すと、弦十郎は「まあ、仕方ないさ」と
言う。

「大人嫌いな君を、大人で溢れ返ってる場所に無理矢理連れて行くの
も気が引けるからな。だが、君がこれからどの道を歩もうと、その道
は遠からず、俺達の道と交わるだろう。その時を楽しみにしてい
るぞ」

「今まで戦ってきた者同士が一緒になれると言うのか？ 世慣れた大

人がそんな綺麗事を言えるのかよ」

「言うだろうな、この男は」

子どもよりも現実というものを知っている弦十郎に吐き捨てる、
克己が弦十郎を横目に見ながらキツパリと言い切った。

「ボスは情の厚い男だ。お前がどれだけ馬鹿にしようが、この男は信
条を曲げずにお前と接するだろうさ。人に誇れない事をこなし続け
てきた俺達ですら雇ったんだ。お前がどれだけ言っても、ボスに弱音
を吐かせるのは無理だと思うな」

「大道克己だっけか？ 随分と入れ込んでるな。そこまでこのおっさ
んは信用出来るのかよ」

「出来るとも。風鳴弦十郎という男は、お前が出会ってきたどの大人
よりも誠実な男であると断言しよう」

「へっ、どうだかな。それはあくまで表だけで、裏では人に言えない事
やってるんじゃないか？」

「ホント、ひねてんなあ、お前」

そこまで信用されてないのか、と肩を落とすも、ごほん咳払いを
して弦十郎はクリスマス達に背を向けて撤収し始める。

「……………そうだ、君達に一つ訊きたい事がある」

「なんだよ」

『カ・ディングル』。この名に聞き覚えは？」

「……………ッ!? お前、どうしてそれを……………」

その名を知っているのは、あの時フィーネの話を聞いていた自分達
と財団Xのエージェントのみだ。それなのになぜか、この男はその名
を知っている。

「……………まあ、いいさ。お前がなんでその名を知ってるのは知ら

ねえけど、あたしらが聞いた話だと、そいつはもう完成しているらしい」

「……………遂に完成まで漕ぎ着けたか。情報、感謝する。……………それと、お前達、スマホは持つてるか?」

「賢が持つてるけど、どうしたんだ?」

「連絡先ぐらいは伝えておこうと思っただけ。俺達になにか用があれば、遠慮なく電話してきてくれ」

「はッ! 誰がそんなの……………」

「いいだろう」

「いいのかよッ!」

「まあ、こいつらの助けが必要になった時に連絡先を交換しなかった事を後悔するのは嫌だろ? 我慢しろって」

剛三がクリスを宥めている間に賢と弦十郎は互いの連絡先を交換する。

「それじゃあ、俺達は帰らせてもらう。お前ら、本部に戻るぞッ!」

その言葉に彼の部下達が「はいッ!」と威勢よく返事し、部屋から出ていく。

「賢、剛三」

部下である二人に背を向けたまま、克己は彼らに言う。

「お前達が『もう大丈夫だ』と思えるまで、その少女を護ると決めたのなら、絶対に護り抜け。それが出来なかったら、お前達を地獄に叩き落としてやる」

「わかり切った事を。絶対に護り抜いてやるさ。……………じゃあな、克己。またお前と一緒に戦える時を楽しみにしてるぜ」

「また会おう、リーダー」

「……………またな、お前達」

軽く上げた手を振って、克己はレイカ達を連れて部屋から出ていった。

「……………」
「うわあ、学校の真下にこんなシエルターや秘密基地が……………」

「えへへ、凄いでしょッ！」

翌日、学校は休日のため、昼に本部からの召集を受けた響に連れられて二課の本部に足を踏み入れた未来は、学校の真下に存在する施設の数々を見て目を見開いていた。

国家機密であるシンフォギアを纏ってノイズと戦う響の姿を見てしまった未来は、非公式の外部協力者として二課本部に招かれる事となったのだ。もしこの世界が、某SFコメディ映画の世界であれば謎の黒服の男達によって記憶を消されてしまうだろうが、生憎とこの世界にそんなハイテク機能持ちの機械は開発されていないので、シンフォギアについての事は他言無用という条件付きで、未来はこの場に訪れている。

昨日の出来事で擦れ違っていた二人の仲も元に戻り、今ではいつものように晴れやかな表情で会話しながら司令室へと向かっていく。

「あ、翼さくんッ！」

その途中で、自分達と同じく司令室へ向かっていた翼と緒川を見つけ、響の声に反応した二人が振り向く。

「立花か。……………そちらは、確か協力者の」

「こんにちは。小日向未来です」

「私の一番の親友ですッ！」

「わッ！　ちょ、響ッ！」

いきなり抱き着かれて驚いた未来と、彼女に抱き着いて満面の笑みを浮かべる響の仲の良さを微笑ましく思いながら、翼は未来に自己紹介する。

「風鳴翼だ。よろしく頼む。立花はこういう性格故、色々面倒をかけると思うが支えてやってほしい」

「いえ、響は残念な子なのでご迷惑をおかけしますが、よろしく願います」

「ええ、なに？　どういう事？」

「響さんを介して、お二人が意気投合してるという事ですよ」

「むむ、はぐらかされた気がする」

「ふふ」

首を傾げる響の姿に翼が笑う。響や克己が来る前は自分達に見せる事は基本無かった笑顔を、こうして自分達に見せるようになった翼の変化を緒川が嬉しく思っていると、響が少し頬を赤らめながら周囲を見渡した。

「でも、未来と一緒にここにいるのはなんかこそばゆいですよ」

「司令が手を回し、小日向を外部協力者として二課に登録したが、それでも不都合を強いるかもしれない」

「説明は聞きました。自分でも理解しているつもりです。不都合だなんで、そんな」

「皆さん、お話するのもいいですが、そろそろミーティングの時間です。翼さんも、その後は仕事が入ってますので、お話はいいところを区切ってくださいね」

「え？　翼さん、もうお仕事入ってるんですか？」

絶唱のバックファイアの影響はもう無いとは聞いていたが、ここま

で早く翼が仕事を入れている事に驚くと、「少しずつよ」と翼が返す。

「今はまだ体を慣らしているの。十日後には復帰ステージを予定しているから、それまでの間に体を本調子に戻さないかね。……………そう
だ、君達にこれを」

そうやって差し出してきたのは、先程翼が口にした復帰ステージのチケツト。しかも販売直後に売り切れとなった、最前列のものである。

「え、嘘ツ!? 本当がいいんですかツ!?」

「私の分まで……………ありがとうございます」

「無理言つて捻じ込ませてもらったんだ。……………立花にとつても、辛い思い出のある会場だが」

十日後に行われる復帰ステージ。それを行う場所は、二年前に翼が奏を失い、響が多くを死を目の当たりにした、あのライブ会場である。ライブの場所を確認する響に「嫌な思いをするようなら、無理して来なくてもいい」と言おうとした翼の耳に届いたのは、心底嬉しそうにはしゃいでいる響の声だった。

「ありがとうございます、翼さんッ！ いくら辛くても、過去は絶対に乗り越えていきます。そうですね、翼さんッ！」

「……………そうありたいと、私も思っている」

「あら、楽しそうな顔してるわね。ガールズトーク？ 混ぜて混ぜて
♪」

すぐ近くの扉から出てきた了子が響達に近寄ってくる。

「いえ、ガールズトークではありませんよ、櫻井女史」

「そうなの？ 残念。ガールズトークだったら私の恋バナ百物語を聞

かせたかったわあ」

「ええッ!? 了子さん、好きな人いるんですかッ!?」

「もう遠い昔の話になるけどね。こくう見えても呆れちゃうくらい一途なんだからあ……………」

そこでなにかを思い出したのか、了子は肩を竦めて先の言葉を訂正する。

「いえ、違ったわ。一途『だった』と言うべきだったわね」

「どういう事ですか?」

「前まで私が想ってた相手は一人だったんだけどね。ここ最近になって気になる男が増えてねえ」

「うわあッ! 了子さん、モテモテですなあッ! その男の人ってどんな人ですか?」

「それほどイイ男じゃないわ。私の心の中にずかずかと入り込んでくる不屈き者よ。私を捕まえる気ならもつとソフトに来てほしいぐら이다わあ」

「ふむふむ、かなりの肉食系男子ですね。でも、そういったところがカッコいいじゃないですかッ!」

「そうかしら? 彼の相手をしてると凄い疲れるわよ? 断ってる私の身にもなってほしいわ」

「そんな事言って、本当はどこかで楽しんでるんじゃないんですか?」

「さて、どうかしらね? それは響ちゃん達のご想像にお任せするわ」「ええ〜?」

ブーブーと不満を言う響と未来を横目に、翼は了子が自分が彼女に抱いていたイメージとは少し違っていた事を口にした。

「それにしても意外です。櫻井女史は恋というより、研究一筋である」と

「命短し恋せよ乙女ッ! と言うじゃない? それに女の子の恋す

るパワーって凄いんだからあッ！ 私が聖遺物の研究を始めたのも、
そもそも……………あ」

気付くと、先程まで不満を垂らしていた響達が目をキラキラさせて
話の続きを待っていた。

「うんうんッ！ それでッ!？」

「……………あ、もうこんな時間よッ！ 早く司令室に行かなくちゃ、弦
十郎君に怒られるわよお?」

「え? わッ、ホントだッ!」

スマホに表示された現在時刻を確認し、ミーティングの開始時間が
もうすぐである事に気付いて、了子を筆頭に響達は司令室へと向かっ
た。

(……………らしくない事言っちゃったわね。変わったのか、それとも、
変えられたのか……………)

了子がそんな事を考えている間に一同が司令室に到着すると、そこ
で待っていた弦十郎達の視線が彼女達に向き、未来が彼らに自己紹介
してからミーティングは開始された。今回の内容はもちろん、『カ・
ディングル』についてである。

「了子君、早速だが『カ・ディングル』について教えてくれるか?」
「……………『カ・ディングル』とは、古代シュメールの言葉で『高みの
存在』、転じて『天を仰ぐ程の塔』を意味しているわね」

「何者かがそんな塔を建造していたとして、なぜ俺達は見過ごしてき
たのだ?」

「確かにそう言われちゃうと……………」

「だが、ようやく掴んだ敵の尻尾。このまま情報を集めれば、勝利も同
然。相手の隙にこちらの全力を叩き込むんだ。最終決戦、仕掛けるか

らには仕損じるなッ！」

弦十郎の言葉にその場にいた未来を除く全員が頷いて各々のすべき事を始めると、了子が響と翼に声をかけた。

「最終決戦となれば装者あなたちの体調も確認しないとね。最後の戦いだけというのに、体調不良だったら目も当てられないでしょ？」

「ですね。よろしくお願いしますッ！」

「あの、私もついていっていいですか？」

「もちろんよ。ついてきなさい」

了子に連れられて響、翼、未来が司令室から出ていく。それを確認した克己は、次々と新たな情報が表示されていくモニターを見つめている弦十郎に声をかけた。

「ボス、訊きたい事がある」

「なんだ？」

横目で見えてくる弦十郎に、克己は鋭い視線と共に言い放った。

「なぜ嘘を吐いた？」

「……………なにを言っているんだ？ 俺はなにも……………」

その問いをはぐらかすように答えた弦十郎を睨みながら、克己は続ける。

「嘘を吐くな。お前はファイネの正体も、あの塔の場所も知っているはずだ。それをなぜ、響達に隠した？」

『天を仰ぐ程の塔』の意味を持つ『カ・ディングル』。姿形こそ不明なもの、その意味から、その塔が巨大なものである事は子どもだっ

て理解出来る。それを自分達に気付かれる事無く建造するとしたら、自然と隠し場所はそれを隠し切れる程巨大なスペースを誇るものに絞られる。そして克己は、それがどこに置かれているのかを知っている。

不思議な模様のように思える壁。明らかに現代のものとは思えぬ構造。

専門知識こそ少ないものの、長らく傭兵として様々な戦場で様々な武器を見てきた。その中には現代には過ぎた武器だつて含まれている。

だからこそわかる。標的は不明だが、フィーネが建造しているときれる『カ・ディングル』が、どれ程危険な代物であるかを。

「敵を泳がせるのは俺達もやった事があるから、それを否定する気は毛頭無い。だが、何事にも限度がある。いつまで見ているつもりだ？

まさか、情が湧いているというわけではないだろうな？ それなら俺達が――」

命を奪う事には慣れ切っている。ここで働いている職員の中で、最も彼女と関わってきたであろう彼が彼女に情が湧くのは仕方ない。それなら、彼と比べて彼女にそれ程情を抱いていない自分達が彼女を殺そうと提案しかけたその時、

「――やめろ」

弦十郎の怒りの籠められた視線と声によって、克己は言葉を止めざるを得なかった。

その瞳の奥に宿る憤怒の炎が形作るものはまさしく――

(鬼……………)

「俺に辛い思いをさせたくないからといっても、その考えに至ったのは褒められたものじゃないな。俺は殺しは好まんし、部下に誰かを殺

せと命じたりもしない。全てが話し合いで解決できれば、と考えているさ。克己君、これはな、約束なんだ」

「約束？」

「ああ、俺と彼女の間で取り交わした約束だ。これだけは、誰にも邪魔させない。それでも、俺の邪魔をするのなら……」

その時は容赦しない、と怒気を纏った声色で釘を刺してきた弦十郎に、克己は自分が彼の逆鱗に触れた事を恥じて頭を下げる。

「すまない。浅はかな考えをしていた俺を許してくれ」

「……………いや、謝るのはこちらだ。長らく血塗られた場所にいた君ならそう考えるのも仕方ないさ。……………だが、君の言う通り、泳がせておくにも限度がある。完成しているのなら、その後どうするかは目に見えている。俺も行動に出て——」

その時、二課本部全体にサイレンが鳴り響く。それと同時に、オペレーター達から次々と緊迫した声での報告が上げられていく。

「飛行タイプの超大型ノイズが一度に三体ッ！　いえ、もう一体出現ッ！」

「なんだとッ!?　状況はッ!？」

「出現したノイズは現在、東京スカイタワーに進行中ですが、人を襲っている様子は見られませんッ！」

「スカイタワー付近にドーパント出現ッ！　以前と少し違いますが、エネルギー反応からユートピアドーパントと考えられますッ！」

「スカイタワー……………『塔』繋がりでノイズを出現させたというわけか。どうする、ボス。俺達はお前の命令に従う」

カ・ディンギルとスカイタワーが全く別である事は既に知っている弦十郎であれば、これが罠である事は目に見えているだろう。だが、まだ人を襲ってはいないとはいえ、相手はノイズ。そして、それに対

抗できるのはノイズと戦える術を持つ響達装者や克己達仮面ライダーまたはドーパントのみであり、見捨てるといふ判断は弦十郎には出来ないだろう。巽だとわかっていても、ここは乗るしかない。

「師匠ッ！」

振り返ると、メデイカルルームから大急ぎで走ってきたのだろう、響達が肩を上下させながら立っていた。

到着した彼女達に弦十郎がノイズに関する情報を伝えた後、響達に命令を飛ばす。

「スカイタワーには俺達二課が活動時に使用している映像や、交信といった電波情報を統括制御する役割も備わっている。ユートピアドーパントも出現したとなると、被害はノイズのみのものよりも大きくなるだろう。お前達、東京スカイタワーに急行だッ！」

クリスはユートピアドーパントを撃退出来たそうだが、それは以前までの話。フィーネの屋敷に残された遺体を思い返すに、彼の力はより強化されている事だろう。こう言うのはアレだが、この場にいる装者二人が彼を倒せるとは思えない。それなら克己達も向かわせるべきだと考えたのだ。克己達もそれを理解しているため、なにも言う事無く「了解」と答える。

「ですが、ここからスカイタワーまではかなりの距離があります。私や大道、羽原にはバイクがありますが、それでもスカイタワーまでは……………」

「そこをなんとかするのが俺達の仕事だ。既にへりは地上に用意してある。そいつに運んでもらえッ！」

「流石です、師匠ッ！」

心強い味方に響が喜んでいると、隣からの視線に気付いてそちらを

見る。

「響……………」

「平気。私達でなんとかするからッ！ だから未来はここにいて」

「ここに？」

「いざとなったら、地下のシエルターを解放してこの辺の人達を避難させないといけない。未来にはそれを手伝ってもらいたいんだ」

「う、うん……………わかった」

了承するも、未来の顔には響を心配する気持ちがこれでもかという程に表れており、それでも出撃しなければならぬ響は申し訳なさに小さく言った。

「……………ごめん、未来を巻き込んだじゃって」

「ううん、巻き込まれたなんて思っていないよ。私はここに残るのは、響がどんなに遠くに行っても、ちゃんと戻ってこられるように、響の居場所、帰る場所を、護ってあげる事でもあるんだから」

「私の……………帰る場所」

「そう。だから行って。私も響のように、大切なものを護れるくらいに強くなるから……………」

まるで戦地に赴く夫を見送る妻のような、応援するようでどこか哀しそうな笑みを浮かべた未来の手を、響は強く握り締める。

「小日向未来は、私にとっての陽だまりなのッ！ 未来の近くが一番温かいところで、私が絶対に帰ってくる場所ッ！ これまでもそうだし、これからもそうッ！ だから、私は絶対に帰ってくるッ！」
「響……………」

なによりも大切な一番の親友に、響は太陽のように明るい笑顔を見せる。

「一緒に流れ星見る約束、まだだしねッ！」

「うんッ！」

「あら夫婦」

「わかるけど黙ってなさい」

二人のやり取りにそう言わざるを得なかった京水の頭をレイカが叩く。

「でも……………、そうね。あの子達の帰る場所を護る為に戦うのが、今の私達の役割ね」

「当然だ。行くぞ、お前達」

「了解ッ！」

響達がへりに乗る為に走り出し、克己達もその後続いた。

——逃げ惑う人々の内の一人を捕まえ、ユートピアドーナツはその男から希望と未来を吸い取る。

「この方はハズレでしたか。若いくせに満足な希望も持ってないとは、つまらない男ですね」

顔を奪われた男の体を投げ捨て、次の標的を定めようとしたユートピアドーナツの聴覚がプロペラが回転する音を捉える。

「来ましたか」

上空にホバリングしているへりを見上げた瞬間、そこから五人分の人影が飛び降りた。

「Balwisyall Nescell gungn
irtron」
「Imyuteus amenohabakirit
ron」
「エターナル！」
「変身ッ！」
「ヒート！」
『ルナ！』

人影の内三人の体を鎧が覆い、残り二人はその身を異形のものへと変えて地上に降り立つと同時に、周囲にいたノイズを消滅させた。

自分がある事は当然彼らも気付いているだろうが、自分と彼らの距離は開いている。今の内に奇襲を仕掛けるのも吝かではないが、ユートピアドーパントは首を振ってその考えを捨て去る。そもそも自分がここに居るのは、このソロモンの杖からノイズを召喚して二課の注意を逸らし、自分という脅威を利用して装者の他にも仮面ライダーや彼の部下のドーパント達もこの場に誘導させる為。役目はもう果たしたも同然なのだ。ならばその後は、自由に行動させてもらう。

「時間稼ぎはしました。後は貴女次第ですよ、フィーネ」

彼らがその視界に自分を収める前に、ユートピアドーパントは以前よりも速度を増した速さでこの場を後にした。

繋いだ手だけが紡ぐもの

『報告だ。君達が現場に到着した直後、ユートピアドーパントの反応が途絶えた。恐らく、お前達を誘き寄せる為に自分を囮にしていたのだろう。行方は調査中だが、今は現場のノイズの駆除を優先してくれ』

「はいッ！」

「となると、まず最初に排除すべき敵は……………」

上空を浮遊する四体の超大型ノイズを見上げる。今まで見てきたノイズとは比較にならない程巨大な体を持つそれらは絶えず小型ノイズを出現させている。まずあれを駆除しなければイタチごっこになってしまう。

既に超大型ノイズが出現させた小型ノイズの数は数えるのも億劫な程に増えてしまっている。これ以上増えてしまえば、スカイタワーを護り切れなくなってしまうだろう。

翼が四体の超大型ノイズの内の一体を狙って『蒼ノ一閃』を繰り出すも、それは狙った超大型ノイズの取り巻きの鳥型ノイズフライトによって阻まれてしまう。

「くッ！ 相手に頭上を取られる事が、こうも立ち回りにくいとは……………ッ！」

「へりを使つて、私達も上から……………あッ！」

自分達をここまで運んでくれたへりを見上げた瞬間、へりは周りから押し寄せてきた大勢の鳥型ノイズフライトによって墜落させられてしまった。

「そんな……………ッ！」

「よくもッ！」

唯一超大型ノイズのいる上空へ向かう手段を失い、響は上空を移動する超大型ノイズを睨み上げて拳を握り締める。

「空飛ぶノイズ、どうすれば……………」

「臆するな、立花ッ！ 防人が後ずされれば、それだけ戦線が後退するという事だッ！」

体を槍状に変化させて急降下してくる鳥型フライトノイズを回避し、翼は続けて急降下してこようとする鳥型フライトノイズの群れを『蒼ノ一閃』で纏めて葬ろうと柄を握り締めると、どこかから飛んできた銃弾と光弾が鳥型フライトノイズの群れを消滅させた。

「空飛ぶノイズがなんだってんだッ！ そんな雑魚に手間取ってんじやねえッ！」

トリガードーパントとメタルドーパントを連れたクリスに、響の顔がパアツと明るくなり、翼は身構える。

「クリスちゃんッ！ 来てくれたんだねッ！」

「チツ……………このスマホがピーチクパーチクやかましいから、ちよつと出張ってみただけ。それに勘違いするなよ、お前達の助っ人になったつもりはねえッ！」

『助っ人だ。少々到着が遅くなったかもしれないがな』

「な……………ッ！」

「助っ人……………？」

『そうだ。第二号聖遺物イチバルのシンフォギアを纏う戦士、雪音クリスだッ！』

まさかの自分達と敵対していた相手が助っ人としてこの場に現れるとは予想していなかった翼の前で、響はクリスに抱き着いた。

「クリスちゃん、ありがとうッ！ 絶対にわかり合えるって信じたッ！」

「な……………この馬鹿ッ！ あたしの話を聞いてねえのかよッ！」

「言うだけ無駄だな。そいつからあの弦十郎とかいう男と似た気配を感じるぜ」

「あのおっさんとかよッ!? ああもう、調子狂うつたらありやしな
いッ！」

響から離れたクリスがトリガードパントと共に上空の鳥型フライトノイズを撃ち落としていく。

「悪いがこっちはこっちで勝手にやらせてもらおうッ！ 邪魔だけはすんなよッ！」

「それなら空中のノイズは二人に任せて、私達は地上のノイズをッ！」

「はいッ！」

「俺達が道を切り拓こう」

自分達と東京スカイタワーを阻む大量のノイズをエターナルエッジにしたエターナルを先頭にヒートドーパントとルナドーパントが続き、取り零したノイズは響と翼が消滅させていく。

クリスとトリガードパントは上空のノイズを相手にしているの
で、地上から二人を狙ってくるノイズはメタルドーパントがメタル
シャフトを振り回して蹴散らしていく。

「上空からも見えていたが、やはり数が多いな……………ッ！ まるで
キリがない」

エターナル達が先陣を切ってくれているだけあって自分達が相手するノイズの数は少ないが、それでもその数は多い。一度態勢を立て直そうとノイズから距離を取ると、密集してはガトリング砲で狙いずらいと判断してトリガードパントから離れていたクリスとぶ

つかってしまった。

「なにしゃがるッ！ すっこんでなッ！」

「貴女こそいい加減にして。ここは連携して戦わなければ勝てないのよ」

「はッ！ 『連携』ときたかッ！ 前まで敵だった奴らと連携できる程、あたしやお前は出来てないだろ？」

「む……………ッ！」

「お前ら、こんな時になに喧嘩してんだッ！」

「剛三は黙ってるッ！」

一気に十体のノイズを薙ぎ払ったメタルドーパントを一喝し、クリスは翼を睨む。

「確かにあたし達が争う理由なんてないのかもな？ だからって、争わない理由もあるものかよッ！ この前までやり合ってたんだぞッ！ そんな簡単に人と人が……………」

「……………出来るよ。誰だって仲良くなれる」

その時、翼とクリスの手を握ったのは、響だった。

「立花……………」

「お前……………」

「どうして私にはアームドギアが無いんだろうって、ずっと考えてた。いつまでも半人前はやだなくって」

アームドギアを手にする事が出来るのは、真の覚悟を背負った者のみ。それをいつまで経っても顕現させる事が出来ない事を、響はずっと悩んでいた。

でも、無理して先に進もうとするのは愚行だ。自分は、自分のまま進むんだ。そうすればきつと、自分にとって必要なものが見えてくる

はずだから。そして昨日、響はそれを見つけた。

「でも、今は思わない。なにもこの手に握っていないから、二人とこうして手を握り合えるッ！」

「立花……………」

その言葉に、翼は右手の剣を地面に突き立て、開いた右手をクリスに差し出す。

「手を」

「あ、あ……………むう……………」

差し出された手を、クリスは一瞬だけそれを握ろうとした手を引つ込めるも、弱々しく握る。すると、翼は足りないと言わんばかりに彼女の手を強く握った。

「ひゃッ!? きゅ、急に握るなつての……………。この馬鹿にあてられたのかッ!？」

「そうだと思う。そして、貴女もきつと」

響や互いの仲間達に感化されていなければ、自分達はこうして手を握り合っていない。きつと、知らず知らずの内に、自分達は響によって考えを変えられていたのだろう。それはクリスも考えていたのだろう。それを肯定するように、クリスは俯いたまま、小さくこくりと頷いた。

そして、三人の視線は自然と上空の超大型ノイズへと向けられる。

「……………親玉をやらないと、キリがない」

「だったら、あたしに考えがある。あたしでなきや出来ない事だ。イチイバルの特性は長射程広域攻撃。派手にぶっ飛ばしてやるッ！」

「まさか、絶唱を……………」

「バーカッ！ あたしの命は安物じゃねえッ！」

「ならば、どうやって？」

「ギアの出力を引き上げつつも、放出を抑える。行き場の無くなったエネルギーを臨界まで溜め込み、一気に解き放ってやるッ！」

「だが、チャージ中は丸裸も同然。これだけの数を相手にする状況では、危険すぎるッ！」

「ならそれまでの間、俺達が護るだけだ」

ノイズを蹴り飛ばして三人の傍に降り立ったエターナルを始め、彼の部下であるドーパント達がノイズの大群から三人を護るように立つ。

「そうですね。私達がクリスちゃんを護ればいいだけの事ッ！」

響の言葉を開始の合図に、クリスを残して一齐に走り出して周囲のノイズを蹴散らし始める。

(……………頼まれてもいねえ事を)

以前まで敵だったのにも関わらず、彼らは自分を護る為に戦っている。それがとても、クリスには頼もしく思えた。

(あたしも引き下がれないじゃねえかッ！)

「クリス」

チャージに取り掛かる寸前、トリガードーパントに声をかけられる。

「補助としてトリガーの力を使え。あれなら、より高火力でノイズを吹っ飛ばせる」

「ああッ！」

あの戦いで自分の胸に宿った、『引き金』の記憶を持つT2トリガーメモリの力を解放させる。

全身がトリガーメモリの力に似合った姿に変わると、クリスは早速準備に取り掛かり、胸に湧き上がる歌を口ずさみ始める。

「……なんでなんだろう？　心がグシャグシャだったのに」

それは、以前の彼女が歌うとは考えられなかった歌詞。恐怖と絶望に黒く塗り潰された過去と決別し、まだ何色にも染め上げられていない真っ白な未来へと進む、一人の少女の歌。

その歌に背を押されるように、響達は次々とノイズを消滅させていく。

（俺達はいくまで二人の向かうべき道を指し示しただけで、二人の気持ちを抱きかかしたのは響だ）

ルナドーパントに上空へ投げ飛ばされたエターナルはT2ユニコーンメモリのマキシマムドライブの力を纏った拳を地上に叩き付けてノイズを吹き飛ばす。

（人は繋がれる……か。温い言葉だが……）

「響ちゃんらしい、そう考えているんでしょ？　克己ちゃん」

「人の思考を読まないでくれるか、京水」

「あんな事言ったら、誰だってそう考えるわよ。特に、私達のような連中はね」

ヒューマンノイズ
人型ノイズを蹴り飛ばしたヒートドーパントに、複数体のノイズを吹っ飛ばしたメタルシャフトを肩に担いだメタルドーパントが続く。

「あいつには感謝しなくちやな。これでクリスは大丈夫だ」

「あら、どうしてそう思えるの?」

「クリスは素直になれない性格だ。あんな風に言っただけはいるが、いざ彼女達を信じるようになる」

「ツンデレってやつね。あざといじゃない。でも嫌いじゃないわッ！」

「さあ、いくぞ。クリスを護るんだ」

リーダーであるエターナルの言葉に、四体のドーパントは「了解ッ！」と答えるのだった。

(誰も、繋ぎ繋がれる手を持つ。私の願いは、誰かと手を繋ぐ事ッ！)

その身に宿る二つの記憶の内、燃え盛る熱き記憶を持つヒートメモリの力を解放し、響は自分を困んだノイズを焼き払う。

あの惨劇を生き残った贖罪なんかじゃなく、命の恩人である奏の願いを、この拳に乗せて戦う彼女。そんな彼女の気持ちに呼応するように、どこかに存在する■■■■は強く輝くが、まだ足りぬと言うかのように、その輝きを無くしていった。

(砕いて壊すも、束ねて繋ぐも、力。なるほど、立花らしいアームドギアだッ！)

彼女や克己達によって、自分達は変えられた。敵対していた者達とも手を取り合い、こうして同じ敵を見据えている。

彼女が起こした風は、自分達の歩みを後押ししてくれる。ならば自分分は、さらに強い風で、彼女を導いて往こう。

「……………ッ!? これは……………ッ！」

その時、あの夢で克己の母親である大道マリアから渡されたメモリ

の一本であるT2サイクロンメモリが強く輝き、そこから飛び出した光球が、翼の胸に吸い込まれていく。

———
護りなさい、貴女を変えてくれた人達を。地球ほしの力が、貴女を後押ししてくれるわ。

どこからか聞こえる声。それに頷いた瞬間、翼の纏う天羽々斬の外見が変化していく。

首元に腰まで伸びる緑色のマフラーを巻き、鎧の青色だった箇所は緑色に染め上げられ、脚部に装着されていたブレードは消滅する代わりに羽の部分小さな刃で構成された、翼を象ったものになり、右目の網膜には『C』の文字が浮かび上がる。

ノイズの大群のど真ん中に降り立った彼女を中心に吹き荒ぶ風は不可視の刃となってノイズの集団を切り裂く。その風は止む事無く彼女の体をノイズの攻撃から護りながら彼女の動きを加速させ、さらに周囲の風を取り込ませる事で彼女のスタミナも回復させていく。

(体が軽いッ！…これなら……………ッ！)

まるで自分のものとは思えない程軽くなった体を動かし、次々とノイズを蹴散らしていく。

「烈風よ、吹き荒べッ！ マキシマムドライブッ！」

その単語を口にし、一時的に自身の力が強化された翼は両手に持つ二本の剣を振るって緑色の竜巻となって敵を切り裂く技———

——『碧ノ旋龍』を繰り出し、巻き込んだノイズの集団を塵一つ残さずに切り刻んだ。

そして、彼らがクリスをノイズから護ってくれていたおかげで、遂にクリスのチャージが完了する。

「光が………力が………魂を………？　ぶっ放せッ！」

トリガーの力で蒼く変化していたギア全体を、ガトリング砲と小型ミサイルに加え、大型ミサイル四基を搭載した固定砲台へ変形。蒼き地球の記憶を宿した彼女に、彼らが言う事は一つ。

「……………」託したッ!!「……………」

四基の大型ミサイルを同時発射、後に小型ミサイルとガトリング砲を全弾^{フルバースト}発射。地上から襲い来る救済を告げる破壊の雨——
『MEGA DEATH QUARTET』を前に、上空のノイズは成す術無くその身を塵へ変えていき、地上のノイズを狩り尽くした戦士達はその光景をじつと見つめていた。

「やった………のか？」

「つたりめえだッ！」

「やったやったくッ！」

「やめる馬鹿ッ！　なにしやがんだッ！」

「あはは………」

それぞれの形で戦いが勝利に終わった事に喜んでいる三人を見て、エターナル達は変身を解く。

「任務完了だ。よくやったな、お前達」

「やっぱり五人揃うとやりやすいわね♪　三人だけの時は物足りないがあって仕方なかったもの」

「同感。やっぱり私達は五人が一番よ。プロフェッサー・マリアがいないのは少し哀しいけど」

「プロフェッサー・マリアも、きっと見てくれているさ」

ギアが解除された翼を見て、克己はそう言う。入院中に彼女が見た

と言う克己の母、大道マリアは本来の適合者こそ違えど、T2サイクロンメモリを使用していた。それが彼女に力を貸してくれたという事は、きつと彼女も見えてくれているはずだ。ここから遠く離れた、自分達には決して辿り着けない場所で。

「勝てたのはクリスちゃんのおかげだよッ！ うひひひひッ！」

「だから、やめろと言ってるだろうがッ！ いいかッ！ お前達の仲間になった覚えは無いッ！」

「またまたッ！ クリスちゃんってば照れ隠しのつもりッ？」

「ホンツトうるさいなお前ッ！ あたしはただ、フィーネと決着をつけて、やっと見つけた本当の夢を果たしたいだけだッ！」

「夢？ クリスちゃんのこと？ どんな夢？ 聞かせてよッ！」

「うるさい馬鹿ッ！ お前、本当の馬鹿ッ！」

「俺達のミッションもクリアって感じか？」

「ああ、文句無しのミッションコンプリートだ」

「ようっしッ！ お疲れさん、賢ッ！」

「剛三も、お疲れ様」

響の態度に怒っているようだが、ああして話すのは満更でもなさそうな様子のクリスの姿に、賢と剛三は拳を軽くぶつけた。

「……………だが、気になる事はある」

そんな中、克己はここに到着したばかりに弦十郎から受けた報告を思い出す。

「ユートピアは俺達が到着すると同時に姿を消した。奴がこの場に現れたのは装者だけでなく、俺達も誘導する為だろう。……………まさか」

「……………ねえ、私、今凄く嫌な予感がしたんだけど」

レイカが感じた不吉な予感、すぐに形となって現れた。

「ん？ 誰からだろう？」

誰かが電話をかけてきている事に気付いた響がスマホを取り出し、耳に当てる。

『響ッ！』

「あ、未来ッ！ こっちは——」

『学校が………リディアンがノイズに襲われ——』

切羽詰まった親友の声は途中で切れ、それにその場にいた全員が呆然としていた。

交差する想い

響達が東京スカイタワーで抗戦を始めて少し経った頃、二課の本部が地下に存在する《私立リディアン音楽院》はノイズに襲われていた。ノイズを打ち倒せる力を持つ響達は東京スカイタワーに向かっている。自衛隊が学校に現れたノイズの対処に追われているが、特別な力を宿していない通常兵器ではノイズを倒す事は出来ず、足止め程度しか役割を果たせない。今この場にいる者達が出来る事は、絶対的な『死』の具現者から逃れる事だけである。

「落ち着いてッ！ シェルターに避難してくださいッ！」
「ヒナッ！」

ノイズの被害を押し留める為に出動した自衛隊と協力して生徒の避難誘導を行っていた未来の元に、彼女や響の友人である安藤創世、板場弓美、寺島詩織がやって来る。

「どうなってるわけ？ 学校が襲われるなんて、アニメじゃないんだからさ……………」
「わからない。だけど、逃げなきゃ。みんなも早く避難を」
「小日向さんも一緒に……………」

ノイズの恐ろしさは誰だって知っている。その脅威から友人と逃れようと詩織が言うが、未来は首を振って拒否する。

「先に行つて。私、他に人がいないか見てくるッ！」
「ヒナッ！」

言うが早いか、創世の呼びかけにも答えずに持ち前の走力で外に飛び出した未来の後ろ姿に手を伸ばしかけると、「君達ッ！」と自衛隊の一人が走り寄ってきた。

「早くシエルターに向かったださいツ！ 校舎内にもノイズが――

瞬間、窓ガラスを突き破ってきた鳥型フライトノイズが彼の体を貫き、男は一瞬にして自らを貫いたノイズごと炭素となって崩れ落ちた。

一瞬、目の前でなにが起きたのか理解出来なかった三人だが、目の前の床に降り積もる黒い砂を見下ろし、今なにが起きたのかを察する。

「いやあああああッ!!」

息を呑み、なにも言えない二人の友人の気持ちを代弁するかのよう
に、堪え切れなくなった弓美が悲鳴をあげた。

――学校が……………響の帰る場所が……………

ノイズによって次々と学校が破壊されていく様が否応なしに見せつけられる。この光景を作り出したノイズに対する怒りと、響達との
思い出が壊されていく事への哀しみが湧き上がってくるが、今はそれ
よりも、逃げ遅れた人々を救う事に集中すべきだ。

「あ……………ッ!?!」

その時、未来の存在に気付いたノイズの一体が未来に飛びかかって
きた。未来の体がノイズに触れられる寸前、横から飛び込んできた緒
川がノイズから未来を護った。

「緒川さんッ!」

「ギリギリでした……………。次、上手くやれる自信は無いですよ?」

じりじりと寄ってくるノイズの集団を前に、緒川は未来の手を握る。

「走りますッ！ 三十六計逃げるに如かずと言いますッ！」

「は、はいッ！」

流石にこれだけの数を前にして、避難誘導を続けようとは思えない。急いでシエルターのある二課本部へのエレベーターに駆け込み、地下へと降り始める。

「……………はい、リディアンの破壊は依然拡大中です。ですが未来さん達のおかげで、被害は最小限に抑えられています」

通信機を手に誰かと通話している緒川。通信機から僅かに聞こえる声から察するに、通話相手は弦十郎だろうか。

「これから未来さんをシエルターまで案内……………ッ!?」

無意識にエレベーターから見える不思議な模様の描かれた壁を見た瞬間、そこにある人物がいる事に気付いた緒川が構えを取ろうとした瞬間、エレベーターに飛び移ってきた女性が彼の首を掴んだ。

「ぐ、うう……………ッ！」

「聞こえるか、愚かな男よ。お前の願いは儚く散ったッ！」

ネフシユタンの鎧を装着する事によって強化された握力で緒川の首を絞め続けながら、フィーネは彼が落とした通信機に向かって叫ぶ。

「お前は私が改心するとも思っていただろうが、何百、何千、何万と

「いう年月せつなを生きてきた私の想い、そう簡単にならなるとでも思うたかッ！」

そこでエレベーターは最下層へと到着し、緒川の体が押し付けられていた扉が開くと、拘束を解いた緒川が未来を連れてフィーネから距離を取り、懐に忍ばせていた拳銃を発砲する。

「そんな豆粒が通用するともッ！」

撃ち出された弾丸は全てフィーネに直撃するが、彼女の鎧はおろか、曝け出されている肌にも傷一つつかず、片手に握った鞭を緒川の首に巻き付けて持ち上げた。

「緒川さんッ！」

「未来さん……………に、逃げてください……………ッ！」

少し力を籠められただけでも首の骨を押し折られてしまうような状況であるのに、緒川は自分よりも未来の安全を優先し、早く逃げるようにと自分の首を絞める鞭を掴んで苦し紛れに言葉を発する。

「……………ッ！」

「む……………」

だが、未来は彼の言う事に従わず、あろう事かフィーネに体当たりをかました。しかし、銃弾を物ともしない体にうら若き乙女の体当たりなどダメージにもならず、フィーネはゴミを見るような冷たい目つきで眼前の少女を見下す。

ノイズと遭遇した時とは比べ物にならない恐怖にへたり込んだ未来に、フィーネは緒川の拘束を解いて向き合う。

「麗しいな。お前達を利用してきた者達を護ろうというのか？」

「利用……………う？」

「リディアンとは音楽院と銘打ってはいるが、その実体は装者の搜索や聖遺物に関する歌や音楽のデータを収集する為の施設。生徒被験おまえたち者は、この者達に利用されていたに過ぎない。その点、風鳴翼という偶像は、生徒を集めるのによく役立ったよ」

「……………それでも」

緒川を排除しようとして動き出したフィーネの足が止まり、横目で足を震わせながらも立ち上がった未来を見る。

「嘘を吐いてまで、誰かの命を護ろうと、自分の身を顧みずに戦う人がいますッ！」

利用されてはしたが、それは全てノイズという人類の天敵を打ち倒す為に行われていた事であり、響だつて苦しい思いをしながらも、自分達を護る為に戦ってくれた。嘘で塗り固められていたとしても、それだけは変わらぬ事実である。

「私はその人を……………その人達を信じてるッ！」

「信じている、か。ならば……………ッ！」

未来に向けて、鞭を振るう体勢に入る。

誰かを信じる心。それはかつて、フィーネも持っていたものだ。だが、信じ、恋焦がれていた相手は、自分の気持ちなんて知らないままに、あの天へと続く塔を雷霆にて破壊し、呪われた人々は繋がる事よりも争う事を選んだ。

そんな時代を生きたフィーネへ投げかけられた目の前の少女の言葉は、彼女の逆鱗に触れるに充分であった。

「真に人を繋ぐものとはなにか、その身を以て知るがいいッ！」

未来の体を切り裂こうと、鞭を振り下ろそうとしたその時――

「――待ちな、了子」

天井を破壊して彼女の前に降り立った男の姿に、フィーネは思わず鞭を握った手を止めてしまう。その隙に緒川は未来を抱え、二人から距離を取る。

「……………私をまだ、その名で呼ぶか」

鞭を握った手をゆっくりと下ろし、フィーネは自然体で立つ弦十郎を睨む。

「君が自らを『フィーネ』だと呼んでも、俺は変わらず、お前を『了子』と呼んでやるさ」

「櫻井了子という人間は、とつくの昔にこの世から消え失せたのにか？」

「おうとも。君に魂を喰らい尽くされても、君は『櫻井了子』だ。……………それと、あの時交わした約束は忘れたのか？」

響や克己達はおろか、二課の職員ほとんどに知らせる事無く、彼女と取り交わした約束。それは、デュランダル移送計画が中止になった日の翌日に行った響との訓練を終えた後に、櫻井了子として二課で働いていたフィーネと交戦した後に交わしたものである。

秘密裏に調査を依頼していた調査部から得た『カ・デインギル』という謎の塔と、それを建造しようとしている謎の女性フィーネの情報。調査の結果、彼女は自分と同じく二課で働く職員である櫻井了子その人であり、同時に櫻井了子というのは仮の姿という事も判明した。その情報に弦十郎は驚愕し、同時に彼女を止めようとも考えたのだ。

当時はカ・ディングルというものがどういったものかを知らなかったが、了子として振る舞っていたフィーネとの通話で、彼女直々に齎された情報により、それが途轍もなく危険なものであると悟った弦十郎は、遂に自らの正体を明かしたフィーネと戦い、これに勝利。殺しは好かない性分である弦十郎は彼女にトドメは刺さず、『これからカ・ディングルの建造を続けると言うのであれば、まず自分を殺してから』という約束を交わしたのだ。

自分という壁で阻む事で、彼女の計画を頓挫させられないかという考えの下に弦十郎はフィーネとこの約束を交わしたのだが、フィーネは自分を殺すよりも先にカ・ディングルを完成させ、こうして計画の実行に乗り出した。

「そんな約束に、もう意味は無い。この私に訪れた好機を不運に思うがいい」

「……………それでも、俺は今この瞬間でも、君を二課の仲間だと思っている」

「愚かな事。甘い男だ」

「ああ、俺は甘い。だが、我々が特異災害対策機動部二課で過ごした時間に嘘は無かつたはずだ」

確かに最初は、彼女は『櫻井了子』であり、『フィーネ』であるとは知らなかった。だが、彼女の正体を知ってから過ごした時間は確かに存在し、二人だけの秘密の約束を取り交わしてからは、誰にも悟られる事無く、命を狙い狙われの関係を続けてきた。そんな、一歩間違えれば死んでいたであろう生活を、不思議と弦十郎は楽しく思っていたのだ。

「こんな事は止めて、帰ってくる気は無いか？　俺は君に、三度目の招待をした」

「……………くどい」

「もう、考え直せないのか？」

哀しそうに問いかけてくる弦十郎の表情を見ると、チクツとなにかが刺さる感覚に襲われる。

これまで、何度も転生を繰り返してきた。その時の思い出など、今は全く思い出せないのに、この男との記憶だけは、たとえこの先転生したとしても、いつまでも消えそうにないと思える。

それほどまでに、彼と過ごした時間は――

(……………あり得ない。あり得ては、ならない……………)

首を振って、浮かんできた考えを振り払う。自分が求めるのは、あの御方の隣に立つ事のみ。この男は、それを阻む敵に過ぎない。そのはずなのに、そうであるはずなのに――

(なのに、どうして……………)

――こんなにも、胸が張り裂けそうなのだろうか？

「……………もう、後戻りは出来ない。この時を、私は幾星霜待ち続けたのだから。その為……………」

駄目だ。それから先は言うてはならない。それを言うてしまったら、もうあの頃には戻れない。

そう叫ぶ自分に気付きながら、フィーネは弦十郎に構えを取る。

「――お前を、殺す」

――ああ、言った。言うてしまった。これで、自分と彼は敵対者。思い出は遠い彼方に消え去って、二度と戻ってはこない。

「了子……………」

言い切られた事を、弦十郎は哀しむ。考え直してはくれなかった。その言葉を以て、自分達は『仲間』から『敵対者』となつてしまつた。

「だが、俺は……………ッ！」

ふざけるな。そんなのは認めない。

敵対者？ 違う。惚れた女を敵対者と定めてはいけない。たとえば、天が自分達を敵対者として対峙する事を認めても、自分は、風鳴弦十郎という男は、それを認めないッ！

「だが俺は……………君を止めるぞ、了子君ッ！」

「……………来い、風鳴弦十郎」

「おおおおおおッ!!」

どこか哀しさを感じさせる雄叫びをあげ、弦十郎が駆け出す。フィーネが右手の鞭を振るつて迎撃するが、弦十郎は体を左に動かす事でそれを回避し、続けてフィーネが振るつた鞭をジャンプして躲し、天井を蹴つて一気に距離を縮めてくる。

「おおらあああッ！」

「く……………ッ！」

右に逸れて躲した拳は床を穿ち、その衝撃がネフシユタンの鎧にヒビを入れる。シンフォギアもドライバーも、果てはガイアメモリすら持たないのにも関わらずに超人的な力を発揮する弦十郎は以前戦つた際に身を以て理解していたが、まさかの完全聖遺物であるネフシユタンの鎧ですら、彼の攻撃を無傷で防げないという事実には驚愕しつ

つ、フィーネは彼から距離を取る。

「喰らえ……………ッ！」

今度は、先程よりも速度を増した同時攻撃。常人は自分が殺された事すら理解出来ずに絶命するであろう速度で迫り来るそれをしかし、

「ふんッ！」

弦十郎は両手で掴み、それらを引っ張ってフィーネの体を無理矢理自分の拳が届く範囲まで引き寄せた。

「おおおおッ！」

固く握り締められた右拳は、防御する暇を与えずに事無くフィーネの腹部に叩き込まれ、彼女の体を弦十郎の背後に落とした。

「流石、日本の最終兵器、風鳴弦十郎ね……………。まさか、このネフシユタンの鎧でも防ぎ切れないなんてね……………」

「了子、もうやめよう。こんな戦い、俺はしたくない」

殴られた腹部を抑えながらよろよろと立ち上がったフィーネに、弦十郎は構えを解いて、戦いを止めるよう促す。だが、それに対するフィーネの答えは変わらずノーだ。

「さっきも言ったはずだ。『後戻りは出来ない』と。私達は殺し合わなければならぬ。私はあの御方の元へ行く為に。お前は人々の平和の為に。どちらかが敗北するまで、この戦いは続くのだ」

「そんな結末、俺は望まない。何度だって喰らいついてやる。お前の考えが変わる、その時までッ！」

「私の悲願は変わらない。今までも、そしてこれからもッ！」

殴られた痛みは鎧の超自然回復能力で既に無くなっている。再び振るわれた鞭を避け、フィーネとの距離を縮めていく弦十郎。突き出された拳を間一髪でジャンプで躲したフィーネは短く握った鞭の尖った先端で弦十郎の首を狙うも、彼は手刀でそれを払って防ぐ。

背後に着地したフィーネの姿を視界に収めようと振り向いた瞬間、弦十郎の側頭部にフィーネの蹴りが叩き込まれる。数歩後ずさりながらも追撃として飛んできた鞭を掴んだ弦十郎はそれを引つ張ってフィーネとの距離を縮め、顔面に裏拳を繰り出そうとするも、彼女はそれを片手で防ぐ。

「はあッー！」

「があ……………ッー！」

足払いを躲したところを襲ってくる二本の鞭を手刀で捌き、床を蹴り碎いて目にも留まらぬ速さで懐に潜り込んだ弦十郎の正拳突きが命中し、殴り飛ばされたフィーネの体がエレベーターの扉に叩き付けられる。

「終わりだ……………了子ッー！」

一瞬崩れ落ちるも、すぐに立ち上がったフィーネに、弦十郎は拳を握り締めて飛び上がった。

これから突き出される拳は、直撃すれば間違いなくこの戦いを終わらせられる威力を誇っている。だが、それがフィーネに当たる直前、

「……………ッー！」

俯かせていた顔を上げたフィーネの表情を見て、弦十郎は無意識に突き出しかけた拳を止めてしまう。

」
声に出す事無く告げられた言葉の後、あらゆるものを切り裂く刃の鞭が、弦十郎の腹部を貫いた。

「……………愚かよ。本当に、どこまでも……………」

徐々に広がっていく赤黒い泉の中心に倒れ伏す男を見下ろす。その言葉は彼に向けられたものなのか、それとも、自分に向けられたものなのか。はたまた、両者に向けられたものなのか。それを知っているのは、彼の鮮血を滴らせる鞭を握り締める彼女のみ。

「司令……………ッ！」

「いやあああああッ!!」

倒れ伏す弦十郎の姿に緒川が声を漏らし、未来が叫び声をあげる中、フィーネは静かに目の前で倒れる弦十郎を見つめていると、呻き声を零して顔を上げた弦十郎と目が合う。

「了……………子……………」

「しつこいわね。私は『櫻井了子』ではないと、何度言ったらわかってくれるの?」

伸ばされた震える手を振り払い、フィーネは弦十郎のポケットから彼のスマホを取り出す。

特異災害対策機動部二課の最深部に存在するアビス。そこにフィーネの求める、ネフシユタンの鎧に次ぐ完全聖遺物であるデュランダルが保管されている。不死身の再生能力を持つネフシユタンの鎧に、万物を絶つデュランダル。この二つが揃った時、フィーネはどんな者でさえ相手にはならない、絶大な力を手に入れるのだ。

「私はフィーネ。神々の領域へと至る古の塔を以て、人類の相互理解を阻む呪いを解く者。この時を、私は永遠とさえ思える時間の中でずっと待っていた。貴方の感情一つで止められる程、私は甘くないのよ」

そう、甘くない。永い時を生きてきた自分にとっては一瞬の出来事の内に出会った人間でしかないこの男に、自分の気持ちを換えられるはずが無い。換えられないはずだ。

(こんな男に心を惑わされる必要は無い。私が愛しているのは、あの御方ただ一人。だから、これでおしまい)

弦十郎の横を通り過ぎる寸前、フィーネは小さく呟いた。

「……………さようなら、弦十郎君」

デュランダルの保管されているアビスへ走り出す。

その頬に、生暖かい雫が伝う事すら気付かずに。

少女が受け継いだ夢

日が沈んだ頃、響達はノイズによって破壊されたであろう《私立リデイアン音楽院》の惨状を見て啞然としていた。

自衛隊が使用していたであろう戦車や銃の他にも、所々に小さく積もった黒い砂の山が、この場でなにが起こったのかを雄弁に語っている。

「まんまとハメられたというわけか……………」

「やってくれたわね……………ッ！ 絶対に許さないわ……………ッ！」

「……………ッ！ みんな、あれッ！」

京水が指差した方角を全員が見ると、校舎の端に了子が立っていた。

「あれは……………櫻井女史かッ!？」

「……………なんで」

翼とは違う驚愕を胸に抱き、クリスは自分達を見下ろす了子を睨み上げる。

「なんでお前がここにいるんだ、フィーネッ！」

「フフ……………ハハハハハッ！」

「そうなのか……………ッ!? その笑いが答えなのかッ！ 櫻井女史ッ！」

叫ぶクリスの問いに対する答えとして高笑いをするその姿に、翼が信じられないという感情を隠す事無く叫ぶと、眼鏡を外した了子の姿が光に包まれる。

「その通り。 特異災害対策機動部二課に所属する考古学者、 櫻井了子

とは仮の姿。我が名はフィーネッ！ 終わりの名を持ち、人類を忌々しいバラルの呪詛より解き放つ者ッ！」

収まっていく光の中から現れた、ネフシユタンの鎧を装備し、解かれた金色の長髪を靡かせた了子——フィーネの姿に、響は目を見開く。

「……………嘘ですよ。そんなの、嘘ですよ……………？ だって、了子さん、私を護ってくれましたッ！」

以前行われたデュランダル移送計画。当時はまだネフシユタンの鎧を身に着けていたクリスとトリガード・パントとの交戦の際、シンフォギアを纏う猶予を与えられなかった響がノイズに殺されかけた時、彼女は自分を護ってくれたのだ。そんな彼女が自分達の敵なはずがないと思っっている響に、フィーネは当時の事を思い出しながら答える。

「あれはデュランダルを護っただけの事。希少な完全状態の聖遺物だからね」

「そんな……………。それじゃあ、了さんがフィーネと言うのなら、本当の了さんは？」

「櫻井了子の肉体は先立って喰い尽くされた。……………いや、意識は十二年前に死んだと言っつていい」

「なんだと……………ッ!?!」

「超先史文明期の巫女フィーネは遺伝子に己が意識を刻印し、自身の血を引く者が、アウフヴァツヘン波形に接触した際、その身にフィーネとしての記憶、能力が再起動する仕組みを施していた。その目覚めし意識こそがこの私、フィーネなのだッ！」

「まるで過去から蘇る亡霊……………」

死して尚も自らの子孫の体に乗っ取って活動する彼女の在り方に、

翼は険しい表情をする。

「フィーネとして覚醒したのは私一人ではない。歴史に記される偉人、英雄、世界中に散ったフィーネ達わたしたしはパラダイムシフトと呼ばれる技術の大きな転換期に、いつも立ち会ってきた。お前のシンフォギア・システムも、その一つだ。尤も、それは為政者からコストを捻出する為の副次品……………玩具に過ぎないがな」

「玩具だと……………ッ!? お前の戯れに、奏は命を散らせたのかッ!」

翼のかつての相棒にして、ツヴァイウィングの片割れだった天羽奏は、その適合係数の低さからシンフォギアを纏えなかったが、文字通り血反吐を吐く思いで薬物投与を繰り返し、訓練に励み続けた結果、ようやくガングニールのシンフォギアを纏うに至ったのだ。彼女はその力で人を救える事を誇りに思い、あのライブ会場の事件でも、自分の命を散らしてまで多くの人々を救ったのだ。彼女の意志はガングニールを介して、後継者である響に受け継がれた。そんな、彼女の想いが込められたシンフォギアを『玩具』と言われた事に、翼は怒りを感じていた。

「あたしを拾ったり、アメリカの連中とつるんでいたのも、そいつが理由かよッ!」

天涯孤独となり、大人に酷い目に遭わされてきたクリスがフィーネに拾われた時から、クリスは彼女を心底信頼していた。結局、最後は裏切りという形で二人の関係は終わってしまったが、それでもクリスは、心のどこかでフィーネを信じていたのだ。だが、先の言葉で、自分はその意味で彼女の『道具』である事を改めて痛感した。

「そうッ! 全てはカ・デインギルの為ッ!」

フィーネが高らかに叫ぶと、大きな地響きが起こり、彼女の背後に、

地面を突き破って巨大な建造物が姿を現した。

天を貫かんとするかのよう屹立する、二課本部のエレベーターからも見える不思議な紋様が描かれた塔。

「これこそが、地より屹立し、天にも届く一撃を放つ荷電粒子砲力・デインギルツ！」

カ・デインギル。別名、『バベルの塔』。それは太古の昔、神々の領域へ足を踏み入れようとした人々が作り上げ、そして破壊された最古の塔。一つの共同体だった人類をバラバラに散らす原因となった塔。神話に存在する古塔の出現に、その場にいたフィーネを除く者達が目を見開く。

「今宵、これより放たれる一撃で月を穿つ事によって、人類は忌々しき呪詛より解放されるのだツ！」

「呪詛………？　呪詛とはいったいなんの事だツ！」

「それは私が説明しましょう」

「……………ツ！　お前は……………ツ！」

その問いに答えるのはフィーネではなく、彼女の隣に現れたユートピアドーパント。自らの出現に身構える克己達に、ユートピアドーパントはフィーネの言う『呪詛』について説明し始める。

「今と違って言語が統一されていた古代の人類は、神の領域に至ろうとシリアル野に、このカ・デインギルを建造しました。しかし神はそれを快く思わなかったのか、彼らが建造したこの塔を破壊し、同時にある呪いを撒き散らしました。これこそが『バラルの呪詛』。神によって施された、人類の相互理解を阻む呪いです。そして、その根源となったのが」

「月、というわけか」

頭上に浮かぶ月を見上げる克己に「その通り」と答えるフィーネ。

「私はただ、あの御方と並びたかっただけなのに、あの御方は人の身が同じ高みに至る事を許しはしなかったッ！ あの御方の怒りを買ひ、雷霆に塔が砕かれたばかりか、人類は交わす言葉まで砕かれる果てしなき罰、バラルの呪詛をかけられてしまったのだッ！ そして、遂にこの時がやってきたッ！」

カ・ディングルから月へと視線を移し、フィーネは両腕を広げて歓喜する。

「人類の相互理解を妨げるこの呪いを、月を破壊する事で解いてくれるッ！ そして再び、世界を一つに束ねるッ！」

「……………下らねえな」

「なんだと？」

ロッドを担いで吐き捨てるように言った剛三をフィーネがじろりと見ると、剛三に続いて賢が口を開く。

「誰かに会いたいという気持ちはわかる。だが、その為に多くの命を奪う事を肯定する事は出来ない」

「『あの御方』とやらに想いを伝えたい。その気持ちは立派よ。だけど、その為に無実の人々を殺すあんたのやり方は肯定できないわね」「身勝手な理由でこの子達を振り回す事は、天が許してもワタシ達が許さないわッ！」

「死者は後世に生きる者達を後押しするものだ。それをせず、無実の人々を殺してきたお前を、俺達は許さない」

誰かを愛する心を持つ事は素晴らしい事だ。だが、その為に関係の無い者達を巻き込むのは解せない。ただ身勝手に、自分の感情を優先して無実の人々の命を奪ってきた事は、到底許される事ではない。

生者ひびきたちは彼女の我が儘に無理矢理付き合わされているようなものなのだ。

だからこそ、死者かれらは言う。

「――身勝手な理由で、この子達を巻き込むなッ！」「――」

命を持たない彼らだからこそ、自分達と同類とも考えられる生ける亡霊である彼女に対する怒りは熱く燃え盛っていた。

「お前が支配した世界が、みんな笑顔でいられるような世界なら、あたしはなんも言わねえけどよ、お前の話を聞いて確信したよ。お前が支配した世界じゃ、誰一人笑顔にはならねえって事がなッ！」

進み出たクリスに、翼が続く。

「未来は希望と絶望によって形作られていくものだ。絶望と恐怖のみで染め上げられた世界に明日は無い。だからこそ、私は防人として貴女の野望を阻むッ！」

そして最後に、響が翼とクリスの間に進み出る。

「私、難しい事はよくわかりませんが、了子さんが間違っている事だけはわかりますッ！ だから、私は……………、私達はッ！」

フィーネを見据え、覚悟を決めた響は叫ぶ。

「了子さん、貴女を止めますッ！」

三人の少女がペンダントを握り締め、克己達がガイアメモリを取り出す。

「Balwisyal Nescell gungn
ir tron」
「Imyuteus amenohabakirit
ron」
「Killter Ichai val tron」
『エターナル!』
「変身ッ!」
『ヒート!』
『ルナ!』
『メタル!』
『トリガー!』

三人のシンフォギア装者と一人の仮面ライダー、そして四人のドーパントが並び立つ。

「永遠を生きる私が余人に歩みを止められる事などあり得ない」
「止めてみせますッ! 私が、いえ、私達がッ!」
「素晴らしい……………。貴方方の希望、この私が戴きましょう」
「奪わせはしない。希望も未来もッ!」

フィーネの鞭とユートピアドーパントの衝撃波を躲し、八人はそれぞれの相手に攻撃を仕掛けた。

「でりゃああああッ!」

クリスの『MEGA DEATH PARTY』を両手に握った鞭を巧みに動かす事で全弾を破壊したフィーネの視界を黒煙が埋め尽くし、それを切り裂いて翼の一閃が迫る。それを視界に収めた瞬間に動いた右腕がそこに装着された籠手で受け止め、翼を蹴り飛ばす。

「翼さんッ!」

「そんな玩具が私に届くものかッ！」

「こんのおおおッ！」

突き出された拳を躲し、時に防御したフィーネが左手の鞭を響の足元に巻き付かせ、背後から向かって来ていた翼に投げ飛ばす。飛んできた響の体を受け止めた翼の元にフィーネの鞭が二人を貫こうと迫るが、それはアームドギアをクロスボウ形態に戻したクリスが矢を命中させた事で軌道が逸れ、二人の真横の地面を穿つ。

「やってくれたな……………ッ！」

「があ……………ッ!？」

右手の鞭でクリスを拘束したフィーネが彼女の体を持ち上げて地面に叩き付ける。ネフシュタンの鎧によって強化された腕力によって叩き付けられた衝撃に開いた口から少量の血を吐き出したクリスをもう一度地面に叩き付けようとした瞬間、左右からの攻撃に気付いて防御する。

防御に意識が向いたため鞭の拘束が緩くなった瞬間を狙ってクリスが拘束から抜け出した事に、翼の剣と響の拳を受け止めていたフィーネが舌打ちをして二人を蹴り飛ばし、両手の鞭を強く握り締め、二人よりも遠くにいるクリス諸共薙ぎ払った。

「ぐあああああッ!」

「どうした? もう終わりか?」

よろよろと起き上がる彼女達に、余裕のある佇まいで挑発するように言うフィーネに、所々に大小様々な傷を負ったクリスは苦し紛れに返す。

「な、わけねえだろ……………。おい、お前ら……………」

「……………うん」

「……………わかった」

クリスの視線に込められたものを読み取った響はガングニールをT2ヒートメモリの力を引き出してエルナンデイ・ガングニールに、翼は天羽々斬をT2サイクロンメモリの力を引き出して天羽々斬・翼よくふうしん風刃に変化させ、自身を鼓舞するように雄叫びを上げてファイネに攻撃を仕掛けた。

そして、響達がファイネと戦っている場所から少し離れた所では、メタルドーパントに罅迫り合いで勝利したユートピアドーパントが彼を押し飛ばし、ルナドーパントの右腕を杖で受け止め、重力操作で彼の体を持ち上げて遠くから狙撃しようとしていたトリガードーパントにぶつけていた。

「く……………、このッー！」

態勢を崩されながらもトリガードーパントが右腕のライフルから放った光弾を杖で弾いたユートピアドーパントにヒートドーパントの跳び回し蹴りが直撃し、微かな呻き声を漏らしてユートピアドーパントが後ずさると、すかさずエターナルが前に出る。その手に握られているのは、T2ユニコーンメモリ。

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

「おおおおッー！」

マキシマムスロットに挿し込んだ一角獣の記憶を持つガイアメモリの力を宿した拳にドリル状のエネルギー波を纏わせて殴りかかる。体勢を立て直していたユートピアドーパントは襲い来る拳を両腕を交差させて受け止めるが、連続で叩き込まれる拳に宿った、凄まじい勢いで腕を貫通してこようとするエネルギー波は遂に彼の防御を崩し、がら空きとなった腹部に右拳が捻じ込まれた。

「おのれ……………ッ！」

殴り飛ばされたユートピアドーパントは空中で自身に重力操作の力を使用して空中で留まると、上空から五人目掛けて衝撃波を放ってきた。五人が衝撃波に吹き飛ばされると、続けて杖の先端から黄金の輝きを放つエネルギー弾を五つ出現させ、五人に向かわせる。

「……があああああッ！……」

エネルギー弾が直撃した事で再び吹き飛ばされた五人の中央にユートピアドーパントが降り立つ。以前交戦した時よりも格段にパワーアップしているユートピアドーパントは多少のダメージを負いはしたもののまだ余裕を見せており、それに比べて五人はかなりのダメージを受けていた。

五人が立ち上がるうとしたその時、カ・デインギルが眩い輝きを放ち始める。

何事かと驚く五人を他所にカ・デインギルを見上げたユートピアドーパントは、これからなにが起こるかを五人に説明する。

「どうやらエネルギーが満たされたようですね。溜まりに溜まったエネルギーがあああの砲口から放たれたが最後、呪詛の元凶たる月は破壊され、人類は再び一つに……………む？」

なにかが発射されるような轟音を捉えたユートピアドーパントが音が聞こえてきた方向へ視線を移すと、四基の大型ミサイルがカ・デインギルに向かっていた。

だが、ファイネは微かな焦りを見せながらもミサイルを破壊していき、あれならば問題は無いと判断したユートピアドーパントが五人に視線を戻しかけた瞬間、一基のミサイルが黒煙を突き破って遙か上空の月へと向かっていくのが見えた。だが、ユートピアドーパントの視線を引きつけたのはミサイルではなく、それに乗っている一人の少女

の姿だった。

「クリス……………ッ!？」

「あいつ、なにをしてやがんだッ!？」

五人の中では最もその少女と同じ時間を過ごしたトリガードーパントとメタルドーパントは、ただミサイルに乗って徐々に姿を小さくさせていくクリスを見上げているしかなかった。

——同時攻撃を仕掛けてきた響と翼の攻撃がネフシュタンの鎧のパーツで陣を組ませる事によって張られたバリアで防がれる。攻撃が失敗した二人がフィーネから距離を取るよりも速く動いた鞭が二人を切り裂く。

「やあッ!」

「ぐあ……………ッ!」

切り裂かれながらも態勢を整えた翼が大型化させた剣を振るって発生させた緑色の竜巻にフィーネを閉じ込めてから風を操って彼女の全身を切り刻んでいくが、切り裂かれた箇所からネフシュタンの鎧の力によって凄まじい速度で回復していくフィーネは鞭を振るって竜巻を切り裂いて風を霧散させた。自分を竜巻に閉じ込めて行動を制限するのが彼女達の目的かと思っただが、響達の真の狙いは別にあった。

「本命は……………こっちだあッ!」

トリガーの力を引き出してアズウティラール・イチイバルに変化させたギアを纏ったクリスが、先の戦いで超大型ノイズすらも仕留めた技を放とうとしている事にフィーネが気付いた頃には、既にその

チャージは完了していた。

「喰らいやがれッ！ ロックオンッ！ アクティブッ！ スナイプッ
！ デストロイイイイッ！」

並の敵であればたとえ集団であれど一掃が殲滅力を誇る『MEGA
DETH QUARTET』が、フィーネではなくその背後に聳え
立つカ・ディングル目掛けて飛んでいく。

「狙いはカ・ディングルかッ!? させるかあッ！」

バラルの呪詛の解除にカ・ディングルは必要不可欠。それを破壊さ
れては、フィーネは目的を果たせない。初めて焦りを見せたフィーネ
が二本の鞭を駆使してミサイルを破壊していくが、最後の大型ミサイ
ルが見当たらない。

「どこに………はッ!」

見上げると、徐々に遠ざかっていく大型ミサイルが見えた。

「クリスちゃんツ!」

「なんのつもりだッ!」

これは響と翼も予想外だったのか、二人もフィーネ同様に驚愕して
徐々に遠ざかっていくクリスの背中を見上げる。

しかし、彼女の乗るミサイルを当てたとしても、この巨大な塔は完
全に破壊出来ないし、これから放たれるであろう砲撃を食い止める事
も出来ない。そう、シンフォギアを『玩具』だと捉えているフィーネ
は考えていたのだが、それは次の瞬間に聞こえてきたものによって、
その考えは覆される事となった。

「Gatrandis babel ziggurat
edenal Emustolronzen fine el
baral zizzl」

ミサイルから飛び降りたクリスは腰部アーマーからエネルギーリフレクターを展開。ダメージを軽減する役目を持つマントを構成するエネルギーを両手に持ったマグナムの光弾に籠め、威力を増した光弾はリフレクターを反射しながらその威力と速度を増していき、次第に蒼い蝶の羽を象つていく。

そして、両手のマグナムを合体させてバスターキャノンに変形させた瞬間、カ・ディングルから超出力のエネルギー砲が発射された。

地上から、雲を突き破って飛んでくる破壊の砲撃。それを、クリスは真正面からバスターキャノンの引き金を引いて迎え撃った。

「一点集中ツ!? 押し留めているだとツ!?」

地上からも見える程のに二色の輝きの拮抗に、あり得ないと言いたげに叫ぶフィーネ。

シンフォギア・システムは副次品として開発しただけの玩具に過ぎないはずだ。それがなぜ、ああして月をも砕く一撃と互角に渡り合っている。目の前で起こっているそれは、フィーネにとって、理解出来ない出来事だった。

(ずっとあたしは……………パパとママの事が、大好きだった……………ツ! だから、二人の夢を引き継ぐんだッ!)

賢と剛三が思い出させてくれた、両親への想い。

この世界は、喜びと哀しみで満ちていて、今もどこかで誰かが笑って、誰かが哀しみに暮れている。

でも、だからこそ、この世界は美しい。どれだけ絶望に打ちひしがれても、その先には必ず希望が待っていて、誰もが笑顔になれる。

あの日、戦地で命を落とした両親は、みんなに笑顔を与える為に進んでこの世の地獄に足を踏み入れた。どれだけ残酷な世界でも、希望は必ずあると、現地の人々に教える為に。

両親はあの日死んでしまったけれど、その魂、意志は死んでなんかいなくて、今もこの胸の中で生き続けている。

(パパとママの代わりに、歌で平和を掴んでみせるッ！)

破滅の砲撃が迫ってくる。それを恐れる事無く、最後の力を振り絞って、クリスはバスターキヤノンの砲撃の威力を底上げする。再び力と力の均衡が成り立つが、それも、たった一瞬の事。

(あたしの歌は――)

最後に、幸せに満ちた笑顔を浮かべる両親と手を繋いで歩く幼い頃の自分を思い出す。

(――その為にッ！)

――そして、クリスは破滅の光に呑み込まれた。

「――クリスううううううッ!!」

哀しみに満ちたトリガードーパントの絶叫が響き渡る。

「仕損ねたッ!? 僅かに逸らされたのかッ!?!」

驚愕に目を見開くフィーネの視線の先には、クリスの命懸けの迎撃によって、一部のみを欠けさせた月。

「ふざけんなよ……………。なんで、そんな事をしたんだよ……………ッ！」

遠目から見てもわかる程の眩い輝きを散らして墜ちていく一人の少女の姿に、メタルドーパントは地面に拳を叩き付ける。

「ふざけんじゃねえよ……………ッ！ クリスううううううッ!!」

悲痛な叫び声を上げたメタルドーパントの慟哭が周囲に満ちる。

「あ……………あ、あ……………」

森に墜ちていく輝きを見て、響の口から微かに声が漏れ――

「————あああああああああああああああッ!!!!」

絶望に染め上げられた悲鳴が、夜空に響き渡った。

双翼のウィングビート

「そんな、クリス……………ツ！」

《私立リディアン音楽院》の地下のシエルターの一室で、未来は画面に映し出されている落下中のクリスに、未来は口元に手を当てる。

弦十郎を下した後、フィーネは二課に存在する機能のほとんどを破壊。それが原因でまともな通信も出来なくなってしまったので、東京スカイタワー周辺に現れたノイズを駆除し終えた響への連絡が途切れてしまったのだ。だが、それでも機能が生きている場所は少なからず存在しており、現在二課の職員を含めた民間人は、その一つであるシエルターの一室にて監視カメラなどの映像を見ていたのだ。

そして、モニターを見ていた人々は、命懸けの行動で月の完全破壊を防ぎ、その身を小さな流星へと変えて墜ちていく少女の姿に息を呑んでいた。

(……………さよならも言わずに別れて、それっきりだったのよ。なにどうしてツ!?)

(……………お前の夢、そこにあつたのか？ そうまでしてお前が、まだ夢の途中というのなら——)

俺達はどこまで無力なんだ、と弦十郎は拳を握り締めていた。

「——折角仲良くなれたのに、こんなの、嫌だよ……………。嘘だよ……………」

クリスが消えていった森を見つめ、響は両目に涙を溜め、震えた声で己の無力感を感じていた。

「もつとたくさん話したかった……………話さないと喧嘩する事も、今

よりもっと仲良くなる事も出来ないんだよおッ！」

クリスにあのような行動を取らせてしまった無力な自分への怒りと、墮ちていった彼女への哀しみが籠められた声が響の口から吐き出される。

「クリスちゃん……………夢があるって言ったもん。私、クリスちゃん
の夢、聞けてないままだよ……………」

心中を荒れ狂う感情の渦に思考が定まらないその時、ある一言が響の鼓膜を響かせる。

「自分を殺して月への直撃を阻止したか。ハッ！ 無駄な事を」

その最後の一言に、響と翼の視線がフィーネに向く。

その視線に籠められているのは、憤怒。命を懸けて月の完全破壊を防いだクリスの覚悟を嘲笑った女性への激情。

「無駄……………？ 無駄なもんかッ！ クリスちゃんがした事は、無駄な事なんかじゃないッ！」

「いいや、無駄だ。クリスは無駄死にただけの、見た夢も叶えられない、とんだ愚図でしかないッ！」

「な……………ッ！」

「笑ったか……………？ 命を燃やして大切なものを護り抜く事を……………ッ！ お前は無駄と、せせら笑ったかッ!？」

奏もクリスも、彼女達の護るべきものを護る為に、命を顧みずに禁断の歌を歌った。その覚悟を嘲笑ったフィーネに、翼の怒りがマグマのように煮えたぎっていく。だが、その比にならない程の怒りを抱いているのが、彼女のすぐ傍にいた。

「……………許せない。それが……………」

「……………ッ!? 立ば——」

「——夢ごと命を、握り潰した奴が言う事かああアアアッ!!」

己の激情に呑み込まれ、禍々しい邪悪な姿へとその身を変えた響が、隅々までドス黒い感情に塗り潰された咆哮を轟かせた。

「ほう……………」

響の異変に気付いたユートピアドーパントが彼女の姿を興味深そうに眺めると、彼に攻撃を仕掛けようとしていたエターナルと彼の部下達も、咆哮を轟かせる響に気付く。

「響ちゃんツ!? どうしたのツ!?!」

「わからないが、碌なものじゃない事だけはわかるわね……………ッ!」

ビリビリと震える空気に身構えた彼らを横目に、フィーネは全身を黒く染め上げた響に笑みを浮かべる。

「融合したガングニールの欠片が暴走しているのだ。制御出来ない力に、やがて意識が塗り固められていく」

「まさかあんた、響を使って実験をツ!?!」

「欠片とはいえ、聖遺物と融合した人間など前代未聞。研究者としての興味を抱かないはずが無いだろう? それに、実験を行っていたのは立花だけではない。見てみたいとは思わんか? ガングニールに翻弄されて、人としての機能が損なわれていく様を」

「その為にお前は響を……………奏を……………ッ!」

彼女の言葉に、彼女が響のみならず、奏すらもガングニールの融合実験のモルモットとして扱っていた事を理解した二人がさらなる怒

りを抱き、既に怒りのボルテージが頂点を突破していた響は、僅かに残っていた理性すらもガングニールによって喰らい尽くされてしまった。

「ウウウウアアアアアアッ!!」

四つん這いになって飛びかかった響がフィーネの顔面に拳を捻じ込み、数十メートル先まで殴り飛ばした。

(フィーネを一撃で……………ッ!?)

自分達が全力を出してもまともなダメージを与えられなかったフィーネをたつた一撃でぶっ飛ばした響の力に驚愕する翼の前で、響はフィーネに追撃を仕掛けようと唸り声を上げていた。その在り方はまさしく、ただ本能のままに動き、己の敵を粉碎する獣そのもの。

「もうよせ、立花ッ！ これ以上は聖遺物との融合を促進させるばかりだッ！」

「ウ……………ウアアアアアアッ!!」

しかし、今の響に敵味方を判別するだけの理性も残っていない。響は自分を止めようと声をかけた翼すらも敵として判断し、漆黒の嵐と化して襲い掛かった。

「……………どうしちゃったの、響ッ！ 元に戻ってッ！」

シエルターで響が禍々しい姿に変貌した瞬間を目の当たりにしてしまった彼女の友人達が、一片の優しさも感じさせない彼女の戦い方に唾然とする。

「……………もう、終わりだよ、あたし達。学院が滅茶苦茶になって、あの子もおかしくなって……………」

「終わりじゃないッ！ 響だって、私達を護る為に……………」
「あれが私達を護る姿なのッ!？」

理性を感じさせぬ唸り声を上げて翼を威嚇する響を指差して、弓美が叫ぶ。あんなのが、自分達を護ってくれるとは到底思えないし、むしろ自分達を襲ってくるようにしか見えない。現に今、彼女は味方であるはずの翼に牙を剥いているではないか。

だからこそ、モニターから彼女の様子を見ていた人々の心には絶望が満ち始めていた。

だが、それでも――

「――私は、響を信じる」

未来だけは、響を信じ続けていた。

「あたしだって、あの子を信じたいよ……………。この状況もなんとかなるって信じたい……………。でも……………」

「板場さん……………」

「でも、もう嫌だよおッ！ 誰かなんとかしてよッ！ 怖いよ……………死にたくないよおッ！ 助けてよ、響い……………ッ!」

遂に泣き崩れた弓美が、モニターに映る響に助けを求めた。

「――ハハハッ！ どうだ、立花響と刃を交えた感想は？ お前の望みであったなあ?」

「命を絶たれたはずなのに、人の在り方さえ捨て去ったか……………ッ!」

砕かれた頭蓋骨を修復して起き上がったフィーネに、翼は響の攻撃を凌ぎながら吐き捨てる。

先の響の一撃は、間違いなく彼女を殺しただろう。だが、彼女は響と同じように聖遺物と融合した存在。自らの感情に吞まれる事無く、その能力を遺憾なく発揮する新霊長となった今の彼女に『死』は無い。

「私と一つになったネフシユタンの再生能力だ。面白かろう？」

その時、一度目の月の破壊を防がれたカ・ディングルが再び輝き始める。それに気付いた翼がまさかと思うと、フィーネはカ・ディングルの砲口を見上げてほくそ笑む。

「カ・ディングルが如何に最強最大の兵器だとしても、ただの一撃で終わってしまうのであれば、兵器としては欠陥品。必要がある限り、何発でも撃ち放てる」

「だが、あれ程のエネルギーだ。いったいどうやって……………」

「気付かないのか？ その不可能を可能に変えるものが、この場に存在するという事をッ！」

「なに……………？ ……………まさかッ！」

威力を落とす事無く遙か彼方の月まで届く砲撃を、この短時間でチャージする事を可能にするものは、存在する。

ネフシユタンの鎧と同じく、目立った破損が見当たらない完全聖遺物——デュランダルである。

「尽きる事の無い無限のエネルギーを生み出すデュランダルをエネルギー炉心に取り付ける事によって、カ・ディングルはエネルギーのチャージ時間をここまで短縮する事に成功したのだッ！」

「だが、お前を倒せばカ・ディングルを動かす者はいなくなる」

「フフフ……………試してみるがいい。大道克己達の助け無しに、この私に勝てると思っっているのならなッ！」

響は感情に吞まれて暴走して共闘など不可能で、エターナル達は以前よりも格段に強化されたユートピアドーパントの相手で翼の加勢は出来ない。よって、翼はたった一人で、驚異の身体能力に再生能力を有するネフシユタンの鎧と融合したフィーネと戦わなければならないのだ。

実力差は歴然。援軍も無い。それでも、防人は退くわけにはいかない。退いたら最後、二度目の砲撃によって月は破壊され、フィーネの目的は果たされてしまう。

「いくらネフシユタンといえど、再生能力を凌駕する攻撃を与え続ければ――」

「――ウアアッ！」

フィーネにT2サイクロンメモリの力を発動した時に発現した二本の刀を構えた翼に、響が襲い掛かってきた。

「ぐうう……………立花ッ！ やめろ、私は……………ッ！」

「ハハハッ！ 最早敵味方の区別すら無くなったかッ！ カ・ディングル二射目までの余興に丁度いいッ！」

フィーネの視線の先で、翼と響は対峙する。響は既に翼が味方であるとは考えておらず、彼女の存在をフィーネと同様、排除すべき敵にカテゴライズしてしまっている。

「……………立花。私はカ・ディングルを止める。だから……………」
「ウウウアッ！」

破壊すべき相手を仕留める為、響が地面を蹴り碎いて真っ直ぐ突っ込んでくる。

それに対し、翼は――

「こんな事は、もうやめてくれ」

—— 剣を捨て、響の攻撃を受け止めた。

「馬鹿なッ!? 攻撃も避けもせず、受け止めただと……………ッ!」

仲間割れを楽しみにしていたフィーネが、目の前で起こった出来事に驚愕している中、翼は響を抱き締めて囁く。

「この手は、束ねて繋ぐ力のはずだろ?」

響の手を取り、優しく握る。

「……………立花。奏から継いだ力を、そんな風に使わないでくれ」

「……………」

人を護る為に命を散らした奏から受け継がれた GANG ニール。それは人を助ける為に振るう力であって、傷つける為のものではない。

それを思い出させるように語りかける翼に、響の意思を感じさせない紅い目からは、大粒の涙が溢れ出ていく。

手にした小刀を響の影に投擲し、『影縫い』で彼女の動きを止めた翼は、フィーネに剣を構える。

「どこまでも剣というわけか」

「今日に折れて死んでも……………明日に、人として歌う為にッ! 風鳴翼が歌うのは、戦場ばかりでないと知れッ!」

「人の世界が剣を受け入れる事など、ありはしないッ!」

一本の鞭を両手の剣で受け流した翼は全身に緑色の風を纏って一気にフィーネとの距離を縮める。フィーネはすぐにもう一本の鞭を

振るって翼の連撃を防ぎ、鞭を振るうに十分な距離を取る為に翼を殴り飛ばす。

僅かではあるものの、風の力でスタミナを回復した翼は再びフィーネとの間合いを詰めようとするが、それを呼んでいたフィーネは彼女の剣を籠手で受け止め、鳩尾に膝蹴りを喰らわせる。開いた口から血の混じった唾を吐き出した翼の体が打ち上げられた瞬間、フィーネの拳が彼女の胸に二回叩き込まれ、地面を跳ねた翼を蹴り飛ばす。

凄まじい攻撃速度の前に防御すら間に合わなかった翼が地面を転がり、T2サイクロンメモリの力が解除される。

「死ねえッ！」

「……………ッ！」

心臓と首を狙ってきたフィーネの鞭を転がって回避した翼が立ち上がった瞬間、背後から誰かに蹴り飛ばされる。

「虫けらのように抗うその姿。実に素晴らしく、そして滑稽ですね」

フィーネと翼を挟むように立ったユートピアドーパントがパチパチと観客のように拍手する。その背後には、倒れ伏したエターナル達。

「大道……………ッ！ みんな……………ッ！」

「彼らは本当に粘り強く戦いましたよ。ですが残念、私の方が上だったようです。……………さて」

理想郷の杖が翼に向けられる。

「二対一、貴女に勝ち目はありませんよ。それでも抗うのであれば止めはしません。逆境の中で抱く希望ほど、ユートピアわの力となるでしょうからね」

彼がエターナル達から希望を奪わなかったのは、徹底的に痛めつけた彼らからはいつでも希望は奪えるからであるのもそうだが、強敵に挟まれた目の前の少女が、それでも尚強い希望を胸に秘めていると感じたからだ。

まずは翼から希望を奪う。その次は背後で倒れているエターナル達から奪う。それが今のユートピアドーパントの考えだった。

「この殺気……………防人としてはむしろ心地いいッ！」

胸より湧き上がる歌を口ずさんで高くジャンプした翼が、『千ノ落涙』でフィーネとユートピアドーパントを攻撃する。二人はそれぞれの得物で降り注ぐ剣の雨を打ち払っていくと、頭上からその数十倍はあると考えられる巨大な剣が落ちてきた。

「その程度ッ！」

フィーネは鎧のパーツを組み合わせて作り出したバリア――

――『ASGAR』で、ユートピアドーパントは衝撃波を発生させて『天ノ逆鱗』を防ぐ。

『千ノ落涙』の対応に追われていた自分達を『天ノ逆鱗』で仕留めようとも考えていたのか、それが通用する程、自分達は甘くは無い。

だが、それは翼も理解していた。だからこそ、彼女は――

「なにッ!？」

――巨大な剣からカ・ディングルへと、両手の剣から紅蓮の炎を噴射して飛び立っていた。

「ふむ、狙いはカ・ディングルでしたか。我々の事は最初から眼中に無いと。それは少しばかり……………イラつきますね」

(……………ッ!? か、体が……………ッ!)

全身にのしかかってくる重圧が、翼を大地に落とそうとしてくる。ユートピアドーパントが彼女の周辺の重力を操作したのだ。凄まじい勢いで速度が削がれていく翼が、それでも炎を噴射してカ・ディングルに向かおうとすると、いきなり全身を襲っていた重圧が消え去る。

「まだ戦うというのですか、仮面ライダー……………ッ!」

「あんなに若い子どもが戦ってるんだ。いつまでも寝ていられるか」

背中から微かな火花を散らして振り返ったユートピアドーパントの前に立ったエターナルが、息を切らしながらもエターナルエッジを構える。そして、立ち上がったのは彼だけではなく、彼の部下のドーパント達もフィーネに攻撃を仕掛けていた。

「チィ……………ッ! 邪魔をするなッ!」

「そう言われるとしたくなるってのが、人の性ってもんよッ! うらあああああッ!」

「翼ちゃん、行ってッ!」

「私達がこいつらを抑えている内にッ!」

「クリスの努力を無駄にするな」

地上からの彼らの声援を受け、翼は噴射させている炎の火力を上げてカ・ディングルへと向かっていく。

「させるかあッ!」

だが、ドーパント達の奮戦も虚しく、彼らを薙ぎ払ったフィーネは鞭の先端にエネルギー弾を作り出し、翼目掛けて投擲した。

「避ける、翼ッ！」

ユートピアドーパントを蹴り飛ばしたエターナルが叫ぶ。

(あと少しで……………ッ！)

視界に映らなくとも、下方からフィーネの攻撃が向かってくるのは、それに宿ったフィーネの殺気でありありと感じられる。

だが、回避しようと体を動かす頃には既にエネルギー弾は翼のすぐ傍まで接近しており――

「ああ……………ッ！」

――エネルギー弾が直撃した翼を、爆発で生じた黒煙が包み込んだ。

(――やはり、私では……………)

以前、ネフシユタンの鎧を装備していたクリスに絶唱を使用した際に訪れた海中のような場所で、翼はその身を闇に吞まれかけていた。奏を失い、片翼となった自分は、クリスの命懸けの行動に報いる為にか・ディングルを破壊しようと飛び立った。だが、それは嘲笑されるかのように阻止され、自分はこうして、再びあの無明の闇に吞まれかけている。

「なに弱気な事言っただ」

「あ……………、奏……………？」

気付けば、目の前には奏がいた。

ツヴァイウイングメモリから飛び出した光球が翼の体に取り込まれ、彼女の外見を変化させる。

髪を纏めていたヘッドギアは蒼色の、右耳のヘッドギアは朱色の翼を象ったものに変化し、腰からは朱色と蒼色の翼を象ったマントが伸びる。最後に、開かれた朱色に変色した右目の網膜には『Z』が、蒼色の左目の網膜には『W』の文字が浮かび上がる。

今度こそ翼を撃ち落とそうと『NIRVANA GEDON』を放ったフィーネと、吹き飛ばしたエターナルが距離を詰めてくるまで重力操作で翼の動きを封じようとするユートピアドーパント。全身を襲う重圧と、下方から迫るエネルギー弾に対し、翼は焦りもなにも感じない。

「そう、両翼揃ったツヴァイウイングなら――」

胸の中心から溢れ出した炎が、翼を朱と蒼の炎の鳥へと変える。瞬間、彼女を襲っていた重圧は消え、エネルギー弾も灼熱の炎によって焼き尽くされる。

「――どんなものでも、越えてみせるッ！」

鳥が鳴き、最古の塔の頂へと向かう。

「させるかあああああッ！」

カ・ディンギルは破壊されてはならない。これまでとは比にならない程の焦燥感に突き動かされたフィーネの鞭が炎鳥と化した翼に襲い掛かるが、

「それはこっちのセリフだッ！」

『アイスエイジ・マキシマムドライブ！』

『氷河期』の記憶を宿したエターナルエッジの斬撃で空気を凍らせる事によって作り出された氷の壁が、ファイネの鞭を阻んだ。

「行け、翼ッ！」

最後の攻撃を阻まれたファイネが呆然と見上げる先で、炎鳥はエターナルの叫びに応えるように、一層強く羽ばたく。

（見ろ、立花。これが私の……………風鳴翼の生き様だッ！）

見えた。エネルギーが満たされ、今にも砲撃を行おうとしている、カ・ディングルの頂。

「立花あああああああッ!!」

奏の意志を継ぐ少女の名を叫んだ翼が、塔の頂に至る。

「あ……………あああ……………ッ！」

所々から眩い光を漏らし、一瞬の間を置いた瞬間

「お前の野望もここまでだ、ファイネ」

カ・ディングルが爆発した。

「天羽々斬、反応途絶……………」

藤堯の声がシェルター内に響く。皆が静まり返る中、弦十郎はモニターに映し出された、修復不可能なまでに破壊されたカ・ディングルを見る。

「身命を賭してカ・デインギルを破壊したか、翼………………。お前の歌、世界に届いたぞ………………。世界を護り切ったぞ………………。ッ！」

翼の決死の行動により、誰もが不可能と考えていたカ・デインギルの二射目の阻止。だが、その代償として、未来ある若い少女の命が喪われてしまった。

「……………わかんないよ」

弓美が小さく漏らす。

「わかんないよ。どうして、みんな戦うのッ!? 痛い思いして、怖い思いしてッ! 死ぬ為に戦っているのッ!?!」

モニターに映る、フィーネとユートピアドーパントを相手に戦うエターナル達を見て、弓美はわけがわからないと言いたげに叫ぶ。いや、その通りなのだろう。

ノイズの脅威こそ知っているものの、あくまで一般人としての生活を送ってきた弓美は、彼らがなぜ戦うのか、理解出来なかったのだ。

「……………わからないの?」

だが、未来は知っている。彼らがなぜ、ああまでして戦うのか。己の命すらも投げ打って、敵と拳を交えるのか。

「……………わからないの?」

再度、問いかける。

わかるはずだ、アニメ好きの彼女なら。このような絶望的状况でも尚、彼らはなぜ戦うのか。なんの為に、その力を振るうのか。

「ううう………うわあああああああッ！」

それを理解し、泣き崩れた弓美の声がシエルター内に響き渡った。

「——ええいッ！ どこまでも忌々しいッ！」

力任せに振るわれた鞭が大地を穿つ。

「月の破壊はバラルの呪詛を解くと同時に重力崩壊を引き起こす。惑星規模の天変地異に人類は恐怖し、狼狽え、そして聖遺物の力を振るう私の元に帰順するはずであったッ！ 痛みだけが人の心を繋ぐ絆………たった一つの真実なのにッ！ それを、それをお前がッ！ お前達がッ！」

激情に駆られたファイネの鞭がドーパント達を薙ぎ払うと、彼女の背後にユートピアドーパントが立つ。

「激情に駆られてはいけませんよ、ファイネ。彼女のような事にはならないといえど、感情に任せて行動しては隙を突かれます」

「わかっているッ！ だが、この怒りをこいつらにぶつけなければどうにかなってしまいそうだッ！」

自分達を包囲する五人を睨みつけ、ファイネはなぜ自分が月の破壊を目指したのか、その理由を口にし始める。

「ずっと昔、あの御方に仕える巫女であった私は、いつしかあの御方を、創造主を愛するようになっていた。だが、この胸の内を告げる事は出来なかった。その前に私から、人類から言葉が奪われたからだッ！ 私は失われた統一言語を取り戻し、あの御方に想いを告げる為

に、たった一人で抗ってきたッ！」

その為にあらゆるものを利用して、犠牲にしてきた。本当なら戦いたくない相手とも戦った。全てはあの日、自分達を置き去りに去って行った創造主へ、この胸を焦がす想いを届ける為。

「……………その為に、お前はどれだけの人間を犠牲にした？ お前一人の為に、どれだけの人が死んだ？」

「是非を問うだと？ 恋心も知らぬお前達がッ！」

「わからないな。だが、お前が間違っている事だけはわかる」

エターナルエッジを構えたエターナルと彼の部下達がファイネ達を睨む。

「ユートピア共々、地獄へ送ってやる。安心しろ、俺達は死神だ。地獄への道案内は慣れている。迷う事無く、お前達を閻魔の元へ送り届けてやろう」

「悪いですが、地獄に行くのはそちらの方です。私も、まだ死にたくはないですからね。なにせ……………」

背中を合わせるように立つファイネを見て、ユートピアドーパントは気味の悪い笑い声を漏らす。

「素晴らしいものを、見つけてしまったのでね」

「戯言を。財団Xッ！」

ファイネとユートピアドーパントの攻撃を回避し、エターナル達は一斉に彼らに襲い掛かった。

「あ、ああ……………」

その頃、響は破壊されたカ・ディングルを前に崩れ落ちていた。
クリスは月の破壊を、翼はカ・ディングルの砲撃を阻止して、その
命を散らしていった。

「翼さん、クリスちゃん……………」

彼女達に残された響は、ただ絶望に打ちひしがれていた。

響くは希望の歌ッ！ その名はシンフォギアッ！

シエルター内にいる全員の気持ちを代弁するかのように号泣する弓美の声が室内を満たしていると、シエルターの扉がノックされる。

「司令、周辺区画のシエルターにて、生存者を発見しました」

「そうか、よかった。ご苦労だったな」

開かれた扉の奥から数人の民間人を連れて入ってきた緒川に弦十郎が労いの言葉をかけると、彼が連れてきた民間人の一人がモニターに映る響に気付く。

「あ、カツコいいお姉ちゃんだッ！ それにあの時のお姉ちゃん達もいるッ！」

その子は、響が初めて GANG ニールを纏い、二体のドーパント達と共にノイズから護り抜いた女の子だった。

「ビツキーの事、知ってるの？」

「うん、助けてもらったのッ！」

「……………あの子の、人助け」

彼女の趣味である人助けによって救われた少女は、響の友人達を見て訊ねる。

「ねえ、あそこにいるお姉ちゃん達、助けられないの？」

「……………助けようと思っても、どうしようもないんです。私達には、なにも出来ないですし……………」

「じゃあ、一緒に応援しよッ！ ねえ、ここから話しかけられないの？」

「あ……………うん、出来ないんだよ……………」

訊ねられた藤堯が目を伏せて答える。だが、それと真逆な答えを返す者がいた。

「……………出来ませよ、応援」

その場にいた全員の視線が、未来に向く。

「電力がまだ生きていれば、スピーカーを通して響達を応援出来るはずですッ！」

「確かに学校の設備が無事なら、リンクしてここから声を送れるかもしれないませんッ！」

藤堯が早速スピーカーを作動させる為に必要な電力が存在する場所を探し始めると、創世が未来に声をかける。

「待つて、ヒナ」

「……………止めても無駄だよ。私は響達の為に……………」

止められると思ったのか、創世がなにを言おうとしているのかを予想して未来が答えるが、友人はそんな事を微塵も考えていなかった。

「ううん、私も手伝う」

「え……………？」

予想と違う言葉に目を見開いていると、詩織と弓美も創世に続く。

「私もです」

「あたしにも手伝わせてッ！ こんな時、大好きなアニメなら友達の為に出来る事をやるんだッ！」

「……………うん、一緒にみんなを助けようッ！」

先程まで絶望に染まっていた空気は一転し、希望に満ちたシエルトーの中で、自分達を護る為に戦ってくれている者達を助けようと決意した者達の声が響いた。

「なぜだ？」

眼前の敵に、フィーネが問いかける。

実力差はこちらが上回っている事ぐらい、自分達が傭兵だと言う彼らにはわかり切っているはずだ。だというのに、彼らは何度倒されても立ち上がり、自分達に挑んでくる。その様にはフィーネ達も、呆れを通り越して感心してしまうくらいだ。

「なぜそこまでして戦う？ 抗う？ お前達に勝ち目など無いというのに」

二人の装者の行動には驚かされたが、所詮はそれまで。彼女達は既にこの世におらず、残された最後の装者の心は折れた。

だが、それでも尚、彼らは立ち上がる。

「なにがお前達を奮い立たせる？ なにがお前達を突き動かす？」

「……………正直なところ、俺もわからない。いや、『わからなかった』と言うべきか」

「なに……………？」

周囲を見渡し、エターナルは語る。

「あの時、俺は死んだはずなのに、目が覚めたら知らない街にいて、知らない脅威があつて、知らない技術があつて……………行くべき場所に行かないまま、寄り道をするかのように、この街で過ごしてた

……」

普通、自分達が行くべき場所は魑魅魍魎が跋扈する地獄のはずだ。決して、ノイズという脅威はあれど、こんな平和な場所なんかではない。

これは夢かもしれない。死人が夢を見るなどあり得ないだろうが、目が覚めれば、そこは真正銘の地獄なのかもしれない。だが、エターナルの頭にはそれ以上にあり得ないであろう考えが浮かんでいた。

「ひよつとしたら、これは悪戯なのかもしれないな。俺達に『人の在り方を見つめ直せ』と、気まぐれな神が言っているのかもしれない」

人としての生き方を忘れ、ただ己の身に宿る残虐性のままに人を殺してきた自分達は、人々の希望を一身に受けた者達によって倒された。そのまま地獄に落ちていくしかなかった俺達を、どこかの神様が見つけて、この街に送り出したのかもしれない。

神なんて存在を信じてはいなかったが、カ・デインギルやフィーネの言う『創造主』とやらの話を聞いている間に、エターナルは自然とそう考えずにはいられなくなったのだ。

「以前の俺達は、人を殺す事を生業にしてきた。だがここでは、真逆な事をしてやる」

それは、あの男達がしてきた事。自分達を含めた脅威から無力な人々を救い、風の街が流した涙を拭ってきた男達がしてきた事。

「私達だって同じよ、克己。あいつらと同じ事をするってのは癪に障るけど、救った人達の顔って、とても素敵なんだもの」

「あれは、以前のワタシ達が与えられなかったものよね。いつからだったかしら、ワタシ達が彼らにあれと真逆の感情を与え始めたのっ

て」

「だが、今の俺達は違う。俺達は俺達なりに、無力な人々を救おう」
「神様がどうか関係ねえ。ただ俺達は、俺達のやりたいようにあいつらを救う。それが、俺達が立ち上がる理由だッ！」

歩み出た四人のドーパント達が、フィーネとユートピアドーパントに構える。

「……………ハ、ハハハ、ハハハハッ！」

全員、自分と同じ考えを持っていたのが意外だったのが可笑しくて、エターナルはつい笑ってしまふ。

「最高だ、お前達ッ！俺が見込んだだけの事はある」

「ワタシ達はいつだって、克己ちゃんの味方よ。あの時、あのまま死ぬしかなかったワタシ達を救ってくれたのは克己ちゃんだからねッ！」

「あんたに忠誠を誓う気は無いけど、あの時受けた恩は忘れないわ。返し切れない恩だからね」

「ただ死ぬしかなかった俺達を救ってくれたリーダーには、本当に感謝している」

「俺達はどこまでもついてくぜ、克己ッ！」

彼らの言葉がどうしようもないくらい頼もしくて、エターナルは仮面の奥で不敵な笑みを浮かべる。

「敢えて死神の道を進むか。いいだろう、その魂が燃え尽きるまでついてこいッ！」

「」「応ッ！」「」

真ん中に立った死神を中心に、かつて多くの命を奪ってきた悪魔達

が歩き出す。彼らから溢れ出る闘気に当てられたフィーネは、言い知れぬ感情を胸に叫ぶ。

「なんなんだ………ッ!? お前達はいったい………なんなんだッ!?!」

「俺達がなんだって? 俺達は——」

両腕を広げ、自分達が何者であるかを叫ぶ。

「——今を生きる者達の未来を願い、謳う、亡霊共きッ!」

その時、周囲一帯にとある歌が流れ始めた。

——仰ぎ見よ太陽を よろずの愛を学べ

「これは………」

《私立リディアン音楽院》の講師として生活しているエターナルは、それがなんなのかを瞬時に理解する。

学校ならばどこにだって存在する、それを象徴する歌。

これは、《私立リディアン音楽院》の校歌だ。そして、それを歌っているのは、

「生きているのか………? 未来達が………」

「——校………歌………?」

周囲に響き渡る校歌は、絶望の淵に立っていた響にも届く。

「この声は………未来………?」

その歌声の中に、自分の最も大切な人の声が入っている事に気付いた響の目に、希望の光が宿る。その光は、校歌を聴いているうちに次第に強くなり、立ち上がる気力を失っていた両足に力を籠めさせる。

「――私達は無事だよ。みんなが帰ってくるのを待っているよッ！」

シエルター内に歌声を響かせ、未来はモニターに映っている、呆然としている響に自分達の無事を伝えるべく、力強く歌う。

（だから、負けないでッ！）

未来の気持ちに応えるように、モニターに映っている響は、ゆっくりと立ち上がり――

――三本の光の輪に囲まれた。

「――チッ！どこから聴こえてくる？この不快な………歌………、『歌』………だとッ！」

フィーネは思わず、響を見て、驚愕する。

「馬鹿な………ッ!?なぜ………ッ！」

完全に心を打ち砕いたはずなのに、その少女は瞳に希望の輝きを灯して、自分達を見ていた。その瞳を見て、エターナル達は互いの顔を見合わせて頷く。

「立て、響ッ！あいつらが、お前を………お前の人助けを必要とし

ているッ！」

「——聞こえる……………みんなの声が……………」

スピーカーを通して響き渡る歌声。それは、彼女達の無事を告げるものであり、彼女を奮い立たせるもの。

恐ろしかっただろう。辛かっただろう。だが、それでも、彼女達は諦めていない。諦めず、自分達を支えてくれている。

「よかった……………。私を支えてくれているみんなは、いつだって傍にいますッ！」

彼女達が諦めていないのに、自分が諦めてどうするッ！

「みんなが歌ってるんだッ！ だから、まだ歌える……………ッ！」

崩れ落ちていた両足に力を籠め、ゆっくりと立ち上がっていく。

——彼女達が応援してくれているッ！ 傍にいてくれているッ！

——だから、護るんだッ！

——この、希望の歌を胸にッ!!

「まだ……………頑張れる……………ッ！ 戦えるッ！」

三本の光の輪が囲んだ響に「信じられん……………」と零すファイネ。

「まだ戦えるだと……………？ なにを支えに立ち上がる……………？」

なにを握って力と変える………？ この鳴り渡る不快な歌の仕業か？」

「そうだ。この歌のおかげで、響は立ち上がった」

フィーネの視線がエターナルに向く。

「馬鹿なツ！ たかが歌だぞツ！ 歌如きに、砕かれた心を癒せるはずが無いツ！」

「その歌が、彼女を立ち上がらせたのよ」

ヒートドローパントがそう言うも、フィーネは理解出来ない。

ただの歌が、二度と立ち直れないと思っていた少女を立ち上がらせた。それが到底信じられないフィーネは、響に問いかける。

「そうだ。お前が纏っているもの、それはなんだ？ 心は確かに折り砕いたはずツ！ なのに、なにを握っている？ それは私が作ったものか？ お前が纏うそれはいったいなんだツ!? なんなのだ………ツ!？」

「決まっている。そいつの名は、お前が知っていて、知らないものだ」

三つの光柱が、天を貫く。

——一つは彼らの目の前、立花響から。

——一つは古塔の頂上、風鳴翼から。

——一つは森林、雪音クリスから。

彼女達は大地から、朝日が照らす青空に飛翔する。

白色の部分の比率が増え、オレンジ色の部分が金色に変化した外見に、背中のマフラーの形状をした黄金の翼から羽を散らす響。

水色の比率が増えた外見に、脚部の装甲から青白く輝く二対の翼を広げた翼。

全体的に白色の比率が増えた外見に、腰部装甲から桃色の翼を広げたクリス。

彼女達が纏うのは、自らの歌を、人を救う力に変える鎧。

かつてこの地にいたであろう神々が振るつた武器の力を、未来を拓く為に活用する鎧。

その名は、

「シンフォギアアアアアッ!!!」

そして、今の彼女達が纏う鎧の形態は、高レベルのフォニックゲインにより制御されていた機能を全開放する事によって、圧倒的戦闘能力を発揮可能となった限定解除形態。

名を、『X D』。

人々の希望を未来へと羽ばたく翼に変えた三人に上空から見下ろされているフィーネは驚愕し、ユートピアドーパントは「ほぅ……………ッ!」と感嘆の声を上げる。

「限定解除……………だどッ!? 馬鹿な、ただの歌がギアの力を最大限に引き出すなどッ!」

「ただの歌なんかじゃないッ! この歌は、みんなの意志ッ! みんなの歌声がくれたギアが、私達に立ち上がる力を与えてくれたッ!

歌は戦う力じゃない……………、命なんだッ!」

「だがッ! 限定解除とはいえ所詮は玩具ッ! この数のノイズ相

手には太刀打ち出来ないはずッ！」

ユートピアドーパントから返還されたソロモンの杖を掲げ、上空と地上をノイズの大群で埋め尽くす。

小型ノイズを始め、東京スカイタワーに現れた超巨大ノイズなど、様々な形状、様々な大きさのノイズが、フィーネ達と敵対する者達を囲む。

『またノイズか。いい加減、芸が乏しいんだよッ！』

『念話までも……………。限定解除されたギアを纏って、すっかりその気か？』

ギアのリミッターが解除された事で念話が可能になった三人に、フィーネも念話で返す。

『世界に尽きぬノイズの災禍は、全てお前の仕業なのか？』

『ノイズとはバラルの呪詛で相互理解を失った人類が、同じ人類のみを殺戮する為に造り上げた自律兵器……………』

『人が、人を殺す為に……………？』

『バビロニアの宝物庫は扉が開け放たれたままだな。そこからまろびいずる十年一度の偶然を私は必然と変え、純粹に力として使役しているだけの事』

フィーネは両腕を広げ、高らかに叫ぶ。

「さあ、行けッ！ 哀れな愚者共を、この世から排除しろッ！」

召喚者の意志に応え、ノイズの大群が動き出す。

「ここらのノイズは俺達に任せろ。お前達は上空と街にいるノイズを頼むッ！」

地上からノイズに囲まれたエターナルの声に、三人が頷く。

「了解ッ！ 各自、ノイズを迎え撃つぞッ！」

「はいッ！」

散開した三人が、一斉に襲い掛かってきたノイズの大群を一掃し始めた。

「——行くぞ、お前達。奴らに地獄を見せてやるぞ」

「了解ッ！」「」

リーダーの言葉を合図に、彼らは襲い掛かってきたノイズを迎撃し始める。

過去に生きた死者かれらの役目は、現代いまを生きる者達を後押しする事。

いつの時代でも人は未来を望み、その命をよりよい明日を作る為に捧げてきた。

現世での役目を果たした者達の意志は次の世代へと受け継がれ、その世代を生きた者達の意志もまた、その次の世代に受け継がれていくのだ。

未来は死者かれらが切り拓くものではなく、生者かのじよたちが切り拓くものである。

故に、死者である彼らがやるべき事は、生者である彼女達の歩みを阻む障害を、出来る限り排除していく事のみだ。

『ウェザー・マキシマムドライブ！』

『気象』の記憶を持つメモリをロストドライバーのマキシマムスロットに差し込んだエターナルが左手を開くと、そこから放たれた吹雪や稲妻が前方のノイズの大群を消滅させ、彼を背後から襲おうとし

たノイズはヒートドローパントが蹴り砕き、彼らから離れた場所ではトリガードーパントが撃ち漏らしたノイズをメタルドローパントがメタルシャフトで薙ぎ払い、ルナドローパントはT2マスカレイドドローパントを使役してノイズの集団を蹴散らしていく。

「——よろしいので？ 彼らの邪魔をしなくて」

彼らの闘志がどこまで保つか、それを高みの見物で眺めているファイネに、ユートピアドローパントが尋ねる。

「限定解除は確かに驚いた。だが、所詮はそれまでの事だ」

「それまでの事、ですか……………」

凄まじい勢いでノイズの数を減らしていく彼らを眺める。

ファイネは慢心しすぎている。上空の三人は限定解除されているシンフォギアを纏っている以上、すぐに周囲のノイズを殲滅するだろう。地上の五人は限定解除形態になっているわけではないが、今のエターナルはほとんどのT2ガイアメモリを所有している為、時間はかかれど、彼がやろうと思えば、一人でもこの大群を殲滅出来るだろう。まだ全てのメモリを手にしていないのが、こちらにとって救いとなっている。

たった二十数年しか生きていない自分がこの考えを思いつくのだ。永い時を生きてきたファイネがそれを考えないはずが無い。

それをユートピアドローパントが不審に思っていると、ある考えが浮かび上がってくる。

(……………まさか)

「なんだ？」

「……………いえ、なにも」

盗み見ていた事を気付かれ、ユートピアドーパントははぐらかすように彼女から視線を外す。

(この人に限ってそんな事はあるはずですが……………、もしそうであるのなら……………)

——なんて、甘いでしょう。

我知らず、ユートピアドーパントは理想郷の杖を握る力を強めた。

——飛行ユニットのようなものに変形したアームドギアから放ったレーザーでノイズを消滅させたクリスに襲い掛かろうとしたノイズを翼が大型化させたアームドギアを振るって薙ぎ払う。二人の間を通って行った響がガントレットから伸びたパワージャッキを叩き付ける事によって発生する衝撃波でノイズを吹き飛ばしていく。

「どんだけ出ようが、今更ノイズッ！」

「この程度の数に敗れる程、我々は甘くないッ！」

周囲のノイズを粗方片づけた装者達が地上にいるフィーネに近づく。その後ろにはエターナル達も立っている。どうやら周辺のノイズは全て片づけたようだ。

身構えるフィーネに、響が言う。

「了子さん、こんな事、もうやめてください」

「……………お前までも、私を『了子』と言うのか？」

突然の言葉に呆気にとられながらも、フィーネはそう答える。

師弟関係だからか。それとも彼女の性分なのか。あの男の弟子は、敵対している自分と今でも手を取り合えると考えている。

「どんな姿になっても、了子さんは了子さんですよ。フィーネだからとか、関係ありません」

「……………私は、お前の日常を壊したのだぞ？　二年前の惨劇だって、私が起こしたものだ。あれさえ無ければ、お前は今も普通の少女として生活していたはずだ。憎くないのか？　この私が」

「確かに、あの日、私の運命は狂いました。あれからの苦労は今でも覚えています。……………好きで思い出したくはありませんけどね」

僅かに顔を伏せる。

あの惨劇が原因で、響や彼女の家族は酷い目に遭ってきた。あの日を憎んだ事も、あるにはあった。

「でも、あの日があったから、私は誰かを護る力を手に入れられたし、こうして翼さんやクリスちゃん……………二課のみんなと出会えました。その中にはもちろん、了子さんも入っていますよ」

「……………どこまでも甘いな、お前は」

「甘くて結構です。それが私なんですから」

響が手を差し伸べる。敵意を微塵も感じさせず、ただ『仲良くなりたい』という気持ちだけが籠められた手に、フィーネは呆然とする。

「了子さんがたくさん悪い事をしてきた事ぐらい、話を聞いていればわかります。でも、それは過去の話で、未来はそうじゃない。戻って来てください、了子さん。その力は、私達と比べものにならないくらい、たくさんの人を救えると思います」

ネフシユタンの鎧の力は強大だ。悪の力として振るえば、多くの命を奪い、希望を絶望に塗り替えてしまうだろう。だが、逆に言えば、それは多くの命を救えるという事。その力は、きつと多くの人を救える。それこそ、自分達の比にならないくらいに。

「過去は変わりませんが、未来はいくらでも変えられます。その力を、誰かを助ける為に使ってみませんか？一緒に、苦しんでいる誰かを助けましょうッ！」

ピクリと、なにも握っていない左手が動く。だが、許されるだろうか？こんな自分が、彼女の手を取る事を。それ程までに、自分の手は――

――あまりにも、血に汚れすぎている……………)

だが、それでもこの少女は、許してくれるのだろうか。もしこの手を取ったら、心からの笑顔で、自分を許すのだろうか。

(……………ああ、駄目だ。考えてはいけない。こいつらは敵だ。倒すべき敵のはずなんだ……………)

だというのに、自分の手は勝手に彼女の手を握ろうとしている。

自分に攻撃の意志が全く感じられない事に翼達が驚く中、フィーネの手はゆつくりと、だが着実に響の手を握ろうとした、その時――

――腹部に、強烈な痛みが走る。

向かい合っていた者達の驚愕の視線が自分の腹部に注がれている事に気付いて、フィーネは自分の体を見下ろす。

――フィーネの腹部からは、輝くドリル状のエネルギーを纏った理想郷の杖が突き出していた。

理想郷の巨人

「了子さんッ！」

叫んだ響の前で、腹部を杖で刺し貫かれたフィーネは背後のユートピアドーパントを睨む。

「お前……………なにを……………ッ!？」

「貴女には失望しましたよ、フィーネ。敵である彼女に感化されるとは、貴女の決意はその程度ですか」

彼女は、自分達の元を去った存在に想いを伝える為だけに永い年月を生きてきた。その覚悟、決意は確固たるものだったはずだ。だが、今となっては、それは脆くなってしまっている。

「ですが、貴女が未来に抱く希望は変わっていませんね。それだけは嬉しい限りです。なにせ……………」

ユートピアドーパントがフィーネの後頭部を鷲掴みにする。

「こうして貴女から、希望を奪えるのですから」

「ぐ……………が……………あああああああああッ!!」

全身に稲妻が走り、苦悶の叫びを上げるフィーネ。彼女からユートピアドーパントを引き剥がそうとした響達を、ユートピアドーパントはフィーネを盾のように構えて制止させる。

それ以上近づいたらフィーネを殺す、と無言の脅迫にその場の全員が動きを止める。

「貴方方も甘い。普通なら彼女を捨てて私を倒しにかかるでしょうに。彼女は貴方方をずっと騙していたんですよ？」

「ぐ……………あ……………」

抵抗する力を奪われたフィーネが糸の切れた操り人形のように項垂れる。そんなフィーネを見つめ、ユートピアドーパントは溜息を吐く。

「貴女ともあろう方がこの程度なはずが無い。まだ残っているでしょう？ 貴女の求める、創造主が」

「や、やめ……………ぐあああああああああツ!!」

全身を痙攣させて絶叫するフィーネをただ眺めているしかない響達。やがてフィーネの全身を走る稲妻は消え、ユートピアドーパントは満足した様子で彼女を響達の前に投げ捨てる。

「了子さんッー!」

ネフシユタンの鎧が消え去ったフィーネの体が地面に落ちる前に抱えた響がフィーネの顔を見た瞬間、両目が零れ落ちそうな程に目を見開く。なぜなら――

――フィーネの顔からは、先程まであったはずのパーツが全て失われていたのだから。

「実に甘美なものでしたよ、貴女の希望は。……………フッフ、ハハハハッ!」

フィーネの希望を奪い尽くしたからか、先程までは段違いの威圧感を身に纏うユートピアドーパント。

「お前……………ッ! 人の希望をなんだと思つてやがるッ!」

利用されていたとはいえ、衣食住を提供してくれていたファイネには恩義を感じていたクリスが叫ぶ。人にとって、希望とは未来を生きていく為に最も必要なものだ。それを無理矢理奪い取っていくユートピアドーパントを、クリスは許せなかったのだ。

クリスの問いかけに「そうですね……………」と、しばし顎に手を当てて考え込んだユートピアドーパントは、一つの答えを口にした。

「我が理想郷を創造する為の道具、と言ったところででしょうか？」
「な……………ッ！」

ユートピアドーパントの回答に、その場にいた誰もが絶句する。目の前の怪物は、人が未来を生きる糧である希望を、私利私欲の為に利用するものとしか考えていない。

「この世に生きる人々は、誰もが理想郷を求めています。一切の争いが存在しない世界……………実に素晴らしい。永い間、人類という種族が叶える事が出来なかった夢の一つと言っても過言ではないでしょう。……………ですが、誰もが気付いているはずですよ。そんな世界は決して実現しないと」

争いの無い世界を求めているというのに、人類は互いを殺し合い、自分達だけが幸せになろうと他者を蹴落とし続ける。そんなものは、決して彼らが夢見る理想郷には到底たどり着けない。真の理想郷など実現などしないと、誰もが無意識下で理解しているはずだ。

「ですが、私なら出来る。私が全ての希望を統括しましょう。一人一人が未来に抱く希望が違うからこそ、争いは起こるのです。ですが、まとめて一つにしてしまえば、そんな事はもう起こりません。貴方も、本当は戦いたくないはずですよ。争いの無い、平和に満ちた世界を求めているはずですよ」

ユートピアドーパントの左手が響達に差し伸べられる。

「さあ、その希望を委ねなさい。私が貴方方の全てを統括し、真の理想郷へと導いてみせましょう」

それに対し、響は静かに答える。

「……………確かに、そうすれば、誰も争わないで済みますよね」

「立花……………？」

希望を奪われたフィーネの体を傷つけないように優しく地面に横たわらせ、響はユートピアドーパントに近付いていく。

「未来やみんなだって、危険な目に遭わなくて済む。誰もが喧嘩しないで、笑っている世界。本当に、素晴らしい世界だと思います」

「ええ、まさしくその通り。では、貴女の希望を、私に委ねなさい。それが貴女の望む理想郷の礎となる」

開かれた左手が、響の顔を掴もうとする。それを見た全員が、響をユートピアドーパントから引き剥がそうとしたその時――

「でも、そんなのは、理想郷とは言いませんッ！」

今にも自分の顔面を覆い尽くそうとした左手を払った響の拳が、ユートピアドーパントの顔面に叩き込まれた。限定解除されたギアの出力によって繰り出される不意打ちにも等しい一撃に回避も防衛も許されなかったユートピアドーパントは数十メートル先まで殴り飛ばされる。

「貴方の言うように、みんなが同じ気持ちじゃないから争いが起きるのかもしれない。ですがそれでも、平和な世界を目指して頑張つて

いる人達がいますッ！」

誰も彼もが争っているわけではない。中には手を取り合い、共通の敵と戦う者達だっている。そんな彼らの希望さえも奪って統括しようとするユートピアドーパントを、響は認められなかった。

彼の言う『理想郷』とは、全人類の希望を彼が統括した、争いの起こらない世界。しかしそれは、誰もが人としての尊厳の一つである希望を奪われ、生きる氣力を失ってしまう『絶望郷』^{ディストピア}である。

そんな独裁的な世界は、誰も望まない。

どんな困難があっても、誰もがそれぞれの希望を胸に、未来へ邁進する。それが人間という生き物なのだ。

「……………それは無駄な足掻きですよ。どれだけ足掻こうが、貴方方に理想郷の創造など不可能です。この私が……………ユートピアメモリと引かれ合ったこの私こそが、大衆を真の理想郷に導けるのですッ！」

顔を抑えながら立ち上がったユートピアドーパントが叫ぶ。その手にはソロモンの杖。

「……………ッ!? なにを……………ッ!?」

理想郷の杖を投げ捨て、両手で握ったソロモンの杖を自分の体に突き刺したユートピアドーパントの姿に響達が呆氣に取られていると、彼女達が倒し切れなかったノイズが一斉に彼に殺到していき、嫌な予感を感じたエターナルが全員にここから離れようと提案し、全員がノイズに埋め尽くされていくユートピアドーパントから離れていく。

「ノイズに、取り込まれてる……………?」

フィーネを抱えた響が、目の前の光景に思わずそう零すも、エター

ナルがそれを否定する。

「逆だ。奴がノイズを取り込んでいるんだ。響、フィーネを安全な場所へ」

「はいッ！」

響がフィーネを丁度一人分隠れられそうな瓦礫の影に隠している間にも、ユートピアドーパントは変化を遂げていく。

「来なさい、デユランダルッ！」

ユートピアドーパントの呼びかけに答えるようにどこからともなく飛んできたデユランダルを、ドロドロに溶けたノイズに包まれているユートピアドーパントが取り込むと、その身を変異させていく。

顔面に取り付けられていた片側が欠けていた仮面が砕け散り、狂気の笑みを浮かべる赤目の素顔が露になり、巨大化した両腕のうち、右手には彼同様巨大化した理想郷の杖が握られており、開かれた左手の上には太陽の如き輝きを放つ光球が浮かんでおり、両足はなにかに縋るように手を伸ばしている人々によって形作られている。そして、腰に巻かれたガイアドライバーの中心には、障壁に護られたデユランダルが取り付けられていた。

「これは、メモリの暴走か……………？」

文字通り巨人と化したユートピアドーパントに、克己は仮面の奥で眉を擡める。

以前、ガイアメモリについて調べていた際に、ガイアメモリの暴走などを起因にしてドーパントが巨大形態に変異するという情報を知ったが、これがその巨大形態というものなのだろう。だが、様子を窺ってみるも、ユートピアドーパントに怪しい動きは見えない。暴走で変身者の意志に関係なく暴れる事も無い。いや、違う。

「暴走したメモリの力を制御しているのか……………ッ!?　なんて奴だ……………ッ!」

一本のメモリに納められているとはいえ、それは間違いなく地球が保有する記憶。常人の精神が耐え切れるものではない。だが、地上にいる自分達を高めから見下ろしてくるこの怪物は、メモリの力を完璧に制御している。

「私の創る理想郷に、貴方方は不要です」

「ぐ……………ッ!」

襲い掛かってきた重圧に思わず膝をつく。重力操作だという事はこれまでの戦いからわかり切っている事だが、その重圧は通常形態の時と比べて恐ろしいぐらいに強化されている。限定解除されたギアを纏っている響達でさえも身動きを取るのが難しいくらいだ。

「消えなさい」

ガイドドライバーのデュランダルが輝くと、それに反応するように左手に浮かぶ光球が強く輝き始める。これからなにが起こるのかわからないが、それでも、これから繰り出される攻撃がこれまで自分達が受けてきたものとは段違いの威力を誇っている事だけは、光球から感じる膨大なエネルギー量から把握出来た。

「クリス……………ッ!」

「任……………せろ……………ッ!」

トリガードーパントに頷いたクリスが飛行ユニットのようなものに変形したアームドギアから飛ばしたエネルギーリフレクターを展開した瞬間、巨人の光球から超圧縮されたエネルギー光線が放たれ

た。

全員を覆うように展開されたエネルギーリフレクターが光線を受け止めるも、それを貫通してきた衝撃がエターナル達を襲った。

「ぐ……………うう……………ッ！ 跳ね返し……………やがれえッ!!」

重圧と共に襲い来る衝撃に耐え続けるクリスがエネルギーリフレクターを維持する力を強める。主の意志に応えるようにエネルギーリフレクターは自らに襲い来る光線のエネルギーを幾重にも倍増し、巨人に跳ね返した。

「ぬううううう……………ッ！」

ズシンツ、と地響きを起こして巨人が光線が直撃した胸元を押さえ、後ずさるも、もちろんエターナル達も無傷では無く、エネルギーリフレクターを破壊して貫通してきた光線を受けた鎧や体は所々傷がついていた。

だが、彼らがそのままじっとしているのを許す程、巨人も甘くは無く、今度は右手の理想郷の杖を振り下ろしてきた。

すぐに全員が散開したため、誰も杖に押し潰される事は無く、全員がすぐに反撃を開始する。

「はあああああッ！」

翼を広げた響と両足から炎を噴射したヒートドープアントが巨人の頭よりも上まで飛んでいき、そこから急降下キックを繰り返すが、巨人は大した反応を見せずに彼女達を薙ぎ払う。

「このデカブツがあッ！」

「喰らいやがれッ！」

飛行ユニットに乗ったトリガードーパントが光弾を撃つと同時にクリスがレーザーを放って攻撃し、地上からはルナドーパントに投げられたメタルドーパントがメタルシャフトを叩き付けようとする。だが、巨人は左手の光球を自分に向かってくる光弾とレーザーの数より数本多い数の光線に変えて相殺し、クリスとトリガードーパントを撃墜する。メタルシャフトを叩き付けようとしてきたメタルドーパントは左手で捕まえ、勢いよく地面に投げつけた。

小規模ながらも完成したクレーターの中心で苦痛に悶えているメタルドーパントを踏み潰そうとするが――

『バイオレンス・マキシマムドライブ！』

「ぐ……………おおッ！」

『暴力』の記憶の力を身に纏ったエターナルが巨人の足を受け止めた。

「すまねえ、克己ッ！」

「早く離れろッ！ 翼ッ！」

「承知ッ！」

足を受け止める力を緩めずエターナルが叫び、上空の翼がアームドギアを自分の何倍も巨大化させる。

「はあッ！」

通常形態よりも威力が格段に上昇している『蒼ノ一閃 滅破』が巨人の顔面に直撃する。黒煙を上げて後ずさる巨人の顔面には切り傷が出来ていたが、それは決して深いものではなかった。

「エクスドライブ限定解除形態でさえ、あの程度の傷しか与えられないのか……………ッ！」

齒噛みする翼に「当然です」と巨人は鋭い牙を覗かせる。

「フィーネの言うように、シンフォギアは所詮聖遺物の欠片から作られたものです。限定解除されていたとしても、ノイズとソロモンの杖、デユランダル、そしてフィーネの希望を取り込んだ私を、その程度で倒せるとでも?」

デユランダルを輝かせ、光球を幾十もの光線に変えて飛ばしていく。上空にいる三人の装者と地上の五人はそれを避けるべく走り出す。光線は標的を逃さないとばかりに進行方向を変えて追ってくる。

「私の後ろにッ!」

地上に降りた響の真正面から自分達を追う光線が飛んでくるように移動したエターナル達が彼女の頭上を飛び越える。

「はぁッ!」

自分達を襲おうと迫る光線に対し、響は大きく上げた右足で大地を踏みつける。

隆起した地面が天然の壁となって光線を阻み、砕けた壁を通ってきた光線はギアのエネルギーを纏わせた拳や足で打ち払っていく。

そこへ巨人が杖を振り下ろしてきたので、全員はそこから離れて回避する。

「どうしました? 逃げてばかりでは勝てませんよ?」

「キーンッ! 悔しいけどその通りねッ!」

踏み下ろされてくる右足を避けたルナドーパントが地団太を踏む。

限定解除形態の攻撃でも軽いダメージしか与えられない以上、自分達の攻撃は――パワーファイターなメタルドーパントかドーパントよりもスペックが高いエターナルを除いて――ほとんど効かないだろう。出来るとすれば注意を引く事ぐらいだ。

「ネフシユタンの鎧が彼女と融合していなければ、そちらもすぐに奪っていたのですが、奪えないのであれば仕方ありませんね。無限のエネルギー炉であるデュランダルを取り込んだだけでもこの力なので、これで充分とも言えますが」

「デュランダル……………？ ……はッ！」

翼が隣に滞空するクリスを見ると、自分と同じ事を考えていたのか、クリスは頷く。地上にいるエターナル達も、彼の言葉を聞いて理解し、決めた事だろう。これから自分達が、なにをすべきかを。

ただ一人、響を除いて。

「え？ え？ な、なんですか？」

クリスと翼の視線を受けて頭にはてなマークを浮かべていた響だが、彼女達の瞳に籠められた意志を感じ取り、拳を握り締める。

「なんだかよくわからないけど、やってみますッ！」

「頼んだッ！ 私達が露を払うッ！」

翼が地上にいるエターナルを見る。頷いたエターナルが部下にこれからの行動を伝える。

「よし、行くぞッ！」

上空の翼に頷いたエターナルに頷き返した翼が叫び、全員が一斉に動き始める。

「手加減は無しだッ！ 喰らえッ！」

クリスが飛行ユニットから撃ち出したミサイル群を巨人は重力操作で操り、クリスに向かわせてくるが、それらは彼女の前に出た翼の『蒼ノ一閃 滅破』によって悉く破壊され、それでも勢いを落とさない斬撃は巨人の胴体に直撃するも、巨人は大したダメージを受けた様子は無い。それでも翼は攻撃をやめず、アームドギアを手に巨人に攻撃を仕掛け、クリスも重力操作の影響を受けないエネルギーで構成されたレーザーで攻撃する。

「おのれ、ちよこまかと……………ッ！」

彼女達を撃ち落とそうと光線を放つ巨人の足元にはエターナル達が向かっており、彼らにも操られたミサイルが降り注いでいたが、それらは着弾する前にトリガードーパントによって全て撃ち落とされておられ、彼にミサイルの迎撃を任せて走っていたエターナルはヒートドーパントとルナドーパントに目配せする。

エターナルとメタルドーパントが彼らの前で二体のドーパントが組んだ手に片足を乗せ、一気に押し上げてもらう。

「いくぞ、剛三」

「あぁッ！ いくぜッ！」

地上から飛んでくる彼らに気付いた巨人が光球を消滅させた左手を握り締め、殴り飛ばそうとしてくる。それに対し、エターナルは再びT2バイオレンスメモリを取り出し、メタルドーパントは拳を構える。

『バイオレンス・マキシマムドライブ！』

「はあああああッ！」

「おおおりやああああッ！」

迫り来る拳と、エターナルとメタルドーパントの拳が激突する。凄まじい力と力の激突によって周囲に衝撃波が飛び、押し負けた巨人が一步引いた。その隙を逃す事無く、メタルドーパントはエターナルの腕を掴んで回転し、投げ飛ばした。投げ飛ばされたエターナルの手には、『牙』の記憶を持つメモリ。

『フアング・マキシマムドライブ！』

T2フアングメモリを挿し込んだのは、エターナルエッジ。T2バイオレンスメモリは今もロストドライブのマキシマムスロットに挿し込まれているままなので、二つの地球の記憶を解放するツインマキシマムの負担が襲うも、それ以上の数のメモリのマキシマムドライブを発動した経験があるエターナルにとって、これは苦でもなんでもない。

「はあああああッ！」

『牙』と『暴力』の記憶の力を宿したエターナルエッジが振るわれるのは、巨人のガイアドライバー。彼が狙っているものに気付いた巨人がすぐに左手で庇おうとするが、間に合わない。

「しまった………ッ！」

先程のパンチよりも凄まじい威力を誇る超高速の連撃がガイアドライバーに叩き込まれ、数回は耐え抜いていた障壁にも亀裂が走り、遂に砕け散る。砕かれた障壁の破片を散らしながら、護りを失ったデュランダルが落ちていく。

「立花ッ！ そいつが切り札だッ！」

「渡すものかあッ！」
「させるかよッ！」

落ちていくデュランダルを重力操作で引き寄せようとするが、クリスのレーザーによって邪魔されてしまう。

地上では地球の引力で地面に向かっていくデュランダルをトリガードーパントが撃ち飛ばし、響は飛んできたデュランダルの柄を取った。

「ぐ、ウウウ、ウウウウウ………ッ！」

瞬間、意識が破壊衝動に塗り潰される。響は意識どころか、全身さえも包み込もうとする真っ黒な感情に呑まれないよう抗うが、強烈な破壊衝動は留まる事を知らず、さらなる力で響の意識を捻じ伏せようとしてくる。

(だ、駄目だ………ッ！ 抑え切れない………ッ！)

想像を絶する力の奔流に響が屈しかけたその時――

「――正念場だッ！ 踏ん張りどころだぞッ！」

シエルターの扉を破壊して地上に出てきた弦十郎の声が、響の鼓膜を震わせた。

「強く自分を意識してくださいッ！」

「昨日までの自分をッ！」

「これからなりたい自分をッ！」

「………ッ！ みんな………！」

緒川、藤堯、友里も弦十郎に続いて、響に声援を送る。

「屈するな、立花。お前が構えた胸の覚悟、私に見せてくれッ！」

破壊衝動に抗う響に、翼とクリスが寄り添う。

「お前を信じ、お前に全部賭けてんだッ！ お前が自分を信じなくてどうすんだよッ！」

(私の……………覚悟……………)

「貴女のお節介をッ！」

「あんたの人助けをッ！」

「今日は、私達がッ！」

地上から、学院で苦楽を共にしてきた友達の声が聞こえてくる。

「姦しいッ！ 黙りなさいッ！」

巨人が杖を振り下ろしてくる。地上にいる誰もが「まずい」と思ったその時――

「……………ッ!? か、体が……………ッ!?」

三人に振り下ろしかけた杖を握る右手の動きが止まり、巨人は、まるで攻撃を受け入れるかのように両腕を広げた。

『させない……………ッ！ この子達に、手を出させるものかッ！』

脳内に響き渡る声。突如として聞こえてきたそれが誰のものであるか、二課に所属する者は誰もが瞬時に理解した。

「了子……………さん……………ッ!?!」

『勘違いしないでほしいな。私はこの男が気に入らないだけだ。』

さあ、早くやれッ！ 立花響ッ！』

「……………はイッ！」

「おのれ、私の力となっていないながら、私の邪魔をするとはあ……………ッ！」

身動きが取れない巨人が、それでもと僅かに開いた左手から光線を発射する。しかし、狙いを定められない状態で撃ち出されたため、それはあらゆる方向へと飛んでいき、雲を切り裂くのみだった。

「グ……………ウウウウウッ！」

だが、そのエネルギーに反応したのか、響の中で暴れていた破壊衝動が、「巨人を殺せ」と響の意識を乗っ取ろうとし始める。

呑み込まれかける響はしかし、とある人物の叫びによって、完全に自我を取り戻す。

「……………響iiiiiiiiiiiiッ!!」

それは、彼女にとっての陽だまり。誰よりも大切な親友、未来の叫びだった。

彼女の叫びは奪われかけていた意識を取り戻し、全身を覆う闇を消し飛ばした。

(そうだ……………今の私は、私だけの力じゃないッ！)

「ビッキーツ！」

「響ッ！」

「立花さんッ！」

「……………ッ！」

三人の友人が叫び、未来はただ、響を信じて見上げている。

(この衝動に……………塗り潰されてなるものかッ!!)

完全に響が光を取り戻した瞬間、デュランダルから眩い光が放たれる。天を貫かんとばかりに巨大化した不滅の大剣から放たれるそれは、絶望の未来を切り裂く、希望の輝き。

「その力……………振るわせてなるものかッ!」

彼女達の持つ大剣の力に嫌悪感を抱いた巨人が、自身の力となりながらも自分を妨害してくるフィーネの制止を振り切る。理想郷の杖を消滅させて自由にした右手を握り、エネルギーを一点に集中させていく。

(……………ッ!? 力が……………抜ける……………ッ!)

突然、全身を脱力感が襲ってくる。エターナル達も膝をついており、脱力感に襲われているのは彼らも同じである事が窺い知れる。

「デュランダルは無限のエネルギーを持ちますが、それを振るう者のエネルギーは有限ッ! 貴方方の力、私が戴くッ!」

どうやら、響達を襲った脱力感は巨人に因るものらしく、彼らから力が抜けていくのに比例するように、巨人の右拳に宿るエネルギーはより強大になっていく。

「碎け散れえッ!!」

凄まじいエネルギーを纏った拳が突き出される。

「はあああああッ!!」

それに対抗すべく、響達はデュランダルを振り下ろす。

巨人の鉄拳と不滅の大剣。二つが激突した際の衝撃波は周囲の地面を捲れ上がらせ、すぐさま弦十郎は未来達に襲い掛かろうとしていた衝撃波を——弱体化してはいるが——発勁で掻き消した。

「ぐ……………うう……………ッ！」

「耐えろ……………立花ッ！　ここで我々が敗北すれば、なにかも終わりだッ！」

「こんなデカブツにイ……………あたし達が負けるかよッ！」
「無駄な足掻きを……………ッ！　とつと諦めなさいッ！」

巨人の拳が光の大剣を押し始める。

全身にかかる負担を無視して、三人は拳を押し返そうとするも、巨人はそれを嘲笑うかのように力を籠める。

「諦めなさいッ！　貴方方に勝ち目など、万に一つもありはしないッ！」

「それでもッ！」

「私はッ！」

「あたし達はッ！」

力を奪われ、押し負けそうになっても、彼女達は諦めない。自分達に力を与えてくれたみんなの為にも——

「二——負けるわけには、いかないッ!!」

不屈の闘志と仲間達の希望を胸に彼女達が叫んだ瞬間、エターナルは不思議な力を感じて、その力の根源を探し始める。

(あれは……………ッ！)

そして、見つける。自分達の持つそれとは比べ物にならない程のエネルギーを放つ、その記憶を。

それが誰に反応しているのか、エターナルはとづくに知っている。瓦礫に隠されるように落ちていたそれを掴み、エターナルは上空の三人に向かって投げる。厳密には、響に。

「響、受け取れッ！ そいつが、真にお前と引かれ合ったメモリだッ！！」

響は、孤独の中で戦い続けてきた少女と、過去の怨嗟に取り憑かれていた少女と、その手を繋いできた。相手が誰であろうと、分け隔てなく、彼女は手を差し伸べてきた。それがたとえ、多くの命を犠牲にしてきた者であろうと。

その在り方は、きつと異質なのだろう。『誰かを救う』という為だけに、自分の事なんて一切考えずに、その手を伸ばし続ける彼女の在り方は、『異常』の一言に尽きる。

だが、それだからこそ、彼女はいつだって、燃え盛る感情のままに、誰かを助け、彼らの脅威を排除してきた。

こんな事は誰にも出来るものではなく、最後の最後まで、『自分達は手を繋げる』と信じてやまない彼女だからこそ、そのメモリは応えたのだろう。

そのメモリの名は——

「力を貸して……………ジョーカーッ!!」

『切り札』の記憶を内包したメモリから飛び出した光球が、響に取り込まれる。

マフラー状の翼や四肢の装甲には紫のラインが走り、腰のスカートは響の昂る感情を炎の如く表すかのような紫のロングスカートに変化し、右目の網膜に『J』の文字が浮かび上がる。

使用者の感情が放つエネルギーによって、性能の上限を超えた力を発揮できる能力を持つT2ジョーカーメモリの力に当てられたのか、翼とクリスの姿も変化していく。

脚部装甲から広げられていた二対の翼は紅蓮の炎の翼となって翼の背中へと移動し、『Z』と『W』の文字が翼の両目に浮かぶ。

蒼色の模様が入った翼を広げ、蒼色の模様が描かれた装甲を纏ったクリスの右目には『T』の文字が浮かぶ。

「行くぞッ！　これが最後……………今度こそ決着をつけてやらあッ！」

「ああッ！」

「はいッ！」

シンフォギアの限定解除に、ガイアメモリのマキシマムドライブ、そしてデュランダルの無限のエネルギーを前に、巨人の全身から火花が飛び散り始める。

「馬鹿な……………ッ！　この姿でさえも、奪い切れないだとッ!？」

この場合のガイアメモリの力は、あくまで補助に過ぎない。三人の姿が変化したのも、それぞれのメモリの力を利用したから。だが、たとえ補助といえども、その記憶を保有しているのは、全ての生命の母体たる地球。

その力の前に、巨人は成す術も無い。

「響き合うみんなの歌声がくれた……………シンフォギアでええええええええッ!!」

押されかけていた形勢を逆転し、拳を切り裂いた大剣は、そのまま巨人の顔面に近付いてくる。

夜明けを告げる歌

「う……………ん……………?」

「む、気が付いたか」

巨人が倒された事で奪われた希望が戻り、意識を取り戻したフィーネが瞼を開けると、こちらを覗き込んできている弦十郎と目が合う。

「あの男は……………?」

「ユートピアドーパントの事か? それならさつき、響君達が倒したよ」

「そう……………。ふふ、せいせいしたわ。私を裏切った報いよ」

「君が彼を止めてくれたおかげだ。ありがとう」

「勘違いしないで。あれは細やかな抵抗よ。私を見くびってもらっては困るから」

意識ごと希望を奪われはしたが、フィーネはこれまで数多くの自分の遺伝子を継ぐ者達の意識を乗っ取ってきた存在である。だからこそ、彼女は巨人の精神を乗っ取るまでには至らなくとも、体のコントロールを一時的に奪う事は出来たのだ。

「それより……………、彼、どうするの?」

フィーネの視線が弦十郎から外され、今にも立ち上がろうとする順へ移される。

T3ユートピアメモリは破壊されてしまっているので、もう彼がドーパントに変身する事は出来ないだろう。だが、最後まで油断は出来ない。追い詰められた者ほど、想像もつかない行動に出るものだから。

(鎧はまだ私と融合している。いざとなったら、これで……………)

ユートピアドーパントに奪われたのは希望だけで、ネフシユタンの鎧は奪われていない。彼に貫かれた傷が今では完全に塞がっているのがその証拠だ。

エターナルが彼にトドメを刺そうと、彼の首にエターナルエッジを押し当てる。そのまま彼の喉笛を掻っ切ると、誰もが思ったその時――

「……………待ってくださいッ！」

と、響がエターナルを止めた。

――順の首元にエターナルエッジを押し当てたまま振り返ると、自分に向かって首を振っている響の姿が視界に入った。

「響、敵味方問わず手を繋ごうとするお前の心意気は立派だ。だが、こいつはやめておけ。こいつは受けた恩を仇で返す男だぞ」

「それでも、話をさせてください」
「……………いいだろう」

響の視線に籠められた思いを汲み取り、渋々とエターナルは順を響の前に放り出す。

「少しでも妙な動きをしてみろ。その瞬間、お前を地獄に叩き落とす」
「ええ……………わかっていますよ……………。それで、私になんの用ですか？」

自分の前に立つ響を見上げる順。いつ彼が逃走や反撃に動いても殺せるようにエターナル達が見張る中、響は口を開く。

「誰もが争わない世界。辛い事がなにも無い世界。……………本当に、素晴らしい世界だと思います」

今もどこかで誰かが辛い目に遭って、生きるのを諦めてしまっているかもしれない。そんな、世界に存在する善悪の比率は、明らかに悪の方が大きいだろう。

だが――

「でも、貴方は間違ってしまった」

どんな理由があろうと、人々から希望を奪って管理するやり方は認められない。人が未来を形作る為には、希望が必要不可欠なのだ。

全員が求める未来が同じであり、考えも一緒であるならば、争いが起きないのも当然である。しかし、それではいけない。人はそれぞれの個性を持ち、それぞれの未来を求めるからこそ、良い意味も悪い意味でも人間足り得るのだ。

「間違いですか。ええ、貴方方にしてみれば、まさしくその通りなのでしょう。こんなやり方、貴方方が認めるはずが無い」

「でも、やり方を変えればきっと、人と人は繋がり合えると思うんです」

「……………なんですって?」

「喧嘩もすれば争いもする。貴方の求めた理想郷みたいに、統率された世界ではありませんが、そんな世界でも、人は繋がる事が出来ます。今度は、やり方を変えてみましょうよ。そうすれば、きっと――

――

「フツ……………馬鹿馬鹿しい」

響の言葉を、順は鼻で笑って一蹴した。

「実に愚かな考えです。貴方方がどう足掻こうと、争いは絶えません。訪れるとすれば、ほんの些細な平穏だけ。貴方方が幸せでも、どこかの誰かは苦しみ続ける。貴方方が作れるのは、そんな世界ですよ」

『なにも変わらない』。そう断言した順は、遥か彼方の宙そらに位置する、一部分が欠けた月を見上げる。

「だからこそ……………私はッ！」

順が地面に手を当てた瞬間、そこを中心に発生した衝撃波が周りにいた響達を吹き飛ばした。

「さあ、落ちてきなさい……………ッ！ 愚かな考えを持つ者を、叩き潰すのです……………ッ！」

掲げられた手から月の破片へと光が放たれた瞬間、月の破片がゆつくりと大きくなっていく。否、目に見える速度で近付いてきているのだ。その光景に、クリスが目を見開く。

「なんてデタラメだ……………ッ！ 月を引つ張りやがったのかッ!?」
「なんて事を……………ッ！」

「フフフフ……………、この体に残された巨人形態のエネルギーを使いました。あの速度なら、数十分でここに墜ちてくるでしょうね……………」

そう言う順の体は。徐々に塵に変わっていつていた。彼は残された力を解放すると同時に、自らの命を燃やし尽くしたのだ。

「見物ですね……………。あの脅威に、貴方方がどう対処するのか……………。私は一足先に、地獄で待ってますよ……………フフフ……………ハハハハハハ……………ッ！」

順が高笑いした次の瞬間、その全身は塵となって消滅してしまつた。

「あ……………」

先程まで目の前にいた男が塵となつて消えた事に思わず響が声を漏らし、塵を掴もうと手を伸ばすが、ヒートドープアントがその手をそつと下ろさせた。

「これが、あの男の末路。貴女が気にする事じゃないわ。それより、今はあれをどうするかよ」

「……………はい」

月の破片を見上げる響の耳に、弦十郎が藤堯に月の破片の軌道の計算を命じる声が聞こえた。

「……………軌道計算、出ました。直撃は……………避けられません」

ものの数分で月の軌道計算を完了した藤堯の言葉に、全員の目に再び絶望が宿る。

「あんなものがここに落ちたら……………」

「私達、もう……………」

「……………大丈夫」

不安げに月の破片を見上げる友達に、落ちてくる月の破片に対する恐怖を抱く事無く、響は歩を進める。

「私がなんとかする」

「そこは『私』ではなく、『私達』だろ？ 立花」

「あたし達を忘れてもらっちゃ困るぜ、響」

響の左右に翼とクリスが並び立つ。二人の言葉に一瞬呆けていた響だが、やがてその口元に笑みを浮かべ、自分を心配そうに見つめる未来に振り返る。

「ちよ〜つと行つてくるから。生きるのを、諦めないでッ！」

「響……………」

「待て」

今にも飛び立とうとした響達を、弦十郎に肩を貸してもらっているファイネが呼び止める。

「お前達は、なぜそこまでして、ここに居る者達を護ろうとする。その力さえあれば、お前達だけでも逃げられるかもしれないのに」

「お前は馬鹿か、ファイネ。あいつらが居るからこそ、あたし達はあれに立ち向かうんだよ」

「どういう事だ？」

首を傾げるファイネに、翼が答える。

「護るべき者達を見捨て、自分達だけ助かろうなど笑止千万。どんな脅威が相手だろうと、弱きを救うのが防人の務めというもの」

「みんなの歌に助けられたからこそ、私達はあの巨人に勝てたんです。だから、今度は私達がみんなを助ける番ですッ！」

ここに居る者達を見捨てる気など毛頭無い彼女達の言葉にしばし啞然とし、ファイネはフツと諦めたように笑顔になる。

「敵わないわね、貴女達には……………。……………行つてきなさい、装者達」

そこで一旦言葉を区切り、フィーネは彼女達に言う。

「――胸の歌を、信じなさい」

それは、絶望的な状況でも諦めず、他者を救おうとする彼女達への、彼女なりの激励。それに三人は頷き、月の破片を見据える。

「……………行こう、二人共ッ！」

「あぁッ！」

「おうッ！」

翼を広げ、三人は飛び立つ。小さくなっていく彼女達の姿を見送るフィーネは、自分達同様響達を見送っているエターナル達を見る。

「いいの？ 彼女達だけ行かせて」

「あれは彼女達がすべき事だ。そこに首を突っ込むのは野暮つてもものだろ？」

この場にいる誰よりも、人々の希望を体現したのが彼女達だ。故に、彼女達こそが、あの絶望を打ち砕く事が出来る。

ロストドライバーからT2エターナルメモリを抜いて変身を解いた克己は、同じく変身を解いた部下達と一緒に響達を見上げ続けた。

「――こんな大舞台で歌う事になるとはな。立花には驚かさねればなしだ」

大気圏を突破し、眼前に迫る月の破片を見据える翼が言う。

「まあ、一生分の歌を歌うには、丁度いいんじゃないのか？」

「違うよ、クリスマスちゃん」

「あん？」

首を傾げるクリスマスに、響は笑う。

「ここで終わりなんかじゃない。私達には、まだやる事があるでしょ？」

「……………ああ、その通りだ」

みんな、自分達に託してくれた。それなのに、自分達が死んでどうする。

命は懸ける。だが、死にはしない。

月の破片を砕き、帰る。生きて、帰るのだ。

「……………不思議だね……………静かな宙^{そら}」

翼を広げ、響が歌う。

「……………本当の……………剣になれた？」

翼が、響に手を伸ばす。

「……………悪くない……………時を貰った」

クリスマスが、翼と手を繋いだ響の手を握る。

『気持ちいいな。こうして、三人で一緒に歌うのは』
『当然だろ？ 歌ってのは、みんなを笑顔にする為にあるもんだからな』

『わお、クリスマスちゃんがそんな事言うなんて、少し驚きだよ』
『な、なんだよ。悪いか？』

『いや、悪くない。むしろ、良すぎるくらいだ』

三人は、自分達を繋ぐ手を放さないとばかりに強く握り締める。

『……………いこう。私達の歌で、みんなを護るんだッ！』

『あぁッ！』

『おうッ！』

ブースターを点火し、加速する。

「——開放、全快ッ!! いっちゃえ、ハートの全部でえええええええッ!!」

一筋の流星となって、三人は月の破片に向かって飛ぶ。

『みんながみんなの夢を叶えられないのは、わかっている。だけど、夢を叶える為の未来は、みんなに等しくなきやいけないんだッ！』

希望に満ちた人生を歩む者がいれば、絶望に満ちた人生を歩む者もいる。後者は、生きる事すら億劫になってしまうだろう。だが、それでも、彼らにも夢を叶える機会は用意されていなければならぬのだ。

『命は、尽きて終わりじゃない。尽きた命が遺したものを受け取り、次代に託していく事こそが、人の営み。だからこそ、剣が護る意味があるッ！』

かつての相棒、天羽奏が使用していたガングニールは響に受け継がれ、奏が生前抱いていた気持ちも、彼女に受け継がれた。

先達の意志を受け継いだ者が、次の世代にそれを託していく。そういつた連鎖こそが、人類が歴史を紡いできた所以なのだ。

『たとえ声が枯れたって、この胸の歌だけは絶やさないとッ！ 夜明けを告げる鐘の音奏で、鳴り響き渡れッ！』

言語の壁が人類を隔てても、心のままに接すれば、相手はきつと答えてくれる。

いつか、人が身分、言語の枷に囚われる事無く、繋ぎ繋がれる世界を創る為に、彼女達は歌う。

「これが私達の、絶唱だあああああッ!!!」

邪悪を絶つ巨大な剣が煌めく。

怨恨を殲滅する大型ミサイルが放たれる。
人を繋ぐ拳が振るわれる。

——そして、月の破片は、希望を乗せた三人の絶技の前に、粉々に砕け散った。

「あ、ああ……………ッ！」

空を覆い尽くす、蒼い光。それを見上げ、未来は口元に手を当てる。
砕かれた破片か、それとも、それを砕いた者達の命の残滓か。そこを中心の流れ星が空を駆けていく光景に、その場の誰もが見惚れている中、未来は走り出す。

(響……………ッ！ 翼さん……………ッ！ クリス……………ッ！)

嘘だ。彼女達は死んでなんかない。あそこで命を落とすのは、絶対に許さない。

彼女達の命で保たれた平穏なんて、自分はいらない。
背後から自分を呼び止める誰かの声すら無視し、未来は瓦礫が転

がっている大地に立つ。

「響iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiッ!!」

哀しみと怒りを乗せて、未来は誰よりも大切な少女の名を、あらん限りに叫んだ。

「「ぶはあッ!! 死ぬかと思ったッ!!」」

すぐ近くの瓦礫を吹っ飛ばして、ギアが解除された三人が現れた。それも、なぜか三人仲良くアフロになって。

「ひ、響ッ!」

まさかここにいるとは思わなかったのか、彼女達が本物なのか確かめる為に駆け寄った未来に、アフロを脱ぎ捨てた響が頭を搔く。

「いやあ、凄い凄い。破壊した衝撃でここまでぶっ飛ばされるとは思わなかったよ」

「間一髪でブースターでブレーキをかけられてよかった」

「こいつはなんでか知らねえけどここにあったから、ちよつとふざけようかと思ってな」

投げ捨てられたアフロを見て、してやったりとクリスがニヤニヤする。

「……………本当に、本当に、本物なんだよね？」

「そうだよ。幽霊なんかじゃない。本物の私達だよ」

両目に涙を溜める未来の頭を安心させるように撫でる響に、遂に耐え切れなくなった未来が抱き着いた。

「よかった……………ッ！ 本当によかった……………ッ！」

「……………私も、未来が無事で本当によかった」

「うん、うん……………ッ！」

響に抱かれながら号泣する未来から視線を外し、翼とクリスが笑顔で頷き合っていると、弦十郎を始めとした面々が彼女達の元へ駆けつけてくる。

誰もが笑い合う中、その場にいる全員が実感する。

——戦いは、終わったのだと。

——それから数日間は怒涛の如く過ぎ去っていった。

ノイズによって破壊された《私立リディアン音楽院》の修復を始め、様々な出来事があったが、響達にとつて最も嬉しい出来事がある。

それは、櫻井了子——フィーネの加入である。

経緯は、彼女自らが二課に所属する事を志願した事から始まった。

これまで数多くの事件を引き起こしてきた彼女に対して、誰もが必ず思うところはあり、彼女自身も断られるのを承知で志願したのだが、ここはあの風鳴弦十郎がリーダーを務める特異災害対策機動部二課。最後には誰もが快く彼女を受け入れたのだ。

彼女と一緒に二課に所属する事が決まったクリスも、遂にプライバ

シーが保障されたりまともな生活が送れるようになる事に涙ぐんでいたが、響達が自分の部屋の合鍵を持っていた事に怒っていたが、フィーネと同じ環境で働ける事を嬉しがっていたので、その怒りはすぐに収まった。

そして現在、弦十郎を代表に、二課の職員達は翼の復帰ステージに来ていた。

「凄いわね……………」

大勢の観客を相手に歌う翼の姿をステージ裏で見つめ、金髪を下ろした白衣姿のフィーネは感嘆の一言を漏らす。

「以前の君は、『痛みこそが人を繋ぐ』と語っていたそうだが、それは間違いだ、了子君。歌が人を繋ぐんだ。あそこにいる観客達のようにな」

最前列では響と未来がペンライトを手に発狂している。会場は二年前に多くの命が散った惨劇の舞台となった場所だが、翼に歓声を上げる誰もがみんな、昏い感情を見せていない。それどころか、どこを見ても笑顔で満ち溢れている。もちろん、翼もだ。

「私の考えは、どこまでも間違っていたのね……………」

「いや、君が『創造主に会いたい』という気持ちは間違ってたなどいいない。君が間違えたのは、やり方だ」

誰かに会いたいという気持ちの為だと言っても、多くの犠牲を重ねるのは罪だ。

「……………同じ事を、あの子達にも言われたわ。そうね、やり方がいけなかったのね、私は」

噛み締めるように呟き、フィーネは弦十郎を見て話題を変える。

「それはそうと、貴方ってば本当に不可解だわ。自分を殺そうとした相手を仲間に引き入れるなんて。本当に……………おかしな男」

「そうか？ 俺としては、単純な男のつもりだがね」

「単純にして不可解、それ以上に難しいものは無いものよ。でも、そんな貴方だからこそ、誰もが惹かれる」

あらゆる時代、あらゆる国で命を奪ってきた殺戮者すらも仲間に引き入れるこの男の在り方が、フィーネには理解出来ず、同時に愛おしい。

「貴方には感謝してるわ。私が知らない事を教えてくれたもので、次の計画を練れるわ」

「な……………ッ！ まさか……………ッ!？」

目を見開く弦十郎に、フィーネが言う。

「私がいつ、『あの御方との再会を諦める』と言ったのかしら？ それに、私の数千年の想いに、貴方の数年の想いが勝るわけないでしょ？ ほんの少しだけ、貴方達の寿命が延びただけ」

でも、とフィーネは続ける。

「しばらくは安心していいわ。あの子達には、私を助けてくれた借りがあからね。受けた恩を仇で返す程、私は非常識じゃないから」

「本当に懲りないな、お前は……………」

「あの子達から、諦めない事の大切さを教えてもらったからね。それと、諦めが悪いのは貴方も同じでしょ？」

「それとこれとは話が別じゃないか？」

そこで、弦十郎は肩に重いものが乗つかる感覚を覚え、そちらへ顔を向ける。

そこには、自分の肩に頭を乗せる、フィーネの姿があった。

「まあ、精々私の事をしつかり見張ってる事ね。他の奴に目を向けた瞬間、その命を刈り取ってあげる」

「……………そうだな。しつかりと、見張っている事にするよ」

そうして二人は、人々に笑顔を与える翼の歌を、じつと聴き続けるのだった。

——最後の曲が終わり、会場に拍手の音が鳴り響く。

「ありがとう、みんなッ！ 今日はいっきり歌を歌って、気持ちよかったッ！」

マイクを手に感謝の気持ちを伝える翼の声を、観客は黙って聞いている。

「……………こんな気持ちは久しぶり。忘れていた。でも、思い出した。私は、こんなにも歌が好きだったんだッ！」

奏を失い、歌の本当の意味を忘れてしまっていた。ただ、人類の天敵であるノイズを屠る為の手段としか考えていなかった。

しかしその考えは、克己を始めた者達と過ごしているうちに消えていき、今ではハッキリと思いつける。

「私は……………私の歌を聴いてくれるみんなの前で歌うのが、大好きなんだッ！」

自分のありのままの気持ち、翼はハッキリと言葉に変えて、自分を支えてくれる人々に伝えた。

「もう知ってるかもしれないけど、海の方こうで歌ってみないかって、オファーが来ている。自分がなんの為に歌うのかずつと迷ってたんだけど、今の私は、もっとたくさんの人に、歌を聴いてもらいたいと思っている」

太古の昔、一柱の神によつて統一言語は砕かれた。統一言語を失った人々は、互いを殺す兵器を造り出し、殺し殺されの歴史を紡いできた。そしてそれは、形を変え、今でも世界各地に存在している。

でも、人々はきつと、繋がれるはずだ。統一言語が無くとも、想いさえあれば、必ず。

「言葉は通じなくとも、歌で伝えられる事があるならば、世界中の人達に、私の歌を聴いてもらいたいッ！ 私の歌も、誰かの助けになると信じて。皆に歌い続けてきた。だけどこれからは、みんなの中に、自分も加えて歌っていききたいッ！ だって私は、こんなにも歌が好きなのだからッ！ たった一つの我が儘だから、聞いてほしい。許してほしい………」

自分でも、身勝手な願いなのはわかっている。翼が観客達に頭を下げた瞬間――

『許すさ。当たり前だろ？』

どこからか、亡き相棒の声が聞こえた後、翼の耳に次々と観客達の声が届く。

それは、激励。遂に海外に進出する翼に対する、応援の声だ。

「……………ありがとうッ！」

彼らに支えられている事に感激し、翼は涙を流し、再び頭を下げた。

——ライブが終わり、ステージ裏でスタッフ達から労いの言葉を受け取っている翼を遠目に、克己達は踵を返す。

「どこに行くつもりだ、君達」

フィーネを連れた弦十郎に呼び止められ、克己達は振り返る。

「俺達がやるべき事はここまでだ。倒すべき敵は倒した。報酬金も受け取った。俺達は次の仕事を探す」

「みんなが幸せな世界に、傭兵ワタシたちの居場所は無いわ。ワタシ達が真に輝くのは、銃弾飛び交う戦場だけよ」

平和な世界に傭兵は必要ない。不死身の体を活かし、戦地で戦う事で報酬を受け取って生活するのが、NEVERである彼らなのだ。

「今まで世話になった、弦十郎。機会があれば、また会おう。……………」

敵としては会いたくないがな」

「待ってくれ」

歩を進めようとした彼らを、再び止める。

「君達が傭兵で在り続けようとするならば、二課おれたちが雇おうじゃないか」「なに?」

「所有者の意志でノイズを召喚する事が可能なソロモンの杖は我々の手元にあるが、それでもノイズは出現する時はする。その規模を、我々が予測する事は出来ない。響君達では対処出来ない数のノイズが現れるかもしれない。だが、君達がいってくれたら心強い」

そう言つて、弦十郎は克己に手を差し出す。

「君達の判断に委ねるが、良かったら、君達に我々二課の職員になつてほしい。我々には、君達の力が必要だ」

差し出された手を見つめた後、克己は仲間達を見る。仲間達は諦めたように笑つており、それを了承と捉えた克己は、フツと笑つて弦十郎の手を握る。

「いいだろう。お前の下で働いてやる」

「随分と上から目線だな。……………二課へようこそ、みんな」

「改めてよろしくね、弦十郎ちゃんツ！」

「よろしくお願いするわ」

「よろしく、ボス」

「よろしくな、ボスツ！」

こうして、克己達NEVERは正式に二課の職員として雇用される事となり、そのリーダーである弦十郎と一緒に笑顔になるのだった。

——路地裏に、一つの影が落ちる。

そこに立っているのは黒いライダーズジャケットに白いシャツ、そして黒いパンツを穿いた、黒髪の青年。彼は右耳のインカムに手を当て、無機質な声で通信相手を呼び出す。

「ガイアメモリ、回収完了。これより帰投する」

『よくやりました。帰りのへりを手配します。それで帰つて来てくだ

さい』

「了解」

通信を切り、男は歩き出す。

懐に、克己達が見つけれられなかった最後のT2ガイアメモリ――

――T2ゾーンメモリを入れて。

――死神に鎮魂歌を・第一章『呪縛解放砲塔カ・ディング

ル――永遠の刹那を生きる巫女――』完

――次章『神威表明星艦フロンティア――彼方へ翔け

る神船――』

戦姫絶唱しないシンフォギア（永遠の刹那を生きる巫女編）

——ファイネママは心配性——

普段は素っ気ない態度を取りがちファイネも、本当はクリスの事が心配で堪りません。

クリス「それじゃあ、あたし達の役目はこの如何にも馬鹿そうな奴を捕まえてくるって事でいいんだな？」

ファイネ「ええ、彼女は貴重なサンプルだから、なるべく傷つけずに」

剛三「逃走経路を確保する為に、一応街の地図を頭に入れとくか」

賢「この路地裏とかどうだ？ 街の作りからして人気が無いだろう」

剛三「だな。……………ん？ なんだよ、ファイネ」

ファイネ「貴方達、クリスになにする気ツ!? 人気の無い場所にクリスを連れ込んでそういう事するつもりツ!?」

剛三「はあツ!? いきなりなに言ってるんだお前ツ!?」

賢「俺達がそういう事をする連中に見えるのか？」

ファイネ「あ、ご、ごめんなさい。いきなり変な事言っちゃって」

剛三「やめてくれよ、俺達はガキを恋愛対象に見てねえから——

——」

ファイネ「——クリスが子どもですってツ!? こんなナイスバディなのにツ！」

ドンツ！（衝撃波）

剛三「な、なんで……………?」（壁にめり込みながら）

賢「ファイネ……………よくわからない女だ……………」（剛三と同じ）

——ファイネママは心配性2——

ファイネ「今日はガイアメモリの検索に出てもらうわ」

剛三「お、遂にガイアメモリ検索か。うし、いっちょやるとすつかッ
！」

クリス「あたしも行くのか？」

ファイネ「その通りよ。骨が折れるだろうけど、頑張りなさい。
………ああ、賢君」

賢「なんだ？」

ファイネ「これを持っていきなさい。これがあれば買い物とかでき
るから、お腹が空いたら使いなさい」（スマホを渡す）

賢「了解した」

ファイネ「いい？ クリスのお腹が鳴ったりしたら秒でなにか買う
のよ？ それと十分に一回は電話してきて。もちろん、クリスにかけ
させるのよ。クリスの無事が確認できなかつたら貴方達二人をぶっ
飛ばすわ」

クリス「どんだけ心配なんだよッ！ 大丈夫だから安心して任せて
くれよッ！」

今日も今日とて、ファイネはクリスが心配なのでした。

——ファイネママは心配性3——

時間軸はクリスがユートピアドーパントに希望を奪われかけたと
ころをトリガードーパントとメタルドーパントに助けられた後。

賢（このままスマホを使うと向こうに位置情報がバレてしまうかも
しれないな）

数分後………

賢（怪しい機能は全部解除した。これで大丈夫だろう）

一方、フィーネの屋敷では。

フィーネ「あ……………あああああああああああああああ
ああツ!!!」

順「ど!う!さ!れ!ま!し!た!か!、!フ!ィ!ー!ネ!」

フィーネ「クリス達の座標が……………特定できなくなった
……………」

順「そんな事ですか。相手に自分達の位置を知らせないのは当然の
事ですので、ここは我慢するしか——」

フィーネ「クリスになにかあったらどうするのよツ!」

ドンツ! (衝撃波)

順「ええ……………」(壁にめり込みながら困惑)

フィーネ「ああ……………クリス……………ツ! クリスううううう
うううううううううううううううううううううううううう
!!!!!!」(心配
が限界突破して発狂)

——クリスの悩み——

クリス(成り行きでこいつらの仲間になったけど、あたしはあたし
の罪を忘れちゃいけない)

京水「レイカ、このクッキーどうかしら?」

レイカ「……………あら、美味しいじゃない」(クッキーを頬張りなが
ら)

クリス(この身は常に鉄火場にあつてこそ……………)

レイカ「このクッキー、誰が作ったの?」

京水「知りたい? ワ・タ・シ♡」

レイカ&クリス「お、うえツ!」

京水「なによ貴女達ツ!? 乙女が可愛らしくやったのにツ!」

クリス「お前の場合、乙女じゃなくて漢女だろツ! 気持ち悪い顔

しやがってッ！」

京水「ひつどくくっいッ!! これイジメって捉えてもいいわよねッ!?! いいわよねッ?! それはそうと、クリスちゃんも食べる? 自分で言うのもなんだけど、美味しく仕上がったのよ?」(香ばしい匂いを放つクッキーを差し出す)

クリス「ま、まあ、戴いてやるよ。クッキー自体は美味そうだからな。作った奴はともかく。……………美味え」

京水「……………良い顔になったわね」

クリス「あん?」

京水「貴女、ずっと張り詰めた表情してたでしょ? 気持ちを張りすぎちゃいけないわ。リラックスできる時はしときなさい」

クリス「……………ありがとうよ」

レイカ「そういうところ、気が回るわよね、京水は」

京水「ふふ、そう言われると照れるわねえ♪」(くねくね)

レイカ「前言撤回。やっぱり気持ち悪い」

京水「なぜッ!?!」

— NEVER —

響「うええッ!?! 克己先生達って、ゾンビだったんですかッ!?!」

克己「B級ホラー映画のあれとは異なるがな。別に人を取って食ったりはしないさ」

フイーネ「死者蘇生酵素……………とんでもないものを開発したもので、貴方の母親は」

弦十郎「愛する息子を救う為に、自ら進んで人の道を外れる……………。倫理に反し、決して認められない事ではないが、それ程までに、君の母親は君を愛していたんだろうな」

克己「……………ああ、今思えば、俺は本当に愛されていたんだろう。……………もう、面と向かって『ありがとう』とは言えないがな」

全員「……………」

響「……………で、でもッ! きっと先生のお母さんだって、天国で見守ってくれているはずですよッ! 色んな事を精一杯頑張って、

『自分は大丈夫』だって伝えればいいんですッ！」

克己「……………そうだな。向こうにいるお袋を、安心させてやらな
いとな」

——頑張って、克己

克己（……………ッ！ 今のは……………）

レイカ「どうかしたの？」

克己「……………いや、なんでもない」

——クリスの仏壇——

剛三「俺達の方が必要だからと言われて」

賢「来てはみたが……………」

剛三「なんで仏具店なんだよッ！」

クリス「二課あそこでシンフォギア装者をやってると小遣いが貰えたんだ
よ。お前らだって同じだろ？」

剛三「人類の天敵を相手にしてるんだから当然貰ってるが、それ
もなんでお前がここを選んだのかはわかんねえわ」

賢「でも、なぜ俺達が呼ばれたのかは理解した」

クリス「さつすが賢ッ！ こいつを買うから、お前達に荷物持ちに
なってほしかったんだ」（仏壇を指差しながら）

剛三「となると、仏壇は俺。それ以外は賢が持つ事になるのか」

クリス「おう、頼んだぞ」

必要なものを買ひ、クリスの家へ。

剛三「七回も警察に止められた……………。ま、剥き出しで運んでた
らそりゃ職質されるわな」

賢「こっちは特に問題なかった。小さかったし。それはそうと、な
ぜいきなり仏具店に？」

クリス「……………あたしだけ帰る場所が出来ちゃ、パパとママに申

し訳ねえだろ？」

剛三&賢「……………ッ！」

クリス「仏教徒ってわけじゃねえが、これで二人の冥福を祈れる。

……………ありがとな、二人共」

賢「……………そういう事ならさっさと行ってくれればよかったのに」

剛三「へへっ、そういう事なら、警察に職質された甲斐はあったな」

——知る人ぞ知る呪文——

仕事終わりに某ラーメン店で夕食を取る事にした弦十郎とフィーネ。

弦十郎「……………初めて？」

フィーネ「そ。私、生まれてこの方ラーメンというものを食べた事が無くてね。今の私、年甲斐もなくワクワクしてるわ」

弦十郎「いいのか？ 完全に俺の好みで選んだ店だが……………」

フィーネ「構わないわ。それに、私もこの店に興味があったからね」

そう言つてフィーネは席に座るや否や——

フィーネ「メンカタカラメヤサイダブルニンニクアブラマシマシ」

弦十郎&店員&客「え？」

フィーネ「メンカタカラメヤサイダブルニンニクアブラマシマシ

……………これじゃ駄目かしら？」

店員「いえ……………わ、わかりました……………」

弦十郎「りよ、了子君ッ!? いきなりその注文はどうかと思うぞッ

!?! ましてや初心者のお前がッ！」

フィーネ「でも、ネットには『初心者はこう頼むべし』って書かれてたわよ？」

弦十郎「お前ともあろう奴がそれを信じたか……………。まあ、仕方ないか。もう注文しちまったんだし」

フィーネ「いったいどんなのが来るのかしら。楽しみね」

数分後――

店員「お待たせしました。チャーシューダブル、麺硬辛め野菜ダブルニンニク油増し増しです」

フィーネ「あ、来たようね。これがラー――」

山のように野菜が積み上げられたラーメンが目の前に置かれ、絶句するフィーネ。

弦十郎（ああ……………了子君のキラキラした目がどんどん濁っていく……………）

フィーネ「ラー……………メン？」

弦十郎を見て、目の前のラーメンを指差す。

フィーネ「あの、なにかしら、これ」

弦十郎「チャーシューダブル麺硬辛め野菜ダブルニンニク油増し増しラーメン」

フィーネ「麺は？」

弦十郎「野菜の下に眠ってる」

フィーネ「私の知ってるラーメンと違う……………」

弦十郎「厳密には『太郎丸』っていうものだからな」

フィーネ「ラーメンではないのね……………。……………ま、まあいいわ。予想外すぎたけど、この程度余裕で食べ切ってみせるわッ！」

割り箸を手に、目の前の山に挑むフィーネ。最初は余裕といった様子で食べていた彼女だったが、中盤辺りでギブアップし、残りを弦十郎が平らげたの言うまでもない。

克己「マシンエターナルを改良？」

フィーネ「実はマシンエターナルには、発動したメモリのデータがアメリカ政府に送られるよう細工しててね。正式に仲間になった以上、その機能を解除して、ついでに改良もしようと思ったの。どうかしら、貴方にとっても損な話じゃないでしょ？」

弦十郎「どうしても不安なら、俺が見張りにつこう。君は教師として一日の大半を学院で過ごすだろうからな。どうだ？」

克己「……………いいだろう。ただし、怪しい機能は取りつけないように」

フィーネ「わかってるわよ」

数日後、フィーネに呼び出された克己は、倉庫で生まれ変わったバイクを見る。

全体的なフォルムは変わっていないが、変わったとすれば後部はエターナルローブを意識したのか黒く染め上げられており、蒼炎のグラデーションが増したところだろう。

フィーネ「トゥモルシーカー。外見はちよつと変わった程度だけど、時速はマシンエターナルよりも速い650km。新機能として、発動させたマキシマムドライブに合わせて、構造を変化させるところね。克己君、試しにユニコーンメモリを使ってみなさい」

言われた通りに克己がT2ユニコーンメモリをトゥモルシーカーのマキシマムスロットに挿し込むと、トゥモルシーカーはその外見をバイクから一角獣のものへと変形させた。

克己「これは凄いな……………」

弦十郎「メモリによってはこういった風に外見が変わる事は無いが、ちゃんと発動したメモリに適した能力を使用できるようにする。見張りもつけていたから、怪しい機能は取り付けられていない事は俺

が保障しよう」

克己「……………本当だろうか？」

フィーネ「疑り深いわね、貴方……………。本当に大丈夫だから安心しなさい。あの御方に誓うわ」

しばらくフィーネを訝しげに見つめていた克己だが、やがて疑いの目を向ける事をやめ、彼女に頭を下げる。

克己「……………助かる。これで、より多くの命を救えそうだ」

弦十郎「期待しているぞ、克己君。いや、仮面ライダーエターナルツ
！」

『■■■■』の

燃える 燃える

消える 消える

駆ける 駆ける

怪物が沈む 怪物が消える

女が叫ぶ 女が止める

女が微笑む 殻が潰される

泉が広がる 小さな陸の孤島を創る

消工る 消えル

なゼ、叫ぶ

ナゼ、その名を呼ブ

なぜ？

なぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜ
なぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜ
なぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜ
なぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜ
ゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナ
ゼナゼ？

アあ、教エてクレ

お前たちノ持ツ、
■ ■ ■
ヲ……………

—— 起動実験、開始。

使用記憶^{メモリ}：進化

適合者：ケアン・デイクス

使用端末：ラックドライバー

起動実験、成功。

名称を『コードE』より変更。

終焉^{フイーネ}の所有する兵器にして、ヒトならざる人。

いずれヒトを超越し、天上の存在へと至る戦士。

—— 仮面ライダーイクシード

神威表明星艦フロンティア —— 彼方へ翔ける神
船 ——

終焉の神槍

雷鳴轟く暗闇の中を走る一台の武装列車に、鳥型フライトノイズの群れが襲う。武装列車も迎撃を試みてはいるものの、ノイズ相手に通常兵器が通用するはずも無く、次々と鳥型フライトノイズが列車内に特攻してきては内部を破壊し、人々を炭化させていく。

「きやあッー！」

どこかが破壊されたのか、車両が揺れた影響で友里がバランスを崩す。

だが、彼女が倒れるよりも先にその手を握る男が一人。

「大丈夫か？」

「ええ、ありがとう」

鼓動を刻まない心臓。温もりを感じさせない冷たい体。だが、過去よりも未来を、と足掻く魂を持つ死人。その正体を告げても尚、とある組織にその存在を認められた者達の一人 —— 大道克己に助けられた友里が彼に感謝すると、自分達から少し離れた場所に立つ男に視線を向ける。

「ウエル博士の方は大丈夫ですか？」

「はい、なんとか」

答えたのは、白衣に身を包み、眼鏡をかけた男 —— ジョン・ウエイン・ウエルキングゲトリクス、通称ウエル博士は怯えた様子で辺

りを見渡し、アタツシユケースを抱える腕に力を籠める。

「前方車両に行け。ここよりは安全だろう」

「大変ですッ！」

克己がウエル博士に指示していると、別の車両から数人の男女がやってくる。

「凄い数のノイズが追ってきますッ！」

「連中、明らかにこつちを標的と定めてきやがる」

「あの動き、まるで操られているみたいだ。……………リーダー、命令を」

焦った様子の立花響に、苦虫を噛み潰したような表情の雪音クリス、そして平然とした様子の芦原賢が口々にそう言う。

「本部からの連絡が来るまで、ウエル博士を前方車両に誘導する」

克己を筆頭に、響達はウエル博士を連れて前方車両に移動した。

「——第71チェックポイントの通過を確認。岩国の米軍基地到着は間もなくですが……………」

特異災害対策機動部二課の司令室でオペレーターの藤堯の報告に、弦十郎は顔を顰める。

「こちらとの距離が伸びきった瞬間を狙い撃たれたか……………」

「護衛に賢君とクリスを選んで正解だったわね。二人の射撃能力はあのタイプのノイズに対して有利に働いてくれるわ」

弦十郎の隣に立つフィーネが、モニターに映る鳥型フライトノイズを見て言う。

遠距離に特化したドーパントに変身できる賢と、彼と同じく遠距離特化型のシンフォギアを纏うクリス。彼らの狙撃で上空から襲い来る鳥型フライトノイズを撃ち落とせる。

「でも、やっぱりこれは……………」

「ああ、何者かがソロモンの杖強奪を目論んでいると見て間違いないッ！」

そう弦十郎は、険しい表情でモニターを見据えるのだった。

「……………はい……………はい……………了解しました。迎え撃ちます」

本部からの通信を受けた友里は克己達に頷く。正式に迎撃の許可が下りた事を伝えられた克己達はお互いに頷き合う。

「出番だな、よしッ！」

「いきますッ！」

克己と賢はそれぞれに適合したT2ガイアメモリを取り出し、響とクリスは首元のペンダントを握る。

『エターナル！』

「変身ッ！」

『トリガー！』

「Balwisyall Nescell gunn
ir tron」

「Killter Ichaiival tron」

漆黒のマント——エターナルローブを翻すのは、『永遠』の記憶をその身に宿す仮面の戦士、仮面ライダーエターナル。

右腕と一体化したライフル状のトリガーマグナムの調子確かめるのは、『引き金』の記憶を体現した怪人、トリガードーパント。

右拳を左手に当てて気合を入れているのは、北欧神話の主神オーディンが振るう神槍の一部——ガングニールのシンフォギアを身に纏った響。

両手のクロスボウを確認するのは、北欧神話に登場するウル神が使用したとされるイチイの弓の一部——イチイバルのシンフォギアを身に纏ったクリス。

「こうして列車の上に出てみりや、群れ雀がうじゃうじゃと……」

響が天井に開けた穴から出てきたクリスが、上空の鳥型フライトノイズの群れを見て吐き捨てる。

「どんな敵がどれだけ来ようと、今日まで訓練してきたあのコンビネーションがあればッ！」

「あれはまだ未完成だろ。実戦でいきなりぶつ込もうなんて、おかしな事考えてんじゃねえぞ」

「うん、とっておきたい、とっておきだもんねッ！」

「わかってんなら言わせんな。………背中は預けたからな」
「任せてッ！」

やる気の籠った声で返事し、響は歌を歌い始める。

「——ぎゅっと握った拳 1000パーセントのThunder」

上空から無数の槍が降り注ぐ。クリスのクロスボウとトリガー

ドーパントのトリガーマグナムが上空の鳥型フライトノイズの群れを撃ち落としていく中、彼らの攻撃を掻い潜ってきた鳥型フライトノイズはエターナルと響が迎撃していく。

だが、それで迎撃が完了する程、相手取っているノイズの数は少なくない。次から次へと上空からノイズの群れが襲い掛かってくる。

「チツ……………数が多いつての。空を飛べるエクストライブモードなら、こんな奴らにおたつく事なんてねえのに……………ッ！」

「それが使えない以上、この装備でいくしかない。……………？ あれは……………」

数体の鳥型フライトノイズを撃ち落としたトリガードーパントが、他のノイズとは違う、凄まじい速度で上空を駆けるノイズを見つける。

今まで見た事が無い、新型のノイズだ。

トリガードーパントが見ているものに気付き、「なんだありや」と呟いているクリスに、彼は声をかける。

「クリス、奴を墜とせるか？」

「問題はねえ。いくぞッ！」

蒼い輝きに包まれたクリスの武装が変化する。

外部からのダメージを軽減するマントを広げた、トリガーマモリの力とイチバルギアの融合形態——アズウティラール・イチャバルを身に纏ったクリスは、腰部アーマーから蒼い小型ミサイルを射出する。

だが、新型ノイズは自分を追いかけてくる小型ミサイルをひらりと躲していき、両手のマグナムを変形させたレーザーガンからの光線も躲されてしまう。

「クソッ、すばしっこいなあいつッ！」

「クリスちゃん、賢さんッ！」

響が右腕のバンカーを引っ張り、エターナルは一本のメモリをマキシマムスロットに挿し込む。

「てりやあああああッ！」

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

「オラアッ！」

響とエターナルの拳が巨大な槍に変形した新型ノイズに炸裂するも消滅まで持ち込む事は出来ず、軌道を逸らされた新型ノイズはそのまま上空に逃げてしまう。

「私達の攻撃で倒せないなんて……………」

「まずは奴からいききたいところだが、そうは問屋が卸してくれないか」

固まった彼らを仕留めようと突進してくる鳥型フライトノイズの相手に追われ、エターナルが忌々しげに吐くと、なにかに気付いた響が「あッ！」と声を上げた。

「どうし……………まずいな」

響の視線の先にあったものに気付いたエターナルは思わずそう零してしまう。

彼らに乗っている武装列車は、トンネルに入り始めていた。それだけなら、上空のノイズを相手にしないで済むのだが、問題はそのままでは、彼ら全員が武装列車から叩き落とされてしまうという事だ。

すぐさま響とエターナルは穴を開け、クリスとトリガードーパントと一緒に列車内に入る。

「これは好都合だな。トンネルに入った以上、向こうもトンネルに入らざるを得ない」

「それなら一気に、といきたいところだが、いったいどうすれば……………」

「一気に……………。あつ、そうだツ！」

なにかを思いついた響が手を叩く。

「師匠の戦術マニュアルで見たんだ、敵を一気に倒す方法ツ！」

「おっさんの戦術マニュアルって面白映画だろ？ そんなのが役に立つのかよ……………」

「大丈夫ツ！ さあ、前の車両に行こうツ！」

四人は前の車両に移動し、響に頼まれたエターナルが車両の連結部を破壊する。

「言われた通りにしたが、これでいいのか？ ノイズ相手にあれをぶつけても、効果は無いだろ？」

エターナルは自分達の乗っている列車から少しずつ離れていく車両から響に視線を移す。先史文明を生きた古代人の手によって造り出された兵器であるノイズの位相差障壁の前には、その壁を破壊する特殊な力を持つ者達以外の攻撃は全て無効となってしまう。

「これでいいんです。じゃあ、ちよつと行つてきますツ！」

武装列車がトンネルの出口に差し掛かった頃、車両を透過してきた新型ノイズを前に、響は右腕の武装を変化させ、ブースターを点火。

「いっけええええええツ!!」

高速で突っ込んだ響の攻撃は新型ノイズに直撃し、切り離された車両や、その奥から追って来ていたノイズの大群も巻き込んで大爆発を

起こした。

(閉鎖空間で敵の機動力を封じた上、遮蔽物の向こうから重い一撃……………。こいつ、いつの間こんな事考えて戦えるようになったんだ……………)

以前までとはまるで違う響の姿にクリスは咄然とし、同時に戦慄していた。

「……………ここまでありがとうございます」

響の起点を活かした行動によってノイズの妨害を潜り抜けた後は順調に事は進み、犠牲は出たものの無事に護衛対象を目的地に送り届けた克己達に、ウエル博士は感謝の言葉を述べる。

「確かめさせていただきましたよ。皆さんがルナアタックの英雄と呼ばれる事が伊達ではないとね」

「英雄ッ!? 私達が?」

予想もしなかった言葉に、響は頭を掻いて照れる。

「いや、普段誰も褒めてくれないので、もつと遠慮なく褒めてください。むしろ褒めちぎってあいたッ!」

「そういうところが褒められないんだよ、この馬鹿ッ!」

「痛いよ、クリスちゃん……………」

クリスに叩かれた頭を押さえて痛がる響や、その隣に立つ克己達を見渡してウエル博士は口を開く。

「世界がこんな状況だからこそ、僕達は英雄を求めている。そう、誰か

らも信奉される、偉大なる英雄の姿をッ！」

大声で言うウエル博士の姿に、克己と賢、友里の三人が目を細めた事に気付かぬまま、彼は続ける。

「皆さんが護ってくれたソロモンの杖は、僕が必ず役立ててみせます」

「よろしくお願いします」

「……………頼んだからな」

「ええ、もちろん。それでは皆さん、さようなら」

こちらに手を振って、ウエル博士は黒服達と共に去っていく。

「無事に任務も完了だ。これなら……………」

笑顔のクリスに、響も笑顔で頷く。

「この時間なら翼さんのステージにも間に合いそうッ！」

「みんな頑張ってくれたから、司令が東京までへりを出してくれるみたいよ」

「マジっすかッ!？」

「それなら早く行こうぜ」

弦十郎が手配してくれたへりに乗るべく歩き出したが、直後に出現したノイズの対処に追われる事になってしまうのだった。

「~~~~~♪~~~~~♪」

場所は響達がこれから向かうライブ会場。大勢のスタッフ達の手によって着々とライブの準備が進められていく様子を眺めながら、マリア・カデンツァヴァナ・イヴは鼻歌を歌っていた。

「なぜ歌う、マリア・カデンツァヴナ・イヴ」

投げかけられた問いに、鼻歌を中断したマリアの視線が動く。

「どういう事かしら、ケアン」

質問を返したマリアに、彼女の隣に立つ男————ケアン・デイクスは答える。

『無駄な事だ』と言いたいのだ。お前の歌は、万人を楽しませるものではない」

「……………ッ！」

彼をぶん殴りたいという衝動をなんとか抑え込む。遠慮を知らないこの男は、常人であればまず言わない事を平然と口にする。

「それでも、私は歌うわよ」

「不可解だ。それが人間、というものなのだろうが」

「貴方が人間のなんたるかを知るなんて、不可能だろうけどね」

「私はこれでも、『人間』というものを知りたいのだが」

「信じられないわね、貴方が言う尚更」

「人としての私は信用に足らなくて結構。お前達はただ、私という道具を欲望のまま活用してくれるだけで構わない。お前達が望むのなら……………」

各々の作業に追われているスタッフ達を、欠片程の人間性も感じさせない冷たい目で見下ろすケアン。

「この場にいる者達を、一人残らず排除しよう」

どこまでも冷徹に、氷のようにどこまで冷たく言い放つケアンに、
マリアは体を震わせた。

温情など一欠片も無く、一度命じればその命令を遂行すべく、彼は
懐に忍ばせた力を使うだろう。それこそ、どこまでも無情に、冷酷に。
まるで作業をするかのように、顔色一つ変える事無く。

「やめなさい。私達は極力他人を巻き込まないように行動して、目的
を果たすの」

その時、ポケットに入れていた携帯に通信が入り、マリアは応答す
る。

『こちらの準備は完了。サクリストSが到着次第、始められる手筈で
す』

「ぐずぐずしている時間は無いわけね」

立ち上がり、マリアは通話相手に告げる。

「オーケー、ママ。世界最後のステージの幕を上げましょう」

『ママ』と呼ばれた女性との通信を切り、マリアはケアンを見やる。

「向こうの準備は整ったわ。私達も準備しましょう」

「了解」

頷いたケアンを連れ、マリアは楽屋に向かうのだった。

——日が暮れた頃、ステージ上を華麗に舞う翼とマリアの
姿に、観客達は喝采の声を上げる。

今夜行われているのは、世界のトップアーティストである風鳴翼と

マリア・カデンツアヴナ・イヴのユニットライブ。今はその目玉である二人によるデュエットソング、『不死鳥のフランメ』が会場全体に響き渡っている。

ライブの演出として周りに火球を出現させ、互いと競い合うように熱唱する二人の歌姫に、観客達はあつという間に彼女達の世界に引き込まれてしまう。

観客達も巻き込んで歌う二人がステージの中心で、紅蓮の不死鳥が映し出されたモニターを背景にポーズを決めたのを最後に、今回のユニットライブのメインイベントは幕を下ろした。

「ありがとう、みんなッ！」

自分達に喝采を送る観客達に、翼は汗だくになりながらも感謝の言葉を叫ぶ。

「私は、いつもみんなから、たくさんの勇気を分けてもらっているッ！だから今日は、私の歌を聴いてくれる人達に、少しでも勇気を分けてあげられたらと思っっているッ！」

観客達の拍手が会場を埋め尽くし、マリアが前に出る。

「私の歌を全部、世界にくれてあげるッ！ 振り返らない、全力疾走だ。ついてこれる奴だけついてこいッ！」

その場にいる全員が叫ぶ。どこまでもついていくと、マリアに答えている。

「今日のライブに参加出来た事を感謝している。そして、この大舞台に日本のトップアーティスト、風鳴翼とユニットを組み、歌えた事をッ！」

「私も、素晴らしいアーティストに巡り合えた事を光栄に思う」

笑顔で見つめてくるマリアに、翼も笑顔で返す。

「私達が世界に伝えていかなきゃね、歌には力があるって事を
……………」

「それは、世界を変えていける力だ」

「そして、もう一つ……………」

マリアが観客達を見渡す。が、先程までとはどこか雰囲気が違う。
それに彼女の隣に立つ翼や、ステージ裏で彼女達のライブを眺めてい
た、克己と賢を除いたNEVERの三人が気付いた瞬間――

――会場全体に、ノイズが現れた。

「――ノイズの出現反応多数ッ！ 場所はQUEENS
f MUSICの会場ッ！」

「なんだとッ!？」

張り詰めた声の藤堯の報告に弦十郎とフィーネが目を見開く。

「宝物庫の扉が偶然会場で開いた……………？ あんな的確なタイミン
グで……………？ ……………まさか」

一つの可能性に気付いたフィーネがスマホを取り出し、ある人物に
電話する。

『なんだ、フィーネ』

「クリス、ウエルがどこに行ったか知ってる？」

『……………』

通話相手のクリスが一瞬黙り込み、答える。

『あたし達と別れた後、いきなりノイズが現れたんだ。それ以降、杖共々行方不明になっちまった……………。無事であればいいんだが……………』

「……………彼は無事よ。ソロモンの杖もね。丁度さつき、それがわかったの」

『本当かッ!?!』

「ええ、だけど……………」

モニターに表示される、会場に出現したノイズの映像を見つめる。

「最悪な形でね」

そう告げたフィーネは無意識に、スマホを握る手に力を籠めていた。

——先程までの幸せに満ちた世界はどこへやら、会場は恐怖と絶望の悲鳴で埋め尽くされる。

自分達を囲むノイズから少しでも距離を取ろうと他人を押し退け始める観客達の耳に、鋭い声が響く。

「——狼狽えるなッ!」

その声を上げたのは、マリア。誰もが彼女の言葉によってその動きを止め、視線を彼女に注ぐ。

「そう、大人しくしている限りは、ノイズにも手出しはさせないわ。……………風鳴翼さん、貴女もよ」

「……………マリア・カデンツァヴナ・イヴ、貴様はいつたい……………?」

「……………そうね。そろそろ頃合いかしら」

翼、観客達、そして、このライブをネット配信で観ている者達に向け、マリアは叫ぶ。

「私達は、ノイズを操る力を以てして、この星の全ての国家に要求するッー！」

「世界を敵に回しての口上？ これはまるで……………」

宣戦布告のようだ。そう思った翼の前で、「そして……………」とマリアはマイクを口元に寄せ――

「Granzizel bilfen gungnir
zizzi」

――聖詠を歌った。

(……………ッ!? その、聖詠は……………)

驚愕する翼の前で、マリアを眩い輝きが包み込む。

「私は……………私達は『フイーネ』」

漆黒のマントを翻し、黒く染め上げられた武装を身に纏ったマリア。彼女が纏うのは、外見こそ所々違うものの、見る者が見れば誰もがわかるもの。

それは北欧の主神が振るう、勝利の神槍――ガングニール。

響のそれとは違う武装に身を包んだマリアは、高らかに宣言する。

「終焉おわりの名を持つ者だッー！」

——彼女の宣言を皮切りに、歯車は回り始める。

——それはまさに、『終焉』へのカウントダウン。

——ここに、世界の滅亡を賭けた戦いは、幕を開けた。

イクシード、起動（アクティブ）

「ガングニールだとツ!？」

照合されたアウフヴァツヘン波形のパターンから、マリアがなにを纏ったのかを知った弦十郎が驚愕の声を上げると同時に、二課に通信が入る。

『随分とまた、とんでもない事になってるようだな』

「斯波田事務次官ッ!」

二課に通信を入れてきたのは、日本国外務省事務次官を務める斯波田賢仁。彼は複雑な世界情勢を相手に日本の国益とシンフォギア・システムを始めとした国家機密を護るべく奔走してくれている、頼もしい男だ。

彼は大好物の蕎麦を啜りながら弦十郎に報告する。

『実は米国の聖遺物研究機関でもトラブルがあつたらしい』

「F・I・Sね……………。ああ、これ完全に私の責任じゃない……………」

「どういう事だ?」

F・I・Sの存在は弦十郎も知っている。聖遺物を個人の能力に左右される『歌による起動』より、合理に則った機械的な安定起動方法に時間と予算の多くを割いてきた組織である。だが、弦十郎が知っているとすればそれぐらいの事で、なぜファイネが今回の騒動を自分の責任と捉えているのかは理解出来なかった。

「実はあれ、私が米国通謀を切っ掛けに発足した機関でね。あそこには今の私が道半ばで死亡した際の保険として、次の私の器となる子ども

も達がいたの。『レセプターチルドレン』、私達は彼らをそう呼んでいたわ。黒いガングニールを纏ったあの子、マリアもその一人よ」

弦十郎に説明し、フィーネは斯波田を見る。

「彼女がこうして行動を起こしたという事は、F・I・S……………米
国が遂に動き出したという事かしら？」

『ところが、そうでもないらしい』

「え？」

『なんでも、今日まで解析してきたデータのほとんどがお釈迦になっ
たばかりか、保管していた聖遺物までも行方不明って話だ。そんな状
況で世界を敵に回そうなんて、愚の骨頂だろ？』

「動いているのはF・I・Sではなく、そこから抜け出た者達という
事？」

『そこらへんが妥当だろうな』

『『フィーネ』……………。いったいなにが目的なんだ……………？』

モニターに映るマリアを見つめ、弦十郎は拳を握り締めた。

「——我ら武装集団『フィーネ』は、各国政府に対して要求す
る。そうだな……………差し当たっては国土の割譲を求めようか？」

周囲が静まり返る中、黒いガングニールを纏ったマリアは、世界中
の人々に向けて告げる。

「もしも、24時間以内にこちらの要求が果たされない場合は、各国の
首都機能がノイズによって不全となるだろう」

「……………どこまで本気なのか」

観客達をノイズから護る為、今すぐにも天羽々斬を纏いたいとこ

ろだが、シンフォギアは国家機密事項。こんな大衆の前で装着するわけにはいかないし、もし装着できたとしても、人質にされた観客達の命が危険に晒されてしまう。

身動きが取れない事に憤りを感じている翼の目の前で、マリアは言葉が続ける。

「私が王道を敷き、私達が住まう為の楽土だ。素晴らしいと思わないか？」

「なにを意図としての驕りかは知らぬが……………」

「私が驕りだと？」

「そうだッ！ ガングニールのシンフォギアは貴様のような輩に纏えるものではないと覚えろッ！」

胸に湧き上がる怒りを少しも隠す事無く非難する翼に、マリアはフツと笑って返す。

「ならば、貴女も纏ってはどうか？ その怒りのまま、剣を振るえばいい。尤も、この数相手にそれが出来ればの話だがな」

「く……………ッ！」

状況が状況なら、言われるまでも無いと即座にシンフォギアを纏って斬りかかっているとところだが、大勢の目がある中、機密事項であるシンフォギアを纏うわけにはいかない。

「そう、なら……………」

周囲の目が原因でシンフォギアを纏えずにいる翼を横目に、マリアはノイズに囲まれて怯えている観客達を見渡して告げる。

「会場のオーデイエンスを解放するッ！ ノイズに手出しはさせない。速やかにお引き取り願おうかッ！」

「な……………ッ!？」

彼女の普通ではありえない言葉に翼が唾然としていると、マリアに通信が入る。

『なにが狙いですか……………こちらの優位性を放棄するなど、筋書きには無かったはずです。説明してもらえますか?』

呆れた様子で話すのは、ナスターシャ・セルゲイヴナ・トルスタヤ。マリアの所属する武装集団『フィーネ』の事実上のトップである。

彼女はこのライブ会場から離れた場所に停めた車両からマリアの様子を窺っていたのだが、今回の作戦には無かった行動を起こされたため、こうして通信してきたのである。

「このステージの主演は私。人質なんて、私の趣味じゃないわ」

『血に汚れる事を怖れないでッ!』

「……………」

マリアが目を伏せると、ナスターシャが溜息を吐くのが聞こえた。

『……………仕方ありません。調と切歌を向かわせています。作戦目的をはき違えない範囲でおやりなさい』

「……………了解、ママ。ありがとう」

『それと……………』

このまま通信が終わるかと思ったマリアに、ナスターシャが続けた。

『二課所属の仮面ライダーやドーパントが出現した場合は、ケアンに対処させなさい。今回の作戦は、彼の学習も含まれているのですから』

「……………ええ、わかってるわ」

ナスターシャとの通信を終え、マリアは無意識に肺に溜めた息を吐いた。

——マリアの一言によって始まった避難は順調に進み、自分達を挟むように立ちながらも微動だにしないノイズに怯えながらも次々と人々が会場から出ていく。

「緒川ちゃんッ！」

そして、ここはマリアと翼が立っているステージの裏。そこでは翼のマネージャーとして来ていた緒川に、もしも場合として護衛に來ていた、レイカと剛三を連れた京水が声をかけていた。

「翼ちゃんが出られないなら、ワタシ達が出るわよ？」

「翼と違って、私達はドーパントになっても顔バレする事無いし」

「ですが、その間に彼女が避難している人達を攻撃させたりするかも……………」

それに対し、「俺なりの考えだけどよ」と剛三が答える。

「あの女……………マリアって言ったか？ あの一言でなんとなく察したけどよ、あいつ人殺しに向いてねえよ。命を奪う事に対して消極的すぎる」

「ああいうのは非道に徹しきれないタイプよ。だから大丈夫」

「緒川ちゃんはこのまま、翼ちゃんがシンフォギアを纏えるように準備して頂戴。それまでの時間、ワタシ達が稼いであげる」

「……………任せましたよ」

三人が頷き、懐からそれぞれに適合したT2ガイアメモリを取り出す。

『ルナー!』

『ヒート!』

『メタル!』

京水は額から、レイカは左の鎖骨から、剛三は背中からT2ガイアメモリを体内に挿入し、その姿を異形のものへと変貌させていく。

伸縮自在の腕を持つルナードーパント、高熱を操るヒートドーパント、鋼鉄の肉体を持つメタルドーパントがステージに上がり、マリアの視線が三体に向く。

「来たわね、ドーパント」

「へえ、私達の事を知ってるの?」

シンフォギアと同様、仮面ライダーやドーパントの存在も世間には公表されていない。地球の記憶を自在に操れる彼らの存在が世間に知られてしまえば、その力を求めて邪悪な目的を持った者達が接触してくる可能性があるからだ。それなのに、なぜ彼女は自分達の事を知っているのか。

「こつちにも、ガイアメモリを使う奴がいるのよ」

「なんですって?」

「出番よ、ケアン」

その言葉を待っていたかのように、マリアと翼の背後の舞台袖から、一人の青年が出てくる。

人間性を感じさせない、あらゆる事に対して無関心であるような表情。光を宿さないその瞳で見られた三体は、『不気味』だと感じざるを得なかった。

そして、その腰に巻かれているのは、ロストドライバーと酷似した白いドライバー。

「まさか……………ッ!？」

「そう、そのまさかよ」

マリアの前に立ち、ケアンは懐から一本のメモリを取り出す。

なにかに手を伸ばすロゴデザイン、『E』のガイアメモリ。三体が見た事の無いガイアメモリ。

『イクシードー!』

「変身」

冷たく言い放ち、スロットにイクシードメモリを挿し込み、展開する。

『Exceed Active』

スロットからイクシードメモリのロゴが浮かび出て、次第に加速していく音と共に、ケアンの全身を鎧が形成されていく。

銀色の素体に黒い鎧が纏い、変身の際に一瞬だけ見えた複眼の上から取り付けられた漆黒のバイザーの奥に二つの紅の光が宿り、最後に黒い鎧——リフューズプロテクターから蒸気が噴出される事によって、変身は終了する。

自分達のリーダーが変身するものとも、風の都を護る彼らが変身するものとも違う、新たな仮面ライダー。

「紹介するわ。彼こそが『フイーネ』が有するガイアメモリの戦士……………仮面ライダーイクシードよ」

身構える三体に対し、イクシードは自然体のまま、金属質なエコー

のかかった声で遠くの車両でこちらの様子を窺っているナスターシャに通信を取る。

「ママ、^{オーダー}命令を」

『決まっています。敵対する者達を排除なさい』

「了解。これより、状況を開始する」

「……………ッ!？」

咄嗟にメタルドーパントが腕を交差させた瞬間、凄まじい衝撃が全身に走る。交差させた両腕には、イクシードの拳が当てられていた。

(速え……………ッ!)

交差させていた両腕を勢いよく広げたメタルドーパントから離れたイクシードが右腕を上げた直後、ヒートドーパントの右足が右腕に叩き込まれる。火炎をブースター代わりに使用する事で威力を上げた蹴りを受けてバランスを崩したイクシードが続けて繰り出された蹴りを受けて後ずさると、ルナドーパントの腕が彼を捕らえる。

「ぶっ飛びいくッ!」

人がいなくなった観客席に投げ飛ばされたイクシードが跳ね起き、ヒートドーパントの踵落としを躲すも、メタルドーパントの鉤爪の先端が鎧を掠めて火花を散らす。

「む……………」

「ハッ、案外脆いんだなッ! だったらこのままぶっ潰してやるぜッ!」

微動だにしないノイズを蹴散らしながら迫るメタルドーパントの槌とヒートドーパントの足を捌いていくイクシードに、ナスターシャ

からの通信が入る。

『ケアン、例のメモリを使いなさい。貴方の恐ろしさを知らしめるのです』

「了解」

二体から離れ、遠くからのルナドーパントの攻撃も躲したイクシードが、一本のメモリを取り出す。そのメモリのロゴを見たドーパント達が驚愕する前で、イクシードはそのメモリを起動する。

『ゾーンー！』

二課が搜索しても遂に発見出来なかったT2ゾーンメモリをマキシマムスロットに挿し込むのかと思つて身構える三体の前で、イクシードはT2ゾーンメモリを――

――胸に押し当て、取り込んだ。

「嘘ッ!？」

「マジかよ……………」

予想もしなかった行動に啞然とする彼らの前でT2ゾーンメモリを取り込んだイクシードは右手を握つたり開いたりして体の調子を確かめる。

『「地帯」の能力を獲得。反撃を開始する』

ヒートドーパントが吹っ飛び、観客席を破壊する。先程まで彼女がいた場所には、拳を振り終えたイクシードの姿。メタルドーパントが飛び退こうと足に力を籠めかけた瞬間、目の前にいたはずのイクシードの姿が消え、突然首を掴まれて投げ飛ばされた。

「剛三ちやがあッ!？」

メタルドーパントを受け止めようと両腕を伸ばしかけたルナドーパントの懐に潜っていたイクシードの拳が腹部に捻じ込まれ、ステージのモニターに叩き付けられた。

「この野郎ッ！」

誤って翼を吹き飛ばさないように槌を捨てて鉤爪で攻撃を仕掛ける。次々と繰り出される攻撃をひらりと躲していくイクシードが反撃として拳を突き出してくるも、即座に右手を前に出して受け止め、お返しとして鉤爪でイクシードを斬りつけた。

先程よりも手応えのある一撃。さぞダメージを与えられただろうと思っただが――

「なに……………ッ!？」

――彼の鎧には、傷一つついていなかった。

「――ククク、目に見えて驚いていますね」

モニターからイクシードの戦いを見ていた男――少し前まで克己達に護衛されていたウエルに、「当然です」と返すナスターシャ。

「ケアンが使用するT3イクシードメモリの能力は、『戦闘による身体能力・外装の強化』と『他メモリの能力の獲得による強化』。彼らとの戦闘は、ケアンをより強力にさせてくれることでしょう」

人類は太古の昔から強大な存在を相手に挑み、知恵を絞って打ち勝ってきた。そうしている間に、自然と人類は身を護る術を身につけていった。自らの力のみで達成出来ない物事は、他のものに代用させる事で達成してきた。

そうして積み上げられてきた人類の進化の歴史。それを内包したのが、T3イクシードメモリなのである。

「——堂本ッ！」

殴り飛ばされてきたメタルドーパントに駆け寄った翼がペンダントを握り締め、シンフォギアを身に纏おうとするが、それをメタルドーパントが止める。

「駄目だ……………。それを纏うんじやねえッ！」

「仲間がやられているのを見ているだけでも言うのかッ！ そんなの、私には出来ない」

「あら、誰が『貴女は標的じゃない』と言ったかしら？」
「……………ッ！」

マリアに彼女のアームドギアである槍の矛先を向けられ、翼が身構える。

「観客は皆退去した。もう被害者が出る事は無い。それでも私と戦えないのであれば、それは貴女の保身の為。貴女はその程度の覚悟しか出来てないのかしら？」

「く……………ッ！」

「行くわよッ！」

マリアが槍を手に襲い掛かってくる。メタルドーパントが彼女の前に立ちはだかろうとするが、イクシードに邪魔されてしまう。

転がって自分を刺し貫こうとした矛先を躲し、続けて突き出される槍を紙一重で受け流す。

「ふッー！」

「く……………ッ！ はぁッ！」

回し蹴りを躲した翼が剣を横したマイクを振るうと、マリアはマントでそれを防御した。

(……………ッ!? 硬いッ！)

マントに防がれ、衝撃に耐え切れずに砕けた手元のマイクを見る翼に、余裕に満ちた表情のマリアが迫る。

「その程度? ふッー！」

「ぐ……………ッ！」

マントを翻し、コマのように回転しながら迫ってくるマリアから距離を取りながら、翼は少しずつ舞台袖に近付いていく。

翼が立つステージが世間の目に晒されているから、翼はシンフォギアを纏えない。だが、逆に言えばそれは、目が届かない舞台袖に入っ
てしまえばシンフォギアを纏えるという事だ。

シンフォギアを纏う事が出来れば、この防戦一方の状況も打開できる。そう思った矢先――

「貴女はまだ、ステージを降りる事を許されない」

マリアの投げた槍が翼の足元に突き刺さる。翼の意識がそちらに向いた隙を突き、マリアに肉薄される。

「それでも降りたいのなら、私が降ろしてあげましょう」

「ぐ……………があッ！」

咄嗟に体を後ろに逸らして回し蹴りのダメージを軽減するも、殺し切れなかった衝撃に押されて観客席に投げ出される。

その瞬間、今まで石像のように動かなかったノイズが一斉に、翼を排除しようと動き始めた。

「……………ッ!? 勝手な事をッ！」

作戦に含まれていない行動に驚くマリアの前で、ノイズが翼に群がっていく。

(決別だ……………歌女であった私……………)

このまま落ちれば、ノイズに炭化させられる。『死にたいか』と問われれば、答えは当然『ノー』である。だが、ここでシンフォギアを纏えば、世界に自分の正体が知られてしまう。それからはもう、歌姫風鳴翼は二度とステージに上がれない。

(だからとて、このままやられるわけにはいかないッ！)

覚悟は決まった。名残惜しいが、歌姫である自分に別れを告げる時が来た。

「聴くがいい、防人の歌をッ！」

「……………ええッ!? どうしてここで中継が中断しちゃうのッ!? 翼さんはどうなったのッ!?」

ヘリの中で翼達の様子を見ていた響が頭を抱える。中継は翼がノ

イズの群れに投げ出されたところで途絶えてしまっており、その後の翼の安否が不安で堪らない響の隣に座る友里が顎に手を当てる。

「現場からの中継が遮断された……………?」

「という事は、つまり……………」

クリスの表情が微かな不安はあれど明るなものになり、克己と賢が頷き合う。

その場にいた誰もが気付く中、取り残された響だけが困惑していた。

「Imyuteus amenohabakiritron」

蒼い風が吹き荒れ、ノイズが切り刻まれる。

黒い桜の中心で、刀状のアームドギアを構えて立つのは、青白の装甲に身を包む少女。

「中継が遮断された……………ッ!?!」

ノイズを斬り捨てていく翼が纏っているのは、間違いなくシンフォギア。しかしそれを纏うには、世間の目から逃れなければならない。その状況を利用して翼を追い詰めようとしていたのだが、その為に必要な中継が遮断されてしまえば元も子もない。

「翼さん、中継は遮断しましたッ! 思う存分戦ってくださいッ!」

「緒川さん、ありがとうございます」

舞台袖から叫ぶ緒川に頷き、マリアに切っ先を向ける。

「待たせたな。いぎ、推して参るッ！」

「それが本当の貴女ね。いいわ、確かめてあげるッ！」

マリアの槍と翼の刀が交差する。

突き出された矛先を刃で受け流し、回転力を加えた一撃を繰り出すも、マントで防がれる。

「やあッ！」

「くッ!? この GANG ニールは、本物ッ!?」

振るわれた槍を受け止めた刀を持つ両手に走る痛みにも、マリアの振るう武器が真に GANG ニールであると理解する。

「ようやくお墨付きを貰えた。そう、これが私の GANG ニール。何物をも貫き通す、無双の一振りッ！」

「だからとて、私が引き下がる道理などありはしないッ！」

得物を構えた両者が刃を交えるべく走り出した一方、三体のドーパントはイクシードに苦戦を強いられていた。

「チッ！こいつ、どんどん堅くなってるわねッ！」

超高熱の炎を纏った蹴撃を受けたイクシードの体勢が一瞬崩れるも、それは一步足を前に出せばすぐに立て直せるもので、決して明確な隙などでは無い。

今は軽くバランスを崩すだけだが、このまま攻撃を加えていけば、彼を覆う鎧はより強固なものとなり、先程の攻撃を受けてもバランスを崩さなくなるだろう。頑丈さに関しては、既にメタルドーパントと同等、いや、それ以上になっているかもしれない。

長期戦になればなる程装甲が強化されていくに加えて、T2ゾーンメモリを取り込んだ事によって獲得した瞬間移動能力も備えている

イクシードに戦慄していると、マリアとイクシードにナスターシャからの通信が入った。

『二人共、お聞きなさい。フォニックゲインは現在22%付近をマークしています』

「なんですってッ!？」

「これは予想外だ」

マリアが目に見えて驚き、イクシードはマリア程ではないものの、戸惑いが含まれている声を上げた隙を突いて、マリアに翼が、イクシードにメタルドーパントが迫る。

「私を相手に気を取られるとはッ!」

二本の刀を連結させ、回転させた刀身に紅蓮の炎を纏わせて斬りつける一撃——『風輪火斬』を受けたマリアがその場に倒れ伏す。

それと同時に、三体の中で最もパワーに優れるメタルドーパントの渾身の一撃が炸裂し、イクシードが吹っ飛ばされる。

「損傷を確認。戦闘継続に支障無し」

つい痛みを感じていないのかと思ってしまいう程無機質な一言を零したイクシードが、なにかに気付いてステージを見る。

彼が見ているのは、起き上がろうとしているマリアに攻撃を仕掛けようとする翼。

———否、彼女の背後から攻撃を仕掛けようとしている、二人の少女。

「翼ちゃん、避けてッ!」

「……………ッ!？」

そして聞こえてくるのは、静かな口調で紡がれる歌。

「——首を傾げて 指からするり 落ちてく愛をみたの」

自分目掛けて飛んでくる複数のなにかを躲す。床に当たって碎けるのは、小型の丸鋸。

見上げた翼の視界に入ったのは、ピンク色のヘッドギアを展開した少女。

「な……………ッ!? 装者の援軍だとッ!？」

「調だけじゃないデスよッ!」

視線を下げれば、金髪の少女がその可愛らしい顔に似合わぬ鎌を振るってきていた。

「危ないッ!」

両足から炎を噴出させたヒートドーナパントが翼を抱えて上空に逃げた事によって間一髪鎌の一撃を躲し、攻撃を外した金髪の少女——
——暁切歌が肩を竦める。

「仕留められなかったデスッ!」

「ドンマイ、切ちゃん。次があるよ」

翼に丸鋸を飛ばしてきた黒髪の少女——月読調が切歌の隣に降り立ち、背後のマリアを見る。

「マリア、助けに来たよ」

「助かったわ。ま、貴女達に救われなくても、彼女に後れを取る私では

ないんだけど」

「それが『強がり』というものか、マリア？」

「黙りなさい、ケアン」

「辛辣な対応だ。だが、その在り方を望むのなら、私はそうしよう」

了解の意を示すイクシードだが、彼らの会話を聞いていた切歌がマリアのマントの裾を引つ張る。

「だ、駄目デスよ、マリア。夜中、あいつが暗い機内で無言のまま立ってたら、怖くてトイレにも行けないデスよッ！」

「切ちゃん、そういう時は人形だとても思えばいいんじゃない？」

「目の前を通ったらガン見してくる相手を人形と思ったら尚更怖いデスよッ!? しかも、『トイレに行く』って言ったら扉の前までついてくるんデスよッ!? 無言でッ! 無表情でッ!」

「ケアン……………」

ジツと調に睨みつけられるも、イクシードはいつもと変わらない口調で返す。

「『フィーネ』のメンバーの護衛も、ママに与えられた命令オーダーの一つ。万が一の事があれば、道具わたしの価値が無くなる」

「だからって同行するのはどうかと思う」

「そういうものなのか?」

「そういうものよ」

「人間とは不可思議な生き物だ。オスメスの違いがここまで出るとは」

頭を抱える仕草を見せるイクシードだが、全く人間性を感じさせない彼がそれをする、どうしてもわざとらしく思えてしまう。

調と切歌の参戦で互いは人数は同数となったが、イクシードの能力を含めて考えると、むしろ状況は悪化してしまっている。

「貴様みたいのはそうやって……………」

だが、それは今のままであった場合の話。

忘れてはならない。『フイーネ』に仮面ライダーがいるように、二課こちらにも仮面ライダーがいる事を。

「見下ろしてばかりだから、勝利を見落とすッ！」

「……………ッ！ 上かッ!?!」

「土砂降りなッ！ 十億連発ッ！」

上空から降り注ぐ弾丸と光弾。マリアが調や切歌と一緒にマントで身を護りながら見上げると、イチイバルのシンフォギアを纏ったクリスとトリガード。パントが見え、その背後にはガングニールを纏った響の姿もあった。

イクシードが上空から重力に引き寄せられて落ちてくる彼らを叩き落とそうと跳び上がるも、自らの頭上から迫る蒼い炎に気付いて即座に防御態勢を取る。

「オラアッ！」

エターナルの拳が直撃し、衝撃に押されたイクシードが観客席に叩き落とされる。同時にステージに降り立った響がマリアに攻撃を仕掛け始める。

「待たせたな、お前達」

「克己ちゃんッ！」

「まったく、待たせ過ぎなのよ」

「待ってたぜ、克己ッ！」

頷き、起き上がったイクシードにエターナルエッジを向ける。

「俺の部下が世話になったな。礼はこの俺自らくれてやる」

「身体機能を確認。戦闘続行に支障無しと判断。戦闘を再開する」

エターナルとイクシード。二人の『E』が同時に動き出す。

突き出される拳を躲してイクシードの背後に回ったエターナルが刃で彼の鎧を斬りつけるが、微かな火花が散ったのみで、一瞬の怯みも無くイクシードが肘打ちを繰り返す。飛び退いたエターナルが肘打ちと同時に振り向いたイクシードに斬りかかるようにするも、イクシードの姿が一瞬にして消える。どこに消えたのかと視線を彷徨わせかけた瞬間、背後に気配を感じてエターナルが伏せると、彼の頭上をイクシードの右足が通り過ぎていく。

立ち上がったエターナルにエターナルエツジで連続で斬りつけられ、火花を散らしながら後退していくイクシード。最後にエターナルの回し蹴りで蹴り飛ばされるも、空中でバランスを立て直して着地したイクシードが跳び蹴りを繰り返してくる。

『ユニコーン・マキシマムドライブ!』

「ウラアッ!」

スロットにT2ユニコーンメモリを挿し込んだエターナルエツジを振るうと、そこからイクシードを切り裂こうと蒼い斬撃が飛び出す。エターナルは斬撃がそのままイクシードに直撃すると思ったがしかし、その寸前にイクシードの姿が消える。

「ぐう……………ッ!」

側面からの跳び蹴りによって、エターナルがステージまで蹴り飛ばされてくる。

「大道ッ!」

「大丈夫だ……………」

エターナルが立ち上がり、イクシードがマリア達の元に瞬間移動して来たところで、彼らが対峙する。

特異災害対策機動部二課に所属する装者や仮面ライダーとドールパントに、武装集団『フイーネ』に所属する装者と仮面ライダー。

対峙した彼らは今にも再び戦いを再開しそうな雰囲気纏っていたが――

「やめようよ、こんな戦いッ！ 今日出会った私達が争う理由なんて無いよッ！」

この状況に抵抗感を抱いていた響が、彼らの戦いを止めようと声を上げた。

本人は本気でこの不毛な争いをやめたいと思ってそう言ったのだろうが、それは『フイーネ』の装者達の怒りを呼び覚ます言葉であった。

「そんな綺麗事を……………口にするなッ！」

「え……………？」

「綺麗事で戦う奴の言う事なんか、信じられるものかデスッ！」

調と切歌の怒号に唾然とした響は、それでもと自分の考えを告げる。

「そんな……………話し合えばわかり合えるよッ！ 戦う必要なんか……………」

無い、と言いかけた響の口は、調の一言によってその動きを止める。

「偽善者」

「……………ッ！」

「この世界には、貴女のような偽善者が多すぎるッ！」

「なに固まってんだ、響ッ！」

呆然と立ち竦む響に飛ばされた丸鋸を、メタルドーパントが全て受け切る。イクシードには苦戦したが、小型の丸鋸ならそれなりの数で攻撃されても、彼の鋼鉄の体の前には儂く碎け散る。

「やりやがったなッ！」

「調はやらせないデスッ！」

調にクロスボウを向けたクリスに切歌が鎌を振り上げるが、トリガードーパントの光弾が迫ってきたので飛び退く。

「戦闘続行。敵集団を排除する」

「悪いが、お前の相手は俺達だ」

動き出したイクシードに、エターナル、ヒートドーパント、ルナドーパントが迎撃に動く。

「さあ、私達も続きを始めましょうかッ！」

「いいだろう、貴様の相手は私だッ！」

周囲で次々と戦いが起きる中、響は調に叫ぶ。

「そんな……………どうしてッ！ こんな戦い、意味が無いよッ！」

「まだそんな事をッ！」

頭のヘッドギアを鋸に変化させた調の攻撃を躲しながら、響は訴え続ける。

「私は困ってるみんなを助けたいだけで、だからッ！」

「それこそが偽善」

「……………ッ！」

しかし、響の必死の訴えも、その一言で片付けられてしまう。

「痛みを知らない貴女に、『誰かの為に』なんて言ってほしくないッ！」
「あ……………」

鋭利な刃が生えそろった鋸が迫ってくる。調の一言で固まってしまった響が呆然とそれを見つめていると――

『アクセル・マキシマムドライブ！』

メタルドーパントに自分の代わりにヒートドーパントとルナドーパントと共にイクシードを抑えるよう指示してきたエターナルが、凄まじい速度で響を抱えて鋸を躲した。

「克己先生……………」

「惚けるな。ここは戦場だぞ」

「でも……………」

襲い来る丸鋸を掻い潜っていくエターナルに、響が弱々しい声で訊ねる。

「克己先生は、この戦いに意味があると思いますか？」

『「人はわかり合えるから」。そういうった感情で止めに入るのは、別に悪い事じゃない。相手がどんな奴であろうと、人間である限りは手を取り合おうとするのが、お前の強みだからな」

だが、と響を下ろして鋸を打ち払う。

「それは時に、他人を傷つけてしまう事もある。全員が全員、それが出来るとは考えていないからだ。お前が……………、俺達がやっている事も、傍^{はた}から見れば『偽善』と言われる事もあるだろう」
「……………」

黙り込む響を調の攻撃から護りながら、エターナルは続ける。

「響、お前はなんの為にガングニールを纏った」

「それは、みんなを護る為に……………。でも……………」

それが『偽善』と言われ、響は自分に自信が持てなくなっていた響の言葉には、覇気がまるで無かった。

そんな響に、克己は言う。

「なら、それを貫き通せ」

「え……………」

「『偽善』と呼ばれても、その在り方を否定されても、へこたれるな。お前にはお前の、立花響の生き方がある。『切り札^{ジョーカー}』に選ばれたお前は、この程度で挫けるようなタマじゃない」

右手に持つエターナルエッジを見下ろし、呟く。

「俺達は、敵を倒す事しか出来ない。でも、お前は違う。お前は繋がる事が出来る。思いを繋ぐ力こそが、お前のアームドギアだ」

「私の、アームドギア……………」

シンフォギア装者が手にするアームドギアは、基本相手を傷つける事に特化した形状をしている。だが、響は違う。彼女のアームドギアは、人と人を繋ぐ手。彼女の意志に従い、その性質を変化させる拳。

彼女が挫けない限り、その拳は砕けず、彼女の意志を相手に伝え続

ける。

響がエターナルの言葉を噛み締めていると、調の憤怒の叫びが聞こえてくる。

「ずっと平和な時間を過ごしてきた貴方達に、私達のなにがわかるのッ!？」

響とエターナルを切り刻もうと、調の鋸が迫る。

「わからないな。わからないからこそ……………」

取り出したT2ガイアメモリを、マキシマムスロットに挿し込む。

『ロケット・マキシマムドライブ!』

引いた右腕にロケット形の蒼炎を纏わせ、そのブースターを噴射。それを見た調が、咄嗟に彼らに向かわせていた鋸を盾代わりにする。

次の瞬間、T2アクセルメモリ以上の速度で動いたエターナルの拳が、鋸の盾を打ち砕いた。

「きゃあッー！」

鋸の盾で多少のダメージを軽減出来たものの、鋸の破片を突き抜けてきた拳圧が調を吹き飛ばす。

「人は、わかり合える」

調に直撃する寸前に拳を受け止め、拳圧で吹き飛ばすだけに留めたエターナルは、起き上がる調にそう言い放った。

「これ以上の戦闘は無理ですね」

車内でマリア達の様子を窺っていたナスターシャが呟く。

武装集団『ファイネ』に所属する三人の装者達は、二課の装者達と違ってギアの適合係数が低い。よって、それぞれのギアを纏う為には『LINKER』と呼ばれるギア制御薬を投与する必要があるのだが、薬を使用している以上は制限時間というものが存在する。

適合係数が下がってしまえば、ギアを維持する事が出来なくなってしまう。そして、制限時間はもう間もなく。これ以上の戦闘は彼女達にとって苦痛となってしまいうだろう。

ナスターシャは通信機を手に、マリア達に通信を取り始めた。

『お聞きなさい。今から増殖分裂型^セノイズを出現させます。その間に退避なさい』

ナスターシャからの通信を受けたマリアが切り結んでいた翼から離れて応答する。

「ママ、どういう事ッ!?!」

『これ以上戦っても、アレを起動させる為のフォニックゲインは集まりそうにありません。俗に言う最終手段というものです』

会場の中央に眩い光が迸り、緑色の肉塊のような形状をした巨大なノイズが出現する。

「なんだッ!?!」

「うわあッ!?! なにあのでっかいイボイボッ!?!」

「気持ち悪い形してるわね……………」

二課の全員の意識が突如出現したノイズに向けられ、その隙にマリ

ア達が動き出す。

「……………ッ！ アームドギアを温存していただとツ!?」

アームドギアの矛先を展開したマリアに身構える翼だが、マリアの狙いは彼女ではなく、出現したノイズ。

矛先に集中させたエネルギーを砲撃として撃ち出す技——
—『HORIZON↑SPEAR』が増殖分裂型ノイズに直撃し、その破片が会場に散らばる。

「はあッ!？」

「おいおい、自分らで出したノイズだろッ!？」

メタルドーパントやクリスが驚愕の声を漏らすが、マリア達にとってはこれでいいので、観客席からジャンプして会場外へと逃げていく。

「待ちなさいッ!」

「レイカ、待ってッ!」

両足から炎を噴出させて彼らを追おうとしたヒートドーパントだったが、ルナドーパントに呼び止められて振り向くと——

「なによ、これ……………」

周囲に散らばった増殖分裂型ノイズの破片が徐々に巨大化していく様子を見て啞然とする。

とにかく数を減らそうと各自近くに落ちてきていた破片を攻撃するが、それによって散らばった破片も巨大化し始めていく。

「こいつの特徴は増殖分裂……………ッ!」

「放っておいたら際限なく増えるってわけか？ そのうちここから溢れ出すぞッ！」

その時、全員に既に会場外に避難していた緒川からの通信が入る。

『皆さん、会場のすぐ外には避難したばかりの観客達がいまッ！ そのノイズをここから出すわけには……………』

「でも、どうやってこいつらをやっつけるのよッ!? こいつら、攻撃すればする程増えていくじゃないッ！」

両腕を振り回して手当たり次第に破片を蹴散らしていくが、それに比例してどんどん増殖分裂型ノイズの数が増えていく。

「馬鹿か、お前ッ！ それやったら余計増えちまうだろッ！」

「迂闊な攻撃では、悪戯に増殖と分裂を促進させるだけ……………ッ！」
「どうすりゃいいんだよ……………ッ！」

誰もがこの状況をどう打開するかと頭を悩ませていた、その時、あの考えが浮かんだ響が彼らに言う。

「……………絶唱。絶唱ですッ！」

「なに言ってるんだッ！ あのコンビネーションは未完成なんだぞッ!？」

すぐさまクリスが反対する。

絶唱は装者が保有する攻撃手段の中でも最高威力を誇る攻撃だが、その反動で全身にかかる負荷は絶大なものだ。最悪の場合、命を落としてしまう可能性だつてある。

それでも、この厄介な特徴を持つ増殖分裂型ノイズを一掃するには、それしか方法が無い。

「増殖力を上回る破壊力にて一気殲滅……………、立花らしいが、理には適っている」

「なら、俺達が時間を稼ごう」

三人の装者を護るように、エターナル達が立つ。

「本当は絶唱なんて歌わせたくないんだけどね。それしか方法が無いのなら仕方ないわ」

「皆さん……………ありがとうございますッ！」

頷き、エターナル達が走り出す。

『サイクロン・マキシマムドライブ！』

翼から受け取ったT2サイクロンメモリを挿し込んだエターナルエッジから放たれた五つの緑色の小さな竜巻が前方のノイズを吹き飛ばしていき、ルナドーパントは伸縮自在な両腕をノイズに叩き付け、ヒートドーパントは襲い掛かってくるノイズの集団を炎を纏わせ、両足で蹴り飛ばし、メタルドーパントはメタルシャフトを振り回してノイズを薙ぎ払い、トリガードーパントは右腕のライフルからの光弾で近付いてくるノイズを次々と撃ち抜いていく。

彼らに護られる中、三人の装者は手を繋ぐ。

「行きますッ！ S2CA・トライバーストッ！」

声を揃え、歌う。

「——Gatrandis babil zingural
tedenal Emustolronzen fineel
baral zizzl」

会場に、戦姫の歌声が響き渡る。

「――Gatrandis babel ziggurat
edenal Emustolronzen fine
el baral zizzl」

『S2CA』――正式名称『Superb Song Combination Arts』。それは三ヶ月前、地球に落下してきた月の欠片を粉碎せしめた奇跡の一撃を奇跡以下に制御する為に響達が繰り返し訓練してきたコンビネーション。

「――Gatrandis babel ziggurat
edenal Emustolronzen fine
el baral zizzl」

『他者と手を繋ぎ合う』特性の響を中心にする事で威力を倍増させ、並み居る敵を一掃する攻撃手段。

しかしこの絶技には、どうしても補えない弱点が一つ、存在している。

「セツツッ！ ハーモニクスッ！」

三人を根源に発生した虹色の竜巻が、周囲のノイズを呑み込み始める。だが、ここで先述した弱点が出てくる。

「ぐ……………、ううううう……………ッ！」

それは、装者三人分の絶唱による負荷が、全て響に集中するというものだ。

「耐えろ、立花ッ！」

「もう少しだッ！」

最初に出現した増殖分裂型^{セル}ノイズの中心に、その核であろうものが見えた。あれを砕ければ、この戦いは終わる。

「今だ、響ッ！」

「レディ……………ッ！」

衝撃波に巻き込まれないようにエターナル達が離脱し、響は両腕のアームドギアを合体させる。

「これが私達の……………絶唱だあああああッ!!!」

駆け出し、核へと拳を突き出す。突き出された拳は的確に核を捉え、今までよりも一際巨大な虹色の竜巻が夜空を切り裂いた。

会場外に避難していた人々は会場から立ち昇る虹色の輝きを呆然と見上げ、それは会場の近くの建物の屋上にいたマリア達も例外ではなかった。

「なんデスカ、あのトンデモはッ!？」

「……………綺麗」

「こんな化け物もまた、私達の敵……………」

それぞれの感想を漏らす中、変身を解除したケアンは、目の前の輝きから手元のT3イクシードメモリに視線を移す。

(人と人の絆は、あれ程までの力を引き出すのか?)

絆。実に不可思議だ。そして、それを結び合う人間は、それ以上に不可思議だ。

無言で己と適合したガイアメモリを見つめるも、それからの答えが

返ってくるはずも無い。

「人間………。実に不思議な生き物だ」

メモリを懐に仕舞い、ケアンはそうポツリと呟くのだった。

「――夜明けの光ね」

響達のS2CA・トライバーストによって、必要なフォニックゲインは確保できた。

これで、『ファイネ』が抱く計画は、次の段階へと向かう事となる。モニターに映し出されている蛹型の『なにか』を見て、ナスターシヤはほくそ笑むのだった。

古の残滓

声が聞こえる。

瞼を持ち上げようとするも、まるで石になってしまったかのように動かない。

『わしももう歳じゃ。この研究を続けていられるのも、あと少しじゃろう……………』

『先生……………』

一つは今よりも幾らか若いナスターシヤの声。そしてもう一つは、誰のものかわからないが、どこか懐かしい老人の声。

どちらも悲哀の言葉を吐いている。老人の声に覇気は無く、彼の言う通り、彼が生きていられるのも後僅かなのだろう。

『ナスターシヤよ……………。愛弟子であるお主に頼みがある』

『……………なんですか？』

老人がなにかを頼み込む。だが、そこはこれまでの会話と違ってノイズが走ったいるかのように聞こえず、内容はまるで聞き取れなかった。

『頼んだぞ……………ナスターシヤ……………』

『はい、先生……………』

ナスターシヤの了承の声を聞き、声を漏らして笑った老人が弱々しく言う。

『ケアンよ……………どうか—————』

そこで老人の声は途切れ、場面は次へ移る。

足元に幾つも転がるのは、物言わぬ骸。

頭を撃ち抜かれた者、首があらぬ方向を向いている者など、原因は様々ではあるが、共通しているのは、その場にいる全員が、その命の炎が消されているという事。

与えられた『役割』を果たした自分の視界が、遠くから呆然と見つめている女性達を捉える。

四人の内、三人は驚愕と恐怖を。

理解不能だ。自分は与えられた命令を遂行したまでの事。いずれ彼女達にも牙を剥きかねない害悪を排除しただけ。

そして最後の一人。あの女性陣の中では最高齢の彼女の瞳に宿っていたのは――

「――どうですか？ 体の具合は」

そこで、夢から覚めるように、ケアン・デイクスは現実に引き戻された。

(……………なんだ、今のは)

先程までのものを思い出そうにも、全く思い出せない。いや、違う。どちらかと言えば、『思い出そうとしていない』が正しい。

思い出そうとしているのは気持ちだけで、体の機能はそれを実行に移さない。思い出そうとするだけ無駄だ、と告げているのだろう。

(ならば、それでいい。道具として活動する自分に、過去にこだわる必要など無い)

先程までの考えを捨て、武装集団『フィーネ』がアジトとして利用している施設の一室で目覚めたケアンは、椅子から立ち上がって体の調子確かめる。

「動きに支障無し。いつでも出撃出来る」

「それは結構。今後とも、期待していますよ」

それにしても、とウエルはケアンの顔をじっと見つめる。

「本当、不気味なまで無表情ですね。財団Xの連中が思い出される」

机に置いていた二つの道具を手取る。

三ヶ月前、克己達が相手にしたエージェントによって財団Xに送られたT3ガイアメモリとガイアドライバーのデータを基に作り出されたT3ガイアメモリと、それを挿し込む事で使用者を超人へと変化させる変身アイテム。それがT3イクシードメモリとラックドライバーなのである。

「彼らの事は正直快く思ってはいませんが、これらを用意してくれた事には感謝しませんとね。でなければ、貴方は今頃廃棄されていた事でしょう。まあ、その前に彼女が、貴方を連れ出したでしょうが」

「なぜだ？ それらがあるからこそ、私は道具としての価値を証明出来る。道具としての価値が無い私に、存在意義など無いはずだが」
「知りませんよ。彼女が貴方にどんな感情を抱いてるかなんて」

受け取ったT3イクシードメモリとラックドライバーを懐に仕舞った直後、施設内に警報が鳴り響いた。

———
すぐに施設の隔壁を閉じて『それ』の活動範囲を制限したナスタージャが、モニターに映る『それ』を見つめる。

「あれこそが伝承にも描かれし、共食いすら厭わぬ飢餓衝動……………」
やはりネフィリムとは、人の身に過ぎた……………」

「人の身に過ぎた、先史文明の遺産………とかナントカ思わないでくださいよ」

無我夢中で餌を貪っている異形の怪物————ネフィリムを見ていたナスターシヤに、ケアンを連れて現れたウエルが言う。

「たとえ人の身に過ぎていても、英雄たる者の身の丈に合っていれば、それでいいじゃないですか」

「مامツ！ さっきの警報はツ!?!」

そこへ別室にいたマリア達もやってきて、モニターに映っているネフィリムの姿に息を呑む。

「次の花は未だ蕾故、大切に扱いたいものです」
「……………」

ウエルの言葉を聞いてか、それともネフィリムの姿を見てか、マリアの目が伏せられる。が、それも一瞬の事で、ナスターシヤの言葉に耳を傾ける。

「心配してくれたのね。でも大丈夫。ネフィリムが少し暴れただけ。隔壁を下ろして食事を与えているから、直に収まるはず」

その時、再びネフィリムが暴れ、施設が軽く揺れる。

「出撃の用意は出来ている。いつでも鎮圧に向かえるが？」

ケアンが懐のラックドライバーを手に取ろうとするが、ナスターシヤに止められる。

「対応措置は済んでいるので大丈夫です。第一、今のネフィリムと

戦つても、まともな戦闘データなど得られるはずもありません」
「了解した」

自分達のリーダーの言葉に従い、ケアンはドライバーに伸ばしていた手を下ろす。

「それより、そろそろ視察の時間では？」

『『フロンティア』』は計画遂行のもう一つの要。起動に先立って、その視察を怠るわけにはいきませんが……………」

「こちらの心配は無用。留守番がてらにネフィリムの食料調達の算段でもしておきますよ。ああ、でもケアンはここに残してもらっても？」

二課むこうに「この存在がバレないとも限りませんし、ソロモンの杖で抑え切れない場合の保険として」

「構いません。……………予定時刻には帰還します。行きましょう、皆さん」

三人の装者を連れ、ナスターシャは部屋から出ていく。

「……………ねえ、ママ」

ウエルとケアンのいる部屋からある程度離れた頃、マリアに声をかけられたナスターシャは、振り向かずには反応だけ返す。

「なんですか？」

「このまま行動してもいいの？ 博士の口ぶりから察するに、なにかしら仕込んでいるとしか考えられないけど」

「彼の言うようにこのアジトの所在が向こうに割れてしまえば、我々は活動拠点を失う事になります。ですが、ここはあくまで仮拠点。計画に多少の差異は生じるでしょうが、それまでの事。それに、向こうが来るという事は、ケアンの成長にも繋がります」

「この前の戦いで、ケアンは充分成長したと思うけど？」

「念には念を、というものです。彼が何者にも屈しない、最強の存在になれば、誰も私達の計画を止められません」

なぜか哀しみが含まれているその言葉に、マリアが眉を顰める。

「どうして哀しむの？」

「……………出来る事なら、彼をこういう風に扱いたくは無かったんです。『約束』を破ってしまう事になりますから」

「約束？ 約束ってなんデスか？」

「ええ、もう八年も前の話になりますがね。彼の祖父との約束です」

昔を思い出すように遠くを見るナスターシャだったが、それも一瞬の事で、その目は現実を見始める。

「彼には申し訳ありませんが、こうするしかありません。ですが、この計画が達成すれば、彼の望みも果たせます」

だからこそ、この計画はなんとしてでも達成する。その決意を胸に、ナスターシャはマリア達と共に進み始めた。

——放課後の《私立リディアン音楽院》。普段であれば誰もがそれぞれの帰路につく時間帯であるが、ここ最近はそういった生徒の姿はあまり見られなくなっている。

それはなぜかという、三日後はこの学院の学園祭が開かれるからであり、誰もがその準備に追われているのである。

周囲からここはどうすべきか、あれはどうすべきか、という会話が引切り無し聞こえる廊下では、克己と翼が並んで歩いていた。

「風の力を上手く扱う事が出来れば、超高速で敵を倒す事が出来る。サイクロンメモリには使用者のスタミナを回復させる力があるから、

それを活用すれば疲労を最小限まで抑える事も出来る。今度の訓練はそれを意識してやってみよう」

「助かる。やはりガイアメモリの力に関して相談するのはお前が一番だ」

「学院で『お前』呼びはやめろ。仮にも俺達は、『教師と生徒』の関係なんだぞ」

「む、そうだったな」

丸つ切り学園祭とは関係ない話をしているが、別にサボっているわけではない。クラスメイトに準備に必要な材料を取ってきてほしいと頼まれた翼が、道中翼と同じ経緯で行動していた克己と出会ったので、自分の身に宿ったT2サイクロンメモリの力はどう活用すべきかと相談していたのだ。

二人が曲がり角に差し掛かった時、そこから人影が飛び出してきた。

「わッ!？」

「なッ!？」

流星の翼もこれに反応出来ず、飛び出してきた人影とごっつんこ。克己が尻餅について痛がる人物を確認すると、それはクリスだった。

「クリスカ。どうした、そんなに焦って」

「奴らが……………奴らに追われてるんだ。もう、すぐそこまで

……………ッ!」

「なんだと?」

まさか、以前対峙した『フィーネ』の誰かが学院にやってきたのか。国家機密として扱われているこちらと違い、向こうは既に世界に宣戦布告しているため、周囲の目を気にする事無く戦える。この場で戦闘

するのはまずいが、致し方ないとばかりに克己がロストドライバーを取り出そうとするも、翼に止められる。

「待てッ！ ここに奴らは来ていないッ！」

「どういう事だ？」

「どうやら、雪音を追いかけているのは『フィーネ』ではなく、彼女のクラスメイトだそうだ」

「ややこしかったな。すまん」

「それならいい。……………それで、なぜ追われているんだ？」

克己の質問にクリスは、忙しく周囲を確認しながら答える。

「なんやかんやと理由をつけて、あたしを学校行事に巻き込もうとしてるんだよ」

「褒められた行為では無いな。生徒である以上、学校行事には参加してもらわなければならない」

「仕方ねえだろ、あたしはこういった生活に慣れてねえんだ」

「なら、代わりに私達を手伝ってもらおうかな？」

「なんでだッ!？」

「このままなにもしないのは教師として見過ごせない。安心しろ、軽めの仕事だ」

クリスを連れ、翼と克己は既に教室で待っていた女子生徒と共に学園祭の準備を着々と進めていく。

そして今日中に片付けようと考えていた作業が全て終わり、生徒もそれぞれの家に帰ると同時に、弦十郎から通信が入る。

弦十郎曰く、『フィーネ』のアジトがわかったとの事だ。

『———いいか、今夜中に終わらせるつもりでいくぞッ!』

日も暮れ、月明かりが照らす街の外れに存在する施設に、エターナル達は足を踏み入れていた。

今回選ばれたメンバーは三人の装者は当然として、エターナル、ヒートドーパント、トリガードーパントである。他のNEVERの二人も連れて行くべきかと考えたが、施設内となるとルナドーパントの伸縮自在の腕が活かし切れず、NEVER随一のパワーファイター、メタルドーパントは論外だ。彼が戦うと間違いなく施設が破壊されてしまう。

緒川と彼に同行した京水と剛三によって所在を突き止めたこの場所は人気がほとんど無い場所にあり、テロリスト集団である彼らが隠れ家として使うにはもってこいの立地だった。

ちなみに三人がこの場所を突き止める為に訪れた場所はヤクザの巣窟だったらしいが、実は忍者の家系である緒川の忍術、NEVER特有の強靱な身体を持つ京水と剛三の前ではまるで歯が立たず、特に京水を相手にしたヤクザは暴力によるものとは別の恐怖を与えられたらしい。

『調べたところ、丁度この前の事件の直後から、ここに少しずつ物資が搬入されているみたいなんです。現段階ではこれ以上の情報が得られず致し痒しではあるのですが、何者かが潜んでいるのは間違いないと思われます』

「尻尾が出てないのなら、こちらから引きずり出してやるまでだッ！」
「……………ッ！ 待て」

先導していたエターナルが右手を軽く上げ、後ろから続く響達を制止させる。

物陰から様子を窺うと、先に続く通路を赤い霧のようなものが満たし始めていた。

「お前達、体に異変は感じないか？」

「え？ いや、特に……………」

「となると、あれは毒ガスではないのか。だが、体になにか異変が起きたと思っただけに言え」

響達が頷くと同時、通路の先からノイズの群れが姿を現す。

「来やがったなッ！ 全部ぶっ飛ばしてやるッ！」
ゲームスタート
「状況開始」

クリスとトリガードーパントが飛び出し、迫り来るノイズ達を撃ち抜いていく。エターナル達もそれに続いて次々とノイズを撃破していく。

エターナルと翼がノイズを斬り倒し、死角からクリスとトリガードーパントを攻撃しようとするノイズは響が殴り飛ばし、ヒートドーパントは炎を纏わせた両足でノイズを蹴り飛ばしていく。

「この動き……………。やはり、こいつらは……………」

「ああ、間違いなく制御されているッ！」

「当たり前。ここはどこかに、ウエル博士がいる」

そうとわかればと、全員がノイズを倒す速度を上げるが、そこで翼が怪訝な表情を浮かべた。

「どうした、翼」

「……………おかしい。思うように力が出ない……………ッ！」
「なに？」

響とクリスを見てみると、彼女達も思うように力が出せていないのか、いつもと比べてノイズを倒すのに手間取っている。

まさかと思い、エターナルは足元を覆う赤い霧を見下ろして本部に響達のギアの出力について訊ねてみると、予想していた答えが返ってきた。

『装者達の適合係数が低下していますッ！ このままでは、戦闘を継続できませんッ！』

『克己君、そちらではなにが起きているッ!?』

「通路に赤い霧のようなものが広がっている。恐らく、これが原因のはずだ」

『君やレイカ君に異変は?』

「特になにも。この霧の影響を受けているのは装者達だけだ」

『装者の適合係数を下げる霧……………。とんだ罫を張ってくれたな……………ッ!』

通信越しでもわかる、微かな怒りを抱いている弦十郎に、エターナルは翼を襲おうとした数体のノイズを切り裂きながら訊ねる。

「とりあえず、この霧を吹き飛ばすぞ」

響達は目に見えて消耗し始めている。

今はまだギアを纏っているが、この霧の効果を受け続けていれば、いずれはギアが解除されてしまうだろう。そうなってしまえば、彼女達はノイズに対抗する術を失ってしまう。そんな状態でノイズに触れられでもしたら最後だ。

『サイクロン・マキシマムドライブ!』

「ハアッ!」

緑色の風を纏わせた両腕を地面に叩き付け、そこから発生させた突風で足元の霧を吹き飛ばす。それで少しは適合係数の低下速度を遅れさせる事が出来たのか、装者達は今よりもそれほど弱体化する事無くノイズの集団を消滅させていった。

「はあ……………はあ……………ようやく片付いたか……………」

「大丈夫か？」

「ああ……………なんとかな……………」

倒れ込みはしないが、それでも肩を上下させて荒い呼吸を繰り返す装者達。これ以上彼女達に作戦を続けさせるのは危険だと判断したエターナルが弦十郎に通信を開こうとした時、響が叫んだ。

「克己先生ッ！ 後ろッ！」

「……………ッ!？」

背後からなにかが襲い掛かってくるのを感じたエターナルが反射的に裏拳で『それ』を殴り飛ばす。

明らかな手応え。だが、ノイズと同じ感触も、触れた箇所から炭化していく気配も感じない。

「気を付けろ。こいつはノイズじゃない」

「見ればわかるわよ。あんなノイズ、見た事無いもの」

ヒートドローパントの言う通り、殴り飛ばされた『それ』は、ノイズとは程遠い姿を持っていた。

大型犬程度の大きさを誇る全身にはマグマのような色を放つ筋が走っており、四本の足で体を支えている『それ』にエターナル達が攻撃を仕掛けようとしたその時、『それ』が背後に背負う暗闇から一人の男性が姿を現した。

「ウエル博士……………ッ！」

響が、暗闇から現れた男性——ウエルに拳を握り締める。

「やっぱり、生きてやがったのかッ！」

「おや、私が生きている事は既に知られていましたか。上手く騙せた

と思つてたんですがね」

「あの時は流石に騙されたさ。だが生憎と、こちらには心強い味方がいるんでね。随分と思ひ切つた行動をするじゃないか、ペテン師」

「貴様がソロモンの杖を奪う為、召喚したノイズを敢えて自分に襲わせるという芝居を打つとは……………ッ！」

「バビロニアの宝物庫よりノイズを呼び出し、制御する事など、この杖をおいて他にありません」

翼の言葉を否定する事はせず、ウエルは右手に持つソロモンの杖を見下ろす。

「そしてこの杖の所有者は、今や自分こそが相応しいッ！　そう思いませんか？」

「思つかよッ！」

クリスが腰部アーマーから小型ミサイルを撃ち出すが――

「ぐッ、ギアが……………あああッ！」

全身に走る激痛に耐えかねたクリスが悲鳴を上げて崩れ落ち、撃ち出された小型ミサイルはあらゆる方向へ飛んでいき、施設の壁に当たつて爆発する。

「クソッ……………なんでこっちがズタボロなんだよッ！」

「適合係数の低下で、ギアのバックファイアが……………ッ！」

「クリス、その状態で大技を撃とうとしない事よ。最悪の場合、ギアに殺されるわよ」

「……………ッ！　あれは……………ッ！」

小型ミサイルによる爆発が原因か、外へ続く穴が開いており、響は

そこからケージを抱えて飛んでいくノイズに気付いた。

思わずウエル達の方を見ると、先程までいたはずの怪物の姿が見当たらない。という事は、あのケージの中に、あの怪物がいるはずだ。

「賢、あれを撃ち落とせるか？」

「問題ない」

トリガードーパントが怪物の入ったケージを輸送するノイズを追って出ていく。それをウエルは止めず、それを不審に思ったヒートドーパントが問いかける。

「止めなくていいの？ 彼、相当の射撃能力を持つてるわよ？ 彼にとつて、あれを撃ち落とすのは簡単すぎると思うけど」

「構いませんよ。それより貴方達には、彼の相手をしてもらわなければ」

「彼……………？ ……………まさかッ！」

「ええ、そのまさかです」

パチンツとウエルが指を鳴らすと、彼が出てきた暗闇から、もう一人の男性が出てくる。

「何人かは知ってるでしょうが、改めて紹介しましょう。『ファイアーネ』^{われわれ}が所有するガイアメモリの戦士、仮面ライダーイクシードこと、ケアン・デイクスです」

無言のまま、ケアンはロストドライバーに酷似した外見を持つベルト————ラックドライバーを腰に巻き、T3イクシードメモリのスイッチを押す。

『イクシード！』

「変身」

淡々と、一欠片も感情が籠められていない無機質な声でそう言い、スロットに挿し込んで展開する。

『Exceed Active』

加速していく変身音声と共に周囲に構築された漆黒の鎧が白銀の素体に装着され、バイザーの奥に二つの赤い輝きを灯し、鎧から蒸気を噴出する事で変身を終えたケアン——イクシードは、赤い双眸でエターナル達を見据える。

「私に意志など必要ない。道具が成す事は、ただ一つ——」

自分に身構える敵に、冷たく言い放つ。

「ママ達の障害を、排除する事だけだ」

そして、意志無き戦士は、魂を持つ戦士達を排除すべく動き出した。

二人の終焉（フィーネ）

エターナル達がイクシードと交戦し始めた頃、トリガードーパントは正体不明の怪物が入ったケージを運ぶノイズを追いかけていた。

まだこの身が死人のものになる前はSWAT隊員だった事もあり、その射撃能力はNEVER………いや、二課に所属する誰よりも高いだろう。だが、彼とノイズの間の距離はかなり開いており、今や標的は海の上を飛んでいる。

この距離で光弾を撃ったとしても、途中で光弾を構成するエネルギーが霧散してしまうだろう。如何に精密な射撃能力を持っていようと、撃ち出した弾丸が標的に当たらなければ意味を成さない。それなら、距離を縮めて標的を射程距離内に入れるだけだ。

「ボス、ノイズとの距離を縮めたい。頼む」

『了解だ。仮設本部、急速浮上ッ！』

トリガードーパントの前に広がっていた水の大地を突き破り、巨大な潜水艦が出現する。

浮上したそれこそ、特異災害対策機動部二課の仮拠点にして本部である。

『行け、賢君ッ！』

「了解」

ドーパント化による超人的な身体能力で潜水艦の船首に飛び移り、右腕と一体化したライフルを構えて狙いを定める。

標的のノイズは射程距離内に入っている。光弾は風の影響を受け付けない為、風向きを確認する必要は無い。

「チェックメイト」

ライフルから発射された光弾がノイズを貫き、怪物の入ったケースが落下していく。

後はあれを回収するだけだ、とトリガードーパントがジャンプの体勢をとったその時、背後から気配を感じ取る。

「……………ッ！」

咄嗟に身を翻して攻撃を躲して光弾を発射するも、突然の襲撃者はそれをマントで防御した。

海の彼方から昇ってきた太陽を背に船首の上に立つのは――

「マリア……………ッ！」

『フィーネ』に所属するシンフォギア装者、マリア・カデンツァヴナ・イヴだった。

「……………ぐわあッ！」

「克己先生ッ！」

施設の外に殴り飛ばされたエターナルに追撃を仕掛けようとしたイクシードの攻撃を響が阻む。

響が何度も攻撃を繰り返すも、イクシードは全く怯む様子を見せず、繰り返された拳を受け流すと同時に響の背中を蹴る。

先のライブ会場での戦いで強化された鎧の防御力に、二課の中でもずば抜けて頑丈なメタルドーパントにも明確なダメージを与える攻撃力。

素のスペックだけでも、既にイクシードは単体でエターナル達を相手に善戦出来る程までに至っていた。

「ハアッ！」

T2サイクロンメモリの力を引き出し、天羽々斬・翼風刃を身に纏った翼が攻撃を仕掛ける。緑色の風に体を委ね、妖精のように舞いながら二本の刀で高速でイクシードを切り裂いていく。ヒット&アウエーの攻撃スタイルで動く翼を捕らえようとイクシードが手を伸ばすも、翼はそれを紙一重で躲しながらさらに連撃を叩き込んでいく。

先の霧の影響で、ギアは未だ重い。こんな高速移動をしては恐ろしい速度でスタミナが無くなっていくが、それもT2サイクロンメモリの力で発生させた風でスタミナを回復させて無理矢理高速移動を継続させる。だが、流石に技を使うのは無理だ。使えば最後、押し留めている疲労が一気に襲い掛かってくる。

ここでギアが解除されてしまえば、最悪イクシードに殺されかねない。

背後に回り、側面から首に刀身を叩き付ける。

相手は生身ではないが、首は人体にとって重要な部位。装甲で防衛されていてようと、そこを攻撃されれば多少の隙は出来る。一瞬の隙が生じれば、エターナル達が一齐にそこを突くべく攻撃を仕掛けるだろう。そこで一気にイクシードを追い詰める。

だが、翼の試みは上手くいかなかった。

「^{ラーニング}学習完了。身体機能、アップデート」

「な……………ッ!？」

痛みを感じさせない声色。振り返りざまの回し蹴りが脇腹に直撃し、蹴り飛ばされた翼は施設の壁を破壊して、破壊された壁の破片に埋もれた。

「翼さんッ！」

「おい、起きろッ！」

「ぐ……………うう……………ッ！」

近くにいたクリスに助け起こされる翼から離れた場所では、ウエルがイクシードに称賛の拍手を送る。

「実に素晴らしい。どれだけ攻撃を受けても、敵対者の排除を優先する。それこそが貴方ですよ、ケアン」

そして、とウエルは海辺の方を見る。つられてエターナル達もそこから視線を移すと、そこにはケージを回収しているマリアの姿があった。

「時間通りですよ、ファイネ」

「なッ、ファイネだとッ!？」

ウエルの言葉にエターナル達が驚愕する。

「終わりを意味する名は我々組織の象徴であり、彼女の二つ名でもある。そう、彼女こそが、新たに目覚め、再誕したファイネですッ！」

遠くにいるマリアを見つめ、ウエルは高らかにそう叫ぶのだった。

（——いや、ファイネここにいるんだけど）

モニター越しに叫ぶウエルに、思わず心中でそう呟いてしまう。

ファイネの存在は日本政府によって偽装されており、二課や彼らに協力しているごく少数の人間を除いて、ファイネは死んだという事になっている。今回の敵である『ファイネ』のメンバーは、ファイネが生きているとは夢にも思っていないだろう。

となると、今ケージを奪取しようとしているトリガードーパントと交戦しているマリアは、偽物として持ち上げられてしまっているという事になる。

「弦十郎君、少し席を外すわね」

「……………ああ、行ってこい」

フィーネが生き延びているという事を『かれらフィーネ』に晒してしまう事になるが、だからといって、これ以上黙って見過ごすのは出来ない。司令室から退室し、甲板へ続くハッチの真下に到着する。

「力を貸しなさい、ネフシユタン」

着込んでいた白衣が消滅し、代わりに刺々しい鎧が彼女の全身を包み込む。

ハッチを開け、甲板へ飛び出す。

「な……………ッ!？」

「フッ！」

今まさにトリガードーパントに槍を突き出そうとしていたマリアの視線が自分に向いた隙を突いて、挨拶代わりにフィーネは右手に持った鞭を向かわせた。

咄嗟に飛び退いて鞭を躲したマリアの前に降り立ち、背後のトリガードーパントに振り返る事無く言う。

「貴方は下がってなさい。ここから先は、私のステージよ」

「……………了解」

トリガードーパントが下がるが、変身は解かない。万が一という可能性もあるかもしれないと考えているのだろう。正直、そんな可能性

など、ありはしないのだが。

「貴女、何者……………？」

謎の乱入者に困惑の表情を浮かべているマリア。

二課に所属する戦士や、彼らの使う力については事前に調べていたが、目の前に立つ女性は知らない。

否、知らないようで、知っている。

「私が誰かって？ 私の遺伝子を持つ貴女なら、わかっているはずだ
けど？」

「なに？」

目を顰めるマリアに、神話世界に生きた巫女は己の名を告げる。

「私はフィーネ。偽物のフィーネあなたとは違う、本物のフィーネオリジナルよ」

ここに、偽物と本物。二人の『フィーネ』が対峙した。

「……………なんて事……………。まさか、彼女が生きているなんて
……………ッ！」

飛行機のコックピットで戦況の確認をしていたナスターシャは、ネ
フィリムの回収を目的に出撃したマリアの前に立ちほだかる女性に
驚愕する。

まだ自分がF・I・Sに所属していた頃、何度か彼女を見かけた事
があり、回数は少ないが会話をした事もある。見慣れない聖遺物を身
に纏っているが、それでも、彼女から放たれるオーラからわかる。

彼女はまさしく、本物のフィーネだ。

「調、切歌。マリアの援護に向かってください。彼女は危険です。マリアだけでは絶対に勝てません」

「了解」

「りよ、了解デスッ！」

普段は見せる事が無い、焦った様子のナスターシャの姿に驚きながらも、二人はすぐに出撃の準備を始めた。その間にナスターシャはウエルに通信を取り始めた。

『——ウエル博士、聞こえますか？』

ナスターシャからの通信を受けたウエルが応答する。

「ええ、聞こえていますよ。声色からして大分焦っているようですね。原因はあの女性ですか？」

『その通りです。現在調と切歌を向かわせましたが、もしもの場合もありますので、ケアンも向かわせてくれませんか？』

「仮面ライダー達との戦闘データがまだ足りていませんが………仕方ありません」

エターナルとヒートドープアントの蹴りを受け止めていたイクシードに声をかける。

「ケアン、彼らとの戦闘を中断し、マリアの援護に向かいなさい。ああ、私も連れて行ってください。流石に私一人で彼らから逃げ切るのは難しいでしょうから」

「了解」

今まさにエターナルを殴ろうとしていた拳を止めたイクシードは彼らから距離を取ってウエルを抱え上げ、T2ゾーンメモリを取り出

す。

『ゾーン！』

封じられた地球の記憶の名を叫ぶメモリを胸元に押し当てる事で取り込んだイクシードは、マリア達のいる潜水艦がある方角へ走り、大きくジャンプすると同時にT2ゾーンメモリの能力を発動。彼らの姿は一瞬にして潜水艦の甲板に移動した。

イクシードとウエルを追おうとエターナル達も動き始めるが、遠くから無数の光が迸ったかと思うと、彼らの前に大量のノイズが出現する。

「是が非でも追わせないというわけか」

「すぐに終わらせませすッ！」

走り出したエターナル達とノイズの大群が衝突する。

——
ウエルを抱えて突然現れたイクシードに、フィーネは僅かに目を見開く。

「驚いたわね。会場での戦闘はモニタリングしてたから知ってはいたけど、まさか本当に瞬間移動出来るなんて」

「どうして……………」

「ナスターシャ教授から頼まれたんでね。彼を援護につかせましよう」

「「マリアッ！」」

どこからともなくやってきた、『フィーネ』に所属する二人の装者が甲板に降り立ち、ここに武装集団『フィーネ』の有する戦力全てが揃う。

「マリア、援護しに来たデスよッ！」

「一緒に戦おう」

「二人共……………」

イクシードどころか、調と切歌も自分の援護に来たという事に驚く。それ程までに、目の前に立つ女性は強大な存在だという事なのだろうか。

一方、警戒を強めるマリアとは違って自然体で立っていたフィーネは、調と切歌を見て「へえ」と声を漏らす。

「シウルシャガナに、イガリマね。ガングニールとシウルシャガナはさておき、イクシードとイガリマには用心しておこうかしら？」

援軍が駆け付けてきた事をまずいと思ったのか、トリガードーパントが動き出そうとするも、フィーネはそれを制止させる。

「貴方はここで見てなさい。これは私がすべき戦いなの」

返答は無いが反抗の意志は感じられないところから、その沈黙を了承と受け取り、二本の鞭を軽く握る。

「さあ、どこからでもかかってきなさい。貴方達に負ける程、フィーネは甘くないわよ？」
「ならばッ！」

真正面から突進してきたマリアが槍を突き出してくる。それをフィーネが難なく受け流すと、頭上から無数の丸鋸が降り注ぐ。

鞭を駆使して自らの体を切り刻もうとする丸鋸を打ち払っていくと、今度は左右から切歌とイクシードが挟み撃ちしてくる。

「無駄よ」

即座に引き寄せた鞭で陣を組ませる事で展開したバリアで二人の攻撃を受け止めて押し返し、バリアを解除するや否やそれぞれの鞭の先に生成したエネルギー弾を投擲する。

潜水艦になるべく被害が及ばないように威力はある程度抑えられてはいるが、それでもフィーネによって放たれたエネルギー弾は切歌とイクシードを吹き飛ばす。

「やあッー！」

今度は背後からの刺突。だが、それもフィーネにとつては既に読めており、ジャンプして躲すと同時に逆にマリアの背後を取って蹴り飛ばす。

「マリアッー！」

「他人の心配より、自分の心配をしたらどう？」

「……………ッ!? きやあッー！」

咄嗟に防御しようとするが間に合わず、鞭を叩き付けられた調が海に落とされる。

「私相手によそ見るなんて、二万年早いわ。……………ッー！」

次の瞬間、気配を感じて右腕を上げると、そこにイクシードの拳が直撃する。拳が当てられた箇所を中心に籠手に亀裂が走り、それに気付いたフィーネは「へえ」と不敵な笑みを浮かべる。

「中々やるじゃない。彼女達よりよっぽど楽しめそうだわ」

鞭は取らず、敢えて拳でイクシードと戦う。

顔面に迫る拳を左手で打ち払い、右拳を鳩尾に捻じ込む。衝撃に一瞬体が浮いた隙を突いて拳のラッシュが全身に叩き込まれ、最後に蹴り飛ばされるも、イクシードはすぐにその姿を消滅させ、フィーネの懐に出現してお返しとばかりに剥き出しの腹部へ右足を叩き込もうとするが――

「痛みを感じていない………………。いえ、痛覚が無いのかしら?」

伸ばされた右足を掴んだフィーネがイクシードを投げ飛ばし、一瞬で距離を縮めて彼の胸元を殴り、さらにもう一発拳を叩き込み、甲板に叩き付けられて跳ね上がったイクシードをトドメとばかりに蹴り飛ばす。

十数メートルも飛んだイクシードを見て、ウエルが驚愕する。

「なんという……………ッ!　これがフィーネの実力だとも言うのですか……………ッ!」

『フィーネ』の有する戦力の中では能力も含めて最強と言っても過言ではないイクシードが敗れたという事実にあり得ないと頭を抱えるウエルにフィーネの言葉が投げかけられる。

「なに言ってるの?　まさか、これが私の本気だとも思ってるのかしら?」

「なんですって……………?」

「ここがどこかわかる?　二課の潜水艦よ?　拠点を巻き込まない程度にセーブして戦ってるに決まってるじゃない」

「……………は?」

ポカンと口を開けるウエル。

マリア達に加え、二課の仮面ライダーや装者、ドーパントを苦しめたイクシードのチームを圧倒しておきながら、彼女はそれを『本気で

はない』と言い切っている。

「ば、化け物……………ッ！」

ウエルの目の前に立つ人物に対する印象は、その一言に尽きた。

「さあ、返してもらおうかしら？ ソロモンの杖を。……………ッ!?」

その時、突如として突風が吹き始め、その原因を探し始めたフィーネの視線に、巨大な飛行機が映る。

それと同時に、マリアにナスターシャからの通信が入る。

『適合係数が低下しています。ネフィリムは回収済みです。戻りなさい』

「……………ッ！ 時限式では、ここまでなのッ!？」

(時限式……………? ……………そう、この子達、LINKERを使ってるのね)

飛行機から垂らされたロープを掴むマリア達を飛行機諸共海に落としてやろうかと鞭を振るおうとするが、その直前に飛行機が目の前から消え失せる。

すぐにオペレーター達に飛行機の位置を特定するよう依頼するも、彼らの返答は、飛行機の反応が完全に途絶えたというものだった。

(レーダーにも捕まらない超常のステルス機能……………。私がいた頃は完成していなかったけど、まさか完成していたとはね。という事は……………)

彼らの手には、ガングニールでもイガリマでも、ましてやシウルシャガナでもない、別の聖遺物がある。

ネフシユタンの鎧を消滅させ、フィーネは飛行機が消えた方角を見

つめていると、ウエルが出現させたノイズを殲滅してきたエターナル達が甲板に降り立つ。

「了子さんッ！」

「随分時間をかけたわね。そんなに数が多かったの？」

「それもあります。ギアが重くて手こずったのもあります」

「あの霧のようなものね。後でメデイカルチェックしましょう。それとギアのメンテナンスもね」

「あの、了子さん」

響に声をかけられ、艦内に戻ろうとしたフィーネが足を止める。

「私達、了子さんとはわかり合えましたよね？」

「まあ、どちらかといえばそうね」

「だったら、私、あの人達ともわかり合えると思うんです。なのに……………」

彼女達には、自分の気持ちは伝わらない。その事を気にしてる響に、フィーネが答える。

「通じないのなら、通じ合うまでぶつけなさい。言葉より強いものを、私を変えた貴方達知らないはず無いでしょ？」

我ながら弦十郎みたいな事を言っていると内心思っていると、響が返事を返してくる。

「言ってる事、全然わかりませんッ！ でも、やってみますッ！」

「それでこそ、立花響ね」

彼女の答えにフツと笑って、フィーネは艦内に戻ったのだった。

教室モノクローム

『フィーネ』がアジトにしていた施設で『フィーネ』を構成するメンバー達と交戦した日から数日経った頃、二課の仮本部である潜水艦内の司令室に集められた響達は、フィーネからある説明を受けていた。説明の内容は、響達とギアの適合率が減少した原因となった霧と、施設内で彼らが遭遇した正体不明の怪物についてである。

「あの施設内に充満していた霧の正体はLiNKERの成分を反転させ、霧状にして散布したものだという事がわかったわ。克己君達に影響は無かったし、効力を受けていたのは装者達だけだったから、容易に判断できたわ。『Anti-LiNKER』、といったところかしらね」

「これがまた使われる可能性はあるんですか？」

響の質問に首を横に振るフィーネ。

「無い、と断言はできないけど、可能性は低いわね。向こうにも装者がいる以上、無闇に使うのは愚の骨頂よ。自分達の戦力を削る事になってしまうから。それに向こうの装者達は、貴女達と違ってLiNKERを使わなきやギアを纏えないわ」

「彼女達は奏と同じという事ですか？」

今は亡き相棒の姿を思い出す翼に頷く。

「奏ちゃんと同じく、彼女達のギアとの適合係数は低いと考えて間違いないわ。じゃなきや『時限式』なんて言わないもの。………そして、響ちゃん達が遭遇した怪物。そいつの正体も掴めたわ」

フィーネの言葉を待っていたかのように、数日前響達が遭遇した異

形の怪物がモニターに映し出される。

「怪物の名は、『ネフィリム』。生物のように自ら成長していく特異な性質を持つ完全聖遺物よ」

「はあッ!? あれも聖遺物なのかよッ!?」

「意思を持つ聖遺物が存在するのか……………」

「戦闘力もそれなりにはあるけど、それよりも警戒すべきはこいつの性質。ネフィリムは聖遺物と生物の特徴を兼ね備える存在で、生物である以上、『食事』というものが必要になってくるわ。そして、その食糧というのが……………」

響達が首元に下げているペンダントを指差すフィーネに、「なんだとッ!」と弦十郎が驚愕する。

「まさか、聖遺物が餌だと言うのかッ!」

「その通りよ。ネフィリムの食糧は、自分と同じ聖遺物。あいつから見れば、聖遺物を身に纏って戦う装者達は格好の餌よ。貴女達、運が良かったわね。克己君達がいなかったら、最悪誰かがあいつに喰われてたかもしれないんだから」

もしあの時、克己達がいなかったらと考えて装者達がゾツとしている間にも、フィーネはネフィリムの説明を続ける。

「元々は『堕ちた巨人』を意味する『ネフィル』って名前だったんだけど、響ちゃん達が遭遇したのは、種族間での共食いの末、他のネフィリムを取り込んで『一にして全』として完成された個体でしょうね」

「あんなのが昔はわんさかいたつてのかわ……………。想像したくもねえ」

「完成されているとはいえ、一体しか存在していない事は幸いね。複数で来られたら『最悪』の一言に尽きるもの」

「ですが、それでも脅威という事には変わりはありません。早速訓練

を……………」

「いや、お前達、今日はもう休め」

「なんでだよ？ 向こうがどれだけ危険な存在を抱えているのがわかってるってのに、訓練もさせてくれないのか？」

シミュレーションルームに向かおうとした翼を止める弦十郎に、クリスが問う。

「そうは言うが、お前達、明日は学祭だろう？」

「そういえば……………」

フィーネからもたらされる情報の内容が思考の大部分を占めていた故に完全に抜け落ちてしまっていたが、明日は響達が通う《私立リディアン音楽院》の学園祭——『秋桜祭』当日なのだ。

「体をゆつくり休めるのも大切な事だ。明日に疲れを残しては、せっかくの学祭が楽しめないぞ」

「後の事は私達に任せておきなさい」

「わかりました。じゃあ明日は、目一杯楽しんできますッ！」

三人の少女が司令室から出ていき、大人達が残される。

「改めて思うけど、今回の敵もかなり厄介ね」

「聖遺物を喰って成長するネフィリム……………。絶対に響達に相手させたくないわ」

「それに加えて、あの仮面ライダーだ。あの野郎、戦っている間にどんどん強くなってるやがる」

ネフィリムの他にも警戒すべき者の名を挙げると、「その事なんだけど」とフィーネが口を開く。

「イクシードの硬さは私も殴ってみて理解したけど、常人が絶えず進化し続ける力を振るい続ける事なんて出来るのかしら？ 装甲自体が自発的に成長して変身者の肉体を動かしているだけかもしれないけど」

「いや、その可能性は無いだろう。翼に首元を攻撃された時、奴は『学習完了』^{ラーニング}と言っていた。進化しているのはライダーシステムだけじゃない。奴自身も進化している」

学習されたとなると、今後、翼が行った攻撃手段で首元を狙うのは難しくなるだろう。弱点はそこだけではないとはいえ、また一つ、イクシードに対する有効打が無くなってしまった。

「だが、そうとなると別の問題が出てくるんじゃないのか？ ライダーシステム自体が進化しているならまだしも、変身しているのは人間だぞ？ 人間がシステムと同じ速さで成長できるとは到底思えないのだが」

「当然よ。もしそうだったら人類の文明は今の数千倍も発展しているわ。それこそ、ノイズに対抗しうる武器を簡単に量産できるくらい。………。克己君、レイカちゃん」

「なんだ？」

「彼と二度交戦した貴方達に訊きたいんだけど、彼に攻撃した時、痛がったりしてた？」

「後ずさりして怯みこそすれど、痛がったりする様子は無かったな」

「ええ、翼の時もそうだったけど、あいつは急所に攻撃を受けても、全く動じずに反撃してきたわ」

「………これは推測に過ぎないのだけれど………」

フィーネが脳内で組み立てた仮説を口にする時、それを聞いた全員が驚愕する。

「まさか、そんな事があり得るのか………？」

「あくまで可能性の話だけだね。だけど、F・I・Sにはそれを専門にしているグループも存在しているわ。今はどうかは知らないけどね」

「でも、もしそれが正しかったら……………」

京水に頷き、フィーネは緊迫した声色で言う。

「仮面ライダーイクシード……………いえ、ケアン・デイクスは、向こうに所属する誰よりも危険な存在よ」

——一夜明け、『秋桜祭』当日。

「学祭か……………。もう二度と参加する事は無いと思っていたが、まさかこんな形で参加するとはな」

出店で購入したタコ焼きを手に、克己は校内を巡回していた。

生前の記憶はほとんど失われてしまっているが、学園祭に参加したという記憶は薄っすらと覚えている。それが自分の通っていた学校のものか、それとも別の学校のものかは定かではないが。

「ん……………」

足を止め、振り返る。

そこには楽しそうに今後の予定を話し合っている生徒や参加者の姿があるのみで、「気のせいかな」と小さく呟いて、克己は止めていた足を動かし始めた。

「——あ、危なかったデス……………」

克己が人混みの中に消えていくのを確認し、切歌はホッと胸を撫で下ろした。

「やっぱり、これを着けると気付かれないね」

切歌の隣にいた調が額縁眼鏡をクイツと押し上げる。

武装集団『フィーネ』に所属し、現在二課と敵対している彼女達が、二課に所属している戦士が在籍している《私立リディアン音楽院》に、なんの変装もせずに訪れるはずがない。

二人が身に着けているのは、『潜入する美人な捜査官が身に着ける眼鏡』——略称『潜入美人捜査官メガネ』である。かつて、幾つもの国々に凄腕と畏れられたある女性捜査官が使用していたとされるそれを着用すればあらゆる不思議、誰に見咎められる事無く目的地までの到達が可能となるのだ。外見的には全く変化が無いというのになぜバレないのかについては詮索してはいけない。

「それはそうと切ちゃん、私達がここに来た目的、ちゃんと覚えてるよね?」

「決まってるデス。ズバリ、『学祭を全力で楽し』——」

「じくくく……………」

「て、『敵のギアのペンダントを手に入れる』デス……………」

「うんうん、ちゃんと理解してて偉い。だから、その『学院内の旨いもんマップ』はおしまい」

「ええッ!? い、嫌デスよッ! すぐそこのお店で食べれば完成デスよッ!」

片手に持っていたマップを握り締める親友を見て、調は「はあ……………」とため息を吐く。

「いいよ。まずはマップを完成させよう? それが終わったら、ちゃんと任務に戻ろうね」

「調……………ッ！ 感謝デスッ！」

満面の笑みを浮かべる切歌を見て、「やっぱりこの笑顔には敵わない……………」と調はボソリと零すのだった。

——一方その頃、切歌と調が学院に来ていたという事を知らない翼が廊下を歩いていると、突然曲がり角から飛び出してきた人影とぶつかっていた。

「痛ったあく……………」

「またしても雪音か……………。今度は誰に追われてるんだ？」

「この前と同じだよ……………。つたく、あたしは参加したくねえつて言ってるのによお……………」

「見つけたッ！ 雪音さんッ！」

その時、クリスが飛び出してきた曲がり角から数人の女子生徒が現れる。以前、クリスを追いかけていた女子生徒達だ。

「お願いッ！ 登壇まで時間が無いのッ！」

「いったいどうしたんだ？」

「ステージ予定してた子が急に都合がつかなくなったから、雪音さんに代わりに歌ってほしくて……………」

「だからって、なんであたしがッ！ あたしは歌なんて……………」

「だって雪音さん、音楽の授業の時、凄く楽しそうに歌ってたからッ！」

「う……………」

「だから、代役は雪音さんしかないと思って」

「いきなり歌えなんて言われて、歌えるものかよ……………」

そんなに期待されても困る、と言いたげに目を伏せたクリスに翼が

問う。

「雪音は歌が嫌いなのか？」

「あ、あたしは歌なんて……………その……………。……………嫌いじゃない、けど」

「……………出てやったらどうだ？」

「……………クソツ」

悪態を吐きながらも、クリスは渋々とクラスメイト達の頼みを承諾してくれた。

「時間も迫っているのなら、急いだ方が良さそうだな」

「はいッ！」

「なんで、こんな事に……………」

ブツブツとそんな事を呟きながらも、クリスは翼やクラスメイトと共に、カラオケ大会が開かれている大ホールへと向かうのだった。

「……………みんな惜しかったね。勝ち抜けば悲願達成だったのに」

カラオケ大会の観客として大ホールに来ていた響が、惨敗に終わってしまった友人達への労いの言葉を口にする、「そうね」と隣に座っていた京水が答える。

「でも、敗北も悪いものじゃないわ。あの子達には敗北を糧に、次回に活かしてもらいたいわね」

「あ、やっぱりそう思います？ ……………ていうか、京水さんはここにいていいんですか？」

京水と響を挟む形で座っている未来の質問に「いいのよ」と答える。

「最初はボス達を手伝おうかと思ってたんだけど、ボス直々に『お前達も休め』なんて言われちゃったから、NEVER総出で貴女達のいる学院に来たわけ。ここは広いからみんなバラバラになつて行動してるけど、もしかしたらどこかでバッタリ出くわすかもね。……………あ、次の挑戦者が来るみたいよ」

大ホールが新たな挑戦者を迎える歓声と拍手の音に包まれ、響達がスポットライトが当てられているステージに目を向けると、そこには普段ならこういったイベントの参加は絶対に断るであろう少女が立っていた。

「響、あれって……………ッ！」

「うっそおッ！」

「あら、あの子も挑戦するなんて意外ね」

そこにクリスと別れた翼がやって来る。

「雪音だ。《私立リディアン音楽院》、二回生の雪音クリスだ」

大ホールに集まった人々の視線が注がれて固まっているクリスは、しばらく俯いていた。

（……………成り行きで連れてこられちゃったが、いきなりこんなところで歌えるかよ……………）

スポットライトと観客の視線を一身に浴びてクリスが穴があったら入りたい気持ちになつてしていると、自分をここまで連れてきたクラスメイト達が舞台袖から見つめている事に気付く。

静まり返っているため、自然と抑えられた声で「頑張つて」と応援してくれていた。

それで少しは気分が軽くなり、マイクを握る力を強める。

「誰かに手を差し伸べて貰つて」

静かに歌い出し始める。

大ホールに設置された席を埋め尽くす程の観客数だ。恥ずかしさはもちろんある。

「傷^{いた}みとは違つた傷^{いた}みを知る」

だが、一度歌い出せば、もはやその口は止まらない。そして、先程まで感じていた恥ずかしさも、徐々に消えていく。

「モノクロームの未来予想図 絵具を探して」

彼女の歌声に、誰もが魅了されていく。克己達も、大ホールに来ていた切歌と調も、敵味方の区別も無く。ただただ、彼女の歌声に身を委ねる。

「……………でも今は 何故だろう、何故だろう」

ふと、学院に転入したばかりの頃を思い出す。

全く新しい環境に投げ出された自分を気にかけて、食事に誘つてくれたクラスメイト達。

「色づくよゆつくりと 花が虹に誇つて咲くみたいに」

彼女達の気持ちを知りながらも、自分はずっと彼女達を避け続けていた。

でも、彼女達はそれでも、こんな自分との距離を縮めようと、彼女達なりの努力をしてきた。

それが今は、本当に嬉しい。

「――放課後のチャイムに 混じった風が吹き抜ける」

一人で黙々と食事を取っていた時、そこを通りかかった一人の教師が、小さく口にした言葉。

『勇気を持って、前に進め。誰かと関わりを持つのは、素晴らしい事だ』と。

それはきつと、彼が表向きとはいえ『教師』という立場に立つ者の一人として言った言葉なのだろう。だけど、その言葉は、自分に一歩踏み出す勇気をくれた。

「――感じた事無い居心地のよさにまだ戸惑ってるよ」

今はただ、感謝を。それだけを歌声に乗せ、これを聞く者達に届ける。

音楽の授業では、無意識に笑顔になっていた。授業中で無意識に笑顔になっていたのはとても恥ずかしかったが、今はそんな気持ちなどこれっぽちも無い。

「――ねえこんな空が高いと 笑顔がね……………隠せない」

大ホールに連れてこられる前、クラスメイト達が言っていた。『雪音さんはいつも、凄く楽しそうに歌っている』と。

ああ、そうだ。歌を歌っている間は、辛い事を思い出す事など無く、ただ『楽しい』という気持ちでいっぱいだった。

「――笑ってもいいのかな 許してもらえるのかな」

数ヶ月前までは、歌が嫌いで仕方なかった。大好きな父と母を死に誘ったものだと、憎しみさえ覚えていた。だけど、それは偽りのものだった。

どれだけ憎いと思おうとしても、憎み切れなかった。

それは、自分がどうしようもなく、歌が大好きだという事に他ならなかった。

「――あたしはあたしの せいいっぱい、せいいっぱい
……………」

だから今は、自分が大好きな歌を歌い続ける。

こんな楽しい事を、やめられるはずがない。いや、やめたくない。

「――ここから、ここから……………あるがままにうたっ
てもいいのかな……………!」

溜めに溜めた想いを、一気に解き放つ。

「――太陽が教室へとさす光が眩しかった」

そのフレーズに、誰もが幻視する。

快晴の青空の下、花畑に腰を下ろして、幸せそうに微笑むクリスの姿を。

「――雪解けのように何故か涙が溢れて止まらないよ」

それはきつと、彼女が心に描く景色。

暗い感情など欠片も存在しない、ただ『幸せ』のみが存在する世界。

「――こんなこんな暖かいんだ……………」

花吹雪を纏って、柔らかな風に髪を靡かせる。

人々が幻視する景色。それこそが『雪音クリスマス』という少女の歌に籠められた、ありのままの感情。

「あたしの帰る場所」

そしてそれは、同時に彼女が長い間求め続けた場所でもある。

「あたしの帰る場所」

絶望も恐怖も無い、幸せに満ちた場所。そこが、クリスマスの帰る場所なのである。

(楽しいな……………。あたし、こんなに楽しく歌えるんだ……………。
……………。そっか、ここはきつと……………。)

これまで例を観ない程の称賛を浴びながら、自分の気持ちを出し尽くしたクリスマスの表情は――

(あたしが……………。いてもいいところなんだ……………。)

ただ、幸せに満ち足りていた。

「勝ち抜きステージ、新チャンピオン誕生ッ！」

クリスマスの歌声に魅了された審査員も観客達も満場一致で、クリスマスが今回のカラオケ大会のチャンピオンに決定する。

先程までとは打って変わって、消えていた恥ずかしさが再燃して顔が熱くなるクリスマスだが、そんな事はお構いなしに司会が観客席を見渡しながら叫ぶ。

「さあ、次なる挑戦者はツ!? 飛び入りも大歓迎ですよツ！」

だが、その呼びかけに答える者は現れない。

それもそうだろう。あそこまでの歌を聴かされては、尻込みしてしまうのも仕方ないと言える。

否——

「やるデスツ！」

ここに、二人いる。

「なツ、あいつら………ツ!?!」

スポットライトが当てられた二人の少女——切歌と調を見て、クリスが驚愕の声を上げた。

道具の在り方

「翼さん、あの子達は……………ッ！」

「ああ……………。だが、なんのつもりで……………？」

自分達とは敵対関係にある二人の少女達の登場に驚く響達に、イマイチ状況が読めていない未来が首を傾げる。

「響……………あの子達を知ってるの？」

「う、うん……………。あのね、未来……………」

響が未来に彼女達の説明をし始めた頃、当の二人はクリスのいるステージに向かい始めていた。

——一方、人気のない倉庫に隠されている『フィーネ』が所有する飛行機の中では簡単なシミュレーションが行われており、仮想ノイズを一通り殲滅させたマリアとイクシードに、別室からその様子を見ていたナスターシャが労いの言葉をかけていた。

『調子は戻ったようですね』

「大丈夫って言ったでしょう。この程度のノイズのシミュレータなんて、相手にならないわ」

まだ余裕と言うかのように右手の槍を軽く振ると、ナスターシャの声がシミュレーションルームに響く。

『ならば、これならどうですか？』

即座に戦闘態勢を取ったマリアの前に現れたのは——

人の男性。

もちろん本物ではなく、先程まで戦っていたノイズと同じ、仮初の存在だ。

だが、たとえ仮初の存在と言えども、人間を相手にしたマリアは無意識に警戒心を解いてしまった。

その隙を逃す事無く男性がマリアに掴みかかろうとするが、彼女に伸ばされた腕は途中で止められる事となる。

「排除」

いつの間にか男性の背後に移動していたイクシードによって首を押し折られた男性がその場に崩れ落ちると、二人を取り囲んでいた仮想の景色が消滅する。

「مامツッ！ さっきの訓練ではどうして……………ツ!？」

ギアを解除してシミュレーションルームから出るや否や、ナスターシヤがいる部屋に飛んできたマリアに、ナスターシヤは軽く溜息を吐く。

「貴女は優しすぎます。しかし、その優しさは任務遂行の妨げになります。だから、それは捨てなければなりません。血に汚れる事を怖れないで」

翼とのライブの際にも言われた言葉をもう一度言われ、歯噛みする。

「私達はテロリストです。世界を敵に回した以上、いずれ人殺しをする時が来るでしょう。その時に躊躇されては困ります」

「でも、私は……………ツッ!」

その時、機内に緊急事態を告げるサイレンが鳴り響いた。すぐにナスターシヤの手が動き、凄まじい速さでキーボードを操作してモニターに映像を映し出す。

そこには、同じ装備を身に着けてマリア達がいる飛行機が隠されている倉庫へ侵入しようとしている集団が映っていた。

「装備から米国からの刺客と判断」

「今度は本国からの追手ですか。踏み込まれる前に攻めの枕を押さえにかかりましょう。排撃をお願いします」

「排撃って……………、相手はただの人間。ガングニールの一撃を喰らえば……………ッ！」

最悪死んでしまうかもしれない。そう考えるマリアだが、それをナスターシヤが考え付かないはずが無い。

「そうしなさいと言っているのです。覚悟を決めなさい、マリア」
「でも……………」

「では、私が出よう。あの程度の装備であれば、ライダーシステムを使わずとも排除できる」

決して首を縦に振ろうとしないマリアを見かねて、ケアンが排撃に立候補すると、ナスターシヤは一瞬だけ目を細め、頷く。

「わかりました。行ってきなさい」

「了解」

「……………待ってッ！」

踵を返して部屋から出ていこうとしたところを止められ、ケアンが振り向く。

「貴方は、なにも思わないの？ 同じ人を殺す事に、抵抗は無いの

「……………?」

「抵抗など無い。排除すべき敵なら排除するまで。道具わたしはただ、その為ために在る」

沈黙を流す事無くキツパリと返したケアンが退室する。

(どうして……………)

ケアンの返答に、マリアは知らず知らずのうちに拳を握り締めていた。

「……………お前ら……………ッ！」

「べえっつ」

ステージに上がった切歌がクリスに向けて舌を出して挑発していると、その隣に立っていた調が周りに聞こえないように抑えた声で切歌に尋ねる。

「切ちゃん。私達の目的は……………」

「聖遺物の欠片から造られたペンダントを奪う事……………デスッ！」

「だったら、こんなやり方しなくても……………」

「聞けば、このステージを勝ち抜けると望みを一つ叶えてくれるとか。このチャンス、逃すわけにはいかないのデスッ！」

「面白えッ！ やり合おうってんなら、こちとら準備は出来てるッ！」

受けた勝負は降りない性分のクリスは、この挑戦を蹴らずに受ける。

「……………特別に付き合っただけ。でも、忘れないで。これは……………」

「わかってるッ！ 首尾よく果たしてみせるデスッ！」
「さあ、お二人が優勝した暁に望むものはなんですかッ!？」

司会の女子生徒の尋ねに、切歌はビシッと人差し指をクリスに指して答える。

「それは、戦い終わった後にこの元チャンピオンから直接頂く事にしますデスッ！」

「ハッ、もしあたしに勝てたら、なんだつてくれてやらあッ！」

「それでは歌っていただきましょうッ！ えくと……………」

「月読調と……………」

「暁切歌デスッ！」

「OKッ！ 二人が歌うのは『ORBITAL BEAT』ッ！ もちろん、ツヴァイウイングのナンバーだッ！」

この場にいる誰もが知っている曲の前奏が流れ始め、大ホールが歓声に包まれる。

「こ、この歌ッ！」

「翼さんと奏さんのッ!？」

「なんのつもりなの当て擦り……………」

「十中八九、挑発でしょうね。よりもよって翼ちゃんの前で歌うなんて、やってくれるじゃない」

響達が驚く中、ステージに立つ二人はゆっくりと、かつて双翼が奏でた歌を口ずさみ始めた。

—— 米国から派遣された武装集団のリーダーらしき男が仲間に指示を出そうとした瞬間、倉庫の壁を貫通してきた右手が彼の頭を鷲掴みにした。

突然の出来事に硬直した戦闘員達の前に壁を砕いて現れたのは、ケアン・デイクス。

「排撃、開始」

「う、撃てッ！」

自分に向けられた無数の銃口から弾丸が発射されるも、ケアンはまるで動じる事無く先程頭部を握り潰した男の体を盾にしてそれを防ぐ。

銃弾の雨に晒されて全身に穴が開いていく肉と血が詰まった人形を一番遠くにいる戦闘員に投げつけ、全員の視線が一瞬逸れた隙を突いて一番近くにいた戦闘員に肉薄して手刀を突き出す。

一突きで心臓を貫かれた戦闘員の胸元から手を引き抜き、先程と同じく自分に迫る弾丸を防ぐ盾として活用し、次の行動も同様に自分と一番距離が離れている戦闘員に投げつけては自分との距離が一番短い戦闘員の命を奪うべく走り出す。

「この……………ッ！」

次の標的と定められた戦闘員がサブライバルナイフを手に抵抗してくるが、ケアンはそれを容易く躲して彼が手放した銃を拾い上げる。

引き金が引かれ、銃口から発射された弾丸が戦闘員達を撃ち抜き、倒れ伏した戦闘員達が撃ち抜かれた箇所を押さええて押し殺した悲鳴を上げる。

シンフォギア装者も相手取る為、精鋭揃いであったはずの戦闘員全員があつという間に無力化された様に、それをモニタリングしていたマリアは絶句していた。

(もういい……………。もういいでしょう……………?)

敵対者は全員無力化した。後は彼らを置いて別の場所に逃げれば

いい。たとえば、またこのような状況になっても、ただ無力化するだけでいいではないか、と考えるマリアだが、その理屈はケアンには通じない。

「敵対者の存命を確認。排撃を続行する」

「や、やめ——」

懇願など聞き入れられるはずも無く、戦闘員の一人が撃ち殺される。それを見ていた他の仲間達が這いずって逃げようとするも、一人、また一人とケアンによって頭部を撃ち抜かれていく。

冷酷に、冷酷に。ただ、与えられた任務を完遂する。

その為に、ケアンは最後の一人に銃口を向け、引き金を引こうとし

「——やめなさい、ケアンツ！」

漆黒のガングニールギアを纏ったマリアに止められる。

「退け。任務の邪魔になる」

「もう充分でしょう？ これ以上、彼らを傷つけるのはやめて」

敵であるはずの戦闘員を庇う彼女にケアンが眉を顰める。

「彼らは我々の障害であり、ここで排除すべき存在だと認知しているが」

「彼らには家族がいるはずよ。こんなところで、死んでいいはずがないわ」

「関係ない。彼らは愛国心故に日本に赴いたのだ。死ぬ事すら覚悟しているだろう。であれば、この場で死ぬとしても悔いはあるまい」

「それは、貴方が決める事じゃないッ！」

「……………マリア。私はお前がわからない。敵を庇うその在り方は、

我らには不必要なはず。なのになぜ、お前は一向に私の前から退こうとしない」

「それは……………」

「ぐ、う……………ッ！」

背後から呻き声が聞こえ、マリアがそれを上げた戦闘員に駆け寄ろうとした瞬間、ケアンに横に投げ飛ばされた。

「なにを——」

マリアの抗議の声はしかし、数発の発砲音によって掻き消された。尻餅をついたマリアの視界に、銃弾を受けて膝をつくケアンの姿が映る。

「ケアンッ！」

すぐにケアンに駆け寄ろうとするが、銃口がこちらに向いている事に気付いて即座にマントで弾丸を防御する。

「はあ……………はあ……………な、仲間達の……………敵討ちだ……………ッ！」

血反吐を吐き零し、仲間達の命を奪った敵を屠った事に満足げになつていた戦闘員だが、その笑みは恐怖に塗り潰される事となる。

「……………こういうのを、『しゃらくせえ』と言うのか？」

「……………ッ!? な、なあ……………ッ!?!」

数発の弾丸に撃ち抜かれたはずのケアンが何事も無かったかのよう立ち上がった様子を見て啞然としている間に、ケアンは怒りもせず引き金を引いて彼を撃ち殺した。

「排撃完了」

ナスターシヤから受けた任務を完遂したケアンが戻ろうとするも、その手をマリアに取られる。

「なにをする、マリア」

「さつき撃たれたでしょう？ 傷を見せなさい」

「損傷は軽微だ。お前が考慮すべき程のものではない」

「それでもよ。防弾チョッキでもつけてるだろうけど、万が一という事もあるわ。ほら、さつきと見せる」

「だが……………」

「見せる」

「……………了解」

折れたケアンが諦めたように抵抗をやめ、マリアは早速とばかりに彼の服に手をかけ、その奥にある素肌を視界に収めるが――

「……………なによ、これ……………」

鮮血の代わりに火花が散っている腹部を見て、マリアは絶句した。

「――チャンピオンとてうかうかしてられない、素晴らしい歌声でしたッ！ これは得点が気になるところですッ！」

クリスのそれとは異なる良さを感じさせる切歌と調の歌声に魅了された観客達が二人に称賛を浴びせるが、二課に所属する者達、特に翼は、素直に称賛出来ずにいた。

仕方なく付き合っていた調と違って切歌が満足げに鼻を鳴らしていると、二人がポケットに入れていた通信機に通信が入る。

なんだろう、と二人して互いの顔を見合わせて通信を開くと、ナスターシャの声が聞こえてくる。

『アジトが特定されました』

「……………ッ!?!」

突然の報告に固まる二人に、ナスターシャが続ける。

『襲撃者は退ける事が出来ましたが、場所を知られた以上、長居は出来ません。私達も移動しますので、こちらの指示するポイントで落ち合いましょう』

「そんなッ！ あと少しでペンダントが手に入るかもしれないのデスよッ!?!」

『緊急事態です。命令に従いなさい』

「……………ッ!?!」

そう言われてしまえば、なにも反論出来ない。緊急事態であるなら、たとえペンダントが目の前にあったとしても退かなければならない。

「さあ、採点結果が出た模様で……………え、ちょっと、どこへ行くんですかッ!?!」

「お、おいッ！ ケツをまくんのかッ!?!」

突然ステージを降りた二人の背中に司会とクリスの声が投げかけられるも、それを無視して二人は悔しい思いを噛み締めて走っていく。

「調ッ!?!」

「マリアとケアンがいるから大丈夫だと思う……………。でも、心配だから……………」

「……………」

観客達の戸惑いの視線を受けて外へ向かっていく二人を遠くの席から見ていた翼が立ち上がる。

「追うぞ、お前達ッ！」

「ええッ！」

「未来はここにいて……………。もしかすると、戦う事になるかもしれない」

「う、うん……………」

戦う力を持たない未来を巻き込まないように大ホールに残して切歌と調を追い始めようとした瞬間、弦十郎から通信が入る。

『ノイズが現れた。至急、駆除に向かってくれッ！』

「そんな、すぐそこに二人がいるのに……………ッ！」

「仕方ないわね。ここは諦めて、ノイズの駆除に行きましょう」

切歌と調は既に人混みに紛れてしまった頃だろう。そうやってしまつては見つけるのは難しいと割り切り、響達はノイズが出現したとされる場所へ向かった。

———《私立リディアン音楽院》に潜入していた装者達との連絡を終えたナスターシャは、モニターに映し出されているケアンとマリアを見る。

いずれこの時は来るとは思っていたが、まさかこのタイミングだとは思わなかった。彼女が機内に戻れば、間違いなくケアンについて訊ねてくるだろう。ケアンは自分について他人に話せるほど、自分を理解していないのだから。

「……………？ あれは……………」

ふと、視界の端に入った別のモニターに白い人影が映ったのに気付いて視線を向けると、そこにはソロモンの杖を握って歩くウエルの姿があった。

既に敵対勢力は排除したはずだ。それとも、自分が見つけていない部隊がまだ存在するのか。

気になって別の監視カメラの映像を映し出してみたナスターシヤは、その一つに映り込んだものを見て啞然とした。

そこには、今まさにケアンとマリアがいる場所へ向かおうとする、子ども達の姿が映し出されていた。

「————— 凄いい音がしてたの、ここじゃない？」

自転車を漕いで飛行機が隠されている倉庫のすぐ傍まで来ていた子ども達の一人が周囲を見渡しながら友達に訊ねると、そのうちの一人が返す。

「どうせなにかの工事だろ？」

「早く練習に行かないと監督に怒られるってば……………」

「ちよつとくらい遅れたっていいだろ？ 確かこつちから……………え？」

曲がり角を曲がった少年が、眼前に広がる光景に呆然とする。続いて曲がってきた子ども達も、目の前の光景を前に体が固まる。

そこら中に鮮血や臓物を散らばらせて転がっている、十数人分の遺体。そして、その中心に立ってこちらを見ている、二人の男女。

まだ難しい事は考えずらい子ども達でも、この場でなにが起こったかは即座に理解出来、震える体をなんとか押さえてこの場から去ろうとするも———

「おやあ……………?」

——いつの間にか、自分達が来た道に立っていた白衣の男性によって阻まれてしまう。

「ケアンの成長を確認しようと思って来てみれば、とんだネズミがいたようですねえ?」

ねっとりとした口調で話すウエルが、右手にソロモンの杖を持っている事に気付いたマリアが叫ぶ。

「やめろ、ウエルッ! その子達は関係ないッ!」

「関係ないと言われてもですねえ。こうして見られてしまった以上、口封じしなければなりません」

後ずさる子ども達の少し前に向けられたソロモンの杖から数本の光が発せられ、数体のノイズが現れる。

子ども達がいきなり目の前に現れたノイズに呆然としている間に、ノイズは彼らを炭化させようと迫る。

「ハアッ!」

だが、子ども達の前に立ったマリアが槍を振るった事で、ウエルの召喚したノイズはまとめて消滅した。

「早く逃げてッ! 殺されるわよッ!」

「う、うんッ!」

子ども達がすぐにペダルを漕いでその場から逃げようとした瞬間、ウエルの叫びが響く。

「ケアンツ！ そいつらを排除しなさいッ！」

新たに命令を受けたケアンが子ども達の前に立ち、逃げ道を塞いだ。

「悪いな。運が悪かったと思え」

手始めに一番手前の少年から殺そうと、ケアンが血塗れの右手を上げるが――

「やめなさい、ケアンツ！」

マリアの言葉に、ピタツと動きを止める。

「その子達は関係ないッ！ 私達に危害を加える気なんて無いし、貴方もその子達を傷つける必要も無いッ！」

「……………」

硬直したまま、マリアと子ども達に交互に視線を向け続ける間にも、状況はさらに悪くなっていく。

「なにをしているのですッ！ ならば、私がッ！」

「……………ッ！ しまったッ！」

マリアがノイズの相手をしている間にウエルが再び子ども達の真後ろにノイズを出現させる。

「ケアン、お願い……………ッ！ その子達を護ってッ！」

「無駄ですよ。彼は貴女の命令など聞きは――」

『Exceed Active』

自信に満ちたウエル表情は、子ども達ではなくノイズを攻撃したケアン——イクシードを見て驚愕のものに変わる。

一瞬でノイズを屠った仮面の戦士が振り向き、『逃げる』と無言の圧力をかけてくる。

その圧力に圧された子ども達が我先にと走り出していく。

「ケアンッ！ いったいなぜッ！」

「この下郎ッ！」

「ひいッ!？」

与えられた命令をこなさなかったケアンに詰め寄ろうとしたところをマリアに胸倉を掴み上げられる。

無関係な子どもを殺害しようとした事が気に入らなかったマリアは恐怖に震えるウエルの体を無造作に投げ捨てて倉庫に入っていく。

「なぜです……………、ケアン。なぜ、私の命令を……………」

「……………理解出来ん」

「なんですって……………?！」

「私自身、理解出来ないのだ。簡単な命令だったはずなのに、なぜ私は……………」

『二人共、飛行機に戻りなさい。切歌と調を迎えに行きます』

「……………了解」

先程まで交戦していた武装集団と比べれば『弱すぎる』と断言できる子ども達相手に、『殺す』という考えが浮かばなかった。それが理解出来ないまま、ケアンは飛行機に戻っていく。

「まったく……………。道具として在り続けようと言うのなら、黙って命令を聞いていればいいものを……………おや?！」

愚痴を零して歩き出そうとすると、なにかを蹴ったような感覚を覚える。無意識に足元を見下ろすと、そこには見慣れない装置が落ちていた。

『進化』の過去

三ヶ月前、まだ改心していなかったファイネが月破壊を目論んで建造するも、翼の決死の行動によって破壊された塔、《カ・ディングル》。現在は日本政府によって立入禁止区域に指定されているその場所に、切歌と調は立っていた。

なぜ彼女達がここにいるのかというと、《私立リディアン音楽院》から脱出した二人にナスターシャが伝えた合流地点がこの場所だったからである。

しばらくしない内に光学迷彩を一瞬だけ解いた飛行機が現れ、機内に乗り込んだ二人をナスターシャ達が迎える。

「二人共、ご無事で何よりです」

「お帰りなさい」

「マリア、ケアン、大丈夫だった？」

「……………ええ。だけど、私は出ていないわ。ケアンが迎撃してくれたの」

「そうデスか。こいつにお礼を言うのは少し癪デスが……………感謝しとくデス」

「当然の事をしたまでだ。礼は必要ない」

少しも照れた様子など見せず、相も変わらず無感情な表情で答えるケアンを見たナスターシャは、「皆さん」と口を開く。

「今まで秘密にしていた事ですが、話したい事があります。ケアンについての事です」

現在、ナスターシャ達の乗っている飛行機はとある聖遺物の力によって完全に隠蔽されている。たとえ、あのファイネが所属している二課であろうと、自分達の居場所を特定するのは不可能。それは、こ

の場にいる全員が確信している。

ならば、全員が揃っているこの間に、ケアンについて話そうと考えたのだ。

「……………そういえば、私達……………」

「ケアンについてほとんど知らないです」

「貴女達三人とケアンは、私が貴方達を連れてF・I・Sから出奔した時が初対面でしたからね。彼の事を知らないのも当然でしょう」

「それを言ったら私だってそうですが？」

「貴方の事は前々から軽く話していましたが、『なにも知らない』には含まれませんよ。それに対し、ケアンの存在はF・I・S内でも機密事項として扱われていました」

「機密事項？　なんで、ただの人間がそんな扱いを……………」

他国に公表する事の無い聖遺物の情報や、ケアンが人知を超えた力を持っているのであれば理解できるが、なぜ一個人の存在自体を秘密にしているのか。その理由は、これからナスターシャによって語られる。

「お話ししましょう。ケアン・デイークスの過去を」

そうして語られるのは、ケアンを除いた全員を驚愕させるに十分な内容だった。

——ケアン・デイークス。かつてF・I・Sにロボット工学を専門に研究員の一人として所属していた彼を表す言葉は、『文武両道』であった。

24歳という若さで、F・I・Sの中でもトップクラスの知能を持つ祖父ヴィクター・デイークスの助手として類稀なる才能を発揮する他、銃器の扱いにも精通していた。彼の両親は元SWAT隊員であ

り、ケアンが産まれてから間もなく不幸な事故によって死亡しているが、その才能はケアンにしっかりと受け継がれていたのだ。その戦闘力は生前の両親にも、現役のSWATの精鋭達相手にも多少は劣ってはいるが、研究員という役職には似合わない程の実力を持っているとされていた。

知識は祖父から。身体能力は両親から受け継いだケアンは、自らの才能に驕る事無く、分け隔てなく仲間達に接しており、その性格は『明るい』の一言に尽きた。

物心つく前に両親を喪いはしたが、彼らが与えられなかった愛情はヴィクターによって与えられ、唯一の肉親である祖父に愛情を持って接していたケアンだったが、平和な時間は長続きしなかった。

ある日、ケアンは散歩中にトラックに撥ねられそうになっている子どもを庇い、命を落としたのだ。

息子夫婦にも最愛の孫にも先立たれたヴィクターは、深い哀しみを抱えながらも米国、ひいては米国民の為に聖遺物を用いた研究に没頭した。

だが、年老いて成熟しきっているとはいえ、その精神は哀しみに耐え切れず、彼は次第に過去の幻影に取り憑かれていった。

それきり、ヴィクターは滅多に自分の研究室から出る事は無くなり、唯一彼とまともに会話できたのは、別の分野の科学者でありながらも彼の愛弟子であったナスターシャのみとなっていた。

そんなある日、F・I・Sに転機が訪れる。

『終焉』の名を持つ女、フィーネが現れたのである。

失われた統一言語の奪還を目的とするフィーネは、とある二つの聖遺物をF・I・Sに提供した。

一つは『神獣鏡』シエンシヨウケンと呼ばれる、鏡に起因する幾つかの特性を備えた、現在は『フィーネ』の有する飛行機の機能として組み込まれている聖遺物の欠片。そしてもう一つが、成長する完全聖遺物『ネフィリム』である。

そしてヴィクターは、ネフィリムの存在に目を付けた。

今はまだ覚醒していないが、フィーネは近い将来必ずネフィリムを目覚めさせる。そしてネフィリムは聖遺物と生物の混合物のような存在。その力を手中に収めるのはフィーネとF・I・S共通の目的であるが、同時に問題もあった。

如何に強力な力を宿していたとしても、その力を制御し切れるかどうかという問題だ。もしそれが出来なかった場合、最悪自分達が喰われかねない。

そこで声を上げたのが、ヴィクターだった。

F・I・Sのロボット工学の権威の提案は、『ネフィリムの細胞組織とロボットの電子回路を同一化させ、ロボットを媒介に命令を送る形でネフィリムを制御する』というものだった。

古代の科学技術によって誕生した完全聖遺物と、現代の科学技術の結晶であるロボットの融合。前代未聞のこの提案に反対する声も多かったが、過去のネフィリムの詳細を記憶しているフィーネがその提案を受け入れ、早速ヴィクターはネフィリムを制御しうるロボット開発に着手した。

もちろん、それは失敗の連続だったが、それでも諦めきれないヴィクターは、五回目の開発の末、遂に完成させたのだ。

そうして生まれたのが、今マリア達の前に立つケアン——
否、『ケアン・デイクス』の外見と名前を得た、一体のアンドロイドである。

しかし、完成までこぎ着けたとはいっても、それはあくまで外見だけの話。内部は完全に生前の彼のものではなく、なにも知らない、真っ白なものだった。

当然、ヴィクターは生前のケアンの性格すらも彼に身に着けようとしたが、F・I・Sはそれを許さなかった。

彼らが欲するのは、ネフィリムを完全に制御しうる存在。ネフィリムと同一化させる以上、『性格』などというものは邪魔にしなければならない

のだ。

『違う形であれ、最愛の孫を蘇らせる』という欲望に取り憑かれていたヴィクターがそれに気づいた頃には、既になにもかもが手遅れであり、ケアン・デイクスの名を冠した機体はネフィリムとの同一化の為に彼の手から離れてしまいう事になっていた。

形は違えど、ようやく取り戻した孫を再び奪われる事となったヴィクターは、精神的なショックと度重なる開発による疲労が原因で倒れた。

老いたヴィクターの体にこの二つの障害を乗り越える力はどうに無く、己の寿命も後僅かと悟った頃、ヴィクターは愛弟子ナスターシャにある頼み事をする。

『ケアンを、幸せにしてほしい。たとえ機械でも、あれはわしの孫なんじゃ……………。ただ、人間らしく生きてほしい』

それは、F・I・Sの研究者ヴィクター・デイクスの言葉ではない、一人の人間の祖父ヴィクター・デイクスの願い。過去の哀しみに敗北しながらも、大切な孫を取り戻そうと、その命を燃やした男の悲願。

『ケアンよ……………どうか——』

幸せに。

ただ、孫の幸せだけを祈って、ヴィクターはこの世を去った。

ナスターシャを始めとした彼の弟子達は、恩師であるヴィクターの願いを叶える為に奔走したが、たった数十人の力で物事を解決できるほど現実には甘くなく、ケアンとネフィリムの同一化の決定は覆る事は無かった。

そして、それから二年が経ち、調整に調整を重ねたネフィリムとケアンの同一化実験が行われた。

歌に頼らずに完全聖遺物ネフィリムを起動させ、ケアンを使ってそ

の力を完璧に制御する事で成功とされていたその実験結果はしかし、予想だにしない出来事によって大きく変化した。

正規のものではない手段で起動させたために起こった、ネフィリムの暴走である。

起動したネフィリムは本来の色とはかけ離れた白い体色となって施設を蹂躪せんとしたが、その怪物は、一人の少女によって鎮められる事となる。

その少女こそ、他ならぬマリアの妹——セレナ・カデンツァヴァナ・イヴである。

彼女の文字通り命を懸けた行動の末、アルビノ・ネフィリムは基底状態に封じられ、同時にアルビノ・ネフィリムと同一化されていたケアンも電子回路に謎の異常が生じ、その機能を停止した。

実験は失敗。歌以外による起動は危険と判断され、機械を媒体にしたネフィリム起動計画は凍結。電子回路に謎の異常が生じて機能が停止したケアンも、それから現在まで、いつ必要になっても稼働可能であるようにメンテナンスこそ行われはしていたものの、その機能を活用する機会には恵まれなかった。

そして、ナスターシャがマリア達を連れてF・I・Sから出奔しようとした時、ナスターシャは施設の奥深くで眠り続けるケアンの元を訪ね、いつ来るかもわからない再稼働の日を待ちわびていたケアンを再稼働させた。

それからはマリア達も知っている通り、ケアンは出奔したナスターシャ達に差し向けられたF・I・Sの刺客を皆殺しにし、『ファイネ』の所有する兵器として活動する事になったのだ。

ナスターシャからケアンの過去を語られたメンバー

達は、今日の前に立つ存在が本物のケアン・デイクスではなく、その名前と外見を得た偽物であるという驚愕と、これまでなぜ彼から人間性を感じ取れなかったのかが理解できたという感情がごちゃ混ぜになってしまい、口を開けなくなっていた。

「本来ならもっと早く語るべきものだったのでしよう。それがこんなにも遅くなってしまい、申し訳ありません」

「いいのよ……………ママ。こっちこそ、辛い事を思い出させてごめんなさい」

「……………以前、貴女のその優しさを責めましたが、今だけは感謝しましょう。ありがとうございます、マリア」

「……………ケアン」

声をかけられて視線を向けてくるケアンに、マリアは静かに問いかける。

「貴方は、お祖父様の事をどう思ってるの？」

『祖父』という概念は知識として保有しているが、ママの言う通り、私はケアン・デイクスの名と形を借りているに過ぎないアンドロイド。私という存在を造った事には感謝しているが、それ以上の感想は無い」

「そう……………」

ケアンの答えにマリアが目を伏せると、聞き捨てならないセリフが聞こえてくる。

「まったく、実にくだらない」

その場にいる全員の視線が、その言葉を発した張本人——
ウエルに向けられる。

「……………もう一度言ってくれるかしら？　今、貴方はなんて言ったの？」

『くだらない』と言ったんですよ。いいですか？　ここにいるケアンはアンドロイドであって、『本物』ではないんですよ？　それなのに、彼が本物であるかのように扱うとは」

「なんですって……………ッ！」

「ここにいるケアン・デイクスト、教授が話したケアン・デイクスは完全な別人です。設計の基になった存在の話をして、意味は無いと思いますかね」

「……………ッ！」

思わずウエルに掴みかかろうと手を伸ばすが、それはケアンに手を掴まれて阻止される。

「ウエルの言う通りだ。私は、この機体の基礎となった男とは違う。彼の言葉に間違いはない」

「それくらい……………考えなくたってわかるわよ。でもね、私は是非でも家族を取り戻そうとしたヴィクターさんの努力の結晶を、『くだらない』と吐き捨てたこいつが許せないのよッ！」

マリアがペンダントを握り締めようとし、ケアンも致し方無しと懐に手を忍ばせるが――

「やめなさいッ！」

ナスターシャの怒号によって、マリアは聖詠を口ずさもうとした口を、ケアンはラックドライバーを取り出しかけた手を止める。

「マリア、貴女の気持ちもわかります。ですが、仲間割れ程醜いものはありません。わかったなら今すぐやめなさい」

ナスターシヤの言う事にも一理あるので、マリアは大人しくシンフォギアを纏おうとするのをやめ、ケアンは微かに見えていたラックドライバーをしまう。

「……………で、これからどうするんですか？」

「一度ここから離れます。向こうに我々の居場所がバレていない今なら安全に行動できるはずですよ」

「待つデスよ、マムツ！」

今まで黙っていた切歌が声を上げ、ナスターシヤの視線が彼女に向く。

「あたし達、後少しというところでペンダントを取り逃してるデスよッ！ このまま引き下がれないデスッ！」

「駄目です」

「ええッ!？」

「そんな、どうして……………」

キツパリと拒否したナスターシヤに首を傾げる切歌と調。

「この戦いは遊びではありません。貴女達は、あのような大会で本当にギアを奪えるとも思っていたんですか？」

「う……………」

そう言われた二人は、もし自分達が勝利したとしても、あの少女が本当にシンフォギアを渡してくれるわけが無いと、当たり前前の事に気が付かされる。

黙り込む二人だったが、意外な事にウエルが二人に助け舟を出してきた。

「まあまあ、まだ危険な状況ではないですし、ここは敢えて彼らと戦う

のも一つの手ではないかと思いませんか？ 計画の障害は早めに取り除いておくべきだと、僕は考えますがけどね」

「しかし……………」

「貴方もそう思いますよね？ ケアン」

ウエルの問いに、「当然だ」とケアンが頷く。

「計画の妨げになる存在は、必ず殲滅する。それが、今の『私』のすべき事だ」

そこにあるのは慈愛も容赦もなく敵対者を排除せんとする、まさしく『機械』と表現するに値する存在。開発者の老人の願いとは真逆の世界に生きる彼を見て、マリアは思わず目を伏せてしまうのだった。

進化する怪物

「ノイズの発生パターンを検知ッ！」

ノイズの出現を告げるサイレンと報告に、仮説本部司令室の空気が一気に張り詰める。

「出現地点は？」

「位置特定……………ここは……………ッ!？」

藤堯が驚愕の声を上げ、その場所の名を叫ぶ。

「東京番外地、特別指定封鎖区域ですッ！」

「カ・ディングル址地あしちだとッ!？」

かつて響や克己達がフィーネとユートピアドーパントと死闘を繰り広げた場所の名にノイズが現れた事に、その場にいた誰もが嫌な予感を抱いた。

——弦十郎から連絡を受けて克己や響達がカ・ディングル址地に急行すると、彼らが来るのを待っていたかのように多数のノイズが襲ってくるが、克己はエターナルに、彼の部下達はドーパントに変身し、装者達はシンフォギアを身に纏ってノイズを蹴散らしていく。

だが、それだけで終わるはずも無く、ある程度進んでいくと、ケアンと多数のノイズを従えたウエルと遭遇した。

「ケアンの相手は俺達に任せて、お前達はウエルの確保を」

「了解です。気を付けてください」

ケアンの変身するイクシードは絶えず進化を続け、その戦闘力を増していく怪物だ。彼を相手にするのなら、一人で挑むより五人で挑む方が得策だと考えられる。対してウエルが従えているのはノイズのみ。シンフォギア装者の天敵ネフイルムの姿は確認できないが、今回は連れてきていないのだろうか。

「ケアン、私の事は気にせず暴れなさい。ノイズだけで彼らを押し切れるとは思えませんが、いざとなれば切り札を切りますよ。貴方は貴方らしく、敵対者を排除しなさい」
「了解」

懐から取り出したラックドライバーを腰に巻きつけ、T3イクシードメモリのスイッチを押す。

『イクシード！』

「変身」

『E x c e e d A c t i v e』

銀色の素体に纏った漆黒の鎧から蒸気を噴出させたイクシードとエターナルが対峙する。

「排撃、開始」

「悪いな。排除されるのは、お前の方だ」

自然体で立つイクシードに、エターナルは余裕を持った様子でサムズダウンしてみせ、部下達と共に駆け出す。響達もウエルが使役するノイズの掃討へ向かう。

エターナルエッジの刺突を受け流したイクシードの回し蹴りを受け止めると同時に足を掴んで投げ飛ばすが、イクシードは地面についた片手のバネで跳ね上がり、今度は着地と同時に地面を蹴り碎いてエ

ターナルとの距離を縮めてこようとする。だが、そこへヒートドーパントが側面から火炎を纏った右足でイクシードを蹴り飛ばし、彼が飛んでいく先で待機していたメタルドーパントがメタルシャフトを叩き付ける。

勢いよく地面に叩き付けられて大きく跳ねたイクシードの体がメタルシャフトで上空に打ち上げられると、トリガードーパントが放った無数の光弾が迫る。

イクシードは空中で体勢を整えて光弾を全て殴り飛ばすも、その体に黄色い両腕が巻き付いたかと思えば再び地面に叩き付けられる。

「いくわよ、克己ちゃんッ！ そくれッ！」

何回かイクシードを地面に叩き付けてから、ルナドーパントはエターナル目掛けてイクシードを投げ飛ばす。

ドーパントの腕力で投げ飛ばされたため、凄まじい勢いで飛んでくるイクシードを殴り飛ばそうと構えたエターナルの拳に蒼炎を纏わせるが、

『ゾーン！』

「……………ッ!？」

T2ゾーンメモリに力を取り込んだイクシードが眼前から見え失せ、蒼炎のアツパーは標的を取り逃してしまう。そして次の瞬間、空気を切る音が聞こえたので反射的に屈むと、エターナルの頭上をイクシードの右足が通り過ぎていった。

ただ屈んで躲いただけでは終わらせず、エターナルはイクシードに足払いをかけようとするが、彼は後方に飛び退いて足払いを回避する。だが、それを読んでいたエターナルは上空にエターナルエッジを投げると同時にバク転でイクシードとの距離を縮めていく。

迫ってくるエターナルを殴り飛ばそうと突き出されたイクシードの拳を跳躍して躲し、彼の背後に着地すると同時に先程投げたエター

ナルエッジを手にとって連続でイクシードの背中を斬りつける。

「む……………ッ」

「お前の事はフィーネから聞いている。だが、ただ戦うだけじゃつまらないだろう？ もっと楽しもうじゃないかッ！ ハハハッ！」

「……………『楽しみ』など、私には必要ない」

両腕を広げて笑うエターナルに向かって拳を握り締めて走り出すイクシードに軽く溜息を吐き、

「どこまでも『道具』で在り続けるか。いいだろう。とことんまで付き合ってやるッ！」

エターナルエッジを回転させながら、エターナルもイクシードを迎え撃つべく駆け出した。

「……………調ちゃんとか切歌ちゃんはッ!？」

人型ヒューマノイドノイズを殴り飛ばして炭化させた響に、多数のノイズの背後に立つウエルが答える。

「答えられませんね。まあまあ、そんな顔しないでください。仲間に乱暴するほど、僕は酷くありませんよ」

「なにを企てているッ！」

刀の切っ先を向ける翼に心外だとばかりにウエルが返す。

「企てる？ 人聞きの悪いッ！ 我々が望むのは、人類の救済ッ！」

「なんだと？」

世界に宣戦布告したグループからは到底考えられない目的に三人が唾然とする中、ウエルは真上に浮かぶ、一部が欠けた月を指差す。

「月の落下にて損なわれる、無辜の命を可能な限り救い出す事だッ！」
「月のッ!?!」

「月の公転軌道は、各国機関が三ヶ月前から計測中ッ！ 落下などと結果が出たら、黙ってなど……………」

「黙っているに決まってるじゃないですか。対処法の見つからない極大災厄など、さらなる混乱を招くだけです。不都合な真実を隠蔽する理由など、幾らでもあるのですよッ！」

「まさか、この真実を知る連中ってのは、自分達だけ助かるような算段を始めているわけじゃ……………」

「だとしたらどうします？ 貴女達なら……………」

押し黙る三人に対し、ウエルは自分達が導き出した答えを口にする。

「対する僕達の答えが……………ネフィリムッ！」

彼の叫びが引き金になったかのように、突如として地面を突き破って巨大な『なにか』が姿を現す。

「ぐあ……………ッ！」

「雪音ッ！ ……………くッ、気を失ったか……………」

『なにか』が勢いよく飛び出した衝撃で気絶したクリスを翼が抱き抱えた瞬間、ウエルが召喚したダチヨウ型ノイズの吐き出した糸によって絡め取られてしまう。

「このようなもので……………」

だが、大人しく拘束される翼ではない。

今の状態でこの粘性の糸から逃れる事は出来ないが、こちらにはそれを可能とする術がある。

「私達を捕らえたつもりかッ！」

『疾風』の力を宿した天羽々斬——天羽々斬・翼風刃を纏った翼の体を中心に発生した突風が無数の小さな鎌鼬となって、主とその友人を捕えていた糸を切り裂く。

「ガイアメモリの力を応用した強化形態ですか。ですが、それでこのネフィリムが倒せるとでもッ！」

出現したネフィリムが咆哮し、響と翼に襲い掛かってくる。

「立花ッ！ 雪音を護りながら戦うぞッ！」

「はいッ！」

『熱』の記憶を宿したガングニール——エルナンデイ・ガングニールを纏った響が両手から放った火炎弾をネフィリムの足元に着弾させると、そこを起点に発生した巨大な炎の竜巻がネフィリムを捕らえる。

「ハアッ！」

二本の剣を合体させて完成させた大太刀から飛んだ風の斬撃から炎の竜巻に呑み込まれると、斬撃は竜巻に操られて内部に囚われたネフィリムを切り刻んでいく。

竜巻が消え、拘束を解かれたネフィリムが傷だらけの全身から黒煙を立ち昇らせながらも、目の前の獲物に喰らいつこうと迫ってくる。

「立花、雪音を頼んだぞッ！」

「はいッ！」

響がクリスを抱えてネフィリムから距離を取る時間を稼ぐ為、翼が大太刀を元の双剣に戻し、突風を身に纏ってネフィリムに斬りかかる。

流石のネフィリムも風の補助を受けて加速する翼を捕らえる事は出来ず、振るわれる連撃は次々とその巨体に傷をつけていく。

「なにをしているのですッ！ たかが小娘一人も喰えないのですかッ！」

焦りを感じさせる怒号を上げて、ウエルが召喚したノイズを向かわせてくるが、翼はそれをネフィリムの相手をする片手間に斬り伏せていく。

「ええいッ！ ならばッ！」

「……………ッ！ しまったッ！」

クリスを抱えてここから離れていく響に向けたソロモンの杖から光線が放たれ、彼女達の前に巨人型のノイズが現れる。

響はクリスを抱えているから両手が塞がってしまっている。足を使えば簡単に倒せるだろうが、いきなり目の前になにかが現れると、一瞬だろうと体が竦んでしまうのが人の性である。

その一瞬を突いて、ノイズが二人を押し潰そうと巨大な腕を振り上げる。

「立花ッ！」

左手に持っていた剣を投げ、風力で加速させていく。短時間で高速の域にまで至った剣は巨人の頭部に風穴を開け、消滅させる。

「助かりまし……………翼さんツ、危ないツ！」

「……………ツ!?　ぐうツ!?」

しかし、そこへすかさずネフィリムが襲い掛かってくる。咄嗟に右手に持つ剣で防御態勢を取った瞬間、ネフィリムの右前足が叩き付けられ、勢いを殺し切れずに殴り飛ばされる。

地面を数度跳ねた衝撃で脳が揺さぶられ、頭を軽く振って視界を安定させると、先程まで右手にあつたはず剣が無い事に気付く。

どこに落としたのかと視線を彷徨わせかけた瞬間、ウエルの感極まった叫びが響き渡る。

「いったあああッ!　パクついた……………ツ！」

叫ぶウエルの視界には、殴り飛ばされた際に翼が落とした剣をバリバリと、まるで菓子を喰らうかのように貪っているネフィリムの姿が映っていた。

「完全聖遺物『ネフィリム』は、謂わば自立稼働する増殖炉ツ!　他のエネルギー体を暴食し、取り込む事でさらなる出力を可能とする。……………さあ、始まるぞッ！」

剣を飲み込んだネフィリムの体が一瞬震えたかと思えば赤く輝く始め、徐々に巨大化していく。

「聞こえるか?　覚醒の鼓動ツ!　この力が、フロンティアを浮上させるのだッ！」

「フロンティア……………?　フロンティアとはいったいなんだッ!」
「教えるわけが無いでしょうツ!　本当なら貴女の体ごと喰わせるつもりでしたが、剣一本でもこの変化ツ!　さらにさらにイツ!　ガイアメモリの力も取り込んだ事によって、ネフィリムは新たな進化を遂

げるのだッ！」

人の身の丈を優に超える程まで成長したネフィリムが両前足に赤黒い風を纏わせたかと思えば、咆哮と共にそれを振りかぶる。

(……………ッ！ あれは、マズイッ！)

両前足が叩き付けられた瞬間、それまで抑制されていた赤風が翼目掛けて一直線に飛んでくる。間一髪で回避に成功した翼だったが、先程まで自分が立っていた地面が数十メートル先まで直線状に削り取られている光景を見て戦慄する。

「なんとという破壊力ッ！ これがガイアメモリの力ッ！ いいぞネフィリムッ！ あの女を叩きのめし、喰らいつけッ！」

「く……………ッ！ 化け物めッ！」
「翼さんッ！」

風に乗って攻撃を仕掛けようとした翼に、戻ってきた響が声をかける。

「立花か。雪音は？」

「大丈夫です。安全なところに連れて行きました。それより、あれは……………」

「ネフィリムだ。お前がいけない間に剣を喰われてしまったな。最悪な事に、サイクロンメモリの力を使用してくる。……………来るぞッ！」

身構える二人の前でネフィリムが両前足を地面につけたと思うと、大きく空気を吸い込み――

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

大音量の咆哮を轟かせた。

その音量は今まで聞いてきたものとは比べ物ならず、それは最早『音』という領域を逸脱し、あらゆる存在に破滅をもたらす暴虐の『嵐』の域へと到達していた。

その暴虐の嵐を前に、二人は『避けなければ死ぬ』と直感で感じ取り、耳を塞ぎながら今の自分達が出せる最高速度で飛び退く。飛び退いた二人の間を通り過ぎていった爆音の嵐は先程の突風以上の威力を以て大地を削り取り、それを至近距離から聞いていた二人は耳を塞いでいたにも関わらず脳が揺さぶられるような感覚に襲われ、そこへネフィリムが攻撃を仕掛けてくる。

危うく振るわれた前足を避け、二人はネフィリムから離れた場所に着地する。

「立花、私に合わせてくれるか?」

「もちろんッ! ……………では、いきますッ!」

翼が胸の内から湧き上がる感情のままに歌い始め、二人が反撃に打って出る。

「ルナアタックの英雄達よッ! その拳で、剣でッ! なにを護るッ!」

聖遺物とガイアメモリの力を取り込んだ怪物を前に気圧される事無く戦う二人は、ウエルから投げかけられる問いに答えず、自分の気持ちに応えてくれた地球の記憶と共に、ネフィリムに攻撃を加えていく。

「そうやって君達はッ! 誰かを護る為の力で、もっと多くの誰かをぶっ殺してみせるわけだッ!」

「……………ッ!」

その叫びが、響のある記憶を呼び覚ます。

自分達が初めて『フィーネ』と交戦した、あのライブ会場。そこで対峙した一人の少女が、敵も味方も繋がりと信じて疑わない自分に対して零した、あの言葉。

『それこそが偽善』

その言葉を言われた際の衝撃が蘇り、響の動きが鈍る。そして、それを見逃すネフィリムではない。

剣を喰らう前と比べて倍近い速さで動いたネフィリムの前足が、響に叩き付けられる。すると、前足に渦巻く突風は外敵の存在に反応して凄まじい風の刃となり、前足に触れている響を切り裂いていく。

「立花あああああッ!!」

切り刻まれた全身から鮮血をまき散らしながら殴り飛ばされていく響に叫ぶ翼だが、次の瞬間には彼女の体が黄色い粒子と化して霧散していき、それがなにを意味しているかを理解した翼は、安心したような笑みを浮かべる。

殴り飛ばしたはずの標的が消え、どこに行ったのかとネフィリムが視線を彷徨させたその時、

「ハアアアアアアッ！」

いつの間にか懐に潜り込んでいた、『幻想』の力を宿した GANG ニール———— GANG ニール・ルナクロスを纏った響の拳が叩き込まれ、ネフィリムの体が少し打ち上げられる。

「確かに、私の在り方は『偽善』かもしれない。……………だけど」

響が左手を広げると、ネフィリムの周りに二本の黄金の輪が出現

し、左手を閉じればその二本はネフィリムの体を締め付け、行動を阻害する。

「それでも、私は私のままで在り続ける。否定されたって構わない」

体内に宿る記憶の力を、『幻想』から『切り札』に切り替え、腰を落として引かれた右拳に、紫色の輝きが満ちていく。

「この先、どんな困難が待ってたって、この信条は曲げない。だって、これは……………ッ！」

大きく息を吸い込み、吐き出す。

右拳に溜めたエネルギーは既に臨界点に達しており、小さな地響きが起こると同時に、彼女の足元に転がる無数の小石が浮かび上がる。

「私が立花響である、確かな証だからッ!!」

右拳がネフィリムの懐に捻じ込まれる。抑制されていた力が解放され、拳から放たれた紫色の極光は天より墜ちた巨人を呑み込み、天空に浮かぶ雲を貫いた。

光の奔流が周囲に飛ばす凄まじい衝撃波に耐えている翼は、その根源である響の姿に目を丸くする。

響が纏っていたのが、先程のものとは違い、紫と黄色のデューラードレスに変わっていたのだ。だが、もう一度目を凝らして見てみると、そこにあつたのは通常のガングニールのもので、「気のせいか？」と翼は小さく呟く。

やがて極光はその勢いを弱めていき、最後に微かな線を残して消えていった。

崩れ落ちる響の前にネフィリムの姿は無いが、それも当然だろう。

あれほどの熱量を持った一撃だ。ゼロ距離でそれを受けた以上、如何にネフィリムといえどひとたまりもない。

「ば、馬鹿な……………馬鹿なああああああああッ!!!」

予想外の事態。予期せぬ展開に驚愕したウエルの絶叫が響き渡った。

「……………あのネフィリムを一撃で……………。ガイアメモリとは、そこまでの力を引き出させるものなのですか……………ッ!?!」

響達と交戦するネフィリムの様子をモニタリングしていたナスターシャが、珍しく動揺を隠さずに呟く。そして、それは彼女と共にモニタリングしていたマリア達も同じだった。

「なんデスカ、あれ……………。あんなの、正真正銘の化け物じゃないデスカ……………」

「私達、あんなのを相手に勝てるの……………?」

ただでさえ二課にはオリジナルのフィーネがいるのに、それに今見たような超威力の攻撃を繰り返してくる響も加わるとなると、まるで勝てる気がしない。

「……………それでも、私達は戦わなければならない。そうよね？ マム」

「……………はい。如何なる障害が立ち塞がろうと、我々は止まるわけには……………ごほっ、ごほっ……………!」

「マムッ!?!」

突如咳き込んだナスターシャの手元には、彼女が吐き出したであろう血がついていた。

「ママッ！ しっかりしてッ！ マムッ！」

マリアがナスターシャの体を揺さぶるが、気を失ってしまったのか反応がない。

「二人共、至急、ドクターの回収をお願いッ！ 応急処置は私でもできるけれど、やっぱりドクターに診てもらおう必要があるッ！」

「わ、わかったデスッ！」

言われるがままに、二人はウエルを回収すべく飛行機から飛び出していた。

静かに剥かれる牙

「ガイアメモリの力を引き出しすぎたのね。いや、ここはその逆と言
うところかしら？」

ネフィリムを撃破した直後に倒れた響はすぐにメディカルルーム
へ搬送され、万が一という事もあるため、治療を受ける事となった。

だが、今はその治療も終わり、医療スタッフ達を率いて響の検査に
当たっていたフィーネが検査の結果が記入された資料を手に、司令室
に集まった克己達に話していた。

「ジョーカーメモリは使用者の感情によって性能の上限を超えるメモ
リであり、上手く扱えばその力を完全に制御できるようだけど、あの
様子を見るに、響ちゃんはジョーカーの力を御し切れていないよう
ね」

「では、私のサイクロンやツヴァイウイング。雪音のトリガーやメタ
ルは、あのように限界を超えた力を発揮する事は出来ないのか？」

「どうかしら。貴女達に宿ったその力は、ジョーカーのような性質を
持っていないメモリのものだし、その可能性は低いわね。まあ、それを
可能に出来るかもしれない方法なら、既に思いついてるけど」

「マジかッ！ だったらすぐに……………」

「悪いけど、今は教える必要性は感じないわね」

「はあッ!? なんでだよッ！」

先日のネフィリムを打ち倒した響の様子を聞いていたクリスが憤
慨すると、フィーネが説明を拒んだ理由を語り始める。

「私が考える方法は、響ちゃんがあの力を完璧に制御できるように
なって初めて実行できるもの。不確定要素が混ざりに混ざったやり
方を、貴女達にやらせるわけにはいかない。最悪、暴走の可能性まで

あるんだから。それともなに？ 貴女達は暴走してまで、彼らを倒したいのかしら？」
「う……………」

敢えてその方法を語らないのは、その万が一の可能性を案じての事。響一人だけでも暴走すれば大変だと言うのに、一度に二人も暴走してしまえば、どれほどの被害が出るかわからないのだ。そんな彼女の言葉の前には、翼もクリスも口答えできずに黙り込んでしまう。

「そういう事だから、それについてはまだ語るわけにはいかないわね。全ては、あの子がジョーカーの力を完全に制御できるようになってからよ。……………」
「ちよつと失礼するわね」

ポケットから着信音を鳴らすスマホを取り出したフィーネが通話相手と何度か言葉を交わし、最後に相手に労いの言葉をかけて電話を切る。

「響ちゃんが目覚めたようよ。貴方達ももちろん来るでしょ？」

——最初は陰口からだった。

『彼女はあんな事をした』『彼女はこんな事をした』と、身に覚えの無い事を言われ続け、日が経つ毎に、自分への陰口を叩く者達は増えていき、彼らの仲間が増えれば、自分の周りから人は少しずついなくなっていくた。

それからしばらく経つと、今度は机に落書き。始めは油性ペンなどで書かれた、頑張れば跡を残す事無く消せるものだったが、いつしかそれはカッターなどで書かれた、雑巾などでは決して消す事のできないものになっていった。

もちろん、これは一個人に対する誹謗中傷であり、今も昔も禁止されているイジメである。それ故に、響は当時の担任や他の教員に自分

が受けてきた仕打ちの数々を打ち明けたが、誰も自分に救いの手を差し出してはくれなかった。

誰も彼も、自分の身が可愛かったのだ。立花響に関われば、自分も標的にされかねないと。口に出さずとも、彼らの放つ雰囲気から、彼らがそう考えている事くらい、当時はまだ一般人の一人に過ぎなかった響でも理解出来ていた。だが、理解出来たとしても、当時の響は『だったらなんだ』と思わずにはいられなかった。

教師とは、生徒の間違いを正し、導く役職のはずだ。なのになぜ、目の前に立つ彼らは、今まさに自分を窮地に立たせている者達と、同じ事をするのだろうか。

これらの出来事の発端は、あのライブ会場の惨劇。ツヴァイウイングのライブ中、突如として現れたノイズによって引き起こされた事件。ツヴァイウイングの片翼、天羽奏を始めとした多くの人々がその場で命を落としていった中、響は運良く、あの惨劇を生き延びた。

だが、そんな響達に、会場でノイズに殺された者達の遺族や友人達が牙を剥いた。

『あの子はまだ幼かった』、『あいつは数日後には結婚していたはずだった』、『彼女はもうすぐ夢を叶えられた』と、理由は様々だったが、共通していたのは、『彼／彼女は死んだのに、なぜお前達が生き残った』という、理不尽極まりない感情である。

始めに自分達を非難し始めた人々も、それくらい的事はわかっているはずだ。生き残った人々は運が良く、生き残れなかった人々は運が悪かっただけなのだ。だが、それで自分達に向けられた非難が終わらなかったのは、自分の記憶が証明している。

犠牲者の遺族や友人の憎しみは、彼らとは関係ない人々にまで伝達し、『周りがやっているから』と、そんな下らない理由で誹謗中傷する人まで現れる始末。

中には、自分のような誹謗中傷を受けた結果、心が耐え切れずに自殺を選んだという人も少ないそう。

それでも、自分は決して挫けず、リハビリを続けた。
そうすればきつと、生還者の家族だからと巻き添えを受けてしまっ
ている家族も、喜んでくれるはずだからと。

そうして時が経っていく内に、自分は以前よりも強く、危険な目に
遭っている人々を救いたいと願うようになっていった。

誰もが笑顔で過ごせるように。誰もが穏やかに暮らせるように。
この身を削ってでも、彼らの平穏を護り抜く。その正義感是谁もが
持っているものであるが、彼女の持つものはそれとは比べ物にならな
い、それこそ傍から見れば、『異常』と言わざるを得ない程の『自己犠
牲』の精神から来るもの。

『それこそが偽善』

立花響の在り方に向けられた一人の少女の言葉が蘇る。

『立花響』という少女が人助けをするのは、『他人の幸せ』ではなく、
『自分の幸せ』を護る為。本心では他人の事なんかどうでもよくて、自
分一人さえ幸せならそれでいい。『異常』の一言に尽きる彼女の姿は、
月読調の目にはそう映ったのだろう。

(それでも、私は……………)

この信条は、曲げない。

ネフィリムとの戦いでも叫んだ自分の素直な気持ちを胸に、瞼を持
ち上げる。

今まで暗黒に閉ざされていた視界いっぱい光が満ち、一瞬瞼を閉
じそうになりながらも上半身を起こし、周囲を見渡す。

周辺に設置されている機械や、今まで自分が眠っていたベッドか
ら、今自分がいる場所がメデイカルルームだと気付く。

その時、胸元に違和感を感じて無意識にそこを掻く。すると、布地
に隠された腹部に硬いなにかが触れる感覚を覚え、それを取り出す。

「……………？ なんだろ、これ。かさぶた……………？」

掌に乗せたそれを見て響が首を傾げた直後、克己や翼達を連れたいーネがメデイカルルームに入ってきた。

「お目覚めのようね、響ちゃん」

「了子さん……………。あの、ネフィリムは……………？」

「貴女のお陰で倒せたわ。お手柄ね、響ちゃん。……………それは？」

「なんか、痒いなど思っただけです。そしたらこんなのが取れて……………。たぶん、かさぶただと思うんですけど」

「馬鹿ね。こんなかさぶたなんてあるはずな——」

響から彼女がかさぶただと考えているものを見せてもらった瞬間、緩んでいた表情が一気に張り詰めた。

「……………響ちゃん、一応聞くけど、これが出来たのって胸元の古傷辺り？」

「え？ は、はい」

「……………ごめんなさい。ちよつと席を外させてもらうわ。後でスタッフを向かわせるから、その人にいつまで安静にしていればいいのか聞きなさい。強力な力を使役した過労が原因だから、ここで休むのはそう長くないから、安心しなさい」

言い残すや否や、珍しく焦った様子でいーネはメデイカルルームから飛び出していき、取り残された響達はその姿に不穏な空気を感じざるを得なかった。

——想定外だった。まさか、ガイアメモリがあそこまでの力を秘めていたなど、想像だにできなかった。

ジョーカーメモリの力を纏った響の一撃の前にネフィリムが敗れ

去った驚愕と戦慄が混ざった心境で、ウエルは地面に這いつくばって辺りを見渡していた。

外見はただのUSBメモリにしか見えないといえど、ガイアメモリが宿すのは地球の記憶。あらゆる戦況を覆す『切り札』の記憶を封じたジョーカーメモリは、サイクロンやルナ以上に警戒していたが、あそこまでの力を使用者に引き出させるとは思いもしなかったのだ。

甘く見ていた。地球ガイアメモリの記憶を。そして、あの一撃を振るった装者立花響も。あれを放っておいては、自分達の計画は間違いなく潰される。

だが、逆に考えれば、それはこちら側にも言える事。向こうにガイアメモリがあるように、こちらにもガイアメモリがある。

T3イクシードメモリ。人類の進化の歴史を封じ込めた、アンドロイドであるケアン専用財団Xが作り上げたガイアメモリ。ケアンの電子回路が許す限りの範囲で進化を続けていくあのメモリは、最終的には神の領域に到達しうる性能を秘めている。

だが、それを引き出すには条件がある。ただ戦闘データを積み重ねていくだけでは駄目なのだ。

到達せねばならない。先史文明期の遺産の元へ。それこそが、イクシードが神の領域へと至る唯一の道なのだ。

「僕は英雄になるべき男なんだ………ツ！　こんなところで、諦めてなるものかッ！」

狂気と感じさせるまでの執念を胸に、ソロモンの杖をつきながら歩くが、目の前の坂に気付かずに情けない悲鳴を上げて転げ落ちてしまふ。

そして、全身に走る軽い痛みにに微かに呻いたウエルが視線を上げた先に――『それ』はあった。

「ああ………ツ！　こ、これは………ツ！」

素早い動きで目の前に落ちている『それ』を拾い上げたウエルの表

情は、狂喜に満ち満ちていた。

「ひひ、これさえあれば、英雄だあ……………ツ！」

一度鼓動する度に赤い光を発する『それ』——ネフィリムの心臓を手に、ネフィリムは狂気に染まった笑い声を上げた。

——歌が聞こえ、ナスターシャが目覚めます。

「ママッ！」

先程まで歌っていた優しい歌を口ずさむのをやめ、マリアがナスターシャの顔を覗き込んでくる。ナスターシャの顔色はまだ優れないが、それでも気を失う前と比べれば大分安定していた。

「マリア……………。私は、どれくらい気を失っていましたか？」

「付きっ切りで看病してたから、正確にはわからないけど、少なくとも数時間は」

「ウエル博士とケアンは？」

マリアが僅かに顔を背ける。それがなにを意味するのかを理解したナスターシャが「そうですか」と弱々しく呟くと、マリアが申し訳なさそうに口を開く。

「あのね、ママ。調と切歌の事なんだけど……………。ママの治療を出来るのはウエルだけだから、私が二人に彼の搜索を依頼したの。待機命令が出されていたのに、ごめんさい」

持病を患っているナスターシャに対してマリアは応急処置程度しか出来ず、本格的な治療はF・I・Sに所属してた頃は生化学を専門

にしていたウエルのみが行える。しかし、ナスターシヤが倒れた時は、彼はケアンと共に二課と交戦していた。両者の戦いはジョーカーメモリの影響を受けた立花響の一撃によって幕を下ろしたので、マリアはナスターシヤから待機命令が出されているにも関わらず、彼女の命を救おうと、自分と同じく待機していた調と切歌にウエルの捜索を頼んだのだ。

緊急時とはいえ、リーダーであるナスターシヤからの命令に背いてしまった罪悪感に顔を俯かせているマリアに、ナスターシヤの声がかけられる。

「普段であれば褒められた行為ではありませんが、私に責任がある以上、貴女達を責めるつもりはありません。ありがとうございます、マリア」

その時、マリアの携帯に通信が入る。応答しようとしたマリアだが、「私が出ます」とナスターシヤに言われてしまい、大人しく彼女に手渡す。

「私です」

『つとと……………、もしかして、もしかしたらママデスカッ?!』

『具合はもういいの?』

動揺した声から察するに、連絡を入れていきしたのはマリアがウエルの捜索を依頼した二人の少女のようだ。

「マリアの処置で急場は凌げました。それより二人は、今ドクターを探しているのですね?」

『うん……………。でも、連絡が取れなくて』

「では、ドクターと合流次第連絡を。ランデブーポイントを通達します」

『うん、わかった』

『了解デスッ!』

二人の元気な返事を最後に、通信は終了する。

「ママはもう少し休んで。なにか、欲しいものとかある?」

「それなら……………」

横になったナスターシャが口にした要望は、少し意外なものだった。

「歌を、歌ってください。私が起きる直後まで、貴女が歌っていた歌を」

「え? う、歌?」

「駄目ですか?」

「……………ううん、駄目なんて、言わないわ」

まさかナスターシャの口からそのような言葉が飛んでくるとは思わなかったのか、少し呆気にとられた様子になっているマリアだったが、彼女が必要としているのならば、マリアは大人しくナスターシャが目覚める前まで歌っていた曲を口ずさみ始める。

(……………優しい歌)

室内に響き渡る歌声は、彼女が戦っている最中に歌う苛烈なものではなく、それとは真逆な、慈愛に満ちたもの。それを聴いているだけで、どこか心地よさを感じてしまう。卑怯な手を使わず、純粋な実力のみで勝ち取ったトップアイドルの座は伊達では無い事か。

(でも……………、私は優しい子達に十字架を背負わせようとしている)

マリアだけではない。調や切歌も、自分が目覚めた事に心の底から

喜んでくれていた。三人の優しさは、長年彼女達を見てきたからわかる。そんな彼女達に、自分は罪を犯させようとしている。いや、あのライブ会場で世界に宣戦布告させた時点で、既に三人は罪を犯してしまっている。

これから先、自分達はさらにこの身を罪の色に染め上げていくだろう。『フイーネ』を結成する前から覚悟していたはずなのに、今更になって気が引けてしまうのは、あの時決めたと思っていた覚悟が、実は生半可なものだったからなのだろうか。

加えて、ケアンの事もある。

恩師と交わした約束は今でも果たされず、ケアンは人としての幸せを掴む事無く、完全な戦闘マシーンとして活動してしまっている。

施設に残してきた方がよかつたかという考えが脳裏を過るが、すぐにその考えを否定する。あの時連れ出していなければ、ケアンは別の用途として、文字通り道具として扱われ続けただろう。それは今の自分にも言えるが、少なくとも、自分達の目的さえ達成すれば、彼には人間としての生活を送らせられるはずだ。否、絶対に送らせる。その為には――

(必ず、目的を果たさなくては……………)

マリア達についても、ケアンについても、全てはこの自分に責任がある。彼らをこの道に引き込んだ罪は、決して言い逃れできるものではない。

この罪を抱え、なんとしても目的を達成する。優しい歌を聴きながら、ナスターシャは静かに、決め切れていなかった覚悟を決めたのだった。

――翌日、すっかり本調子を取り戻した響は未来と楽しく雑談しながら街中を歩いていた。

「なんの報告も無しに学校休んだから、本当に心配したんだよ？ 響」
「あはは、ごめんね。でも、もう大丈夫だよ。ほらッ！」

そうやって自分が元気である事をアピールするように腕をブンブン振る響に未来が「よかった」と微笑んだ直後、二人の前を凄まじい速さで数台の車が通り過ぎていき、一瞬で見えなくなったと思いきや、爆発音が周囲に響き渡った。

「い、今のはッ!?!」
「行ってみようッ！」

二人が車が爆発したのであろう場所に向かうと、そこには数体のノイズを従えたウエルと、その隣に立つケアンの姿が。

「ひ、ひひひ……………。誰が追いかけてきたって、こいつを渡すわけには……………」

「ウエル博士、ケアンさん……………ッ！」

「な、なんでお前がここにいいいッ!?!」

響の存在に気付いたウエルが酷く怯えた様子でカエル型^クノイズ^ロを向かわせてくる。

「未来、下がってッ！」

「う、うんッ！」

親友を庇うように立ち、ペンダントを握り締める。

「Balwisyall Nescell gungn
ir tron」

聖詠を口ずさみ、拳を突き出す。

だが、彼女の全身を聖遺物の鎧が覆う前に、彼女の拳がノイズに触れてしまった。

「響ッ!?」

「人の身でノイズに触れて——」

ノイズは人が触れてしまえば一瞬で炭化させられてしまう。それはシンフォギア装者である響も例外ではない。

早まってくれたお陰で危険視していた相手が自滅してくれた——
——そう考えたウエルだったが、それは次の瞬間にはさらなる恐怖に塗り潰される。

「おおおおッ!」

なんと、生身で触れたはずの響はまるで炭化する気配を見せず、逆にノイズを消滅させてしまったのだ。

「ひひひひッ!」

「……………ッ!」

まさかの展開にウエルが恐怖の悲鳴を上げ、ケアンも僅かに目を見開いて懐に手を忍ばせる。

「この拳も、命も——シンフォギアだッ!」

高らかに叫ぶ響だったが、その力が己に牙を剥いている事に、今はまだ気付いていなかった。

進化（イクシード）は止まらない

「情報部、追跡班との交信途絶ッ！」

響がウエルの召喚したノイズと交戦し始めた頃、時を同じくして二課仮設本部司令室では緊迫した空気が流れ始める。

「ノイズの出現パターンも検知していますッ！ 恐らくは……」

「……………翼とクリス君、克己君達を現場に回せッ！ なんとかしても、ソロモンの杖の保有者を確保するんだッ！」

「弦十郎君ッ！」

酷く焦った様子で司令室に駆け込んできたフィーネが弦十郎の名を叫ぶ。

「どうした？」

「響ちゃんがどこにいるかわかる？ マズイ事に——」

「ノイズとは異なる高出量のエネルギーを検知ッ！」

「波形の照合、急ぎますッ！」

その時、藤堯と友里の声が司令室内に響き渡り、検知されたエネルギーの波長をデータに記録されたものと照合し始める。

そうしてモニターに表示されたのは、『GUNGNIR』の文字。

「ガングニールッ!? そんな……………ッ！」

この状況で最も出てきてほしくなかった聖遺物の名に、フィーネは思わず頭を抱えてしまうのだった。

——一方、そんなフィーネの気持ちなど知らない響は、今まで感じた事のない程のエネルギーが放出されている状況に戸惑いながらも、目の前に立ち塞がるノイズを倒そうと構える。

響の全身から放出される高出力のエネルギーは凄まじい熱気へと変じ、風に乗って彼女の近くに落ちてきた落ち葉を一瞬にして焼き尽くす。

「いつもいつも都合のいいところで、こつちの都合をしつちやかめっちゃやかにしてくれるッ！ お前はあッ！」

憤怒に染め上げられた叫びをあげたウエルが召喚したノイズが一齐に響に襲い掛かる。

「——ヒーローになんて なりたくない」

ヒューマンノイズ
人型ノイズの攻撃を躲して殴り飛ばし、側面から襲ってきたもう
ヒューマンノイズ
一体の人型ノイズを蹴り碎く。

「——想いを貫け……………321 ゼロッ！」

群がるノイズを片っ端から捻じ伏せていく親友の姿に、未来はただ茫然として見つめ続けるしか出来ずにいる。

「いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもッ！」

次第に恐怖が混ざってきた声色で、ウエルが再びノイズを召喚する。対して響は右腕のパワージャッキを引いて腰のブースターを点火。ブースターの推進力を受け一気に加速し、前方のノイズの大群を一撃で吹き飛ばした。

だが、ウエルは性懲りもなくまた杖からノイズを出現させる。

(切りがない………………。それならッ！)

視界を埋め尽くすノイズの大群を前に拳を構え、両足のパワージャッキを展開。今度はブースターではなく、脚部のパワージャッキを地面に叩き付けた勢いで飛び出し、すぐに右腕のパワージャッキからブースターを噴出。加速の上にさらなる加速を加えた彼女の一撃は、先程のようにノイズだけを炭化させるだけでは留まらず、そのままウエルに向かって一直線に飛んでいく。だが――

『Exceed Active』

無機質な変身音声を流して現れた漆黒の戦士によって、拳を受け止められてしまう。

二人を中心に発生した衝撃波を受けたウエルが尻餅をつき、イクシードは先刻自身が受け止めた拳が宿すエネルギーがビリビリと全身に伝わる感覚と、自分が無意識に片足を引いてバランスが崩れるのを防いでいる状況に僅かに目を細める。

「立花響の脅威度を修正。ゾーンメモリを使用後、排撃を開始する」
『ゾーン！』

飛び退いた響の前でT2ゾーンメモリを起動したイクシードが、ゾーンメモリを胸元に差し込んで『地帯』の能力を獲得する。次の瞬間には彼の姿はあっという間に消え失せ、どこに移動したのかと視線を彷徨わせる響の左斜め上に現れるや否や、彼女が防御態勢を取る前に急降下キックを喰らわせた。

「――櫻井理論に基づく異端技術は、特異災害対策機動部の占有物ではありません。ドクターがノイズを発生させた事で、その位

置を絞り込む事など容易い事」

一方、響の所属する二課が保有する異端技術を利用してウエルとケアンの居場所を割り出したナスターシャ達も、弦十郎の指令を受けた翼やクリス達と同様に、響達がいる場所へと向かっていた。

「だけど、ママ……………」

「わかっています。こちらが知り得たという事は、相手もまた然りです。急ぎましょう」

イクシア^ケンがいる以上、まだ安心できる余地があるが、それでも数の多さでは向こうが上である以上、イクシードの恐ろしさを理解している彼らは数人がかりで彼を抑えに行くだろう。そうやってしまえばウエルを護衛する者がいなくなっている。どのみち、自分達は急ぐ以外の手などないのだ。

それを理解しているマリアは早速、ウエル達のもとへ向かっている二人の少女に連絡を取り始めた。

『聞こえているわね、二人共』

「ドクターを回収して、速やかに離脱」

「了解デスッ！」

マリアからの通信を受けた二人は、元々ウエル達がいる場所の近くにいたのですぐに彼らを見つけ出す。

原因は謎だが、いつもよりも格段にパワーアップしている響だが、それでもゾーンメモリの瞬間移動を身につけたイクシードには苦戦しているようだった。攻撃を与えたと思いきや一瞬にしてその姿を消し、次の瞬間には別方向から攻撃を仕掛けられる。しかも、その威力は彼が一回攻撃する度に少しずつ強化されていっている。なんとかカウンターに成功しても、彼を護る鎧はさらに強固になっていき、

一発の攻撃で彼が受けるダメージが減っていくのが嫌でもわかってしまう。

「はあ……………はあ……………はあ……………ぐ、あ……………ツ!？」

その時、イクシードの回し蹴りを飛び退き、脚部のパワージャッキを引いて攻撃に移ろうとしていた響が、突然胸元を押さえて苦しみだす。その光景にどうしたのかと調と切歌が響を見つめるが、彼女達のような感情を持ち合わせていないイクシードにとって、敵対者が突然動きを止めたのは絶好の機会ではない。

「あがッ!？」

蹲る響の顔面を蹴り上げ、口元から僅かに血を吐き出した響の体を打ち上げると、彼女の右足を掴んで地面に叩き付ける。まるでまだ物心がついていない子どもが玩具を振り回すかの如く、遠慮など全く感じさせない勢いで何度も地面に叩き付けられて苦悶の呻き声をあげる響を投げ捨てたかと思いきや、仰向けになった彼女の体に跨り、何度も顔面に拳を振るい続ける。

「酷い……………」

「や、やめるデスよッ！ そんなの、惨すぎるデスッ！」

敵とはいえ、あまりにも一方的な仕打ちに難色を示す二人に、ウエルが気色の悪い笑みを浮かべながら言う。

「なにを言うのです？ これで我々の計画を阻む敵を一人排除できるのですよ？ それなら、あのままやってもらった方がいいじゃないですか」

「それでも……………」

「あれを肯定するなんて、あたし達には……………」

『フィーネ』の構成員の三人の視線の先で、イクシードは握った右拳にT3イクシードメモリのロゴの色と同じ、鈍い灰色の輝きを纏わせる。

次の一撃で、確実に響を仕留める気だ。そこには油断も容赦もなく、ただ『立花響を排除する』という思考しか存在しない。

「響iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiッッ!!」

悲痛な叫びをあげる未来の前で、イクシードの拳が振るわれる。寸分変わらず、人間の頭部を打ち砕くに充分すぎる威力を伴った拳が響に直撃しようとした直前――

「響に……………なにをしてるッッ!!」

熱風が吹き荒れ、響から視線を外したイクシードの顔面に、灼熱の右足が叩き込まれる。

流星のイクシードもこの不意の一撃には対処できず、数回地面を跳ねてウエル達の前に落ちてくる。

「大丈夫?」

「レイカさん……………。ありがとう……………ごきます……………。ぐ……………。ううッ!」

顔中痣だらけで酷い有様だが、自分をしっかり見ている事から失明などはしていないと判断したヒートドールパントは「じつとしてなさい」と伝えてから、起き上がったイクシードを睨みつける。

「随分好き勝手にやってくれたようね……………ッ! 褒美に……………スクラップにしてあげる」

己の激情を体現するかのように全身から灼熱の業火を噴き上がらせたヒートドール。パントがイクシードに襲い掛かり、イクシードも彼女の迎撃に動き出す。

「響ッー！」

「バカ、行くんじゃねえッー！」

二人が戦っている間に響に駆け寄ろうとした未来だが、ヒートドールと一緒に来たメタルドールパントによって止められる。

「放してくださいッー！ 響……………響が……………ッー！」

「あれを見てまだわかんねえのかッー！ 俺たちならまだしも、お前が触ったら火傷じゃ済まねえぞッー！」

「響……………ッー！ 響い……………ッー！」

なんとかして自分の腕を掴むメタルドールパントの手を振り解こうとするが、鋼鉄の肉体を持つ彼の力量は一般人である未来が到底抗えるものではない。

抵抗するだけ無駄だと悟った未来は奥歯を噛み締め、今尚自分達の前で胸元を押さえて苦しむ響を見つめるしかできなかつた。

「ハアッー！」

業火を纏う左足の蹴り上げを避けたイクシードがウエル達に害が及ばないように視界に入った建物の屋上に移動しようとジャンプするが、その直後に胸元に光弾が直撃して撃ち落される。

遠くから一瞬だけ見えた太陽光を反射する輝きから、先程自分を撃つたのが『引き金』の怪人だと悟った瞬間、背後から焼き尽くす炎のような殺気を感じる。防御しようにも、空中で光弾を受けたせいでバランスが崩れており、間に合わない。

無防備な背中に地上から炎を噴き出して飛んできたヒートドーパントの直撃し、そこを起点に爆発が起き、全身から黒煙を立ち昇らせたイクシードが墜落する。だが、ヒートドーパントは猛攻をやめる気は更々無く、ドリル状になった炎を纏った右足で急降下キックを繰り出した。

先程の倍以上の爆発が起き、火傷でもしてしまいそうな程の熱量を持った突風が吹き荒れる。

「仕留めたか……………?」

襲い来る熱風から未来を護り抜いたメタルドーパントが先の爆発を見て思わずそう零すが、黒煙が晴れた先にあつたのは――

「マジかよ……………」

ヒートドーパントの右足を片手で受け止めている、イクシードの姿だった。

ヒートドーパントからすれば最大最強の威力を込めた一撃だったのに、それを片手だけで受け止めたイクシードの姿に、ウエルは狂った笑い声を響かせる。

「ヒヒヒッ！　どんなに強かろうと、ケアンはッ！　イクシードはッ

！　その上を行くッ！　そしてそしてえッ！」

「……………ッ!?!」

首元になにかを押し当てられた調と切歌が飛び退く前に、ウエルは彼女達の首元に押し当てた装置に満たされた薬品を投与した。

「なにしやがるデスカッ!?!」

「L i N K E R……………ッ!?!」

体の奥から力が湧き上がる感覚に、先程ウエルが自分達に打ち込んだものが、ギア制御薬『LINKER』であるとわかると、なぜ今打ち込むのかという疑問が浮かび上がる。

マリアを含め、二課に所属する装者達と違って適合係数が低い自分達はLINKER無しにシンフォギアを纏う事は難しい。だからこそ、時限式であるLINKERを使用してのギア装着は、投与された薬品の効力が切れ次第解かれてしまう。だが、今はまだ効力が切れる時間ではないはずだ。

「効果時間にはまだ余裕がある。だからこそその連続投与です。彼らに対抗するには、今以上の出力で捻じ伏せるしかありません。その為にはまず、無理矢理にでも適合係数を引き上げる必要があります」

それがなにを意味するのか、わからない二人ではない。彼は歌えと言うのだ。装者の最強攻撃手段にして、代償に命を削る技を。

「でも、そんな事をすればオーバードーズによる負荷で……………」

「ふざけるなッ！　なんであたし達があんたを助ける為にそんな事を

「するデスよッ！　いいえ、せざるを得ないのでしようッ！　貴女達が連帯感や仲間意識などで僕の救出に向かうとは到底考えられない事をッ！　大方、あのオバハンの容態が悪化したから、おっかなびつくり駆けつけたに違いありませんッ！」

二人がこの場に來た理由を既に把握していたウエルは、二人に人差し指を向ける。

「病に侵されたナスターシャには、生化学者である僕の治療が不可欠。……………さあ、自分の限界を超えた力で、私を助けてみたらどうですかッ!?」

ウエルの言う事は正しい。彼がいなければナスターシヤの治療は出来ない。そして、今のうちにケリをつけなければ、今もここに向かっているであろう二課の装者や仮面ライダー達が到着しかねない。

「……………やろう、切ちゃん。ママの所に、ドクターを連れ帰るのが、私達の使命だから……………ッ！」

「絶唱、デスカ……………」

「そう……………ユー達歌っちゃえよッ！ 適合係数がてっぺんに届く程、ギアからのバックファイアを軽減できる事は過去の臨床データが実証済みッ！ だったらLINKERぶっ込んだ今なら、絶唱歌い放題のやりたい放題ッ！」

「……………やらいでか、デスッ！」

覚悟を決め、二人は揃って口を開く。

「————Gatrandis babil ziggurat edenall」

周囲一帯に響き渡る歌声に、ウエルを除いた誰もが振り返る。

「まさか、この歌って……………絶唱ッ!？」

絶え間なく続く胸の痛みさえ忘れて、彼女達が歌っているものに目を見開く響の前で、二人は禁断の詠唱を続けていく。

「————Emustolronzen fine el b aral zizzl」

「駄目だよ……………ッ！ LINKER頼りの絶唱は、装者の命をボロボロにしてしまうんだッ！」

必死にやめさせようと叫ぶも、二人からは詠唱をやめる気配が全く

感じられない。

「女神ザババの絶唱二段構えッ！ この場の見事な攻略法ッ！ これさえあれば、こいつを持ち帰る事なんて……………ッ！」

瞬間、二人の体を絶唱による負荷が襲い掛かる。今すぐに絶唱をやめなければ命に関わる、そう叫ぶ本能を無理矢理無視しながら、二人は強化された武装を展開する。

「シウルシャガナの絶唱は、無限軌道から繰り出される果てしなき斬撃。これで刻めなくとも、動きさえ封殺できれば……………ッ！」
「続き、刃の一閃で対象の魂を両断するのがイガリマの絶唱ッ！ ここに、物質的な防御手段などありはしないッ！」

両者が纏うギアの相性は他とは比べ物にならない程良い。それは、直撃さえすれば変身せずとも不死身の肉体を持つNEVERはおろか、これまで何度も輪廻転生を繰り返して生き続けてきたフィーネさえも葬る事が可能な攻撃手段。

だが、その使用を望まない者が、ここにいます。

「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t
e d e n a l」

胸の痛みを堪え、響も絶唱を歌う。

だが、二人の攻撃を迎え撃とうという考えのもと行っているものではない。彼女の目的は、他にある。

「……………ッ!? エネルギーレベルが絶唱発動まで高まらない……………ッ!？」

「減圧……………あッ!？」

絶唱の発動に必要なエネルギーが足りず、展開されていた二人の武装が通常形態に戻される。

「セツトツ！ ハーモニスクツ！」

茫然とする二人の前で、彼女達の分の負担を肩代わりした響が全身にのしかかる重圧に呻き声を漏らす。

「なぜだ、立花響。彼女達の覚悟を否定するのか？」

自ら負担を背負ってまで、なぜ敵である二人を助けるのか。それを理解できないでいるイクシードの問いかけに、響は苦し紛れに答える。

「目の前で命が失われるのが、嫌だからツ！ ただ、助けたいから、助けるんですツツ!!」

両腕の武装を合体させた響が、右拳を天に掲げる。

「だから二人に、絶唱は使わせないツ！ はあああああツツ!!」

響を中心に発生した虹色の竜巻が天を貫き、周りにいた者達は黙ってそれを見上げる事しか出来ないでいると、『フィーネ』を構成するメンバー達にナスターシャからの通信が入る。

『聞こえて、いますか……………？ ドクターを連れて、急ぎ帰投しない』

若干苦しそうに言っている事から、どうやらまた症状が悪化したらしい。ならば、今すぐに彼女のもとにウエルを連れて行かねばならない。だが、その前にやる事がある。

「立花響を排除する。三人分の負荷を抱えている今なら簡単に始末できる」

ゾーンの瞬間移動能力を使用すれば、ヒートドーパントの妨害を受けずに立花響の命脈を絶てる。早速ゾーンメモリの力を発動しようとしたが、次の瞬間にはマリアに釘を刺されてしまう。

『駄目よ。今、そちらに複数の反応が検出されているわ。十中八九、二課に所属するメンバーだよ。わかったなら今すぐ帰ってきなさい』
「……………了解」

単騎で彼らの迎撃をするなら不可能ではないが、ソロモンの杖で召喚したノイズを使役するしか出来ないウエルと、絶唱による負荷を抱えた調と切歌を護りながら戦うのは難しい。

頭上に出現した飛行機に飛び乗る。調と切歌がウエルを連れて奥に消えていく中、変身を解いたケアンは、敵であるはずの二人を救った響の言葉を思い返す。

『目の前で命が失われるのが、嫌だからッ！　ただ、助けたいから、助けるんですッッ!!』

(……………不可解だ。あれが人間の感情……………『心』というのか？　全くもって、理解が追い付かない)

立花響という人間の在り方に対する感想を心中で述べ、ポツリと零す。

「実に、面白い」

その時、ハツとなって思わず近くにあった鏡の前に立つ。だが、鏡を見ても、いつもの無感情な表情をした自分が自分を見つめ返すだ

け。それを確認したケアンは、ならば意味は無いと鏡の自分から視線を外す。

あの時、一瞬だけ『笑った』ような気がしたのだが、気のせいだろうと考える事にし、マリア達のいるコックピットへと向かうのだった。

彼らが去った後、響は遅れて到着した翼が貯水タンクを破壊した事で溢れ出した大量の水によってその体温を下げてから、二課の仮設本部へと搬送された。

そして、そこで彼らを待ち受けていたファイネからもたらされたのは、響の体が聖遺物ガングニールに蝕まれているという情報だった。

人ならざるヒトの願い

「それでは、本題に入りましょう」

ウエルの一言と共に、ミーティングルームに設置された机に備え付けられているモニターに、絶え間なく明滅を続ける心臓のようなものが映る映像が表示される。

「これは、ネフィリムの……………」

「苦労して持ち帰った覚醒心臓です。必要量の聖遺物、加えて一部ではありますがガイアメモリの力を餌と与えた事で、本来以上の出力を発揮するようになりました。この心臓と、今は二課に所属しているフィーネが五年前に入手した《シエンショウジン神獣鏡》。これでようやく、我々の目指すべきフロンティアへの鍵が揃ったというわけです」

「そしてフロンティアの封印されたポイントも、先だつて確認済み」
「そうです。既にデタラメなパーティーの開催準備は整っているのですよッ！ 後は僕たちの奏でる協奏曲にて、全人類は踊り狂うだけッ！
！ ハハハハハハッ！」

「近く、計画を最終段階に移行しましょう。……………ドクター」
「なんです？」

先程まで室内に響かせていた笑い声を止めたウエルに、ナスターシャが質問を投げかける。

「アレは完成しているのですか？ ここのところ、貴方から報告を受けていないのですが」

「ああ、アレの事ですか。アレは既に完成一步手前。その後はフロンティアに到達してからの話ですよ」

「そうですか。……………では、私はそろそろ休ませてもらいます」

ナスターシャが車椅子を操作してミーティングルームから出ていく。彼女が出ていった事を証明するドアの開閉音が聞こえた後、ウエルは「ふん」と小さく鼻を鳴らした。

——翌日、二課仮説本部では、弦十郎達を連れ戻したファイネが医療用ベッドで回復に努めていた響のもとにやってきていた。搬送された時と比べて大分安定していた響の容態に誰もが安堵の表情を浮かべたが、今も響の体でなにが起きているかを理解しているファイネだけは、素直に喜ばないでいた。

「響ちゃん、これから話す内容は、今後の貴女に大きく関わってくるものよ。心して聞きなさい」

「は、はい」

いつになく真剣な表情のファイネに響が頷くと、ファイネは手元にある資料に目を落とす。

「この前、貴女の体から取れたものを調べてみたところ、あれは貴女の体内にあるガングニールが原因で精製されたものだという事がわかったわ」

「胸のガングニールが？」

「身に纏うシンフォギアとして、エネルギー化と再構成を繰り返してきた結果、体内の浸食深度が進んだのよ。適合者を超越した、響ちゃんの爆発的な力の源ね」

訓練などを経てそれぞれのシンフォギアを手に入れた翼やクリスと違い、響は全くの偶然でその身にガングニールを纏う事になった。

シンフォギアとは本来、ペンダントに加工した聖遺物の欠片をエネルギーに変換し、人類の天敵ノイズの炭化攻撃を阻む外装に再構成されて装者の体に装着される。外部からそれを行って翼とクリスな

らば特に問題はないが、内部から行うとなれば話は変わってくる。

人智を超えたアーティファクトのエネルギーを体内で物質に再構成するのだ。なにも起こらないはずがない。

「みんな、これを見てくれるかしら」

フィーネが響のレントゲン写真をこの場にいる全員に見せる。そこに映っていた、人体には存在しえない臓器の存在にいち早く気づいたのは、何度も人の命を奪い取ってきた克己だった。

「なんだ、これは………………。人間の体内に、こんな臓器はないぞ。まさか、これも……………」

「そう、ガングニールによるものよ。聖遺物との融合は、響ちゃんの体内に新たな臓器を形成するまでに進行していたの」

「この融合が立花の命に与える影響は……………」

翼の問いかけに若干言いにくそうにしながらも、言わねばならないとフィーネは答える。

「……………遠からず、死に至るわ」

彼女の答えに全員が息を呑み、響は自分の胸元——丁度ガングニールがある場所に手を当てる。

「死ぬ……………私が……………」

「仮に死を免れたとしても、これ以上融合状態が進行してしまうと、それは最早、人間として生きていると言えるのか……………」

「そんな……………」

「おい、フィーネッ！ ネフシユタンの鎧と同化してるお前なら、この馬鹿を助ける方法を知ってるはずだよなッ!？」

響と同じように聖遺物と人体が融合している存在のフィーネならば、なにか解決策を考えてくれているはずだと思ってクリスが詰め寄るも、フィーネは微かに目を伏せた。

「確実に、この子の体内からガングニールのみを除去する方法は、あるにはある。だけど、それを実行するにはある聖遺物の力を利用しようといけないの」

「ある聖遺物？ それはいったい……………」

首を傾げる翼を見て、フィーネは顔に暗い影を落として答える。

「《神獣鏡》^{シエンショウジン}。非力なれど、数ある聖遺物の中でも破格の性能を持つあれを使えば、響ちゃんを助ける事ができるわ。だけど、二課^{ニコ}にそれは無い。私の手により持ち出されたあれは今、F・I・S……………」というより、『フィーネ』が所有しているわ」

「なんだと……………」

「そんな……………」

フィーネの回答に、全員が抱いていた希望が翳る。

聖遺物に浸食され、その身を人間ではない『なにか』に作り替えられていく響。彼女を救う為に必要な《神獣鏡》^{シエンショウジン}は敵勢力の手の内にある。奪取しようにも、彼らの拠点であろう飛行機は異端技術による超常的なステルス機能を搭載しているため、そう簡単に見つけられるものではない。加えて、向こうには三人の装者とイクシードがいる。彼らの妨害を切り抜けて《神獣鏡》^{シエンショウジン}を確保するのは不可能に近い。

これらを統合すれば、現状響を救う手立ては無い事くらい、誰もが理解できてしまう。

「じゃあ、この状況は、テメエが作ったようなもんじゃねえかッ！」

激昂した剛三がフィーネに非難の言葉を投げかけるが、「よせ」と克

己に止められる。

「フイーネを非難しても、《シエンシヨウジン神獣鏡》は手に入らない。言うだけ無駄だ」

「け、けどよ……………」

なにか言い返そうとするも、克己の言う事は事実だ。どれだけ目の前に立つ女性を非難しても、目的の聖遺物は手に入らない。喉元まで込み上げてきていた言葉を剛三が飲み込むと、今まで黙って話を聞いていた響が、いかにもわざとらしい笑い声を漏らした。

「あ、あはは……………。つまり、胸のガングニールを活性化させる度に融合してしまうから、今後はなるべくギアを纏わないようにしろと。あは、あはは……………」

「いい加減にしろッ!」

だが、そんな響に怒りを露わにしたのは、翼だった。

『『なるべく』だと? 寝言を口にするなッ! 『今後一切の戦闘行為を禁止する』と言っているのだッ!』

「翼さん……………」

「このままでは死ぬんだぞ、立花ッ!」

「……………ッ!」

両目に涙を溜めて叫ぶ翼の表情にハッとさせられると同時に、京水が二人の体を離す。

「はいはいそこまで、翼ちゃんも熱くなり過ぎよ。この子だって、理解してるからああいう事を言ったのよ。『私は元気だ』って、ワタシ達を気遣ってね」

「……………わかっています。でも、私は……………」

そこで言葉を区切った翼は、そのままメデイカルルームから出ていってしまふ。それに対しては誰も苦言を漏らさず、弦十郎が話を交えるべく口を開く。

「医療班だつて無能じゃない。了子君を筆頭に対策を進めている最中だ」

「師匠……………」

「治療法だつてすぐに見つかる。そのほんの僅かな時間、ゆつくりしていてもバチなど当たるものか。だから、今は休め」

「わかり、ました……………」

「はい、それじゃあもう一度響ちゃんの体を検査するから、みんなさつさと出てつて頂戴」

パンパンと手を叩いたファイネの言葉に従い、彼女と響を除いたメンバー達がぞろぞろとメデイカルルームから出ていく。

「不安にならなくていいわよ。私が絶対に助けてあげる」

「……………ありがとうございます、了子さん」

若干曇った表情でいる響の頭を撫でてから、ファイネは医療スタッフと共に響の検査を始めるのだった。

「—————楽しい楽しい買い出しだつて、こども荷物が多いとめんどくさい労働デスッ！」

購入した食材やら飲料水などが詰まりに詰まったレジ袋を手にスーパーを後にした切歌がブーブーと文句を言うも、「仕方ないよ」と調に宥められる。

「過剰投与したLiNKERの副作用を抜き切るまでは、おさんどん担当だもの」

そう答える調の顔色は優れない。ここしばらく激務が続いたのだ。まだ十四歳——世間でいうところの中学二年生あたりの少女の部類に入る未成熟な体に、阻止されたとはいえ無理な絶唱を行おうとした負荷はあまりに重い。それは隣に立つ切歌にも言えるが、この様子からして、調が全快するのは切歌より時間がかかりそうだ。

「ケアン、調の荷物を持ってあげるデスよッ！」

それを見かねた切歌が、先程から絶えず周囲を警戒しているケアンに調から取り上げたレジ袋を突き出す。突き出されたレジ袋を訝しげに見つめ、ケアンは「なぜだ？」と口を開く。

「私はお前達の護衛を任されたのだ。そんなものを持っていては、いざという時に対応できん」

ケアンが二人の買い物に付き合っているのは、万が一という事があれば彼女達を救うようにと、ナスターシャに二人の護衛を頼まれたからである。

わざわざ民間人が多くいるこの市街地で自分達を襲ってくる勢力などいないだろうが、相手が民間人を巻き込む事に躊躇しない連中なら話は変わってくる。

以前、隠れ家として利用していた倉庫にやって来た米国からの刺客達も、排撃後やって来た子ども達とばったり出くわせば、恐らく証拠隠滅の為撃ち殺していたであろう。この短期間でまた襲ってくるのは考えられないが、その『万が一』が起きた時に対処するのが、今回ケアンに与えられた命令オーダーである。

その命令を実行する際、両手にレジ袋を持っていては堪らない。最

悪投げつければ変身までの時間は稼げるが、そうしてしまうと先刻消費した金銭が無駄になってしまおうし、メンバー達もより長い時間を空腹に苛まれてしまう。

そういった理由で切歌からの申し出を断ったケアンだが、それ引き下がる切歌ではない。

「ロボットのケアンにはわからないかもしれませんが、こういうのは男がする事デスよ。それともなんデスか？ ケアンはこんな重いものを、副作用が抜け切っていないアタシ達に持たせ続けるつもりデスカ？」

「……………ならば、一番重いものを渡せ。襲われた時、それを相手に叩き付ける」

「食べ物で粗末にしちゃ駄目」

「言うだけ無駄デスよ。こいつに食べ物の素晴らしさは一生理解できないんデスから」

調と切歌から彼女達が思う、一番重いレジ袋を受け取ったケアンが彼女達の護衛を続けながらナスターシャ達の待つ場所に向かう途中、調が建造中の建物の近くで腹ごしらえをしようと言い出した。

「嫌な事たくさんあるけど、こんなに自由があるなんて施設にいた頃は想像できなかつたデスよ」

「うん……………そうだね」

F・I・Sに在籍していた頃のフィーネが道半ば倒れたとしてもタイムロスを極力無くして現世に戻ってくる為の保険として用意された子ども達の内に入る調と切歌、そしてマリアは、幼い頃からずっとF・I・Sが所有する施設内で過ごしてきた。当時の彼女達の世界とは施設だけであり、外の世界に思いを馳せる事はあれど、外に出る事は終ぞ叶わなかつた。だが、自分達は今、こうして施設の外で食事をしている。

誰に聞いても一般的と答えるであろうこの状況は、彼女達にとって夢見ていたシチュエーションであったのだ。

「ケアンはどう思うデスか？ こうして外の世界に触れてみて」
「……………？ なぜ、そこで私に振る？」

「だって、ママに連れ出されるまで、ケアンもアタシ達と同じくずっと施設内にいたんデスよね？ まあ、アンドロイドにこういう事聞いても、答えは大体わかっちゃうんデスけどね」

どうせ「特になにも」と、いつもと変わらない無表情で答えるのだろうと高を括っていた切歌の耳に届いたのは――

「……………まあ、悪くはない」

という、少し嬉しそうな声色での回答だった。

その答え方は想像もしていなかった二人は思わず呆気に取られてしまい、食事を中断した二人に気づいたケアンは「どうした」と、先程の声色が嘘だったのではないかと思ってしまうような、いつもの無機質な声で訊ねてくる。

「早く食べ終えろ。いつ作業員がやって来るかわからない」
「りよ、了解デス。調、さっさと食べ終わるデスよ。……………調？」

親友からの返事が無い事を不審に思った切歌が調の顔を覗き込むと、今にも倒れてしまいそうな表情の調と目が合った。

「調ッ!? ずっとそんな調子だったデスカッ!?」
「大丈夫……………ここで休んだから……………」

そういつて立ち上がった調だが、おぼつか覚束ない足取りで歩きだそうとした事が災いし、近くにまとめて立てかけられていた鉄棒に当たってし

まう。

「調ッ！」

衝撃を受けて一斉に倒れ始める鉄棒から調を護ろうと、切歌が覆い被さろうとする。だが、その直前に誰かに手を引っ張られて投げ出され、尻餅をついてしまう。

「調ッ！ 調ッ！」

尻餅をついた痛みさえ忘れ、大切な親友の名を叫ぶ切歌の前に現れたのは――

「護衛対象は護り抜く。それがママからの命令だ」オーダー

気を失った調を横抱きに抱えたした、ケアンの姿。

調の体に傷が無いのを見るに、ケアンが倒れてきた鉄棒から彼女を護ってくれたのだろう。

常人ならば運が悪ければ大怪我を負っていたであろう衝撃にも無傷で耐え切るあたり、やはり彼は人ではないのだろう。だが、それでも切歌は、その身を賭して調を護ってくれたケアンに感謝していた。

「ありがとうデス、ケアン……………」

「私は命令オーダーを実行したまでの事。礼を言われる筋合いは無い」

「それでも、感謝しきれないデスよ。なにかお礼の品を差し上げたいところデスが、今は調をドクターのもとに」

「当然だ」

あのいけ好かない男に調の検査をさせるのは正直御免被りたいところだが、自分達の中で最も人体に関する知識を持っているのはウエルだけだ。生化学者の彼でなければ、今の調がどのような状態なのか

わからない。

「切歌、先程、お前は私に『なにかお礼の品を差し上げたい』と言ったな？」

調を抱えた状態でも全く速度を落とさず、それどころか切歌と足並みを揃えて走ってすらいるケアンが、切歌に視線を向けずにそう訊ねてくる。

「アタシの友人を護ってくれた恩返しデスよ。アタシがあげられるものなら、なんでもあげるデス」

そこまで言ってハツとなった切歌は、慌てて先の言葉を訂正する。

「や、やっぱり違うデスッ！ 流石にイガリマはあげられないデスよッ！」

「元よりイガリマを求める気は無い。それはお前が振るうべき力だ。私が欲しいのは、物ではないのだ」

「……………？ どういう事デスか？」

調の問いに一瞬黙ってから、ケアンは自分が求めるものを口にする。

「——私は、心を知りたい。アンドロイドの私が、人の心を理解できるとは考えにくいが、それでも知りたいのだ」

以前、偶然自分達の隠れ場所に来てしまった子ども達を口封じしようとした時、マリアは見ず知らずの子ども達を護ろうとした。切歌も、自分の命を顧みずに親友を護ろうとした。

あまりにも複雑で、不可解で、不明瞭。いつそ、答えなど無いと言われた方がマシとも思えてくるようなこの疑問だが、だからこそ、自

分はこの疑問を解消したい。

「教えてくれ、人間きりか。お前達の持つ、『心』というものを」

死者の身を借り受けて生み出された当機の役目は、壊れるまで人類の道具で在り続ける事。この役割に不満など無い。だが、それでも知りたいのだ。他の動物達は持ちえない、上位者である神が人類にのみ所有する事を許した『心』。

『進化』の記憶を内包するイクシードメモリを手に絶えず進化を続ける自分には、その『心』がなんであるかという答えを求めざるを得ないのだ。

「……………そのくらいでしたら、いくらでも教えてやるデスよ」

勉学はあまり得意ではない部類だが、心を教えるなら大丈夫だ。人として産まれた以上、心は常に、自分と共に在ったのだから。

「感謝する、切歌」

無機質に、しかしどこか嬉しそうに返したケアンは、切歌と共にナスターシヤ達の待つ場所へと向かっていった。

失われた『陽だまり』

これ以上、ガングニールと人体の融合を進めるわけにはいかないという理由で休暇を与えられた響は、東京スカイツワーの水族館でじつと目の前の水槽の中を泳ぐ魚の群れを眺めていた。

『このままでは死ぬんだぞ、立花ッ!?!』

危険な状態にある事を笑い飛ばそうとした自分を涙ながらに叱った翼の言葉が甦る。

戦えば、死ぬ。それは当たり前前の事で、ことノイズを相手にギアが解除されてしまえば、次の瞬間にこの命は炭となって消えていく。だが、戦いに身を投じてしばらくしていくうちに、そんな気持ちは麻痺していった、いつしか『死』は遠いものであると考えるようになっていった。

(戦えない私って、誰からも必要とされないのかな……………)

今まで経験してきた戦いの記憶がフラッシュバックする。どれもこれも、誰かを護る為の戦いで、ガングニールがあつたからこそ勝利できたものばかりだ。己の意志のままに、人々を救い続けてきたシンフォギア。それを纏えなくなった自分は、果たして必要とされるのだろうか？

「ふええええあああッ!?!」

そんな事を考えていた矢先、いきなり頬に冷たいものが当てられ、大声を出してしまう。

誰もが突然大声をあげた響に視線を向け、それに気恥ずかしさを感じながら頬に当てられたものがなんなのかと考えるよりも先に、冷え

た缶ジュースを持った親友の姿が見えた。

「大きな声出さないで」

「だだだ、だって、いきなり冷えたジュースくっつけられたら、誰だつて声が出ちやうつてッ！」

「響が悪いんだからね？」

「私？」

響に缶ジュースを渡した未来は少し拗ねた態度で言う。

「だって……………せつかく二人で遊びに来たのに、ずっとつまらなそうにしてるから」

「あ、ああ……………ごめん……………」

思えば、自分はここに来てからずっと自分の事しか考えていなかった。理由はどうあれ、せつかく与えられた休暇だ。それなら、この休暇を存分に楽しまなければ。

「心配しないで。今日は久しぶりのデートだもの。楽しくないはずがないよ」

「響……………」

「デートの続きだよッ！　せつかくのスカイタワー、丸ごと楽しまなきやッ！」

「ん……………」

いつもの眩しい笑顔で歩いていく響の背中を見つめ、未来は先日の出来事を思い出す。

『お前には知っておいてもらいたい事がある』

響がメデイカルルームで治療を受けている時、放課後に克己に呼び

出された未来は、彼から今の響がどのような状況にあるかの説明を受けた。

『響が一番信頼を置いているのはお前だ。重要な戦力ではあるが、戦闘を無理強いさせるわけにもいかない。響を護ってやってくれ』

戦いから離れている間の響は、基本的に一番の親友であり、また『陽だまり』でもある未来と共に行動している。寮の部屋も同じだという話も聞いているため、響が最も安心できるのは未来と一緒にいる時だと考えたのだろう。実際、その考えは的を射ている。

だから、今もああして笑っている響が今も危険な状態にあり、またギアさえ纏わなければガングニールの浸食はある程度抑制できる事も未来は理解している。故に、未来の心には暗い感情も芽生えている。

(やっぱり、嫌だな……。響が戦うのは……。)

響が自分の意志で決めたとはいえ、戦いは戦い。いつ死ぬかだっかわかったものではないし、もしかしたら明日、響が自分の隣に立っていない可能性だってある。

あの太陽のような笑顔を見れるのも、今日が最後かもしれない。

(叶うのなら、もう二度と、響には……。)

「未来く？ 早くおいでよッ！」

「う、うんッ！」

階段の上で待つ響に呼ばれ、とにかく今日は響とのデートを楽しもうと考える事にし、未来は階段を上り始めた。

「——私たちがしてきた事は、テロリストの真似事にすぎま

せん。真に成すべき事は、月がもたらす被害を如何に抑えるか
……………。違いますか？」

響達がいる水族館がある階のはるか上。ケアンを護衛につけ、マリアに車椅子を押ししてもらいながら、ナスターシヤはマリアに問いかける。その問いがなにを意味しているのか、知らぬマリアではない。

「つまり、今の私達では、世界は救えないと……………」

このままなにもしなければ、フィーネによって砕かれた月の破片はこの地球に落ちてくる。そうなってしまえば、想像を絶する規模の被害が出てしまうのは想像に難くない。頼みの綱であるフロンティアも起動に失敗している。このままでは、本当に月の破片の落下を食い止められなくなってしまう。

だからこそ、ナスターシヤにはある考えがあった。

左右に幾つも存在する扉の一つを開け、二人がそこに入ると、複数人の黒服の男達がいた。

「この度の申し出、嬉しく思いますよ。ナスターシヤ教授」

「ママ、これは……………ッ!？」

「米政府のエージェントです。講和を持ちかける為、私が召集しました」

「講和を……………結ぶつもりなの?」

ナスターシヤが呼んだのは、自国さえ助かればそれでいいと考えている米政府に連なる人間達だ。彼らと講和を結んだとしても、後に待つ結果は自分達にとって良くないものになるに違いない。それはナスターシヤも重々承知している。それでも尚、彼女はこの危険な綱渡りに踏み切ったのだ。

「ドクター・ウエルには通達済みです。さあ、これからの大切な話をし

ましよう……………」

——その頃、喫茶店で紅茶を飲んでいたウエルが、今頃ナスターシヤ達がいるスカイタワーを遠目に見つめて「ふん」と鼻を鳴らすと、ウエイトレスに案内されてきた男性が、彼の前の椅子に腰を下ろす。

「予定時刻より二分遅れました。申し訳ありません」

そうは言いながら、まるで申し訳なきを感じさせない表情。表情に關してはケアンといい勝負だが、目の前の男にはケアンにはない、人間特有の瞳の輝きがある。

もしこの場に克己達がいたなら、彼の姿を見て即座に殺氣立つだろう。

穢れを感じさせない白い服装に、欠片の感情も感じさせない表情。知る人ぞ知る、闇の世界を生きる死の商会——財団Xのエージェントである。

「構いませんよ。それで？ 例のものは？」

エージェントの遅刻を特に咎めず、目当てのものを出すようにと急かすウエルの前に、エージェントは懐から取り出した小包を置く。小包を開け、ウエルが取り出したのは、一本のUSBメモリに酷似した、翡翠石の物体。言わずもがな、フィーネが解析したT2ガイアメモリのデータを受け取った財団Xが開発した、T3ガイアメモリの一本である。

「確かに受け取りました。それで、本当にいいんですか？ 貴方達にとって、これは商売道具でしょうか？ それを無償で提供してもらって」

財団Xは、ガイアメモリも含めた様々な技術を闇の住人達に提供する代わりに、かなりの金額を要求してくる。如何に闇の世界で名の知れた商会といえど、資金が無くては活動出来ないからだ。

「以前、貴方方にお渡ししたT3イクシードメモリの戦闘データは我々も受け取っていますが、あの膨大なデータをこの短期間で集めてくれた事には感謝しています。これはその恩返しだと思ってください」

そこでエージェントは、ウエルが自分の足元に置いている、ソロモンの杖に視線を落とす。

「本当なら、その杖を交換材料にしてもらいたいところですが、流石に釣り合いませんから」

「それなら、遠慮なく」

T3ガイアメモリを入れた小包を懐にしまうと、エージェントは用事は済んだとばかりに立ち上がる。

「それでは、私はこれで。今回も期待していますよ」

「勘違いしないでもらいたいですね。これは、僕が英雄になる為の足掛かり。貴方達の事など微塵も考えてませんよ」

その言葉を背に、エージェントは喫茶店から出ていき、ウエルはスカイタワーに視線を向ける。

「……………そろそろ、潮時ですかね」

冷めた紅茶を啜り、ウエルはソロモンの杖を握った。

「――異端技術に関する情報、確かに受け取りました」

『ファイネ』が収集した異端技術に関するデータが記録されたチップをマリアから受け取ったエージェントに、ナスターシャが口を開く。

「取扱いに関しては、別途、私が教授いたします。つきましては……………」

だが、ナスターシャが言い終わるよりも早く、エージェント達は懐から拳銃を取り出してきた。

「マムツッ！」

マリアがナスターシャの傍らに立ち、彼女達を庇うようにケアンがエージェント達の前に立ちはだかる。

「初めからそのつもりだったという事か」

「如何にも。我々が欲しいのはこのデータだけ。貴方達は用済みというわけだ」

対等な取引をするつもりなどなく、欲しいものが手に入ったら相手を抹消する。彼らがその在り方を是とするなら、こちらも同じ手段を取らせてもらおう。

ケアンが拳を軽く握り、エージェント達を排斥すべく動き出そうとした、その時だった。

「ノイズ……………ツ!？」

エージェントの一人が窓の外に見える存在に気付き、他のエージェント

ント達も仲間の口から、人類の天敵の名前が出た事で一瞬だけ注意がケアン達から逸らされる。すかさずケアンが動き、自分から見ている手前にいるエージェントの胸を手刀で貫く。

「があ……………ッ!？」

不意を突かれたエージェントが倒れ、それに動揺した他のエージェント達を、今度はノイズが襲う。

体を槍状に変化させて窓を割って侵入してきた鳥型フライトノイズに貫かれて炭化するエージェントもいれば、床から出現した複数のノイズに触れられて炭化したエージェントもあり、先程まであった優位などとうに無くなってしまったエージェント達は、忽ちケアンとノイズによつて全滅に追い込まれてしまう。

「——————Gran ziz zel bil fen gun gnir
z i z z l」

聖詠を唱え、漆黒のガングニールを装着したマリアが、自分達を狙ってくるノイズ達をアームドギアで消滅させ、先程まで人間だった炭の山から見つけ出したチップを踏み砕く。だが、外周にはまだノイズの姿が見える。このままここに居続けるのは得策ではない。

ナスターシャを抱え、スカイタワーから脱出しようとエレベーターに向かうマリアだったが、エレベーターの扉が開いたかと思えば、そこから出てきた米国の兵士達がアサルトライフルから銃弾を発砲する。

「ケアンッ!」

「了解した」

マリアがマントで銃弾を防いでいる間に、ケアンはラックドライバーを腰に巻き付け、T3イクシードメモリのスイッチを押す。

『イクシード!』

「変身」

『Exceed Active』

変身終了まで待たずにマントの防護壁から飛び出したケアンの身を包んだ白銀の素体に、周囲に構成された漆黒の鎧が装着され、最後に蒸気を噴出させる。迫りくるイクシードに無数の銃弾が襲い掛かるが、数々の戦闘を重ねて強度が増した鎧の前には意味をなさず、火花を散らしながらも一つの傷も作らずに兵士達との距離を縮めたイクシードによって、兵士の一人を殴り飛ばされる。

「マリア、ケアン。待ち伏せを避ける為、上の階からの脱出を試みましよう」

ナスターシヤの指示に従い、マリアは非常用階段へ続く扉を蹴破り、兵士達を全滅させたケアンと共に階段を駆け上がり始めた。

——一方、スカイタワーの展望デッキでは、ノイズの存在に気付いた人々が我先にとスカイタワーから脱出を試み始めており、そこには響と未来の姿もあった。

「ノイズ……………ッ!」

「行っちゃ駄目ッ! 行かないでッ!」

人類の天敵の登場に、反射的に聖詠を口ずさもうとした響だが、すぐに未来に止められてしまう。

「未来……………。だけど、行かなきゃ……………ッ!」

いつノイズがスカイタワー内に侵入してくるかわからない。今、この場でノイズを打ち倒せる力を持つのは自分だけだ。しかし、それをわかっていながらも、未来は響が GANG ニールを纏う事を許さない。

「この手は離さないッ！ 響を戦わせたくないッ！ 遠くに行つてほしくない……………ッ！」

これ以上、シンフォギアを身に纏えば響の命が危うい。そんな状況で、親友がギアを纏うのを許せるほど、自分は出来ていない。

人々を救う為、シンフォギアを纏いたい響。響の身を案じ、シンフォギアを纏わせたくない未来。両者の気持ちが交錯する中――

「お母さん、どこお……………？ お母さん……………ッ！」

母親とはぐれた少年が泣きながら歩いているのが見え、響は自分の手を掴んでいる未来の手を振り解く。

「胸の GANG ニールを使わなければ大丈夫なんだッ！ このままじゃ……………」
「響……………ッ！」

シンフォギアを纏う事で死が近づくのなら、それを使わなければいいだけの事。ならば、大丈夫なのかもしれないと考えた未来は、響と一緒に泣きじゃくっている少年を保護し、一緒に非常階段まで向かうのだった。

――扉を蹴破って上階の廊下に飛び出した瞬間、予め待機していた兵士達が、マリア達目掛けて発砲してくる。咄嗟にマントで銃弾を弾いていくが、どうやらこの階にはまだ一般人がいるらしく、

背後から飛んでくる銃弾に怯えながらマリア達の真横を走り去っていくが、そのうちの数人が凶弾に撃ち抜かれて倒れた。

「やめろッ！」

防護壁として使用していたマントを翻し、兵士の一人を吹き飛ばす。

「マリア……………」

自分達の争いに巻き込まれて命を落としてしまった一般人の遺体を見下ろすマリアの体は、悔しさと怒りに震えていた。

「お前達は……………本当に……………ッ！」

他者の犠牲などどうでもよくて、ただ自分達が助かるならそれでいい。平気で一般人の命を奪い、その責任を負おうともしない彼らの所業は、マリアにとって許せるものではない。

「どうしようもないな……………お前達はあああああッ！」

巻き込まれた人々を救えなかった悔しき、無関係な人間であろうと関係なしに発砲する兵士達への怒り。ぐちゃぐちゃに混ざり合った二つの感情のままに、マリアは兵士目掛けて飛び蹴りを繰り返そうとする。

だが――

「……………ッ!? ケアンッ!?」

マリアの飛び蹴りは、イクシードの片手によって受け止められてしまっ

「お前は、人を殺す事を躊躇っている。そんなお前に、人殺しはさせられない」

イクシードが受け止めた一撃。それは当たり所が悪ければ、背後の兵士を殺しかねない威力を秘めている。

真似事といっても、自分達はテロリストに違いは無い。いずれ、誰かの命を奪う時が来るだろう。その時に備え、テロリストのくせに人殺しを躊躇うマリアに、敢えて人殺しをさせて、他者の命を奪う事に慣れさせようとも考えてすらいる。それなら、今この場にいる兵士達を殲滅させて慣れさせればいいだけの話だろうが、その後のマリアがどうなるか、簡単に想像できる。

マリアは優しい女性だ。その慈愛の心は、味方どころか関係ない一般市民などにも向けられる。そんな人物が一度でも人殺しをしてしまえば、ずっと悔やみ続けてしまうだろう。『あの時、自分はどうかしていた』と、思い悩む事だろう。それはイクシードにとっても、武装集団『フイーネ』のとっても利益に繋がらない。

マリアの足を放したイクシードが、背後の兵士の首を掴み上げ、別の兵士に投げ飛ばす。銃口から撃ち出される銃弾など気かけず、その胸元を手刀で貫き、その兵士が持っていたアサルトライフルを奪っては他の兵士達の利き手や足を撃ち抜く。

「臆病なテロリストなど不要だ。お前はただ、私に『殺せ』と命令するだけでいい。道具わたしは、お前の全てを受け止めよう」

敢えて殺さずにいたのは、マリアからの命令オーダーを実行する為。生かすも殺すもマリアの命令次第。彼女が、己が心に渦巻く激情のままに『殺せ』と命令するなら、それでも構わない。

「……………ケアン。貴方オーダーに命令を下すわ」

呻く兵士達を見下ろすマリアの目には、憤怒の炎が灯っている。次に彼女の口から吐き出される言葉を想像し、ケアンはアサルトライフルの引き金に指をかけるが――

「銃を下ろし、私達の脱出をサポートしなさい」

マリアの口から出てきたのは、ケアンが想像していたものとは真逆の命令^{オーダー}。しかし、予想とは違っても命令は命令。ケアンは言われた通り、兵士達に向けていた銃口を下ろす。

「やはり、お前はテロリスト失格だ。敵にすら慈愛の心を抱くとは」

「そんなものじゃないわよ。一時の激情に駆られて相手を殺すのは、愚かな事だもの。それに、私は……………」

一瞬だけ口ごもってから、マリアは続ける。

「貴方に、これ以上人殺しをしてほしくないの。たとえば、敵を排除する事が貴方の存在意義だとしても、もう私は、貴方を血で汚したくない」

目の前に立つ人ならざるヒトを造り上げた人物は、彼に人間としての幸せな日常を過ごさせたいという願いを持っていた。ウエルは故人のケアン・デイクスと機械のケアン・デイクスは全くの別人だと割り切っていたが、マリアにはそれが出来ない。

マリア……………否、マリアだけではない。この場にはない調と切歌にとつても、今自分達の前に立つ彼こそが、『ケアン・デイクス』なのだ。

「……………了解。命令^{オーダー}を遂行する」

新たに受けた命令^{オーダー}に従って銃を捨てたケアンは、一秒でも早くこの場から離れる為に天井を破壊し、一人が充分に通れる大きさの穴を

開ける。

上階に上がればすぐに天井を破壊して突き進んでいくケアンに、ナスターシヤを抱えたマリアが続く。

今、彼がどんな表情をしているのか、それは仮面に隠されて誰も見る事は出来ない。それを知るのは、ケアンただ一人だけである。

「——ほらほら、男の子が泣いてちや、みつともないよ？」

「みんなと一緒に避難すれば、お母さんにもきつと会えるから大丈夫だよ」

母親とはぐれてしまい、今も泣きじやくる少年を慰めながら響達が非常階段へ向かうと、そこで逃げ遅れた人はいないかと待機していた男性が駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？ 早くこつちへ。貴女達も急いでッ！」

少年を抱えて、一足先に男性は階段を駆け下りていく。それに響達も続こうとした瞬間——

「わッ!？」

「うわわ、わああ……………ッ！」

突如としてスカイタワーが大きく揺れ、バランスを崩した響がスカイタワーから落ちかける。

「響……………ッ！」

咄嗟に響の手を掴み、引き上げようとするが、か弱い少女の腕では、自分と同じくらいの体重の響を引き上げる事は難しい。

「未来ッ！ ここは長くもたないッ！ 手を放してッ！」
「駄目ッ！ 私が響を護らなきゃ……………ッ！」

克己から頼まれたからではない。自分が護りたいと思うからこそ、未来は響の言葉を拒む。その瞳からは、涙が溢れていた。

「未来……………」

だが、響はもう、覚悟を決めていた。

「……………いつか、本当に私が困った時、未来に助けてもらおうから……………」

響が、未来の手を掴む力を緩めていく。

「今日は、もう少しだけ……………私に頑張らせて……………」
「……………私だって、護りたいのに……………ッ！」

未来が少しずつ離れていく響の手を掴み続けようとするが、その次の瞬間には、彼女達の手は、完全に離れた。

「響いいいいいいッツ!!」

未来の悲痛な叫びが遠ざかっていき、全身に浮遊感を感じながら、響は聖詠を歌う。

「———— Balwisyall Nescell gungn
ir tron」

全身に北欧の最高神が振るった神槍の欠片を基に形作られた鎧を覆った響が着地すると、彼女を中心に小規模のクレーターが出来上が

る。

「未来、今助けるからッ！ …… …… ……ッ!？」

親友が取り残された場所を見上げた響だったが、そこにあつたのは

—— 未来がいるはずの場所で、轟音を上げて黒煙を立ち昇らせるスカイタワーの展望デッキだった。

「未来ううううううッ!!」

その時、響が挙げた叫びは、絶望と恐怖に彩られていた。

心を押し殺して

「なんで、こんな事に……………」

数秒前まで、すぐ傍にいた親友がいる場所から立ち昇る黒煙を見上げた響の武装が、周囲にノイズがいるにも関わらずに解除される。

「響ちゃんッ！」

完全に無防備な状態の響に群がるノイズの群れをルナドーパントの両腕が薙ぎ払う。

「哀しむのは後だ、立花ッ！」

「まずはここいらの奴らを片付けてからだッ！」

そこへ翼とクリスも登場し、すっかり戦意喪失してしまった響を助け起こそうとするが、彼女の視線が今も煙を上げる展望デッキに向けられている事から、「まさか」と思い至る。

「あたし達は、間に合わなかったって言うのかよ……………ッ！」

「おのれ……………ッ！ 人を人とも思わぬ奸悪ッ！ 最早この防人の剣には一片の仮借さえ無いと知れッ！」

悔しさと怒りを胸に、翼は『疾風』、クリスは『闘士』の力を引き出し、残りのノイズの掃討にかかる。

(少しずつなにかが狂って、壊れていきやがる……………ッ！ あたしの居場所を蝕んでいきやがる……………ッ！)

ガントンプアの銃口から発射したエネルギー弾がノイズをハチ

の巢にし、続いてやって来るノイズを殴り飛ばす。

「雪音、前で出すぎるなッ！ 私の剣が先陣となつて——」
「うるせえッ！」

後方で緑風を共にノイズを斬り捨てていく翼の忠告を無視し、クリスはノイズの群れに突っ込んでいく。

（ノイズ………ッ！ あたしが、ソロモンの杖を起動させてしまったばかりに………ッ！）

二課に所属する前、ファイネの要望に従ってソロモンの杖を起動させてしまったのが、全ての始まりだった。人類の天敵を意図的に召喚、使役する事が可能なあの聖遺物のせいで、罪も無い人間が大勢犠牲になった。そして、その災厄は今も、こうして目の前で起こされ続けている。

（なんだ………悪いのは、いつもあたしのせいじゃねえか………ッ！）

自分への怒りでどうにかなってしまいそうな、その時だった。

「………ッ!? しまった………ッ！」

目前のノイズに意識を向けすぎたせいで、側面から迫るノイズの攻撃に気付けなかったのだ。防御しようにも、今からでは遅い。

だが——

「前へ出すぎだ、クリス」

クリスの行動を諫める一言と共に飛んできた光弾が、今にもクリス

に触れかけたノイズを撃ち抜いた。

「戦場で私情に囚われるな。死にたいのか」

「……………クソツッ！」

自分に向かってくるノイズを次々と光弾で消滅させていくトリガードーパントの言葉は的を射ている。先程までの自分を反省しようとし、それでも抑え切れないでいる怒りに舌打ちし、その怒りを鎮める為に、クリスはノイズの殲滅に専念する事にした。

「——米政府が？」

ノイズの駆除が完了し、それが人かノイズかわからない炭素の山を作業員が片付けている光景を傍目に、弦十郎は緒川からもたらされた情報に眉を顰めた。

「間違いありません。『フィーネ』と接触し、交渉を試みたようです」
「その結果がこの惨状とは……………。交渉は決裂したと見るのが妥当だな」

もし交渉が成立したのなら、あれ程のノイズを召喚するはずが無い。『自分達はここにいます』と宣言しているようなものだから。

「ただ、どちらがなにを企てようと、人目につくような事は極力避けるはず」

『『フィーネ』と米国が結びつく事を良しとしない、第二の思惑が横紙を破ったか……………。よし、周辺の搜索を頼む。手掛かりくらいは残っているかもしれん』

「至急、人員を回しましょう」

「ボス」

頷いた緒川がその場を去ると、それと入れ替わるようにして克己がやって来る。

「克己君か。ノイズの駆除、ご苦労だった」

「仕事だからな、当然の事だ。……………それより、これを見てほしい」

「うん？　これは……………」

弦十郎が克己から受け取ったものは、一機の通信機だった。

——当日の夜、一軒のファミレスで二人の少女が腰を下ろしていた。

一人目は、長らく一般的な生活を送っていなかったため、食事のマーなど無いような行儀の悪さで食事を取っているクリス。二人目は翼。だが、彼女はクリスと違って、食事を頼まず、目の前で食事を続けているクリスをじっと見つめているだけだ。

「なにか食べるよ、奢るぞ？」

自分だけ食事を取っているのが申し訳なく感じたのだろうか、そう声をかけるクリスだが、翼はそれをキツパリと断る。

「夜の九時以降は食事を控えるようにしている」

「そんなだから、そんななんだよ」

「なにが言いたいッ！　用が無いなら帰るぞッ！」

苛立ち交じりの声で立ち上がった翼に、口元を汚したままクリスが訊ねる。

「……………怒っているのか？」

「愉快でいられるわけが無いッ！ 『フィーネ』の事、立花の事、そして……………仲間を護れない、私の不甲斐無さを思えば……………ッ！」

自分への怒りに拳を握り締める翼に、クリスは食事を中断して口を開く。

「呼び出したのは、一度一緒に飯を食ってみたかっただけさ。腹を割って、色々話し合うのも悪くないと思ってな。あたしら、いつからこうなんだ？ 目的は同じはずなのに、てんでバラバラになっちまってる。もっと連携を取り合って——」

「雪音」

クリスの言葉を遮る翼。

「腹を割って話すなら、いい加減、名前くらい呼んでもらいたいものだ」

「はあッ!? そ、それは……………おめえ……………」

「帰るぞ」

腹を割って話し合いたいと言っておきながら、名前を口にする事すら恥ずかしかるようでは、話せるものも話せない。要件が無いようならこの場にいる意味は無いと、翼がファミレスから出ていつてしまいい、残されたクリスは「はあ……………」と深い溜息を吐いた。

「結局、話せず終いか……………。でも、それでよかったのかもな……………」

もう誰も座っていない空席を見つめ、クリスは一人呟くのだった。

翌日、響達は弦十郎に呼び出されて仮設本部司令室に集められていた。

あの後も行方不明となった未来の搜索は続けられているが、未だに発見報告が挙がらない事にすっかり意気消沈している響に、弦十郎がとあるものを手渡す。

「これは……………」

「スカイタワーから少し離れた地点より克己君が回収した、未来君の通信機だ。発信記録を追跡した結果、破損されるまでの数分間、ほぼ一定の速度で移動していた事が判明した」

「え……………」

見開かれる響の瞳にあるのは、大きな驚愕と、微かな希望。

「未来は死んでなんかないわ。何者か……………、たぶん『フィーネ』に連れ出され、拉致されているところでしょうね」

「レイカさんッ！ それって、つまり……………ッ！」

徐々に輝きを増していく希望の灯を瞳に宿す響に、レイカはおろか、事前にこの事を知らされていた者達も頷き、彼らを代表して弦十郎が笑顔と共に言う。

「こんなところで呆けてる場合じゃないって事だろうよッ！」

拉致されてしまっているとはいえ、未来は生きている。それだけでも、響にとつては朗報だ。生きているのなら、また面と向かって話し合う事も出来るのだ。その為には、取り戻さなくてはならない。

取り戻すのだ、未来を。自分の『陽だまり』を。

「さて、気分転換に体でも動かすか？」

「はいッー」

響が得意とする体術の師匠である弦十郎がそう言うという事は、それは特訓を意味するものに違いなく、響の大切なものを取り戻す為の戦いとくれば、そのメニューは普段受けているものよりも過酷なものになるだろう。先程までの暗い気分などとうに晴れた響が一層気を引き締めると――

「俺達も手伝おう。イクシードは強い。俺達も強くなる必要がある」

なんと、克己達もこの特訓に参加すると言い出してきたではないか。響達装者と組んで摸擬戦をする事もあるにはあるが、基本彼らは五人で摸擬戦を行っているのだ。そんな彼らが自ら進んで参加するとは、弦十郎も多少驚きはしたが、それもそうかと一人納得する。

戦闘経験を積んでいく度に戦闘力を増していくイクシードは、二課にとつて大きな脅威となつている。今でさえかなりの脅威度なのに、これ以上強くなつてしまえば、本当に手が出せなくなつてしまう。一貫して傭兵としての立場を貫いている彼らであっても、思うところは同じだ。

「そうと決まれば早速始めるぞッー！ 俺についてこいッー！」

「はいッー」

走り出す弦十郎と、それを追う響。その後を克己達、そして成り行きで翼とクリスも続く。

そうして始まる、弦十郎と響による『英雄故事』をBGMに行われる特訓。それが終わる頃には、響は滝のように汗を流し、クリスに至つては今にも倒れてしまいそうになっていたが、二人以外はまるで足りぬとばかりに、呼吸を乱していなかった。

——一方その頃、『フィーネ』の有する飛行機の一室では、ナスターシヤ達が調と切歌に詰め寄られていた。内容はもちろん、今日起きたスカイタワーの事件である。待機を命じられていた二人であるが、ナスターシヤから今日彼らがスカイタワーに行く事は事前に知らされていた。無事彼らが戻ってきた事に安堵こそすれ、スカイタワーでなにがあつたのか知りたくなるのは当然である。

「教えて、ママ。いったいなにが……………」

「それは……………」

「それは僕からお話ししましょう」

彼女達の会話に割り込むようにやって来たのは、ウエル。だが、彼が馬鹿正直に此度の事件の内容を話すはずが無い。

「ナスターシヤは訪れる月の落下より、一つでも多くの命を救いたいという僕達の崇高な理念を、米国政府に売ろうとしたのですよ」

「……………ママ？」

「本当なのデスカ……………？」

二人の問いかけに、ナスターシヤは答えられずにいる。

「もし、米国政府との交渉が成立していれば、出奔した我々は再びF.I.Sに吸収されていたでしょうね。そうなってしまうえば、せつかく手に入れたネフィリムの心臓も、無駄になるところでしたよ」

「ママ、マリア、ケアン……………。ドクターの言ってる事なんて、嘘デスよね？」

「……………本当よ。私達は、人類救済の計画を、一時棚上げにしようとしたわ」

「そんな……………」

思わず目を伏せてしまう二人に、マリアが続ける。

「ママは、フロンティアに関する情報を米国政府に供与して、協力を仰ごうとしたの」

「だって、米国政府とその経営者達は、自分達だけが助かろうとしているって……………」

「それに、切り捨てられる弱い人達を少しでも護る為、世界に敵対してきたはずデス……………ッ！」

政府関係者には欲望に忠実な者が多いが、米国所属の彼らは他の国々の経営者の度を越していると言っても過言ではない。必要とあらば、如何なる犠牲をも許容するだろうし、卑劣な手段を取る事も辞さないだろう。なにしろ国家権力だ。多少の悪事など、容易く揉み消せてしまうのだから。

そんな彼らの餌食となっている弱者達を救う為、自分達はこうして立ち上がったというのに、その筆頭であるはずのナスターシャが、敵である米国政府と結びつこうとしていた事実は、二人には到底受け入れられるものではなかった。

「あのまま講和が結ばれてしまえば、私達の優位性は失われてしまう……………。だから貴方は、あの場にノイズを召喚し、会議の場を踏みにじってみせた」

「ふッ、嫌だなあ……………。悪辣な米国の連中から、貴方を護ってみせたというのにッ！ このソロモンの杖でッ！」

「や、やる気デスか……………ッ！」

「ママを傷つける事は……………ッ！」

ソロモンの杖を向けてくるウエルに調と切歌が対峙し、今にも機内で戦闘が始まってしまいそうな状況が出来上がってしまうが――

「やめなヤッ！」

マリアの一言によつて、彼らの戦意は薄れる事となる。

「マリア……………ッ!?!」

「どうしてデスカ……………ッ!?!」

「ハハハッ、そうでなくちゃッ!」

二人が動揺する中、ウエルはさも当然とばかりに笑う。

「偽りの気持ちでは世界を護れない。セレナの想いを継ぐ事なんて出来やしない」

マリアが握り締めるのは、ガングニールのそれとは異なる、破損したペンダント。それはかつて、歌の力に頼らずに目覚めさせた結果暴走したネフィリムを、己が命を以て鎮めた、たった一人の妹のシンフォギア。ギアとして身に纏えずとも、マリアにとつてのそれは、セレナが唯一この世に遺した置き土産であり、形見なのである。

「全ては力……………。力をもつて貫かなければ、正義を成す事など出来やしないッ! 世界を変えていけるのは、ドクターのやり方だけ……………。ならば、私はドクターに賛同するッ!」

「そんなの嫌だよ……………。だってそれじゃ、力で弱い人達を抑え込むって事だよ……………」

マリアの行おうとしている事は、今まで自分達が敵対してきた米政府と同じ事だ。弱きを救う為にこの組織が出来上がったのに、これではやり方が変わっただけで、結果はまるで変わらないではないか。

「それが貴女の選択なのですね、マリア……………。ごほッ、ごほ……………ッ!」

「大丈夫デスカッ!?!」

咳き込むナスターシャの体を切歌が支えるが、マリアはただその様子を見つめるだけ。

「後の事は僕に任せて、ナスターシャはゆっくり静養してください。さて、計画の軌道修正に忙しくなりそうだ。来客の対応もありますからね」

一言残してウエルが出ていくと、マリアは今まで黙って自分達の会話を聞いていたケアンに訊ねる。

「貴方はどつちにつくのかしら？ ケアン」

「私の役目は計画の完遂。その為の手段がなんであれ、私の成すべき事は変わらない」

力による支配なら、圧倒的武力で敵対者を仕留めるまでの事。力ある者に自ら歯向かおうとする連中などそう多くはない。彼らの希望を完膚なきまでに叩き潰し、真に従属すべき者を再認識させる。なるほど、機械の自分ですら愚かだと感じる分、実に手っ取り早い方法ではないか。

「私の事はどうでもいい。それよりも、マリア。私はお前に訊ねたい」「なにかしら？」

「お前は、自分の心を押し殺したままでいいのか？ 人間ではない私には想像出来ないが、辛くはないのか？」

元より殺しに罪悪感など感じない身。人ならざる存在であるケアン・ディークスは、目的の為なら如何なる穢れも許容するが、根底に優しさが根付いてしまっているマリアに、これから先に待ち受ける試練に耐えられるのだろうか。

「もしかして、私を気にかけてくれているのかしら？　馬鹿馬鹿しい、そんなはずないでしょう？　私は元より、計画を遂行する為に活動していたのだから」

「詭弁だな。己を偽り続けて、その先になにが待つというのだ？」

風鳴翼とのライブで、初めて『偽りのフィーネ』として世界に宣戦布告した時も、力で支配するというウエルのやり方に賛同した時も、マリアは自分を偽り続けている。心を鬼にして、物事に徹しようとしているのだろうが、それが出来ない事くらい、人の感情に疎いケアンでも理解できる。

「確かに、心を殺したまま行動すれば、計画は果たせるだろう。月の落下による被害者の数を減らす事も出来るだろう。だが、救われるのは彼らだけであって、お前は救われない」

「そんなわけないわ。私は、セレナの想いを受け継ぐの。この計画が達成出来れば、あの子もきつと………ッ！」

「では、お前自身の想いはなんだ？」

「……………ッ！　そ、それは……………」

反論しかけたところで、マリアは自分の口から、反論の言葉が出ない事に気付く。押し黙ってしまうマリアに、「当然だ」と言うケアン。

「お前が持つ想いとは、セレナ・カデンツァ・イヴのものであって、マリア・カデンツァ・イヴのものではない。偽るところか、そもそも自分の想いすら抱いていないとはな。……………やはり、お前は生半可だ。世界を相手に戦うに相応しくない」

「……………それでも、私は戦うわ。救われなくなってもいい。みんなが救われるなら、それで」

「そんなの嫌デスよッ！」

二人の会話を聞いて、そう言わずにはいられなかったのか、切歌が

叫ぶ。

「あだし達だけ救われて、マリアは救われないだなんて、そんなの御免
デスッ！」

「私達が救われるなら、マリアも一緒に救われてほしい。だから、そんな事言わないで……………」

切歌と調が口々に言うが、それに対するマリアの回答は――

「……………ごめんなさい」

悲しみに満ちた、小さな一言だった。

――そして、彼らがいる部屋とは違う一室。光で構築された格子に覆われた牢の中に、未来はいた。

歪んだ極光

ケアン達のいる部屋から退室したマリアが向かったのは、先のスカイタワー事件の折に拉致された未来が監禁されている部屋。一般人といえども、拉致監禁までしている以上、監視も果たさなければならぬ役目だと思いついて、この場に訪れたのだ。しかし、かといって特に話す事など無いし、マリアもマリアで、あのまま彼らのいる部屋に居続けるのは気まずいと感じたから、こう言っただけなんだが、彼らから離れる理由として、未来の監視は都合がよかったのだ。

「……………どうして、私を助けてくれたのですか？」

二人の間に流れていた沈黙は、それまでずっと黙っていた未来によつて破られる。

未来がここにいる理由。それは先述したようにマリア達によつて拉致されたのだが、ここではなぜそうなったか、という経緯を説明しよう。

早い話が、今にも崩れてしまいそうな展望デッキに一人残された彼女を見かねたマリアが、彼女を救ったのだ。初めは無関係の人物を助けるよりも、マリアとナスターシヤを脱出させる事を最優先事項としていたケアンは未来を見捨てるべきだと提案したのだが、マリアはそれを無視して未来を助けた。この部分も、彼が先程、マリアを『世界を相手取るに相応しくない人間』と捉えた原因の一つである。だが、これ以外にも、もう一つ別の理由がある。

「さあ……………逆巻く炎にセレナを思い出したからかもね」

「セレナ？」

「マリアの死んだ妹ですよ」

マリアが答えるよりも先に、部屋に入ってきたウエルがそう答える

と、辛い記憶を思い出させてしまったかと未来が目伏せる。

「ドクター。この子を助けたのは私だけど、ここまで連行する事を指示したのは貴方よ。いったいなんの為に？」

「もちろん、今後の計画遂行の一環ですよ」

マリアは、ケアンに未来を救出させはしたが、飛行機に乗せる気は無かったのだ。安全な場所まで移動したら、そこで未来を解放するつもりだったのだが、その前にウエルから未来を連れてくるように頼まれたのである。言われるがままに連れてきたが、今になってマリアは嫌な予感を感じざるを得なくなっている。

「そんなに警戒しないでください。少しお話でもしませんか？ きつと、貴女の力になってあげられますよ」

一方、ウエルは自分に警戒心を抱く未来を安心させるように優しくげな声で話しかけていた。だが、その瞳の奥に宿る獰猛な野心に、未来は完全に警戒を解く気にはなれないでいた。

「——マリア……………どうしちゃったんだろう」

外に干していた洗濯物を取り込んでいる最中、調がポツリと漏らすと、彼女の手伝いをしていた切歌とケアンの視線が彼女に向けられる。

「え？」

「私は、マリアだからお手伝いがしたかった。フィーネだからじゃないよ」

ある日を境に音沙汰が無くなったが故に死んだと考えられていた

オリジナルのフィーネが生きていた情報を得た時から、マリアが自分を偽っていた事は誰もが知っていた。当然、その情報を得る前は、自分達はマリアこそがフィーネだと信じて疑わなかったのだが、調はマリアが新たにフィーネの魂を宿した器だからという理由で、この組織へ入る事を承諾したわけではない。

いつだって優しい心を持って自分達に接してくれたマリアだからこそ、調は彼女の手助けを決意したのだ。

「う、うん……………そうデスとも」

そしてそれは、切歌も同じである。

「身寄りが無くて、泣いてばかりの私達に優しくしてくれたマリア……………。弱い人達の味方だったマリア……………。なのに……………」

先程のマリアは、今までの彼女からは想像できない、武力での計画遂行を目指す事を宣言した。圧倒的な力で他者を捻じ伏せる方法など、彼女が認めるはずが無いのに。

「それが、戦いというものだ」

その時、哀しみと戸惑いなど感じさせない声色で、ケアンがそう言い切った。

「茨の道を進むのに、マリアの心は優しすぎる。あの場で優しさを捨てようとしたのは、もしかしたらよかったのかもしれない」
「……………どういう事？ ケアン」

僅かな怒気を孕んだ声で訊ねる調に、ケアンは臆する事無く返す。

「根底に優しさが根付いているマリアが、あのまま中途半端な状態で人殺しをしてしまえば、その心は摩耗していく。今のうちに、優しさは捨てておくべきなのかもしれないな」

「そんなの、嫌………………。優しくないマリアなんて、嫌だよ……………」

「……………」

ぎゅっと拳を握る調をしばし無言で見つめたケアンは、自分の感じるままに言う。

「嫌なら嫌と、マリアが折れるまで言えればいい。それでも折れなければ、行動で示す事だな」

このまま二人が迷っていれば作業も滞るとばかりにせつせと洗濯物を取り込み、ケアンは機内に戻っていく。そんな彼の背中を、二人は黙って見送る事しかできなかった。

それからしばらくしないうちに、ナスターシヤの口から、フロンティアの地へ向かうと語られた。

——海底を潜航する二課仮設本部に、ノイズ出現を報せるサイレンが鳴り響く。

各々の時間を過ごしていた装者、NEVER達が司令室に到着すると、彼らを待っていた弦十郎がノイズの出現地点を告げる。

「近辺の米国所属艦艇からの応援要請だッ！ 到着次第、駆除してくれッ！」

「応援の準備にあたりますッ！」

いつ到着しても出撃可能になるよう、翼が退室していき、響も続こ

うとするも、クリスに止められてしまう。

「クリスちゃんツ!」

「死ぬ気か、お前ツ!　ここにいろつて、な?　お前はここからいなくなつちやいけないんだからよ……………」

そう言うや否や、クリスは響を置いて司令室から出ていく。

「俺達も行くぞ」

リーダーの克己に従って、NEVER部隊も二人の後に続く。

「行きたい気持ちもわかるわ。だけど、ここはワタシ達に任せてちやうだい」

「ノイズが出たという事は、未来もそこにいるはず。絶対に取り戻してくるから、あんたはここで待つてなさい」

京水とレイカが響を安心させるように言い、先に行つた克己達を追う。

「弦十郎君、ノイズの反応が検知された座標を教えてもらえる?」

一方、響の背後にいるフィーネは、ふと弦十郎にそんな事を訊ねている。なぜ座標が気になるのかと思いつながらも、弦十郎はオペレーター達にノイズの位置座標を訊くと、答えはすぐに返ってきた。

「座標確認ツ!　東経135.72度、北緯21.37度ですツ!」

「……………ツ!　そう、ついに本腰を上げてきたつてわけね」

「どういう事だ?」

いつになく真剣な表情に言い知れぬ不安を覚えた弦十郎に、フィー

ネが答える。

「F・I・Sに在籍していた時、私はあるものが封印された場所を探していたの」

「あるもの、とは……………」

「フロンティア。正式名称、鳥之石楠船神。とりのいわくすふねのかみ彼らがここに現れたとい

う事は、いよいよフロンティアの封印を解こうというわけよ」

「フロンティア……………。もし、それが復活した場合は？」

「それが、わからないの……………。私は月破壊完遂の後に、私に従属した人類のみを救う箱舟として使う予定だったが、あれは『あの御方』達が造り上げた星間航行船。私の知らない機能が含まれてないとは限らないわ。だけど……………」

碌な事にはならなそうね、と、フィーネは弦十郎と似た危機感を抱きながら言うのだった。

——飛行機内、コックピットにて。

「こんな事が、マリアの望んでいる事なの？ 弱い人達を護る為に、本当に必要な事なの？」

世間に武装集団『フィーネ』の力を誇示する為のデモンストレーションとして繰り広げられる事となった、真下の海面に浮かんでいる米国艦隊の上でのノイズによる虐殺。これがマリアの望んだ事なのかと、調がマリアに訊ねていた。

その問いに、マリアは答えない。だが、その顔が、彼女がどんな感情を抱いている事くらい、彼女と長年過ごしてきた調にはお見通しだった。

「調ツ!? なにやってるデスカツ!?」

「マリアが苦しんでいるのなら………私が助けてあげるんだッ！」

突如踵を返して走り出した親友に驚く切歌に振り返る事無く、調は飛行機から飛び降り、聖詠を口ずさむ。

「V a r i o u s s h u l s h a g a n a t r o
n」

その身に纏うは、万物を切り裂く無限軌道に由来するシンフォギア。シユメールの戦神が振るう剣の片割れ——シユルシヤガナ。

「ハアッ！」

展開したヘッドギアから射出された無数の丸鋸が前方にいるノイズの集団を一瞬で炭化させ、その間を走り抜けてながら次々と撃破し損ねたノイズを消滅させていく。だが、やはり数の差はそうそう埋められるものでもなく、ノイズの一体に背後を取られてしまう。

「あ………ッ！」

「どうッ！」

しかし、ノイズの攻撃よりも先に、調に続いてイガリマのシンフォギアを纏った切歌の鎌が、ノイズを切り裂いた。

「切ちゃん、ありがとうッ！」

「どういたしましてデスよッ！」

この惨劇に、マリアがなにも思うはずが無い。そして、それを止めたいと思うのは、調だけではないのだ。

「一緒に止めるデスよ、調ッ！」

「うん、行こうッ！」

ノイズはまだまだいる。今も炭化の危機にある人々はいるので。米政府所属というのが気に食わないが、彼らを見殺しにしては目覚めが悪い。

今度はタッグでノイズの掃討に当たる二人。流石に長年共に過ごしてきただけあって、そのコンビネーションにノイズがつけ入る隙など無く、二人の殺意マシマシの攻撃によって、ノイズの数はどんどん削られていった。

あと少しで自分達のいる甲板のノイズを全滅に追い込める状況になったその時、海面から複数の影が飛び出してくる。

飛び出してきたのは、翼とクリス、そしてエターナルだ。ドーパント達は他の艦に出現しているノイズの駆除に当たってもらっており、調達がいる艦のノイズ掃討を担当する事になったのが、この三人なのである。

「あ、お前らッ！」

甲板に着地するや否や、クリスは自分達を見つめる調達の存在に気付いて彼女達にずかずかと歩み寄る。

「おい、ウエルの野郎はここにいないのかッ!? ソロモンの杖を使うあいつはどこにいやがるッ！」

この場にノイズが現れた原因など、任意でノイズを召喚できるソロモンの杖を所有するウエル以外あり得ない。今すぐにでも彼からソロモンの杖を取り上げたい気持ちなクリスが調に掴みかかろうとするが、上空からなにかが落ちてくる気配を感じて飛び退く。

先程までクリスのいた場所に着地したのは、イクシード。

「ケアン……………」

「ウエルからの指示を受けた。特異災害対策機動部二課、お前達は我々の計画に邪魔だ。今度こそ、排除する」

「それはこつちのセリフだ、イクシード」

翼とクリスの前に進み出たエターナルが、イクシードにエターナルエッジを突き付ける。

「お前達はあの二人を確保しろ。こいつの相手は俺だ」

「頼む、大道」

「任せたぞ」

軽く頷いたエターナルが構えを取ると、イクシードも同様に構えを取る。

そして一瞬の間を置いて、二人の仮面ライダーは今度こそ相手を叩き潰すという気迫と共に攻撃を繰り出した。

「……………始まったようですね」

甲板上で繰り広げられる装者と仮面ライダーとの戦いに気付いたウエルが、飛行機に備え付けられたカメラを操作してモニターに彼らの姿を映し出す。

翼の斬撃を受け止めた切歌が押し返すと同時に翼を蹴り飛ばした背後では、調が放った丸鋸の雨を躲しながらクリスが両手のクロスボウから矢を撃ち続けている。戦況的には、LINKER無しでギアを装着できる二課側が優勢だが、彼女達から離れた場所で繰り広げられるエターナルとイクシードの戦いは、彼女達の比ではない。

装者達の一手が、彼らにとっての三手であると言える程の速度で行われる攻防戦。個の実力ならば進化し続けるイクシードが上だが、

いったいどんなトレーニングをしたのか、エターナルはそんなイクシードに食らいついている。

しかし、それでもイクシードの進化の速度に追いつけるはずもなく、ゆっくりとだがイクシードに押され始めているのが見て取れる。如何に複数のガイアメモリを所有しているとはいえ、イクシードはそれすら凌駕する速度で成長しているのだ。

装者同士の戦いは二課が、仮面ライダー同士の戦いは『こファイちネ』が優勢。イクシードがエターナルを下せば、戦況は一気に有利となるが、それはあちら側にも言える事。イクシードが敗北するなど想像したくもないが、それも考慮しなくては、今後どうするかを決定できない。

「ドクター、なにを……………。……………ッ！ まさか、あれをツ!?」

現在は休んでいるナスターシャに代わって操縦桿を握っていたマリアが、操縦席に備え付けられた端末を操作し始めたウエルに目を見開く。

「念には念を、というものです。しかし、ただでは終わらせません。できるだけドラマティックに、できるだけロマンティックに……………ッ！」

端末を操作するウエルの顔には、狂気の笑みが張り付いていた。

——飛行機から一人の人影が落ちる。全身を風に打たれるも、まるで意に介さずに落ち続けるその人影は、誰も知らない、新たな聖詠を口ずさむ。

Rei shen shou jing rei z

i z z l

その身に輝きを纏って、人影が甲板に落ちてくる。それに気づいた装者達と仮面ライダー達が、人影が落ちてきた方向に視線を投げる。

「なに……………ッ!」

「な、なんデスツ!」

「新手法ツ!」

「マリア……………いや、違うツ!」

立ち昇る黒煙を払って現れたのは、一人の少女。紫色のギアを纏った、彼女は、頭部に装着されたバイザーを開いて、自分を見つめる彼らを見つめ返す。いや、今の彼女に、彼らの姿は見えているのだろうか。一切の感情が存在しない空虚な瞳は、まるで虚空を見つめているかのよう。

「馬鹿な、こんな事が……………ッ!」

「なんで、そんなカッコしてんだよ……………ッ!」

「おおおおおおおおおッ!」

友人であったはずの二人の少女に向けて、獣の如き咆哮を轟かせる彼女は————未来だった。

歪曲する陽だまり／貫く覚悟

「未来……………ッ！」

見た事が無いシンフォギアを纏って現れた親友の姿に唾然とする響の前で、弦十郎はオペレーター達に未来が纏うシンフォギアがどの聖遺物を基に作られたものかを調べさせる。

「アウフヴァアツヘン波形、照合ッ！
神獣鏡ですッ！」

「LINKERを使ったのかッ！」

誰もが未来のまさかの登場に息を呑む中、モニターに映る未来は、光を失った虚ろな瞳で、その先にいる翼達を見つめていた。

——一方、上空から様子を窺っていたマリアも、まさかウエルが一般人であるはずの未来を『フィーネ』の戦力に加えているとは思わず、すぐにウエルを問い詰めようとしていたが、丁度その時、ナスターシャがコックピットにやって来た。

「مامッ！ 今は寝てなきや……………ッ！」

「すみません、マリア。……………それよりも、ドクター。神獣鏡をギアとして、人の身に纏わせたのですね……………」

現在、未来が装着している神獣鏡は、使いやすいうようにペンダント状に加工してあったが、元々の用途はフロンティアの封印解除のみ。それを人間に、しかも自分達とはまるで関係ない少女に纏わせるのは、ナスターシャとて疑問に思う。

「あれは、封印解除に不可欠なれど、人の心を惑わす力……………。貴

方の差し金ですね、ドクター」

「ふん………使い時に使ったまでの事ですよ」

ナスターシヤに睨まれるも、ウエルは全く悪びれる事無く、当然だとばかりに返す。

「マリアが連れてきたあの子は、融合症例第一号の級友らしいじゃないですか」

「リディアンに通う生徒は、シンフォギアへの適合が見込まれた装者候補達………。つまり、貴方のLiNKERによって、あの子になにもわからぬまま、無理矢理に………」

「んんんんっ、ちよつと違うかな？」

しかし、それをウエルは否定する。

「LiNKER使つて、ほいほいシンフォギアに適合できれば、誰も苦労はしませんよ。装者量産し放題です」

響達が通う《私立リディアン音楽院》は、表向きは一般的な学校であるが、その実態は日本政府が秘密裏にノイズに対抗しうるシンフォギア装者を育成する為に設立した施設である。現在は二課の意向により、この機能は廃止の方向へ進んでいるが、その機能によって、生徒達が気づかない間にシンフォギアの適合率が上げられていたのは真実。その証拠として、薬物投与や血の滲む努力の果てにガングニールを手に入れた奏と違い、未来は特になにをするでもなく、LiNKERを投与されるだけで、シエンシヨウジン神獣鏡を装着できている。

「なら、どうやってあの子を？」

だが、無理矢理ではないのなら、いったいどうやって、ウエルは警戒心剥き出しであったはずの未来にシエンシヨウジン神獣鏡を纏わせる事ができたの

だろうか？

それに対するウエルの答えは、この状況で語られるとはとても思えないようなものだった。

「愛、ですよッ！」

「なぜそこで愛ッ!?!」

これにはナスターシャも驚愕する。ウエルは感情がなにかを成し遂げる力になると語るような者ではないと勝手に思っていたが、今こうして言われても、未だに信じられない。

そんなナスターシャなど知らぬと、ウエルは説明を続ける。

「LINKERがこれ以上、級友を戦わせたくないと思う願いを
シンシヨウジンシエンシンヨウジン
神獣鏡に繋げてくれたのですよッ！ やばいくらいに麗しいじゃありませんかッ！」

ウエルが気味の悪い邪悪な笑みを浮かべたその時、彼によってシンフォギアを纏った未来が行動を起こした。

——— 扇子型のアームドギアを取り出す未来から視線を外さぬまま、翼は仮設本部にいる弦十郎達に報告する。

「行方不明となっていた小日向未来の無事を確認。ですが……………」

「無事だとッ!? あれを見て無事だと言うのか？ だったら、あたしらはあの馬鹿になんて説明すればいいんだよッ！」

クリスが文句を言っていると、未来が獣の牙に似た形状のバイザーを閉じて迫ってくる。

「雪音ッ！ 来るぞッ！」

「あぁッ！」

横薙ぎに振るわれる扇子を躲し、クリスがクロスボウから矢の雨を降らせる。未来がそれを飛び退いて回避すると、今度は翼が攻撃を仕掛けてくる。

万が一にも響の親友の彼女を傷つけない為に峰打ちでの攻撃だが、未来は滑るような動きで翼の攻撃をのらりくらりと回避し、扇子の先からエネルギー弾を発射して翼を吹き飛ばす。至近距離からの砲撃を防げず、直撃をもろに受けた翼がエネルギー弾の威力に呻き声を上げていた間にも、未来は追撃を仕掛けようと迫ってくるが、彼女の前に降り注いできた大量の丸鋸によって、追撃は阻止された。

「私達も戦う」

「一時共闘というやつデス。あの子を巻き込んだ責任は取るデスよッ！」

「お前達……………」

なんと、翼のピンチを救ったのは、以前まで敵対していた『フィーネ』の装者達だった。

自分達が未来と交戦している隙を突いて攻撃してくるのではないかと思ったが、どうやらそれをする程、彼女達は非情ではないらしい。加えて、彼女達の様子を見るに、未来がシンフォギアを纏っている事を知らなかったようだ。その事に対して責任を感じているという事は、彼女達は根っからの悪人ではないのだろう。

「助かる。その力、一時のみ借り受けるッ！」

「うん。いこう、切ちゃん」

「合点承知デスッ！」

調が丸鋸を撃ち出すと同時に、切歌と翼が走り出した。

——エターナルの斬撃を身を振って回避したイクシードの視界に、敵対組織である二課の装者と共闘し始めた調と切歌の姿が入る。

彼女達が相手にしているのは、確かスカイタワーでマリアが助けた少女だったはずだ。あのシンフォギアを纏うまでの経緯は知らされていないが、『フィーネ』のメンバーで一般人である彼女を戦力に加えるようと考えるのはウエルしか考えつかないので、彼があの子に神獣鏡シエンシヨウジンのシンフォギアを託したのだろう。

ならば、彼女は『フィーネ』側のはず。二課の装者は当然として、なぜ調と切歌まで彼女と戦っているのだろうか。

「……………ッ！」

首元目掛けて突き出される刀身を打ち払う。

一撃ごとに間合いを詰めて、絶え間なく繰り出される連撃。停止などあり得ないとばかりの速さ。

その鋭さ、苛烈さ。明らかに以前とは違う。

どうやら、自分はエターナルの力量を見誤っていたようだ。

今の彼と以前の彼を同一視してはならない。人間ではない自分に油断する気など毛頭ないが、それでも下手をすれば押し切られる。それを、たった今、今さらながらに気付かされた。

「……………ッ！」

弾き損ねたエターナルエッジの切っ先が鎧を斬りつけ、火花が散る。

「余所見をするとは随分と余裕だな。そのまま倒れてくれてもよかったが」

「……………」

返事を返す気は無いとばかりに無言で構え直すイクシードに、そうでなくては面白くないと言うようにエターナルエッジを構えるエターナル。

一瞬の静寂を置いて、二人の仮面の戦士は再びぶつかり合った。

——調が牽制として射出した丸鋸を未来が打ち払っている間に切歌と翼が迫るが、彼女達の攻撃範囲から逃れた未来がエネルギー弾を発射しようとする。しかし、二人に向けられた扇子の先端は真横から飛んできた複数本の矢によって逸らされ、撃ち出されたエネルギー弾はあらぬ方向へ飛んでいく。

「あたしを忘れてもらっちゃ困るんだよッ！」

次々と矢を撃ち出すクリスだが、相手が友人なため、いつもと同じ調子で戦えるはずがなく、的確に狙い撃つ事ができずにいる。

「く……………やりづれえッ！ 助ける為とはいえ、あの子はあたしの恩人だ……………ッ！」

できれば戦わずになんとかしたいところだが、それができないのもまた事実だ。

絶え間なく飛んでくる矢を躲し続けながら翼達の攻撃も掻い潜っていく未来だったが、ついに一本の矢が右足に装着された装甲に直撃し、バランスを崩す。そこへ翼の一撃が炸裂し、防御が間に合わなかった未来は吹き飛ばされる。

今なら、とクリスが未来に駆け寄って手を伸ばしたその時、未来のヘッドギアからウエルの声が聞こえてきた。

『女の子は優しく扱ってくださいね。乱暴にギアを引き剥がせば、接続された端末が脳を傷つけかねませんよ』

「……………ッ!」

その一言について伸ばした手が止まった瞬間、未来が勢いよく立ち上がると同時に扇子を円形に展開。

「避ける、雪音ッ!」

「なにッ!」

クリスが咄嗟に身を振った瞬間、展開された扇子から幾筋の紫色の光線——『閃光』が放たれる。

「まだそんなちよせえのをッ!」

運良く光線を躲せたが、未来はこれで終わらせない。扇子を消滅させ、今度は脚部ギアを変形させる。そうして完成したのは、先程の扇子と同じく、円形に展開された鏡。

「——閃光……………始マル世界 漆黒……………終ワル世界」

未来の歌が響き渡り、鏡に輝きが満ちていく。その光景を前に誰もが不吉な予感を感じた瞬間、扇子から放たれたものとは比べ物にならない高出力光線——『流星』が発射された。

「だったら、こいつで防いでやらあッ!」

光線の速度から回避は困難であり、もし直撃すればただでは済まないと悟ったクリスが即座に腰部ギアからリフレクターを展開。極大の光線を阻む。

「イチイバルのリフレクターは、月をも穿つ一撃すら偏向できるッ！
そいつがどんな聖遺物から造られたシンフォギアか知らないが、今
さらどんなのぶっこまれたって……………ッ！」

一度は月を穿つ為に撃たれたカ・デインギルの一撃さえも標的である
月から逸らした程のリフレクター。今阻んでいる光線は威力こそ
高いが、あの最古の塔の一撃に比べれば可愛いものだ。これくらいな
らば、余裕で防げると思っていたクリスだったが――

「な、なんで押されてんだッ!？」

光線はゆつくりと、リフレクターの壁を突破しようとしていたの
だ。このあり得ざる現象になぜと訝しんだクリスの目に、徐々に削ら
れていくリフレクターが見える。……………否、削られているのでは
ない。

「リフレクターが、分解されて……………ッ!？」
「く……………サイクロンッ！」

これ以上持ちこたえても、いずれリフレクターの防護壁は破られる
と踏んだ翼がシンフォギアを天羽々斬から天羽々斬・翼風刃に切り替
え、上空から落とした巨大な剣で光線を阻んでいる間にクリス達を抱
えて離れる。

標的を取り逃した光線は剣を容易く貫き、甲板を大きく抉り取って
いく。その威力に誰もが戦慄する。

「た、助かった……………。つたく、なんて攻撃だよ……………」

「無垢にして苛烈……………。魔を退ける、輝く力の奔流……………」

これが、シンフォウジン神獣鏡のシンフォギア……………」

「シンフォウジン神獣鏡……………？ なんだよ、それ」

『それについては私が説明するわ』

仮設本部にいるフィーネから通信が入り、クリスと翼は警戒を怠らずに彼女からの説明を受ける。

『シエンシヨウジン神獣鏡は貴女達が纏う聖遺物とは違って、人工的に作られた聖遺物。それ故に出力は天羽々斬やイチイバルより低いけど、その効果は聖遺物の力を分解する『聖遺物殺し』よ。まともに喰らえば、ギア諸共に滅ぼされるわ』

「はあッ!? なんてギアだよッ!」

では、もし翼の助けが入らずにあの光線を耐え続けていたら、遅かれ早かれリフレクターの障壁は突破され、良くて病院送り。最悪破壊されたギア諸共に死亡という事態に陥っていたかもしれないのか。天敵ともいえる『聖遺物殺し』の力を有するシエンシヨウジン神獣鏡に啞然とする翼とクリスから少し離れた場所では、切歌がウエルと通話している。

「今すぐあの人を解放するデスッ! あの方は、アタシ達の計画とは無関係のはずデスッ!」

『なぜです? 彼女は自分の意志でシエンシヨウジン神獣鏡を纏ってるんですよ? 僕が無理矢理装着させたわけではありません』

しかし、ウエルの返答は相変わらずノー。あの男の性格からして、イエスという返事が聴けるとは端から期待していなかったが、それでも実際に言われると怒りが湧いてくる。

「でも、こんなので、あいつらと同じデスッ! ドクターのやり方じゃ、弱い人達を救えないデスッ!」

『そうかもしれません。なんせ我々は、かかる災厄に対してあまりにも無力ですからね。シンフォギアと聖遺物に関するデータは、こちらだけの占有物ではありませんからね。アドバンテージがあるとすれ

ば、精々このソロモンの杖ッ!』

甲板上に再びノイズが出現し、まだ艦内に残っている米国兵士を襲い始める。

「ノイズを放ったかッ!？」

「くそつたれがああああッ!」

すぐにノイズの駆除に当たろうとした二人だったが、彼女達の前に緒川が現れる。

「翼さん、クリスさんッ! 人命救助は僕達に任せて、二人は未来さんの捕捉をッ!」

「緒川さん……………。お願いしますッ!」

「切ちゃん。私達はノイズを」

「了解デスッ!」

緒川が消え、調と切歌がノイズの駆除に当たる。

「雪音、いくぞッ!」

「……………ああッ!」

一刻も早く未来を救い出すべく、クリスも翼と同様にガイアメモリの力を解放し、イチイバルをトリガーの力を纏ったアズウテイラー・イチイバルギアに切り替える。だが、彼女達が未来に攻撃を仕掛ける直前、未来の手にあるものを見て目を見開く。

「そ、それは……………ッ!」

「まさか……………ッ!？」

思わず硬直する二人の前で、未来は黄緑色で『P』のロゴが刻まれ

ている翡翠色のガイアメモリのスイッチを押す。

『プリズム！』

ガイアウイスパーが翡翠のガイアメモリに内包された地球の記憶の名を叫び、未来の手から離れたと思いきや、まるで意思を持っているかのように浮遊し、うなじから彼女の体内に挿入された。

翼とクリスから見ればガイアメモリが未来に隠れて見えなくなつたが、それでもこれからなにが起きるのかは自ずと理解できていた。

自分達は適合したガイアメモリから、その力の一端を光球として体内に取り込み、それをギアに投影させているが、ガイアメモリ本体を体内に挿入したらどうなるか？ そんなの、決まっている。

目の前に立つ少女の姿が、人間から異形のものへと変貌していく。

現れたのは、克己の部下のレイカが変身するヒートドーパントと同じく女型のドーパント。シエンシヨウジン 神獣鏡ギアの名残がかなり残っているが、その姿は最早、人間とは到底呼べるものではなくなっている。

——今この時を以てして、『結晶』の怪人は誕生した。

「未来……………ツ！」

モニターに映る、怪人へと変貌した未来に悲痛な声を漏らす響。ガイアメモリを体内に挿入すればドーパントに変身できる事は京水やレイカ達を見ているため知っていたが、操られている親友がシンフォギアを纏うどころか、ドーパントに変身してしまえば、そんな声を上げてしまうのも納得である。

「聖遺物殺しに加え、ドーパント……………ツ！ どうやったら止められるのか……………ツ！」

「……………了子さん」

拳を握り締める弦十郎の隣に立つフィーネが、響に視線を向ける。

「未来のシンフォギアは、聖遺物の力を分解するんですよ？ だったら、あのエネルギー波を利用して、未来からギアを引き剥がす事もできますか？」

「実例は無いけど、論理的に考えれば可能よ。だけどドーパント化している今の彼女に、それが通用するかどうかはわからないわ」

「だったら、私が行きますッ！」

「無茶はやめなさい。貴女が今どんな状況かってくらい、知らない貴女じゃないでしょう？ ここはあの二人に任せて……………」

「嫌ですッ！ 未来は私の陽だまりなんですッ！ お願いしますッ！ 行かせてくださいッ！ 必ず、死んでも未来を連れて帰りますッ！」

「死ぬのは許さんッ！」

響の最後の一言に、響とフィーネの会話を黙って聞いていた弦十郎が言う。

「じゃあ、死んでも生きて、帰ってきますッ！ それは……………絶対的に絶対ですッ！」

「過去のデータと、現在の融合速度から計測すると、響ちゃんの活動限界は2分40秒になりますッ！」

「たとえ微力でも、私達が響ちゃんを支える事ができれば、きつと……………ッ！」

「……………弦十郎君。こうなったら、もうこの子は止められないわよ」

決めた事は絶対に成し遂げようとする響の意志の強さをフィーネは理解しており、彼女の師匠である弦十郎は、自分よりも彼女の事を知っているだろう。それを証明するように、弦十郎は観念したように

肩を竦めている。

「オーバーヒートまでの時間はごく限られている。勝算はあるのか？」

「思い付きを、数字で語れるものかよッ！」

「……………ッ！」

「へへ……………」

以前、弦十郎が口にした言葉を言い放った響はニカツと笑い、司令室を出ていく。

ハッチを開けて甲板に出ると、響の存在を感じ取ったのか、未来——プリズムドーパントが現れる。

「一緒に帰ろう、未来ッ！」

「帰れないよ……………。だって、私にはやらなきゃならない事があるもの……………」

エコーがかかった声で、プリズムドーパントは響の誘いを断る。

「やらなきゃならない事……………う？」

「このギアが放つ輝きはね、新しい世界を照らし出すんだって……………。そして、このメモリの力があれば、より強く、世界を照らせるって……………。そこには争いは無く、誰もが穏やかに笑って暮らせる世界なんだよ」

「争いの無い、世界……………」

その言葉にふと、あの最古の塔で戦った、理想郷を求めた男を思い出す。思えば彼も、やり方は認められないものでも、争いの無い理想郷を創ろうとしていた。

「私は響に戦ってほしくない……………。だから、響が戦わなくてい

「いい世界を創るの」

「だけど、未来………………。こんなやり方で創った世界は、あつたかいのかな……………?」

「……………」

「答えはない。ただ静かに、プリズムドーパントは響を見据えている。」

「私が一番好きな世界は、未来が傍にいてくれる、あつたかい陽だまりなんだ」

「でも、響が戦わなくていい世界だよ?」

「たとえば未来と戦ってでも、そんな事させない……………ツ!」

大切な人が戦うのは見ていられない。この気持ちは共通のものが、響はゆつくりと首を横に振る。

「私は、響を戦わせたくないの」

「ありがとう……………だけど私、戦うよ」

全ては自分の身を案じての事。それに感謝こそすれども、このまま未来がシンフォギアを纏うのは許容できない。

取り戻す。この命に代えても。奪われた『陽だまり』を、再びこの手に。

——いい覚悟だ。ああ、だからこそ、ジョーカーはお前を選んだんだろうな。

(え……………?)

一瞬、聞き覚えの無い男性の声が聞こえたが、今はそれを気にしている場合ではない。

ペンダントを握り締め、聖詠を告げる。

「Balwisyall Nescell gunn
ir tron」

全身に纏う、勝利の神槍の戦装束を身に纏う。しかし、変身はそれで終わらず、外見に変化が起こる。

服装が紫を中心としたデザインに変化したかと思えば、両目は紫色に染まり、右目に『J』の文字が浮かび上がる。

以前、その力を身に纏った時とは違う外見。それは、彼女の覚悟が『切り札』の記憶の真髄を見出した証。

「待っててね、未来………………。今、助けるからッ！」

フェイトシンギュラー・ガングニール。運命を変革する『切り札』^{ジョーカー}の力を完全に引き出した姿で、少女は陽だまりを取り戻すべく戦う――

ッ！

デイスティニーアーク

「――幾億の歴史を超えて　この胸の問いかけに応えよShine」

己の心そのままに歌い出した響と、プリズムドーパントがほぼ同時にジャンプし、激突する。

紫色の輝きを纏った拳を受け流し、広げた掌から放たれた光線を躲す。

互いに攻撃を直撃させられないまま着地し、響は絶えず上昇し続ける体温に苦しむ。

(熱い……………体中の血が沸騰しそうだ……………)

今にも気を失ってしまいそうな熱さだが、未来を助けるという覚悟が、彼女の体を奮い立たせる。それに加え、今はT2ジョーカーメモリの力を最大限に引き出している状態。感情の昂ぶりに比例するように、この身に宿る力は徐々に増していく。

「――何度でも立ち上げれるさ」

感情のままに繰り出した攻撃を両手で防いだプリズムドーパントの足が甲板にめり込む。腕に走る痺れなど関係なしに、プリズムドーパントは空中に複数の紫色の水晶を展開し、響に叩き付ける。吹き飛ばされている間にも次々と水晶が響に殺到し、鈍い痛みと共に水晶が直撃した衝撃に押され、響の体が壁に叩き付けられると、プリズムドーパントは腰から伸びている帯で響を滅多打ちにし始める。

『胸に抱える時限爆弾は本物だッ！　作戦時間の超過、その代償が確實な死である事を忘れるなッ！』

(死ぬ……………私が、死ぬ……………)

ガングニールの破片が存在する胸を中心に突き出てきたエネルギーの結晶に、体内から串刺しにされるビジョンが浮かぶ。しかし、未来を救った結果として、その結末は望まない。

「死ぬるかあああああッ！」

響の叫びに呼応するように全身から凄まじい熱風が放出され、咄嗟にプリズムドーパントが飛び退いた事で帯による攻撃が止まる。すかさず甲板を蹴り碎いて接近し、飛び膝蹴りを喰らわせる。パワージャッキによる加速無しに、通常のガングニールでパワージャッキを使用した時以上の速さで繰り出された一撃など防ぎようもなく、強烈な一撃を受けたプリズムドーパントは空中で体勢を立て直しながら前方に鏡を展開。一瞬にしてエネルギーチャージを完了し、『流星』を放ってくる。

響は甲板に着地すると同時に強化された脚力で大きく跳躍。極大光線は響を捕らえられず、代わりに着弾した艦が爆発する。

迫り来る響にプリズムドーパントは周囲に展開した小さな鏡から光線を発射してくるが、それも響は光線を蹴って空中を移動するといふ離れ業を披露しながらプリズムドーパントとの距離を縮めていく。しかし、その間にもガングニールの浸食は恐ろしい速さで進行している、既に胸元にはガングニールのエネルギーが結晶となって露出している。

自分の光線が悉く躲こされていくのを見たプリズムドーパントは、光線が飛んでいく方向へ複数の鏡を出現させ、そこに飛んできた光線の威力と速度を倍増させ、反射してくる。

背後から迫る高威力の光線に気付いた響がそれを躲すも、反射された光線の先に新たな鏡が作り出され、再び反射される。威力も速度も段違いになった光線をなんとか感覚で避けるも、避けたと感じたその時には再び反射されて戻ってくる。

「ぐう……………ッ！」

遂に光線の一発が右肩に直撃し、肩部のギアパーツがあつという間に消滅する。さらにそこへ、響が怯んだ隙を狙って前後から超速の光線が襲いかかってくる。

「戦うなんて間違っている。戦わない事だけが、本当に暖かい世界を約束してくれる。戦いから解放してあげないと……………」

光線に翻弄される響の鼓膜に、プリズムドーパントの声が響く。

当然だが、プリズムドーパントに響を殺す気など毛頭なく、響が戦場に足を踏み入れる切っ掛けとなったガングニールの装甲を、装甲に強化を施しているガイアメモリの力ごと破壊しようとしているのだ。ガングニールの呪縛から解き放たれば、大切な親友は戦わないで済むのだから。

『まもなく危険域に突入しますッ！』

『もう猶予はないぞッ！』

「うう、ぐうううう……………ッ！」

司令部からの通信が入った瞬間、胸から全身にかけて激痛が走り、至るところから結晶が突き出てくる。そこへ再び反射された光線が直撃し、さらなる激痛が響を襲う。

(……………違うッ！ 私がしたいのは、こんな事じゃないッ！)

しかしその時、響を助けたいだけなのに、今の自分の行動は余計に彼女を苦しませているだけに過ぎないという矛盾に気付いたプリズムドーパントが、頭を押さえて苦しみます。

「こんな事じゃ、ないのにいいいいッ！」

もしも彼女がドーパント化せず、シンフォギアのみを纏っていた状態であれば、涙を流していたであろうほどの悲痛な叫びを上げるプリズムドーパントに、全身に結晶が突き出る激痛に耐えながら響が迫る。

(誰が未来の体を好き勝手してるんだッ！)

大切な『陽だまり』を操り、戦わせている者への怒りを募らせながら、最早感覚のみで光線を回避していき、ついにプリズムドーパントに抱き着くと、周囲に展開されていた鏡が全て砕け散る。

「離してッ！」

「嫌だッ！ 離さないッ！ もう二度と離さないッ！」

一度失った事で、自分にとっての小日向未来はどれ程大切な存在かを思い知った。だからこそ、二度とこの手を離すつもりなど無い。

「響いいいいいいいいいいッツ!!」

「離さないッ！」

二人が交戦している間に、上空のマリア達が乗るエアキャリアから射出されたシャトルマーカーが、プリズムドーパントの放った聖遺物殺しとマキシマムドライブの力を纏った光線を反射。一カ所に収束した事によってその効果は何倍にも増幅されており、『フィーネ』が求めるフロンティアへと至る道となる。

「そいつが、聖遺物も、ガイアメモリの力も消し去るって言うんなら――」

そしてその光線は、響とプリズムドーパントのいる場所に向かってきている。

「こんなの脱いじゃえ、未来ううううッ！」

二人を光線が包み込み、彼女達が纏っている力をまとめて消滅させると同時、ドーパント化が解除された未来の体からT3プリズムメモリが排出され、二人のギアと共に木っ端微塵に破壊されるのだった――

——落ち着いていながらも烈火の如き勢いで繰り出される、一進一退の攻防。エターナルもイクシードも、相手に一秒の隙も見せぬと言わんばかりの速度で攻撃を繰り返す。

装者達が戦場に響かせるのが歌声だというのなら、彼らが響かせるのは風切り音だ。

刃を弾いて突き出される拳を体を軽く逸らして受け流し、勢いを殺さぬまま右足を叩き込む。その、受け流した勢いを加えた速度で迫る一撃に、回避も防御も間に合うはずがない。

強靱な脚力で振るわれた一撃を脇腹に受けたイクシードの体がよろめき、下から振り上げられたエターナルエッジが、彼を胸部を護る漆黒の鎧に火花を散らさせる。

「むう……………ッ！」

鎧越しに襲い来る衝撃に内部が揺さぶられる不快感を伴ったイクシードが、追撃は受けまいとエターナルから距離を取り、取り出したT2ゾーンメモリを起動させようとするが――

「なに……………ッ!？」

投擲されたエターナルエッジがT2ゾーンメモリを握っていた右手の手首に直撃し、刃は装甲に弾かれはしたものの、T2ゾーンメモリがイクシードの右手から離れてしまう。

そしてそれを、エターナルがエターナルエッジと一緒に回収した。

『Z』………。これで、全てのT2メモリが揃った」

ついにこの手に収めた最後のT2ガイアメモリを見つめる克己は、仮面の奥で不敵な笑みを浮かべる。

「見せてやろう、ケアン・デイクス。本当の地獄ってやつをな………。ツ！」

勝利を確信した声色で、T2ゾーンメモリのスイッチを押しかけた瞬間、エターナルの視界の端に、異質なものが映り込んだ。

「なんだ、あれは……？……？」

一点に収束した紫の光線が海面————正確には、その底に位置するものに照射されたのは、その時だった。

「——来るッ！ フロンティアへと至る道ッ！」

聖遺物殺しの力を持った神獣鏡シエンシヨウジンに、『結晶』の記憶を持つT3プリズムメモリの力が融合した事で、より威力を増した光線をシャトルマーカーで一点収束。各方向へと飛ばされるはずであった光線は、これによって威力、効果を統合。

こうして完成した一筋の極光は、『フィーネ』の求める場フロンティア所の封印を解く鍵となる。

「作戦は成功ですッ！ 封印は解除されましたッ！ さあ……………」
フロンティアの浮上ですッ！」

海の底へと伸びる光を見たウエルが、歓喜の声を上げると同時に、地響きを起こしながら海底からなにかが浮上してくる。

一見、島のようにも見えるそれだが、現在進行形で浮上し続けるそれを細かく見れば、それが全く別物だと気づくだろう。

——フロンティアは、ついにその姿を現した。

『——ケアン、作戦は成功です。そちらにいる装者二人を回収してきてください』
「了解」

フロンティアの浮上を見届けたイクシードが、ウエルの指示に頷いて、エターナルから離れて自分達と同様にフロンティアを見ていた切歌と調の下へ向かい、エアキャリアに戻るようにと指示があったと話す。二人は揃って首を横に振った。

「……………私達は、行かない」

「なぜだ？ 計画完遂は目前に控えている。あれこそ、お前達が望んだフロンティアだぞ？」

「でも、ドクターのやり方は誰も幸せにできない」

自分の為ならば、無関係な者達をも殺しかねないウエルのやり方は、自分達が望んでいる『弱者の為の世界』など到底実現できない。

「だから、アタシ達は二課につくデス。あのクソツタレはどうでもいいデスが、マリアとママは、なんとしてでも助けるデス。もちろん、ケアンもデス」

「……………？　なぜ、そこで私の名が出る？」

彼女達の中で大きな存在であろうマリアとナスターシャを助けた
いという気持ちはわかるが、そこに自分も含まれてる事に疑問を抱く
イクシードに調が答える。

「貴方は、ドクターのいいように利用されているだけ。用済みになっ
たら、捨てられると思うから……………」

「ふむ……………。私としては、それでも構わないと思うが？」
「どうして？」

「私は計画完遂の為に動くのみだ。用済みとなれば捨てられる事など
理解している。それが、道具の宿命だ」

「でも、それじゃあ心を学べないデスッ！　ケアンは、それでもいいん
デスカッ!？」

かつて、ケアンが口にした願い。人の持つ『心』を、今の彼が理解
できているとは考えられない。

それに対して、なにか思う事はないのか、と訊ねる切歌だったが、イ
クシードは一瞬の間を置かずわたしに答える。

「確かにそれは私の願いではあるが、それを先に優先させるつもりは
無い。優先すべきは全体の目的であり、わたし個人の目的ではない」

「……………ッ！」

「お前達に戻る気が無いのは理解できた。早く彼らの下へ行くがい
い。でないと置いて行かれるぞ」

押し黙る二人に背を向け、イクシードはウエルに二人がエアキャリ
アに戻る気が無い事を伝える。

イクシードからの報告を受けたウエルは『そうですか』と、少し残
念そうに答える。

『正直に言えば、是が非でも連れ戻してもらいたいところですが、そうなるした後が怖いのでやめておきましょう。では、貴方だけでも戻ってきなさい。これから、フロンティアに向かいますので』

「了解」

通信を切ったイクシードは、自分を回収すべく高度を下げてきたエアキャリアに乗り込み、変身を解除する。

窓からは、エターナルを含めた二課の戦士達が潜水艦に戻っていく様子が見える。その中には、ギアを解除している調と切歌の姿もある。

(『救いたい』と考えた結果の行動が『裏切り』とは………………。不思議なものだ、人間というものは)

マリアやナスターシャ、そしてなぜか自分をも救いたいと考える二人の裏切りに、彼女達の気持ちを知らないマリアは傷ついたような悲しい目をしている。救う対象にこのような目をさせる行動が、どう救いに繋がっていくのか、ケアンは疑問と期待の二つが混ざった気分になるのだった。

——二課仮設本部のメデイカルルーム。響の決死の行動によって救い出された未来は、そこでフィーネからシエンショウジン神獣鏡とドーパント化の後遺症が残っていないかを検査されていた。

「未来ッ！」

「あ、響……………」

メデイカルルームに入ってきた未来の様子を見て、外傷は見当たらない事に一先ず安堵する響。

「小日向の容態は？」

「LINKERの洗浄も完了。ギア強制装着の後遺症も無いわ。ただ……」

未来の身体情報が表示されている機器を見て、フィーネが続ける。

「ガイアメモリを使用した影響からか、彼女の体内にはまだプリズムメモリの力の欠片が残っているわ。使役もできないほど些細なものだし、命に関わるほどのものでもないのだけれど、しばらくは安静にしておくべきね」

「よかった……本当に、よかった……ツ！」

まだガイアメモリの力が体内にあるとはいえ、問題と呼べるほどのものではないため、安心しきった様子で響は未来に抱き着く。しかし、未来は響の顔に貼られている絆創膏を見て、申し訳なさそうに目を伏せている。

「その傷………、私の………私のせいだよね………」

「うん、未来のお陰だよ」

「え………？」

「ありがとう、未来」

「響………？」

「私が未来を助けたんじゃない。未来が私を助けてくれたんだよッ！」

怒られると思っていた矢先、いきなり感謝された未来は戸惑いを隠せないでいると、響の代わりにフィーネが説明する。

「貴女が纏ったギアには、聖遺物由来の力を分解し、無力化する効果があるの。その結果、二人のギアのみならず、響ちゃんの体を蝕んでいたガングニールの破片も除去されたのよ」

「え……………？」

「小日向の熱い想いが、死に向かつて疾走するばかりの立花を救ってくれたのだ」

「私が本当に困った時、やっぱり未来は助けてくれた。ありがとうッ！」

「響……………ッ！」

いつものような、太陽のように朗らかな笑顔の響に、未来の胸中は喜びの感情に満たされたのだった。

——浮上したフロンティア。その内部に位置するジェネレーターームに、マリア、ナスターシャ、ウエル、ケアンが到着する。

「あれは……………？」

自分達の目線の先にある球体を訝しげに見つめるマリアに、あれがなんなのかを答えないうまま、ウエルは持参してきたケースから取り出したネフィリムの覚醒心臓を球体に取り付ける。

すると、球体を中心に上下に伸びていた水晶に、眩い光が満ちていく。

「ネフィリムの心臓が……………」

「心臓だけとなっても、聖遺物を喰らい取り込む性質はそのままだから、卑しいですねえ……………。ふふ、ひひひ……………ッ！」

「エネルギーがフロンティアに生き渡ったようですね」

輝きに満たされた水晶を見て、フロンティアの起動に成功したとナスターシャが確信していると、ここでの用事は済ませたウエルは気味の悪い笑みを浮かべながら次の予定を話す。

「さて、僕はブリッジに向かうとしましょうか。ナスターシャ教授も、制御室にてフロンティアの面倒をお願いしますよ」

「ケアン、ママについてあげて。ママになにかあったら、助けてあげて」

マリアはウエルと共にブリッジに向かうので、万が一ナスターシャの体調が悪化した時には、傍に誰かいてもらう必要がある。幸い、ケアンは専門家のウエル程の知識は有さないが、応急処置は可能だ。なにかしらの障害が立ち塞がっても、イクシードに変身すれば大抵は乗り越えられる。

「了解した」

自分の立ち位置を武装集団『フィーネ』の最下位に定めているケアンは、彼にとっては上位者であるマリアの指示にも領き、ナスターシャと共にジエネレータールームを去っていき、ウエルとマリアもブリッジへと向かう。

「————助けてほしい？ 彼女達がそう言ったのか？」

場所は変わって司令室。自ら二課に捕縛される事を望んだ『フィーネ』の装者二名に関しての報告を受けた弦十郎に、「はい」と緒川が頷く。

「目的を見失って暴走する仲間達を止めてほしいと」
「ふむ……………」

先程まで敵対していた者達とはいえ、彼女達の願いを引き受けないほど、弦十郎は出来ていない。しかし、立花響という戦力が減った事

はこれからの作戦進行に関わる問題となっている。

フロンティアの起動が確認された以上、武装集団『フィーネ』は必ずなにかしらの行動を起こしてくるだろう。その果てに待つものがないであれ、我々はそれを止めねばなるまい。しかし、装者一人いなければでも話は大分変わってくるのだ。

どうしたものか、と弦十郎が一人悩んでいると、フロンティア起動の知らせを聞いた響達がやって来た。その中には、未来の姿もある。

「まだ安静にしてなきやいけないじゃいかッ！」

「ごめんなさい………………。でも、居ても立っても居られなくて……………」

「フロンティアが起動したって聞いたら、どうしてもって……………」

今フロンティアが起動しているのは、全てウエルの甘言に乗って神獣鏡シエンシヨウジンを纏ってしまった自分の責任だと思いつめていられるだろうか。しかし、それは未来にそうさせたウエルのせいであって、未来本人の責任ではないのだが。

「そう思い詰めるな。あれは君のせいじゃ……………」

未来を慰めようとしたその時、仮設本部全体が大きく揺れた。

「……………手に入れたぞ、蹂躞する力……………ッ！ ……これで僕も英雄になれるう……………ッ！ ……この星の、ラストアクションヒーローだあ……………ッ！」

二課仮設本部を襲った振動。その原因は、ブリッジに到達したウエルが、ブリッジに鎮座する球体を操作して出現させた巨大な手で月を掴んだ事によって起きた地殻上昇である。

「楽しすぎてメガネがずり落ちそうしまいそうだあ……………ッ！
クククク……………、ハハハハ、クハハハハハ……………ッ！」

楽しそうに笑うウエルの左腕は、既に人のものではない。

そこにあるのは、決して人間のそれと呼べない、異形の腕。ウエルが、聖遺物を取り込むネフィリムの細胞サンプルから精製したL i N K E Rを自分に注入した事で、このように変異してしまったのである。しかし、その甲斐あつてか、ウエルは完全にフロンティアを制御するに至ったのだ。

「ドクター……………ッ！」

「行きがけの駄賃に、月を引き寄せちゃいましたよ」

「月をッ!? 落下を早めたのかッ!? 退きなさいッ！」

そう知るや否や、マリアの体は咄嗟にウエルを押し退けていた。

「救済の準備はなにもできていないッ！ これでは、本当に人類は絶滅してしまうッ！」

なんとかして月の落下を遅らせられないかと手当たり次第に球体に表示された端末に触れるが、球体はまるで反応しない。

「……………どうして、どうして私の操作を受け付けないのッ!？」

「ヒヒヒ……………L i N K E Rが作用している限り、制御権は僕にあるのです。人類は絶滅なんてしませんよ、僕が生きている限りはね。それが僕の提唱する、人類の救済方法です」

来る災厄からの、人類の救済。武装集団『フィーネ』が掲げた理念はそこにあり、誰もがそれを目的に行動してきた。

だが、目的は同じでも、やり方が異なれば、それは大きく変わってくる。

ナスターシヤの理念に誰もが賛同しているように見えていたが、それは間違いである。ウエルは、自分が英雄として崇められる世界を目指して、フロンティアを利用したのだ。

「ふざけるなッ！ そんなの、救済でもなんでもないッ！ 救うだけなら、月の落下を阻止すれば、それだけでいいはずだッ！ なのに、なぜ人類を逆に滅らすような事をする必要があるッ!?!」

「それじゃあ僕が好き勝手出来ないだろうッ！ 僕が英雄にならない世界など、滅んでしまえばいいッ！」

なんと身勝手な返事だろうか。まるで子どものような理由でマリアの言葉を否定したウエルに、マリアは憤りを隠せない。

「ふざけるな……………ッ！ 私は、そんな事の為に悪を貫いてきたわけじゃないッ！」

今まで成してきた事全てが、この男の掌の上だったという事実が認められずに掴みかかろうとするマリアだが、ウエルは難なく変異した左腕で打ち払う。

「ここで僕を手にかけても、地球の余命が後僅かなのは変わらない事実だろう？ フィーネを気取ってた頃でも思い出して、そこで恥ずかしさに悶えてな」

「セレナ……………ッ！ 私は、あ……………ああ……………ッ！」

妹の遺志を引き継ぐと言っておきながら、それを果たせずにいる自分への怒りと、亡き妹への申し訳なきに咽び泣くマリアの姿を鼻で笑ったウエルは、懐から一本のガイアメモリを取り出す。

しかし、そこにロゴは刻まれていない。ウエルが持っているのは、記憶なかみが無い、からっぽのブランクメモリである。

ウエルが球体の端末を操作してからブランクメモリを押し当てると、球体から大量のデータがブランクメモリに転送されていく。

「やはり英雄には、最高の武器が必要ですよねえ……………クヒ、ヒヒヒヒヒ……………ッ！」

銀色の『F』のロゴが入った新たなるT3ガイアメモリの誕生に、ウエルは狂喜せずにはいらなかった。

自由を目指して

開かれた仮設本部のハッチから、先行部隊としてバイクに乗った翼と克己が飛び出す。

「こうして二人揃って走るのは久しぶりだな、翼」

「そうだな。ガイアメモリの力を使っていたとはいえ、大道が脚力で私に追いついてきた時は驚いたがな」

まだ響やレイカ、京水が二課に加入する前の事。ノイズ駆除に向かう為にバイクを駆った翼に、克己がT2アクセルメモリを使用して並走した時の記憶を思い起こして翼は軽く笑う。

あの光景は傍から見れば異様の一言に尽きよう。なにせ人間がバイクと並走しているのだから。だが、今はあの時とは異なり、克己もバイクに跨って目的地へと向かっている。

「バイクを手に入れて、ようやく『仮面ライダー』といったところか？」
「いいや。俺はまだ、本当の意味の『仮面ライダー』にはなれてないさ。俺が『仮面ライダー』を名乗ったら、あいつらが黙っていないだろうさ」

「あいつら？ それはいったい……………」

「いずれ話してやる。それより、来たぞ」

克己の視線の先。そこには自分達を迎え撃とうと多数のノイズの姿がある。

「I myuteus amenohabakirit
ron」

『エターナル!』

「変身ッ!」

蒼白の装者と蒼炎の死神は、バイクの速度を上げてノイズの群れに突っ込んでいく。

翼は脚部のブレードを変形させてバイクの前方に巨大な刃を形成し、エターナルはT2ユニコーンメモリを取り出す。

『ユニコーン・マキシマムドライブ!』

エターナル専用バイク————トウモルシーカーのマキシマムスロットに挿し込んだT2ユニコーンメモリの力が反映され、トウモルシーカーはその形状をバイクから一角獣へと変化させる。

翼が『騎刃ノ一閃』でノイズの群れを切り裂き、彼女が討ち漏らしたノイズを後方から続く鋼鉄の一角獣が蹴散らしていく。

「————二人共、流石ですね……………ッ!」

モニター内でノイズを蹂躪していく二人に、思わず友里が称賛の声を上げる。

「私にもギアが使えたら……………ッ!」

「ギアの無い響君を戦わせるつもりはないからな」

悔しそうにする響に無謀な行動は起こすな、と釘を刺す弦十郎だが、それは響も重々承知している。

もしギアを纏えない状態で行ったとしても、ノイズと戦えない自分には彼らにとって足手まといになってしまうし、隣にいる未来も悲しませてしまうだろう。それは響も望んでなんかいない。

「いえ。戦うのは、私じゃありません」

しかし、響にはある考えがあった。

響の考えを聞いた弦十郎は、早速彼女達を監視しているレイカ達に連絡を取り、彼女達を司令室に連れてくるよう指示する。

「捕虜に出撃要請って、どこまで本気なの？」

連れてこられたのは、自ら二課の捕虜となるべく投降してきた調と切歌である。

「貴女が私達をここに連れてくるように言ったんでしよう？ どこまで本気かは知らないけど、貴女のそういうところ、好きじゃない。正しさを振りかざす、偽善者の貴女が……………」

「私、自分のやってる事が正しいだなんて、思っていないよ……………。それでも私は、自分の気持ちだけは偽りたくない……………。偽ってしまったら、誰とも手を繋げなくなる……………」

その結果が、未来との衝突である。自分が面と向かって向き合わなかったから、未来は神獣鏡シエンシヨウジンを纏って戦場に足を踏み入れてしまったのだから。

「手を繋ぐ……………。そんな事、本気で思ってるんデスか？」

「思ってるよッ！ だから二人にも、やりたい事をやり遂げてほしい。もしも、それが私達と同じ目的なら、少しだけ力を貸してほしいんだ」「私達の、やりたい事……………」

「やりたい事は、暴走する仲間達を止める事……………。でしたよね？」「……………。みんなを助ける為なら、手伝ってもいい」

調の答えに、響は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「だけど、信じるの？」

「アタシ達、元は敵同士デスよ？」

二人は敵であるはずの自分達を自由の身にする事に抵抗感はないのか、と彼らに訊ねると、弦十郎が二人に答える。

「敵だとか味方だとか言う前に、子どもやりたい事を支えてやれない大人なんて、格好悪くて適わないんだよ」

「師匠……………ッ！」

「甘いわね、相変わらず」

「甘いのはわかってる、性分だ」

出会った時から変わらぬ弦十郎の優しさに微笑むフィーネは、自分に向けられている調と切歌の視線に気づく。

櫻井了子の体が無くなった際の保険として用意したレセプターチルドレンの二人からすれば、目の前に立つフィーネにどんな感情を抱いているのか。それはフィーネはもちろん、当人達でさえ、心の中が様々な気持ちが混ざり合っている為、よくわかっていない。

「……………時間さえあれば色々話したいところだけど、今はそれどころじゃないわ。全てが終わってから、話しましょう？」

「……………はい」

「既にハッチには京水君達をスタンバイさせている。響君、彼女達を案内してやれ」

「はいッ！ 二人共、急ごうッ！」

響が二人をハッチまで連れていくと、そこには弦十郎の言った通り、克己の部下の京水達とクリスがいた。彼らは克己と翼が出撃した後にバギーで出撃する予定だったのだ。

「ボスから話は聞いてるゼッ！ 早く乗りなッ！」

剛三に言われるがまま、調と切歌がバギーに乗り込むと、助手席に

座っていた京水が早速絡んできた。

「あらッ！ 近くで見るととっても可愛らしいじゃないッ！ ワタシ、貴女達みたいな可愛い子好きよッ！」

「うええッ!? いきなりなん德斯かこいつッ!?」

「あまり、近寄らないで……………」

「あらやだ辛辣。アタシはただ貴女達と仲良くなりたいただけなのに……………ッ！ イケナイ子にはお仕置き、し・ちや・う・ぞへぶッ!?」

嫌がる二人に尚も距離を縮めようとする京水だったが、レイカとクリスに頭を引っ叩かれてしまう。

「こんな状況でなに言ってるんだこの馬鹿ッ！」

「それ以上なにか言おうものならバギーから落とすわよ」

「あくん辛辣ッ！ ワタシの味方は何処いずこへッ!?」

「出撃する」

ギャーギャー騒ぐ彼らに乗せたバギーは、賢の運転の下フロンティアの大地を駆け始める。

「調、マリア達を助けるデスよッ！」

「うん。……………だけど、この人達は真面目に戦う気あるのかな?」

目の前で繰り広げられる京水とレイカとクリスの口論を見て、早速不安になってしまう。

「まあまあ、あれも二課うちじゃよくある事だよ? そうですよね、剛三さん?」

「おう、こいつらが喧嘩するのはよくある事だぜ、なあ? ひび……………き……………」

本来ならこの場にいないはずの少女の声に眉を顰めた剛三がバギーの座席を見渡してみると――

「なんでここにいやがんだッ!? 響ッ!」

なんと、バギーの後方に響が隠れていたのだ。

『なにをやっているッ! 響君を戦わせるつもりはないと言ったはずだッ!』

「戦いじゃありませんッ! 人助けですッ!」

もちろん、響がここにいる以上、司令室で彼らの様子を確認していた弦十郎達にも気づかれてしまい、早速弦十郎からのお叱りの言葉が飛んでくるも、響はこれを屁理屈で返す。

『減らず口の上手い映画など、見せた覚えはないぞッ!』

『行かせてあげてください』

そこで割り込んでくる声の一つ。それを発した者は、当然未来である。

『人助けは、一番響らしい事ですから……………』

『……………こういう無理無茶無謀は本来、俺の役目だったはずなんだがなあ』

「未来……………、師匠……………」

通信機越しに聞こえる溜息から、弦十郎が司令室で肩を竦めている様子が容易に想像できる。

『……………いいだろう。なら俺達は、全力でお前達をバックアップ

するッ！ お前達だけにいい格好をさせて堪るかッ！』
「ありがとうございますッ！」

響が乗り込んできたという予想外のハプニングこそあったものの、当初の目的に変更はない。エターナルと翼によってノイズが駆除された大地を、バギーは駆け抜けていくのだった。

——一方、ウエル達と別れて制御室にやって来ていたナスターシャは、ウエルの暴走によって落下が早まった月の脅威にどう対処していくべきかを端末を操作しながら考えていた。

「二ついいか、ママ」

凄まじい速さで端末を操作するナスターシャの背後。そこに立つケアンが、彼女に声をかける。

「なんですか？」

「暴走とはいえ、ウエルは人類の救済を目前に控えている。なぜ、それを阻むのだ？」

マリアはナスターシャの指示には忠実に従う為、容疑者ではないだろう。ならば、この現状を作り出したのはウエルに違いない。あの男の性格からして、自分さえ満足出来ればそれでいいという考えの下に起こした行動のはずだ。月の落下こそ早まっているが、ウエルがみすみす月が地球に衝突させるとは思わない。やるとすれば、『自分が死ぬば月が落ちてくる』とでも言つて、全人類を従わせるといったところだろう。

だが、やり方こそ異なるが、ウエルが死亡するまでの間とはいえ、人類は月の脅威から護られる事となる。代償として人類の滅びが大分早くなったが、計画遂行を最終目的と定められているケアンにとつ

て、それは些細な問題でしかない。

「これは『救済』ではなく、『支配』です。私達とは真逆の、邪悪な意志によって引き起こされた行動です」

「逆というわけではないだろう。ウエルはウエルで、彼なりのやり方で人類を救済しようとしているのでは？」

「自らにとって不都合な存在は抹消するやり方がですか？ そのような事をする人間は『救済者』ではなく、『独裁者』と呼ぶのです。機械の貴方とて、一般的な知識は持ち得ているはず。歴史に名を刻まれた独裁者達は、果たして万人から『正義』と認識されましたか？」

「……………」

ナスターシャからの問いかけに、ケアンは答えない。それは、独裁者と語られた者達が、褒められたものではない行動を起こし続け、最後には自ら破滅するか、民衆によって破滅させられるかのどちらかの結末に至ったのがほとんどである、と考えたが故である。

「このようなものが人類の救済など、片腹痛いにも程があります。私達が望むのは、弱者が救われる世界です。決して、彼の欲望に忠実な世界ではありません」

一旦端末の操作を中断し、ナスターシャがケアンに振り向く。

「『武力』という鎖に束縛された者達に自由はありません。誰もが笑っていられる、自由な世界の為、貴方の力を貸してください」

「自由な、世界……………」

ウエルのやり方では絶対に創り出せないであろう世界。その言葉に対して、ケアンは自身には理解できない、どうしようもない魅力を感じる。

なぜ、自分がここまでその言葉に惹かれたのか、それはわからない。

だが、ウエルがこれから創造しようとする世界より、ナスターシャの語る自由な世界の方が、万人の望むものだという事はわかった。

「……………承知した。ウエルの居場所はわかるか？」

「恐らく、ブリッジかジェネレータールームにいるはずですよ。貴方が向かっている間、私は月の落下を食い止める方法を模索しますので、よろしく願います」

「了解。任務が完了し次第、帰還する。マム、無茶はしないように」
「……………ッ！ ふふ、嬉しいですね。貴方が私の身を案じてくれるなんて」

「貴女は私を再起動させてくれた恩人だ。貴女のお陰、私はここに居るのだ。身を案じるのも普通だろう」

「ええ、たとえ本物でなくとも、貴方はケアン・デイークスなので。今の貴方の表情、まるで生前の彼のよう……………」

「なに……………？」

どこか自分の顔を見れるものはないかと周囲を見渡すも、それができそうなものは見当たらず、今の自分がどういった顔をしているのかはわからず仕舞いだった。

残念無念といった風に目を伏せるケアンに、ナスターシャは慈しみを込めた声をかける。

「調達から聞きましたよ。『心』を知りたいのでしょうか？ 事態を収束させたら、たくさん教えてあげます。もちろん、マリア達と一緒に」
「それは嬉しい限りだ。不思議と、活力が湧いてくる。……………作戦完了後、また会おう」

「ええ、お互い頑張りましょう」

慈愛に満ちた笑顔のナスターシャに頷き、ケアンはウエルを止めるべく制御室を飛び出していく。彼の姿が見えなくなるまで、その背中を見送っていたナスターシャは、ケアンの背中が完全に見えなくなる

と同時に、通信機を片手に maria に連絡を取り始めた。

—— ウェルがいなくなり、一人残されていた maria の通信機に、ナスターシャからの通信が入る。

『maria、今、貴女一人ですか？』

「mam……………ええ、今は私一人よ」

『それは好都合です。フロンティアの情報を解析して、月の落下を止められるかもしれない手立てを見つけました』

「え……………ッ!？」

突然の吉報に、先程まで抱いていた自身への激情が遠退く。静かに話を聴く maria に、ナスターシャは最後の希望に必要なものを告げる。

『最後に残された希望……………。それには、貴女の歌が必要です』

「私の……………歌……………」

今も続いている月の落下を食い止める唯一の方法として提言されたそれを聞いた maria に、迷いは無い。

「……………了解、mam。私の歌で、みんなを救ってみせるッ！」

覚悟を決めた maria の通信機越しの声に頷いたナスターシャは、すぐさま準備に取り掛かり始めた。

—— ノイズを蹴散らしながらエタールと翼がフロンティアブリッジに向かっていくと、彼らの前に大量の光が迸ったかと思いきや、数十体の大型ノイズが出現した。

「ここで新手と来たか」

「押し通すッ！」

「私達も……………」

「いるデスよッ！」

先頭のノイズから攻撃しようとした瞬間、二人の背後から飛んできた丸鋸と鎌が、今まさに二人が攻撃しかけていたノイズを八つ裂きにして消滅させる。

「シウルシヤガナとイガリマ」

「共に参上デスッ！」

「おいおい、あたしらを忘れてもらっちゃ困るんだよッ！」

エターナルと翼の前にシンフォギアを装備した調と切歌が降り立つと、彼女達に遅れてクリス達がやって来る。エターナル達が道を切り拓いてくれたので、彼らは全速力で二人の後を追ってきたのだ。その中には現在シンフォギアを纏えない響の姿もあるが、既に弦十郎から連絡を受けていた二人は特に驚いた様子は見せない。

「響、お前は、今のお前にできる事をやりに来たんだよな？」

「はいッ！ シンフォギアが無くてもできる事をやり遂げに来ましたッ！」

自信満々に答える響に、克己は仮面の奥で不敵な笑みを向ける。

「いい目をしてるな。それでこそ、立花響といったところか。……………お前達、頼みがある」

「道を拓け、でしょ？ 任せなさい」

トゥモルシーカーのロットからT2ユニコーンメモリを抜いた

エターナルの指示を予測していたレイカに「助かる」と一言告げ、エターナルは響を後ろに乗せる。

「アタシ達もついてくデスッ！」

「マリア達を助けたいから、断られてもついていく」

「構わない。だが、こつちには響がいる。こつちはこつちのペースで行かせてもらう」

これからノイズの群れに突っ込んでいく以上、シンフォギアを纏えない響は一回ノイズに触れるだけでアウトだ。ここは最速で突っ切る他に方法はない。

「では、私達が活路を切り拓く。後は頼んだぞ、大道、立花ッ！」

「ああ。お前達、翼とクリスを任せた」

「了解。必ず護り通す」

NEVERの四人がメモリを取り出してドーパントに変身し、クリスもイチバルのシンフォギアを身に纏う。

『アクセル・マキシマムドライブ！』

マキシマムスロットに挿し込んだT2アクセルメモリの力がトゥモルシーカーに行き渡り、今度は外見が真っ赤に変色し、前方で翼達が大型ノイズを次々と消滅させている間に、クラッチを押しさえながら徐々にエンジンの回転数を上げていく。

「振り落とされるなよ、響」

「は、はいッ！」

そして、ある程度ビレッジへと続く道が拓けた瞬間、一気にクラッチから指を放す。周囲にエンジン音が轟き、凄まじい勢いでトゥモル

シーカーが走り出す。一気に全身に襲い来るGに耐えながら、エターナルはノイズに激突しないよう巧みにハンドルを操作して、赤い閃光となった鉄馬はノイズの間を駆け抜けていく。

(やるんだ………ツ！ 今の私に出来る事を………ツ！ 胸の歌がある限りツ！)

シンフォギアが無くとも、この胸に宿る気持ちのままに行動すれば、必ずなにかが出来るはずだ。

徐々に大きくなっていくブリッジを見て、響は改めて決意を固めるのだった。

吹き荒れる翠風

ナスターシヤの尽力によって、世界各地の映像画面にマリアの姿が生中継で映し出される。

「私は、マリア・カデンツァヴナ・イヴ。月の落下がもたらす災厄を最小限に抑える為、フイーネの名を騙った者だ」

突然の生中継。しかも映し出されているのが、少し前に風鳴翼とのライブで世界に宣戦布告した人物とくれば、これを無視できる人間など誰一人おらず、この星に生きる誰もが、彼女の口からなにが語られるのか、と耳を傾ける。

「半年前のルナアタック……………これを端に発する月の公転軌道の異常は、とある存在によって隠蔽されてきた。それは米国・国家安全保障局とパヴァリアの光明結社」

全世界に発信されるマリアの演説。開口一番に告げられた『月の公転軌道の異常の隠蔽』は、今まで月が落ちてくるのは当分先の未来と考えていた者達を驚愕させるに値していた。

驚く彼らの視線の先にある画面で、マリアはさらに言葉を重ねていく。

米国政府やパヴァリア光明結社を始めとした、政界・財界の一角を占有する特権階級にとって、月の異常は極めて不都合であり、不利益をもたらす事態でもある。故に彼らは自らの保身に走った。

しかし、それで月の異常がどうこうできるというわけではない。

今も、月は落ちてこようとしている。これが落ちれば未曾有の災害となり、多くの犠牲者が出るだろう。マリアは自分……………否、自分達はこれを阻止したいと伝え、また、その為にはこの星に生きる全ての者達の力が必要とも伝えた。

「目的があつたにせよ、私達がテロという手段を取り、世間を騒がせ、混乱の種を蒔いたのは確かだ。全てを偽つてきた私の言葉がどれほど届くか、自信は無い………………。だが、歌が力になるという、この事実だけは信じてほしいッ！」

冗談でも比喻でもなく、真正正銘、歌には力が……………フォニックゲインがある。全人類が歌う、全世界を震わせる歌があれば、月の公転軌道を本来のものに戻せるのだ。

テロリストの自分の言葉に、いつたい誰が賛同してくれようか。だが、きつと応えてくれるはずだと信じ、マリアは胸のペンダントを握る。

「Granzizel bilfen gungnir
zizzz」

その身に纏うは、裂槍。全てを貫く無双の一振り。

「私一人の力では、落下する月を受け止めきれない……………ッ！だから、貸してほしい……………。みんなの歌を届けてほしいッ！」

ウエルの企みを成功させるわけにはいかない。

全てはより良き明日の為に。ただその為に、マリアは歌う――

――振り下ろされた巨大化した剣が、目の前のノイズを両断する。

剣を振り終えた翼を狙って、もう一体のノイズが攻撃を仕掛けようとするも、クリスとトリガード・パントの攻撃によってハチの巣にされ、翼への攻撃は叶わずに炭化して消滅する。

「すまない、助かったッ！」

「へッ！ お互い様だッ！」

踏み下ろされる右足を左右に跳んで躲したクリスとトリガードーパントが、再びノイズに無数の風穴を開けて消滅させる。

着地したクリスは翼と背中を預け合うような形でノイズと対峙する。

「……………すまねえな」

「なに？」

「これは全部、あたしがソロモンの杖を起動させたからこそだ。あの時、あたしがソロモンの杖を起動させなければ、こんな事にはならなかったのに……………」

それは、過去にクリスが犯した罪。

この世から争いを無くす為だ、とフィーネに言われるがまさにソロモンの杖を起動させた結果、多くの人間が命を落とした。それを実行したのはフィーネとはいえ、クリス自身にもそれらの事件を引き起こす要因となったソロモンの杖を起動させたという罪がある。

本来であれば、この十字架は自分が背負うはずのもので、それは誰にも譲れないものだったのだ。

「……………確かに、ソロモンの杖が起動したが故に、多くの人命が失われた。それは、決して忘れてはならない事だし、事の発端が雪音や櫻井女史と知れば、亡くなった者達の遺族は、お前達を責め立てるだろう。だが……………」

「……………？」

「だからといって、その罪を自分のみで背負おうとするな」

ハツとして、クリスは思わず剣を構え直す翼を見る。

「私達は仲間だ。全部とは言わない。少しだけでも、雪音の罪を背負わせてくれないか？」

「……………汚れ仕事は、居場所の無い奴がこなすつてのが相場だ」

「なあに言つてんのよこの馬鹿ちゃんがッ！」

「あうツ!？」

ノイズの股の下を通つて伸びてきた腕が、クリスの頭を引つ叩く。叩いてきた相手は当然、ルナドーパントである。

「子どもがそういう事言うんじゃないわよッ！ 汚れ仕事をやるつてんなら、それはワタシ達の仕事よッ！」

「ここで一番人を危険な目に遭わせてきたのが自分だと思つたら思い違いよ。私達の方が、あんたの何倍も人を危険な目に遭わせてるし、その大半は殺してるわ」

ルナドーパントとヒートドーパントが口々にそう言う。

「しかもな、俺達には自分達で殺した奴らに対する申し訳なさつてのが無えんだよッ！ その点、お前はまだまだマシだぜ、クリスッ！」
「俺達のやってきた事は誇れるものではない。だが、俺達はそうして生きてきた」

同僚の言葉に、メタルドーパントとトリガードーパントも続く。

「あんた、さつき『居場所が無い』とか言つてたけど、あんたにはあるじゃない。あんたの居場所が」

「そんなの……………」

「あるさ、雪音」

そんなのあるわけない、と言いかけたクリスの口が、翼の言葉に

よって止まる。

「たとえば、お前が一人で贖罪を果たそうと『フイーネ』側についたとしても、私達は変わらさず、首根っこ引き摺ってでも連れ帰っただろう。お前の居場所、帰るべき場所に……………」

「……………ッ！」

「お前がどんなに拒絶しようと、私達はお前のやりたい事に手を貸してやる。それが、片翼では飛べぬ事を知る私の……………先輩と風を吹かせる者の果たすべき使命だッ！」

かつて、奏と共に在った頃の自分がそうだったように、クリスが成し遂げたい事は、彼女の周りにいる自分達が手助けするのだ。

その決意に、偽りは無い。

「だから、もう二度と、一人で無茶をするなッ！」

翼の全身から緑色の風が吹き荒れ、彼女の体を覆う鎧が変化していく。

白と緑の羽織を翻し、後ろに束ねた髪の毛を靡かせ、腰に一本の野太刀を差したその姿は、まさしく剣士。

プリズムドールパントと化した未来を取り戻すべく戦った響と同様、翼もまた、彼女の身に宿る『疾風』の記憶を覚醒させたのだ。

「初手より奥義にて仕る」

抜刀した野太刀に、緑色の風が纏わせる。

「翠の風よ———我らの道を拓けッ！」

吹き荒れる旋風。刀身に巻き付いていた暴風は、斬撃と相まって最早竜巻と呼んでも差し支えない威力を以てして、ただ佇む事しか出来

ぬ巨人達を呑み込む。

風が止んだ先にあるのは、直線状に抉れた大地。それが、一人の少女の一闪が作り上げたものだと、いったい誰が信じようか。

見事なり。これぞ疾風の力を覚醒させた女剣士の一闪――

――『翠ノ疾閃』ツ！

「行くぞ、雪音。お前の背、私が後押ししてやる」

「……………へッ！ 頼むぜ、風鳴先輩ツ！」

クリスが飛び出してノイズを撃ち抜いている間、翼はクリスどころか、離れた場所で戦っているドーパント達に近づきつつあるノイズさえも、突風の斬撃で斬り裂き続けた。

「――ふんっ、あそこまで抵抗されては嫌気が差しますね」

大量の大型ノイズを相手に奮戦する装者とドーパント達の様子を遠巻きに観察していたウエルは、彼らの奮闘ぶりに感心するが、まるで押されている様子を見せない事に苛立ちを感じていた。

それもそのはずで、長年を傭兵として過ごしていたNEVERの四人は当然として、翼とクリスもギアの扱いに優れているのだ。如何に相手が多かろうと、所詮はノイズ。数では上回っていても、彼らの敵ではないのだ。

加え、今の翼はサイクロンメモリの力を覚醒させた状態にあるのだ。あれ程の数の差があったとしても、ものの数分で片付けられてしまうだろう。

「ですが、これはどうですかね？ ヒヒヒ……………ツ！」

抵抗はこれまで、と気味の悪い笑顔と共に、ウエルはポケットから

取り出した装置を操作してから、ソロモンの杖から一筋の光を迸らせた。

——なにかが弾けるような音と共に、翼の足元にあつという間に赤い霧が充満する。

「これは……………ッ!？」

この赤い霧には見覚えがある。以前、『フィーネ』のアジトに侵入した際に見たものと同じ。

(Anti-Linkerか……………ッ!)

野太刀を地面に突き立てて風を発生させて霧を霧散させるが、驚いた拍子に吸い込んでしまったのか、ギアが重くなってしまう。

さらに、この赤い霧は自分のいる場所のみで発生したわけではなく、自分と同様苦しそうに膝をつくクリスがいる場所にも赤い霧が発生している事から、大分広い範囲に設置されていたようだ。

幸い、自分達の周りにはいるノイズはそう多くないし、赤い霧の正体に気付いたドーパント達が、その影響を受けている自分とクリスに走り寄ってきている。

「なに……………ッ!？」

だがその瞬間、新たに一体のノイズが姿を現した。

初めて『フィーネ』と対決したあのライブ会場に現れたノイズ——
——増殖分裂型ノイズだ。

「く……………ッ!」

咄嗟に太刀を振るって斬り裂くも、切断された欠片が新たな増殖分裂型ノイズとして活動し始めてしまう。

前はS2CAトライバーストでなんとか消滅まで追い込めたが、ここに響はいないし、絶唱を使おうにも適合率が絶唱が可能になるまで高まっていない。

では、この状態での斬撃はどうか。否、鎌鼬で切り裂く事は出来ても、完全に消滅させるまでには至らないし、先の技を使おうにも、あれは絶唱と同レベルの威力を持つが故に、再使用まで時間がかかる技だ。

ドーパント達も奮戦はしてくれているが、彼らの力で増殖分裂型ノイズを完全に除去するのは難しい。一撃で消滅させるか、持続する攻撃で再生できないまでダメージを与えるかのどちらかでないと、この厄介な敵は倒せない。

万事休すかと思われた、その時だった。

「——貴女達もまだまだね」

どこからともなく飛んできた凄まじいエネルギーの塊が増殖分裂型ノイズに触れた瞬間、そこを起点に大爆発が起こる。

吹き荒れる爆風に思わず片腕で顔を庇い、うつすらと瞼を開けて見ると、そこに先程までいたはずの増殖分裂型ノイズの姿はどこにも無く、分裂して活動しかけていた別個体、未だに残っていた大型ノイズさえも、その姿を消していた。

「でもまあ、あそこまでの力を引き出せたのは素晴らしかったわよ、翼ちゃん」

「櫻井女子ツ！ それに……………」

「俺達もいるぞ」

「ついでに言えば僕もいます」

弦十郎と緒川を連れ、ネフシユタンの鎧を装備したフィーネがそこにいた。

「おい、フィーネ。お前はともかく、なんでおっさん達を連れてきたんだよッ！ またノイズが現れたら……………」

「なに言ってるのよ。この二人がそう簡単にやられるとでも思ってる？」

「俺は畳返しでノイズの攻撃を防ぐぞッ！」

「変わり身の術で躲します」

「そうだった、こいつらまともな人間じゃなかった……………」

ワハハと笑う弦十郎と、彼に肩を組まれて苦笑する緒川を見て、彼らを常人と一緒に考えてはいけないと思い知らされる。

「仮に危なくなっても私が助けるから、安心なさい。この二人に限って、そんな事は無いと思うけど」

「ですが、どうしてここに？」

「ウエル博士の確保だ。調君達から、彼に暴走の疑いがあると考えたんだ。英雄願望があるようだが、それが歪んだ形で叶えられては恐ろしい事になる。だから俺達が出てきたというわけだ。了子君は護衛としてついてきてくれたんだ」

「護衛につかなかったから貴方達が死んだってなったら夢見が悪いのよ……………さて」

ふと、フィーネの視線があらぬ方向へと向けられる。

「足止めのつもりだっただろうけど、それももう意味を成さないわね。ソロモンの杖、返してもらおうわよ」

自分の出現に動揺が隠せないであろう男に向け、フィーネは右手に

握っていた鞭を向かわせた。

「ひいッ!?!」

真横の地面を穿った鞭に情けない悲鳴を上げたウエルが、思わずソロモンの杖を手放してしまい、フィーネが鞭を引き戻すと同時、鞭の左右に伸びている棘でソロモンの杖を引っ掛けて取り上げていってしまう。

「化け物め……………付き合ってられるかッ！　こうなったら……………ッ！」

ソロモンの杖を失ったのは痛手だが、取り返しに行くのは無謀に過ぎる。

悔しさに歯軋りしながら、ウエルはその場を後にした。

「———回収完了。これで一安心ね」

ソロモンの杖を手にしたフィーネに、その場にいた全員が呆気に取られる。まさか、あの一瞬でソロモンの杖を手に入れるとは思えなかったのだ。

それもそのはずで、フィーネの得物はやろうと思えば地球上から月まで届く攻撃範囲に、たった数秒で月まで到達する速度を兼ね備えているのだ。この程度の距離など、問題にもならない。

「さ、回収するものも回収したし、行きましよう？　ソロモンの杖を奪われたウエルが行くとすれば、フロンティアを操作できるブリッジだろうし」

「お、おう、そうだな」

破壊を免れたバギーとバイクにそれぞれが乗り込み、ブリッジへと向かっていく。

「……………」

「……………？ どうしたの？ クリス」

ピンチを切り抜けて、ソロモンの杖の回収という目的も果たせたというのに、どこかやるせない表情を浮かべているクリスを見かねたファイネが声をかけると、「いや……………」とクリスが返す。

「ファイネはなんとも思わねえのか？ ソロモンの杖でたくさん人様に迷惑かけてきたあたし達が、こんな奴らと一緒にいいのかわか……………」

「……………確かに、貴女がそう思うのも仕方ないかもね」

優しい声で、ファイネはそう返す。

「これまで多くの罪を重ねてきた私達に、二課での居場所は無い。貴女はそう考えているようだけど、それは間違いだと、私は思うわよ？」

「え？」
「考えてみなさい。そこにいる我らがリーダーが、そんな事気にする人間だと思う？」

自分達の前に座る弦十郎を指差して困ったような笑みを浮かべるファイネに、あつとなるクリス。

そういえばこの男は、かつて人殺しを続けてきた克己達やファイネをあつさりと仲間として受け入れている。この男相手に、そんな事を言ったとしても、「だからどうした？」と首を傾げるだろう。

「弦十郎君は余程の事じゃない限り、相手の過去とか一切気にしない

人間よ。それに、この人だけじゃなく、翼ちゃんやこの場にいない響ちゃん……………二課の誰だって、私達を仲間として受け入れてくれるわ。だから、そういうのはあまり気にしなくてもいいんじゃない？」

「そうだぞ、クリス君。誰にだって、辛い過去や思い出したくない記憶はあるものだ。それを気にしてばっかじゃ、この先やっていけないぞ？」

そこで、弦十郎が口を開く。どうやら、今まで黙って二人の会話を聞いていたようだ。

「あら、レディーの会話を盗み聞きなんていい趣味してるじゃない」

「それは理不尽じゃないか？ 真後ろで話してたら聞こえるのは当然だろう？ それに、惚れた女が俺の名を出したんだ。聞かない方がおかしい」

「……………ッ！ い、言ってくれるじゃない……………」

……………ほら、クリス、この男は数千年も悪者やってきた私でさえ、こんな事を言う人間よ。……………馬鹿」

「ハッハッハ」

「はいはい惚気惚気」

真つ赤な顔でバシバシと弦十郎の頭を叩くフィーネと、楽しそうに笑う弦十郎のやり取りに呆れたように遠くを見る。

今でこそ惚気で二人だけの世界に浸っているが、フィーネの言う通り、弦十郎は自分達を二課から追い出そうとはしないだろう。彼の性格は、これまでの生活や態度からある程度把握しているつもりだ。

そしてそれは、彼の弟子である立花響あのかや、彼の姪の翼、そして二課で働いている職員達も同じだろう。

過ぎ去った過去よりも、これから先の未来でどうするかが大切。そう彼らは考えている事だろう。

嫌うでもなく、避けるでもなく、純粹に『仲間』として認識してく

れている。それが、とても嬉しい。

(まったく、どうかしていやがる……。だからこいつらの傍は
どうしようもなく……。あたしの帰る場所なんだな)

我知らず笑みを零し、クリスはそう思わざるを得なかった。

彼方（フロンティア）へ至る者

人々が応えてくれる事を祈って、決死の覚悟で歌ったマリアに、制御室にいるナスターシャからの通信が届く。

『月の遺跡は依然沈黙……。……。フォニックゲインが足りません……。……。ッ！』
「そんな……。……。」

告げられた報告の内容にショックを受け、その場に跪く。

「セレナが助けてくれた命で、誰かの命も救ってみせると決意したのに……。……。私には、セレナの死に報いる資格すら無いというの……。……。？ セレナ……。……。ッ！」

自らの無力に絶望し、涙を流すマリア。

その姿は、全世界の人々の心に様々な感情を芽生えさせ、その大多数に含まれるとある三人の少女達は、その姿に、あの人助けを趣味とする友人の姿を重ねていた。

『……。……。マリア。もう一度、月遺跡の再起動を』
「無理よッ！ 私の歌で世界を救うなんて……。……。ッ！」
『マリアッ！ 月の落下を食い止める、最後のチャンスなのですよッ！』

その時、フィーネにソロモンの杖を奪われたウエルが昇降盤に乗ってブリッジに戻ってきた。

「月が落ちなきや、好き勝手出来ないだろうがッ！」

血走った目で叫んだウエルが、完全に無防備な状態のマリアを殴り飛ばす。

『マリアッ！』

「あ？ やっぱりオバハンか……………」

『お聞きなさい、ドクター・ウエルッ！』

ナスターシャの声を聴きながら、ウエルは邪悪な笑顔のままコンソールを操作し始める。

その間にも、ナスターシャはウエルに今の自分達の目的を話し続けている。

『フロンティアの機能を使って集束したフォニックゲインを月へと照射し、バラルの呪詛を司る遺跡を再起動できれば、月を元の軌道に戻せるのですッ！』

しかし、ナスターシャの目的は、月の落下を盾に世界の英雄になる事を目標として掲げているウエルにとっては、邪魔以外の何物でもない。

「そんなに遺跡を動かしたいのなら……………」

英雄じゆうんの支配を拒む者など、この男の創造する世界に必要無し。

「あんたが月に行ってくればいいだろうッ！」

なんと、ウエルはコンソールを操作し、ナスターシャのいる制御室をフロンティアから切り離し、宇宙に打ち出すのだった。

「有史以来、数多の英雄が人類支配を成せなかったのは、人の数がその手に余るからだッ！ だったら、支配可能なまでに減らせばいいッ！

僕だからこそ気付いた必勝法ッ！ 英雄に憧れる僕が、英雄を超えてみせる……………ッ！ ふへははは……………うわははははははあぼげえッ!？」

邪魔者を排除した事でウエルが上げた笑い声が、殴られた際に上げる声に変わる。

「……………ッ！ ケアンッ！」

ナスターシヤからの願いを託されたケアンが、ブリッジに到着したのだ。

「な、なぜだあ……………ッ！ なんて、僕の邪魔をするッ！」

ナスターシヤによる再起動時に、ケアンに課された役割は、『月の落下を阻止』という計画の達成。ならば、自分が生きている限り、月の落下を阻止は約束されている自分の下につくべきだろう、と考えるウエルだが、ケアンはそれに首を横に振って返した。

「ママからの要望だ。自由な世界を築く為、お前を止める」

誰もが笑っていられる世界を、この独裁者が創れるはずが無い。ナスターシヤが制御室ごと打ち上げられた事は、先程のウエルの言葉から理解できている。

この男に、人類の未来は任せてられない。

「ジョン・ウエイン・ウエルキングेटリクス。これから先の未来に、貴様は不要だ」

「道具の分際でえ……………人間様に逆らうんじゃあないッ！」

この地球の支配者と言っても過言ではない人類に逆らう存在。し

かも、それが人間ではないロボットだという事に、ウエルの怒りが有頂天に達する。

ケアンは確実にウエルを取り押さえるべく、ラックドライバーを装着している。ネフィリムの細胞を取り込んだ左腕を以てしても抵抗出来ないように、やりすぎと言える手段で取り押さえるつもりなのだろう。だが、それをウエル自身が認めるはずが無い。

「お前はツ！ この僕の従順な道具のままでもいいんだああああッツ!!」

ウエルが懐から取り出したのは、かつて倉庫でケアンが殲滅した米軍兵士が持っていた装置。ケアンの戦闘力が高すぎた為、それがどのような機能を持っていたかは不明だったそれが、遂にその機能を発揮する。

「ぐう……………ツ!? な……………にい……………ツ!?」

突然ケアンが苦悶の表情を浮かべ、ラックドライバーから全身にかけて電流が走る。それに耐えながらもケアンは震える右手に持ったT3イクシードメモリのスイッチを押そうとするが、それを阻止するかのように電流の威力が増し、ガイアメモリを落としてしまう。

「ぐ……………おッ！ おおおおおお……………ッ！」

「ケアンツ！ 貴様、ケアンになにをッ！」

「決まってるだろうがッ！ このガラクタを本来の、人類に従属する機械に戻してやるんですよッ！」

「ウエ、ル……………ッ！ キさ……………マあ……………ッ！」

ケアンが頭を押さえて悶え始める。

ウエルが使用したのは、度重なる戦闘でデータを蓄積したケアンを回収し、米国の兵器として運用すべく開発された装置である。さらに

ウエルが改造した事で、それはラックドライバーを経由する事で、あらゆるファイアウォールによる妨害を受け付けない特性を獲得し、ケアンにとっての命と言っても過言ではないエネルギーコアに働きかけるものとなっている。それにケアンが抵抗する手段など一つ足りとも存在しない。故に、現在装置の所有者であるウエルによって、ケアンは今も現在進行形で、彼の行動原理を『ドクター・ウエルを護り、彼の計画完遂の手助けをする』というものに書き換えられてしまっているのだ。

初対面の時こそ嫌っていたものの、今では仲間として思い入れのあるマリアは、ケアンが苦しむ姿が見ていられずにウエルを睨む。

「おのれ……………ッ！」

「手にかけるのかッ!? この僕を殺す事は、全人類を殺す事だぞッ！」

「殺すッ！」

「ひゃあああああッ!?!」

恩人であるナスターシャを宇宙に打ち上げたにも飽き足らず、心を学びたがっていたケアンを、まだ兵器だった頃の彼に戻そうとするウエルに対するマリアの怒りは凄まじく、それを人類の救済より優先して槍を取ったマリアに、ウエルは驚愕と恐怖の叫び声を上げる。

「駄目ッ！」

しかし、そこへ乱入する者達の姿があった。

外部から飛び込んできたバイクに跨るエターナルと、立花響である。さらにそこへ、調と切歌も続く。

「マリアッ！」

「やりすぎは駄目デスッ！」

ウエルとマリアの頭上を飛んで着地したバイクから降りた響と、調

と切歌がマリアの前に立ち塞がる。

「調、切歌………………。………………。そこを退いてッ！ 私は、そいつを殺さなきゃ気が済まないッ！」

「駄目だよそんなのッ！ 人を殺したら、もう後戻りできなくなるッ！」

「黙れ、融合症例第一号ッ！」

「違うッ！ 私は立花響、十六歳ッ！ 融合症例なんかじゃないッ！ ただの立花響が、マリアさんとお話ししたくてここに來てるッ！」

戦う力を失っている響は、最早二課の装者ではない。故に、今の響は、『立花響』という名を持った一人の人間として、マリアを止めるべく現れたのだ。

「お前と話す必要は無いッ！ マムがこの男に殺され、ケアンも記憶を奪われかけているのだッ！ その罪は、命を以て償ってもらおうッ！ 世界を護れないのなら………………。私も生きる意味は無いッ！」

復讐と憤怒に燃えるマリアは、響の言葉を無視して、彼女ごとウエールを貫こうとする。調と切歌はそれを止めようと動き出すも、間に合わない。

しかし、響はそれに対し――

「お前………………。ッ!？」

片手で、槍の穂先を掴み取った。

「意味なんて、後から探せばいいじゃないですかッ！ だから………………。生きるのを諦めないでッ！」

死にかけて自分を救った少女の叫びを口にした響は、聖詠を歌う。

「Balwisyall Nescell gungn
ir tron」

「きゃあッ!?!」

響から眩い輝きが放たれ、マリアが吹き飛ばされる。その身に、ガングニールの鎧は無い。

「なにが起きているのッ!?! こんな事って、あり得ない……………」
融合者は適合者ではないはず……………ッ!?!」

周囲に舞う光輝く粒子のようなものを見渡し、まさかと響を見る。

「これは……………貴女の歌? 胸の歌がしてみせた事? 貴女の歌ってなにッ!?! なんなのッ!?!」

マリアが叫ぶ。

響かのじよの歌は、全てを貫き通す意志こそ自分と同じだが、自分と根本から違うなにかを感じる。

マリアの問いかけに、響は心ハートの全てを以て答える。

「撃槍————ガングニールだあああああああああああ
あッッッ!!」

それは、撃槍。人々の想いを繋ぐ、絆の力。

何度窮地に立たされても立ち上がり続けてきた気合と根性で、マリアの烈槍は撃槍と変化し、響に力を貸したのだ。

「ガングニールに、適合だと……………ッ!?!」

失われたはずの力を再び意志の力で再び取り戻した響の姿に唾然

とするマリア。

「馬鹿な……………ッ！ 意志一つで、聖遺物を適合させたというのか……………ッ！」

そして、その動揺を抱くのはウエルも同じ。あまりにもとんでもないやり方でガングニールを装備した響に恐怖するウエルだが、その隙にエターナルによって取り押さえられる。

「観念するんだな、ドクター・ウエル。お前の野望もここまでだ」

「……………ふひ、ふひひひひ……………ッ！」

「……………？ なにがおかしい」

常人では抗う事すら不可能な腕力で取り押さえられたにも関わらず、気味の悪い笑い声を漏らすウエルを訝しむエターナルを横目で見つめて、ウエルは告げる。

「——最強の兵器の完成ですよ」

瞬間、全身に押し掛かるような重圧を感じたエターナルは、ほぼ無意識にそれを感じた方角へエターナルエッジを投げる。

しかし、それは標的の胸に突き刺さる前に、片手で掴み取られてしまふ。

「ケアン……………」

先程まで苦しんでいたのが嘘だと思わせられる程の無表情で立つケアンに、マリアは彼が無事な事に安堵しかけるも、それは次の瞬間には思い違いであると気づかされる。

「……………ッ！ マリアさんッ！」

咄嗟にマリアの前に出た響が拳を振るうと、カアンツと甲高い音がブリツジ内に響き渡る。

ケアンが、先程掴み取ったエターナルエツジを、マリア目掛けて投擲してきたのだ。

「そんな、どうして……………ッ!？」

「決まってるでしょう？ 完成したんですよッ！ 本当の彼がッ！」

あらゆる感情の介在を許さず、あらゆる躊躇を是としない。マリア達の存在によって壊された、本来のケアン・デイクスが甦ったのだ、ウエルは高らかに言った。

光を失った目でその場に佇むケアンに、ウエルは叫ぶ。

「さあ、この英雄ほくの道を阻む者を排除しろッ！ ケアン・デイクスッ！」

「……………了解」

吐き出される言葉は、今まで以上に空虚で、感情など一欠片も存在しない。

ケアンがウエルに向かって手を伸ばすと、ウエルの懐から、まるで意思を持つかのように一本のガイアメモリが飛び出し、ケアンの手に取りまる。

『フロンティア！』

そのメモリに封じられた記憶の名を叫んだガイアメモリを、ケアンはラックドライバーのスロットに挿し込む。

「変身」

冷たく言い放ち、スロットを押し倒す。

『Frontier Active』

ケアンの全身を白銀の素体が覆い、その上に漆黒の鎧が装備される。しかし、それで変身は止まらず、三つに分かれたバイザーは、左右に移動したパーツが『F』に変形し、上部に移動したパーツは二本の角となり、今まで隠されていた真紅の複眼が露わになる。

イクシードの状態に胴体に存在した、外部からガイアメモリを取り込む為の生体コネクタは消滅して変形し、脚部の鎧は膝から足首にかけて翼を模したものと変形する。

其れは、人ならざる身でありながら神の領域へと足を踏み入れるも、人の道具で在り続ける、絡繰り仕掛けの仮面の戦士。

名を——仮面ライダーイクシード・フロンティアフォーム。

「ヒヒヒ……………ッ！ 遂に、遂に手に入れたぞ……………ッ！
最強の兵器をッ！ これで僕は無敵だあ……………ッ！ うえへへへ……………ッ！」
「ドクター……………ッ！ このおおおおおッ！」
「マリアさんッ！」

その身にガングニールを纏っていないくとも、最早怒りはマグマの如く煮え滾っているマリアに、響の制止は届かない。

鬼の形相で迫ってくるマリアは恍惚としていたウエルを恐怖に陥れかけるも、それをイクシードが看過するはずも無い。

一瞬でマリアの前に移動したイクシードが、彼女の心臓を貫こうと手刀を突き出すが、エターナルが投擲したエターナルエッジが直撃した事で軌道を逸れ、マリアの頬に切り傷を残す結果となった。

「逃げろッ！ お前達じゃ足手纏いだッ！」

「は、はいッ！」

ギリギリとはいえ、この中で唯一イクシードの速さに追いつけたのは、エターナルのみ。イクシードは彼に任せるのが妥当だと判断した響は、自分も助太刀したい、という言葉を受け、マリアの手を握って、調と切歌共々ブリッジから脱出しようとする。

一方、イクシードは自分の速さに反応できたエターナルを最優先で排除すべき敵と判断したのか、エターナルと取っ組み合っている。

「大道克己ッ！」

イクシードの顔面に拳を叩き込んで距離を取ったエターナルに、マリアが叫ぶ。

「可能なら頼む……………ケアンを救ってくれッ！ 心を知りたがっているケアンを、死なせたくない……………」

「……………いいだろう。こいつに思うところもあるからな」

「……………ありがとう」

敵対者の自分の願いを聴いてくれた事に感謝し、マリアは響と共にブリッジから脱出する。

「さて、私はあの忌々しいシンフォギア装者達をぎゃふんと言わせなきやならないので、ここで失礼しますよ」

ウエルもいつまでもここにいればイクシードとエターナルの戦いに巻き込まれると判断したため、ブリッジから出ていく。エターナルとしても今すぐウエルを確保したいところだが、イクシードの妨害を考えると、それは優先できないので、口惜しい気持ちを抱えながらイクシードと拳を交え続ける。

突き出される拳も、振り上げられる足も、威力と速度の両方が今までのイクシードを凌駕する。

「ぐお……………ッー」

捌き切れなかった拳が腹に捻じ込まれ、そのまま天井を突き破って殴り飛ばされる。一撃だというのに、それに含まれる威力が尋常ではない事に、それを予測していても戦慄せざるを得ない。

崩れた天井の穴から、自分を追ってイクシードが姿を現す。重力操作の力を入れたのか、その体は足場を必要とせず、空中に浮遊している。

「お前はなんとも思わないのか？ 心を学びたがっていたくせに、道具として扱われる自分に」

答えは無い。

敵対者との対話など必要なく、殲滅こそが最優先事項である、と定められているのだろう。必要最低限の会話は、所有者ウエルにのみ行う。あの男が敵と認識した者には、言葉を交える意味すらなく、それをする時間があるのなら、一刻も早く排除する。

全ては与えられた命令^{オーダー}を果たす為。

——そこに在るのは、心を求めたアンドロイドではなく、敵対者を討ち滅ぼす兵器だ。

繰り返される攻撃を回避し、同時にエターナルエッジで斬りつける。多少の火花こそ散るが、それでイクシードが怯むなどあり得ない。

反撃の蹴撃を受け、天井から転がり落ちていく。イクシードは凄まじい速度でエターナルの真下へ移動し、落ちてくるエターナルに拳を叩き込む。

打ち上げられたエターナルにイクシードは超高速の連撃を叩き込み、最後に踵落としてエターナルを地面に叩き付けた。

「どこまでも……………兵器でいるつもりか……………ツ！ つまらないな……………、本当に」

NEVERの耐久力を以てしても消せない激痛に顔を顰めるが、その瞳に宿っているのは、イクシードに対する失望と憤怒。

だが、今のイクシードにそんな感情を向けたとしても、今の彼には届かないだろうし、彼自身が疑問を抱く事も無いだろう。相手がどんな変化を見せようと、倒すべき存在である事に変わりはないのだから。

(なら、やる事は一つだ)

イクシードの攻撃を躲しながら弦十郎に連絡を取って、京水を始めとした自分の部下達の周りに敵はいないかと訊ねる。

返答はノー。周囲を見渡してもノイズらしき姿は見当たらないし、それらしき気配も感じないからだそうだ。理由からして弦十郎が外に出ている事は容易に想像できるが、今はなぜ彼が外出しているのかを考えている暇は無い。

礼を言ってから通信を切って飛び退くと、そこ目掛けてイクシードが拳を叩き付けてくる。

それだけでも足元が軽く揺れ、小さなクレーターを作った拳を引き抜いたイクシードは、エターナルがその手に一本のガイアメモリを持っていく事に気付く。

「お前にはある意味感謝している。死人の俺が『生きてる』って実感できる『痛み』を何度も感じさせてくれたからな。だが、それもここまです」

あらゆる攻撃に対する耐性を備えているエターナルローブを脱ぎ捨てると、エターナルの全身に巻かれたマキシマムスロットが露わになる。

『ゾーン！』

『地帯』の記憶を封じたT2ガイアメモリを、マキシマムスロットに挿し込む。

『ゾーン・マキシマムドライブ！』

部下達の持つT2ガイアメモリと、仮設本部に保管されているT2ガイアメモリがエターナルの元に結集し、彼の体に巻かれているマキシマムスロットに挿し込まれる。

『アクセル・マキシマムドライブ！ バード・マキシマムドライブ！
サイクロン・マキシマムドライブ！ ダミー・マキシマムドライブ！
フアング・マキシマムドライブ！ ジーン・マキシマムドライブ！
ヒート・マキシマムドライブ！ アイスエイジ・マキシマムドライブ！
ジョーカー・マキシマムドライブ！ キー・マキシマムドライブ！
ルナ・マキシマムドライブ！ メタル・マキシマムドライブ！
ナスカ・マキシマムドライブ！ オーシャン・マキシマムドライブ！
パペティアー・マキシマムドライブ！ クイーン・マキシマムドライブ！
ロケット・マキシマムドライブ！ スカル・マキシマムドライブ！
トリガー・マキシマムドライブ！ ユニコーン・マキシマムドライブ！
バイオレンス・マキシマムドライブ！ ウェザー・マキシマムドライブ！
エクストリーム・マキシマムドライブ！ イエスタデイ・マキシマムドライブ！』

本来、変身者がギリギリ耐え切れるとされているのが二本同時マキシマムドライブだ。しかし、今行われているのは、その十倍以上の、驚

異の二十五本同時マキシマムドライブ。並の人間であれば耐え切れず死亡するであろうエネルギーの奔流を、大道克己は平然と受け止めている。

いづれ全てのメモリを支配する、とまで言われたエターナルメモリは、最高の適合者の手中に収まった事により、その真価を発揮した。かつて、風が吹き続ける街を恐怖のどん底に叩き落としたその力は、まさしく神の力を手にした者と対峙するに相応しい。

「踊るぞ、死神のパーティータイムだ」

その仮面の奥に凶悪な笑みを浮かべる最凶と、絶大な力を前にして拳を握り締める最強。

両者は一瞬の間を置いた後、眼前の敵を討ち果たすべく動き出した

ツ！

始まりの歌（バベル）

全てのT2ガイアメモリの力を引き出したエターナルがイクシードと激突した頃、調と切歌を連れてマリアを抱えた響はブリッジに向かっていたバギーを発見する。

「響君ッ！」

「そのシンフォギアは……………ッ!？」

シエンショウジン
神獣鏡によって欠片も残さず破壊されたはずの GANG 二ールを纏っている響に、弦十郎と緒川が驚いたように目を見開く。

「マリアさんの GANG ニールが、私の歌に伝えてくれたんですッ！」

響が答えた直後、フロンティア全体が大きく揺れる。同時に、仮設本部で周囲の状況を調査していた藤堯と友里から、フロンティアが上昇している、との通信が入る。

「今のドクターは左腕をフロンティアと繋げる事で、意のままに制御できる……………。フロンティアの動力は、ネフィリムの心臓。それを停止させれば、ドクターの暴拳も止められる……………。できる事なら、私自身が止めたい。だけど……………ッ！」

唯一の抵抗の術である GANG ニールは響の手に渡ってしまったため、万が一という事が起きては対処できない。

悔し気に拳を握り締めるマリアは、響を見る。

「立花響……………。身勝手な願いだとは思っているが、ドクターを止めてくれッ！ 戦う資格のない私に代わって、お願い……………ッ！」

「調ちゃんにも頼まれてるんだ、マリアさんを助けてって。だから心配しないでッ！ ……………それと、戦うのは私だけじゃありません。ここにいる人達、全員ですッ！」

バギーに乗っている誰もが、響の言葉に頷く。

「ウエル博士の追跡は俺達に任せろッ！ だから響君達は……………」

「ネフィリムの心臓を、止めますッ！」

これからの方針が固まり、装者以外はウエルの追跡に、装者達はネフィリムの心臓を止めるべく動き出した。

——その頃、フロンティアのジェネレータールームでは。

「ソロモンの杖が無くとも、僕にはまだフロンティアも、イクシードもある。邪魔をする奴らは重力波にて足元から引っぺがしてやるッ！」

ソロモンの杖という利点を奪われながらも、まだ自分には最高とも言える武器が揃っている事に微かな安堵を抱いているウエルが、炉心から見える二課の者達を憎々し気に睨みつけていた。

「人ん家の庭を走り回る野良猫め……………ッ！ フロンティアを喰らって同化したネフィリムの力を、思い知るがいいッ！」

彼の感情に呼応するかのように、炉心に取り付けられたネフィリムの心臓が、一際強く鼓動した。

——ジェネレータールームのネフィリムの心臓が強く鼓

動すると同時、響達の前の地面が動き出し、生物のような形になる。

「なにこれッ!？」

「恐らく、フロンティアを喰らって同化したネフィリムだッ！ 気をつけろッ！」

「にしては張り切りすぎだッ！」

大きく開かれたアギトから放たれた火球を躲すも、それが着弾と同時に巻き起こす爆風を浴びたクリスが文句を吐き出す。

「でも、これさえ倒せば、ドクターを止められる」

「やるつきやないデスッ！」

「うん、行こうッ！」

ウエルの野望を食い止める為、ネフィリムと装者達が激突する。

——装者達がネフィリムと交戦し始めた頃、彼女達の上空では、それ以上の戦いが繰り広げられていた。

T2バードメモリの力で飛行能力を獲得し、さらにT2アクセルメモリの力で加速しているエターナルと、それをエターナルとほぼ同じ速さで追うイクシードの戦いだ。

互いに空中を飛び回りながら激突し、その度に両者の体から火花が飛び散る。

再び激突して両者共に拳を突き出して相手の体から火花を散らせると、エターナルの手がイクシードの顔面を掴み、そのまま地面へ急降下。イクシードの体で地面を削っていくも、イクシードはエターナルの拘束を即座に振り解き、エターナルを蹴り飛ばす。

空中で体勢を整えたエターナルがエターナルエッジの先端をイクシードに向け、柄に備え付けられている引き金を引く。同時にT2トリガーメモリとT2ヒートメモリの力が反映され、蒼い炎型のエネルギー

ギー弾が撃ち出される。

上空から降り注ぐ蒼炎の雨を掻い潜ったイクシードが上昇し、一気に加速してエターナルの胸部に超威力のキックを喰らわせる。

しかし、それをエターナルはT2メタルメモリの力で強化された防御力で防ぎ切り、T2バイオレンスメモリの怪力とT2フアングメモリの俊敏さで反撃の連続攻撃でイクシードを吹き飛ばす。

「超高速」

エターナルがそう言った途端、T2ナスカメモリの力が発動し、彼の背中から翼のような形で緑色のエネルギーが放出され、エターナルエッジも刀身が伸びて剣と言っても過言ではないほどのリーチを得る。

エターナルの姿が消えると、イクシードの全身から火花が飛び散り、イクシードは状況を理解できずに墜落する。

起き上がるイクシードは、自身の鎧を通して襲ってきた衝撃から、あの一瞬で何度も斬りつけられたと判断し、それに対応すべく動き出す。

地面を蹴り碎いて飛び上がったイクシードは移動速度を上昇させ、超高速を用いて移動するエターナルに食らいつく。

両拳にエネルギーを纏わせて迫るイクシードを、エターナルはエネルギーの刃を以て迎え撃った。

「……………なににも出来やしない私に、ここに立つ資格はあるの……………?）」

誰もいないブリッジに一人、マリアは立つ。

なぜ一度脱出したブリッジに戻っているのかというと、その様子は今も全世界に放送されている状態であり、唯一世界に自分の声を届ける事が出来る場所だからだ。

ウエルは恐らくジエネレータールームに向かったのだろう、と判断したマリアに従って弦十郎達はジエネレータールームに向かっている。イクシードはエターナルが相手をしているため、ウエルが敵と認識させた相手を倒し尽くすまで戻ってくる事は無いだろう。

邪魔者がいないこの状況こそ、再び世界中の人々に訴えかける、最後のチャンスだ。

しかし、一度それに失敗した、という経験。そして良かれと思って踏み出した行動のほとんどが裏目に出てしまった事もあり、マリアはどうしてもネガティブな思考をしてしまう。

(駄目よ、今はそんな事を考えている場合じゃないッ！ ここで躊躇しては、セレナの歌を、セレナの死を無駄なものにしてしまう……………)

こうしている間にも、月の落下は止まらない。ここで全人類のフォニックゲインを結集しなければ、月の軌道を元に戻せない。

しかし、再び人々に訴えかけようと口を開こうとしても、なにを言えばいいのかわからない。

(ああ、セレナ……………。私はいつたい、どうすれば……………)

自分への怒りと哀しみに惑い、これからどうすればいいのかわからないマリアが、思わず亡き妹に助けを請う。

「——マリア姉さん」

その時だった、彼女の声が聞こえたのは。

思わず顔を上げたマリアが見たのは、既にこの世にいないはずの少女の姿。その姿は、あの瓦礫と炎の奥に消えていった時と変わらないもの。

その少女の名は——セレナ・カデンツァヴァ・イヴ。

数年前、暴走したアルビノ・ネフィリムの暴走を食い止め、死亡した少女だ。

「……………セレナッ!？」

それが幻である事を知っていながらも、マリアは彼女の名を呼ばずにはいられなかった。

セレナは生前と変わらぬ優しい笑顔で、マリアに問いかけてくる。

「マリア姉さんがやりたい事はなに？」

「……………歌で、世界を救いたい……………。月の落下がもたらす災厄から、みんなを助けたい……………」

それは、武装集団『フィーネ』の装者マリア・カデンツァヴァ・イヴの願いではなく、一人の人間としての願い。

マリアの回答に、セレナは微笑みを崩さずに姉の手を取る。

「生まれたままの感情を、隠さないで……………」

「セレナ……………」

月の落下を食い止めなければ、多くの命が危険に晒される。それを防ぐ事が、今の自分が成すべき事だ。

「……………りんごは浮かんだお空に……………」

歌い出したセレナに、マリアが続く。

「……………りんごは落っこちた地べたに……………」

そして、今度は二人一緒に。

「――――星が生まれて歌が生まれて　ルルアメルは笑った
常しえと」

その歌声に、世界中の誰もが聞き惚れ、誰もが自然と二人に合わせ
るように歌い出す。

その歌がなにか、知る人間はほとんどいない。これはマリアとセレ
ナの故郷で歌われている民謡だ。しかし、ただの民謡であるはずのそ
れは、世界中の人々の心を繋ぎ、フォニックゲインを高めていった。

「――――世界中より集められたフォニックゲインが、フロ
ンティアを経由して、ここに集束している……………」

車椅子を變形させ、発射の際に崩れ落ちてきた瓦礫を押し退けて立
ち上がったナスターシャは、地球を覆う黄金の輝きを見る。

「これだけのフォニックゲインを照射すれば、月の遺跡を再起動させ、
公転軌道の修正も可能……………」

これなら、月の落下を阻止できる。

歓喜と覚悟を胸に、ナスターシャはマリアに声を送る。

――――マリアの歌声が、通信越しに自分の名を呼ぶナスター
シャの声によって止む。

目の前に、先程までいたはずのセレナの姿は無い。伝えたい事を伝
えて、そのまま消えてしまったのだろうか。

もう少し一緒にいたかったが、それは叶わぬ願い。

自分は生者で、彼女は死者。両者には両者の世界が在るのだ。

『貴女の歌に、世界が共鳴しています……………。これだけフォニッ

クゲインが高まれば、月の遺跡を起動させるには充分ですッ！ 月は私が責任を持って止めますッ！」

「ママッ！」

『もうなにも貴女を縛るものではありません。……………行きなさい、マリア。行って私に、貴女の歌を聴かせなさい……………ッ！』

「ママ……………」

セレナが現れる前のマリアなら、そこで躊躇っている事だろう。だが、今は違う。

セレナに背を押され、自分のありのままの気持ちを曝け出したマリアは、覚悟を決めている。

「……………OK、ママ。世界最高のステージの幕を上げましょうッ！」

『最後のステージ』から、『最高のステージ』に。

燃え盛る魂を胸に、マリアは高らかに宣言した。

———
今までの攻防の中で最も高い威力を孕んだ一撃がぶつかり合い、舞い散る火花と共に、両者の体が後退する。

高出力のエネルギーを以て振るわれたエターナルの渾身の一撃は、同じくイクシードの渾身の一撃によって相殺された。

だが、この程度の距離など、両者にとって思考するに値しない。

「ハアッ！」

先に動いたのはエターナル。

時間さえ置き去りにするのではないか、と思えるほどの勢いで肉薄したエターナルが、元のリーチに戻したエターナルエッジを振るう。

イクシードの鎧から火花が飛び散り、僅かに逸れた体に追撃を加え

ようとエターナルが再びエターナルエッジを振るうが、イクシードはそれを受け流し、勢いを殺さぬまま回転。エターナルの側頭部に回し蹴りを叩き込んだ。

「ぐう……………ツ!？」

防御力が遥かに増している状態であるのにも関わらず、カウンターを受けた衝撃に脳が揺さぶられたエターナルが一瞬だけ、周囲の状況を把握できなくなる。

その絶好の好機チャンスを逃さないイクシードではない。

『Frontier Maximum Drive』

マキシマムスロットに挿し込んだT3フロンティアメモリの力が右腕に集中し、白銀の輝きを纏った拳が突き出される。

「ぐわあああああああああッッ!!」

それは寸分違わずエターナルの胸部に炸裂し、エターナルは凄まじい勢いで地面へ叩きつけられ、そこを中心に大爆発が起きた。

———
装者達の攻撃を受けながらも、そんな攻撃は効かぬとばかりにネフィリムが火球を吐き出してくる。

「うわああああッ!」

「雪音ッ! く……………ツ!」

火球の爆発の余波に吹き飛ばされるクリスに注意が向いた翼が、自分に向かってきた左腕を躲す。

「翼さんッ！」

翼の名を叫ぶ響目掛けて、ネフィリムが左腕を伸ばして攻撃してくる。

「デエエエエスッ！」

しかし、それは途中で糸のようなものに拘束され、切歌によって切断される。さらに、左腕を切断されて叫び声を上げるネフィリムの脇腹を調が切り裂いていく。

「二人共、ありがとうッ！」

響に領くも、二人は苦虫を噛み潰したような表情でネフィリムを見上げる。彼女達の視線の先では、切断されたばかりの左腕を再生させているネフィリムの姿が。

「こいつを相手にするのは、結構骨が折れそうデスよ……………ッ！」

「……………ただ、歌があるッ！」

突如聞こえてきた声に振り返ると、そこにはフロンティアが発生させた重力によって浮遊している岩の上に立つマリアがいた。

「マリアアッ！」

「マリアさんッ！」

装者達がマリアのいる岩に飛び移ると、マリアは遙か上空にいます。あろうなスターシャに思いを馳せる。

「もう迷わない……………。だって、ママが命懸けで月の落下を阻止してくれる」

宙^{ソラ}を見上げるマリアの目には、覚悟を決めた者のみが灯す、強い意志の炎が宿っていた。

——彼女達の様子をジェネレータールームで観察していたウエルは、くだらないとばかりに邪悪な笑みを浮かべ、口を開く。

「出来損ない共が集まったところで、こちらの優位は揺るがないッ！
焼き尽くせ、ネフィリイイムツツ!!」

エターナルは既に下した。最早イクシードと同格の敵などこの世に存在しない。

圧倒的優位を誇るウエルは、自分が英雄として崇められる新世界がもう少して誕生する事を確信した。

——ネフィリムから放たれた火球が、響達がいる岩を打ち砕く。その光景をジェネレータールームで見っていたウエルは遂にやった、と狂った笑い声を響かせるが、巻き上がる黒煙の中から美しい歌声が聞こえてきた事で、その笑い声は収まる。

「Seilien coffin air get—lla
m h t r o n」

黒煙が晴れた先にいたのは、円形の障壁によって火球から護られた装者達。ウエルは、それがマリアがシンフォギアの装着時のエネルギーをバリアフィールドに応用した事に気付く。

「調がいる………………。切歌がいる………………。ママも、セレナもついている………………。みんながいるなら、これくらいの奇跡、安いも

のッ！」

戦っているのは、自分一人ではない。

調も切歌も、ナスターシャもセレナもいる。

全員の闘志が、魂が——ここにあるッ！

——エネルギーのバリアフィールドでネフィリムの火球を防いだ装者達に気付いたイクシードは、今度は彼女達を仕留めるべき動き出そうとするが、

「うらあッー！」

「……………ッ!?!」

突如として現れたエターナルがT2ユニコーンメモリとT2サイクロンメモリ、そしてT2ロケットメモリの力を纏った右拳をイクシードの鳩尾に捻じ込み、遙か上空まで打ち上げた。

打ち上げられながらも、イクシードは『なぜだ』と困惑する。先程の一撃、手応えは充分すぎるほどであったはずだ。それなのに、なぜあの男は平然としていられるのか、と。

答えは、T2ダミーメモリである。脳を揺さぶられ、隙を晒したエターナルであったが、多くの戦場を渡り歩いてきた彼の体は、ほぼ無意識に迫り来る『死』^{メモリプレイク}から逃れる為、その場に最も最適なメモリの力を引き出した。

それがT2ダミーメモリ。かつて、その記憶の怪人がある戦士と戦った際、彼らが最も尊敬する男をほぼ完璧に再現した、『偽物』の記憶を封じたガイアメモリである。

それによって作り出された偽物はイクシードによって破壊され、イクシードは自身が破壊したものをこそエターナルであると解釈したのだ。

だが、それはイクシードにとっては些細な問題でしかない。次からはその力も視野に入れつつ、今度こそエターナルを排除するまでの事である。

「――お前は、俺には届かない」

瞬間、背後から聞こえてくる声。

いつの間に、と振り返ったイクシードの脳天に踵落としが炸裂し、凄まじい勢いで落下していく。

それを追うエターナルがT2ルナメモリの力で五人に分身し、次々とイクシードをエターナルエッジで切り裂いていく。

五人のエターナルの連撃に全身から火花を散らしながらも、イクシードは一発逆転の可能性を宿すマキシマムドライブをもう一度使用すべく、ベルトのT3フロンティアメモリに手を伸ばすが、彼の手がスロットからガイアメモリを引き抜くよりも、戻ってきたエターナルの方が速い。

「……………ッ！　これ、は……………ッ!？」

自身を中心に周囲に広がった、エメラルドグリーンの光球に、フロンティアフォームになってから初めて、イクシードが驚愕の声を上げた。

同時に、全身に襲い来る重圧と衝撃。このままでは押し潰されると危惧し、イクシードは内側に自分が生み出したエネルギーで作ったバリアで光球からのダメージを軽減するが、それによってイクシードの動きが制限されてしまう。

「トドメだ」

エターナルがスロットから引き抜いたT2エターナルメモリを、エターナルエッジに挿し込む。

「惹かれ合う音色に、理由なんていらない」
「ん……………」

翼が差し出した手を見た調は、一瞬躊躇う様子を見せながらも、しつかりとその手を握る。

「あたしも、つける薬がないな」
「それはお互い様デスよ」

クリスと切歌は、お互いに笑いながら手を繋ぎ合う。

「調ちゃんツ！ 切歌ちゃんツ！」

そして、最後は響が、彼女達と手を繋ぐ。

「貴女のやってる事、偽善でないと信じたい……………。だから近くで、私達に見せて。貴女の言う、『人助け』を……………私達に」
「……………うん」

自信たっぷりな頷く響に、調もまた微笑んで頷く。

「繋いだ手だけが紡ぐもの……………」
『絶唱六人分ッ！ たかだか六人ぼっちで、すっかりその気かあああああッ!』

このフロンティアのどこかで自分達を見ているであろうウエルが叫ぶ。

しかし、それは勘違いだ。

「くづろくろく……………ッ！」

遙か彼方、星が音楽となった……………かの日

無人のフロンティア・ブリッジ。変身が解除されたケアンをブリッジの中央にある球体の傍に下ろしたエターナルはベルトのスロットからT2エターナルメモリを引き抜き、変身を解除する。

「……………感謝する、大道克己」

開口一番、ケアンが感謝の一言を述べる。

「礼はマリアに言え。俺に言われても困る」

『心』を知りたがっているから救ってくれ、などという願い、かつての自分が聞いたら鼻で笑って一蹴するだろう。

排除すべき敵がいるなら、排除する。他人の、それも敵対組織の間が言う事など聞くに値しない。

風の街で敗れるその時までの自分なら、間違いなくそうしただろう。だが、不思議だ。今の自分に、あの頃の自分と同じ行動が取れるような気はあまりしない。

それもこれも、あの男達と戦ったからだろうか。それとも、二課に所属するようになってからだろうか。

「随分と甘くなったな、この死神^{おれ}も」

「……………？」

「……………なんでもない。ただの独り言だ」

訝し気に自分を見つめるケアンにそう言い、彼の前に片膝をつく。

「マリアから聞いた。お前がなにを求めているのか」

「笑うか？ 機械の私が、人と同じ『心』を求めているのを」

「ああ、とことんまで笑ってやる」

即答した克己に、ケアンは自虐的に笑う。

所詮、自分は人間になれぬ機械だ。目の前のこの男や仲間達のような、血の通った存在いきものではないのだ。そんな自分が心を求めるなど、最初から――

『よく、ここまで頑張ったものだ』、つてな」

言われた意味は、一瞬理解できなかった。

俯きかけた顔を上げた先には、柔らかく笑う克己の顔があった。自分を蔑むような笑みではなく、素晴らしいものを見たような、そんな笑み。

「お前は、俺と似ている」

その一言を皮切りに、克己が言葉を紡いでいく。

「なにかを求めて、少ないヒントを頼りに彷徨い続ける……………」
『心』を求めるお前の気持ちは、俺にも理解できる。かく言う俺も、欲しいものがあるからな」

「それは、なんだ……………?」

ケアンからの問いかけに、克己は自分の手を見下ろして答える。

『答え』だ。俺がなぜ、ここににいるのか。なぜ、失われたはずの力が、俺の手元にあるのか。俺は、それが知りたい」

開かれた手を握り締め、下ろす。未だに下を向いている克己は「ハッ」と、自虐的に小さく嗤わらった。

「……………人の道から堕ち続けた俺が、碌な最期を迎えられるなんて思っていないさ。そこまで俺は楽観者じゃない。でもな、それで諦めるつもりは無い。進み続けるさ、この足がある限り」

「救いが無いとわかっていながら、なぜお前は進むんだ……………?」

結末が碌なものではないとわかっているにも関わらず、自ら破滅へ邁進する心意気が、まるで理解出来ない。

欠片の利益さえ得られないのなら、とつとと諦めてしまえばいいはずだ。しかし、その考えは既に否定されてしまっている。

いったいどういう事なのだ、と困惑するケアンだが、次に聞こえた克己の返答に、ケアンは余計困惑させられた。

「少しでもいい。俺の、俺達の存在を誰かの心に刻み付けられたら、それだけでいいんだ。どんなに惨い終わり方だろうと、それだけができれば、俺はそれでいい」

自分達は間違いなくこの世界に生きた、という事を証明してくれる者が一人いるだけでいい。それだけでも、自分達は救われるのだ、と言う。

「俺達はどこまで行っても死人^{かこ}だ。進むべき未来は、現代^{いま}を生きる連中だけにあればいい」

人間は過去に生きた先人から時代を託されて成長し、未来を次の世代に託して逝く。そうして人間は進化してきたのだ。過去の存在である自分が出しゃばるつもりなどない。

「理解不能だ。碌でも無い結末しか待っていないのに、自分が生きた証を残す為に戦うのか。……………ああ、まったくもって、理解出来ない」

「その通りだ。人間ほど、理解に苦しむものは無いだろうよ。だが、そ

れでいいじゃないか」

人の在り方は千差万別。これが好きと言う者がいれば、あれが好きと言う者もいる。それぞれの理念の下、ぶつかり合う事もあるが、それでわかり合う事も出来る。

それぞれが違う考えを持ったからこそ、人はこうして、万物の霊長足り得るのだ。

「この世全てを理解したら、つまらない事この上ない。理解出来ないものがあるだけで、世界は楽しくなる」

「……………私がお前に敵わなかった理由が、わかった気がする」

自分がこの男に勝利できなかったのは、メモリの数などという単純な問題ではない。

この男は、世界を見ている。現代いまを生きる者達の未来を見ている。目先の利益に囚われ、その先を見ていなかった自分が敗北するのは、今思えば当然だったのかもしれない。

「私もなれるか？ お前のような存在に」

「おっと、俺を目標にするのはやめておけ。目標は自分で決めるんだな。そこまで誰かに決められては、成長できないぞ」

だが、と克己はケアンに手を差し伸べる。

「立ち上がる手伝いくらいはしてやる。さあ、立ち上がれ。そして、『心』を知るんだ。それが、お前をより強くする」

ケアンは差し伸べられた手を見ながら、克己の言葉に耳を傾ける。

『心』を持ったその時こそ、お前は本当の強さを手に入れられる。……………足掻け、ケアン・デイクス。足掻いて、足掻いて、足掻

き続けて、その存在を、この世に刻み付けろ」
「……………ああ」

差し伸べられた手を取る。

自分は、本物のケアン・ディークスではない。その姿形を再現した、アン드로이드贋作に過ぎない。それでも、前に進んでいこうと思った。

『心』を知る。そして、ナスターシャから託された、『自由な世界の
実現』を目指して、この足を動かし続ける。

進化し続け、人々の未来の為に戦い続けよう。

いつか、この身が砕けるその日まで。

そう決意したケアンの瞳には、静かな炎の輝きが灯っていた。

「……………そ、そんな馬鹿なッ！ あり得ないッ！ こんな事、僕
は認めないぞッ！」

神の力を得たイクシードと、フロンティアを取り込んで強化された
ネフィリムの敗北。その信じ難い事実^に打ちのめされたウエルが頭
を抱えた直後、弦十郎達がジエネレーターームへやって来た。

「見つけたぞ、ウエル博士ッ！」

「ひいッ！」

酷く情けない悲鳴を上げたウエルが逃げ出そうとするも、足を踏み
出した先で銃弾が地面に着弾する。

銃弾は賢が放ったもので、もちろんわざと狙いを外しての発砲……
威嚇射撃である。もし殺してよしという命令があったなら、彼は寸分
の狂いもなくウエルの頭部を撃ち抜いていたであろう。

そして、彼による威嚇射撃はウエルに効果抜群だったようだ。

「ひいひいひいッ！」

目の前に自分の命を容易く奪える銃弾が飛んでいった事に恐怖を覚えたウエルが情けなく尻餅をついた。

「お前の手に世界は大きすぎたようだなッ！」

弦十郎達が近づいてくる。だが、黙って彼らに捕縛されるウエルではない。

起き上がり、コンソールに手を伸ばそうとするが、その手はなぜか空中で、まるでそこだけの時間を止められたかのようにびくともしなくなる。

緒川が影縫いを使用して、ウエルの腕の動きを止めたのだ。

「貴方の好きにはさせませんッ！」

「奇跡が一生懸命の報酬なら………僕にこそおお………ッ！」

あの装者達が奇跡を成し遂げたのなら、彼女達と同じ、いや、それ以上苦労してきた自分にも、奇跡は起こるべきだと、ウエルは足掻き続ける。

すると、驚くべき事に、ウエルはところどころから血を流しながらも影縫いによる拘束を振り解き、コンソールに触れたのだ。

信じ難い事だが、なんとウエルは本来ならば振り解けないであろう影縫いの拘束を、力業で振り解いたのだ。ある意味、これも彼に起こった、『奇跡』というものなのかもしれない。

尤も、彼が起こした奇跡は、人類に希望をもたらすものではなく、新たな絶望を与えるものであったのだが………。

ウエルがコンソールに触れると、ジェネレータールームの中心に位置する炉心が赤黒く変色し、その周囲を稲妻が這い回る。

「なにをしたッ！」

異様な変化から嫌な予感がし始めた弦十郎の叫びに、ウエルはしてやったりといった笑みを浮かべる。

「ただ一言、ネフィリムの心臓を切り離せと命じただけ………！
！ こちらの制御下を離れたネフィリムの心臓は、フロンティアの船体を喰らい、糧として、暴走を開始するッ！ そこから放たれるエネルギーは、一兆度だああッ！」

その圧倒的なまでの熱量を孕んだネフィリムの心臓が爆発でもすれば、このフロンティアはおろか、月の落下には劣るだろうが、地球にも甚大な被害が出る事は間違いない。

「僕が英雄になれない世界なんて、蒸発してしまえばいいんだああ………ッ！ ふへへ、へへへへへッ！」

自暴自棄になったウエルの笑い声は、レイカの蹴りによって遮られる。

「自分のものにならないからって世界ごと心中？ 頭沸騰してんじやないのッ!? その全身を焼き尽くして黒焦げにした後、そのトチ狂った脳天を蹴り碎いてやるッ！」

「レイカ、落ち着いてッ！」

「落ち着いてられるかッ！ あんたはなんとも思わないのッ!? こんな奴が、私達と同じ大人って考えるだけで吐き気がするわッ！」

地獄の閻魔でさえも裸足で逃げ出しそうな形相で怒り狂うレイカをなんとか京水が抑えている間に、弦十郎は球体を見上げながらフイーネに訊ねる。

「了子君、君の鞭で破壊できるか？」

「壊してどうにかできるなら苦労しないわ。でなければ、とうに破壊してる」

「ならば仕方ない」

破壊してもなんの解決にもならないのなら、ここに留まり続ける意味も無い。

今取るべき行動は、般若と化したレイカに怯えているウエルを連れてフロンティアから脱出する事だ。

「剛三君ッ！」

「あいよ、ボスッ！」

弦十郎には劣るが、この中でもパワーに優れている剛三が、ウエルを軽々と持ち上げて肩に担ぐ。

そのまま弦十郎達は、外に残しているバギーの下へ向かい始める。

「確保だなんて悠長な事を………………。僕を殺せば簡単な事を……………」

剛三に担がれている情けない状況下でも、ウエルは口を開き続ける。それに対して、弦十郎はある言葉を彼に送った。

「殺しはしない。お前を、世界を滅ぼした悪魔にも、理想に殉じた英雄にもさせはしない………………。どこにでもいる、ただの人間として裁いてやるッ！」

その言葉は、弦十郎達に殺害される事で、自分は偉大な理念の下に動き、そして死んだ英雄である、と定義しようとしていたウエルの心を砕くには充分だった。

「畜生ッ！ 僕を殺せえッ！ 英雄にしてくれッ！ 英雄にしてくれ

よおおおおお……………ツ！」

「あ、一つ、私からもとっておきの言葉を送ってあげる」

なにかを思いついた様子のフィーネに、ウエルの視線が向く。

正直、これ以上、現実を突きつけられなくなかったが、それでも誰かがなにかを言おうとするとなんか気になってしまうのが人の性^{さが}である。

「英雄つてのはね、英雄になろうとした瞬間に失格なのよ。貴方、最初っからアウトってわけ」

「……………ツツ!!」

これが漫画であれば、ウエルの背後には幾つもの雷が落ちていた事だろう。先の弦十郎の言葉よりもショックを受けたウエルががりと項垂れる。

「あら、気絶してるわね、こいつ」

「蹴って起こして、何度もさっきの言葉を連呼してやりましょ」

「悪魔だな」

「ええ。悪魔よ。特にこいつみたいな屑には、とことんまで悪魔になつてやるわ」

そんな会話をしているうちに一行はバギーに搭乗し、仮設本部まで戻り、克己がケアンを連れて戻ってきた事を確認してから、迎撃用ミサイルを使って周囲の地面を破壊。フロンティアから離脱するのだった。

——無人のジェネレータールームを中心に大爆発が起こり、そこから巨大ななかが飛び出す。それは、ネフィリムの心臓が埋め込まれていたフロンティアの炉心。それはフロンティアのエネルギーを吸収、肥大化していき、最後には真紅の巨人の形を取る。

「あれが、司令の言っていた……………」

「再生する、ネフィリムの心臓ッ！」

フロンティアを取り込んで最大強化されたネフィリム――

―ネフィリム・ノヴァへ、調と切歌が飛び出す。

調は^{エクストライフモード}限定解除で強化されたギアのパーツを組み合わせて、巨大な搭乗式オートマタを完成させる。『終Ω式デイストピア』だ。

切歌は鎌の刃を三枚に増やし、『終虐・Ne破aア乱怒』を繰り出す。

「ああああ……………ッ！」

しかし、二人の攻撃はまるでネフィリム・ノヴァに通用したようには見えず、逆にエネルギーを吸い取られてしまった。

「聖遺物どころか、そのエネルギーまで喰らっているのかッ！」

もし、自分達が通常のギアのまま挑んでいたら、瞬く間に全滅まで追い込まれていたであろう。変異したネフィリム・ノヴァの脅威に、マリアは戦慄する。

「限界に達したら、地上は……………」

「蒸発しちゃウッ！」

ここで怖気づいてはいけない。自分達が敗れば最後、地上は一兆度のエネルギーを溜め込んだネフィリム・ノヴァによって焼き払われてしまう。

なんとしても、止めなければならない。しかし、ここで倒したとしても爆発は防げない。どこか、自分達にも地上にも爆発の影響が及ばない場所が必要だ。だが、そんな場所など、どこにも――

「バビロニア、フルオープンだあああッ！」

フィーネからソロモンの杖を渡されていたクリスが、ソロモンの杖を使って異空間へと続く穴を開けた。

そこに広がるのは、見た事も無い建造物が浮かぶ場所。そして、そこには数え切れない数のノイズの姿があった。

ソロモンの杖を使って開かれる場所など、この場にいる者なら誰だって知っている。

「バビロニアの宝物庫ッ!？」

「エクストライブの出力で、ソロモンの杖を機能拡張したのかッ!？」

「ゲートの向こう、バビロニアの宝物庫にネフィリムを収納できれば……………ッ!？」

宝物庫といっても、その容量は一つの世界と言ってもいい程のものだろう。そこにネフィリム・ノヴァを閉じ込める事ができれば、この世界に被害を与える事無く奴を倒す事ができる。

「人を殺すだけじゃないって……………やってみせろよッ！ ソロモンッ！」

クリスが力を籠めれば、エクストライブモード限定解除の出力によって機能を拡張されたソロモンの杖がさらに宝物庫への扉を開いていく。

これなら、と誰もが思ったその時、ネフィリム・ノヴァがクリスを薙ぎ払おうと右腕を動かしてきた。

「避ける、雪音ッ！」

翼がクリスを助けようと動き出すが、彼女が間に合うよりも早く、ネフィリム・ノヴァの腕がクリスを薙ぎ払った。その衝撃でクリスの手からソロモンの杖が飛んでいってしまうが、それをすかさずマリア

が掴み取る。

「私が……………明日をおおおおおツツ!!」

クリスと同じようにしてソロモンの杖の機能を拡張。宝物庫への扉を大きくさせ、ネフィリム・ノヴァを収納するのに十分な広さにする。

ネフィリム・ノヴァの手がマリアを捕まえようと伸ばされる。それを難なく回避するマリアだったが、ネフィリム・ノヴァの手から伸びた触手によって捕らえられてしまう。

「ぐ……………ツッ!」

「マリアッ!」

叫ぶ調と切歌の前で、マリアを捕まえたネフィリム・ノヴァはそのまま宝物庫へと吸い込まれるように落ちていく。

「格納後、私が内部よりゲートを閉じるツ!　ネフィリムは私が……………ツッ!」

「自分を犠牲にする気デスカッ!?!」

「マリアッ!」

二人の叫びも虚しく、マリアはネフィリム・ノヴァと共に宝物庫の内部へと落ちていく。

(この命を犠牲に世界を救った事で、これまでの罪が精算できるなんて思っていない。だけど、私一人の命で全ての命を救えるというのなら、この命、惜しくは無いッ!)

これまで重ねてきた罪は、自分一人の命で償えるものだとは欠片も思っていない。だが、その自分一人の命を対価に世界が救えるのな

ら、それでも構わない、と覚悟を決めるマリアだが――

「マリアさんを犠牲になんてさせません。マリアさんの命は、私達が護ってみせますねッ！」

「ここには、それを断じて認めない戦士達ししやがいるッ！」

「貴女達……………」

「英雄でない私に、世界なんて護れやしない。……………でも、私達は独りじゃないんだッ！」

誰もが、この世界に生きる者達の願いを背負っている。彼らの願いを果たす為に、そしてマリアという一人の人間の命を救う為にも、響を筆頭に装者達がマリアに続いて宝物庫内部へと侵入する。同時に、宝物庫と彼女達の世界を繋ぐ扉が閉じた。

「――フォニックゲイン、照射継続……………がはッ！」

マリアの歌に共鳴した人々の歌によって高まった七十億のフォニックゲインを月遺跡に照射し続けていたナスターシャが噎せ込み、少量の血が吐き出される。

「はあ、はあ……………。月遺跡、バラルの呪詛、管制装置の再起動を確認……………。月遺跡、アジャスト開始……………ッ！」

僅かに見える月遺跡の輝きが増したのを確認したナスターシャは、近いようで遠い彼方にある地球ちきゅうを見る。

「星が……………音楽となって……………」

地球を覆う程の光。その一つ一つが、命の輝き。人が生きる証。
今この瞬間、生きとし生ける者達の心が一つとなり、遂には星その
ものが、一つの音楽となっている。

最後の力を使い果たしたのか、意識が遠退いていく。
暗転していき、無明の闇に意識が奪い去られていく刹那、ある青年
の顔を思い出す。

『ナスターシャ博士ッ！』

人懐っこい笑みと共に、自分の名を呼ぶ青年。子どもの頃から変わ
らぬ、太陽のように朗らかな笑顔。

その笑顔を思い出し、今を生きる彼が、あの時と同じ笑顔になれる
事を祈る。

本当に孫のように可愛がったな、と思いながら、最後にナスター
シャは彼と、自分に賛同してくれた少女達に願う。

「どうか、幸せな、未来を……………」

その願い事を最期に、ナスターシャはその命の輝きを失う。

倒れ込み、二度と動かなくなった彼女の顔は、とても安らかな表情
だった――

――バビロニアの宝物庫に入った響達は、宝物庫の侵入者
に気付いたノイズの数に呆気にとられる。

「なんて大量のノイズ……………ッ！」

「散々この杖が呼び出してきた奴らの住処だからな」

響とクリスが会話していると、侵入者を排除すべくノイズ達が襲い
掛かってくる。

「斬り払うぞッ！」

翼の一言を合図に装者達が散開する。

「いつけえええええッ！」

アームドギアを合体させて作り上げた槍で響が突貫すれば、彼女が通り過ぎていった場所にいたノイズ達は瞬く間に炭化して消滅していく。

「はああああッ！」

翼が覚醒した『疾風』の記憶の力を纏わせた刃を振るえば、彼女を中心に発生した暴風が周囲のノイズを粉微塵に切り刻んでいく。

「喰らえええええッ！」

クリスがりフターからレーザーを放てば、その先にいたノイズ達が高出力のレーザーに貫かれ、大爆発を起こした。

「調、まだデスカッ!？」

響達がノイズの注意を引いている間に、調と切歌はネフィリム・ノヴァに捕まっているマリアの救出を急いでいた。

「もう少しで……………ッ！」

響達がノイズの注意を引き、切歌がネフィリム・ノヴァの片腕の相手をしてくれていたおかげで、誰にも邪魔されずに調はオートマタを操ってマリアを拘束する触手を切断できた。それによつてオートマ

夕は砕け散ってしまったが、マリアを救出できたので良しとする。

「切れたッ！ マリアッ！」

「一振りの杖では、これだけの数を………………。制御が追いつかないッ！」

如何にノイズを使役する事ができるソロモンの杖といえど、これほどの数のノイズを完全に操るのは不可能だ。

「マリアさんは、その杖でもう一度宝物庫を開く事に集中してくださいッ！」

「外から開くなら、中から開ける事だつてできるはずだッ！
鍵なんだよ、そいつはッ！」

ソロモンの杖はノイズを召喚、使役する為の完全聖遺物。宝物庫内にいるノイズを出現させるという事は、外部へと続く扉を開くという事。今の状態でそれを行えば、ここから外へ通じる扉を開く事も可能なのだ。

「セレナああああッッ!!」

自分に勇気を与えてくれた、今は亡き妹の名を叫んだマリアが杖から光線を放ち、外へと続く扉を開ける。

「脱出デスッ！」

「ネフィリムが飛び出す前にッ！」

自分達が脱出する前にネフィリム・ノヴァが外に出ては元も子もない。ネフィリム・ノヴァよりも先に扉に飛び込もうとする装者達であったが、その行く手を阻むようにネフィリム・ノヴァが立ち塞がる。

「迂回路はなさそうだッ！」

「ならば、行く道はただ一つッ！」

ノイズはまだまだいるし、ネフィリム・ノヴァが大人しく通してく
れるはずが無い。ならば、自分達が取るべき行動は決まっている。

「手を繋ごうッ！」

響に従い、全員が手を繋いでいく。

「マリアッ！」

「マリアさんッ！」

「この手、簡単には離さないッ！」

最後に手を繋いだマリアの胸から一本の長剣が飛び出し、彼女達の
頭上に浮かぶ。

「最速で、最短で、真っ直ぐにッ！」

繋いだ手を高く掲げた響とマリアに呼応するように長剣が消え、二
人の鎧が組み合わさっていく。響の鎧は金色の左腕に、マリアの鎧は
銀色の右腕となり、装者達と同じように固く握り合う。

「一直線にいいいいいいッツツ!!」

回転する二色の拳はネフィリム・ノヴァが伸ばした触手を薙ぎ払っ
ていく。

「うおおおおおおおおおッツツ!!」「」

六人の戦姫の絶叫と共に繰り出された絶技——『V i t a

l i z a t i o n』がネファイリム・ノヴァの胴体を貫き、装者達はそのまま宝物庫を脱出。どこかの砂浜に落ちていく。

力を使い果たした彼女達の前に、傷一つついていないソロモンの杖が砂浜に突き立つ。

「ぐ……………ッ！　すぐにゲートを閉じなければ、まもなくネファイリムの爆発が……………ッ！」

なんとかしてソロモンの杖を使ってゲートを閉じようと動こうとするが、力を使い果たしているせいでまともに体が動かない。

「まだ、だ……………ッ！」

「心強い仲間は、他にも……………ッ！」

「仲間……………？」

クリスと翼を訝し気に見つめる。

まだ、自分の知らない二課に所属する装者がいるのか、それとも、あの仮面の戦士や記憶の怪人達が来てくれるのだろうか。

しかし、やがて現れた彼女達の言う『心強い仲間』の姿に、マリアは驚愕せずにはいらなかった。

仮設本部から全力疾走してくるのは、既に戦う力を失ったはずの少女——小日向未来だった。

（ギアだけが戦う力じゃないって、響が教えてくれた……………ッ！私だって、戦うんだッ！）

もう、戦場へ向かう親友を見送るだけの自分とはおさらばだ。自分には自分の、小日向未来の戦い方がある、と証明するのだ。

大丈夫だ。陸上部で鍛えられた脚力は錆びついていない。杖との距離など、問題ではない。

ソロモンの杖を手に取り、投擲の構えを取る。

狙いはもちろん、バビロニアの宝物庫。

「お願いッ！ 閉じてええええッッ!!」

未来の願いと共に投擲されたソロモンの杖は、速度を落とさず真っ直ぐに宝物庫へと飛んでいく。

「もう響が……………誰も戦わなくていいような世界にいいいいッッ!!」

ネフィリム・ノヴァの熱量が臨界点を突破し、全身から眩い光を放ち始める。そして、凄まじい光が宝物庫から漏れ始めた瞬間――

――宝物庫内に投げ込まれたソロモンの杖が、その扉を閉めた。

先程まで扉が開いていた場所から黒い波紋が広がり、一瞬空の色が通常ならあり得ない色に変わる。

しかし、異変はそれだけで、そこからなにかが起こるといふ気配は無かった。

「……………」

響も、未来も、翼も、クリスも、マリアも、調も、切歌も。誰もが、口を開かない。しかし、この場にいる誰もが確信した。

――戦いは、終わったのだと……………。

「――マムが未来を繋げてくれた……………」

あれ程までの戦いが嘘だったかのように思える、夕焼けに染まる空を見上げるマリアが呟く。

今、こうして自分達が安心してこの地に立てるのは、月遺跡を起動

して月の落下を防いでくれたナスターシャのおかげに他ならない。

「ありがとう、お母さん……………」

遙か彼方にいるであろう母ナスターシャ親に感謝の気持ちを伝えていると、背後から響に声をかけられる。

振り返ったマリアに、響はなにかを乗せた手を差し出す。

そこにあっただのは、かつてはマリアが使用し、先程まで響が使っていたガングニールのペンダントだ。

戦いは終わったから、ガングニールを本来の持ち主であるマリアに返そうと思つての行動だろう。しかし、マリアはゆっくりと頭かぶりを振つた。

「ガングニールは君にこそ相応しい」

ガングニール。北欧神話にて語られる、担い手に勝利をもたらす神槍。人と人の心を繋ぐ響こそ、まさにその適合者だ。

マリアの言葉に、響は特になにも言わずに頷く。託された側が、託す側に文句を言ったりするのは筋違いだ。

「だが、月の遺跡を再起動させてしまった……………」

「バラルの呪詛か」

「人類の相互理解は、また遠のいたってわけか……………」

月の落下を食い止める為とはいえ、人類の相互理解を阻むバラルの呪詛は未だ健在。これから先も、人間は自分達の考え方の齟齬そごから争いを繰り返す事となつてしまった。

「……………へいき、へっちゃらですッ！」

しかしそれを、響かのじよは軽く笑い飛ばした。

「だってこの世界には、歌があるんですよッ！」

たった一つの歌でも、世界中の人々の心を一つに合わせる事ができた。それができたからこそ、今の自分達がここにいます。

「響……………ッ！」

「歌……………デスカ」

響の言葉に、誰もが笑顔で頷く。

「立花響。君に出会えて、よかった」

これからマリア達はケアンやウエルと共に、武装集団『フィーネ』としてテロリスト活動を行った罪を裁かれ、服役する事となる。もしかしたら、これが今生の別れになるのかもしれないというのに、彼女達の間には、それを悔やむ雰囲気は流れていない。

またいつか会える。なんとなくだが、そう感じていたからだ。

「……………いつか人は繋がれる……………。だけど、それはどこかの場所でも、いつかの未来でもない……………」

敵対していた両者が、まるで長い期間を共に戦ってきた戦友であるかのように語り合う様子を遠巻きで眺めていたフィーネがポツリと呟いた。

統一言語を失い、理念の違いから争いを繰り返すようになってしまった人類。バラルの呪詛から解放されない間、人類が一つになるという可能性は皆無だと思っていたが、その考えは間違っていたようだ。

「本当に、末恐ろしい子ね。あの子は」

いつ如何なる時も、『自分達はわかり合える。繋がれる』と信じて疑わない少女。自己犠牲精神の塊というのは少々心配だが、それも彼女とつながった仲間達がなんとかしてくれるだろう。

そんな姿を見ていると、長年、人と繋がる事をせずに、孤独に統一言語を取り戻そうとしていた自分が恥ずかしくなってくる。だが、それ以上に、フィーネは今を生きる彼女達をとても誇らしく思う。

「きつと、大丈夫よね。あの子達なら……………」

「ああ、彼女達ならば、バラルの呪詛程度、問題ないだろう」

傍らに立つ弦十郎に頷き、よし、とフィーネは頬を叩いて気合を入れ直す。

「私も負けてられないわね。いつか必ず、統一言語を取り戻して、あの御方と再会してみせるわ」

「その意気だ、了子君。子どもばっかにいい格好はさせられないからな」

二人は顔を見合わせ、彼女達に負けていられないと笑い合うのだった。

「————大道克己。これを」

そこから少し離れた場所。克己と共にフロンティアを脱出していたケアンは、彼にT3イクシードメモリを渡していた。

「イクシードメモリは私専用で作られたメモリだが、フィーネに頼めばお前も使えるように改造してくれるだろう。私の代わりに、それを

使ってやってくれ」

「どういう風の吹き回しだ？ いきなり渡されても、使う気にはなれないぞ」

至極当然な返事をする克己に、ケアンはなにも握られていない手を見下ろす。

「私は力の使い方を間違え、ラックドライバーも失った。最早、イクシードへの変身は叶わない。正しい力の使い方を知っているお前なら、それを有効活用してくれるだろうと判断しただけだ。判断はお前に任せる。使う気が無いのならこの場で砕いてもらっても構わない」
「……………それなら」

T3イクシードメモリを握る力を強めた克己に、彼はそのメモリを使う気は無いと判断したケアンは、少し名残惜しさを感じながらも、その事実を受け入れようとする。

「フィーネ」

「え？」

「ケアンからの贈り物だ」

だが、克己はそのままT3イクシードメモリを砕こうとせず、フィーネに投げ渡したのだった。

訳も分からずに受け取ったフィーネと、なぜ彼女に渡したのかと克己を訝しむケアン。両者の視線を受けながら、克己は口を開く。

「お前とはここまでは、とは思えなくてな。もしもの可能性に賭けて、フィーネに渡しておくのもいいかもしれない、と思ったままで。フィーネ、後で俺のロストドライバーを貸す。こいつが、また戻ってきた時に使うやつを作っておいてくれ」

「……………なるほどね。いいわ。完成を心待ちにしていなさい」

納得したように笑ったファイネが、T3イクシードメモリを懐にし
まったのを確認してから、克己はケアンを見る。

「道具としてのお前は、俺が殺した。これからは、一人の人間としての
ケアン・デイクスとして前に進む事だな」

「……………敵わないな、お前には。本当に」

そろそろ連行される時間になる。

マリア達に声をかけに行った自衛隊員の姿を見てそう思ったケア
ンは、最後に、と克己に手を差し出す。

「また会おう、大道克己。私を殺してくれた男」

「また会おう、ケアン・デイクス。いつか、共に戦う日に」

握手を交わし、ケアンはマリア達と共に連行されていった。

—————これにて、特異災害対策機動部二課と武装集団
『ファイネ』の戦いは終結した。

古代の杖は、古代の負の遺産が敷き詰められた宝物庫と共に世界の
外側へと隔離され、日本政府が米国政府に情報隠蔽の事実は無く、ま
たF・I・S・という組織も存在しなかったと公表した事で、口封じ
の為に米国政府に始末されかけていたマリア達の罪状は消滅。マリ
ア達は今後、国連指導の特別保護観察下に置かれる事となる。また、
施設に残されていたマリア達と同じレセプターチルドレンは、国際社
会からの批難を恐れた米国政府は対応を一転。監禁されていた子ど
も達は解放、保護という形で救出される事となった。

ウエルは左腕をネフィリムと同質化させたが故に『消滅を免れたネ
フィリムの一部』として異端技術に関連する危険物、即ち『物』とし

て扱われ、それらを保管する海底施設《深淵の龍宮》に隔離される事になり、同じく世間から見れば『物』であるアンドロイドのケアンも同様に、そこに隔離された。

——そして、現在。

「翼さくんツ！ クリスちゃんツ！」

人々の想いを背負い、世界を救った少女達は、いつもと変わらぬ日常に戻っていた。

「聞いてくれ、立花。あれ以来、雪音は私の事を『先輩』と呼んでくれないのだ……………」

「だからあッ！」

翼はフロンティアでの戦いの際、自分を『先輩』と呼んでくれたクリスに、これからもそう呼ばれたかったのだが、変なところで意固地になってしまうクリスが恥ずかしがって『先輩』と呼んでくれない事に不満を抱いていた。

それを聞いた響はニヤニヤしながらクリスを見る。

「なにになに〜？ クリスちゃんつてば、翼さんの事、『先輩』つて呼んでるの？」

「ちよつと、響つたら……………」

「いい機会だから教えてやる……………ッ！ あたしはお前より年上で、先輩だつて事をツ！」

今にも響に殴りかかろうとしたクリスを見かねた翼がクリスの腕を掴み、響と一緒に登校してきた未来は響をクリスから引き離す。

「二人ともそのくらいにしておけ。傷も癒えてないというのに……」

「へへへ……」

あの戦いが終わり、日常に戻ってはいるが、まだ傷は完全に治癒していない。ノイズの被害はしばらくは出ないだろうと考えられているが、万が一という事もあるが、その場合は克己達が出動してくれる事になっている。彼らが頑張ってくれるのだから、自分達は傷を癒すのに尽力すべきだろう。

「ねえ、響」

「ん？」

「体、平気？ おかしくない？」

「心配性だなあ、未来は。へへ、私を蝕む聖遺物は、あの時全部綺麗さっぱり消えたんだって」

プリズムドーパントと化した未来との戦いで、響は胸の GANG ニールを完全に除去する事ができた。これでもう、響は GANG ニールの浸食に苦しむ事は無いし、人ならざる『なにか』になる事も無い。

ちなみに、未来も未来で神獣鏡シエンシヨウジンの装着や、プリズムドーパントに変身した後遺症などが心配されていたが、しばらく安静にしておく程度で問題は無いと判断されている。

響のいつも通りの笑顔を見て、これなら大丈夫、と未来が安心したように微笑む。

「でもね、胸の GANG ニールは無くなったけれど……、奏さんから託された歌は、絶対に無くしたりしないよ」

自分の命を賭して、見ず知らずの響たにんを救った、GANG ニールの装者の意志は、決して消えない。彼女の意志は、今も響の中で煌々と輝いている。

「それに、それは私だけじゃない」

空を見上げ、自分達を照らす太陽を掴むように拳を握る。

「きつとそれは、誰の胸にもある、歌なんだ………ツ！」

誰もが、誰かから託された願いを胸に生きている。それは決して変わらない、世界の真理なのだ。

——幸運も不運も運んでくる風が吹き続ける街。その場所の象徴するシンボルタワーの前で、二つの影が交錯する。

片や、とある二人の探偵が身も心も一つとなった究極の戦士。片や、禍々しい爪を持つ、ところどころが霧のようになっている怪人。

両者の意志に賛同した仲間達は既に力を使い果たしており、黙って自分の信じる男達の勝利を信じて、彼らの戦いを眺めている。

「ハアッ！」

「ヌンッ！」

戦士が振るった刃を打ち払った怪人の爪が火花を散らし、後退った戦士に追撃を仕掛けようと霧状の爪を振るう。しかし、それは戦士が咄嗟に動かしした盾によつて阻まれる。

互いの攻撃が阻まれ、両者は一旦距離を取る。

両者共に、その身に何十もの攻撃を受けてきた。これ以上続けても、今のような結果になる事は明白。

—— 次章 『純然魔導錬金アルケミック・カルト』 ——
ターナル&W 純真なる騎士と魔法少女 ——

G 編設定集

【フェイトシンギュラー・ガングニール（覚醒）】

響が神獣鏡（シエンシヨウジン）を纏い、そしてT3プリズムメモリを使用してドーパントとなった未来を救う覚悟を決めた事で覚醒した姿。

所有者の精神に作用されて強化されるジョーカーの力が大幅に強化され、響がなにかを成し遂げようとする強い意志に呼応して、際限なく彼女の戦闘力を高めていく。限界に到達する度にそれを乗り越えていく響の精神に影響されているが故に、戦闘力増加に天井は無く、場合によってはエクストライブモードをも凌ぐ力を発揮する。

【天羽々斬・翼風刃（覚醒）】

自分には居場所が無いと考えているクリスに、彼女には帰る場所があり、また彼女がしたい事は自分も手伝うと教えた翼に、T2サイクロンメモリが呼応し、覚醒した姿。

一撃一撃に暴風を纏うようになり、それを鎌鼬に変えて遠距離攻撃として使用する事も可能。風力の制御も可能で、味方を巻き添えにしないように調整したり、味方を護るように動かしたりする事も出来る。また、攻撃の際には風のブーストをかけて速度と威力を倍増させる事も可能であり、これは移動の際にも使用できる。

通常武装は野太刀だが、それを分解して二刀流で戦う事も出来る。

【ケアン・ディークス】

元F・I・S所属の青年。感情に乏しく、基本無表情。情け、慈愛というものを知らず、排除すべき障害は顔色一つ変える事無く取り除く。それが人間であろうと躊躇わずに相手の命を奪う彼の在り方にマリア達は難色を示している。

……………というものが、二課と出会う前の彼の情報である。現在の彼は些細ではあるが、人の心というものに触れ、以前までの冷酷さは鳴りを潜めている。目的遂行の為であれば無慈悲に事に当たって

いたが、今では自分達に無関係な一般人を巻き込む事は極力避けたいと考えている。それ故に、かつては人殺しをしてもそれに対する責任を感じていなかった彼に難色を示していたマリア達も、彼を信用するようになった。

その正体は、ヴィクター・デイクスが孫の姿を模して作り上げたアンドロイド。本物のケアン・デイクスはアルビノ・ネフィリムの暴走事件が起きる前に交通事故で亡くなっている。分け隔てなく他者と接し、24歳という若さでありながらF・I・S・最高の頭脳を持つとされた祖父の助手を務め、さらに元SWAT隊員であった両親の才能を受け継ぎ、研究員という役職には似合わぬ実力も備えているという、『文武両道』を体現したかのような男。

アンドロイドの方のケアンは、『ネフィリムの細胞組織とロボットの電子回路を同一化させ、ロボットを媒介に命令を送る形でネフィリムを制御する』という目的の下作り上げられた存在であったが、セレナがアルビノ・ネフィリムを鎮めた際に電子回路に謎の異常が生じ、機能を停止。ナスターシャがマリア達を連れてF・I・S・を出奔するまでの間、F・I・S・の奥底で再起動の時を待ち続けていた。この時にケアンが起こした謎の異常とは、自分の命を投げ打ってアルビノ・ネフィリムの前に立ちはだかったセレナの心情を理解しようとしたが、当時の彼にはあまりにも理解できないであり、エラーが生じてしまったからである。

現在、ケアンはウエルが收容された《深淵の竜宮》にて嚴重な監視下に置かれているが、彼に脱獄の意志は無く、フロンティア事変で目にした装者達の命の輝きを思い返し続けている。

【仮面ライダイクシード・イクシードフォーム】

スペック……………身長、200cm

体重、88kg

パンチ力、8t

キック力、15t

ジャンプ力、200m

走力、100mを2.8秒

ケアン・デイークスが、財団Xが開発したT3イクシードメモリとラックドライバーで変身する、仮面ライダーイクシードの通常フォーム。

戦闘を重ねるごとに外装の強化、戦闘力の向上、受けた攻撃への耐性の獲得など、変身者の脳内容量が追い付く限り進化し続ける。常人であれば絶え間なく脳に流れ込んでくる多量の情報によってイクシードの進化に追いつけないが、最高峰のAIとして設計されたケアンはその進化のスピードに追いつく事ができるため、ケアンのみが変身できる仮面ライダーとなっている。

胸部装甲から他のガイアメモリの記憶を取り込む能力を持ち、G編では二課が回収し損ねたT2ゾーンメモリを取り込み、その能力を獲得した。取り込まれたメモリは変身解除後、自動的に排出されるが、任意で排出する事も可能。

必殺技はマキシマムドライブのエネルギーを宿した拳を叩き込み、直撃と同時に爆発させて相手を吹き飛ばす『ブロークンイクシード』。同名のキック技が存在する。

【仮面ライダーイクシード・フロンティアフォーム】

スペック……………身長、210cm

体重、95kg

パンチ力、20t

キック力、28t

ジャンプ力、250m

走力、100mを2秒

ケアンがT3フロンティアメモリを使用して変身する、仮面ライダーイクシードの最強フォーム。

カスタディアンが建造した星間航行船フロンティアの記憶を力に換えており、宇宙空間での長時間の活動が可能。また、最高速度は光速を超えるが、その速度で移動してしまうと地球そのものの存在が危ういので常にリミッターがかけられている。

本来、仮面ライダーイクシードとは神の領域に至る事を前提に設計されたライダーシステムであるので、この姿こそ、イクシードの本当の姿とも考えられよう。

T3イクシードメモリを使用していないので戦闘中に進化する事はないが、既に二課との戦闘で十分な戦闘データを獲得しており、フロンティアフォームに変身しても絶大な力を得るに至った。逆に言えば、十分な戦闘データを得られていない状態でフロンティアフォームに変身した場合、そのスペックは大幅に弱体化してしまうという事である。

必殺技は『エタニティフロンティア』。イクシードフォームでの必殺技は拳に纏わせたエネルギーを攻撃と同時に破裂させて相手を吹き飛ばすものだが、こちらの場合は攻撃直後に相手の体内に注入したエネルギーと、新たに充填された拳のエネルギーを同時に爆発させ、相手を体外からも体内からも破壊する、致命の一撃を与えるというものとなっている。イクシードフォームと同様、同名のキック技が存在する。

【仮面ライダーイクシード・ネフィリムフォーム（没案）】

没案であるが故にスペックについては考えていないので、もしこれが存在したら、という仮定で説明する事とする。

もしウエルがT3フロンティアメモリの使用を考えず、ネフィリムの心臓から作り出したT3ネフィリムメモリをケアンに使わせていたら、という形態。取り込んだ聖遺物の力を行使、それがシンフォギアシステムとして運用されていれば、その武器をも使用する事ができる。

フロンティアに到達しなければ完成しなかったT3フロンティアメモリと違い、既に手元にあるネフィリムの心臓から作っているの
で、二課と『フィーネ』が初めて対峙した頃から所持している。

イクシードフォームよりも強力な力を発揮できるが、聖遺物の存在を感知すると、なんとしても手に入れ、捕食せんとばかりに暴走する危険がある。この形態が存在するif世界では、二課と『フィーネ』両

方の装者が彼によって捕食され、残された唯一の対抗手段であったN E V E Rやフィーネも敗北するという道順を辿っている。

この状態の彼はフロンティア浮上後、自らの所有者であるウエルが世界を導くのに不相応の人間であると判断し、殺害。彼が所有していたソロモンの杖を手に入れ、ネフィリムの性質を利用しフロンティアを支配下に置いている。

数多の聖遺物、フロンティア、そしてソロモンの杖を手中に収めながらも、『月の落下を食い止めねば地球が危ない』という事実を理解しているケアンは、本来ならば歌の力によって生じるはずのフォニックゲインを未知の方法で生み出し、ウエルが未来に与え、後にケアンが^{シエンシヨウジン}神獣鏡と奪ったT3プリズムメモリの力でフォニックゲインを倍増、照射する事で月の公転軌道を修正させている。

だが、超常の力を持つ存在を、各国の主導者達は看過しなかった。いずれその強大な力が我々に向けて振るわれるかもしれない、そう考えた各国は、最新鋭の技術を用いてケアンのいるフロンティアを攻撃した。それが、逆に自らの破滅を招く事も知らずに……………。

攻撃を受けたケアンは、武力による侵攻は、同じ武力によって迎撃すべし、と判断。現代の科学技術では到底叶わぬ古代の技術を結集し、各国を攻撃、殲滅にまで追い込んだ。

武力による支配を正しいとは判断していないが、圧倒的な力の前には誰もが従属せざるを得ない、という事も理解していたケアンは、今後圧倒的な武力の下、世界を支配していく事となる。

その後起きるであろう欧州の深淵より来たりし錬金術師や、彼女が所属していた結社との抗争においても勝利した彼は、最早アンドロイドというよりも、世界を管理する『装置』と呼んでも相違ない存在と化している。

武力による支配。恐怖による統治。絶対者に従属を誓い、争いが無くなった世界。

己が築き上げるその世界こそが『真に在るべき世界である』と定義づけ、それがかつて、『武力による支配は正しくない』と判断していた頃の自分と矛盾しているという簡単な事に気付かない彼ではないが、

これこそが一番早く世界をまとめられるという考えに至っている。開き直った、とも言えるだろう。

彼は本編の彼と違って、自分に『心』の輝きを教えてくれる者が傍にいなかったため、人間には心があるという知識を備えてはいるが、あくまで知識として保有しているだけであり、それを学ぼうという意思は持ち合わせていない。

心を知るという事は弱さを手に入れるという事。彼は完全なる統治を行う己に、『弱み』を作らせるであろう心を不要と判断したからだ。

もしこの世界の彼が本編の自分を見れば、彼は心を学ぼうとしている異世界の自分を嘲笑し、『装置に心など不要』と即座に切り捨てるだろう。

文字通り、デウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神と化した彼は、己が存在する世界を支配した後も、その支配欲は衰えていない。今自分がいるフロンティアは、自分よりも高次元の存在が造り出した船だ。ならば、彼らも支配しよう。支配すべき者はまだいる、という考えに行きついた彼は、ついに神々にすらその牙を剥いた――

戦姫絶唱しないシンフオギア（彼方へ翔ける神船編）

——ケータリング——

マリア「ケータリングッ！」

ケアン「日々食事を取らないと生きていけないとは、人間というのは不便だな」

マ「そんな事言つてないで、貴方も手伝いなさい。あ、わかつてると思うけど、ちゃんと栄養バランスが取れるように確保するのよ」

ケ「了解。……………それにしても」

マ「？ なにかしら？」

ケ「仲間の体調を気遣つて食料を確保していくその姿。これを世間では『オカン』と呼ぶのか、と思つてな」

マ「お、オカン？ なに言つてるのよ。私はママ達の体を気遣つているだけ。ほら、さつさとタップパー持つ」

ケ「仕方ない。ここぞという時に栄養失調で倒れられても困る」

マ（充実したケータリングに巡り合えた時、アイドルやってよかった、つて思えるわね……………）

ケ（マリアをオカンと仮定した場合、さしずめ私はそれに付き合わされる『旦那』、という事になるのだろうか。……………ふん、馬鹿馬鹿しい。私は彼女達の道具だ。人と結ばれるなど、あり得はしない）

——護衛こそ我が務め——

切「うおわあッ!」

ケアン「？ 切歌か。こんな夜更けにどうした」

切「それはこつちのセリフデスよッ！ まさか、こんな時間まで巡回デスか？」

ケ「いつ侵入者が現れるかもわからん。その時に早急に対処できるようにしているまでだ。それで、私の質問に答えてもらおうか」

切「ト、トイレデスよ。恥ずかしいので言わせないでもいいです」

ケ「了解した」

切「……………なんでついてくるデスカ」

ケ「護衛だ。用を足している間に襲われてしまったら大変だろう。護衛という名目でついていくので、問題はないだろう？」

切「問題大ありデスよッ!? え、なんデスカ? もしかしてアタシ、ケアンに監視されながら用を足す事になるんデスカッ!?!」

ケ「お前が望むなら、その通りに……………」

切「絶対望まないデスよッ! アタシを変態だと思ってるんデスカッ!?!」

ケ「では、付近にて待機させてもらう。怪しい音が聞こえ次第、飛び込ませてもらうが」

切「できればアタシの事なんて気にせず巡回を続けてほしいデスが、認めてくれないデスよね……………」

ケ「もちろんだ」

切「ただいまデス……………」

調「おかえり、切ちゃん。……………どうしたの? なにか嫌な事でもあった?」

切「……………調。お手洗いは出発前に必ず済ませておくデスよ」
調「え? う、うん。わかった」

別種の恐怖

武装集団『ファイーン』がアジトにしていた街はずれの施設の場所を突き止める為、彼らと関わっていると疑われているヤクザの事務所に来た緒川と剛三と京水。

緒川「司令からの指示ですので、殺しはしないでくださいね。それなりに付き合いが長いので、貴方達をしょっ引きたくはないので」

剛三「雇い主の指示にはちゃんと従うさ。気絶程度に済ませてやるぜッ!」

京水「じゃあ、行きましょ」

三人は事務所に侵入し、突然の訪問者に驚いたヤクザ達に緒川が武装集団『フイーネ』と関わっているか、と訊ねた結果、血相を変えて襲い掛かってきた。

それを、三人は持ち前の身体能力で迎え撃つ。

緒「どうやら当たりみたいですね。あそこの金庫、気になりませんか？」

剛「こいつら、ちらちら見てるもんな。あれで間違いないだろう。なあ、京水？……………京水？」

京「中々いい体つきしてるじゃなあい♪ ワタシ好みの男ねッ！このままお持ち帰りしたいところだわッ！」

ヤクザ「な、なんだこいつッ！ 気持ち悪いッ！」
京「くくねくねくくねくく♪ 当たらないわよッ！」

近寄ってくる京水に何度も拳を突き出すが、それは全てひらりひらりと躲され、ついにヤクザが京水に捕まる。

京「うくくんッ！ 見れば見るほどいい体つきッ！ さあさあ、とつと邪魔な服脱いで、もつとワタシに貴方の体を見せてッ！」

ヤ「ひっ、ひいひい……………ッ！」
剛「見なかった事にしよう。同じ男として、あいつには同情せざるを得ないけどな」

緒「激しく同意ですね。今京水さんに組み伏せられている人が自分だったらと考えるとゾツとします」

————— お互い様じゃん —————

ヤクザを殲滅し、金庫の前にたどり着いた三人。

剛「しっかしお前、まさか忍者だったとはなッ！ なんだあの動き。人間業じゃねえだろ」

緒「あくまで末裔で、兄には負けませんがね。……………しかし、こ

れをどうやって開けましょうか。彼らに聞いてもいいのですが、少し時間がかかりそうですね」

剛「あん？ なに言ってるんだ、緒川？ こんなのはな、力業で解決すんだよ」

緒「え？」

剛「見てろよ」

拳を軽くスナップしてから、剛三は「オラアッ！」と気合を入れた叫びと共に拳を突き出す。拳は強固な金庫の扉など知らんとばかりに扉をぶち抜き、そのまま内側から金庫を開けるのだった。

剛「うしッ！ これで解決だな」

緒「貴方も大概じゃないですか」

京「言うだけ無駄よ。剛三ちゃん、人間鍛えればこれくらいやれる、って考えてるから」

龍宮の牢獄にて

ケアン（共に戦う日に、か）

《深淵の龍宮》に設けられた収容室の中で、ケアンは克己が別れ際に口にした言葉を思い浮かべる。

彼にとっては、あくまで勘に過ぎなかったのだろうが、その一言は、自分にとっては嬉しいものだった。

道具として在り続けた自分を殺してくれたあの男は、微かであろうとも、自分と共と戦う日を望んでくれているのだろう。ならば、自分も望もうではないか。

『心』を学ぼう。人という生き物を理解しよう。そうすればきつと、ナスターシャの願う『自由な世界』を築けるはずだから。

ケ（ではその日まで、私はこの牢獄で待つとしようか）

人と違って疲労を感じず、いつまでも思考をフル回転させる事も出来るケアンにとって、この海底牢獄のセキュリティを突破し、脱獄する事は容易いが、そんな事をして一寸の得にもならない事は重々承知している。

いつか、この身が解放されるその日まで、ケアンはこの地に腰を据える事にした。

——予期せぬ来訪者——

計画完遂への準備は着々と進みつつある。

シンフォギアシステム、ライダーシステム、ガイアメモリ、ルナアタック、フロンティア事変………それらの情報は結社と、そのスポンサーの座についている財団の支援によって容易に集まり、それらも自らの策謀に組み込んだ。

居城の建造は未だ完了していないが、そもそもあれはトリガーパーツ無しには完成しない代物。今は後回しにしておいていい。

自らの心象をモチーフに設計した終末の四騎士はナイトクォーターズ一体を除いて問題なく活動している。いつ出撃しても大丈夫だろう。だが、それでは足りない。相手がシンフォギア装者のみならばいざ知らず、仮面ライダーやドーパントも戦線に加わるとすれば、彼女達だけでは心許ない。

故に、目覚めさせねばならぬ。彼女達と同一の存在ではない——
——最後の騎士を。

扉の前に立つ。この先にある部屋の中心に浮かぶ氷の棺の中で、彼の騎士は眠っている。

数百年ぶりの再会だ。見た目こそ変わらないが、それなりに精神は成熟している上、今は彼を含めた騎士達の長。威厳を以て再会を喜ぼう。尤も、そんな自分を見たところで、『なにやっつんだお前』と、小馬鹿にしたように笑うのだろうか。そして、それもそうだ、とばかりに笑う自分の姿も想像できてしまい、思わず頬が緩みそうになる。

(……………いかにいかに。オレは成長したんだ。いつまでも子ども扱いされて堪るかッ！)

緩んだ頬を叩いて気を取り直し、深呼吸する。肺に溜めた息を思いつき吐いて、意を決して扉を開けると――

「――どなたですか？」

首元に刃を押し当てられた。あまりにも唐突な出来事だったため、まるで反応できなかった少女が、自分に刃を押し当てるのは何者か、と視線を動かす。

薄汚れ、ボロボロになったローブに隠された、収まっているべきものがない眼窩。まさしく、伝承にて語られる『死神』と呼ぶに相応しい相貌を備えたそれが、両手で持った鎌の刃を少女の首元に押し当てていたのだ。

「ヤメロ、ソイツガコノ施設……………施設デイイノカ？」

……………マアイイ。トニカク、ソイツガコノ住人ダロウ。如何ニ主人ヲ護ル為トハイエ、無益ナ殺生ハ許サレナイ」

死神の行動を諫めたのは、全身が鋼鉄で構築された、ロボットのよくな怪人。背中からは一對の鋼鉄の翼のようなものが生えており、その口からはエコーのかかった声が発せられている。

鋼鉄の怪人に諫められた死神は「これは失礼しました」と短い謝罪と共に少女の首元から鎌を離す。

「ご主人様、我が無礼をお許しただきたい」

「構わん。用心深いのはいい事だが、たまには気を抜いてもいいと思うがね」

片膝をつく死神に返事を返したのは、少女の視界に映る鋼鉄の怪人ではなかった。

その時、少女は、彼が眠っているはずの氷棺の中に、彼の姿が無い事に気付いた。

「貴様ら、あいつを……………エルリンをどうしたッ！」

「エルリン？ ……………ああ、この体の持ち主の事か」

氷棺の背後から、なにかが現れる。

幼い少女を抱えているそれは、『異形』の一言に尽きた。

陽炎の如く揺らめく真紅の双眸に、ところどころが霧状になっている怪人。死神が主人と仰ぐのがこの怪人であるのなら、この禍々しさにも納得がいく。

「嬢チャンノ容態ハ？」

「力をかなり使ってしまったているが、命に別状はない。休めば回復するだろう」

「貴様ら、いったい何者だッ！」

鋼鉄の怪人の問いかけに答えた異形の怪人に、少女が叫ぶ。彼女の叫びを聞いた異形の怪人は鋼鉄の怪人に抱えていた幼女を手渡してから、心臓付近に手を伸ばすと、その姿が人のものへと変わる。

ところどころが銀色に変色している蒼髪に、精悍な顔立ち、そして、ライダースーツに似た衣装に身を包んだ男性。それだけは少女の記憶にある彼と一致しているが、ただ一点、目の色が、本来の黄緑色ではなく、黒色になっているという違いが見受けられた。

「我らは『ラメンター』。あらゆる命に平等を与える者達だ」

予期せぬ異世界からの来訪者は、自分達をそう名乗るのだった。

純然魔導鍊金アルケミック・カルト —— エターナル&W 純真なる騎士と魔法少女 ——
Wの参戦／奇跡の殺戮者

「二人共、新しい司令室には慣れたようだな」

「ええ。二課の時の癖が抜けきらず、時々戸惑う事もありますけどね」

弦十郎に、オペレーターの藤堯と友里が苦笑して返す。

彼らがいる司令室は、今まで慣れ親しんできた二課仮設本部のそれではない。二課として活動していた当時から考えられなかった、最新鋭の科学技術を用いられて作られた、新たな司令室である。

では、なぜ彼らがそのような場所にいるのか、というと、それにはちゃんとした訳がある。

世界を巻き込み、一時は地球を滅亡の危機にまで陥れたフロンティア事変解決後、国連は異なる空間の彼方に消えたネフィリム・ノヴァが取り込まなかったフロンティアの残骸を回収すべく、遙かな宙そらへと調査団を派遣した。

世界から選ばれた精鋭を用いて行われた調査は滞りなく進み、ウエルによって打ち上げられた制御室内にいたナスターシヤの遺体回収にも成功したが、帰還中にシャトルがシステムトラブルを起こし、操作不能になってしまったのだ。

万事休すかと思われた彼らを救ったのは、正式に出動許可を受けた二課の装者達とNEVER部隊から派遣された克己、剛三である。

彼らの活躍により、調査団員が死亡し、フロンティアの残骸をナスターシヤ諸共に失い、さらには落下による甚大な被害が起きるという最悪の事態を防ぐ事ができた。

その代償としてか、世界二位の高度を誇っていたK2が三位に下方修正されてしまったのだが。

このシャトル救助の一件により、特異災害対策機動部二課は正式に

国連直轄下にて、超常災害対策機動部タスクフォースとして再編成される事となる。

『Squad of Nexus Guardians』——
略称『S. O. N. G.』。それが今の二課かれらの名である。

「シンフォギアを扱う私達に相応しい組織名ですが、シンフォギアシステムを初めとする異端技術を目の届く所で管理したいという国連の本音も透けて見えますね」

「それだけじゃなく、こつちにはライダーシステムやガイアメモリもありますからね。国連が見逃すはありますがありませんよ」

NEVER部隊が使用するガイアメモリは、地球の記憶そのもの。中にはそれ一本で街一つを壊滅状態にまで追い込めるものまで存在するのだ。しかもNEVERのリーダーは部下のものを除いても、十二本のガイアメモリを所有しているのだ。それを野放しにするほど、国連も甘くはない。

「お上の思惑など、どうでもいいさ。我々二課が国連直轄のS. O. N. G. と再編成される切っ掛けとなったシャトル救出任務。ナスターシャ教授の亡骸を帰す為という、些か私的な目的もあったが、実際にあの事件の持つ意味は大きかった」

S. O. N. G. として活動する前の二課は、基本日本国内でしかその力を行使できなかった。しかし、国連直轄組織となった今では、国際的な災害や事態に対処できるようになった。そう考えれば、国連直轄の立場というのも悪くない。

「半年以上ノイズの観測がされなくなっているとはいえ、異端技術による脅威が完全に消えたわけではない」

ネフィリムをノイズの本拠地である宝物庫に閉じ込めた事でノイ

ズによる被害はもう起こらないだろうと予想されているが、油断は禁物である。

ウエルはソロモンの杖、ネフィリムを用いて世界を自分のもののように企んだ。聖遺物にはそれを可能にする力がある。あのような考えを持つ人間が今後現れないとも限らない。用心するに越した事はないだろう。

「俺達がすべき事は、人々が安心して笑って、飯食って、幸せな夢を見る事ができる、そんな世界を護る事だッ！」

その言葉に二人が頷いた直後、自動開閉式扉が開いてフィーネが響達を連れてやって来る。

「こんにちはッ！」

「響君達か。メデイカルチェックの結果はどうだった？」

「心配無用だぜ、おっさん。目立った異常はないってよ。な？」

フィーネ

「ええ、この状態ならいつ出撃しても問題ないわ」

「そうか、ならばよかった。翼がロンドンにいる現状では、動ける装者は君達二人に限られる。克己君達も問題なく動けるが、戦力は多いに越した事はない。……………流石に、調君と切歌君をLINKER無しで任務に当たらせるわけにはいかないしな」

マリア、調、切歌は現在、国連指導の特別保護観察下に置かれている。自由が制限された生活を送らせるのはS・O・N・G。側としては気が引けるが、日本政府の活躍が無ければ彼女達は死刑判決を受けていただろうと聞く。彼女達も殺されるよりはマシだという事で今の状況を受け入れているので、こちらがとやかく言う権利はないだろう。

しかし、適合係数が低いマリアや調、切歌はLINKER無しにはシンフォギアを纏えない。現在、急ピッチでフィーネがLINKER

製作に取り組んでいるが、まだ完成していないようだ。

「心配しすぎなんだよ。少しぐらいの任務でどうにかなるほど、あたしらは柔^{やわ}じやないっての」

「そういえば、調ちゃんも切歌ちゃんも、リディアンに通えるようになってよかったよねッ！ 師匠、ありがとうございますッ！」

「俺はなにもしちやいなさ。ただ、望む環境への切符を用意しただけに過ぎない。リディアンでどう過ごすかは本人次第だ」

「せっかく入った後輩だ。ちゃんと先輩のあたしが面倒を見てやるよ」

可愛い後輩ができた事が嬉しいのだろう。クリスが明るい笑顔を浮かべている。

「そうだな。よく見てやってくれ」

「了解です、師匠ッ！ ……とここでクリスちゃん。この前調ちゃん達とも話してただけど、もうすぐだね。翼さんとマリアさんのライブ」

「ん？ ああ、そうだったな」

そういえば、とクリスは思い出す。

近々、翼がマリアと共にロンドンでライブを行うらしい。既にチケットは完売。流石の人気である。

「クリスちゃんもちろん見るよね？ ね？」

「当たり前だろ？ セっかくのあいつらの晴れ舞台だしな」

「クリスちゃんの家ってテレビおつきかったよね？」

「ん？ ああ、割と大きい方だったかな。それがどうか……………ああ、なるほどね」

なぜそんな事を聞いてくるのか、と考えた瞬間、自ずと答えが導き

出される。

諦念の溜息を吐いたクリスに、響はにんまりと笑うのだった。

—— 駆ける。 駆ける。 駆ける。

横浜港付近で、一枚のローブを羽織った少女………いや、『それ』を少女と定義づけてしまつてよいのだろうか。

人ならざる彼女に、性別というものは無い。見る者がその人物を『少年』と言えば少年であり、『少女』と言えば少女であるような存在であるが、ここではそれを『少女』と定義しよう。

(ドヴェルグⅡダインの遺産………。そして、ライダーシステム………)

公衆電話の影に身を隠した彼女が抱えているのは、その幼い体軀には少々不釣り合いなアタッシュケース。

その中に納められているものがなにか、それを知るのは彼女と——
—— 彼女を追う者達のみだ。

(全てが手遅れになる前に、これを届ける事がボクの償い………)

再び走り出す少女。

真夜中を突き進む彼女の姿を、一人の女性が見下ろす。

「………私に地味は似合わない。だから次は——」

砕けた月を背景に、キメツキメのポーズを取った女性が、作り物めいた瞳で少女を追う。

「—— 派手にやる」

女性が持つ一枚のコインが、月の光を反射して輝いた。

「……………あの時から予想してはいたが」

今日は遂に翼とマリアのライブ当日。全世界に生中継されるので、どうせなら大きなテレビがある家で見たい、という意味が見え見えだった響の態度からわかり切っていた事だが、

「やっぱり、あたしン家かよ」

「すみません、こんな時間に大人数で押しかけてしまいました」

「ロンドンとの時差は約八時間ツ！」

「チャリテイロックフェスの中継をみんなで楽しむには、こうするしかないわけでは……………」

「まっ、頼れる先輩って事でツ！」

「時には先輩として気を利かせるのも必要な事よ、クリス」

現在、クリスの家には響、未来、二人の友人の寺島、板場、安藤に加え、調、切歌、そして驚く事にフィーネがいる。

「てか、なんであんたまでここにいるんだよ。Lin……………仕事の方はどうしたんだ？」

「私とて休みは欲しいわよ。これはその休み時間を有効活用してるだけ。終わり次第、すぐに仕事に戻るわ」

「了子さん、色んな事を教えてくれるんですよ？ 軽くですが、世界中の伝統的な料理や、歴史についても教えてくれました。クリスさんも教えてもらってはどうですか？」

なにやら色々フィーネが話したのはそういう事だったのか、と納得するクリス。

最初こそ、かつてリディアンで響達を追い詰めたフィーネと顔を合

わせた寺島達は警戒心を抱いていたが、響と未来が説得してくれたお陰で警戒心を解く事ができたのである。

調や切歌も、初めは自分達がレセプターチルドレンとして監禁される原因である彼女に怒りを露わにするのではないかと響達は内心冷や冷やしていたものだが、二人は彼女がウエル確保に乗り出してくれたり、自分達の為にLINKERを作ってくれている事に感謝していた。また、彼女の存在が無ければ、自分達は親友とも呼べる者達と出会えなかったとも述べていた。

「あたしは成績優秀なんぞでな。ご教授されるとすりゃ、この馬鹿の方がよっぽどだ」

「うええ〜。こんな時に勉強の話とかしないでよお〜ッ!」

「でも勉強は必要よ、響ちゃん。休み時間ができて、貴女がフリーな時には色々教えてあげるわよ? ………………それにしても、ちゃんと片付けられててよかったわ。整理整頓を心掛けてて感心感心」

「うっせ。仮に散らかっててもちゃんと掃除くらいするからな」

ジュースで満たされたコップを、響達が持ち込んできたお菓子で埋め尽くされているテーブルに置く。

「クリスちゃんも早く座りなよッ! やつと自分の夢を追いかけられるようになった翼さんのステージだよッ!」

「みんなで応援……………しないわけにはいかないよな」

「そしてもう一人……………」

「マリア……………ッ!」

「歌姫のコラボユニット、復活デスッ!」

再び歌姫として芸能界に復帰したマリアの活躍を期待し、調と切歌が今か今かとテレビを凝視する。

それからしばらくしない内に、二人の歌姫によるライブは始まった。

—— ロンドン、テムズ川。

南イングランドを流れ、ロンドンと海を繋ぐイギリスの有名な運河の中心に作られたライブ会場の中心にスポットライトが浴びせられ、そこに二人の歌姫の姿が現れると、観客席から割れるような歓声が上がった。

「—— 遺伝子レベルの」

「—— インディペンデント」

桃色のフリルのついた青白の衣装に身を包んだマリアが手を掲げれば、傍らに立つ、マリアとはフリルの色が異なる衣装の翼も手を掲げる。

「—— 絶望も希望も」

「—— 抱いて」

不安など微塵も感じさせない、自信に満ち溢れた声を響かせる。

「—— 足掻け命尽きるまで」

二人の歌姫による宴の開幕に、会場が熱狂の渦に巻き込まれる。間奏に入り、二人はスモークで満たされた床を歩いていく。華麗な動作で踊る二人が互いの指を合わせるような仕草を取ると同時に、彼女達の背後のモニターが展開し、足元のスモークも消えていく。

奥に広がるのは、ロンドン橋の向こうで空を赤く燃え上がらせる太陽。そして歌姫達の足元に広がるのは、水面。

天候、時間帯、そこに立つべき歌姫達——この三つの要素のうち、どれか一つ欠ければ全てが台無しになってしまうであろう条

件全てを満たした状態で行われるライブは、人々に感動すら覚えさせる。

「ヒカリと飛沫のKiss」

唇に当てた指先を放つような仕草を取ると、彼女達を囲むように無数の水柱が立つ。

「恋のような」

「虹のバースデー」

水柱が崩れると、その欠片が夕焼けの輝きを受けて、二人の頭上に虹を描く。

「どんな美しき日も」

「なにか生まれ」

「なにかが死ぬ」

二人は氷上のスケート選手の如く、水面を滑り始め、ステージを回り始める。

「せめて唄おう」

「I love you」

観客達が二人と声を合わせて叫ぶ。

「世界が酷い地獄だとしても」

二人の背後に七本の水柱が立ち、再び残光を残しながら崩れ落ちていく。

「せめて伝えよう」

「I love you」

再び観客が一緒に歌い、二人はそれを嬉しく思いながら美しい動きで観客達を魅了していく。

「解放の時は来た」

「星降る」

「天へと」

「響き飛ベツ！ リバティソング」

過ぎ去った後に水柱を作り上げながら、バレエさながらの動きで回転して並び立つ。

音楽が止まる。それで開幕の一曲目は終了——馬鹿な、そんなのはあり得ない。

歌には無くてはならないものがある。それがなにか、わからない者はいないだろう。

誰もが待ち焦がれ、誰もがその世界に呑まれる部分。

ここから始まるのは、そう——サビである。

「Stardust」

頭上に広がる星空が輝き、流星が降り注ぐ。

「そして奇跡は待つモノじゃなくて」

この瞬間ときを待っていたとばかりに沸き立つ歓声を浴びながら、翼は蒼色の、マリアは桃色の軌跡を残して水面を滑っていく。彼女達が形作るのは——永遠を意味する『∞』の文字。

「——その手で創るものと………吼えろッ！」

腕を振り上げ、観客達をもつと沸き立たせるべく、二人の歌姫は飛ぶ。

「涙した過去の苦みを」

「レクイエムにして」

自由気ままに飛び回る二人の周りを、色鮮やかな水柱が立ち並ぶ。二人が交差し、一回転して着地。そこから再び滑り出す。

「生ある全の力で」

降り注ぐ流星の中、力強い歌声で歌い、二人の歌姫達は振出しに戻るかのようになび立つ。

「輝けFuture world」

「信じ照らせ」

その姿は、『QUEENS of MUSIC』のライブで歌ったデュエットソングとは異なる、互いに和解し合った者達の間のみ生まれる、絆を体現しているかのよう。

二人の間に苛烈な戦意は無く、在るのはただ、共にこの場に立つ事を喜び合う、友情の絆。

「星天ギャラクシクロス」

頭上に浮かぶ二つの銀河が融合し、X字状の眩い煌めきで歓声が響き渡る会場を照らすのだった

「キヤーツ！ こんな二人と一緒に友達が世界を救った

なんて、まるでアニメみたいだよッ！」
「う、うん、ホントだよ……………」

遠く離れた地で活躍する歌姫に感極まっている寺島に響が照れ笑いを浮かべる。

「やっぱりいいものね、歌っていうのは」
「やっぱり、先輩はスゲエや……………」

背もたれに背を預けたフィーネが慈母の如き笑みを浮かべ、その隣に座ったクリスは翼の万人を魅了する歌声に素直に感動する。

「……………でも、月の落下とフロンティアの浮上に関連する事件を収束させる為、マリアは生贄とされてしまったデス」
「大人達の体裁を護る為にアイドルを……………文字通り偶像を強いられるなんて……………」

だが、調と切歌の顔は晴れていない。
マリアは自分達と同じく特別保護観察下に置かれているが、国連との取引によって、武装集団『フィーネ』の一員として活動していた彼女は『国連所属のエージェントとして潜入捜査を行っていた』という筋書きが与えられ、文字通りの偶像アイドルを演じる事となってしまったのだ。

「……………そうじゃないよ」

かぶり マリアに辛い思いをさせてしまった、と暗い表情の二人に、未来が頭を振る。

「マリアさんが護っているのはきつと、誰もが笑っていられる日常なんだと思う」

エアシャトルに拉致され、そこでマリアと会話した事がある未来は、彼女の優しさに触れた。そんな彼女がアイドルでいる事を嫌がっているとは到底思えなかったのだ。

「未来……………」

「……………そうデスよねッ！」

「だからこそ、私達がマリアを応援しないと……………ッ！」

戦えない自分達に出来る事は、今ある日常を護るべく奮闘しているマリアを応援する事。

戦う力が無くとも、誰かを助ける事は出来るのだ。

その時、響とクリス、フィーネに弦十郎から連絡が入った。

『第七区域に大規模な火災発生。消防活動が困難な為、応援要請だッ！』

「どうやら、楽しい一時はここまでのようね」

「すぐに向かいますッ！」

「響ッ！」

緩んだ表情が一気に真剣なものへと様変わりした響達の姿に、また新たな敵が現れたのではないか、と不安になる未来。

「大丈夫、人助けだからッ！」

唯一無二の『陽だまり』を安心させるように優しく気な声で答える。

そう、嘘偽りなく、これから彼女達が行うのは人命救助――

――人助けだ。

「私達も」

「手伝うデスッ！」

「二人は留守番だツ！　L i N K E Rも無しに、出勤なんかさせないからなツ！」

まだL i N K E Rが完成していない以上、適合係数の低い二人を戦わせられない。

ここにいる装者で動けるのは響とクリスだけなので、現場に急行する二人の後姿に、調と切歌は不満げに頬を膨らませるのだった。

——ライブの余韻に浸る事すら許されずに二人組の黒服の男達が『警護』という名の監視につき、それに不快な気持ちを抱きながら、マリアは様々な衣装を着たマネキン人形が無数に並べられている廊下を歩いていくと、ふと違和感を感じた。

「風……………？　誰かいるのツ!？」

この密閉された空間で、吹くはずが無い風が吹いた。すぐさま臨戦態勢を整えたマリアと黒服達に、どこからか女性の声が聞こえてくる。

「司法取引と情報操作によって仕立て上げられたフロンティア事変の汚れた英雄、マリア・カデンツアヴナ・イヴ……………」

「何者だツ！」

正体不明の声にマリアが問いかけると、それに答えるように一際強い風が吹いた。

ここに置かれているのは、先述した通り様々な衣装を着せられたマネキンの数々。だが、その中で唯一、誰も配置していない存在がいた。

物音を立てる事無く動いた女性が、一番距離が近い黒服の前に降り立ち、後頭部を手を掴んで勢いよく引き寄せる。

不意打ちを受けた事に黒服が気付くも、時すでに遅し。女性は間髪入れずに、彼の唇を奪い取った。

「ん、んんんッ!？」

突然の口づけに男が困惑しながらも抜け出そうとするが、女性はまるで捕らえた獲物を絞め殺す蛇のように、彼の体に足を絡めて逃げられないようにする。

茫然とするマリアともう一人の黒服の目の前で、女性に口づけされた男が崩れ落ちる。その瞳に、命の光は宿っていない。

「や、やめろッ！」

黒服が懐から取り出した拳銃が火を噴く。

音速の勢いで対象を貫くべく撃ち出された無数の弾丸を前に、女性は物怖じせずにスカートを翻す。

すると彼女を護るかのように緑色の風が吹き荒れ、撃ち出された銃弾の動きを操作。一つ残らず黒服に返し、絶命させた。

あつという間に二人のボディガードを殺害した女性はフラメンコを彷彿とさせる優雅な動きでポーズを決める。

「……………纏うべきシンフォギアを持たぬお前に、用はない」

女性はどこか無機質な声でそう言い放ち、大剣を手にマリアに斬りかかった。

『——付近一帯の避難はほぼ完了。だが、マンションに多数の生体反応を確認している』

既に克己、京水、レイカが乗り込んでいたヘリコプターに搭乗して

いた響とクリスは、火災現場に向かっている間、弦十郎から状況報告を受ける。

「まさか、人が？」

『防火壁の向こうに閉じ込められているようだ。さらに気になるのは、被害状況が依然四時の方向に拡大しているという事だ』

「赤猫が暴れていやがるのかッ!？」

普通、火災とは発生源を中心に周囲を広がっていくものだ。それが一つの方向にのみ進んでいるのには、なにか意味があるのだろうか。

『響君は克己君と救命活動に、クリス君は京水君とレイカ君と一緒に被害状況の確認に当たってもらうッ!』

「了解ですッ!」

「……………任せたぞ」

「任されたッ!」

「克己ちゃん、頑張つてねッ!」

「任せろ」

扉を開き、響はペンダントを、克己はT2エターナルメモリを片手に飛び降りる。

「
B a l w i s s y a l l の N e s c e l l n g u n g n i r t r o n
喪失のネセセルグングニロン
「変身ッ!」
『エターナル!』

響は慣れ親しんだ聖詠を歌い、全身に神槍ガングニールのシンフォギアを纏う。克己は『永遠』の記憶の力をその身に纏い、エターナルへと変身する。

「——一点突破の決意の右手」

胸の内から湧き上がる想いを言葉に乗せて、天井を蹴り碎いて響がマンション内に侵入。続けてエターナルも彼女が開けた穴からマンション内に侵入した。

「響、お前は先に行け。俺はこの火を消してから向かう」

「はいッー」

響が友里のナビゲーションの下動き出し、エターナルはこの状況で最適なメモリを選択し、それを起動させる。

『ウエザー・マキシمامドライブ！』

マキシمامスロットにT2ウエザーメモリを挿し込んだエターナルがパチンツと指を鳴らすと、マンションの上空に雨雲が発生し、外部から消火活動を始め、さらに自分の周りにも雨雲を発生させ、スプリングラーでも補え切れない炎を消火し始めた。

「——やはり、シンフォギアを持たない者ではこの程度………。歌を聴く意味もありませんわ」

つまらなそうに言う女性——ファラ・スユーフによって繰り出される斬撃を掻い潜るマリア。ファラの剣術はこの場にはいい翼にも匹敵、もしくはそれを上回るのではないか、と思えるほど冴え渡っており、一瞬でも気を抜けば即あの世行きだ。

だが、それなりに戦いの心得はがあると自負しているマリア。ただ追い詰められているだけでは終わらない。

「はあッー」

上段から振り下ろされた大剣を紙一重で躲し、フアラに延髄蹴りを繰り出した。

素人が見てもわかるほどのクリーンヒット。常人ならば気絶、あるいは脳震盪を起こすレベルの一撃を受けたフアラだが、なんと両目を一回転させただけに留まり、首を動かしたただけでマリヤを頭上へ打ち上げた。

「——しまったッ!？」

自由落下で落ちてくるマリヤの背に、掲げられた大剣の切っ先が向けられる。

このままにもせずにはいられず、マリヤは大剣によって串刺しにされてしまう。回避行動を取れる猶予など無いし、防御したところで貫かれる結末は変わらない。

まさしく、絶体絶命。マリヤの命もここまでか、と思われた——
——その時だった。

蒼き軌跡を描いて振るわれた剣が大剣を弾き、同時にマリヤを何者かが抱えてフアラから距離を取った。

「翼ッ!？」

「友の危難を前にして、鞘走らずにはいられようかッ!」

「……………待ち焦がれていましたわ」

翼の参戦に、ようやく引きずり出した、と妖しい笑みをたたえる。

「貴様は何者だッ!」

剣を構え、いつでも斬りかかれる態勢の翼の前に、フアラは構えにしては大袈裟に思えるポーズを取って答える。

オートスコアラ
「自動人形」

「オートスコアラ………?」

聞きなれない単語に首を傾げる翼に、ファアラが切っ先を向ける。

「貴女の歌を聴きに来ましたのよ」

大剣を手に襲い掛かってくるファアラを、翼は剣を以て迎え撃った。

「——響ちゃん、左手90度の壁を打ち抜いて迂回路を作つてッ!」

「はいッ!」

友里の指示に従って響が壁をぶち抜くと、そこにはハンカチを手元に当てて煙を吸い込まないようにしている住人達がいた。

「見つけたッ! 皆さん、避難経路はこっちですッ!」

響の案内に従い、人々は次々と避難していく。

誰もがどこかから聞こえる歌声に希望を持ち、諦めずに待ち続けていたのだろう。その顔は『もう大丈夫だ』と安心しているようだ。

『響ちゃん、生体反応ラストワンツ! そこより直進した先の突き当りよッ!』

「了解ですッ!」

燃え盛る中、どこかからひんやりとした空気が頬をくすぐり、振り向く。そこには、自分達が侵入した階での消火活動を終えた、雨雲を従えたエターナルがいた。

「克己先生ッ！　ここにいる人達はあそこから避難させたので、そつちお願いしますッ！」

「響は？」

「まだ救うべき命がありますッ！」

「そうか。ならば絶対に救え。どれもこれも、お前が護るべき命だ」

「はいッ！」

笑顔を絶やさず、響はエターナルが雨雲から降らせた雨水で勢いが弱まった炎の中を突っ切っていく。

最後の一人はすぐに見つかった。雨で弱まっているが、それでも未だ燃え続ける火炎の中、階段の隅に蹲っている少年だ。

「ママ……………」

はぐれたであろう母親を求めて倒れかけた少年を抱え上げる。

「絶対に――助けてみせるッ！　だから、生きるのを諦めないでッ！」

この胸に刻まれた、自分の命を救ってくれた少女の言葉を叫ぶと、二人を押し潰そうと天井が崩れ落ちてくる。

だが、そんなのは撃ガン銃ニールの前には飴細工に等しい。

足のバネを使つて跳躍。降り注ぐ瓦礫も、その先にある天井さえも容易く貫き、響は一気に天井から真夜中の空へと脱出するのだった。

「――風鳴る刃……………輪を結び、火翼を以て、斬り候」

二本の刀の柄を合わせ、脚部のアーマーに備え付けられているスラストターを噴射。双刃刀から紅蓮の炎が噴き上げ、一気にフアラとの距離を縮める。

「――月よ、煌めけッ！」

『風輪火斬・月煌』

業火の斬撃を受けたファアラがボックスが積み上げられた場所まで吹き飛び、そのままボックスの下敷きになってしまった。

「やりすぎだッ！ 人を相手に……………」

「やりすぎなものか。……………手合わせしてわかった」

交わした剣戟。常人ではあり得ない身体能力に、先程の技の手応え。それらを視野に入れて考えれば、自ずと答えが出る。

「こいつはどうしようもなく――化け物だッ！」

ボックスが吹き飛び、そこから無傷の怪物ファアラが立ち上がった。

「――うちの子がまだ見つからないんですッ！ まだ救助されてないんです……………ッ！」

救急隊員に泣きながらまだ救出されていないであろう子どもの事を話す女性を見つけた響は、抱えた子どもを彼らに託す。

「お願いしますッ！」

「航ちゃんッ！」

「煙をたくさん吸い込んでいますッ！ 早く病院へッ！」

頑張つて耐えてはいたが、この少年は煙を吸い込みすぎている。急いで治療しなければ、気道や肺が熱傷し呼吸困難に陥ってしまう。

「ご協力、感謝しますッ！」

響に感謝を述べ、救急隊員はすぐさま少年と母親を乗せた救急車を走らせていく。

これで一先ず安心だ、と一息吐きかけるも、まだ火事は収まっていない。

今もあのマンションの中で、克己が消火活動に当たっている。T2 ヒートメモリの力を宿し、火炎を吸収する能力を持つエルナンデイ・ガングニールを装着すれば、彼の手助けができるかもしれない。

思い立ったら即行動とばかりに動き出そうとした矢先、響はゲートの上に立つ少女を見た。

——その姿は、現代の文化に慣れ親しんだ者達からすれば異様に見えるよう。

おとぎばなし 御伽噺に登場する魔女が被るようなとんがり帽子に、身の丈には少々不釣り合いなローブ。だが、幼い見た目とは裏腹に、立ち姿からは大人の余裕というものが見て取れる事から、逆にそのローブこそ彼女に相応しき衣装のよう思える。

マンションを覆う業火を見つめる少女——キャロル・マールス・デインハイムの脳裏に、数百年前の記憶が蘇る。

『それが神の奇跡でないのなら、人の身に過ぎた、悪魔の智慧だッ！』
『裁きをッ！ 浄罪の炎でイザークの穢れを清めよッ！』

理不尽な憎悪が、無実の男を責め立てる。

理不尽な恐怖が、誠実であった男を悪魔に仕立て上げる。

理不尽な祈りが、同じ人間を焼き尽くす。

そこに、一切の邪悪は存在しない。それどころか、この惨劇が『正義』の名の下に引き起こされたものなのだから、人という種族はどこ

までも愚かだと思わざるを得ない。

しかし、男は——イザークはそれを憎まない。それどころか、全てを受け入れてみせようと言わんばかりに微笑んですらいた。だが、それが人々を恐怖に駆らせた。

罵倒は、祈りは、留まる事を知らずに周囲を埋め尽くしていく。

『パパッ！ パパッ！ パパッ！』

遠き日の自分が叫ぶ。自分を取り巻く炎の中、泣き叫ぶ娘を見つけた父は、痛みを感じさせない優しい声で言った。

『キャロル……生きて、もつと世界を識るんだ』

それは、父が娘に託した命題。娘が父から託された課題。

次々と薪の数が増え、イザークを業火の蛇が呑み込んでいく。

『パパッ！ パパあああああッ!!』

『キャロルッ!』

夜闇を照らす炎に叫ぶキャロルを、青年が抱えて走り出す。

彼が消えれば、次は自分達の番だ。悪魔に魂を売った男の血を引く少女と、その居候だった青年。特に青年に至っては、『奴こそがイザークを悪の道に引きずり込んだ悪魔だ』と、謂れない罪を着せられてしまうだろう。

背後から聞こえる怒号を振り切り、遠き日の二人は真夜中の道を走り続けた。

「パパ……消えてしまえばいい記憶」

「ならば思い出さない方がいい。誰にも、辛い記憶というものは存在する」

突然かけられた声に視線だけ動かす。

いつの間にかいたのか、隣には禍々しい相貌を持つ怪人が立っていた。

「お前の最終目的は我々と似通っている。お前が崩れ落ちてしまえば、あの城を動かせる者がいなくなってしまう。それだけは避けなければならぬ」

「……………うるさい。その声で喋るな」

視界の端でも己の存在を誇示し続ける炎にも勝る憤怒を言葉に乗せる。

こことは異なる、だがソロモンの杖を使用して開く事ができるとされる宝物庫とも違う世界からやって来た、と語る彼は、あろう事か最後の騎士の体を奪い取った。キャロルにとっては父親と同じくらい大切な人物だ。いきなり彼の体を奪われて、なにも思わないわけがない。

彼らが来なければ、今自分の隣に立っていたのは、あの男だったはずなのに、なぜこのような事になってしまったのか。

キャロルは信じてもない神に「なぜだッ！」と叫びたくなる気持ちを抑え、この場から去ろうとする。

「そんなところにいたら危ないよッ！」

そんなキャロルに、下部から声がかけられる。響だ。

「……………ッ！ ドーパントッ!？」

キャロルと共に振り向いたドーパントの存在に気付いた響が、すぐに胸のペンダントを握り締める。

NEVERの誰とも違う、正体不明のドーパントを前に警戒しながら、響はキャロルを見る。

傍に両親の姿は無い事から、はぐれてしまったのだろうか。いや、考えたくはないが、傍らに立つドーパントに殺されてしまった、という仮説も立てられる。

「待っててッ！ 今助けるか——」

「——黙れッ！」

今すぐにも聖詠を歌いかけた響だったが、それより先にキャロルが右手を広げると同時、そこに円形に描かれたなにかから突風が吹き荒れる。

「うわあああッ!? え、ええ……………?」

慌てて飛び退き、直撃こそ免れたものの、突風が着弾した地面は見事に穿たれている。

もし回避が遅れたら、という考えよりも、響はなぜ自分は攻撃されたのか、という考えに重りを置いた。

『敵だッ！ 敵の襲撃だッ！ そっちはどうなってるッ!?!』

「敵……………?」

酷く焦った声色でクリスが聞き捨てならない報告をしてくる。

『敵』と言うからには、また新たな組織が活動を開始したという事だろうか。となると、今自分を見下ろす形で立つ少女やドーパントは、もしかして——

「キャロル・マールス・デインハイムの錬金術が、世界を壊し、『万象黙示録』を完成させる」

「世界を……………壊す?」

「オレが奇跡を殺すと言っているッ！」

見上げた先に立つキャロルは、先程突風を発生させた円の中心に描かれていたものと同じ紋章を掌に出現させ、再び響に向けた。

複数出現した円に次々と同じ紋章が刻まれ、一つに重なる。さらに周辺に無数の小さな紋章を作り出す。

眩い輝きの後、何本もの風槍が響を貫こうと殺到し――

「……………ッ!? なにッ!?」

突如響の前に飛び出したなにかによって阻まれた。

「大丈夫かい?」

どこか幼いながらも大人びた、優し気な声。茫然とする響の前には、まるで最初からそこにいたかのように、文房具のグリップで髪を留めた、一人の青年が立っていた。

「よくやった、フィリップッ!」

次にやって来たのは、黒い帽子を被った青年。彼がフィリップと呼ばれた男の隣に立つと、フィリップはキャロルの傍らにいるドーパントを睨みつける。

「どうやら君の勘が当たったようだね、翔太郎」

「災いあるところにドーパントあり、だからな。ようやく見つけたぜ、つがみしんいち津神真一ッ!」

「来たか……………仮面ライダー」

「え? 仮面ライダー?」

ドーパントの言葉に首を傾げる。『仮面ライダー』という単語で連想するのは、今も消火活動に当たっている克己と、現在は《深淵の龍宮》に収監されているケアンのみで、目の前の二人の事は全く知らない

い。

「どこまでもどこまでも、俺達の邪魔をしてくれる……。……。だが、お前達との因縁もどこまでだ」

怒りに紅の双眸を細めたドーパントが、響達と同じ地に降り立つ。臨戦態勢を整えたドーパントに、翔太郎と呼ばれた男は懐から一つのバックルを取り出す。

後ろからしか見えないが、ロストドライバーやラックドライバーと酷似したもの。だがそれらと違うのは、メモリを挿入するスロットが二本存在する事だ。

「半分力貸せよ、相棒」

「ああ」

翔太郎がバックルを腰に当てれば、それはベルトとなって装着される。同時に、フィリップの腰にも同じベルトが巻かれる。

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

「変身ッ！」

フィリップがベルト——ダブルドライバーに装填したサイクロンメモリが翔太郎のダブルドライバーに転送され、翔太郎は手慣れた動きでジョーカーメモリを装填する。

『サイクロンジョーカー！』

「わ、わわわッ！」

フィリップが糸の切れた操り人形の如く崩れ落ち、慌てて響が受け止める。

瞬間、風が吹き荒ぶ。

それはキャロルが振るう暴風とは違う、全てを護り抜く決意の風。あらゆる敵を打ち砕き、風の都を守護し続けた、英雄の意志の表れ。

——緑のライダー？ 否。

——黒のライダー？ 否。

——否。断じて否ッ！

彼らを、彼を、一色で統一する事など出来ようかッ！

そこに立つのは、緑でも黒でもない——二人で一人の仮面ライダーッ！

「——さあ、お前の罪を数えろッ！」

仮面ライダーW——ここに参上ッ！

死神E／絡繰りの騎士団

響の前にWが現れる少し前――

『火災マンションの救助活動は響ちゃんと克己さんのお陰で順調よ』

「へへ、あいつらばっかにいい格好させるかよッ！」

へりから芝生に降り立ったクリス達に友里からの通信が入り、こちらも負けていられないと意気込んだその時、どこからかコインが弾かれるような音が響く。

瞬間、先程まで自分達が乗っていたへりが爆発炎上し、へりの残骸が落下してくる。

「危ないッ！」

『ルナ！』

クリス達の前に飛び出したルナドーパントが両腕を振り回し、彼らに降り注いできた残骸を打ち払っていく。

「なにがどうなってやがんだッ!？」

「……………ッ！ あそこッ！」

何者かの視線に気が付いたレイカが上方へ顔を上げ、クリス達もレイカの視線を追う。

そこには派手なポーズを決める、一人の美女の姿があった。

「この仕業はお前かッ！」

クリスの問いかけに女性は答えず、代わりに五指に揃えたコインを投擲してきた。

間違いなく、宣戦布告。それは、先のへりを撃墜したのは自分だと
言っている事も同義。

「……………こちらの準備はできている」

「……………抜いたな？ だったら貸し借りなしでやらせてもらおう。
後で吠え面かくんじゃねえぞッ！」

売られた喧嘩は買うのがクリスの性分だし、罪悪感など微塵も感じ
させずに人殺しを行った相手を見逃せるはずも無い。

クリスはペンダントを握り締め、レイカはT2ヒートメモリを取り
出す。

「銃爪にかけた指で夢をなぞる
K i l l e r I c h a i v a l t r o n

『ヒートー！』

一つはエネルギーが、もう一つは燃え盛る炎が放つ赤い輝きが二人
を包み込む。

北欧神話に登場する弓術の神、ウルが使用したイチイバルの力を身
に纏い、その手にクロスボウを握るクリスに、地球に刻まれた『熱』の
記憶を宿したレイカ——ヒートドーパントがルナドーパ
ントと並び立つ。

「——鉛玉の大バーゲン」

シンフォギアを纏うや否や、すぐに歌を歌い出したクリスがクロス
ボウから弓を、ヒートドーパントが指先に灯した火炎弾を放つ。それ
を女性——レイア・ダラーヒムはブレイクダンスを連想させ
る動きで躲していき、飛び上がったところを狙って迫ったルナドーパ
ントの腕すらも器用に弾いていく。

明らかに人間離れした動き。その身のこなし——まさしく
人外そのものッ！

「やりやすいッ！」

相手が人外であるのなら、こちらも手加減などせず倒せると言う事だ。

連射速度を上げて矢を撃ち続けるも、レイアは激しくも華麗な動きで躲し続け、それでも自分に当たりかねないものはコインを撃ち出し、的確に相殺させていく。

「ワタシの兵隊ちゃんツ！ 行つてらっしやくいッ！」

レイアを挟む形でルナドーパントが両腕を伸ばすと、そこから出現した数人のマスカレイドドーパント達が一齐にレイアに襲い掛かる。だが、レイアに満足な一撃を加える事すらできず、突き出した拳や振るった足は空を穿ち続ける結果に終わってしまい、レイアのコインに撃ち抜かれて消滅してしまった。

「ああッ！ 殺られちゃったッ！」

「チツ、使えないわねッ！」

「私に地味は似合わない………………。やるからには——」

上方から着地したレイアが五指にコインを揃える。

「——派手にやるッ！」

コインを撃ち出しながら跳躍。飛び退いた三人の間に着地すると、新たに補充したコインを連結させて作り上げたトンファアを手に三人に攻撃を仕掛けてくる。

「遠距離攻撃しか出来ないと思つたら大間違いだッ！」

即座にクリスもT2メタルメモリの力をギアに投影。イチイバルをクリムタルラリイ・イチイバルに変化させ、得物をボウガンからガントンフアーに変えてドーパント達と共にレイアを迎え撃った。

——物陰からクリス達の戦いを見ていた、アタツシユケースを抱えた少女は、冷静に戦況を分析し続ける。

(装者屈指の戦闘力とフォニックゲインに、ドーパントの戦闘力………。それでも、レイアに通じないッ！)

クリス達とレイアの攻防は『互角』の一言に通じる。互いに満足な一撃を加えられていない状況が続いているが、それはクリス達が三人がかりで挑んでいるからこそ言える状況。誰か一人でも欠ければ、戦況は少しずつレイアの方に傾いていくだろう。

(やはり、ドヴェルグⅡダインの遺産を届けないと………。ッ！)

託されたアタツシユケースをぎゅつと強く抱きしめる。そこには彼女の言う『ドヴェルグⅡダインの遺産』が収められているが、それとは別のものも入っている。

ライダーシステム。エターナルともイクシードとも違う、新たな戦士を誕生させるべく作り出された兵装。だが、それを使える者はこの場にはいない。

なにせ、それを使うべき男は——

『——なにがあったの、クリスちゃんッ！』

「敵だッ！ 敵の襲撃だッ！ そっちはどうなってるッ!」

トンフアーの一撃を回避しながら友里に交戦中であると報告する。

その間にもレイアの連撃は続き、脳天に振り下ろされかけたトンファーを咄嗟にガントンファーで受け止めるが、がら空きになった胴体に回し蹴りが入った。

「がは……………ッ!？」

「クリスッ!」

遂に明確な一撃を受けて吹き飛んだクリスに追撃を仕掛けようとしたレイアだが、真横から両足の炎を爆発させてブーストをかけたヒートドーパントのキックによって妨害される。

「この……………やりやがったなッ!」

「危ないッ!」

「あん? ………………はあッ!？」

反撃に動き出そうとしたその時、謎の声による警告がクリスの耳に届いた。

その声に顔を上げたクリスは、我が目を疑った。

視界に映るのは、クルーザー。それも、一隻だけではない。

なんと、数隻のクルーザーが、クリス目掛けて降ってきたのだッ

!

「クルーザーが降ってくるだとおッ!? なんの冗談だああああッ!？」

叫ぶクリスの手を何者かが引き、物陰に引きずり込んだ直後、大爆発が起きた。

——ルナドーパントとヒートドーパントの猛攻を耐え凌ぎ、上方に飛び上がったレイアは夜の闇に染め上げられた海を見る。

「私に地味は似合わない。……………だけど、これは少し派手すぎる」

海の彼方に浮かぶ巨影。辛うじて人型のように見えるその手には、なんとクルーザーが握られていた。

「後は私が地味にやる……………」

レイアの言葉を受け、彼女の妹は静かにその姿を消し、クルーザーも海に落ちていった。

「……………お前も、地味にやるんだな」

次にレイアが見たのは、頭上。そこには一見星空しか広がっていないように見えるが、その一部が歪んだのを、彼女は見逃さなかった。

「……………手伝いに行くの、許してもらえなかったデスね……………」

響とクリスに同行を拒まれた事を悔し気に思いながら、調と切歌は帰路につく。

フィーネは響達の出勤後にS・O・N・G本部に戻っており、今は状況の確認を急いでいる事だろう。絶対に危険な真似はするな、と釘を刺されてしまったので、二人はすぐすぐと歩を進めていく。

「LINKERが無い私達の適合係数じゃ、シンフォギアを纏ったところで満足に戦えない。考えてみれば、当たり前前の事」

「ああ見えて、底抜けにお人好し揃いデスからね」

フロンティア事変の後、世界に宣戦布告したテロリストとして拘束

された自分達を助けてくれたのは、敵として戦ってきたはずの彼らだった。

互いに和解できたのなら、自分達はもう仲間だ、と言わんばかりに自分達を受け入れてくれた彼らには感謝しかない。

もちろん、すぐに拘束が解けるはずも無く、現在は保護観察処分を受けている身であるが、それでも彼らは自分達を響達のいるリディアンに通わせるように手を回してくれたと聞く。

彼らのお陰で自分達は、F. I. S. の研究施設にいた頃には想像できなかった豊かな生活を、毎日笑って過ごせている。

「……………なんとか、力になれないかな」

「なんとか、力になりたいデスよ……………」。力は、間違いなくここにあるんデスけどね……………」

いつの日か訪れるであろう、戦いの日に備えて眠っている聖遺物^{イガリマ}を握り締める。

感謝の気持ちが溢れ出てくると、今度は恩返ししたいという気持ちが顔を出す。二人は、蛇口の壊れた水道の如く絶え間なく心を染め上げていくその気持ちに苦悶する。

「でも、それだけじゃなにも変えられなかったのが、昨日までの私達だよ、切ちゃん」

『都内に発生した高層マンション及び、周辺火災の続報です』

その時、町の巨大モニターに響達が向かったであろう高層マンションの映像が映し出される。淡々と新情報を視聴者に伝えるニュースキャスターによると、現場では不審な人物の目撃が相次いでおり、テロの可能性も指摘されているようだ。

だが、突然火災マンションの上空にのみ雨雲が発生し、瞬く間に炎の勢いを弱めていく。

マンションの上空だけに雨雲が発生するという普通ならあり得な

い現象にニュースを見ていた者達は驚いているが、調と切歌は、それがS・O・N・G・に所属する仮面の戦士の仕業だと瞬時に見抜く。しかし次の瞬間、空中でなにかが爆発する映像も映し出され、二人は思わず声を上げた。

「今のヘリコプター、S・O・N・G・のデスッ！」

「なにか、別の事件が起きているのかも……………ッ!?」

顔を見合わせた二人は、互いになにを考えているのかを理解して頷き合い、現場に向かい始める。

「ね、ねえ……………。今、ヘリが爆発したように見えただけ……………」

そこから少し離れた場所。髪の毛を束ねた女性に袖を引っ張られた男は、じつと生中継されている火災マンションを見続けていた。

「所長はここに残っている。行ってくる」

「だ、大丈夫なの?」

「想像したくはないが、ドーパント絡みの事件の可能性もある。だから絶対に来るな」

「う、うん……………絶対に戻って来てね」

「ああ」

女性に頷き、赤いライダージャケットを着込んだ男は現場に向かい始めた。

——何者かに物陰に引っ張られたおかげで爆発の余波を浴びる程度で済んだクリスは、一先ず安堵の息を吐く。

「はちやめちやしやがる……………」

「大丈夫ですか？」

「ああ……………ってッ！ おま、その恰好……………ッ！」

助けてくれた恩人に感謝しようとして視線を向けた瞬間、クリスは再び我が目を疑う羽目になった。

着用しているのは、裾に紫のラインが入ったローブと、股間を隠すパンツ。それだけだ。

傍から見れば露出狂と受け止められても仕方ない容姿の人物だ。

「あなたは……………」

「あ、あたしは快傑☆うたずきんツ！ 国連とも日本政府とも全然関係なく日夜無償で世直しに奮闘する——」

「イチイバルのシンフォギア装者、雪音クリスさんですよね？」

自分が国家機密事項のシンフォギアを纏う装者である事を隠そうと、現在ハマっている漫画の登場人物の名を出すが、少女には無駄な行為だったようだ。それよりも、クリスはその声が、先程自分に警告してくれた声と同じものだと気づく。

「……………その声、さっきあたしを助けた……………？」

少女はフードを脱ぎ、その顔を露わにする。

「ボクの名前は、エルフナイン。キャロルの錬金術から世界を護る為、皆さんを探していました」

「……………錬金術、だと？」

聞き慣れない単語に、クリスは首を傾げた。

「――仮面ライダー……………W？」

「ああ、言うなれば、正義の味方つてところだ」

二色の仮面ライダーの出現に目を丸くする響に振り向かず、Wは頷く。

響を護るように立つ彼の視線の先には、今にも彼に飛びかかろうとしている異形のドーパント。

『僕の体、頼んだよ』

「え？ あ、はいッ！」

Wからフィリップの声が聞こえ、なぜ彼の声がWから聞こえるのか、という疑問を抱きながらも、響はフィリップの体を物陰に隠す。

異形のドーパントがWに襲い掛かり、それを真っ向から受け止めたWはカウンターの一撃を浴びせるが、異形のドーパントにはまるで効いておらず、逆に彼の繰り出した拳がWを殴り飛ばした。

「くそッ！ やっぱり堅えなッ！」

『それだけではない。以前と比べて攻撃面でも優れている。ヒートメタルで勝負だ』

ドーパントから距離を取ったWがベルトからサイクロンメモリとジョーカーメモリを引き抜き、新たなメモリを取り出す。

『ヒート！』

『メタル！』

『ヒートメタル！』

その姿を燃え盛る赤と冷たい鋼のものへと変えたWに、響が驚愕する。相手に応じてメモリを使い分けるのは克己と同じだが、克己が変身するエターナルはあくまでメモリの力を使うだけで、姿が変化する

事はない。しかし、Wはその真逆をいくスタイルなのである。

背中に出現した棒——メタルシャフトを装備したWの猛攻が異形のドーパントを襲う。先程と比べれば多少はダメージが入っているようだが、決定打となる一撃を与えられるまでにはいかず、振り下ろされたメタルシャフトを掴み取った異形のドーパントが靄状の爪でWの体を切り裂く。

鋼鉄の体から火花を飛び散らせて怯んだWの首を掴んだ異形のドーパントは、そのままWを近くの建物に投げ飛ばし、追撃を仕掛けるべく建物へ飛び込んでいく。

そこから再び堅いものがぶつかり合うような音が何度も聞こえてくるが、両者は戦いながら移動しているのか、その音は徐々に遠退いていった。

「あれがW………………。異世界の仮面ライダーか」

異形のドーパント達と共に、こちらの世界に飛ばされてきたイレギュラー。それが彼らか。と一人納得し、キャロルは響を見る。

異形のドーパントがわざわざWとの戦いの場を変えたのは、キャロルが響と話しやすくするように配慮したからだろうか。尤も、キャロルにとっては、それを知っていようがいまいが関係ないのだが。

「なぜ、シンフォギアを纏わない？ 戦おうとしない。奴の助太刀に行かないのか？」

「……………その前に聞かせて。どうして、世界を壊したいの？」

「……………理由を言えば、受け入れるのか？」

「……………私は、戦いたくないッ！」

響の答えに、キャロルは虫唾が走るのを否が応でも感じざるを得ない。

「お前と違い、戦ってでも欲しい真実が、オレにはあるッ！」

「戦つてでも欲しい真実……………?」

「そうだ。お前にもあるだろう? だからその歌で月の破壊を食い止めてみせた。その歌でッ! シンフォギアでッ! 戦つてみせたッ!」

「違うッ!」

キャロルの言葉を、響は否定する。

「そうするしかなかっただけで……………そうしたかったわけじゃない……………」

シンフォギアを身に纏い、この拳を振るつたのは、それしか選択肢が無かったからだ。話し合いで全て解決できるのなら響は遠慮なくその道を選ぶし、力を伴つての解決など、可能ならばしたくはない。

「私は戦いたかったんじゃない。シンフォギアで、護りたかったんだッ!」

「……………それでも戦え。お前に出来る事をやってみせろッ!」

「人助けの力で、戦うのは嫌だよ……………ッ!」

「……………お前も、人助けして殺される口なのかッ!」

キャロルが手を掲げれば、彼女を挟むように黄金の円が形成される。

それは遙か昔、科学と魔術が分かれたれる前の時代に存在したオーバーテクノロジ―。

シンフォギアシステムとは異なる、異端技術の産物——錬金術の猛威が、響に牙を剥く。

「——聞いていたよりずっとシヨボい歌ね。確かにこんなのじゃ、やられてあげるわけにはいきませんわ」

ボックスを吹き飛ばして、無傷の状態で立ち上がるファアラ。その言葉には、先程の一撃に対する『失望』と、翼との戦闘に対する『退屈』がありありと含まれていた。

「余裕を気取るには、些か逸つたな」

だが、自分と彼女の間には天と地ほどの差がある事くらい、翼自身も気付いている。

ファアラの頭上に剣を放り投げると、それが一気に巨大化し、それを大剣で受け止めたファアラごと下層へ落ちていった。

「やったかッ!？」

「この程度では下に叩き落したに過ぎない」

あの一撃が決定打になれば、なんて端から考えていない。少しも待たずに、あの怪物は巨剣が作った穴から飛び出してくるだろう。

マリアがシンフォギアを纏えない以上、怪物を足止めできるのは自分のみ。剣を握る両手に力を籠め、いつ彼女が現れても対処できるよう構えていると、いきなりマリアに腕を掴まれた。

「退くわよ、翼ッ!」

「え? ええ……………ツ!？」

有無を言わさぬまま、マリアは翼を連れて通路を駆け抜けていった。

——これからお前を攻撃する、と言わんばかりに錬金術を発動させたキャロルだが、全く歌う様子を見せない響の姿に苛立ちを感じざるを得ない。

轟音が轟く。しかし、来るべきはずの衝撃が未だに来ない事に困惑した響が恐る恐る閉じた目を開けると、

「怪我は無いか？ 響」

キャロルの錬金術を防ぎ切った氷壁を消滅させたのは、漆黒のローブを羽織った純白の死神。

この世に自分がいる答えを探し求める、『永遠』の戦士。

「克己先生ッ！」

「元氣そうでなによりだ。さて……………」

弦十郎から自分やイクシードとは違う仮面ライダーが現れたと聞き、消火が完了次第飛んできたのだが、どこにもその仮面ライダーの姿は無い。だが、今はそれを気にしている場合ではない。

「はあ……………はあ……………」

感情に任せて錬金術を行使した結果なのだろうか。肩を激しく上下させながら肺に酸素を送り込んでいるキャロルに、エターナルが刃を向ける。

「お前がクリスの言ってた『敵』か？ 俺は響こいづみたく甘くはないんでな。子ども相手でも容赦はしない」

「仮面ライダー……………エターナル……………ッ！」

「否定しないという事は、そうだという事だな。ならば言う事はない。ここで死ね」

疲労している以上、体はどうしても思うように動いてくれない。エターナルエッジを心臓に投擲すれば、恐らくそれで済む。

「待つてくださいいッ！」

右手を軽く動かしてエターナルエッジを投擲しようとしたが、響に止められてしまう。

「お願いです。あの子と、話をさせてください」
「……………」

しばらく響を見つめていたエターナルだったが、体をどかして響に道を開ける。これまでの事から話しをしたところで無駄だろう、とは考えているが、なにか伝えたい事があるのなら、伝えるだけ伝えさせるだけの事だ。

「キャロルちゃん。どうして、世界を壊そうとするの？」
「……………父親に託された命題だ。お前にだってあるはずだ……………」
「お父さん……………に……………？」

響が酷く困惑した様子でたじろぐ。それを見たエターナルは、彼女をキャロルから護るようにその前に立った。

「誰彼構わず繋がろうとするのはお前の長所だが、同時に短所でもあるな。……………下がってろ、今のお前に戦意は感じられない」

殺意しか向けてこない相手には、同じ殺意でしか返す他ないのだ。

「めんどくさい奴ですね〜」

キャロルや響のものでもない声に視線を動かすと、鉄骨の上に青いメイド服らしきものを着用した、見知らぬ少女が立っていた。

「……………見ていたのか。性根の腐ったガリイらしい」
「やめてくださいよう。そういう風にしたのは、マスターじゃないですか？」

キャロルの隣に移動した彼女の名は、ガリイ・トゥーマーン。キャロル 姫を
護りし終末ナイトクォーターズの四騎士の一体にして、『聖杯』の小アルカナを象徴する者
である。

「想い出の採集はどうなってる」

「順調ですよ。でも、ミカちゃん大食らいなので足りてませくん。
うえくんえんえくん」

わざとらしく泣き真似をするガリイだが、その性根は主のキャロル
をして『腐っている』と言わしめるほどのもの。つい先程も、キャロ
ルやエターナル達の姿を撮影していた一般人の想い出を吸い尽くし
たのだ。

「なら急げ。こちらも出直しだ」

「あのドーパントはどうするんですか？」

「帰還用のジエムを持たせている。勝手に戻ってくるさ」

「逃がすとも思うか？」

二人の間を通り過ぎていったエターナルエッジが進行方向にある
鉄骨に弾かれ、エターナルの手に収まる。

「どうします、マスター？　ここで殺っちゃいますか？」

「目障りだが、こいつらを試すには好都合だ」

そう言つてキャロルが取り出したのは、小さな塊。一見玩具のよう
にも思えるそれを無造作に放り投げると、たちまち塊は砕け、魔法陣

のようなものが描かれる。キャロルが使う以上、碌なものではない事は明らか。構えるエターナルの前に、描かれた陣からなにかが現れる。

奇怪な見た目に、自然発生したものは到底思えない異形。

それはなんと——ノイズだった。

「ノイズだと……………ッ!？」

もう二度とその姿を見る事はないと思っていたエターナルは、ノイズの再来に驚愕を隠せない。

「相手が人でなければ問題なからう。歌たかつて、生き延びてみせろ。でない、お前のなにもかもをブチ砕けないからな」

「さよなら〜」

ノイズを出現させた時に使ったものとは違う小型の塊を砕くと、キャロルとガリイの姿が妖しい光に包まれて消えていき、ノイズの大群が獲物をこの世から消滅させるべく一斉に動き出す。

「シンフォギアを纏え。じやないと死ぬぞ。……………響?」

了承の言葉が聞こえず、振り返ったエターナルの視界に、膝をついて茫然としている響の姿が映った。

「託された……………? 私には、お父さんから貰ったものなんて

……………なに……………も……………」

「……………ッ!?! 響ッ!」

突然倒れた響を助け起こす。どうやら気を失ってしまったらしい。これでは歌を歌うどころか、動く事もできないではないか。

「……………俺一人でやるしかないか」

迫り来るノイズの大群の前に、エターナルエッジを構える。

「……………踊るぞ、死神のパーティータイムだ」

意識を完全に死神のものへ切り替え、エターナルはノイズを迎え撃つ——ッ！

急襲のF／装者達の黄昏

ライブ会場から出るや否や、彼女達の移動用に手配されていた車に乗り込んで発進する。

「ベルトは締めているわね。速度を上げるわよ」

「……………いい加減説明してもらいたいところだ。車に乗せて、私をどこへ連れていくつもりだ？」

シンフォギアを解除し、助手席に座らされた翼が問いかける。

「思い返してみなさい。奴の狙いは他でもない、翼自身と見て間違いない」

「……………ッ！　そういえばあの女、『待ち焦がれていた』と……………」

「この状況で被害を抑えるには、翼を人混みから引き離すのが最善手よ」

「ならばこそ、みんなの協力を取り付けて——」

そこで翼はハツとして、マリアを見る。

「……………ままならない不自由を抱えている身だからね」

そうなのだ。今のマリアは国連所属のエージェントとしての身分で行動している。下手な行動を取ってしまうえば、人質と言っても過言ではない扱いを受けている調と切歌が危険な目に遭ってしまうかもしれない。

大切な友人達を人質に取られては、マリアも思うように動けないのだ。

(……………それでも、そんな事が私の戦いであるものかッ！)

二人を乗せた車が橋に差し掛かったところで、翼が叫ぶ。

「マリア、前だッ！」

そこに佇むのは——死神。

橋のど真ん中に妖しく立った死神の、本来ならば目玉が収まっているはずの真つ黒な眼孔がこちらに向けられた瞬間、二人の背筋が凍り付いた。

構えられた鎌が街灯の明かりを反射する。

獲物に狙いを定めた猛獣の眼光の如くギリリと輝いた鎌を見たマリアは、ほぼ無意識にリクライニングシートを倒していた。

瞬間、二人の目の前を凄まじい速さで鎌が通り過ぎていき、二人の首の代わりに車のルーフを斬り落としていった。

「羽Imyut_撃eus_は 鋭amenohabakiri_風 切tron_る 如tron_く」

柱に激突して爆発した車を眺めていた死神に蒼き歌姫の歌声が届き、死神の眼孔が、マリアを抱えて上空に舞う翼を捉える。

「貴様はいったい何者だ」

「答える義理は無いと思いますが……………、ええ、ここはやはり答えしておくべきでしょう」

マリアを下ろし、剣の切っ先を向けられた死神は、鎌を握っていない左手を胸に当て、まるで執事のような態度で会釈する。

「私はシアン・ゴールドイス。こちらの姿では、デスドローパントとお呼びください」

「デス………………。まさしく『死神』と言ったところか。あのオートス
コアラとやらは、貴様の仲間か？」

「仲間、とは違います。私達はあくまで協力関係。お互いの利害の一
致の下、行動しているだけです」

「無駄話はそこまでにしてはいかが？」

もう翼達に追いついてきたファラがデスドーパントの隣に降り立
つ。

「ええ、確かにその通りでしたね」

わざとらしく肩を竦めたデスドーパントが両手で柄を握り直し、
ファラも戦闘態勢を取る。

「マリア、下がっている」

「……………頼んだわよ、翼」

纏うべきシンフォギアを持たないマリアに、彼らに抗う力はない。
必然的に、翼は二対一で彼らを迎え撃たなければならなくなってい
まった。

だが、それで退いては防人の名が廃るッ！

「いざ——参るッ！」

走り出した翼を、ファラが迎え撃つ。

互いの刃が軌跡を描いて衝突し、これから激しい剣戟が始まろうと
したその時——

「剣は剣でも、私の剣は剣殺し——ソードブレイカー」

特に力を入れていないにも関わらず、翼の剣は跡形も無く砕け散つ

てしまった。

ソードブレイカー。それは歴史上にも存在する、文字通り剣の破壊に適した武器。受け止めた敵の刃を峰の凹凸を利用して折ったり、叩き落したりするのが主な使い方だが、ファラのそれは歴史上に登場するものとは異なる。

彼女が振るうのは、永い時を経て積み重なった言葉の力が形となったもの。そのものの在り方を捻じ曲げる想念が力と化したもの。

その名を——『哲学兵装』と呼ぶ。

「例え刃を折られようと、魂に宿る一振りを砕かぬ限り、私から剣は奪えぬと知れ」

「でしたら………こういのはどうでしょうか？」

そう言ってファラが取り出したのは、小さな結晶。翼とマリアは知らないが、響の前に現れたキャロルが持っていたものと同じもの。なれば、これからなにが起こるかは容易に想像できる。

ファラが放り投げた結晶が砕け、封じ込まれていた術式が発動。翼を囲む形で、ノイズが出現した。

「なッ!? ノイズだとッ!」

「そんなッ! だってノイズは、ソロモンの杖諸共バビロニアの宝物庫で蒸発したはずじゃ………ッ!」

驚愕する二人を他所に、ノイズの大群は一斉に翼に襲い掛かる。

それを翼は新たに取り出した剣で斬り捨てていくが、背後から冷たい空気を感じ、咄嗟に振り向きざまに横薙ぎに剣を振るう。

「不意打ちは無駄ですか。まあ、このような状況では当然でしたね」

ゆらりとした妖しい動きで攻撃を回避したデスドローパントが斬りかかる。それを横に跳んで躲す翼だが、振り下ろされた鎌がまるで跳

ねたと思わせる動きで翼に迫ってきた。

「く……………ッ！」

「ほう、これも躲しますか。では、もう少し速度を上げるとしましよ
う」

連続して振るわれる鎌。隙などまるで見つけられず、やっと反撃の一撃を繰り出せそうな隙を見つけても、それは彼の罫であり、迂闊に反撃に出れば即座に致命の一撃を入れられてしまっただろう。

距離を取れば、そこをノイズが襲い、ノイズを攻撃すればデスドーパントの攻撃を受け止めざるを得なくなる。

必然的に防戦一方の状況になってしまった翼に、その様子を眺めていたファアラが声をかける。

「あなたの剣……………大人しく殺されてもらえると助かります」

「そのような可愛げを未だ私に求めているとはッ！」

デスドーパントを蹴ってバク転し、背後から襲い掛かろうとしたノイズを頭上から切り裂く。

「防人の剣は可愛くないと友が語って聞かせてくれたッ！」

「こ、こんなところで言う事かッ！」

恥ずかしがるマリアを微笑ましく思うが、すぐに意識を切り替える。

ファアラはまだ傍観者に徹しているが、いつ参戦してくるかにはわからない。デスドーパントは正直言つて、今の自分ではいずれ押し負けてしまう。だが、ノイズは違う。

確かにもう対峙する事は無いと思っていた存在が出現した時は驚かされたが、それでも所詮はノイズ。今の翼の敵ではない。

「一気に片付けるッ！」

旋風が吹き荒び、翼の武装を変化させる。

髪の毛を後ろに束ね、一本の野太刀を腰に差した形態

天羽々斬・翼風刃。

鞘から抜き払った野太刀を二本の刀に分解させ、一陣の風となってノイズを殲滅していく。

四肢の動きに、それぞれに適した風のブーストをかけて行われる戦いは、まるで演舞。美しき翠風を纏い、戦姫は死をもたらず災厄を打ち払っていく。

彼女を中心に舞う黒き灰塵の中、翼に向かう影が一つ。

「ふ——ッ！」

小さく息を吐いて振るわれる死鎌。直撃すれば間違いなく重傷を負うであろうそれを、翼は先程までと違って難なく回避し、反撃の一撃を繰り出す——ッ！

「はぁ——ッ！」

「ぐうッ!？」

X字に切り裂かれたデスドローパントが吹き飛ばされ、地面に転がる。

翼は狙いを傍観者に徹していたファラに変え、一直線に向かう。

ファラを護るように一体の武士のようなノイズが立ち塞がり、刃状の腕を突き出してくる。翼はそのノイズをファラごと貫いてやろうとばかりに右手に握った剣を突き出す。

両者の剣が触れ合う。それを見たファラは、笑っていた。

「な……………ッ!？」

目の前で起こった現象に目を見開く。

なんと、このままノイズとファアラを貫きかねなかった刃が、ノイズに触れた先から消滅していつているのだ。

「剣が、分解されて……………ッ!？」

「ふふ……………。敗北で済まされるなんて、思わないでね」

勝利を確信したファアラの前で、戸惑う翼の武装が分解され始めた。

「……………なん……………だとッ!？」

一方、ファアラが召喚したノイズと交戦していたクリスも、その毒牙にかかっていた。

ノイズの攻撃をガトリングガンで受け止めた途端、ノイズが触れた箇所からガトリングガンが分解され始めていったのだ。

「あたしの……………イチイバルがッ!」

「ノイズだと括った高が、そうさせる」

徐々に分解が進んでいく自らの武装に目を丸くするクリスの耳朶を、レイアの冷徹な声が叩いた。

「……………アルカ・ノイズ」

未完の居城に備え付けられた玉座とも思える椅子に腰を下ろしたキャラルが、現在翼達が相手になっているノイズの名を口にする。

アルカ・ノイズ。従来のノイズを基に設計された、人類の新たな脅威。それは、これまで観測されてきたノイズが備えていた位相差障壁に用いられていたエネルギーを分解能力の向上に充て、触れた対象を

文字通り『分解する』特性を獲得した存在。新たに備えた『解剖器官』と呼ばれる部位が起動した時こそ、アルカ・ノイズの恐るべき能力が発動するが、その反面、分解能力にエネルギーを割くために従来の位相差障壁ほどの防御性能は損なわれる、という欠点が存在する。

しかし、通常物理法則に対しては相変わらず優位性を獲得しているので、人類の天敵という立ち位置は変わっていない。

「なにするものぞ——シンフォギアああああああツツ!!」

玉座に就く女王の咆哮が、未だ目覚めぬ人形が鎮座する王室に轟く

「——うう……………ああツ!?」

「翼ッ!」

強制的にギアが解除されてしまい、全裸になって倒れ伏す翼を見たファラは成功した事に微笑みながら言う。

「システムの破壊を確認。これで仕事は一段落ね」

「——ぐ……………あッ!?」

翼と同じく、アルカ・ノイズに触れられた箇所から分解が進み、遂にギアの強制解除にまで追い込まれてしまったクリスも一糸纏わぬ裸体で倒れる。

「クリスさん……………ツ!」

「クリスッ!?!」

クリスの異常に気付いたヒートドールパントがルナドールパントにレイアの相手を任せてクリスに駆け寄る。

そうになると、必然的にエルフナインと顔を合わせる事になる。

「あんたがクリスを……………ツ！」

「ち、違いますッ！ ボクは味方ですッ！」

「味方……………？」

その言葉をすぐに信じないヒートドールパントだったが、エルフナインに武器といったものは見受けられず、敵意も微塵も感じられないので、一先ず彼女の事を信用する事に決める。

「あんた、あのノイズがなんなのか知ってるの？」

「あれはアルカ・ノイズ。従来のノイズを基に、世界の解剖を目的に作られたものです。ですが、それを兵器として運用すれば――――」

「シンフォギアに備わる各種防御フィールドを突破する事など容易い……………」

クリス達を護るように後退したルナドールパントに歩み寄りながら、ファアラは新たにコインを補充する。

「次なる仕上げは、次なるキャストに――――」

「や、やらせませんッ！」

身構えるルナドールパント達の前にエルフナインが飛び出すと、彼女の姿を視界に収めたレイアの動きが止まる。

「……………エルフナイン」

慎重さの影響でこちらを見上げるように睨むエルフナインを見る
レイアの目は、どこか悲し気な雰囲気を感じさせる。しかし、その雰
囲気もすぐに彼女から消え去り、主からの使命を果たす為に行動を再
開しようとした、その時――

「させないデスよッ！」

無断で現場までやって来た助っ人の声が響く。

「
Zeios 夜を引 igalima 裂 raiZen 光の tron とく」

『フィーネ』時代と違って、かつては漆黒だった箇所が純白に変わっ
たイガリマのシンフォギアを纏い、切歌が鎌を振り上げてノイズを切
り裂いた。

(LINKER無しでどこまで戦えるかわからないデスが……………
アタシだって戦ってやるデスッ！)

再び出現したノイズに、正体不明の敵。勝算は限りなく低いが、そ
れでも飛び出した手前、負けるわけにはいかない、と自分を鼓舞し、切
歌は得物を手に走り出す。

――アルカ・ノイズの出現でさえ既に混乱していた司令
室が、切歌が参戦するという予想外の出来事も相俟ってさらに混乱す
る。

「LINKERを投与せずに状況介入なんて無茶をッ！」

「すぐに退避するよう指示できないかッ!？」

「無理ですッ！　いくら呼び掛けても、全く反応しませんッ！」

「ですが、これでいければ……………」

交戦していたのがクリスだけだったならともかく、現場にはルナドーパントとヒートドーパントがいる。彼らと協力すれば、あるいは……………、と考える藤堯だが、フィーネは苦い顔をしながらモニターを凝視し続け、弦十郎も彼女が無事に帰還できるように祈るしか出来なかった。

——通信機から聞こえる友里からの撤退命令を悉く無視し続けて戦う切歌だが、その呼吸は早くも乱れている。LINKER無しでの戦闘が、思った以上に彼女の体に負荷をかけているようだ。

「派手にやってくれる」

そこへ狙いを切歌に変えたレイアが迫ってくる。ノイズとの戦闘に気を取られていたせいで、ほぼ不意打ちに近いコインの投擲が、切歌に迫る。

「今アスツ！ 調ツ！」

切歌の合図と同時、無数の丸鋸が彼女に迫っていたコインと相殺し、同時にレイアにも攻撃を仕掛けてくる。

「派手な立ち回りは陽動……………？！」

丸鋸を難なく回避したレイアの視線の先。切歌の隣に降り立ったのは、切歌と同じく純白のものへと変わったシウルシャガナのシンフォギア装者、調だ。

ここに、女神ザババの二振りのギアの装者が揃った。

「敵は摩訶不思議な連中……………。油断せずに行くデスよッ！」
「うんッ！」

二人からファアラが距離を取ると、それと入れ替わるようにアルカ・ノイズの群れが二人に襲い掛かる。

切歌が走り出すと同時に、調は大きくジャンプしてヘッドギアを展開。そこから大量に射出された丸鋸がアルカ・ノイズを切り刻んでいき、彼女が討ち漏らしたアルカ・ノイズは切歌が鎌で切り裂いていく。

「京水さんとレイカさんはクリスさんを護っててくださいッ！ ここは私達がッ！」

「あんたらに任せられるわけじゃないでしょッ！ 京水、私が行くからあんたはここでこの子達を護っててッ！」
「ええッ！」

ルナドーパントがクリスとエルフナインの下に駆けていき、ヒートドーパントは調と切歌を囲むアルカ・ノイズの群れに飛び込み、得意の蹴り技で蹴散らしていく。

「独断で参戦なんて無茶な真似をしてくれるわね。あんた達、本当に大丈夫なの？」

「このくらい大丈夫——ぐう……………ッ!？」

「チッ、言った傍からそれじゃない。とにかく、ここは一先ず撤退よ」

体に負荷がかかり続け、二人のギアが解除されてしまった時、彼女達まで抱えて逃げるのは難しい。それは彼女達もわかっているはずだ。

「……………撤退しよう、切ちゃん」

「了解デス」

素直にヒートドーパントの意見に従って二人が離脱の準備を始めかけた刹那――

「……………ッ！ 危ないッ！」

ヒートドーパントが調と切歌を抱えて両足の裏から炎を噴射させて、その場から離れる。

瞬間、上空から無数の弾丸が降り注ぎ、アルカ・ノイズの群れを一瞬で消し飛ばし、後には小さなクレーターがいくつも出来上がっていた。

「なんデスか、今のッ!？」

「……………ッ！ あそこッ！」

突然の攻撃に目を見開く切歌に、調が夜空を指差す。

そこに浮かんでいたのは――戦闘機。

もちろん、どこかの国が秘密裏に日本に送り込んだものではない。兵器でないのであれば、それはなにか。答えは自ずと理解できる。

「ドーパント……………ッ！」

「ホウ？ ソノ姿、NEVERノドーパントか？ マサカ、コノ世界で見レルトハナ」

戦闘機のドーパントは降下中に変形し、人型となって地面に降り立つ。

戦闘機のパーツが次々と変形した後人型の形を取るの、特撮やロボット系の映画などが好きな者であれば誰もが興奮するものだろう。事実、そうして変形した人型のドーパントを見た切歌は、戦闘中にも関わらず目を輝かせる。

「調、トランスフォーオーデスッ！ デイセ○ティコンデスよッ！」

「切ちゃん、似てるけど違う」

先日鑑賞した映画に登場した悪の軍団の名を挙げた切歌に調がツッコむ。

確かに、生命体という言葉がまるで似合わず、そのドーパントを一言で表すならば『ロボット』だ。切歌がそれをあの映画に登場した存在と同一視するのも無理はない。

「NEVERの事を知ってるの？ あんたみたいなドーパント、会ったところかデータでも知らなかったんだけど？」

「ナニ。コチラガ一方的ニ知ツテイルダケダ。知ラナクテ当然ダトモ。ダガ、セツカク出会エタンダ。自己紹介クライハサセテモラオウ。俺ノ名ハ黒芭燈迹^{くろぼとうし}。メモリハ『ファイター』ダ」

「随分と派手な登場をしてくれる……………」

隣にやって来たレイアにファイタードーパントは答える。

「ソツチノ目的ハ果タサレタンダ。次ハ俺ノ番ダト思ツテナ。シンフォギア装者トヤラガドンナ連中力知リタカツタガ、拍子抜ケダ。アソコデ倒レテル女ナラ少シハ楽シメソウダガ、ソコノ二人ハ簡単ニ殺セル」

鋭利な爪が伸びた指で差された調と切歌が押し黙る。悔しいが、LINE iNKER無しでこのドーパントと戦っても、勝てるビジョンがまるで浮かばない。

今のコンデイションで挑んだら、間違いなく瞬殺される。それが容易に想像できるほど、この怪人から発せられる威圧感は凄まじかった。

「ダガ、ソウダナ。俺ニモソレナリノ役目ハアル。ジャナキヤアノママ偵察デ終ワラセテル」

戦闘機の中にはステルス機能を搭載している機体も存在する。それは『戦闘機』の記憶を体現するこの怪人も例外ではなく、今までどのレーダーを用いても彼の存在を把握できなかつた原因が、このステルス機能である。

では、なぜ彼がそのステルスを解いてまで姿を現したのか。その理由は――

「オ前ガソコニイルノハワカツテル。来イヨツ！ ジャナイト、コイツラヲハチノ巢ニシテヤルゾツ！」

部品を組み替えて機銃に変形させた右腕がヒートドーパント達に向けられる。しかし、そこから弾丸が発射される前に、「待てツ！」と鋭い声が響き渡る。

全員の視線の先に立つのは、どこから取り出したのか、剣を携えた赤いライダージャケットを着た青年だ。

「あれは……………」

「誰デスか……………？」

突如出現した謎の青年を訝し気に見つめる調と切歌にクリスだが、ルナドーパントとヒートドーパントは、彼が何者かを理解している。

なぜここに彼がいるのか。彼がいるという事は、あの男達もこの街にきているのか。様々な考えが脳内を駆け巡っていく間にも、時は進んでいく。

青年は調と切歌を抱えるヒートドーパントから、クリスとエルフナインを護るように立つルナドーパントを一瞥してから、最後にファイタードーパントとレイアへ目を向ける。

「どうやら、俺が倒すべき相手はお前達のようにだな」

少し見ただけで状況を把握した青年が剣を地面に突き立て、懐に手を伸ばす。

出てきたのは、バイクのハンドルに見えるバツクル。だが、もちろん本物のバイクのハンドルではない。

それは彼を、一人の英雄ヒーローに変える媒体だ。

バツクルを腰に押し当てれば、そこから伸びたベルトが彼の腰に巻き着き、次の段階を待ち始め、青年はさらに懐からあるものを取り出す。

『A』を模したタコメーターが描かれた、USBメモリに酷似したもの。見る者が見れば一目で気付く、記憶を封じた小箱。

『アクセル！』

「変……………身ッ！」

アクセルメモリをベルト——アクセルドライバーに装填し、右手側のパワーロットルを捻る。

『アクセル！』

メモリの力を宿した真紅の鎧が青年の体を覆い、頭部に大きな『A』の文字のような角がついた複眼状の蒼いモノアイが輝く。

——その身に宿すは、『加速』。

——彼の者は無明の闇を貫き、未来へと疾走する、赤き戦士。

——二人で一人の彼らと同じく、風の街を守護する英雄。

——その名は——

「さあ——振り切るぜツ！」

——仮面ライダーアクセルツ！

懐かしきM／運命に導かれた者達

機銃から撃ち出された弾丸の間を駆け抜け、アクセルが大剣——
——エンジンブレードを振るう。空気を切り裂いて迫るそれを回避したファイタードールパントが、アクセルにカウンターを見舞う。だが、既に攻撃が躲される事も、カウンターが飛んでくる事も予測していたアクセルは引き戻したエンジンブレードをファイタードールパントの拳に押し当て、勢いを殺さぬまま受け流していく。さらに、アクセルは受け流した勢いを利用して回転。遠心力で速度と重量を増したエンジンブレードでファイタードールパントの背中を切り裂いた。

「ヌウ……………ツ！」

「ハア——ツ！」

振り向いたファイタードールパントに連続でエンジンブレードが振られる。元々がかなりの重量を誇る大剣による連撃はさぞ効果的だろう。それを裏付けるように、後ずさりしたファイタードールパントから苦悶の呻き声が漏れている。

「ソノ剣捌キ……………ヤハリ侮レナイナ」

機銃に変形させていた右腕を、今度は鈍い輝きを放つブレードに変形させ、アクセルと打ち合う。一合一合が少量の火花を散らし、互いに一步も引かぬ攻防だったが、そこへ攻撃を繰り返す者が一人。

「お前は……………」

「彼女達を撤退させる為よ。あんたの為なんかじゃない」

ファイタードールパントに火炎弾を飛ばしたヒートドールパントの言葉に、アクセルがルナドールパントに護られている少女達を一瞥する。

なぜテロリストであった彼らが彼女達を護ろうとするのかは謎だが、若い命をわざわざ散らせるほど、彼は腐った人間ではない。

「……………俺のチームで相手の視界を奪う。その隙に逃げろ」
「あんたも一緒に逃げるのよ。こつちもこつちで事情があつてね。これが終わり次第、色々聞かせてもらおうわ」

今頃、本部にいる弦十郎達はアクセルの出現に驚いているだろう。そして、今もモニタリングしているのなら、彼が自分達にとつて味方になりえる存在である事は把握しているだろうし、そうなると今度は彼をS・O・N・G・にスカウトしたがるはずだ。

あの男の事だ。ここで自分がなにも言わずとも、彼を本部に連れてくるよう頼み込んでくるだろう。

「最後に一つだけ聞かせてくれ。お前達はまた、テロ活動をするつもりか？」

「イエスと答えたら？」

「あの時と変わらん。左達と共に、お前達の野望を打ち砕く」

「チツ、その言い草だと、あいつもこつちに來てるみたいね。……………質問の答えだけど、ノーよ。今の雇い主がこれまた大層なお人好しでね。それこそ、逆らうのも馬鹿みたいに思えてくるぐらい」

「フツ、お前達をそこまで変えるほどの人物か。是非会ってみたいところだ」

「会わせてあげるわよ、あいつらから逃げた後にねッ！」

無数のコインを躲した二人にファイタードローパントと、アクセルが参戦してからは傍観者に徹していたレイアが迫る。

レイアの指から弾き飛ばされるコインを火炎弾で相殺したヒートドローパントが炎を纏わせた右足で反撃に出ると、レイアは咄嗟に片手に装備したトンファーで受け止める。しかし、咄嗟の判断で防御した

からか、腰に力が入っておらず、僅かに体が逸れてしまう。そこへすかさずヒートドーパントの猛烈な蹴撃が叩き込まれ、たまらずレイアの体が吹き飛ばされる。

一方、アクセルもファイタードーパントが連射する弾丸を掻い潜つてからの連撃を繰り返し、防御したファイタードーパントの体が大きく後退する。

「やってッ！」

「あぁッ！」

『エンジン！』

レイアとファイタードーパントの両方が自分達からある程度離れたタイミングで飛んだヒートドーパントの指示に頷き、アクセルはエンジンメモリをエンジンブレードに装填し、スイッチを押す。

『スチーム！』

アクセルメモリから三つ存在する内燃機関の中から選び取った力が発動し、彼らの姿を煙が覆い隠す。レイアのコインとファイタードーパントの弾丸が煙に無数の穴を開けていくが、それが晴れた時には、既にヒートドーパント達の姿は無かった。

「追いかケルカ？」

「マスター、指示を」

『追跡の必要は無い。帰投を命ずる』

「ソウカ。ソレナラ、戻ルトシヨウ」

ファイタードーパントはステルス機能以外にも索敵能力を保有しているため、彼らが今どこにいるか手に取るようにわかるが、今深追いしてもそれほど利益にはならないと判断し、レイアと共にキャロルから貰ったテレポルトジェムを砕き、本拠地へと戻っていった。

『——ファアラ、作戦は終了だ。デスドーパントと共に帰投せよ』

「わかりました。では、そのように」
「かしこまりました」

翼のシンフォギアが破壊されるのを見届けたファアラとデスドーパントはキャロルからの指示に従い、テレポートジェムを砕く。

「フフ、ぎげんよう……………」

先にファアラの姿が消え、残されたデスドーパントは足元の輝きの向こうにいる二人の歌姫を見つめる。いや、厳密には、彼女達の心の中を。

「さようなら、お二方。またいつか、お会いしましょう」

どこか笑っているような口調で言い残し、デスドーパントの姿は消え去った。

「——調ちゃんとお歌ちゃん、ドーパント二名と赤い仮面ライダーと共に離脱。クリスちゃんや保護対象の無事も確認していますッ！」

「克己さんもノイズの殲滅を完了ッ！ 合流と回収を急ぎますッ！」

再び現れたノイズに、新たな敵勢力。それらとの戦いは一先ず終了したらしく、微かに司令室の雰囲気は緩くなる。しかし、すぐに休むわけにはいかない。ここからは現場処理に装者や仮面ライダー、ドーパントの回収だ。まだ気は抜けない。

「錬金術師キャロルと同じ顔の少女………………。了子君、彼女について、なにか知っているか？」

「彼女についてはまるで知らないけど、所属してるであろう組織なら心当たりがあるわ」

「それは？」

「パヴァリア光明結社。多くの錬金術師を抱え込んで、必要なら同盟組織に異端技術やその産物を提供するけど、用済みになれば即座に切り捨てる組織。財団Xと似たようなものと考えてくれて結構よ。でも、今回の戦闘を見るに、結社そのものが動いている感じじゃなさそうね。やってて支援ぐらいかしら。あのキャロルって子が、オートスコアラーやドーパントを率いて行動しているのかも……………それよりも、まずは対処すべき問題があるでしょう？」

「ああ、そうだな……………」

弦十郎がオペレーター達に指示を出そうとした直後、正面モニターに翼の顔が表示された。

「翼か。今連絡しようと思っていたところだ。状況は……………」

『完全敗北……………いいえ、状況はもつと悪いかもしれませんが……………』

ライブの時に来ていた衣装に身を包み、沈んだ声で報告を行う翼の手には、砕け散ったペンダント。アルカ・ノイズによつて破壊されてしまった天羽々斬だ。

『ギアの解除に伴って、身につけていた衣服が元に戻っていないのは、コンピューターの損壊による機能不全であるを見て間違いないでしょう』

『まさか、翼のシンフォギアも……………？』

『……………絶刀・天羽々斬が手折られたという事だ』

「クリスちゃんのイチイバルと、翼さんの天羽々斬が破損……………」
「了子さん、なにか出来る事は……………」

翼とマリア、司令室にいる者達からの視線を受け、シンフォギアの生みの親は顎に手を当てて思案する。

「修復に関しては、時間さえくれれば可能だけど、また破壊されたら意味が無いわ。あのノイズに対抗できる策を考えないと……………」

「とりあえず、君達が無事でなによりだ。気を付けて戻ってくるように」

『了解です』

頭を回転させているフィーネに代わって出た弦十郎に頷いた翼が通信を切ると、今度は克己からの通信が司令室に入る。

「克己君か。君のライダーシステムに不備は無いか？」

『幸いにも、な。ソロモンの杖による召喚とは違う形で出現した以上、なにかありそうだと考えていたが、まさかシンフォギアを分解させる能力を持っていたとはな』

『……………ごめんなさい。私がキャロルちゃんと、きちんと話ができなければ……………』

克己の横に見える響の顔は酷く沈んでいる。自分がキャロルとの間にそびえる巨大な壁を知って、思い悩んでいるようだ。

『誰彼構わず繋がろうとする、その心意気は見上げたものだ。だが、向こうが襲ってきたら、まずは応戦しろ。でないと、今度こそ死ぬぞ』

『……………すみません』

「……………話を」

響がキャロルと少なからず会話できていたのなら、そこからなにか

情報が掴めるかもしれないと、弦十郎は響にキャロルの話を訊いた。

——響が一通りキャロルについての話を終わると、通信機越しに映る弦十郎は二人に労いの言葉をかける。

『とりあえず、ご苦労だった。既にへりを向かわせている。レイカ君達と合流次第、帰還してくれ』

「了解だ、ボス」

通信を切り、さて、と響を見る。

「響、一つ聞きたい事がある」

「はい？」

「ここに来る前、エターナルおれやイクシードとは違う仮面ライダーが出現したと聞いた。見ていないか？」

「あ、み、見ました。緑と黒の仮面ライダーです。名前は確か………W、とか」

「………そうか」

「？ 克己先生………？」

腕を組んで真夜中の空を見上げる克己に首を傾げる。

「もしかして、知り合いなんですか？」

「そんな生温い関係じゃない。こことは違う街で殺し合った仲さ」

「え………、こ、殺し合い………？」

そこまで険悪な関係なのか、と克己を見つめる響だが、彼女の気持ちを察したのか、彼はひらひらと手を振る。

「が、あくまでそれは過去の話。俺達が殺し合ったのは事実だが、今そ

れをする気は無い。むしろ、色々話を訊きたいところだ。……………
で？ あいつらの事を知っているって事は、どこに行ったかも知つて
るよな？」

「あの人……………人達？ は、確か——」

「——あの宝石のようなものはなんだ……………?」

響の声を遮るように、物陰から物思いに耽るような声が聞こえる。

「割れた瞬間に奴の姿が消えた事から透明化の類だと思うが、奴から
すれば僕達から逃げるのなら透明化せずとも簡単なはず……………。
そもそも奴のメモリにそんな力はない。外付けのものと考えるべき
だろう……………。となると、瞬間移動？ ノイズなんていう非科学
的な存在がいる世界だ。それすらも可能にする技術が、この世界に存
在するのか……………? それも普及されてはおらず、ごく限られた
人間にのみ与えられるものであるのなら——」

「おい」

「実に興味深い内容だ。僕達の世界ではまだ完成されていない瞬間移
動の技術が、こちらの世界では完成されている……………。いや、こ
れは逆にまずい展開だ。この世界の誰かと奴らが手を組んでいる事
は火を見るよりも明らか……………。それも瞬間移動を可能にする
ものを容易く提供する、全く未知の——」

「おいッ！」

「邪魔しないでもらえるかな。僕は今考察に忙し……………ッ!」

少し不機嫌な様子で顔を上げた青年の目が、目の前で自分を見下ろ
している男を映し、目玉が零れ落ちそうなぐらいに目を見開く。

「大道克己ッ!? なぜ君がここに……………ッ!」

「久しぶりだな、兄弟。^{フィリップ}そして……………」

「おい、フィリップッ! なんなんだよ、あれッ! いきなり宝石み
てえなの割ったと思いきや、いきなり消えやがったぞッ!

「……………あん？」

「やっぱりお前もいたか、左翔太郎」

「デメエは……………大道克己ッ！」

Wが消えた方角から戻ってきた翔太郎が警戒心を剥き出しにして構えると、フィリップも飛び跳ねるように克己から距離を取って身構える。

「ま、待つてくださいい二人共ッ！ 克己先生は敵じゃありませんッ！」

一触即発の空気に、咄嗟に響が声を上げると、翔太郎とフィリップは訝し気に彼女を見つめる。

「敵じゃない……………？ いや待て。君は今、彼の事を『先生』と呼んだかい？」

「は、はいッ！ 私が通っている学校で、体育の授業を教えてくださいッ！
ものすつごいスパルタですが、その分きちんと体が鍛えられて人気ですッ！」

「はあッ!? え、体育教師？ 大道克己がかッ!？」

あり得ないと言わんばかりに克己を指差して叫ぶ翔太郎。その証拠に、克己は通信機の役割も担う携帯端末を取り出し、二人に見せる。

それはリディアンにおける彼の立場——つまり、彼が正真正銘『教師』である事を裏付ける証拠に他ならなかった。

続けて響が通信機を取り出し、克己が敵ではない新たな証拠を提示すべく通信を開く。

「響君か。どうした？」

「師匠、少し厄介な状況になっているので、よろしく願いますッ！」

『な、なんだいきなりッ!?!』

そこから流れるように事が進んだ。

響の通信機越しに弦十郎から説明を受けた二人は一先ず克己やこの場にはいない他のNEVERの四人が敵ではない事に納得し、自分達やWについて詳しく話を聞きたいから本部に来てくれるか、という弦十郎からの頼みにも頷いた。

彼らなりに、この状況で必要なものは情報だと解釈し、国連直轄の組織であるS・O・N・G.に向かうのは互いの利益に繋がると考えたのだろう。

『そういえば、レイカ君から報告を受けていてな。仮面ライダーアクセル——照井竜君もいるようだ。彼の話によれば、鳴海亜樹子という女性もいるらしい』

「亜樹子も来てんのか。まあ、風都タワーのすぐ近くにいたから当然か」

『今はレイカ君達と共にそちらに向かっている。しばらく待てばヘリが来るだろう』

「おう。……………それにしても」

翔太郎の視線が瓦礫に腰掛ける克己に向けられる。

「お前が誰かを護る為に戦ってるなんて、夢でも見てるみたいだぜ」

「ふん、どっかの半分こ怪人の生温さが移っただけだ」

「言われてるよ、翔太郎」

「お前もだろ、フィリップ」

お互いを小突き合う二人を見て、響がふつと微笑む。

「二人共、本当に仲がいいんですね」

「当たり前前だろ？俺とこいつは一心同体。たまにそりが合わねえ時

もあるが、かけがえのない相棒だ」

「相棒………………。素敵な響きですね」

「………………。そろそろ迎えが来る。あいつらに説明しないといけないな」

遠くから聞こえてくる音から、回収ヘリが近づいてくるのを感じた
克己は瓦礫から立ち上がり――

「――克己………………。？」

突然聞こえた、懐かしい声に振り向く。

それは、既にこの世にいないはずの者の声。あの時救えなかった、あの少女の声。

あり得ない。彼女がここにいるはずが無い。そんな否定的な考えが脳内を埋め尽くすが、どうしても視線は声の持ち主を探し続ける。

そして、見つけた。

物陰から出てきた、紅葉色の服装の女性。克己の記憶にある彼女と些か違うのは、彼女が生きてきた時間がもたらした成長が故の事だろう。

その名を口にすればたちまち彼女が消えてしまいそうな不安を抱えながら、克己は震える唇で、彼女の名を口にした。

「ミーナ………………。？」

Kの哀しみ／眠りの幼姫

数日後、ロンドンから帰還した翼とマリアを出迎えてから、S・O・N・G・本部の潜水艦内にて作戦会議が行われる事となった。

以前の予定では、マリアがこの場にいる事は無かったのだが、これにはもちろん訳がある。

数日前の戦いのすぐ後、最早黙ってS・O・N・G・の戦いを見られぬ、という事でマリアは弦十郎に連絡。S・O・N・G・への転属が決まったのである。

よって、今ここにいるのは国連のいざこざからはある程度解放された身のマリアである。

「では予定通り、作戦会議といきたいところだが、それより先にすべき事がある」

司令室と廊下を繋ぐ扉が開き、そこから数名の男女が入ってくる。翼とマリアは初対面な為、突然出てきた謎の男女に首を傾げる。

「今回の事件において、我々と協力関係を結ぶ事となった――」

―左翔太郎君、フィリップ君、照井竜君、鳴海亜樹子君、そして、ミーナ君だ」

弦十郎に紹介された彼らは、面識のある者も含めて改めて自己紹介した。

「彼らは別世界………所謂、並行世界の住人達で、本来ならば我々とは相容れぬ存在であったが、事件解決までは共に行動する事となった。仲良くな」

「並行世界？ ああ、なんですか、それ？」

響の問いかけに他の装者達も頷く。それに答えたのはフィリップだ。

「鏡合わせのように存在する無数の世界の事さ。だけど同一のものじゃなく、こちらとはどこか差異がある世界。僕らは君達とは違う世界の住人なんだよ。目立った違いを挙げるなら、僕達の世界にはシンフォギアやノイズなんてものは存在せず、ドーパントが事件を起こしている、という点かな」

「つまり、貴方達の世界はノイズの脅威が無く、ドーパントが暴れているというものなのね」

「ま、そういう解釈で大丈夫だ」

「でも、大丈夫なんですか？」

「なにがだい？」

少し心配な表情で、響がフィリップに問いかける。

「そっちの世界は今、仮面ライダーがいない状態なんですよ？ その時にドーパントが現れたら……………」

「それは俺達も心配しているところだ。……………だが、今すぐ戻ろうにも、俺達には世界を渡り歩く手段が無い」

「？ じゃあ、どうやってこっちの世界に来たんだ？ あのドーパント共を追って来たんじゃないのか？」

「それについては、少し説明が必要だな」

翔太郎の視線に気付いた弦十郎が藤堯に指示を送り、モニターに数枚の写真を表示させる。その中には翼が戦ったデスドーパント、クリス達が戦ったファイタードーパント、そして翔太郎とフィリップが変身したWと戦った異形のドーパントのものもある。

「彼らは『ラメンター』。あらゆる命に平等を与える事を目標に掲げた組織さ。こちらの世界に来る前から何度か交戦しているから、既に彼

らの素性は調べ尽くしてる」

「地球の本棚か。相変わらず便利だな」

「地球の本棚？ それはいったい……………」

「フィリップ君は地球の記憶全てを閲覧する事ができるんだよ」

「といつても、そこまで万能じゃなくてね。特定の情報を閲覧する為には、それに辿り着く為のキーワードが必要になる。加えて言うと、こちらの世界じゃ本棚に接続できないんだ」

首を傾げる者達に、フィリップが自らの推察を披露する。

確かに亜樹子が言った通り、フィリップの脳はある出来事の後に地球と接続し、その全ての記憶を閲覧する事ができるようになったが、それはあくまで彼らの世界の話。フィリップが繋がったのは彼らの世界の地球であり、こちらの世界の地球ではないのだ。同じ見た目でも、根本的に違えばそれは全くの別物であり、故にフィリップはこちらの世界で地球の本棚に接続できないのだ。

「ドーパント達の情報を既に掴んでおいて助かった。でなければ全く無知のまま、彼らと拳を交える事になってたからね。……………」さて、説明に戻るとしよう」

フィリップはモニターに視線を移し、説明を再開する。

異形のドーパント——ラメンターのリーダー、津神真一が変身する、半身が靄状になっているドーパント。彼が象徴する記憶の名は、『原初力』。スイスの錬金術師、パラケルススが主張した概念であり、身体と魂を結合する霊的な気体で病因と闘うものとされている。

デスドーパント——シアン・ゴールドイスが変身する、ロボロのローブを纏った死神のようなドーパント。記憶はその名の通り『死』。翔太郎達はかつてその名を騙ったドーパントと交戦した事があるらしいが、このドーパントは紛れもなく本物であり、その実力は並々ならぬものだ。リーダーの真一の執事で、彼とは主従関係に

ある。向こうの世界では、Wやアクセルが倒してきたドーパントを再生怪人として蘇らせ、戦わせていたなどしていた。

ファイタードーパント——元傭兵の黒芭燈迹が変身する、ロボットに酷似したドーパント。記憶は『戦闘機』。人型と戦闘機形態の二つの姿を持ち、人型は近距離戦闘両方を得意とし、戦闘機形態は遠距離攻撃に特化している。真一との関係は、全ての命に平等を与えるという彼の思想に賛同した友人とされる。数日前にアクセル達と交戦した際は、こちらの世界で同盟を結んだであろう者達にアクセルの戦い方を見せる為に手を抜いていたらしく、実力の半分も出してなかったそうだ。

「彼らの情報を統合してみたところ、彼らは全員、財団Xの関係者という事がわかっている」

「財団Xだと？ 我々の世界にもその組織は存在するが、やはり君達の世界でも……………」

「その口ぶりだと、こつちの世界でも奴らがいるようだな。それも俺達の世界と変わらない、死の商人そのものとして」

多くの哀しみを生み出しかねないガイアメモリを、利益の為ならば平気で悪事に利用する彼らに歯噛みする竜だが、彼の怒りはそれだけではない。彼の怒りは、これからフィリップが話すであろう事に対するものでもあるのだ。

「関係者と言っても、彼らは財団Xの職員として所属していたわけではなく、実験体として扱われていたんだ。もちろん、ガイアメモリのね」

「じ、実験体……………ッ!？」

衝撃の情報に装者達が驚き、特にF・I・S.の施設で隔離生活を送っていたマリア達は苦虫を噛み潰したような表情になっている。

「高性能のガイアメモリは一般販売されているものより高値で取引される分、それに見合うほどの力を使用者に授ける。だが、それが不完全なものだと財団の信頼に関わってくる。ある程度の予測は機械を使えば事足りるが、それでも不明なものは存在する。彼らはその為の実験体として扱われていたのさ」

治療薬を開発する会社を例に挙げてみよう。人体に救う病巣を取り除く為に彼らは治療薬を開発するが、いきなり投与などという愚行はしない。開発段階の中で、モルモットを使った実験を行うのだ。そこから導き出された結論を基に、この薬品はどこを改良すべきかを考えていく。そのモルモットが、ラメンターのメンバーに置き換わっただけの話なのだ。

だが、現実にはさらに過酷な運命を彼らに与えた。

シアン・ゴールデイスを除いたメンバーは、その家族が財団Xの職員であり、彼らによって実験体として扱われていたのだ。彼らからすれば『財団Xの為』という一言で片づけられてしまうが、当の本人達からすれば一口では足りないくらいの文句を叫びたくなる境遇だ。

それを聞いたこの場にいる者達は、自分の家族をモルモット扱いしていた彼らに怒りを露わにした。

「自分の子どもを実験に使うなんて、許せない……………ッ！」

「その者達に人の心はないのか……………ッ!？」

「財団Xにとつちや、家族もモルモット同然だっというのかよッ！」

「なによそれ……………レセプターチルドレンよりも質悪いじゃないッ！」

「許せない……………ッ！」

「酷すぎデスよッ！」

装者達がこの場にいる全員の意味を代弁するように叫ぶ。口々に怒りの言葉を吐き出す彼女達だったが、それを克己が「そこまでだ」と一言告げて収める。

「そいつらの運命に文句を言いたい気持ちもわかる。だが、今は相手の情報を得るのが先だ」

「大道はなんとも思わないのかッ！ 人の道を外れた者に、怒りが湧かないのかッ!？」

「死人で傭兵の俺達に訊く事か？」

「……………ッ！」

克己の返事に、翼はハツとして黙り込む。

「俺達は人道を外れた技術で蘇り、多くの命を奪った。お前達がそいつらに対する文句を言い続けるのなら、それは俺達にも言っているようなものだ。それでも言いたければ好きにすればいい」

「だ、大道先生達は——」

「『違う』なんて言わせないぞ。俺達もそいつらも、利益を求めて起こした行動だ。違いなんて、なに一つない。それにな、なにを言ったって、ラメンターの連中が実験にされていた過去は無くならないんだ。文句を言う事は許そう。だが、身近にもそういった連中がいる事を忘れるな」

その言葉に、誰もが黙り込んでしまう。しばらく彼女達を見つめ、これ以上文句を言う気はないと感じた克己はフィリップに視線を向ける。

「……………確かに彼の言う通りだ。今更なに言ったって、彼らが実験台にされていた事実は変わらない。悪事を働いた以上、僕達にはそれを正す責務がある。説明を再開しよう」

全員が頷き、フィリップはラメンターのメンバーについての説明を再開する。

「シアン・ゴールドデイス、黒芭燈迹両名については簡単に調べがついた。だが、津神真一については大まかな情報しか得られず、そこで検索は終わってしまった」

「なに？」

「津神真一の本は、途中から空欄だらけになった。それどころか、僕達に出会った時の事すらも記載されていなかった。地球の本棚は時間を基準に本数やその内容が増えるが、これは今までにない現象だった。彼についての最後の情報は、彼が数年前に心臓病に罹ったところで終わっている。だが、その謎は既に解けている」

この世界に来る前に、彼らにまつわる情報は一通り閲覧している。フリーリップは、津神真一の本が途中から空欄だらけになった原因を口にする。

「彼は自らの体から魂を切り離して、他人の体に憑依している。アルケウスとは身体と魂を結合する霊的気体であるという概念だ。他人の体に憑依する事ぐらい、彼にとっては容易い事なんだろう」

津神真一の経歴が途中から空欄だらけになったのは、他人に憑依して行動していたから。精神が彼のものであっても、行動を起こしているのは彼が乗っ取った体の本来の持ち主。津神真一の本に経歴が載っていないのも納得だ。

「だが、なにもメリットだけが存在するとは限らない。憑依先の肉体に慣れるまで、従来の戦闘力は発揮できず、一度憑依した人間にもう憑依できないというデメリットも存在する」

「俺達は何度かあいつとやり合った経験があるが、今回が一番弱かった。ま、弱いと言ってもそこいらのドーパントよりは強いんだけどな。サイクロンジョーカーじゃ大したダメージを与えられなかったし」

「憑依された人間はどうなるんだ？」

「僕達は一度、彼に憑依された人間から彼を切り離した事がある。憑依された人間から話を聞いてみたところ、意識や憑依されている間の記憶はほぼ無いらしい。あつたとしても酷く曖昧なもので、思い出すのも難しいそうだが」

そこで説明を区切ってフィリップが藤堯を見て頷くと、藤堯がキーボードを操作する。

モニターに映っているドーパント達の写真が横にスライドし、新たに一枚の写真を表示させる。そこに写っていたのは、エルフナインと同じくらい幼い女の子だ。どこか物憂げな表情の彼女の隣には、アルケウスドーパントに変身する真一の姿がいる。

「そして、最後の一人……いや、彼女の場合はメンバーに数えられないかもしれないが、説明しよう。……津神真一の妹、津神叶^{かなえ}。ラメンターのメンバーがほとんどドーパントに変身する中、彼女だけは変身していない。というより、彼女がガイアメモリを使用している場面に立ち会った事がない。可能な限り経歴を確認しようと地球の本棚に接続してみたが、彼女についての情報が記載されているであろうページは全て破かれていた」

如何に地球の本棚といえども、万能ではない。今回のように中身が全て破かれたように削除されていたり、情報主の都合などで施錠されて閲覧できなかつたりするケースも存在するのだ。

「彼女についての情報を得られたのは、津神真一の情報を閲覧した時に見た家族構成にその名があつたからだ。外見的な特徴も一致する。それ以外は『謎』の一言に尽きるが……一つだけ、気になる事があつた」

「気になる事？　なんだ、それは？」

克己の質問に対するフィリップの答えは、この場にいる者達全員を

驚愕させるものだった。

「僕達の世界でラメンターが事件を起こす前に、彼女は故人となっている。つまり、もうこの世にいないはずの人間なんだ」

——忌城、王室。

玉座に就くキャロルの眼下には、彼女によって創造されたナイトクォーターズ終末の四騎士の三機があり、その一機であるガリイが大量の人間から撰取した『想い出』を、未だに起動していない最後のオートスコアラ——ミカに分け与えていた。

結果は成功。大量の人間の命というコストを支払い、遂にミカは起動した。

「ミカを動かすだけの想い出を集めるのは、存外時間がかかったようだな」

「嫌ですよ、マスター。これでも頑張ったんですよ。なるべく目立たずに事を進めるのは大変だったんですから」

「まあ、いいだろう。これでオートスコアラは全機起動。計画を次の階段に進める事ができる。……………どうした、ミカ」

起動したミカが優れない表情をしている事に気付いたキャロルが声をかけると、ミカは俯いて答える。

「はううううう……………。お腹が空いて、動けないゾ……………」

「……………ガリイ」

「……………あく、はいはい。ガリイのお仕事ですよ……………」

「ついでに「仕事、こなしてくるといい」

ミカは他三機を凌駕する戦闘力の持ち主だが、その代償に燃費がす

こぶる悪い。他三機が軽く動く量の想い出を投与しても満足に動く事は叶わず、キャロルはガリイに彼女を動かす為の想い出を採集させているのだが、戦闘可能になるまでにはもう少し時間がかかるだろう。

渋々といった様子でキャロルの命令を受けたガリイは新たな『想い出』を手に入れるべく動き出そうとしたが、その前に主人に進言する。「そういえばマスター。エルフナインは連中に保護されたみたいですよ。」

「把握している」

主人の返事を受け取った後、ガリイはテレポトジェムを割ってその場から姿を消す。

残されたキャロルが人形達が鎮座する王室で、次はどう行動を起す予定だったか、と考えていると――

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪

どこからか、歌が聞こえてきた。

シンフォギア装者が歌うような、戦の始まりを告げるものではない。歌詞もなく、ただただか細い、か弱い声で音色を奏でている。この城において、このような歌を口ずさめるのは一人しかない。

(……………目覚めたのか)

歌声に引き寄せられるように王室を後にしたキャロルは、歌声が響き渡る廊下を渡り、その根源となつていいる者がいるであろう部屋の前に立つ。

扉を押し開けると同時に歌声も止み、先程まで歌を口ずさんでいた者がこちらを向く。

ゴスロリ調の服に身を包んだ彼女は、一見作り物めいた美しさと愛

らしさを兼ね備えており、成人すればさぞや美人になるであろうと思わせられる。だが、そんな事など全て忘れさせてしまうようなものが、彼女にはある。

冷たい瞳だ。まるで熱というものを感じさせず、見るもの全てを凍てつかせんとばかりの目つき。その持ち主が十代前後の女の子なのだから、少し不気味に思えてしまう。

「……………キャロル・マールス・デインハイム」

「オレの名を知っているのか。お前の兄か？」

「そう……………兄様が教えてくれたの……………でも、私はその前から知ってる」

「なに……………？」

「私の目は……………特別だから」

自分の目元に触れた後、ふっと視線をキャロルから外す。

「……………兄様は元気？」

「なぜオレに訊く。そんなの、お前が訊けばいい事だろ」

「兄様、誤魔化すの。どんな時だって、『大丈夫』の一点張り……………でも、その度にいつも、哀しい顔をしてる……………」

すっと立ち上がった少女——津神叶はゆらりとした動きでキャロルに近寄り、少しだけ彼女をどこまでも深く沈んでいきそうな黒い瞳で見つめた後、問いかけてくる。

「二人で一人の勇者様……………見た？」

「Wの事か？」

「『W』……………風の街を護る勇者様。赤い勇者様と一緒に、兄様達と戦った人達……………来てたんだ……………うん、それなら、いいよね……………」

「随分と嬉しそうだな。お前達の敵じゃないのか？」

「ううん、敵じゃないよ……………。だって、私達を殺してくれるんだもん……………」  
「殺してくれる……………？ どういう事だ？」

平然と聞き捨てならない事を聞き、キャロルは耳を疑う。自分達を殺す相手を、なぜ彼女は『敵』と見做していないのか。問いかけてみると、叶は静かに答えてくれた。

「私も兄様も、もう壊れてるの……………。あの人達だけが、私達を殺<sup>たすけ</sup>してくれるの……………。可哀想な兄様……………。いっぱい戦って、いっぱい消えていく兄様……………。もう、終わらせてほしいの……………」  
「……………ッ！」

その目は、子どもがしていい目ではなかった。どこまでも暗く、妖しくも美しい瞳で、自分という個の消滅を意味する『死』を、彼女は望んでいる。

「……………クソッ！」

どこから湧き出たのかわからない怒りが、彼女に悪態を吐かせた。言い知れぬ怒りを宿した拳が壁に叩き付けられるが、返ってくるのは壁を殴りつけた拳に走る激痛のみ。

瞬間、キャロルは背筋が凍るような殺気に襲われ、思わず身を竦ませた。

「……………お姉ちゃん、逃げて。兄様が来る」

叶が言わずとも、巨大な殺意を持った何者かがこの部屋に近づいてくるのが嫌でも感じられ、キャロルは自分が入ってきた扉を開けようとし――



「下がって」

「……………ッ!？」

叶の言葉を受けて咄嗟に身を引いた直後、さっきまで彼女の首があつた空間を霧状の爪が貫いていた。僅かに開かれた扉の隙間から、アルケウスドーパントの爪が伸びてきたのだ。

「貴様……………ッ！ 叶になにをしたッ！」

扉を押し退けて入ってきた怪人——アルケウスドーパントがキャロルに対して敵意を剥き出しにする。その身から噴き上げる威圧感キャロルをしても畏怖させ、無意識に後ずらせる程のものだ。

「兄様、やめて」

叶の声が響き、彼女に視線を移したアルケウスドーパントは妹の体が傷ついていない事を確認し、先程まで放っていた威圧感も、まるでそれが嘘だったと思えてしまうように霧散した。

「私はお姉ちゃんと話してただけ……………。なにも悪い事はされてないよ……………」

「……………本当だな？」

「……………ああ、そいつの言葉に嘘はない」

「……………それならいい」

「私は王室に戻る。なにか話があれば来い」

無意識に乱れていた呼吸を落ち着かせたキャロルはそう言い残し、部屋から出ていった。

「……………よかった。殺されなくて」

ホツと安堵の息を吐く叶の視線の先には、首元を串刺しにされて死亡しているキャロルの姿がある。が、叶が目線をアルケウスドローントに向けた瞬間、そこにあつたキャロルの死体は幻のように消えてしまった。

「兄様、あのお姉ちゃんは計画に必要なんでしょ……………？ なら、殺しちや駄目……………」

「……………そっちの俺は殺したのか。次からは気をつけないといけないな。後でシアンにラベンダーティーでも淹れてもらうか」

「……………兄様」

「？ どうした、叶」

先程の殺気が嘘のように消え去り、その姿からは想像もできない優しい声で答える兄に、叶は両腕を伸ばす。

「抱っこ……………」

「まったく……………赤ん坊の頃から変わらないな、お前は」

「そのままで、いい……………」

メモリを抜いて人間の姿になろうとしたところを叶に言われ、アルケウスドローパントの動きが止まる。

「あ、ああ……………わかった」

ドローパントに変身している時の自分の両手には鋭い爪が生え揃っているので、大切な妹を傷つけないよう気を付けながら、叶を抱え上げる。

「これでいいか？」

「……………うん」

なにも知らない人間から見れば、ところどころが靄状になっている怪物に少女が抱きかかえられているような構図だ。しかし、怪物に彼女を傷つける意思は毛頭ないし、少女も彼に対して恐怖など抱いていない。

「……………ねえ、兄様」

「ん？」

「まだ、そこにいる？」

「……………ああ、いるよ」

「ん……………よかった」

体は違えど、兄の魂はまだある事に安堵した妹は、自分を抱きしめている怪人の胸に顔を埋め、抱きしめる力を強める。それに応えるように、怪人もまた彼女を抱きしめる力を強め、彼女がまだこの腕の中にいる事の安堵感を得る。

(この子の為なら、俺はなんだってやってやる……………。たとえば、この魂まで朽ち果てようと……………必ず……………ツ！)

亡き妹の温もりに、自らの行動理念を思い出す。

悪魔と罵られようと、いかなる懲罰を受けようと構わない。ただ、この子が幸せになれば、それだけでいい。

その為に自分を見失い、消えていく事になろうとも、必ず果たしてみせる。

——あらゆる命に平等を。あらゆる魂に救いを。

——あらゆる者達に、安らぎを。

愛する家族がなにを想っているのかも知らぬまま、怪物は突き進む

## Dの策略／死霊の世界より

「新型ノイズに破壊された天羽々斬とイチイバルです。コアとなる聖遺物の欠片は無事なのですが……………」

「エネルギーをプロテクターとして固着させる機能が損なわれている状態です」

「という事は、セレナのギアと同じ……………」

「マリアが妹の形見として持つシンフォギアも、今の天羽々斬とイチイバルと同じ状態なため、それを使用する事は叶わない。ネフィリムとの決戦において彼女が本来ならば起動しないはずのそれを使えたのは、家族と仲間の想いを受け止めたが故に起きた奇跡なのだ。」

「もちろん、直るんだよな？」

「私を誰だと思ってるの？ シンフォギアの生みの親を舐めないでもらいたいわね」

「流石櫻井理論の提唱者……………。心強いにも程があります」

「だが、すぐに修理できるわけではない。それなりに時間がかかるだろう。その間動けるのは……………」

「私だけ、ですよ」

「そんな事ないデスよッ！」

「私達だって——」

「駄目だ」

切歌と調が反論するが、弦十郎は彼女達の出撃を許可しない。彼の言葉はこの場にいるほとんどの者達の気持ちに代弁したものであり、弦十郎の言葉を否定する者は誰一人現れない。

「LINKERで適合係数の不足値を補わないシンフォギアの運用が、どれほど体の負荷になっているのか……………」

「まだ君達に合わせて調整したLINKERが無い以上、無理を強いる事はできないよ」

「……………どこまでも私達は、役に立たないお子様なのね」

「……………メデイカルチェックの結果が思った以上によくないのは知っているデスよ。それでも……………」

「うんうん、わかるよ。二人の気持ち」

暗い表情を浮かべる二人の肩に、亜樹子がポンと手を乗せる。

「私も、竜君が戦いに行く時は、いつもその後姿を見ているだけだもん。なにか助けになる事はないか。自分も一緒に戦えないか。そんな事、四六時中考えてる。それだけで何事も解決したら苦労しないんだけど、現実ってば非情だよな」

何度、戦地へ向かう彼を見送った事か。無傷で帰ってくる事もあれば、傷だらけになって帰ってくる事もある。自分にもなにか力があれば、彼の痛みを少しは和らげる事ができるかもしれない。そんな事を考え続けても、現実が変わらず、彼は事件とあらばすぐに戦士となって現場へ赴く。戦う力を持たない自分に来る事は、彼の無事を祈る事だけだ。

「でもね？ そんな私でも、竜君の助けになってるのがわかったの。本当に嬉しかった。とんでもないぶきつちよさんだけど、どこまでもみんなの事を大切に想ってる竜君の助けになってるのが、堪らなく嬉しかった……………。今の二人はまだ戦えないけど、いつか響ちゃん達と一緒に戦う時が来る。それまでは、ここでみんなが無事に帰ってくるのを待つてようよ」

「亜樹子さん……………」

「ま、そういうことだ」

「こんな事で仲間を失うのは、二度とごめんだからな。その気持ちだけで充分だ」

亜樹子の言葉に賛成の意を示したクリスと翼が続くが、調と切歌はまだ少し納得のいっていない様子だった。そんな二人の姿に「しようがない奴らだな」とでも言いたげな表情の翔太郎だったが、ふと隣に立つ竜の顔を見てニヤツとする。

「おいおい、照井君どうした？　顔真っ赤だ——うおわッ!?」

「……………俺に質問するな……………」

「こ、この野郎ッ！　冗談で言ったただけだろッ!?　危うく当たるところだったじゃねえかッ！」

茹蛸のように顔を真っ赤にした竜をからかったところを顔面にストレートを喰らいかけた翔太郎がバクバクする心臓を押さえて叫ぶが、竜は知らんとも言いたげに腕を組んで澄まし顔をしている。

「ふっふくん♪　照れ屋さんだなあ竜君は♪　どや？　ここらで一発ちゅーしちゃう？」

「うええッ!?　ここでッ!?」

「ちゅーデスとッ!?」

「大胆……………」

「そ、そういう事は家でやれつてのッ！」

亜樹子のセリフに響と切歌と調が黄色い声を上げて両手で顔を覆うが、指と指の隙間からチラチラと竜と亜樹子の様子を窺っているが、クリスは顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまっている。

「そういうえば、二人はどういった関係なのですか？　恋仲のように思えますが、苗字が……………」

「私、向こうの世界じゃ探偵事務所やってね。お父さんから継いだ事務所が通り名なんで、旧姓名乗ってるの。戸籍上は照井亜樹子で」

すッ！ あと、別に律義にならなくていいから、ため口でいいよ」  
「なるほど、夫婦の間柄めおとだったというわけね。それなら、そのラブラブっぷりにも納得がいくわ。でも、どうして『所長』呼びなのかしら？ 奥さんなんだから、名前で呼ぶべきじゃないの？」  
「所長は、所長だ……………」

少し恥ずかしそうに竜が言うと、「以前の事を蒸し返す事になるが」とフリリップが口を挟む。

「僕達が亜樹ちゃんの事を名前で呼ぶのはどうだろう？」

「亜樹子」

「はい」

「あくき〜こ」

「は〜いッ！」

「人の妻を気安く呼ぶなッッ!!」

翔太郎がふざけて亜樹子を呼び続けると、竜はいつものクールフェイスなど忘れて顔面を崩壊させた。そんな彼に一同から笑い声が漏れるが、弦十郎が話題を切り替えるべく咳払いをすると、全員が真剣な表情に戻る。

「翔太郎君達の紹介が終わったところで、もう一人紹介する者がいる。エルフナイン君だ」

新たに司令室に入ってきたのは、ローブ一着の下にはパンツのみしか身につけていない人物だ。

「なんて破廉恥な……………」

「しッ！ 言ってるなッッ」

傍から見れば痴女としか受け止められない恰好に誰もが最初に思



う事を竜が呟くも、翔太郎に小突かれる。

エルフナインと最初に出会ったのはクリスで、S・O・N・Gに保護された時に露出を隠すべく服を着せようとしたらしいが、本人がそれを断ったらしい。曰く、『脱走デビューに相応しい一張羅』らしいが、聞いても碌でもない事くらい容易に想像できたので聞かないでいた。

「ボクはキャロルに命じられるまま、巨大装置の一部の建造に携わっていました」

皆の視線を受けながら、エルフナインはポツリポツリと脱走の経緯を説明し始めた。

「ある時、その装置が世界をバラバラに解剖するものだとしてしまい、目論見を阻止する為に逃げ出してきたのです」

「世界をバラバラにとは、穏やかじゃないな……………」

「それを可能にするのが、錬金術です。ノイズのレシピを基に作られたアルカ・ノイズを見ればわかるように、シンフォギアを始めとする万物を分解する力は既にあり、その力を世界規模に拡大するのが、建造途中の巨大装置『チフオージュ・シャトー』になります」

「チフオージュ・シャトー？　なんだそりや？」

「歴史に名高き聖女、ジャンヌ・ダルクの部下だったジル・ド・レが根城としていた城の名だよ。聖女の死を経て黒魔術に手を出したジル・ド・レは、そこで大量の子どもを惨殺したとされている」

「うへえ、なんて場所の名前つけてんだそいつ……………」

「装置の建造に携わっていたという事は、君もまた錬金術師なのか？」  
「はい。ですが、キャロルのように総ての知識や能力を統括しているのではなく、限定した目的の為に作られたに過ぎません」

「作られた？」

聞き捨てられない言葉に反応した響に、エルフナインが頷く。

「装置の建造に必要な最低限の錬金知識をインストールされただけなのです」

「インストール………………。エルフナインちゃん、もしかして、君は人間じゃないのかい？」

「……………はい、その通りです」

エルフナインの外見、セリフを基に立てた仮説を証明する為のフィリップの問いかけに、エルフナインは素直に答えた。

自らをヒトではないと認めたエルフナインに、驚愕の視線が注がれる。

「僕なりの考察だが、君はそのキャロルという人物によって生み出された存在。インストールという単語からロボットかとも考えたが、君の体には間違いなく血が流れている。では、限りなくヒトに近いが、ヒトではない存在と考えるべきだ。そこまでいけば、答えは自ずと導き出される。君は、ホムンクルスなんだね？」

僅かなセリフだけで自分の正体にたどり着いたフィリップに、エルフナインは感嘆の感情が込められた視線をフィリップに向け、頷いた。

「ホムンクルス？」

「錬金術によって作り出された人工生命体の事さ。フラスコの中で生きていけない、という話を聞いた事があるが、君という実物からして、それは違ったものらしいね。正直、興味深くてゾクゾクするよ」

「おい、フィリップ。そういうマッドサイエンティストみたいな言い方はよしてくれよ」

「む、そうだった。機嫌を損ねてしまったかい？ 謝ろう」

「い、いえ、大丈夫ですよッ！ 人は誰しも、色々なものを知りたがるものだと理解していますからッ！」

「話を続けてくれるか？」

腕を組んで話を聞いていた克己に催促され、エルフナインは説明を再開する。

「先程も言いましたが、ボクがインストールされたのはあくまでシャトー建造に最低限必要な錬金知識だけなので、計画の詳細までありません。ですが、世界解剖の装置チフォージュ・シャトーが完成間近だという事はわかりますッ！　お願いです、力を貸してくださいッ！　その為にボクは、ドヴェルグⅡダインの遺産を持ってここまで来たのですッ！」

「ドヴェルグⅡダインの遺産？」

響が首を傾げると、エルフナインは保護された時から肌身離さず持っていたアタッシュケースを開け、そこに納められていた箱から、なにかの欠片のようなものを取り出す。

「アルカ・ノイズに……………、錬金術師キャロルの力に対抗しうる聖遺物——魔剣ダインスレイフの欠片です」

「ダインスレイフ……………なるほどね」

エルフナインの持つ聖遺物の欠片が自分達にどのような利益をもたらすのかを、フィーネは瞬時に理解したのだった。

——翌日、響は未来を始めた友人達と共に帰路についていた。新たな敵の出現や翔太郎達といった異世界の協力者など、先日は色々あったが、響達には学生という身分がある。弦十郎達大人の仕事がS・O・N・Gの運営であるのなら、響達学生の仕事は勉学に励む事だ。

しかし、エルフナインの話聞いてから、響は授業中も彼女の事で

頭がいっぱいだっただ。

(ホムンクルス……………性別はないって、エルフナインちゃんの体ってどうなってるのかな?)

フィリップによって正体を看破されたエルフナインは素直に自分が人外のものであると認め、さらに自分には性別というものが存在しないとも告げたのだ。それだけでも怪しき満載なのだが、その後、『自分は怪しい者ではない』と自分から言ってしまったので、尚の事怪しく思われてしまった。尤も、それだけで寄る辺の無い彼女を追い出すほどS・O・N・Gも鬼畜ではない。彼女は変わらず本部で保護されている。

「私的には、ついてるとかついてないとかは、あんまり関係ないと思うんだけど……………」

「え、えええええッ!？」

性別について悩んでいる矢先に未来がそのような事を言い出したので、思わずあげた叫び声が周囲に響き渡った。

「ビッキ―、なにをそんなに驚いてるの?」

「だ、だって、なにがどこについてるのかなんて、そんな……………」

「ついてるついてない、確率の話です。今日の授業の」

「まくたぼんやりしてたんでしょ?」

「あ、あははは、そうだったよね……………」

響も年頃の高校生だ。そういう事に関する興味はそれなりにある。しかし、この場において自分一人だけが友人達と違う事を考えているとはバレたくなかったので、咄嗟に作り笑いを浮かべる。

「……………この頃、ずっとそんな感じ」

「……………ごめん、色々あってさ」

不機嫌な表情の未来に謝るが、未来は許してくれない。すると、二人の間に流れる微妙な雰囲気を感じいた弓美が若干焦った様子で話題を切り替えてきた。

「そ、そういえば聞いたツ!? 克己先生の噂ッ!」

「え? 噂? 克己先生の?」

表側の立場として弦十郎からリディアンリディアンの体育教師という役職を与えられた克己だが、彼にまつわる噂があるとは知らなかった。しかし、それもそのはずだそうで、弓美が言うにはその噂は数日前から広まってきたものだそうだ。

「その噂とはズバリッ! 『克己先生には彼女がいる』ッ!」

「え、ええッ!」

思いもしなかった噂の内容に驚愕する。

学校内での克己の評価は、運動部に所属している生徒達を除いた場合、『良くも悪くもない』といったものだ。生徒が起こした問題は自分が解決できる範囲であれば解決に乗り出すし、相談を受けた場合は真面目に受けてくれる。が、それだけだ。これといって他の教師と違ったところは見受けられず、強いて挙げるとすれば運動部員からはいい印象を持たれているという点だ。

学生には秘密になっているが、克己は傭兵としての経験がある。N E V E R 部隊のリーダーという事もあって、どこをどう動かせば体に負荷をかけずに行動できるのかを指導するのはお手の物だ。

こういつては何だが、響はそういった色恋に関する噂は彼には似合わないと思っていたが、まさかそのような噂が広まっていたとは。

「最近の克己先生ってさ、自分が担当する仕事が終わり次第、すぐ帰っ

てるじゃん？ いやまあ、仕事が終われば帰るのは普通なんだけ  
さ、その時の勢いが半端じゃないんだよね」

「半端じゃない？」

「そ。なんでも、『今すぐに帰らなきゃッ！』って言ってるみたいに凄  
い勢いで帰ってるらしいよ？ その勢いたるや、まるで風みたいだつ  
て。陸上部の部長でもまるで追いつけないぐらいの速度だったらし  
いよ」

「……………もしかして」

「ビツキー、もしかして知ってるの？」

「そうなんですかッ!? あの人の彼女さんって、いったいどんな方な  
んですか？」

「いや、彼女じゃないと思うんだけど……………。どっちかと言うと

「……………ね、ねえ……………あれ……………」

答えようとした刹那、震えた声を上げた弓美が、同じく震えた指を  
向ける。

「なに……………ッ!?」

血色を失い、倒れ伏す人間達。その中心で一人、生気をまるで感じ  
られぬ者が一人。

「聖杯に想いは満たされて……………、生贄の少女が現れる」

あの夜。キャロルやアルケウスドーパントと共に現れたオートス  
コアラー、ガリイが性根の悪そうな笑みを浮かべた。

「……………それにしても、こうしてまたお前と会えるとは思わな  
かった」

「うん、私も………………。私が気付いてた頃には、もう事件は解決されてたから……………」

響達がガリイと遭遇する少し前。潜水艦の内部にある談話室では克己とミーナが会話していた。

他の四人は各々の仕事があるためこの場にはいないが、全員既にミーナとの会話は済ませており、克己も当然話していたのだが、やはり死んだと思っていた女性が目の前にいるという事実は、彼をしても喜ばざるを得なかったのだ。

「生き残ったのは、お前だけか？ 他の連中も……………」

「……………」

「……………そうか」

克己達が風都を襲う前に、とある組織から救い出した超能力者達。ミーナが生きているのなら、他にも生き延びている者がいるのではないか、と思ったが、首を振るミーナを見て、その期待は落胆へと変わってしまった。

「でも、みんな感謝してると思う。あの場所に居続けても、満足な未来なんてなかった。克己達が、みんなの希望になってくれたから」

「俺達が希望、ね。ハッ、死神に希望を抱くなんてな」

どこか自嘲気味に言う克己だったが、ミーナはそれをすぐに否定した。

「死神なんかじゃない。克己達は、私達にとって紛れもない英雄だったよ。風都の誰もが、貴方達をテロリストだと思ってるけど、私だけは違う。この命は、貴方達に救われた命だから……………」

自分の胸元に手を当てて微笑むミーナ。その姿を見て、克己は一

瞬、夢でも見ているかのような感覚に陥った。

「……………だから、私はあいつらが許せなかった。あいつらは克己達の事を、最悪のテロリストだとしか思ってたから」

「左達の事か？」

「あの人は、貴方達がただの悪人じゃないって理解してくれた。だからもう許してる。私が許せないのは、ラメンターの事」

なんと、彼らはWとアクセルに対抗する最強戦力として克己達を蘇らせようとしていたらしい。それまで出現させてきた再生怪人のように、完全な殺戮兵器として使役するつもりだったようで、その為に彼らについての記憶を最も持っているミーナに接触してきたのだと言う。

しかし、その計画は失敗。デスドローパントの力を用いても、なぜか彼らの前にNEVER部隊は姿を現さず、ミーナを救出すべくやって来たW達と戦闘になったようだ。

蘇生の間に何らかの事故のようなものがあり、その場で蘇るはずだった克己達はW達のいる世界ではなく、シンフォギアやノイズといったものが存在するこちらの世界に飛ばされてきた——。これはフィリップが立てた仮説である。

「フィリップが言うには、克己達が自分達と戦った時と比べて性格が丸いのは、私の記憶を参考に蘇らせた影響かもしれないんだって。私の記憶にあるみんなは、まだ死神になる前のみんなだったから」

克己達が真の意味で死神の集団へと変貌したのは、とある男の卑劣な罠によってミーナを除いた者達が殺害された事が切っ掛けだった。

あの時こそ、死神の一団の始まり。克己達は『人は皆、悪魔である』という考えに行きついてしまい、あらゆる命を狩り取る邪悪な存在となってしまった。

故に、そうなる前の彼らの記憶を持っていたミーナを根源に蘇った



克己達には、翔太郎達と出会った時には失われていた、『誰かを救いたい』という善性があったのだ。

ミーナの知っているNEVER部隊は文字通り『死神』のような存在だと考えていたラメンターの落ち度が別の世界では良い方向に転がっていた事に、ミーナはS.O.N.G.の職員達から克己達の活躍について聞かされた時に気付いたのだ。

「またみんなに会えて、嬉しかった。これで、あの時言えなかったお礼を言える」

「ミーナ……………」

「克己、本当に——」

その瞬間、潜水艦内に敵の出現を告げるサイレンが鳴り響いた。

「——キャロルちゃんの仲間……………だよね？」

「そして、貴女の戦うべき敵……………」

「違うよッ！ 私は人助けがしたいんだよッ！ 戦いたくなんかないッ！」

「……………チッ！」

まるで戦意を感じられない返事に嫌気が差したガリイが舌打ちと同時に無数のジエムを放り投げる。

無造作に地面に跳ねたジエムは落下の衝撃で砕け、アルカ・ノイズが姿を現す。

「そんな……………ッ!?!」

「ノ、ノイズッ!?!」

人類じぶんたちの天敵の出現に、戦う力を持たない未来達の顔に恐怖の色が浮かぶ。

「貴女みたいに面倒くさいのを戦わせる方法は、よく知ってるの」  
「こいつ、性格悪ッ!」

「あたしらの状況もよくないってッ!」

「このままじゃ……………」

「頭の中のお花畑を踏みにじつてあげる」

創造主のキャロルをして『性根の悪い』と言わしめるほどの性格の悪さを持つガリイの戦術は『卑劣』の一言に尽きる。響が GANG ニールを纏い、戦いの歌を奏でるように仕向けてきたのだ。

今すぐにもシンフォギアを装着しなければ友人達に危機が及ぶ。この場においてアルカ・ノイズを倒せるのは、響だけだ。

しかし――

「げほッ、げほ……………ッ!」

「響……………?」

聖詠を唱えようとして噎せ込んだ響に、未来の怪訝な視線が向けられる。

「いい加減、観念しなよ」

聖唱を口にしない響に苛立ちを含ませた声でガリイが急かす。しかし、そこで出た響の答えは、彼女にとっても意外なものだった。

「GANG ニールが……………応えてくれないんだッ!」

その言葉に思わずピタリと動きを留めたガリイは、歌を歌えない状況の響をどうすべきかと考え始める。

(ギアを纏えないこいつと戦ったところで意味は無い……………)。こ

こは試しに、仲良しこよしを粉と挽いてみるべきか……………)

アルカ・ノイズを出せば、如何に戦う事を拒んでいる響といえどシンフォギアを纏うはずと踏んでいたが、聖詠が浮かばないとは想定外だった。これでは、ミカを動かす為の『想い出』の採取以外の目的が果たせない。

是が非でも引きずり出すべきか、それとも目的は果たせそうにないと見て撤退するか、と悩んでいると――

「あく、まだるっこしいなッ！」

「……………?」

痺れを切らしたように寺島が前に踏み出し、お嬢様とは思えないような口調でまくし立て始めた。

「あんたと立花がどんな関係か知らんけど、だらだらやんのなら、あたしら巻き込まないでくれる?」

「……………お前、こいつの仲間じゃないのか?」

「冗談ッ！ たまたま帰り道が同じだけ。ほら、道を開けなよ」

「……………」

ガリイはじつと寺島を見つめていたが、やがて顔を歪めてアルカ・ノイズに道を開けさせた。

その瞬間、寺島が友人達に叫ぶ。

「今ですッ！」

「ビツキー、行くよッ！」

寺島が走り出し、安藤に連れられて響達も走り出した。

咄嗟の行動にガリイの顔に一瞬だが驚愕の表情が浮かび、その間にも響達はアルカ・ノイズの間を駆け抜けていく。

「あんたって変なところで度胸あるわよねッ！」

「去年の学祭もテンション違ったしッ！」

「嘘、さっきのはお芝居ッ!？」

「たまには私達がビツキーを助けたっていいじゃないッ！」

「我ながらナイスな作戦でしたッ！」

寺島の決死の行動によつて、徐々にガリイとアルカ・ノイズとの距離が空いていく。

「……………が、忘れてはならない。」

「——と、見せた希望をここでバツサリ摘み取るのよねッ！」

ガリイは、性根が腐っている。

寺島の言葉がハツタリだという事は瞬時に理解していた。それを指摘せず、敢えて道を開けたのは、彼女達に『逃げられる』という希望を与え、後にそれが儚いものだと理解させ、心を折り砕く為。

希望を持ち上げれば持ち上げるほど、叩き落した時の絶望は計り知れない。誰もが諦めかけたその時こそ、立花響は戦いの旋律を奏でる。

「上げて落とせば、いい加減戦うムードにもなるんじゃないかしら？」

アルカ・ノイズを引き連れ、ガリイが足元を凍らせてスケートの要領で響達を追ってくる。

「こんな追いかけてっこ、アニメじゃないんだからッ！」

「……………ッ！ うわッ!？」

アルカ・ノイズの一体が伸ばした触手が響の靴を掠め、分解する。分解されたのは靴のみだったので足まで分解される事はなかったが、

それでも靴が分解された事に驚いた響はバランスを崩してしまい、その手から装着できなかつたガングニールのペンダントが飛び出してしまふ。

「ペンダントが……………ッ！」

「はあああああッ！」

宙に舞うペンダントを茫然と見つめるしかできなかつた響の視界に、一つの影が走る。

そうしてガングニールのペンダントを手に取つたのは、マリアだ。

「—————Granzizel bilfen gungnir  
zizzl」

その身に纏うは、裂槍。仲間と心を繋ぎ、手を握り合う響の撃槍と違い、あらゆる悪を貫く、無双の一振り。

「黒い……………ガングニール……………」

「これなら……………戦えるッ！」

漆黒のアームドギアを右手に、マリアはガリイとアルカ・ノイズを迎え撃つた。

「—————ガングニールでエンゲージッ！」

ガリイとアルカ・ノイズの出現に気付いたS・O・N・Gの司令部に緊迫した空気が満ちる。誰もが真剣な面持ちでそれぞれの成すべき事を果たすべく行動しており、漆黒のガングニールを装備したマリアのサポートに徹する。

「マリア君ッ！ 発光する攻撃部位こそが解剖部位だッ！ 気を付けて立ち回れッ！」

「……………ッ！ 新たなエネルギー反応を検知ッ！」

しかし、状況は絶えず変化し続ける。

新たな脅威が、迫りつつあった――

「――想定外に次ぐ想定外。捨て置いたポンコツが、意外なくらいにやってくれるなんて……………」

「私が、貴女を倒してあげるッ！」

瞬く間にアルカ・ノイズを殲滅してみせたマリアに邪悪な笑みを浮かべるガリイに、マリアが裂槍を手に迫る。一気に突き出された穂先をガリイが氷の刃を以て迎撃しようとした刹那――

「申し訳ありませんが、彼女との戦いはお預けにさせてもらいます」

ガキンツ！と、甲高い金属音が鳴り響き、槍を弾かれたマリアが後退する。

そこに立つのは、ボロボロのローブに身を包んだ骸骨。死者の世界からやって来た、生者の魂を狩り取る存在。

「……………お前。マスターからはなにも聞かされてないですよ？」

楽しみを奪われたガリイが苛立ち混じりにデスドローパントを睨みつけると、彼はマリアの槍を弾いた鎌を立て、自分がここに来た理由を口にする。

「まだ彼女達は呪われた歌を奏でる準備が整っていないご様子。ですが、準備が整った際、いつでもそれを奏でられるようにするよう」

仕組ませる事はできませんので、その為に参上したわけです。貴女が彼女と戦うのは、それからでもよろしいでしょう」

「……………チツ！」

嫌々ながらも舌打ちしてから後を任せるようにガリイが下がると、デスドローパントは彼女に感謝の言葉を述べ、マリアを見つめる。

「あの夜以来ですね、マリア・カデンツァヴナ・イヴ様。ガリイ様とお時間を邪魔して申し訳ございません」

「丁度いいわ。ここで貴方も倒せば、少しはみんなが戦いやすくなるわ」

「これはこれは……………。無理を押し通してガングニールを纏っていないながら、私に勝利しようとは。その気概には感服せざるを得ません。ですが、まず貴女が戦うべき相手は、私でもガリイ様でもありません」

左手に青い人魂のようなものを出現させたデスドローパントにマリアが警戒するが、その人魂が彼女に放たれる事は無く、彼女の少し前の地面に着弾した。

着弾した人魂はやがて一人分の大きさまで燃え上がり、いったいなにが起こるのか、とマリアは警戒しながら槍を構えた、その瞬間だった。

「望 Seilien ま coffin ぬ と airgetlamh 寂 い 笑 tron 顔」

蒼炎の向こうから聞こえたのは、妖しくも美しい歌声。響き渡るそ

れは———聖詠。

「そんな……………まさか……………ッ！」

それを聞いたマリアの顔が青ざめる。

——その歌が意味するものを、彼女は知っている。

——その歌を口ずさむ者を、彼女は知っている。

——それは、いつだって忘れる事はなく、いつだって自分を支えてくれた、ある少女の歌声。

「貴女の敵は、貴女が最も愛する者……………。もうお判りでしょう？　貴女の前に立つ者が、いったい誰なのかを」

炎が吹き飛び、その奥に佇む人物の姿が露わになる。

ネフィリムとの決戦において、マリアが奇跡を起こして装着した、白銀のシンフォギア。しかし、彼女が纏うそれは所々に禍々しい紋様が刻まれており、希望をもたらずはすの輝きが、絶望を振り撒く闇へと反転してしまったかのようだ。

闇へ堕ちた黒銀のシンフォギア。それを纏う少女の名は——

「アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ」

——セレナ・カデンツァヴァ・イヴ。



## 暴虐のS／フオールン・フェアリー

「アウフヴァアツヘン波形を検知ッ！」

デスドローパントによってマリアの前にセレナが現れた頃、S.O.N.G. 司令室では藤堯を始めとしたオペレーター達が、彼女が身に纏うシンフォギアがどの聖遺物の欠片を用いて作られたものかを調べ上げていた。

「データベースより照合ッ！ モニターに表示しますッ！」

友里がそう言った直後、モニターの中心にセレナが纏う聖遺物の名が表示された。

《code：Airgetlamh》

「アガートラムだとオツ!？」

マリアが所持しているはずのシンフォギアの名前が表示された事に驚愕する弦十郎の隣で、調と切歌は信じられないといった表情を浮かべていた。

「調ッ！ セレナデスよッ！」

「そんな、どうして……………ッ!？」

アルビノ・ネフィリムの暴走事件を収束させる為にその命を散らしたはずの少女の登場に茫然とする二人が見つめるモニターの中にいるセレナは、実の姉であるはずのマリアに襲い掛かった。

「……………セレナッ！ 私がわからないのッ!？ セレナッ！」

「アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ！」

いくら呼び掛けてもセレナは姉の声に耳を傾けず、右手に構えた短剣を投擲してくる。

咄嗟に槍で打ち払うが、そこへ新たな短剣を手にセレナが突っ込んでくる。

「ぐ……………ッ!？」

「アッアッアッアッアッ！」

体を捻って刺突を回避する。標的を逃がした切っ先は虚空を貫く結果に終わったが、それでもセレナはマリアを刺し殺そうとばかりに短剣を振りかざして襲ってくる。それを何度も躲し、時には弾くマリアダが、そうする度に、妹の殺意を全身に受け止めねばならなかった。

早くに親を亡くしたマリアにとって、妹のセレナは宝物にも等しい存在。アルビノ・ネフィリムの暴走事件において死亡した彼女がこうして姿を現してくれたが、そんな彼女が殺意の籠った一撃を繰り出してくるのだ。平静でいられるわけが無い。が、一瞬でも気を抜いたらそれで終わりだ。瞬く間にこの身に短剣が突き立てられ、セレナは躊躇いなく姉の命を奪うだろう。

獣の如き荒々しきで繰り出される連撃を凌ぎ切り、心中で謝罪しながらセレナを蹴飛ばす。

呻き声をあげてマリアとの距離が空くも、セレナはすぐさま握っていた短剣を地面に突き立てる。

「アッアッアッアッアッ！」

『DARK SILKY†RAY』

暴虐を象徴するような咆哮を合図に、短剣から迸った闇の波動が地面を伝って一直線にマリアへと迫る。

本来であれば眩い純白の輝きであったのだろうが、今の彼女によって放たれたそれは、破滅をもたらす無明の闇と化してしまっているのだ。

それに対し、マリヤも構えた槍の穂先にエネルギーを充填し、背後にいる響達に危害が及ばず、セレナの闇の波動と相殺する程度に威力を抑え、解放する。

『HORIZON†SPEAR』

マリヤに向かってくる闇の波動と、それを迎撃するように発射されたエネルギー光線が直撃し、爆発と共に周囲に突風が吹き荒ぶ。

爆発の影響で前方が黒煙に覆われるが、マリヤは油断せず待ち構える。この黒煙の向こうでは、今も自分の命を奪おうとする殺気が放たれ続けているのだから。

「アッアッアッアッアッアッ！」

「ヤア————ッ！」

今度は両手に短剣を装備して黒煙を突き破ってきたセレナを、マリヤの裂槍が迎え撃つ。

漆黒の軌跡を描きながら振るわれる二本の短剣による斬撃を捌き、マントでセレナを弾き飛ばす。

（セレナは操られてる……………ッ！　この子を操ってるのは——  
——）

「おや、こちらに来ましたか。では、お相手させていただきますよう」

妹には目もくれずに突進してきたマリヤに気付いたデスドローパンは鎌を構えて迎え撃つ。

首元を狙ってきた刃を伏せて回避。突き出した爪先でデスドローパンに距離を開けさせ、立ち上がるや否や槍による刺突を繰り返す。

鎌を巧みに操って捌き切ったデスドーパントの周囲に、セレナを出現させた時とは違う、紫色の人魂が浮かび上がる。放たれたそれをマリアが槍で弾き、マントを翻して回転する。

迫り来る漆黒の竜巻を鎌を両手で握る事で防御したデスドーパントが竜巻を上空に打ち上げる。

「む……………ッ!？」

「かかったわねッ！ ハア——ッ！」

打ち上げられた事でデスドーパントの頭上を取る事に成功したマリアは、太陽の輝きを背負っている。マリアの姿を追おうと顔を上げたせいで太陽の輝きを直視したデスドーパントの目が一瞬眩み、その隙を逃さずにマリアは再び回転。今度は漆黒のドリルとなってデスドーパントに襲い掛かる。

しかし——

「ぐ……………ッ!？ ああ……………ッ！」

全身に走る激痛に耐えかねたマリアが空中でバランスを崩してしまふ。LINKER無しにシンフォギアを纏った負荷がマリアを傷つけているのだ。その証拠に、彼女の両目からは血の涙が流れ出ている。

デスドーパントに会心の一撃を与える直前にギアが解除されてしまったマリアが無様に落下し、それを見たガリィが「ぷっ」と嘔き出す。

「ぷぷぷ。いい攻撃だと思ったんだけどねえ。さて、どうしますう？

そんなところで寝てたら——」

「アッアッアッアッアッ——ッ！」

「——大切な妹に殺されちゃいますよお？」

振り向いたマリアの視界に、咆哮をあげて短剣を振り上げたセレナが映り込む。次の瞬間には、セレナの短剣はマリアの背中に――

「そこまでです」

デスドローパントの声を聴いたセレナの動きが止まり、唸り声をあげながらデスドローパントを見る。

「今回は、彼女に呪われた歌を手にする覚悟を決めていたたく為に姿を現したのです。私への怒りが、私を憎むその気持ち力が変わった時こそ、彼女は呪われた旋律を手に入れるのです。それなのに命を奪っては意味が無いでしょう?」

「ウゝウゝウゝ……………」

セレナは今まさにマリアに突き立てようとした短剣を消滅させ、デスドローパントの傍らに立つ。

「せ、セレナ……………」

「姉妹の絆ってやつ? 相手が殺意を持って攻撃してくるのなら、躊躇わず殺すべきだろうに。ホント、くっだらなわあゝ」

でも、と、ガリイはニタリと意地の悪い笑みでマリアを見る。

「そんなあんたを、こいつと一緒に徹底的にいたぶり尽くすのは楽しそうだ。決めた、ガリイの相手はあんたよッ!」

可能ならばこのままマリアから歌を引き出したいところだが、セレナとの戦いを見て、まだまともに戦えない状態のように見えた。満足に歌<sup>たか</sup>えないのなら、これ以上ここにいてもしょうがないだろう。

ガリイとデスドローパントがテレポートジェムを割り、足元に魔法陣

が形成される。

「ばいならく♪」

「では、またいつかお会いしましょう」

「待、て……………ッ！ セレナを……………セレナを返せッ！」

負荷で言う事を聞こうとしない体を鞭打ち、マリアが三人に向かうが、その手がセレナに届こうとした瞬間、彼らの姿は消滅してしまっ  
た。

「……………セレナ」

消えてしまった妹の名を呟くも、すぐに思考を切り替え、響達の安  
否を確認する。

「怪我はない？」

「……………はい」

「これ、君のガング——」

どこか落ち込んだ表情で答える響から無断で借りてしまったガン  
グニールのペンダントを差し出そうとすると、ひったくるようにマリ  
アの手からペンダントが奪われた。

「私のガングニールですッ！」

「響ッ!？」

「これは、誰かを助ける為に使う力……………。私が貰った、私のガン  
グニールなんですッ！」

今は亡き朱色の片翼から受け継いだ撃槍。助けを求める者達を救  
う為に使うべきガングニール。それを、相手を倒す為に振るったマリ  
アに対して、響の心には僅かな怒りが湧いていたのだ。

が、それが自分の驕りでしかない事にすぐに気づき、驚いた表情をしているマリアに俯く。

「……………ごめんなさい」

「……………そうだ。ガングニールはお前の力だ。だから、目を背けるなッ！」

「目を……………背けるな……………」

両肩を掴んで言い聞かせるように叫ぶマリアに、響は思わず目を背けてしまった。

—— 帰還したガリイが最初に目にしたのは、微かに苛立った表情で玉座から見下ろしてくるキャロルの姿だ。

「そんな顔しないでくださいよ。ロクに歌えないのと、歌っても大した事ない相手だったんですから、あんな歌をむしり取ったところで、役に立ちませんので」

「……………自分が造られた目的を忘れていないのなら、それでいい」  
玉座に背を預けたキャロルは、あの火事場で出会った少女を思い出す。

どこまでも生温い人物だ。あらゆる敵を打ち砕く無双の力を、人助けの為だけに活用しようとする。

相手と繋がる事を優先しすぎていれば、いずれ殺されるかもしれないというのだ。それでも自分達は手を握り合えると信じている彼女には心底イライラする。

「……………だが、次こそはあいつの歌を叩いて砕け。これ以上の遅延は計画が滞る」

「レイラインの解放……………わかってますとも。ガリイにお任せで

すッ！」

「……………お前に戦闘特化のミカをつける。いいな？」

「いいゾッ！」

「そっちに言ってるじゃねえよッ！」

「ハハハッ！ いいコンビじゃないか、お前らッ！」

王室の端で彼女達の会話を聞いていた燈迹が笑い声をあげると、ガリイがムツとして彼に顔を向けた。

「どこがいいコンビだッ！ 正直言ってるめんどくさいわッ！ なんならあんたが引き受けてくれたっていいんだぞ？」

「いや、俺は断らせてもらう。頼まれてもないのに、誰がそんなめんどくさい事するかつての。第一お前、デインハイムの命令を受けないつもりか？」

「チッ！」

そう言われてしまうとなにも反論できない。主であり創造主でもあるキャロルの命令に背くなど言語道断。自分達は彼女の目的の為に造り出されたのに、逆らってしまうのは元も子もない。

（せめてあの時、ハズレ装者のギアが解除されなければ……………）  
「で？ こっちに来て初めての能力使用はどうだったよ」

歯噛みしているガリイを置き去りに、話は進んでいく。今度はこちら側の世界に来た事でドーパントの能力になんらかの変化があったかどうかを確かめる為のものだ。

デスドローパントの右手の甲からメモリが排出され、オールバックにまとめた茶色が混じった黒髪に、黒い燕尾服を着込んだ男——  
—シアン・ゴールドイスが燈迹の質問に答える。

「問題ありませんでした。こちらの彼女は先程の装者、マリア・カデン



ツアヴナ・イヴ様の妹様なのですが、元の人格を封印し、敵対者の排除を優先する存在へと書き換える事ができました」

デスドーパントの能力で蘇らせた相手がドーパントであれば、空っぽの内面をデスドーパントの意思で決められ、戦闘員に変える事も出来れば雑用係にする事も出来る。だが、対象が人間となると話は違ってくる。

ドーパントを蘇らせる時と違って、彼の能力で蘇った人間には自我があり、記憶も存在するのだ。今この場にはいないアルケウズドーパントの妹、叶がその例となる。セレナを蘇らせた時にデスドーパントがなにもしなければ、彼女は姉と刃を交えたりはせず、デスドーパントとガリイを敵と認識して攻撃してきただろうが、そんな事をさせては彼女を蘇らせた意味が無い。

それ故に、人格の封印を行ったのだ。セレナ・カデンツァヴナ・イヴの本来の意識、人格を完全に封じ込め、相手が家族だろうと容赦しない、悪魔の戦士に作り替えたのだ。

「キャロル様やオートスコアラの方々にはお伝えしておらず、申し訳ございませんでした。マリア様の経歴を確認していたご主人様から、彼女を蘇らせてぶつけろ、とのご命令があり、タイミングも急なものでしたので……………」

「構わん。そいつを使って奴らからあの旋律を手に入れられるのなら、それでいい」

「それで、次はどう行動するんだ？ そろそろ俺も出たいところなんだが……………」

「すまないが、お前の出番はもう少し先になる」

そこで扉が開き、叶を連れたアルケウズドーパントが姿を現した。拠点内でもドーパント態のままに居続けるので少し異様な光景となってしまうが、主のキャロルは彼に人間の姿になれとは言わない。言ったところで姿を現すのは、津神真一の魂に乗っ取られた青年だ。

亡き父親と同じくらい大切に想っている相手が、自分の知る彼とは全く違う口調、全く違う気配で話すのを見るのは耐えられない。

「マジか。そろそろ暴れたいと思ってたところなんだがなあ。ま、リーダーが言うんなら仕方ない」

「ご苦労だったな、シアン。しっかり休め」

「ありがとうございます。ですが、大丈夫です。あの程度の事など、軽い運動でしかありませんので」

「……………シアン、お疲れ様」

「これは……………ッ！ 感謝いたします、お嬢様。茶菓子でも食べていけますか？」

「ん……………食べる」

「承知いたしました。それではこちらへ。皆さんも食べますか？」

「いらん。好きにしろ」

「私達は『想い出』がエネルギーなのでいらなあい」

「丁度小腹が空いてたところだ。戴くぜ」

シアンの申し出に頷いた燈迹はアルケウスドーパントと共に王室を出ていき、キャロルとオートスコアラー達が残される。

「残念でしたね、マスター。せつかくのキッチンがあんなぼつと出の連中に使われて」

「……………なんの事だ、ガリイ」

「だってえ、あのキッチンってマスターが団長に自慢の愛妻料理を――」

「だ、黙れッ！ いきなりなにを言い出すッ！ というか、『愛妻』ってなんだッ！ いつオレがあんな奴の妻なんか……………」

「ええ〜？ マスターっては何度もあいつの話してたじゃないですかあ。その時の顔したら、完全に恋する乙女そのものでしたよお？」  
「な……………ッ！」

氷棺の中で眠っている男が何者かと聞いてきた彼女達に彼について話した記憶はあるが、まさか同じ事を何度も彼女達に話していたのかと思ひ、キャロルは無意識に額に手を当てた。

「……………ガリイに命ずる。これから常にミカの面倒を見続ける。お互いの内、片方が壊れるまでな」

「そんな後生なッ！」

任務以外でもミカの世話をしなくてはならなくなってしまった事態に、珍しくガリイが心の底からの声をあげた。

——翌日、司令室に集まった響達に、エルフナインがキャロルが率いる者達の説明をしていた。

「先日響さんを強襲したガリイと、クリスさんと対決したレイア、これに翼さんがロンドンで見えた<sup>まみ</sup>ファラと、未だ姿を見せていないミカの四体が、キャロルの率いるオートスコアラーになります」

「人形遊びに付き合わされて、この体たらくかよ……………」

「その機械人形はお姫様を取り巻く護衛の騎士、といったところでしようか？」

「スペックを初めとする詳細な情報はボクに記録されていません。ですが……………」

「シンフォギアをも凌駕する戦闘力から見て、間違いないだろう」

正確なスペックについてはまだ判明していないが、オートスコアラーが今の装者達など相手にならない存在だという事は、彼女達と戦った経験がある翼達には理解できていた。

「それに、敵は彼女達だけではない。彼女達にはラメンターが協力している」

竜が苦々しく口にする。

自分達と同じく、こことは異なる世界からやって来た者達。彼らが使用しているのは、翔太郎達が使っている旧式メモリではなく、その完成形であるT2ガイアメモリ。

『原初力』のアルケウス。『死』のデス。『戦闘機』のファイター。誰一人も侮れない能力を備えており、油断すればあつという間に殺されてしまうだろう。

「だが、俺達が諦めるわけにはいかない。超常脅威への対抗こそ、俺達の使命。この現状を打開する為、エルフナイン君より計画の立案があつた」

モニターに赤い文字が表示され、そこにみんなの視線が向けられる。

そこにあるのは、強力無比なる脅威を穿つ計画。

その名は――

『Project IGNITE』だ」

「――フィーネ、少しいいか？」

S・O・N・Gの拠点である潜水艦に備え付けられた一室。無数の機材が机上に並べられた部屋に克己が足を踏み入れる。

その部屋の主はもちろん、フィーネである。

「どうしたの？」

「俺のメモリを改造してほしい。あいつらと共闘する以上、エターナルのマキシマムは危険だ」

克己のT2エターナルメモリのマキシマムドライブはT2以前の旧式ガイアメモリの機能を半永久的に封じるものだ。これから翔太郎達と共闘する事になる以上、旧式メモリを使って戦う彼らにエターナルのマキシマムドライブは天敵と言っても過言ではない。

フロンティアフォームとなったイクシードとの戦いのように、今後全てのメモリを同時使用して戦わねば勝てない相手が出現した時に『エターナルのマキシマムドライブが使えません』となったら話にならない。

そう説明すると、フィーネは快くT2エターナルメモリの改造を承諾してくれた。

「それで、あれの開発は……………」  
「問題ないわ。既に完成してる」

フィーネが顎でしゃくった先にあるものを見て、上々とばかりに頷く克己。だが、フィーネの表情は優れていない。

「でも、国連の連中は彼にあれを使わせるのに消極的なよね。あの力が自分達に向いたらって考えてるみたい」

「ボスがそうしろと命じない限り、そうはならないと思うがな。そっち関連の話はボスとでもしておいてくれ。一職員に過ぎない俺にはどうもできない」

「ええ、元からそのつもりよ」

「頼んだぞ」

「任せなさい」

ひらひらと手を振るフィーネに背を向け、克己は彼女の部屋を後にするのだった。

## 蘇るG／Project IGNITE

街の近郊に存在する墓地。その一つの前に、マリア、調、切歌の三人が並び立つ。

「ごめんね、ママ………………。遅くなっちゃった……………」

墓石に刻まれた名前を見てポツリと呟く。

そこで眠る者の名は、ナスターシャ・セルゲイヴナ・トルスタヤ。マリア達レセプターチルドレンにとっては、母親と言っても過言ではない存在。フロンティア事変の折、世界中の人間のフォニックゲインを一点集中させ、自らの命と引き換えに月の落下を食い止めた偉大なる英雄の名だ。

「ママの大好きな日本の味、お醤油デスッ！」

「私は反対したんだけど、常識人の切ちゃんはどうしてもって………………。今はないけど、ケアンもきつと許してくれると思う」

切歌が墓前にお供え物として醤油が入ったボトルを置く。お供え物として醤油を選ぶセンスはどうか、と思うが、この際ツツコまないでおく。

ちなみに、もしこの場にケアンがいた場合、お供え物はもう少し一般的なものとなっていた。

「ママと一緒に帰ってきたフロンティアの一部や、月遺跡に関するデータは各国機関が調査してる最中だって」

「みんなと一緒に研究して、みんなの為に役立てようとしてるデス」「ゆっくりだけど、ちよつとずつ、世界は変わろうとしているみたい」

以前までは互いが互いを牽制し合い、好機とあらば異端技術を独占

しようと考えていた各国が、少しずつではあるが手を取り合うようになってきた。

遙か古代の神々によって統一言語を取り上げられてしまった人類が、呪詛の解放無しに繋がろうとしているのだ。

周りの環境に大きな変化はなくとも、世界は着実に変化し続けている。しかし――

(私だけは、まるで変わってない)

ネフィリムと対決したアガートラムも、先日纏った GANG ニールも、どちらも他人から借りた力。窮地を潜り抜けてきたのはいつも、自分のものではない誰かの力。

「私も変わりたい………………。本当の意味で、強くなりたい」

肉体面だけではない。精神面でも強くならなければ、これから先の戦いを生き抜けない。敵陣営には妹のセレナまで加わってしまったている。デスドローパントに操られているとはいえ、実の妹に家族殺しをさせるわけにはいかない。

デスドローパントを倒し、彼の呪縛から妹を解放す。そんな決意が、マリアの中で固まっていた。

「それはマリアだけじゃないよ」

「アタシ達だって同じデス……………」

調と切歌も、マリアと同じ気持ちだ。もう二度とその顔を見るはずの無かった人物が、敵に操られた状態で登場したのだ。セレナ自身、彼らの尖兵として活動するのは本意ではないはず。

救わねばならない。あの時、自分達を護ってくれた借りは、彼女を救い出す事で返してあげたい。

だが、昔から頼りにしていたナスターシャからの返答はない。彼女

は既にこの世の者ではないのだ。もちろん、三人はそれを理解しているし、どこかから彼女の叱り声が飛んでくる事も期待していない。

「……………大丈夫よ、ママ。答えは自分で探すわ」

「ここはママが遺してくれた世界デス」

「答えは全部あるはずだもの」

ナスターシヤから託された世界。その平和を護る決意を胸に、三人は小さく微笑みながら言うのだった。

「……………ッ！ マリアッ！」

その時、三人の通信機に着信が入る。S・O・N・Gからのものだ。

そうして知らされたのは、アルカ・ノイズが出現したというものだった。

「……………はあ、はあ、はあ……………ッ！」

「逃げないで歌ってほしいゾッ！」

雨の中を走る響と未来を、多数のアルカ・ノイズを従えた赤髪の少女——ミカ・ジャウカーンが追う。キャロルに仕えるオートスコアラーの中で最もパワーに特化した機体である彼女は、主からの指示を受けて響のシンフォギアを破壊すべく現れたのだ。

「それとも、歌いやすいところに誘っているのか？ おおッ！ それならそうと言ってほしいゾッ！」

「未来、こっちッ！」

未来を連れて建設途中の建物の中に入り、階段を上って逃げようと



するが、アルカ・ノイズの一撃が階段を分解し、響は落下してしまう。

「響ッ！」

「うッ……………、未来……………」

「いい加減戦ってくれないと、キミの大切なもの、解剖しちゃうゾ？」  
「……………ッ!？」

二人に追いついたミカが上階にいる未来に狙いを定める。

「友達バラバラでも戦わなければ、この街の人間を……………、犬も猫もみんな解剖だゾッ！」

「そんな事……………ッ！」

無辜の命を散らせるわけにはいかない、と立ち上がった響だったが、彼女とアルカ・ノイズに対抗する為の聖詠を歌おうとすると、喉元でなにかに塞がれてしまっているのか、響の口からそれが発せられる事はない。

「ん……………？ 本気にしてもらえないなら……………」

ニヤリとしたミカの手が上げられ、待機しているアルカ・ノイズに指示を送ろうとする。その時、未来の声が響いた。

「響ッ！」

「未来……………？」

「響の歌は、誰かを傷つける歌じゃないよッ！ 伸ばしたその手も、誰かを傷つける手じゃないって、私は知ってるッ！ 私だから知ってるッ！ だって私は、響と戦って、救われたんだよッ！」

自分がウエルの策略によって神獣鏡シエンシヨウジンを纏い、ドーパントに変身した時も、響は『切り札』の力を宿したその手で救ってくれた。彼女が

救ってくれたから、今の自分はここにいる。歪んだ形で暴走した自分を、彼女の真っ直ぐな想いが助けてくれたのだ。

「私だけじゃないッ！ 響の歌に救われて、響の手で明日に繋がっている人、たくさんいるよッ！ だから怖がらないでッ！」

抵抗する術を持たない人々がノイズに襲われた時は、いつだってその手で救い続けてきた。迫り来る災厄をその拳で穿ち、ただ殺されるしかなかった者達を、死の深淵から引き揚げ続けた。

その手は紛れもなく、誰かを救う為の手。その手には、多くの命を救う力がある。

「バイナラアアッ！」

ミカが遂にアルカ・ノイズ達に指示を出し、アルカ・ノイズ達の攻撃が未来の足場を崩し、重力に引かれて落ちていく彼女にアルカ・ノイズ達が殺到していく。

「……………ッ！」

その時、響の心にかけられていた枷が砕け散った。

自らの歌が他人を傷つけてしまうかもしれない。自分の拳が誰かの幸福を握りつぶしてしまうかもしれない。彼女の内側に満ちていた不安は、彼女の親友の言葉によって打ち払われた。

——覚悟は決まった。撃槍は再び、彼女の手に。

今こそ、復活の時——ッ！

「喪失 B a l w i s s y a l l の カ N e s c e l l ン g u n g n i r ダ t r o n ウ」

迷いの鎖を断ち切り、その身に撃槍が蘇る。

全身から迸る輝きの軌跡を残してジャンプした響は、今にも分解されそうになっていた未来を優しく抱きかかえ、アルカ・ノイズ達の攻撃から彼女を護った。

「あ……………」

閉じていた瞼を開いた未来と、彼女を見つめる響の目が合う。

その瞳には確たる覚悟の炎が燃え盛っていた。

「……………ごめん。私、この力と責任から逃げ出してた。だけでもう、迷わないッ！ だから、聴いてッ！ 私の歌をッ！」

拳を握り締め、ミカ率いるアルカ・ノイズの集団と対峙する響の背中へ、今まで以上に頼もしく感じる。

「私の大好きな響の歌を、みんなの為に歌ってッ！」

「もちろんッ！」

「どうとうやる気になったなッ！ それでこそ潰し甲斐があるゾッ！」

ようやくガングニールを装備した響に嬉々とした表情でミカがアルカ・ノイズ達を突撃させる。

「一点突破の決意の右手」

ガングニールを、自らの覚悟はどれほどのものを示す姿――

――フェイトシンギュラー・ガングニールへと変化させ、意志の輝きを証明する歌を奏で、響はそれを迎え撃つ。

「――響ちゃん、アルカ・ノイズを次々と撃破していますッ

！」

「ようやく調子を取り戻してくれたか」

「どうしようもねえ馬鹿だな」

撃槍という名に恥じぬ苛烈な攻撃でアルカ・ノイズを殲滅していく響の姿をモニターで見守る弦十郎達の口元に笑みが浮かぶ。

「ですが、相手は戦闘特化したオートスコアラのミカです」

「それがどうした。相手が戦闘特化だとしても、立花が後れを取<sup>おく</sup>るなどあり得ない」

単純な火力で押し負けていようと、響にはあらゆる逆境を乗り越える意地がある。それに、今の響は覚悟を取り戻した状態なのだ。たとえミカであろうと、今の彼女は負けないだろう。

「……………ああ、わかった。今、響ちゃんが戦っている。僕達も行く」

「お、フィリップ君達も出番？ ほれ、準備はバツチりだからッ！」

フィリップが今の時代には似合わない大きめのガラケーをしまい、それを見た亜樹子が彼を受け止める構えを取る。

「いつもありがとうね、亜樹ちゃん」

見れば、いつの間に装着したのか、フィリップの腰にはダブルドライバーがあり、フィリップは懐から取り出したガイアメモリのスイッチを押しした。

「———いいゾいいゾッ！」

凄まじい勢いでアルカ・ノイズを全滅させた響に嬉しそうな声を上げたミカが迫ってくる。

「未来、行ってくるッ！」

「待っている」

未来に背を押されるようにダッシュした響は、両掌から作り出したカーボンロッドを構えるミカに、己の覚悟に呼応して威力を増すフェイトシンギュラーの力を宿した右手を握り締め、一気に突き出す。

「とりゃああああッ！」

「な……………ッ!? うわあッ!？」

強力な覚悟の力を体現する姿で繰り出された一撃はかなりの強度を誇るカーボンロッドを容易く打ち砕き、ミカを大きく吹き飛ばした。

「こいつ……………ッ！ 押し折り甲斐があるゾッ！」

ただのガングニールとは比べ物にならない威力に驚愕するも、その狂喜は消えない。

風を切り裂きながら飛んできた響の攻撃を凌ぎ、カウンターで新たに生成したカーボンロッドを横薙ぎに振るい、響が弾き飛ばされる。すかさず、ミカが片手から無数のカーボンロッドを射出し、それらは一気に響のギアを破壊すべく殺到するが、突如として飛んできた無数の光弾によって撃ち落されてしまった。

「そこまでだぜ、ドールガール」

「翔太郎さんッ！ フィリップさんッ！」

見れば、建物の入り口には銃型の武器——トリガーマグナ

ムを構えたWが立っていた。

『幻想』の右半身に、『狙撃手』の左半身を持つ形態——  
面ライダーW・ルナトリガーだ。—— 仮

『僕達がサポートする。君は存分に戦いたまえ』

「はいッ！」

拳を握り直した響がミカに攻撃を仕掛け、その背後からWがトリガーマグナムから光弾を撃ち出す。

放たれた光弾は通常であればあり得ない軌道を描きながら、味方の響に掠りもせずミカを攪乱させ、さらには反撃として飛んできたカーボンロッドも容易く撃ち落していく。

「ハア——ッ！」

「ぐはあ……………ッ!？」

Wの援護もあって隙が生じたミカの胴体に、響の拳が叩き込まれた。小細工など無しに繰り出される、一点突破を得意とする響によって、ミカの体が鉄骨などが積まれた場所に殴り飛ばされる。

「これで決まりだッ！」

Wがスロットから引き抜いたトリガーメモリーをトリガーマグナムに挿し込む。

『トリガー・マキシマムドライブ！』

トリガーマグナムの銃口に眩い輝きが集まり、響が突撃すると同時にWは引き金を引く。

『トリガーフルバースト！』

「これで、終わりッ！」

まず最初にトリガーマグナムから同時発射された無数の破壊光弾がミカに大ダメージを与え、直後に響の渾身の一撃で撃破——それが、Wと響のタッグ攻撃によって導き出される結果だ。

——が、それは『結果』であり、『過程』ではないのだ。導き出される結果がわかっているとしても、そこに行きつく為の過程が確立できていなければ、到達するべき終着点は永遠に訪れない。

その例が今、彼らの目の前で起こった。

「あ、え……………ッ!？」

破壊光弾が直撃したミカが、地面に落とされた水風船のように弾け飛び、響の拳は標的を捉えられずに大量の水に穴を開けた。

「残念。それは水に映った幻」

この場にいるのは、Wと響、そしてミカだけではない。

本当なら主と共に自分達を率いるはずだった男の件でキャロルをおちよくった結果、彼女から課せられてしまった命令を洩々ながらも承諾したガリイもいたのだ。

水や氷を操るガリイにとって、水を使って誰かの偽物を作り上げる事など造作もない。

「あははははッ！」

そして、彼女によって作り出された好機<sup>チャンス</sup>を、ミカが見逃すはずがない。

響の真下。そこに仰向けになっていたミカの掌からカーボンロッドが生成され、がら空きとなった響の胸元——そこにあるペンドラントを破壊すべく射出されかけているのが見えた。

拳を振り抜いた影響で回避はおろか、防御さえ不可能な響は、ただそれを見つめているだけで――

「――そうはさせねえッ！」

その瞬間、Wが文字通り右腕を伸ばした。際限などないとばかりに伸びた右腕は奥の柱に巻き付き、すぐに縮小。凄まじい勢いでWが響とミカの間割り込んだ直後、カーボンロッドが勢いよく撃ち出された。

「ぐああああああああッ！」

割り込んだ事もあって、彼我の距離は全く存在しない。そんな状態で発射されたカーボンロッドは、仕留めるべき響えものの代わりに、予期せぬWえものを穿ったのだ。

背後にいた響共々打ち上げられたWは、胸部に走る激痛を堪えながらも、その両目はしつかりと、驚愕しているミカとガリイの両名を捉えていた。

「来い、スタッグッ！」

Wの呼びかけに応じ、どこからともなくやって来たスタッグフォンがトリガーマグナムにセットされ、再びトリガーマモリを装填し直してマキシマムドライブを発動する。

『『トリガースタッグバースト！』』

ミカとガリイの間に向けられた銃口から二本のビームが放たれ、それに気づいたミカはカーボンロッドを、ガリイは氷の壁を用いて防御するが、高出力のエネルギーであるビームを凌ぎ切る事は叶わず、爆発。二機の視界を黒煙で遮った。



『響ちゃん。翔太郎と未来ちゃんを連れて逃げるんだ。彼女達はこの程度じゃ止まらないッ!』

「は、はいッ!」

Wと未来を抱え、響は建物内から出ていく。その直後に黒煙を払ってミカとガリイが現れるが、響達がもういない事に気付くと、悔し気に拳を握り締めるのだった。

——建設現場から大分離れた場所まで逃げた響は、両脇に抱えていたWと未来を下ろす。

「大丈夫ですか?」

「へへ……………、子どもを護るのが、仮面ライダーの使命だからな……………」

ゼロ距離から受けたカーボンロッドのダメージが相当大きかったのか、Wの変身が解除され、翔太郎の体が前のめりに倒れる。

「翔太郎さん……………? 翔太郎さんッ!」

気を失うその瞬間まで、翔太郎の鼓膜には自分の名を叫び続ける少女の声が響き続けていた。

「——シンフォギアを完全に破壊できるに余りある威力の攻撃をゼロ距離から受けたのよ。こうなるのも無理は無いわ。というより、肋骨の一本も折れていないのがおかしいくらいだわ。けど、無理はしないように」

「助かるぜ、了子さん……………」

メデイカルルームで病衣に身を包んだ翔太郎がベッドに横になると、自分をここまで連れてきてくれた響に視線を向ける。

「そんな顔すんなって。あれは俺が自ら進んでした事だし、お前が責任を感じる必要はねえよ」

「でも……………」

「響」

「……………うん。ありがとうございます、翔太郎さん」

「ああ。……………さ、早く行きな。大丈夫。俺は少しの間戦えなくなるだけだ。俺の他にも照井やフィリップがいる。それに、NEVERあいつらもな」

かつては恐るべき強敵として立ちはだかった彼らだが、今は同じ敵を打倒すべく結託した者同士。彼らが力になってくれるなら、心強い事この上ない。

頷いた響達がメデイカルルームを出ていくと、彼女達と入れ替わるようにフィリップが入ってくる。

「また無茶をしたね。翔太郎」

「文句でも言いに来たのか？ フィリップ」

「実に君らしい行動だと思ったまでだ。まあ、もう少し自分の体を大事にしてほしい、とは思うがね」

「なんだよ。やっぱり文句じゃねえか。……………なあ、フィリップ」  
「なにかな？」

「こんな状況だけだよ。嬉しいって感じてる俺がいるんだ」

椅子に腰を下ろし、パラパラとシンフォギアシステムやノイズについての資料を捲っていたフィリップが顔を上げる。

「大道克己の事かい？」

「流石、フィリップ。お見通しってわけか」

「以前の君が言ったように、運命さえ違えば、彼は僕らと共に、風都を護る仮面ライダーになっていたかもしれない。こちらの世界に飛ばされるまで、それはあくまで もしも if の話だったが、それは今、ほぼ現実のものとなった」

場所は違うけどね、と笑うフィリップに確かに、と笑いながら返す翔太郎。

「ミーナの記憶から再現された彼らだが、彼らは決して虚像ではなく、本物。僕らと戦った記憶こそあるようだけど、精神はあの時ほど残忍ではないはずだよ。少なくとも、用済みだから仲間を手にかける事にはならないはずだ」

あの時の克己は、自分に利益をもたらさないのであれば仲間であろうと容赦しない悪魔だった。今まで自分達が戦ってきた相手の中でも、『最強』にして『最凶』であると言っても過言ではないだろう。少なくとも彼らは、あの時の彼以上の悪を見た事が無かった。

「そういうえば、大道克己は君に色々話を聞きたがっているそうだよ。中々踏み出せていないようだが……………」

「やっぱり調子狂うな。あいつが体育教師をやってるのもそうだが、俺と話そうともしているなんてな。あいつ、俺とどんな話をしたがつてるんだらうな？」

「僕はなんとなく理解できるね。彼が君に訊きたがつてる事は」

「あん？ もつたいぶってないで教えてくれよ」

「ハーフボイルド 半熟の卵なりに考えてみなよ、翔太郎」

「あ、おい、待てよッ！ フィリップッ！」

翔太郎が呼び止めようと声をかけるが、フィリップはひらひらと手を振ってメデイカルルームから出ていってしまった。

「なんだよ、あいつ……………」

取り残された翔太郎は、克己が自分になにを聞きたがっているのかと、むむむ……………と考え始めるのだった。

——司令室。そこにやって来たフィリップを見て、第一に弦十郎が口を開く。

「翔太郎君の様子は？」

「彼は誰に対しても裏表なく接する性格だよ。僕以外に虚勢を張ったりなんかしないさ」  
「そうか」

答えを聞いた弦十郎の声は少し嬉しそうだ。翔太郎が周りに気を遣わせまいと虚勢を張っているかもしれないと思っていたのだが、どうやらそれは余計なお世話だったようだ。

「俺もこの後、彼にお礼を言いに行くでしょう。彼が庇っていないければ、今頃あそこで寝ていたのは響君だったはずだし、ギアも破壊されていたはずからな」

「翔太郎さんの頑張りを無駄にしない為にも、頑張らなきゃッ！」

「その通りだ。私達とて、このまま燻っていられるものかッ！」

「あたしならやれる。だから、『Project IGNITE』を進めてくれッ！」

「……………よろしいですか、弦十郎さん」

エルフナインの問いかけに、弦十郎は重々しく頷く。

「ああ。これより、『Project IGNITE』を開始するッ！」

「——のわああああッ!?」  
「パパッ!?」

時は遡り、数百年前のある町。その一角に建てられた家のリビングで、大きな爆発が起きた。

何事か、トリビングに跳んできた少女——キャロルが見たのは、黒焦げになった父親——イザーク・マールス・ティーンハイムだった。

「……………鍋が爆発したぞ?」

「ふ……………あはははは。もう、料理なのにどうして爆発させられるの?」

ただの料理のはずなのに、なぜ爆発するのか、とおかしくて笑うキャロルに、イザークは鍋に満たされた料理を見る。

「だがきつと、味は……………味は……………、う、美味いか?」

差し出された料理を口に含むと、キャロルの顔が苦虫を噛み潰したようなものになる。

「……………苦いし臭いし美味しくないし。0点としか言いようが無いし」

「はあ。料理も錬金術も、レシピ通りにすれば間違いないはずなんだけれどなあ。どうしてママみたいにできないのか……………」

「明日は私が作る。その方が絶対に美味しいに決まってるッ!」

「コツでもあるのか?」

自信満々に言つてのける娘に問いかけるも、キャロルは悪戯っ子の

ような笑みを浮かべて答えない。

「ん……………内緒。秘密はパパが解き明かして。錬金術師なんでしょ?」

「はははは。この命題は難題だ」

「問題が解けるまで、私がずっとパパのご飯を作ってあげる。えへへ……………ねえ、パパ」

「ん? なんだい、キャロル」

「その、ね? また、あの本を読んでもらいたくなって……………」

もじもじし始めたキャロルが口にした『本』という単語から導き出されるものは、イザークにはすぐに理解できた。

この家には自分が修得してきた錬金術に関する書物も含めて、大量の書物が存在するが、娘が言う『本』は、錬金術というカテゴリーには属さないものだ。

「もちろん。他ならないキャロルの頼みだからね」

「本当ッ!? ありがとう、パパッ! 絶対に読んでねッ! 悪いドラゴンからお姫様を救う、騎士様のお話ッ!」

それは、今は亡きキャロルの母親が、寝物語としてキャロルに聞かせていた御伽噺。

女の子であれば誰もが憧れるような、そんな絵物語。

——運命の出会いまで、残り■日。

## Iの完成まで／双壁の装者

シンフォギアシステムというものには『決戦機能』と呼ばれるものが存在する。

絶大な威力を誇る代わりに最悪装者を殺しかねない『絶唱』。一時的にギアにかけられた幾つかのロックを解除し、シンフォギアとしての全力を引き出す『エクストライブモード限定解除形態』がこれに含まれる。

T2ガイアメモリの力を引き出した形態も存在するが、こちらはシンフォギアの設計者であるフィーネ本人からしても完全にイレギュラーなものであったため、決戦機能の一つとして考えられていない。

しかし、決戦機能はその名の通り、自在にその力を振るえるものではない。絶唱は一度使うだけで装者の体に大きな負担をかけてしまい、天羽奏の死亡がそれを証明している。ではエクストライブモードはどうか、となると、こちらはロック解除に必要なフォニックゲインの総量が桁外れなもので、作戦に組み込むなど愚の骨頂だ。

だが、シンフォギアの決戦機能には、これら以外にも別の機能が存在している。

それは、『暴走』である。

エクストライブモードまでとはいかずとも、従来とは比べ物にならない力を引き出させる機能だが、代償として物事を判断する理性を持っていかれる。仲間達とのコンビネーションが要となる戦いにおいて、これほどのデメリットがあつていいわけがない。

では、その暴走によって得られる絶大な攻撃力を、意図的に引き出せるようになればどうだろうか。

『Project IGNITE』とは、その爆発的な力を完全に使いこなせるようにする為の計画である。

もちろん、この計画を実行するに当たり、装者達からの同意は得ている。

皆、暴走の危険性を理解しているが、この機能を使わねばキャロル達には敵わない、という事も理解しているのだ。

先のミカ戦でガリイの術中に嵌められかけた響をWが救わねば、今頃メデイカルルームで寝ていたのは響だったはずなのだ。翔太郎の行動を無駄にしない為にも、響達は進んでこの計画の実行を願いだのだ。

『Project IGNITE』。現在の進捗は89%。旧二課が保有していた第一号、および第二号聖遺物のデータと、了子さん、エルフナインちゃんのお陰で、予定よりずっと早い進行です」

「各動力部のメンテナンスと重なって、一時はどうなる事かと思いましたが、作業や本部機能の維持に必要なエネルギーは、外部から供給できたのが幸いでした」

現在、S.O.N.G.本部の潜水艦は港近くの発電所のすぐ傍に停泊してある。そこから、S.O.N.G.のみでは賄い切れない量の電力を譲り受けているのだ。

「それにしても、シンフォギアの改修となれば、機密の中枢に触れるという事なのに……………」

「状況が状況だからな。それに、八紘兄貴の口利きもあつた」

「八紘兄貴……………って、誰だ？」

弦十郎から発せられた聞き慣れない人物の名に首を傾げるクリスに、翼が説明する。

「限りなく非合法に近い実行力を以て、安全保障を陰から支える政府要人の一人。超法規措置による対応の捻じ込みなど、彼にとっては茶飯事であり……………」

「とどのつまりがなんなんだ？」

「内閣情報官、風鳴八紘。司令の兄上であり、翼さんのお父上です」



「だったら初めっからそう言えよなッ！ 蒟蒻問答が過ぎんだよッ！」

「私のS・O・N・G編入を後押ししてくれたのも、確かその人物なんだけど……。なるほど、やはり親族だったのね」

名前を知っているだけで、まだ面識はないが、それでも自分が今ここにいるのは彼のお陰であると重々承知しているマリアは、その時抱いた感謝の気持ちを思い出しているが、翼の表情はどこか暗い。

「……………どうしたの？」

「……………お父様とは色々訳があつて、あまり話していないんだ」

「？ それは……………」

なぜ、と言いかけて、マリアは口を噤んだ。

翼の表情からして、楽観的なものではない事は容易に想像できたのだ。わざわざ彼女に辛い記憶を呼び起こさせるほど、マリアは外道ではない。

「私はお父様から拒絶されたあの時から、あの人を見返すべく鍛錬を続けてきた。余分なものを切り捨て、真の剣になる事で、あの人に認めてもらおうとしていたのだが、大分前に大道に叱られてしまったな」

「克己に？」

首を傾げたマリアに頷く。

まだクリスが仲間になる前の頃だったか。国を護る真の剣に感情は必要ない、と決めつけていた翼は、克己にこっぴどく叱られたのだ。時間経過と共にかつての記憶と人間性を失っていき、残虐性が増していく存在だった彼は、自ら進んで『人間』をやめようとしていた翼を見ていられなかったのだろう。

それだけではない。父親が自分を風鳴家から追い出したのは、愛す

る娘に自由な未来を与える為だったのではないか、という考えを持てたのだ。

「私達が考えている事と同じ事を思っ、お父様がそうしたのは定かではないがな。それでも、幼少の頃に見たお父様は、とても幸せそうに笑っていた」

きっと克己の助言が無ければ、自分もつと父親の件で思い悩んでいた事だろう。あくまで予想に過ぎないが、きっとそうだと確信している自分がある。それだけでも、翼は少し救われていたのだ。

「八紘兄貴は仕事とくれば恐るべき手腕を振るう人だが、こと自分の事になると不器用だからなあ。ありのままの自分を曝け出せないだろう。今度連絡してみたらどうだ？」

「はい、そうしてみます」

多忙な内閣情報官という役職に就いているため、いつ八紘が連絡に応じてくれるかはわからないが、いつか必ず話をしよう、と翼は決心した、その時だった。

「アルカ・ノイズの反応を検知ッ！」

潜水艦内に緊急事態を告げるサイレンが鳴り響き、場の空気が一気に張り詰める。

「座標、絞り込みますッ！ ………………これはッ!？」

先程までとは打って変わって雰囲気を変えたオペレーター達がアルカ・ノイズの出現場所を特定すると、現在自分達がいる場所のすぐ近く————厳密には、発電所の近くだと判明した。

「まさか、敵の狙いは我々が補給を受けている、この基地の発電施設………ッ！」

「なにが起きてるデスカッ!?」

サイレンを聞きつけて調と切歌、そして亜樹子と竜が司令部に飛び込んでくる。

「アルカ・ノイズにこのドックの発電所が襲われているのッ！」

「ここだけではありませんッ！ 都内複数個所にて同様の被害を確認ッ！ 各地の電力供給率、大幅に低下していますッ！」

「今、本部への電気供給が断たれると、ギアの回収への影響は免れないッ！」

「内臓電源もそう長くは持ちませんからね」

「どどど、どうするのよこれッ！」

「落ち着け、所長。この電力が尽きる前に、発電施設を襲っているアルカ・ノイズを排除する。弦十郎、ここ以外の施設には誰か向かわせているか?」

「既にレイカ君達を向かわせている。君はここからすぐ近くの発電所に向かつてくれッ！」

「任せろッ！」

「竜君………」

「大丈夫だ。必ず戻ってくる」

亜樹子を安心させるように微笑んでから、竜は司令室を飛び出していく。

それを見た調は、突然なにも言わずに切歌の手を取り、竜の後を追うように司令室を出ていった。

「し、調? どこに行くデス?」

「しー」

切歌の問いかけに調は答えず、二人はそのまま薄暗い廊下へ出る。

「いったいなにをするつもりデスカッ!?」

「時間稼ぎ」

「なんデスとツ!?」

「今大切なのは、強化型シンフォギアの完成までに必要な時間とエネルギーを確保する事」

「確かにそうデスが、全くの無策じゃなにも……………」

「全くの無策じゃないよ、切ちゃん」

切歌を連れて調が訪れたのは、メデイカルルーム。そこにはもちろん、先の戦いで響を庇って搬入された翔太郎がいた。

「君達は……………調ちゃんに、切歌ちゃんだっけか? どうしてここに……………」

「翔太郎さん、これから私達がする事は、秘密にしてください」

そうやって調はメデイカルルーム内を少し見渡し、あるボックスを見つめる。

「……………見つけたッ!」

ボックスの中にあるものを見て、調はやったとばかりに笑顔になった。

「——アルカ・ノイズの位相差障壁は従来ほどではないとはいえ、よく持ちこたえてくれている。だが……………」

触れた対象を分解される能力に特化しているアルカ・ノイズは、これまで相手取ってきたノイズと比べて位相差障壁を維持するエネルギー

ギアが少なく、ある程度現代兵器で対抗する事ができる。が、それは些細な差でしかなく、現代兵器でのみ倒せるほど、アルカ・ノイズは甘くない。

錬金術によって形作られた存在であろうと、ノイズという存在が人類の天敵であるという事実は揺るがないのだ。

「……………ッ！ 司令ッ！」

「どうしたッ!? ………………あれはッ!?!」

その時、弦十郎達はモニターに映る調と切歌に気付いた。  
その二人はなんと、シンフォギアを身につけていたのだ。

「……………たあッ！」

「てえいッ！」

調の丸鋸と切歌の鎌がアルカ・ノイズを切り刻み、あつという間に炭化させていく。

適合率が低い二人がなぜこうしてシンフォギアを纏って戦えているのかというと、かつて櫻井了子として活動していたフィーネが、天羽奏の為に作成したLINKERを使用したからである。

「ギアの改修が終わるまで……………」

「発電所は護ってみせるデスッ！」

『お前達、なにをやってるのかわかっているのかッ!?!』

いきなり通信が入ったと思った途端、弦十郎の怒号が飛んでくる。が、この二人は彼がなにも言わないはずがないと確信していた上、自分達の行いに間違いはないとも信じているため、全く謝る素振りを見せない。

「もちろんデスともッ！」

「今のうちに強化型シンフォギアの完成をお願いしますッ！」

二人の返事を聞き、弦十郎は直感的に、自分達がなにを言ったところで彼女達の考えは変わらないと理解し、小さな溜息を一つ吐いてから口を開く。

『いいか？ それは奏君用に調整したものであって、君達用に調整したものではない。くれぐれも無茶はするな。絶対に生きて戻ってくるんだぞッ！』

「了解」

「了解デスッ！」

威勢よく頷いた二人が迫り来るアルカ・ノイズの集団を蹴散らしていくと、大量のアルカ・ノイズに囲まれているアクセルを発見する。

「いくデスよ、調ッ！」

「うんッ！」

頷き合い、調は左右のヘッドギアのホルダーを展開し、切歌は鎌の刃を分裂させ、ブーメランのように投擲する。

『a式・百輪廻』

『切・呪りeツTお』

アクセルを囲んでいたアルカ・ノイズ達が瞬く間に消滅し、突然の攻撃に一瞬だけ戸惑ったアクセルの前に二人が降り立つ。

「竜さん、一緒に戦います」

「アタシ達も戦うデスッ！」

「頼もしいな。……………ッ！ 避けるッ！」

同時に三人が飛び退くと、頭上から降り注いできた弾丸が地面を穿っていった。

「ハハハハハッ！ アノ夜以来ダナ、アクセルッ！」

「ファイター……………黒芭燈迄かッ！」

「サア、コツチノ世界デモ殺シ合オウカツ！」

人型の状態で滞空していたファイタードーパントがその姿を戦闘機に変え、エンジンブレードを構えたアクセルに突っ込んでくる。

一方、調と切歌の方では、彼女達に気付いたミカが攻撃を仕掛けていた。

——チフォージュシャトー内の王室。玉座に腰を下ろしているキャロルの下には、各地に派遣したオートスコアラ―達からの報告が次々と舞い込んできていた。

『対象、派手に破壊完了。NEVERのドーパントの妨害がありました。我が妹も別の発電施設の破壊に成功しました』

『こちらと同じですが、私が足止めしている間にアルカ・ノイズに破壊させました。該当エリアのエネルギー総量は低下中。まもなく目標数値に到達しましたわ』

各々がNEVERのドーパント達と交戦したようだが、それぞれのやり方で彼らを引き付け、その隙に施設を破壊したそうだ。現代兵器など物の数に入らないので、単騎で防衛しなければならぬ以上、穴はいくらでも存在する。そこを突く事など、多数のアルカ・ノイズを使役する彼女達にとっては容易い事だ。

「レイラインの解放は任せる。オレは最後の仕上げに取りかかろう」

そして、彼女達の主であるキャロルも行動を起こさないはずが無い。

世界の解剖——数百年の時を経て果たされつつある目的の為に、キャロルはこれから、己が成すべき事に取り掛かり始めるのだ。

「いよいよ始まるのか」

「ああ、そして終わるのだ。そして——万象は黙示録に記される」

キャロルの宣言に、傍らに佇むアルケウスドーパントはくつくつと笑い、悲願達成に近づいていく事実には歓喜していた。

「——が、は……………ツ！」

「ああ……………ツ！」

ミカのカーボンロッドの一撃によって吹き飛ばされた調と切歌が、全身に走る痛みを堪えながら立ち上がる。

「わかつてはいたデスが……………」

「簡単にはいかせてもらえない……………」

元々低い適合率をLINKERで無理矢理引き上げただけで、ミカとの実力差が埋まるとは考えていない。オートスコアラで弱いものは誰一人存在せず、中でも今対峙しているミカは戦闘力に特化した存在。

「じゃりんこ共々。あたしは強いゾ？」

「子どもだと馬鹿にしてツ！」



「目にももの見せてやるデスッ！」

そうして二人は、L i N K E Rで満たされた圧縮型注射器を取り出した。

——二人はギアを装着する為だけにL i N K E Rを持ち出していたと考えていたフィーネは、モニター内でさらに自分を自分で打ち込もうとしている二人の姿を見て、目を見開いていた。

「さらにL i N K E Rを使うつもり……………ツ!？」

「調ちやんツ！ 切歌ちやんツ！」

「このまま見ていられるかッ！」

「やらせてあげてくださいッ！」

響とクリスが加勢しようとするが、マリアの鋭い声が二人の動きを止める。

「これはあの日、道に迷った臆病者達の償いでもあるんですッ！」

「臆病者達の償い……………?！」

「誰かを信じる勇気が無かったばかりに、迷ったまま独走した私達……………。だから、エルフナインとフィーネがシンフォギアを蘇らせてくれると信じて戦う事こそ、私達の償いなんですッ！」

自分達には響達に救われた恩がある。キャロル達に対抗する為の力を手に入れるその時までの時間稼ぎが、彼女達なりに考えた末の恩返しなのだ。

だがしかし、セレナの遺品であるアガートラムは使えず、また響からガングニールを借り受けるわけにもいかないマリアは、二人のようにギアを纏えず、ただ二人が無事に帰ってくる事を願っているしかない。

それが悔しくて、噛み締めた唇から血が流れ出てるのを、弦十郎は見逃さなかった。

——取り出した圧縮型注射器を、お互いの首に押し当て、見つめ合う。

「二人でなら」

「怖くないデスッ！」

頼れる相棒しんゆうと共に在れるなら、彼女達に恐れるものはない。姉妹とも呼べる仲の二人の友情の前には、LINKERの過剰投与など恐るるに足らず。

躊躇わず、合図も無しに二人して同時に相手の体にLINKERを注入すると、全身が燃えるように熱くなる感覚に一瞬襲われた後、二人して鼻血が出てきた。オーバードーズである。

だが、それがどうした。体にかかる負荷など気にしない二人は、体の内側から漲る力による高揚感を覚えていた。

「……………いこう、切ちゃん。一緒にッ！」

「切り刻むデスッ！」

二人に視線を向けられたミカがニカッと笑い、カーボンロッドを構える。

しかし、忘れてはいけない。この強化はあくまで時限式。制限が来ればLINKERを過剰投与したフィードバックでギアが解除されてしまい、しばらく戦う事ができなくなってしまう。それまでにミカと撃退——可能であれば撃破するのだ。

「はあああああああッ!!」

自らを鼓舞するように、お互いを激励するように雄叫びを挙げ、二人はミカへと攻撃を仕掛ける。

「へエ？ 面白イジヤナイカ」

さらにLINKERを投与して強化された二人の気配に気付いたのか、ファイタードローパントの口元が歪む。

「アイツラトハイイ勝負ガデキソウダ。オ前モソウ思ウダロウ？ アクセル」

「ぐ……………」

ファイタードローパントの目の前には、エンジンブレードを地面に突き立てて立ち上がったアクセル。何度もファイタードローパントの銃撃を受けたのか、装甲はどこどころひび割れており、両者の間に明らかな実力差がある事が見て取れる。

「オ前ジャ俺ノ速サニツイテコレナイ。コレデ……………最後ダツ！」

両腕を機銃に変形させ、大量の弾丸がアクセルに殺到する。恐ろしい速度で撃ち出される弾丸は瞬く間にアクセルの装甲を撃ち抜き、その奥にある照井竜の体さえも抉り取っていくだろう。

絶体絶命——まさにその言葉が似合うこの状況において

「ならば、お前より速く動くまでッ！」

不死身の男  
照井竜の心に、諦観という文字は無しッ！

『トライアル!』

アクセルメモリを引き抜かれ、空になったスロットに新たなメモリ  
——トライアルメモリが挿し込まれる。

『トライアル!』

スロットルを回した事でガイアウイスパークが高らかにその記憶の名を告げ、信号機を模した部分が赤から黄色に変化した途端、アクセルの全身が黄金に輝く。

エンジンブレードを投げ捨て、素早く動いて銃弾を躲していく中でもカウントは進んでいき、今度はランプが黄色から青色に変わった瞬間、アクセルの装甲の大部分が、最低限の装甲のみを残して消滅する。そこからは一瞬の出来事だった。

「ハア——ツ!」

「なに……………ツ!」

音を置き去りに動いたアクセルの回し蹴りが炸裂し、驚くべき速さの一撃を前にファイタードローパントは為す術なく蹴り飛ばされた。

「グウ……………ツ! ソノ姿ハ……………ツ!」

先程までのアクセルとは違い、全身のカラーを赤から青に一新した姿。その姿こそ、『加速』を超え、『挑戦』の記憶を宿した戦士。

「この俺を、今までのアクセルとは思わない事だな」

仮面ライダーアクセル・トライアル——ツ!

「子どもでも下駄を履けば、それなりのフォニックゲイン。潰し甲斐があるというものだゾッ！」

投擲されたカーボンロッドを調の丸鋸が迎撃し、彼女によって切り拓かれた道を駆け抜けた切歌の鎌が迫るも、ミカは軽く飛び退くだけで容易く回避する。

振り下ろした勢いを殺さずにそのまま回転。遠心力が加わって威力を増した鎌が再びミカへと襲い掛かるが、今度は柄に向けてカーボンロッドを放つ事で速度を落とし、さらにその衝撃で切歌の腕をブレさせ、軌道を変えさせる。その結果、ミカを切り裂いていたであろう刃は彼女の真横を通り過ぎ、地面を穿つ結果で終わってしまった。

「まずはお前から――」

「させないッ！」

切歌の胸のペンダントを破壊しようとミカが彼女に掌を向けた途端、スケート選手顔負けの勢いで回転した調が迫る。

『△式・艶殺アクセル』

鋸となったスカートが迫るが、ミカは笑顔を絶やさずにジャンプ。調と切歌の頭上を取り、両手から大量のカーボンロッドを射出してくる。スカートを元に戻した調の手を切歌が取り、カーボンロッドの雨から逃れる。

「切ちゃんッ！」

「合点承知デスッ！」

重力に引かれてミカが地面に降り立つと、それと入れ替わるように調に投げ飛ばされた切歌が肩アーマーから四枚の鎌を展開する。

『封伐・PINO奇お』

着地した直後を狙われたため、ミカが僅かに反応に遅れた隙を突いて、切歌の四枚の鎌が襲い掛かる。

しかしそれは、突如として両者の間に出現した氷の壁によって阻まれてしまった。

「助太刀に来ました、ガリイちゃんですッ！」

「おお、待ってたゾッ！」

ミカのみで勝てるのであれば上々。ダメージを受けたとしても多少の事なら見逃すが、先程の攻撃が決まっていれば、それなりの損傷を受けていただろう。少し離れた場所からミカと二人の装者達の戦いを眺める中そう判断したガリイは、明らかに無防備な状態だったミカを護る為に参戦したのだ。

ミカにとつては有難い援助だが、LINKERの過剰投与でようやく彼女とまともに戦えている調と切歌にとつては、文字通り『最悪』の一言に尽きる状況になってしまった。

「この状況で援軍……………」

「ちよつとまずいデスけど、諦めるわけにはいかないデスッ！」

ここで怖気づいてどうする。今動かねば、なにも変わらない。変えられないのだ。

変わる。かつての臆病者だった自分達から、一步踏み出すのだ。

「いこう、切ちゃん。絶対に勝とう」

「負けるわけには、いかないデスッ！」

敵が一人増えた程度がなんだ。自分達の心は、決して折れはしないと己を奮い立たせ、二人は絡繰りの騎士達に挑む。

「うおおおおおおおッ!!」

アクセルの拳が、足が、目にも留まらぬ速さで叩き込まれる。スピードに特化している形態であるのでパワーは通常フォームより劣っているが、トライアルメモリの力で倍増したスピードで繰り出される連撃は、そのパワー不足を補って余りある。その証拠に、攻撃が命中する度に襲い掛かる衝撃にファイタードールパントが苦悶の声をあげている。

(ああ、これだ………ッ！ この感覚がいいッ！)

しかし、ファイタードールパントの心中にあるのは『焦燥』などではない。彼の内にあるものは、『歓喜』。傭兵として長い間死地を渡り歩いてきた彼は、死の瀬戸際にいるからこそ、その真価を発揮するのだ。四肢を変形させ、両肘と足裏にブースターを装備。一気に噴射させ、トライアルに匹敵する速度を以てカウンターを叩き込む。

「なに………ッ!？」

「火が付イタッ！ 止メラレルモノナラ止メテミナッ！」

凄まじい速度で攻撃が飛び交い、アクセルは急所に飛んでくる攻撃はなんとしても防ぎ、それ以外の箇所へ繰り出される攻撃は極力受け流しながら隙を窺っていく。

(……………ッ！ ……だッ！)

突き出された拳を躲し、真横を通り過ぎていく手首を掴み、回転。左足を強く踏み込み、持ち上げたファイタードーパントの体を地面へ叩きつけた。

「ガ、ハア……………ッ！」

背中を強く打ち付けられた衝撃で肺から一気に酸素が飛び出したファイタードーパントが噎せ込む。

「これで……………終わりだッ！」

決着をつけるべく、アクセルがトライアルメモリのマキシマムドライブを発動しようとした刹那――

「ナアンテ、ナ」

「……………ッ!? う……………ッ!?」

背中に燃えるような激痛が走り、アクセルが膝をつく。

「な、なんだと……………ッ!?」

振り向いたアクセルの視界に映ったのは、今にも自分の首を刈り取ろうとする、死神の姿だった。

――ミカのカーボンロッドとガリイの氷槍を躲し、二人を挟むように移動した調と切歌が攻撃攻撃を仕掛けるも、ミカとガリイはそれぞれ前後に飛び退く事で回避。すぐさま反撃の一撃が飛んでくるが、切歌は鎌を回転させてカーボンロッドを弾き、調はヘッドギアから射出した丸鋸で迎撃する。





那、そこから飛び出してくる影が二つ。

「バイナラアアアッ！」

「頭でも……………冷やしやあああああッ！」

ガリイの氷槍とミカのカーボンロッドが、無防備な調と切歌に迫る。完全に不意を突かれた形で攻撃を受けた二人に防御手段などなく、オートスコアラーの攻撃は寸分違わずにペンダントを直撃した。

「まあまあだったけど、楽しませてもらったゾ」

ギアが強制解除され、一糸纏わぬ裸体で倒れた二人に、ミカがそう告げる。

——ここに、イガリマとシウルシャガナは破壊された。

「——よくやった。ミカ、ガリイ」

ミカとガリイによって二つのシンフォギアが破壊されたのを確認したキャロルは、以前の失敗を挽回した騎士達に労いの声をかける。

『褒められたゾッ！ 照れくさいゾッ！』

『ふっふくん♪ ガリイちゃんもやればできるんですよッ！ それで、こいつらはどうします？』

「適合係数の低いそいつらの歌に用はない。好きに始末するといい」

冷徹な態度でそう言い放ち、キャロルは通信を切った。

——<sup>キャロル</sup>主人からの命令を受けたミカとガリイは互いに頷き

合い、残虐な笑みと共に大量のジエムを砕く。

そこから現れたアルカ・ノイズの集団が、無防備な状態で倒れている調と切歌に狙いを定める。

「始まるゾツ！ バラバラ解体ショーツ！」

「アハハッ！ さあ、こいつらがどんな顔で消えていくのか、ガリイちゃん楽しみで仕方ないわッ！ ……それに」

ふとガリイが視線を調と切歌から外した直後、二人の前に一人の男性が投げ飛ばされてくる。

「ぐ、うう……………ツ！」

「竜さん……………ツ！」

投げ飛ばされてきたのは、デスドローパントの不意打ちを受けた隙を突かれてファイタードローパントに殴り飛ばされてきた竜だ。余程手酷く痛めつけられたのか、変身は解かれており、その体には無数の傷が見受けられる。

「仮面ライダーの一人も、これで最後ですね」

「少シ物足りナイガ、コレで終ワリダナ」

「な、舐めるな……………ツ！」

まだ心は砕けていないと、よろよろと立ち上がった竜がデスドローパントとファイタードローパントを睨みつける。しかし、彼らの間にはアルカ・ノイズの大群。それに加え、竜はトリアルメモリを使用した際にエンジンブレードを投げ捨ててしまっているため、抵抗手段は皆無に等しい。

それでも尚、この男の目には熱き闘志の炎が燃え上がっていた。

「俺は、仮面ライダーだ……………。最後の最後まで、諦めてやるつもりはない……………ツ！」

拳を構える竜の姿に、ガリイは感嘆した様子でパチパチと拍手する。

「素晴らしい精神。だけど、根性だけでどうにかなるほど、世の中は甘くないんだよッ！」

「うおおおおおおおッ!!」

アルカ・ノイズの集団が一斉に襲い掛かる。それに対し、竜はその身一つで立ち向かっていく。

「竜さんッ！」

「無茶デスッ！ アルカ・ノイズに触ったら、体が……………ッ！」

アルカ・ノイズの一体が竜に腕を伸ばした。勢いよく伸びた腕は竜の服に当たり、そのまま彼の体ごと――

「――させるかよッ！」

刹那、銃弾が降り注いだ。

何者かによって撃ち出されたそれは寸分変わらずに竜を消滅させかけていたアルカ・ノイズどころか、その周囲にいたアルカ・ノイズもまとめて消滅させていく。

それだけではない。風を切り裂いて煌めいた刃が、次々とアルカ・ノイズの首を斬り落としていき、拳がアルカ・ノイズを貫き、消滅させていく。

「大丈夫ですかッ!？」

「お前達は……………」

驚く竜達の前にやって来たのは、シンフォギアを纏った響、翼、ク

リスだった。

「待たせました。ここからは私達がッ！」

「お前達にばっかりいい格好はさせないぜッ！」

それぞれの得物を構える三人だが、ガリイ達は余裕そうだ。

「頼もしい援軍。でも、あんたらじゃあたし達は止められないッ！」

「それはどうだろうな？」

不意に聞こえた声にハツとしたガリイ達が振り返ると、バイクのエンジン音を轟かせながら、一人の男がやって来た。

咄嗟にガリイが張った氷の壁でバイクに撥ね飛ばされるのを防いだ四人だったが、その瞬間、背後から襲ってきたなにかに斬りつけられて僅かに呻き声を上げた。

「不意打ちで撥ね飛ばそうとするなんて、結構残酷な事するんだね」

「ふん、生憎と、俺はお前達みたいに甘くは無くてな」

「克己先生、それにフィリップさんもッ！」

バイクから降りた克己とフィリップが響達に頷き、满身創痕の竜達を護るように立つ。

「さて、こいつらをどうしてやろうか。先輩？」

「反撃……程度では生温いな。逆襲するぞッ！」

「はいッ！」

三人の装者が構えを取る中、フィリップは隣に立つ克己に口を開く。

「君がここに来たという事は、大丈夫という事だね？」

「ああ。わざわざお前達の足を引っ張るつもりは無い」

「……………まさか、君と同じ敵を見据える事になるだなんてね。運命というものは、相変わらず僕を楽しませてくれる」

克己がロストドライバーを装着し、ファイリッパはダブルドライバーを装着する。それを見た響は頭に？マークを浮かべて問いかける。

「あれ？ Wは翔太郎さんが変身するものじゃ……………」

「たった一つだけだけど、僕を本体に変身する形態もあるんだよ。――

――ファイリッパ！――

「ギヤウツ！」

ファイリッパの声に応えるように、どこからともなくやって来た恐竜のような姿をしたロボットがファイリッパの手に飛び乗った。先程、克己の不意打ちを防いだガリィ達を攻撃したのは、このロボットなのだ。

「いくよ、翔太郎」

フアングを折りたたんだファイリッパは、T2エターナルメモリを構えた克己と共にガイアメモリのスイッチを押した。

『エターナル！』

『フアング！』

「……………ああ、いつでもいけるぜツ！」

メデイカルルームで上半身を起こした翔太郎は、ダブルドライバーを通じて聞こえてきた相棒の声に頷き、ジョーカーメモリを取り出す。

『ジョーカー!』

「『変身ッ!』」

————— T2エターナルメモリを挿し込んだロストドライブと、転送されてきたジョーカーメモリとフアングメモリが挿し込まれたダブルドライブのバックルが倒される。

『エターナル!』

『フアングジョーカー!』

二人を中心に突風が吹き荒び、彼らの全身を地球の記憶によって作り上げられた鎧が覆っていく。

純白の鎧に漆黒のローブが靡かせるのは、『永遠』の戦士——  
—仮面ライダーエターナル。

鋭利なデザインに、荒々しい雰囲気を感じさせるのは、『牙』と『切り札』の戦士——仮面ライダーW・フアングジョーカー。

ここに、かつて死闘を繰り広げた宿敵同士が手を取り合い、恐るべき強敵達に挑む——ッ!

## Iの始動／抜剣

「パパ、どこまで行くの?」

清々しい青空の下、キャロルはイザークに訊ねる。既に家を出発して大分時間が経っている。遠出をするという事は予め聞かされ、それに相応しい身支度もしていたが、まさかここまで遠い場所に来るとは思わなかった。

「この先で採れるアルニムという薬草には、高い薬効があるらしい。その成分を調べて流行病を治す薬を作るんだ。……………見てごらん」

「……………? うわぁ……………ツ!」

イザークの視線を追った先にあるのは、広大な湖だ。人工物など一つもなく、まさに自然そのものを象徴するような光景を前に、キャロルは思わず感嘆の声を漏らしてしまった。

「パパはね、世界の全てを知りたいんだ。人と人がわかり合う為には、とても大切な事なんだよ。さぁ……………ツ!」

行こう、と言いかけたその時、イザークの聴覚は異様な音を拾った。それは、山を登っていると稀に聞きつける、獣の呻き声のようなものだった。

「パパ……………ツ!」

「キャロル、パパから離れないように」

怯え始めたキャロルの手を強く握り、イザークは注意深く周囲を見渡すが、呻き声のようなものをあげた存在はまるで見つからない。



森の中であれば、いつどこから襲ってくるか気が気でないが、今自分達がいるのは大きく開けた場所だ。こちらを狙っている動物がいるのなら、その姿が見えないはずが無い。

だというのに、呻き声はさらに大きくなっていく。しかしそのおかげで、その根源がどこにいるかの大まかな方角は掴めた。

「……………う？ あれは……………」

その方角を視線を向けると、まず最初に低木が見えた。そして次に見えたのは、そこから僅かに伸びている、二本の足だったのだ。

「……………まさか、ね？」

それを見た瞬間、イザークは先程まで神経を張り詰めさせていた自分が馬鹿らしく思えて苦笑した。

「パパ？」

「大丈夫だよ、キャロル。ここに獣はいない。さっきの音の正体は、彼だよ」

「え……………う？」

そこでキャロルも低木の下にいる人物に気付き、恐る恐る低木の下を覗き込む。

「あ……………う？」

「あっ」

黄緑色の瞳と目が合い、キャロルはびつくりしてイザークの背後に隠れる。イザークはそんな愛娘が少しおかしくて小さく笑った後、キャロルと同じように低木の下にいる人物を見る。

不思議な格好だ。全身にぴっちり張り付いていると考えられる

服装の青年の目には、微かな警戒心が宿っている。

「大丈夫かい？ だいぶやつれてるけど……………」

安心させるように優しい声で訊ねると、イザークに敵意はないと感じ取ったのか、青年の瞳から警戒心が薄れていき、掠れるような声で答えた。

「……………飯」

「飯？ ……………うん、少し待ってて」

背負っていたリュックから、昼食用に作っておいたサンドイッチを差し出すと、青年はひったくるようにそれを奪い、ガツガツと食べ始めた。

「パパ、よかったの？」

「うくん……………。でも、こんな人見過ごせないよ。この様子を見るに、お腹が空いてたみたいだね」

「お腹が空くと、あそこまで鳴るものなの……………？」

「たぶん、長い間なにも食べてなかったんだと思う」

イザークとキャロルがそんな会話をしているうちに、青年はサンドイッチを食べ終え、低木から出てきた。

「ここしばらくになにも食べてなかったんだ。本当にありがとな。そして、すまねえ」

「いやいや、僕が決めてあげたんだから、謝る必要は無いよ。僕はイザーク・マールス・デインハイム。こちらは娘のキャロルだ。君の名前は？」

「エン————いや、俺は……………」

なにかを言いかけて途中で止めた青年は、一瞬だけ考えるような素振りを見せた後、こう口にした。

「エルリン。エルリン・ラインハルトだ」

これがキャロル姫と、エルリン騎士の出会いだった。

「……パパ、エルリン………」

遙か昔の記憶を呼び起こしていたキャロルは、そつと瞼をこじ開ける。しかし、そこにはあの頃の光景は広がっていない。何度も目にしてきた、忌城の一室だ。

「………始めようか。思い出を力と換えて——万象黙示録の完成の為に」

託された命題。『世界』という名の謎を解き明かす為、孤独な姫は拳を握り締めた。

「——挨拶など無用 剣舞う懺悔の時間 地獄の奥底で 闇魔殿にひれ伏せ」

ギアを翼風刃に変化させた翼が、胸の内より湧き上がる歌を口ずさんで駆けだし、暴風の剣を以てアルカ・ノイズの大群を消滅させる。

「——一つ目は撃つ 二つ目も撃つ 三つ四つ めんどくせえ………キズナ」

対するクリスもギアをアズウティラールに変え、二丁の蒼白のマグ

ナムで次々とアルカ・ノイズをハチの巣に変えていく。

「なめるでないッ！」

「なめんじゃねえッ！」

「うおおおおおおおッ!!」

翼とクリスが切り拓いた道を稲妻のように突っ切ってきた響が、フェイトシンギュラーの拳でミカとガリイに攻撃を仕掛ける。

「うわあッ!」

「なにいッ!」

咄嗟にミカの前に躍り出たガリイが氷の壁で攻撃を阻もうとするも、今の響の拳の前では飴細工も同然。簡単に突き破られ、二人まとめて殴り飛ばされてしまった。

『アームフアング!』

「ハア——ッ！」

「シイ——ッ！」

そこから離れた場所では、Wとエターナルがラメンターのドーパント達と交戦している。

「ぬう……………ッ！」

「ガ……………ッ！」

Wの右腕に出現したアームセイバーがデスドーパントを、エターナルのエターナルエッジがファイタードーパントを切り裂いて火花を飛び散らせ、斬りつけられた二人が僅かに後退する。

「ハア……………ハア……………ッ！」

『クールダウンしろよ、相棒。久々にフアングの荒さに呑まれかかってるぞ』

フアングジョーカーは高い機動力と戦闘力を誇るが、あまりにも強力なフアングメモリを使用している為、本体のフィリッブが暴走してしまう危険性がある。とあるドーパントとの戦いにおいてその危険性は抑えられているが、それでも気を抜けば『牙』の記憶に呑まれかねない。

「君と一つになっていれば大丈夫だ、翔太郎。相棒きみがいる限り、僕がフアングに屈する事はない。それに、もし僕らが暴走したとしても、彼が止めてくれるはずだ」

「自信がないのか？ 随分と弱くなったな」

『へッ！ んなわけあるかよッ！』

デスドーパントの人魂とファイタードーパントの銃弾を回避したWはフアングメモリのレバーを二回押す。

『シオルダーフアング！』

肩に出現したシオルダーセイバーを手にするや否や投擲。風を切り裂いて飛んでくる白刃を二体のドーパントが弾き飛ばすが、そこへすかさずエターナルが飛び込んでくる。

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

「うおらあッ！」

ドリル状のエネルギーを纏ったエターナルの拳が叩きつけられたドーパント達が吹き飛ばされる。彼らが飛んでいく先には、響によって殴り飛ばされたミカとガリイの姿がある。

「翼さん、クリスちゃんッ！」

「承知ッ！」

「言われるまでもねえッ！」

翼は周囲に吹き始めた突風を剣に纏わせ、クリスはマグナムを合体させたバスターライフルを構える。

『翠ノ疾閃』

『TRAITOR's ROAR』

地を抉り取る暴虐の嵐と、全てを貫く蒼紅のレーザーがオートスコアラーとドーパント達に直撃し、彼らの姿を爆発で生じた黒煙が覆い隠す。

「ふん、ちよせえッ！」

「……………いや、待てッ！」

黒煙の奥からなにかが輝いたのを見逃さなかった翼が注視する先、徐々に黒煙が晴れていく。

そこにいたのは、黄金の障壁を以て翼とクリスの技を防ぎ切ったキャロルと、自らの靄を盾状にして攻撃を受け止めたアルケウスドーパントの姿があった。

「間一髪。助かりましたよ、マスター」

「面目ないゾ」

「いや、手ずから凄いでよくわかった。オレの出番だ。全てに優先されるのは計画の遂行。ここはオレに任せてお前達は戻れ」

「お前達も下がれ。ここからは俺が出る」

「わかったゾッ！」

「……………ご武運を」

オートスコアラードとドーパント達がテレポートジェムを砕いて姿を消すと、防御態勢を解いたキャロルとアルケウスドーパントが並び立ち、仮面ライダーと装者達に向かってくる。

「ラスボス共のお出ましとはな」

「だが、決着を望むのはこちらも同じ事ッ！」

「ガイアメモリに強化されたギアを纏って調子に乗るのもいい加減にしろ。この身一つでお前らを相手にするくらい、造作も無い事……………」

「では、俺は仮面ライダー共の相手をしよう。怪人は正義の味方と戦う定めにある」

「……………貴様はとつととやられてしまえ」

『なあ、フィリップ。いくら敵のボスとはいえ、子どもとやり合うのは気が引けるんだが……………』

悪態を吐いて向かってくるキャロルを見たWから翔太郎の声が漏れる。それはこの場において、克己を除いた全員が思っているだろう。しかし、それを聞きつけたキャロルはムツとして口を開いた。

「……………なるほど。ナリを理由に本気が出せなかつたなどと、言い訳されるわけにもいかないな。……………ならば、刮目せよッ！」

キャロルが左手を翳すと空中になんらかの術式が浮かび上がり、そこから一台のハープを取り出し、美しい音色を奏で始めた。

「……………まさか、あれは……………ッ！」

キャロルが取り出したハープを見たフィーネが息を呑んだ瞬間、司令室にサイレンが鳴り響く。緊急事態を告げるものとは違うものだ。

「アウフヴァアッヘンツ!? ……………いえ、違います。ですが、非常に近いエネルギーパターンですッ!」

「まさか、聖遺物の起動ツ!」

「ダウルダブラのファウストローブ……………ツ!」

驚愕するマリアの隣にいたエルフナインが、モニターに映し出されているキャロルの持つ『それ』を見て、緊迫した様子で『それ』の名を口にした。

——ファウストローブ。それは、聖遺物の欠片より変換されたエネルギーを、錬金技術の粋によってプロテクターの形状として錬成させたものである。聖遺物の力を活性化させて使用者の身に纏わせるという意味ではシンフォギアと非常に近い存在だが、シンフォギアとの明確な違いは、戦術起動の際に『歌』を必要としない点だ。

シンフォギアが聖遺物と科学の融合で生まれたものなら、ファウストローブは聖遺物と錬金術の融合。似ているようで似ていない存在なのである。

ダウルダブラとはケルト神話の主神、ダグザが用いたとされる豎琴の名称。この豎琴は演奏者なしでも巧みに奏でられ、天候を操る能力すら有していたという伝説を持つものだ。

「これくらいあれば不足はなからう?」

そう言って仮面ライダーと装者達に見せつけるように大きく育った自分の胸を触ったキャロルの姿は、先程までの子どもの姿ではなく、成人した美しい女性のものへと変貌している。

「大きくなったところでッ!」

「張り合うのは望むところだッ!」



三人の装者がキャロルに挑む傍ら、アルケウスドーパントは何度か首の骨を鳴らしながらWとエターナルに近づいていく。

「風都を護る仮面ライダーの一人、W。最恐の傭兵部隊NEVERのリーダー、エターナル。お前達は我々の計画の大きな障害だ。ここで潰す」

「悪いけど、そう簡単にやられるわけにはいかないね。君の思い通りにさせるわけにはいかない」

「ここで倒れるのはお前だ。さあ————地獄を楽しみなッ！」

構えを取ったWとエターナルに、アルケウスドーパントが襲い掛かる。

暗黒の軌跡を残しながら振るわれた凶爪を躲したエターナルの攻撃を受け流したアルケウスドーパントにWの拳が迫るが、それを掴んで受け止めたアルケウスドーパントはそのままWをエターナルに放り投げた。

さらに靄状の爪を巨大化させ、鎌と見紛う鋭利なものと化したそれを二人に振るってくる。

「合わせろッ！」

「ああッ！」

『おうよッ！』

『フアング・マキシマムドライブ！』

『アームフアング！』

蒼白の牙状のオーラを纏ったエターナルエッジとアームセイバーが煌めき、迫り来る凶爪を弾く。アルケウスドーパントの体が僅かに仰け反り、そこへエターナルはエターナルエッジを投擲する。

アルケウスドーパントの体から火花を飛び散らせたエターナルエッジはブーメランのように主の右手へ戻り、エターナルはマキシマ

ムスロットからT2フアングメモリを引き抜いた後、新たなT2ガイアメモリを挿し込み、Wはレバーを二回押す。

『バイオレンス・マキシマムドライブ！』

『シオルダーフアング！』

「ぬおおおおおお………ツ!?」

強化されたエターナルの拳と、シオルダーセイバーを伸ばしたWのシオルダータックルが炸裂し、アルケウスドーパントが大きく後退するが――

「ぐう………ツ！ 舐めるなああああアツツ!!」

「……………ツ!? ぐわあツ!」

「く……………ツ!」

全身から放出された暗黒の波動に堪らず吹き飛ばされたエターナルとWが顔を上げた瞬間、一気に距離を縮めてきたアルケウスドーパントに殴り飛ばされた。

『なんつーパンチだ………ツ！ こりや、これまで戦った中でも一番強えぞツ！』

「あの身のこなしから、恐らく憑依している人物の身体能力が高いんだろう。……………大道克己、彼を抑え込む事はできるかい？」

「不可能ではない。だが、簡単にそうさせてはくれないだろう……………なツ！」

横薙ぎに振るわれた巨大な靄爪を伏せて回避し、素早い動きで接近するエターナルをアルケウスドーパントが迎え撃つ。

――キャロルの指から伸びた弦が地面を容易く切り裂き

ながら三人に迫る。飛び退いて回避した響が翼と共にキャロルに走り出すと同時、クリスがマグナムから光弾を乱射する。

迫り来る光弾を黄金の障壁で防ぐキャロルに響と翼が挟み撃ちする形で攻撃を仕掛けるが、これもキャロルが新たに張った障壁に防がれてしまう。

「温いな、装者共ッ！」

「うわぁッ!？」

「く……………ッ！」

障壁に押し飛ばされた二人に向かってキャロルが術式を展開。今度は燃え盛る炎のような赤色の術式で、間髪入れずに灼熱の業火がそこから放たれた。

咄嗟に炎を回避した二人だが、自分達を逃した炎が直撃した施設が大爆発を起こしたのを見て、その威力に戦慄する。

「な……………ッ!？」

「この威力……………まるで絶唱ッ!？」

「舐めるなよ、オレの力はこんなものじゃないッ！」

今度は竜巻を発生させてきたキャロルに、翼が翼風刃の竜巻で迎え撃つ。両者の暴風がぶつかり合い、互いを食い尽くさんと暴れているのを見て、キャロルは「ほう？」と小さく笑った。

「オレと互角か。だが、それは所詮ガイアメモリの力あってこそ。そんなのじゃ、オレは止められないッ！」

「ぐ、ああ……………ッ！」

「翼さんッ！」

「先輩ッ！」

二つの竜巻が爆散し、その風圧に吹き飛ばされた翼を響とクリスが

受け止めるが、そんな三人に今度は激流が襲い掛かってきた。

「ぐあああああッ!?」

激流に押し流された三人が地面に倒れ伏すのを見て、キャロルは愉快そうに笑う。

彼女がここまでの実力を発揮できるのは、彼女が過去に得た記憶——『想い出』を力に変換錬成させているからである。出撃前の彼女の言葉は、言葉の綾などではない、真実のみを表していたのだ。しかし代償として、力と換えた『想い出』は文字通り焼却され、キャロルは都度記憶を失っていく定めにある。先程も力を使った影響で、なにかの記憶が消えたが、そんなのは数百年の時を生き、常人では保ち切れない量の『想い出』を備えているキャロルにとってはなんの問題でもないのだ。

「大丈夫か、立花、雪音……………」

「な、なんとか……………」

「全く勝てるビジョンが思いつかねえが、『アレ』を試すには丁度いい相手だ……………。付き合ってくれるよな?」

「もちろんッ!」

「雪音一人で行かせるものか」

立ち上がり、頷き合った三人を見て、キャロルは余裕そのものな態度のままだ。

「フ、玉を隠しているなら見せてみる。オレは、お前らの全ての希望をブチ砕いてやる」

「言ったな? なら、たまげるんじゃないぞッ!」

「二人共、いくよッ!」

そして三人は、それぞれの胸にあるマイクユニットを握り締め、叫

ぶ。

「二」——イグナイトモジュール、抜剣ツ！「二」

放り投げたマイクユニットの形状が変化し、鋭い針となる。その針には微かに赤黒い稲妻のようなものが纏っており、まるで血に飢えた獣のような雰囲気を感じさせる。三人の少女達はその針を受け止める覚悟を決めて針を見上げた瞬間、それに応えるかのように飛んできた針が胸に突き刺さった。

「ぐ、うう……………ツ！」

「が、アア……………ツ！」

「ア、アア……………アアアアアア……………ツ！」

心臓が一際大きく鼓動したかと思えば、心の奥底からドス黒い邪悪な意思が溢れ出してくる。その意思は可視化できるほどの邪悪なエネルギーとなつて三人の体を包み込み、そのまま彼女達を破壊の使徒へと変貌させようとしてくる。

はらわた  
（腸を掻き回すような、これが……………この力が……………ツ！

立花は、ずっとこんな衝動に晒されてきたのか……………ツ！）

（クソ……………ツ！ 気を抜けば一瞬で深淵に真っ逆さまだ……………ツ！）

今にも視界に入るもの全てを破壊し尽くしたい、という途轍もない破壊衝動に身を駆られるが、彼女達は必死にそれを抑え込み、その暴虐の力をもにしようとして足掻き続ける。

イグナイトモジュールのコアとなる聖遺物の名は、ダインスレイフ。北欧神話の英雄ヘグニが所有していた、一度抜けば他者を斬り殺すまで鞘に収まらない殺戮の魔剣。その呪いは誰もが心の奥に眠らせる闇を増幅し、人為的に暴走状態を引き起こすものである。

しかし、その力の源が自らの心であるのなら、理論上それを従える事が可能だ。人の心と英知がダインスレイフに引き起こされる破壊衝動を捻じ伏せる事ができれば、シンフォギアはさらなる領域に足を踏み入れられるのだ。

その力を用いれば、大量の『想い出』を保有しているキャロルの錬金術にさえも打ち勝てるかもしれない。

(不覚……………ここまで、なのか……………ツ!?)

(ちつくしょう……………ツ! 心が、闇の底に……………ツ!)

だが、それは濁流のように押し寄せる破壊衝動に打ち勝った時のみ得られるものであり、現在の翼とクリスは、その破壊衝動に打ち勝てずに深い闇の底へ落ちかけていた——その時だった。

「諦めちゃ駄目ッ!」

「……………ツ!」

苦し紛れに叫んだ響の手が、二人の手を強く握り締めたのだ。翼とクリスとは違い、過去に暴走した経験がある響の体は、その身を呑み込まんとする破壊衝動への耐性を無意識に備えていたのだろう。そのお陰で、響は他の二人よりも理性を保っていたのだ。

「邪悪な心に負けないでッ! 忘れないで……………ツ! 私達が、なんの為に戦っているのかをッ!」

その言葉にハッと気付かされる。なぜ自分達は、この力を手に戦場へ臨むのか。なぜ自分達は、この力で数多くの敵を打ち倒してきたのか。

それは全て、今ある日常を護る為。超常の脅威から無辜の人々を護る為、自分達はこの力を手に取ったのだ。

イグナイトモジュール  
この力が本当に誰かを救う力なら、身に纏った自分達だって救ってくれるはずだ。

「天羽々斬……………。私に、天を衝く力を……………。ッ！」

「イチイバル……………。ッ！ あたしに、奴に突き立てる牙を……………。ッ！」

「応えて、ガングニール……………。ッ！ 私に、みんなを護る為の力を……………。ッ！」

かつて、フィーネが口にした言葉を思い出す。迫り来る月を押し返す際、彼女は『胸の歌を信じなさい』と言った。

ならば、信じよう。胸の歌を、シンフォギアを——ッ！

「……………。フツ、この馬鹿に乗せられたみたいで恰好つかないが……………」

「ああ、お陰で自分を取り戻せたッ！」

三人は自らに力を貸してくれたシンフォギアに祈りを込めながら、破壊衝動に耐え続ける。

「——呪いなど切り裂けッ！」

「撃ち抜くんデスッ！」

「恐れずに碎けば、きっと……………。ッ！」

司令室でマリア達が叫ぶ。

「負けないで、響ちゃん、翼ちゃん、クリスちゃんッ！」

「負けるなんて許さないわよ。胸の歌を信じなさいッ！」

祈るように両拳を握った亜樹子が叫び、彼女達の意志の力を信じているフィーネが叫んだ。

(響……………ッ！)

そして未来もまた、大切な親友は心の闇に吞まれないと信じ、祈り続ける。

———未来が教えてくれたんだ。力の意味を背負う覚悟をッ！)

響の歌は誰かを傷つける歌じゃない、と。伸ばしたこの手は、誰かを傷つける手ではない、と。そう信じてくれた彼女の為にも———

(だから、この衝動に塗り潰されて———)

胸の歌を強く信じ、自分達の意志を表明するかの如く叫ぶ。

「なるものかああああああああああああッッッ!!」「」

三人の咆哮が轟いた瞬間、それぞれの戦装束が変化を始める。

ガイアメモリの強化形態が解け、一度通常のギアに戻る。すると、三人の胸に刺さったマイクユニットを中心に暗黒の華が咲き、それを中心に彼女達の見た目を邪悪なものへと染め上げていく。

ギアのデザインは黒を基調としたものになり、全体的に刺々しいイメージに変化。禍々しくも、自らの闇を完全に制御した姿。

これこそが『Project IGNITE』の到達点———  
—イグナイトモジュールである。

「ほう？ まさか一度目で成功するとは。では、その力がどれほどのものか、見せてもらおうではないか」



三人がぶっつけ本番で成功するとは期待していなかったのか、少し意外そうに呟いたキャロルはジエムを碎いてアルカ・ノイズを出現させる。

「たかがアルカ・ノイズッ！」

「性懲りもなく雑魚を呼び出しやがってッ！」

「蹴散らすぞッ！」

襲い来るアルカ・ノイズの大群を、黒き戦姫達が迎え撃つ――

## 集いしF／苛烈なる呪律

「始まる歌」

「始まる鼓動」

「響き鳴り渡れ希望の歌」

猛り狂う凶暴性を完全に力へと換えた三人の歌は、外見がそうであるように荒々しく、そして猛々しい。

「生きる」

「事を」

「諦めない」と

後方へ飛び退いたキャロルと入れ替わるように、アルカ・ノイズの大群が動き出す。

「示せ」

「熱き夢の」

「幕開けを」

拳を、銃を、剣を握り締め、戦姫達は迫り来る厄災を見据える。

「爆ぜよ」

「この」

「奇跡に」

心火のスロツトルを吹かし、激情を動力源に。三人の少女は、静かにその時を待ち――

「嘘はない」

——瞬間、空気が爆ぜた。

一気に動き出した三人は、通常形態では引き出せなかったであろう速度でアルカ・ノイズの大群に突撃。

響の凶拳が、クリスの魔弾が、翼の絶刃が、瞬く間にアルカ・ノイズを蹴散らしていき、次々と黒き血風を吹かせていく。

それは最早、戦闘とは呼べない。

これは——蹂躪だ。

圧倒的な闇の力を前に、アルカ・ノイズは一体残らず、為す術なく灰燼と化す他ない。

「あれは……………」

「どうやら、成功したようだね」

『へっ、やるじゃねえか、あいつらッ！ こっちも負けてらんねえな、フイリップッ！』

「あぁッ！」

その戦いぶりを見たエターナルとWは、共に彼女達の戦意<sup>うた</sup>に当てられて仮面の奥で笑みを浮かべ、アルケウストローパントに攻撃を仕掛けていく。

「ぐ、この力は……………ッ!？」

「不思議だ。あいつらの歌を聴くと、力が漲ってくる」

「今の僕達なら——」

『テメエなんか屁でもねえッ!』

エターナルとWのパンチを受けた胸部から火花を散らせてアルケウストローパントが後退し、膝をつく。そこへ追撃を仕掛ける二人だが、アルケウストローパントは靄状の爪を肥大化させ、二人まとめて薙ぎ払おうとしてくる。

『バイオレンス・マキシマムドライブ！』

「なにッ!？」

「やれッ！」

怪力を発揮したエターナルに爪を受け止められたアルケウスドーパントの懐に、白黒の影が潜り込む。Wだ。

『アームフアング！』

『「ヤア————ッ！」』

「ぐううッ！」

アームセイバーの三連撃を受けたアルケウスドーパントが呻き声を上げた隙にWが飛び退き、今度はエターナルが迫る。

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

「オラアッ！」

ドリル状のエネルギーを纏った左拳でのコークスクリューを顔面に受けたアルケウスドーパントが地面に叩き付けられ、その威力の高さからバウンドボールのように跳ね上がる。そこへ右拳にエネルギーを纏わせたエターナルのパンチが繰り出される。

「ぐあああああッ！」

拳が触れた直後、そこから一気に放出されたエネルギー波に吹き飛ばされ、怪人の体は何度も地面を穿ちながら遠退いていく。

「臍へその下の疼いたきが収とまらんッ！」

装者達と仮面ライダー達の戦う姿を見たキャロルが魔弦を振るって彼らを攻撃してくる。

咄嗟に避けた彼らの前に降り立ったキャロルは不敵な笑みを浮かべる。その体からは強烈な威圧感が漂っているが、装者達も仮面ライダーも気圧されない。

「ようやく重い腰を上げやがったか」

「キャロルちゃん………………。これ以上は、私が止めてみせるッ！」

「ならば止めてみせろッ！ ハア————ッ！」

勢いよく左手が払われると、キャロルの前に赤色の術式が展開。灼熱の業火が飛び出してくるが、前へ飛び出したエターナルがエターナルロールでこれを防ぎ、彼の体を踏み台にして飛び上がったクリスが弾丸を放つ。それを軽く体を動かして回避するキャロルだったが、そこへ翼の剣が迫る。

キャロルの魔弦が煌めき、翼ごと剣を押し返し、その隙を狙ってきた響の拳を黄金の障壁で防御する。

「吹き飛ばえッ！」

術式を組み替えて障壁を水色に変え、そこから放たれた激流が響を押し流す。しかし、それは途中からいきなり軌道を変え、キャロルに殺到してきた。

「なッ!? つう……………ッ！」

これにはキャロルも流石に驚き、防御する暇もなく激流が全身に叩き付けられた。

「悪いな。こいつの前じゃ、水は全て俺の武器になる。……………ッ！」

自らが所有する二十二本のT2ガイアメモリの一本——

T2オーシャンメモリをマキシマムスロットに挿し込んでいたエターナルが咄嗟に身を振ると、先程まで彼がいた場所に五本の漆黒の刃が突き立った。見れば、その刃の根元にはアルケウスドーパントの姿がある。彼が爪を変化させて攻撃してきたのだ。

「持っ……ていけ、アルケウス………ッ！　ウオオオオオオオツツ！！」

獣のような咆哮を轟かせたアルケウスドーパントの全身から闇のオーラが噴き出し、彼を中心に凄まじいエネルギーが空気を震わせる。

『アルケウスドーパントのエネルギー、先程よりも二倍に増加ッ！』『マジかよ………ッ！　どれだけ強くなる気だこいつッ！』

「まずい………。これ以上彼に力を引き出させると、あの体の本来の持ち主にもなんらかの影響を与えかねないッ！」

飛びかかってきたアルケウスドーパントの攻撃をWが避けると、標的を逃した一撃は地面を大きく穿つ。明らかに強化されているアルケウスドーパントに驚愕するWに、下方から飛んできた蹴撃が炸裂する。

蹴り飛ばされたWを片手で受け止めたエターナルは、自分達を睨む怪人の姿に目を細める。

「あの姿、まるで獣だな」

『フアングに吞まれてた頃を思い出すぜ。あの時の俺達もあんな感じだった』

「ハア………ハア………ッ！　オ………オオオオオオオオオオオオオツツ！！」

吼えたアルケウスドーパントが暗黒のオーラを立ち昇らせながら

突進してくる。その荒々しい気配に、エターナルはかつてシンフォギアの暴走機能に呑み込まれた響の姿を連想させられる。

まさしく『暴虐』と呼ぶに相応しい威力を伴った連撃が二人を襲う。防御態勢を取った二人はまとめて吹き飛ばされるが、ほぼ同時に駆け出して反撃に移る。

まずはWが右拳でアルケウスドーパントを殴打し、彼が怯んだ隙に二度、三度と拳を叩き込んでいく。殴りつけられた痛みがあるにも関わらず、アルケウスドーパントはまるで意に介さずにWを殴り飛ばそうとしてくるが、Wは体を伏せて拳を回避。反撃に突き出された右足が彼の腹に刺さり、僅かにその体が後退する。

そこへ飛び込んできたエターナルが、すぐさまエターナルエッジを振るって追撃する。長年戦場で培われてきた対人戦のプロとしてのスキルが輝き、鈍く輝く刃は的確にアルケウスドーパントの急所を切り裂いていく。

手負いの獣が如き呻き声を上げたアルケウスドーパントに、Wとエターナルのキックが炸裂する。合計25tもの衝撃を受けたアルケウスドーパントは今度こそ吹き飛ばされた。

「グウウウウウ………ッ！ ガ、アア………ッ！」

唸り声と共に起き上がったアルケウスドーパントだったが、突然頭を押さえて呻き始める。その様子を見ると、彼がなにかを失うのを恐れるように思えてくる。

しかし、このチャンスを逃すわけにはいかない。これ以上彼に力を引き出させたら、流石に今の自分達では抑え切れないと判断した二人は必殺技を放つべくベルトに手を伸ばす。

『ファング・マキシマムドライブ！』

『エターナル・マキシマムドライブ！』

レバーを三回押したWの右足にマキシマムセイバーが発現し、エ

ターナルエッジを包み込むように蒼い炎が発生する。

『フアングストライザーツツ!!』

『エターナルヘルスラッシュ』

蒼炎の斬撃がアルケウスドーナパン트에直撃した次の瞬間、ジャンプしたWの回転蹴りが炸裂。彼の体を包み込むように現れた恐竜の頭部のようなオーラはWの蹴りと共にアルケウスドーナパン트를噛み砕いた。

「オ、オオオオオ………ツ！ まだ、まだ終わってたまるか………ツ！ 仮面ライダー………ツツツ!!!」

断末魔の叫びを上げながら、アルケウスドーナパン트는大爆発を起こした。

「二」——絆、心、一つに束ね「二」

一方、キャロルと装者達の戦いもいよいよ佳境に差し掛かっていた。

弾丸を防ぎ切ったキャロルの魔弦が剣と火花を散らす。恐るべき強度と誇る魔弦を前に歯を食いしばった翼はあらん限りの力を込めてそれを押し切り、彼女が拓いた道を響が突っ走る。

「二」——響き鳴り渡れ希望の音「二」

キャロルはすぐさま魔弦を編んでドリルを形成。内側に存在する弦を引いて回転させ、響の体を抉り尽くそうとしてくる。

「二」——信ず事を諦めない「二」





「……………フアラ」

「ここに」

「エルリンを頼む」

「はい」

キャロルの隣に現れたオートスコアラの一機のフアラは、主の命に従ってエルリンの体を抱え上げ、テレポルトジェムを砕いて姿を消す。

(この体では、抱えられないからな……………)

こんなちんちくりんな体では、彼を抱え上げるなど不可能だ。出来て引き摺るくらいだが、それをやるくらいなら誰かに運んでもらった方がいいだろう。

「……………で？ なんの用だ」

「……………どうして、世界をバラバラにしようなんて思ったの？」

自分はキャロルの事を全く知らない。彼女の過去になにがあったのか。彼女がなにを思っ、世界を解剖しようと思いつたのか。なにもかも知らない。

けれど、もし自分に解決できる事なら、彼女の助けになりたい。

純粋な、真つ直ぐな気持ちのままに言う響に、キャロルはスツと目を細め――

「………………忘れたよ。理由なんて。想い出を焼却………………戦う力と換えた時に」

どこか物悲しそうに、小さく答えた。

キャロルの目が響達に向けられる。

ドヴェルグⅡダインの遺産――ダインスレイフの欠片を

用い、自らの闇を律する事で手に入れた力。万物を破壊する、悍ま  
き暗黒の牙。

「その呪われた旋律で誰かを救えるなどと思いつがるな」

「……………ッ!?!」

「フ……………」

その一言に動揺した響に、一矢報いてやったとばかりに嗤ったキヤ  
ロルは、奥歯を噛み締める。

一瞬だけ、緑色の輝きが見えた直後、キヤロルの体が倒れる。

「キヤロルちゃん……………?」

突然倒れたキヤロルに訝し気に見つめる響達の前で、キヤロルの体  
が緑色の炎に包まれ始める。

「キヤロルちゃんツ!?!」

叫んだ響が彼女を助けようと駆け出すが、それよりも緑色の炎が彼  
女の体を焼き尽くす方が早かった。

キヤロルだったものが残され、その前に崩れ落ちた響の慟哭が響き  
渡った――

「……………真一の奴、やられたのか?」

「はい。あれは間違いなく『敗北』です」

「……………ハッ! という事は、いよいよつてわけか」

シアンの言葉に、燈迹はニタリと獰猛な笑みを浮かべる。

自分達を率いる男の敗北を知っても、彼らはシヨックを受けるどこ  
ろか、その逆。彼らは喜んでさえいた。

「……………お兄様」

そんな彼らの姿を、およそ人のものとは思えぬ冷たい瞳で見つめる  
叶は、静かに瞳を閉じる。

「——歯車が回り出したゾ」

「次なる踊りは、派手に果たしてみせよう」

「世界解剖に必要なメスを揃えて」

「万象黙示録の完成の為に」

一方、仕えるべき主君を亡くしたオートスコアラ―達も、その口元  
には笑みがあった。

我々には、主より我々に与えられた使命がある。

それすなわち、万象黙示録の完成。

いずれ、主は再び玉座へ舞い戻る。その時へ向けて、着々と準備を  
進めるのみ。

戦いは、続いていく

## 復活のA／銀腕・アガートラーム

「はい、イガリマとシユルシャガナ」

キャロル達との戦いから数日後、エルフナインと共にミカとガリイに破壊されたイガリマとシユルシャガナを改修したフィーネから、調と切歌はそれぞれのシンフォギアを受け取る。

「ありがとうデスッ！」

「これでまた戦える」

「機能向上に加え、イグナイトモジュールも組み込んでいます。そして、もちろん——」

「復活の、アガートラーム……………」

エルフナインから手渡されたアガートラームのペンダントをぎゅっと握り締める。アガートラームもマリアとの再会を喜んでいいのか、どこことなく温かさを感じられる。

「改修ではなくコンバーター部分を新造しました。一度神経パスを通していているので、身に纏えるはずです」

「セレナのギアをもう一度……………。この輝きで、私は強くなりたい。そして……………」

暗黒のシンフォギアを纏った妹の姿を思い浮かべる。

デスドローパントの力によって蘇ったセレナ。あの時はLINKER無しの無茶な戦闘だったため、途中でギアが切れてしまったが、今度はそうはいかない。

（セレナから託されたこの力で、あの子の魂にかけられた呪縛を解いてみせる……………ッ！）

「ですが、イグナイトモジュールを使う時は注意してください。響さん達は一度で成功させましたが、それが彼女達の意志が強かったからです。生半可な意思で挑んでは、すぐに暴走してしまいます」

「大丈夫。イグナイトモジュールの怖さは、わかっているつもりだから」「ダインスレイフの力に負けない為にも、特訓デスッ！」

「それなら、いいところがある。近く、筑波の異端技術研究機構にて、調査結果の受領任務がある。諸君らはそこで、心身の鍛錬に励むといいだろう」

「あそこには海もあるから、せつかくなんだし遊んで来たらどう？」

「おお、海デスカッ！ 行きたいデスッ！」

こうして、装者達はキャロル率いるオートスコアラや残りのラメンターのメンバーとの戦闘に向けて、特訓する事となった。

「——うしッ！ 遊ぶぞお前らッ！」

「おーッ！」

掌に拳を当てたボクサーパンツを履いた翔太郎に、亜樹子が腕を振り上げる。

「僕は行かないって言ったのに……………」

「まだ言ってやがる。弦十郎さんからも言われただろ？ 『君も翔太郎君達と遊んでくるといい』って。だったらお言葉に甘えようぜ」

「こうなった以上、諦めろ、フィリップ」

嫌々ながらも結局連れて来られる事となってしまうたフィリップだが、こうして到着してしまったのなら遊ぶしかないと小さく溜息を吐いた。

先日のアルケウスドーパントとキャロルとの戦いにおいて自分達は辛くも勝利する事が出来たが、フィリップは一つ気がかりな事が

あった。

マキシマムドライブを受けたにも関わらず、アルケウスドーパントからメモリが排出されなかったのだ。あの後現場を注意深く探ったが、それでもT2アルケウスメモリは発見できず、結局メモリの在り処はわからずじまいに終わってしまった。

だから自分は残って、過去に本棚で調べたT2アルケウスメモリについての情報を思い出して考察を立てていこうと思ったのだが、世話になっているS・O・N・G.を代表する弦十郎から『君も遊んでくればいい』と言われてしまえば断れない。

ちなみに彼らの水着はこちらの世界で購入したものである。響、クリス、翼はプライベート用の水着があるが、彼女達を除いたF・I・S組の装者達はそんなものなど持っていないし、翔太郎、フィリップ、亜樹子、竜に至っては異世界からやって来ているので水着なんて持っているはずもない。克己は体育教師である以上水泳の授業を持っているので水着はあるが、彼以外のNEVER部隊のメンバーは水着を持っていない。故にこちらに来る前にショッピングモールへ寄り、各自で水着を用意したのだ。

「すみません、ボクの分まで……………」

「いいんだよ、それくらい」

「エルフナインはS・O・N・G.に来てからずっと働きづめだったからな。こうして羽を伸ばすのもいいだろう」

「ま、あそこにいる馬鹿共みたいになるのは御免だけだな」

どこか遠い目をするクリスの視線の先には――

「喰らいやがれ京水イイイイイイツツツ!!!」

「ちよ、剛三ちゃん強すバアツ!」

「お返しよ。ハア――ツ!」

「レイカツ!? ワタシ味方ゲフウツ!」

賢が上げ、剛三が打ったボールを顔面に受けて倒れた京水に、彼と同じチームを組んで戦う事になったレイカの打ったボールが炸裂する。なんでこんな時まで京水こいづつと組まなくちゃならんだ、という怒りがひしひしと伝わってくるサーブである。

「動きが甘いな、京水。もっと精神を研ぎ澄ませ」

「アドバイスは助かるけど助けてくれないの、克己ちゃんツ!? うわッ!」

「剛三・賢チーム、一点リードだ」

「この、やってくれたわねッ!」

NEVERとして蘇った四人の攻防は凄まじい。動きが制限される砂浜の上だろうとお構いなしに強力なサーブを叩き込んでいく。時々ボールが京水に当たる事はあるが、それは彼の運が悪いだけと言っておこう。

「NEVER……………話には聞いていましたが、やはり凄いですね……………」

「あいつら、完全に殺るや気で打ち合ってるからな。お互いが信頼できる間柄だからこそつてのものもあるだろうが……………」

「まあ、ちょっと怖いよね。あはは……………。でも、とても楽しそう」

いざ戦闘となれば死者蘇生兵士としての実力を遺憾なく発揮する彼らだが、そんな彼らも遊びとなれば肩の力を抜いてリラックスしている。サーブの威力は置いておくとして。

海を見れば翔太郎がフィリップに水をかけ、フィリップもお返しとばかりに翔太郎に反撃している。無理やり連れてこられた彼だが、ちゃんと楽しめているようだ。竜と亜樹子はカップル用の浮き輪に乗ってぶかぶかと浮いている。亜樹子がニコニコしているのを見るに、彼女が竜を誘ったのだろう。



克己達から少し離れた砂浜では、調と切歌が砂で城を作っている。中々完成度が高いが、時々調から指摘を受けている。

「エルフナインちゃん、行こうッ！」

「は、はいッ！」

「クリスも行こうよ」

「ま、しょうがねえな」

響と未来、そしてクリスとエルフナインも海に走っていき、翼とマリアが残される。

「砂浜は足腰を鍛えるには最適ね」

「ああ。特訓に適した場所だな」

戦闘時には剣を扱う二人にとって、足腰を鍛える事は必要不可欠な要素である。武器を振るう腕は上半身にあるが、体を支える足がある下半身も大事だ。満身に踏み込めなければ強力な攻撃は繰り出せないのだから。

「――調査データの受領、完了しました。司令、了子さんは今そちらに？」

『隣にいるが、どうした？』

一方、筑波の異端技術研究機構。ここでは職員からナスターシャがフロンティアに遺したデータを受け取った緒川が弦十郎に連絡を取っていた。

「フロンティアのデータを解析した結果、『フォトスファイア』なるものが構築されました。どうやら地球に関するデータのようにですが、彼女ならなにか知っているのでは、と」

あくまで呼称ではあるが、研究機構の職員達がデータを解析した事によって構築された、地球儀のようなもの。便宜上、『フォトスフィア』という名がつけられているそれは、実際はもつと巨大なサイズらしい。

『ごめんなさい。フロンティアから回収したデータ、という情報だけじゃ絞り込めないわ。それに私自身、カスト<sup>あ</sup>デイアン<sup>方々</sup>の事を詳しく知っているわけでもないから、あんまり期待はしないで頂戴。それでも出来る限りは努力してみるわ。後で私のパソコンに送ってもらえるかしら』

「わかりました。後で転送します」

そう言っ、緒川は通信を切った。

「——おらおらおらくツ！ バッチコーイツ！」

場所は戻ってビーチ。剛三・賢チームの勝利に終わったビーチバレーボールは、今度は翼・クリスチーム対マリア・エルフナインチームの対決となっていた。

今はエルフナインがサーブを打つ側になり、その手には大きなボールが乗っている。

「今度はボクのサービスですね。……………それッ！」

勢いよく打つが、ボールはあまり飛ばずに落ちてしまった。

「あれ？…なんでだろう？…強いサーブを打つ為の知識はあるのですか……………実際やってみると全然違うんですね」

「背伸びをして、誰かの真似をしなくても大丈夫。下からこう

「……………こんな感じに」

「マリアの指摘を受けてもう一度打ってみるが、また失敗してしまっ  
た。」

「はうううう……………すみません……………」

「弱く打っても大丈夫。大事なのは、自分らしく打つ事だから」

「……………はい、頑張りますッ！」

「勇気づけられたエルフナインは、必死に点を取ろうと奮闘し、マリ  
ア達も彼女の気概に励んで試合を進めていく。」

「そして、しばらく経った頃——」

「ところで皆さん、お腹が空きませんか？」

「だが、ここは政府保有のビーチ故……………」

「普通のビーチなら海の家などがあるだろうが、生憎とここは政府が  
保有しているビーチだ。海の家どころか、一般人の姿すらない。」

「と、いう事は……………」

「あれしかねえよな？」

「これからなにがするか、全員が理解していた。」

『コンビニ買い出しジャンケンポンッ！』

「——切ちゃん、自分の好きなものばかり」

「結果、調と切歌、翼が買い出しに行く事が決まり、コンビニで響達  
の分の食事も買ったのだが、切歌が自分の好物ばかり買っていた事に」

調が難色を示した。

「こういうのを役得と言うのデスッ！」

「フフ……………ん？」

そんな二人のやり取りを微笑ましく見ていた翼がなにかに気付く。

「昨日の台風かな？」

「お社も壊れたってさ」

会話する少年達や野次馬達の視線の先にあるのは、なにかによって破壊されたであろう神社の鳥居門。少年の一人の言葉が正しければ、古い神社が台風によって破壊されてしまったという答えに辿り着くが、そう結論付けるのは違うように思える。

「……………ふむ、こんなところですか」

その時、一人の男性の声が響いた。

その声に聞き覚えのある翼が、その根源がどこにいるのかと視線を彷徨わせる。

「……………ッ！ 貴様はッ！」

そして、見つけた。倒壊した神社の影から出てきた、燕尾服を着込んだ男性。姿は違っても、声と雰囲気理解できる。

「おや？…これはこれは……………、シンフォギア装者のお三方ではありませんか。予定とは少し違いますが、ここで不安要素は消しておくとうましよう」

身構える三人に気付いた男——シアン・ゴールデイスが、

懐から一本のメモリを取り出す。

『デス！』

手袋を外した右手の甲にT2デスメモリが挿入され、青年の姿がロボロの外套を羽織る死神のものへと変わる。

「な、なんだこいつはッ!？」

突如現れた怪人に、野次馬達が蜘蛛の子を散らすように逃げ始める。咄嗟に翼達も動き出し、避難誘導を開始する。

「ここは危険ですッ！ その方ッ！」

「え、俺？」

翼が声をかけられたコンビニの店員が目を見開いて自分を指差す。

「子ども達を誘導して、安全なところまで——」

「冗談じゃないッ！ どうして俺がそんな事をッ！」

「な……………ッ!？」

翼が呼び止めるよりも早く、男は一目散に逃げだしてしまった。

「……………仕方ないッ！ 暁、月読ッ！ 私達だけでやるぞッ！」

「了解ですッ！」

「了解」

肌身離さず持ち歩いていたペンダントを握り、三人は聖詠を唱える。

「——————————」

Imyuteus ameno habakiri tron  
Zeios igalimaraisen tron  
Various shulshagana tron

死神に砕かれたジエムから出現したアルカ・ノイズを調と切歌に任せ、翼は単身デスドローパントに挑む。

「皆さん、特訓しなくて平気なんですか？」

翼達がデスドローパントと交戦する数分前、ビーチでは、ずっと遊んでいた響達を見かねたエルフナインがそんな事を口にしていた。

「真面目だなあ、エルフナインちゃんは」

「暴走のメカニズムを応用したイグナイトモジュールは、三段階のセーフティに制御される危険な機能でもありますッ！ だから、自我を保つ特訓は——」

楽観的でいる響にイグナイトモジュールの危険性を改めて説明していたその時、突如として海から水柱が立ち昇り、そこから紺色のドレスの少女が現れる。

「夏の思い出作りは充分かしら？」

「ガリイッ!？」

「んなわけねーだろッ！」

「フリリップッ！ 行くぞッ！」

「所長、俺の後ろにッ！」

響とクリスがペンダントを握り締め、克己達はガイアメモリを構え

る。

「喪失への Balwisyall 銃爪にかけた指で夢をなぞる Killter Ichaival tron」

『エターナル!』

『サイクロン!』

『ジョーカー!』

『アクセル!』

『ヒート!』

『ルナ!』

『メタル!』

『トリガー!』

「変身ツ!」

「変身ツ!……身ツ!

『エターナル!』

『サイクロンジョーカー!』

『アクセル!』

ある者は拳を、ある者は刃を、ある者は銃を、とそれぞれの得物を構えた戦士達が動き出す。

「鉛玉の大バーゲン 馬鹿に付けるナンチャラはねえ」

クリスとトリガードーパントの攻撃がガリイの体をハチの巣にするが、彼女の体はバシヤンツと弾ける音と共に弾け飛ぶ。彼女が水を使つて作り出した分身だ。

「………ッ! 上よッ!」

ルナドーパントが叫んだ瞬間、頭上から幾本もの氷槍が降り注ぐ。

飛び退いたエターナル達の間に着地すると同時、ガリイは取り出したジエムを放り投げ、大量のアルカ・ノイズを出現させる。

「マリアさん、亜樹子さんッ！ 未来とエルフナインちゃんをお願いしますッ！」

「わかったッ！」

「うんッ！」

響の指示を受け、マリアと亜樹子は戦う力を持たない未来とエルフナインを連れて海岸から離れていく。

その間にアルカ・ノイズの駆除をクリスとドーパント達に任せたエターナルは、Wとアクセルと共にガリイを囲んでいた。

「驚いたな。お前達は主の命令もなく動くのか？」

「さあ〜ねえ〜？」

惚けた様子で答えたガリイは右腕に氷槍を装備し、仮面ライダー達に襲い掛かる———と思いきや……………

「残念だけど、今回はアンタらの相手を務める気はないのよ」

「……………ッ!?!」

突然彼らの足元から間欠泉のように水が噴き上げ、咄嗟の事に防御する隙を逃した三人が吹き飛ばされた。

「やってくれたなッ！ む……………ッ!?!」

「……………ッ！ 消えただと……………?」

すぐに態勢を立て直した仮面ライダー達だったが、そこには既にガリイの姿は無かった。



「あいつ、どこ行きやがった……………?」

『……………翔太郎。もしかしたら僕達は、嵌められたかもしれない』  
「あん? ……………ツ! まさかッ!」

この場にはアルカ・ノイズの大群が残されているが、アルカ・ノイズだけでこのメンバーを倒せるなど向こうも考えていないだろう。であれば、彼女の狙いはなにか。

「なるほど、奴の狙いはマリアというわけか」

『照井竜。彼女達の下へ向かってくれるかい? ……ここは僕達に任せてほしい』

「ああッ!」

アクセルがベルトを外すと、背中のパーツが前輪に、脚部が後輪とマフラーに変形する。

これぞアクセルの形態の一つ——バイクフォームである。

「うええッ!? 竜さんがバイクになっちゃったッ!」

「そんなのありかよッ!」

驚く響とクリスを尻目に、バイクフォームとなったアクセルはマリア達の走っていった方角へと向かった。

「————はあ、はあ、はあッ!」

「見つけたよ、ハズレ装者ッ!」

亜樹子と共に未来とエルフナインを連れてマリアが森の中を走っていると、彼女達の前にガリイが降り立った。

「ぎよええええッ!? ……なんでこっちに来たのッ!」







Eへの疑惑／彼女は裏切り者？

白銀と黒銀の剣が衝突し、火花を散らす。

セレナが咆哮と共に繰り出した刺突を受け流したマリアはそのまま妹の体を投げ飛ばすが、そこへすかさずガリイが迫ってくる。

「くう……………ッ！」

「アンタの相手はそいつだけじゃないんだよッ！」

氷槍による連撃を防ぐマリアに、背後からセレナが攻撃を仕掛けてくる。咄嗟に片足でセレナの溝を蹴って距離を開けさせるが、そちらに意識が向いたせいでガリイへの注意が僅かに薄れる。

「喰らいなッ！」

「ぐはッ!？」

氷槍を叩き込まれて吹き飛ばされるマリア。さらにそこへ、彼女の頭上に二本の短剣が飛んできたと思いきや、円を描くように回転し始めた二本の間から、無数の流れ星が降り注ぐ。

『DARK IGNIS†FATUU』

「マリアさんッ！」

「来ては駄目……………ッ！」

凄まじいエネルギーを誇る連撃を受けて崩れ落ちたマリアに未来達が駆け寄ろうとするが、マリアは片手を上げて制止する。

これぐらいのダメージを受ける事など当然の事だ。LINKER無しにも拘わらずに生前よりも強力な力を発揮するセレナに、純粋な戦闘力で装者を凌ぐオートスコアラ。彼女達を相手にまだ倒れていないのが幸運だと思えるくらいだ。

「だけど、負けるわけにはいかないッ！」

覚悟を決めたような叫びと共に、マリアはマイクユニットを手に取る。それを見たガリイは今までの笑顔を消し、真剣な表情になって彼女を見つめる。

「……………聴かせてもらうわ、アンタの歌」

「イグナイトモジュール、抜剣ッ！」

禍々しい形状に変化したマイクユニットがマリアの胸に突き立ち、彼女の全身を赤黒く染め上げていく。

「ぐ、ぐわあああああああああッッ!!」

心を喰らい尽くさんと暴れまわるどす黒い感情に絶叫を上げる。

「弱い自分を、殺す……………ツ！ あ、ガ、あ……………アア……………ツ！」

これ以上、弱いままの自分ではいけない。弱い自分を殺し、強い自分に生まれ変わる——その決心を胸に、マリアは呪いに抗うが——

「そんなの、呪いを受け入れるようなものじゃない」

ダインスレイフは、心の闇を増幅させる呪いの剣。そんなものの力を借りておきながら、『弱い自分を殺す』と言ってしまっている時点で、結果は決まっていたのかもしれない。

「ガアアアアアアアッ！」

だからこうして——闇に吞まれてしまうのだ。

「獣と堕ちやがったか……………」

「ガアアアアアアアアアアッ！」

「アゝアゝアゝアゝアゝッ！」

破壊の獣と化したマリアの咆哮に反応したのか、同じく咆哮で返したセレナが飛びかかる。

そこからは、もう先程までの戦いではなかった。

最早、彼女達は姉妹などではなく、一匹の獣として、眼前の相手を殺し尽くす事しか考えていない。霊長の長たる人間が、己より下位の存在である獣畜生に堕ちた結果に起きた殺し合いとなってしまうていた。

「いやいや、こんな無理くりなんかでなく——」

「グガ……………ッ!？」

セレナの一撃を飛び退いて躲したマリアに接近したガリイが、彼女の頭を鷲掴みにしようとした、その時。

「ハア——ッ！」

「……………ッ!? チイッ！」

ビーチから駆けつけてきたアクセルのエンジンブレードが迫ってきている事に気づき、咄嗟にマリアから距離を取った。

「……………仮面ライダーか」

「追いついたぞ。ここでお前を倒す」

エンジンブレードを構えるアクセルに対し、ガリイは心底めんどく





奏のアームドギア槍と翼のアームドギア剣が激突し、派手な火花を散らす。明らかに生前よりも強化されている奏の獣の如き雄叫びと共に繰り出される薙ぎ払いを受け止めるも、その絶大な威力を殺し切れずに押し飛ばされる。

「く……………ッ！」

「オ、オ、オ、オ、オ、ッ！」

翼との距離が空くや否や、奏は大上段に構えたアームドギアを勢い良く振り下ろす。振り下ろされた槍から飛んできた斬撃が、寸分違わずにかつての戦友に襲い掛かる。

『BLACK POWER∞SHINE』

「ぐ、ああ……………ッ！」

咄嗟に剣を構えた翼だが、先の薙ぎ払いよりも強力な攻撃を防ぎ切れる事など出来ず、弾かれるように吹き飛ばされてしまう。そこへデスドーパントの鎌が追撃として迫るが、長年の研鑽で培われてきた反射神経が翼の体を動かし、彼女の心臓を突いていたであろう刃先は地面を軽く穿つ結果に終わった。デスドーパントはすぐに地面に刺さった鎌を引き抜き、再び翼に襲い掛かろうとするが、翼の背後からヘッドギアを展開した状態の調が飛び出したのが見え、すぐに動きを止める。

次の瞬間、調のヘッドギアから大量の丸鋸が射出されるが、デスドーパントは鎌を回転させてそれらを防ぐ。

「デ、デ、デ、デ、デ、ッ！」

「なに……………ッ!？」

しかし、調の攻撃は陽動にすぎず、丸鋸を防いでいるデスドーパント

トの背後に回っていた切歌の不意打ちを受け、デスドーパントの体が地面に転がる。

「ドーパントはあたし達が相手するデスッ！」

「邪魔はさせません」

「すまない。助かるッ！」

「オ、オ、オ、オ、オ、ッ！」

「く……………ッ！ ハア——ッ！」

駆け出した奏と翼の得物が衝突し、鏢迫り合いになるが、翼は気合を入れるように叫んで彼女を押し返し、マイクユニットを取り外す。

「イグナイトモジュール、抜剣ッ！」

マイクユニットが胸部に刺さり、戦装束をダインスレイフの呪いを纏った漆黒のものへと変えた翼は上空に跳び上がり、周囲に無数の剣を展開する。

『千ノ落涙』

天空より飛来する刃の雨を前に、奏は右手に握る槍の穂先を回転させ、突き出す。

『BLACK LAST∞METEOR』

回転する穂先から生じた竜巻が奏に迫って来ていた剣の群れを翼ごと吹き飛ばした。

「ガ、ハ……………ッ!？」

空中にいるところを狙われたせいでバランスを整える隙もなかつ



な様子を見せず、自分の頭を抱えて苦しそうに呻いている。

「奏……………?」

柄を握る力を微かに弱めて翼が声をかけると、それに反応した奏が顔を上げる。

「つ……………ツばサ……………?」

「……………ツ! 奏……………ツ!」

確かな理性を瞳に宿している奏に翼が駆け寄ろうとするが――

「……………ツ! 後ろダツ!」

「……………ツ!? ぐはぁツ!」

振り向いた翼に無数の人魂がぶつかり、翼が吹き飛ばされる。

「自我を取り戻している……………? これはいつたい……………」

見れば、調と切歌を倒したであろう困惑した様子でデスドーパントが翼に人差し指を見せていた。先の人魂は彼が放ったものようだ。

「翼ツ! テメエツ!」

「如何なる手段を用いたのかは知りませんが、呪縛を解かれたようですね。……………ですが」

「ガッ!」

槍の刺突を避けたデスドーパントがカウンターに峰内を繰り出す。

「貴女単独で私を倒せるとも?」

「奏……………ッ！」

峰内を受けて気絶した奏を抱え上げたデスドーパントはテレポー  
トジエムを砕く。

「目的は果たしました。呪いの旋律を手に入れるまでにはいきません  
でしたが、ええ、一先ずはこれで」

そう言い残してデスドーパントは奏と共に消え、三人の装者達が残  
された。

——夕刻。政府が保有している施設の客間に、束の間の休  
暇を楽しんでいた面々、緒川と藤堯はいた。

「主を喪つて尚襲い掛かる人形に、ラメンター……………」

「どうして優位に事を運んでも、トドメを刺さずに撤退を繰り返して  
いるんだろう？」

「とんだアハ体験デスッ！」

マリア達を追つて来たガリイの戦闘力なら、理性の欠片もない暴走  
状態に陥ったマリアの殺害など容易い事だったはずだ。結局、駆けつ  
けてきたアクセルによつて妨害されてしまったが、アルカ・ノイズを  
使つて未来とエルフナインを人質にするなりすれば、それだけで戦況  
を有利に出来たはずだ。場合によってはマリアか竜のどちらかを殺  
害する事も出来たかもしれない。

「照井竜」

「ん？」

「ガリイ・トゥーマーンは撤退する直前、『ようやく呪いの旋律を手  
入れられるかと思つたのに』と言つたのかい？」

「ああ。どうやら奴らは『呪いの旋律』というものを欲しているらしい。恐らく、イグナイトモジュールの事だろう」

「あん？ 待てよ、照井。イグナイトモジュール………というよ  
り、ダインスレイフはエルフナインちゃんがあいつらから奪ってきた  
ものだったはずだろ？ なんでそれを応用して組み込んだイグナイ  
トモジュールを奴らが知ってるんだ？」

翔太郎の御尤もな疑問に「ふむ………」とフィリップが顎に手  
を当てて考え込む。そんな彼を横目に、克己は自分の考えを口にす  
る。

「内通者、という考えもあるんじゃないか？」

「内通者………つまり、裏切り者という事ですか？」

「イグナイトモジュールが開発されたのは本部内での出来事だ。キャ  
ロールとアルケウスとの戦闘時、響達がイグナイトモジュールを使っ  
ても、奴らはまるで驚いた様子を見せていなかった。それどころか、こ  
いつらがイグナイトを使う事を望んでいたようにも見えただぞ」

「言われてみれば………」

「確かに………」

初めて敵方にイグナイトモジュールを使った時、キャロールはまるで  
その存在を知っているかのような口ぶりでアルカ・ノイズを召喚して  
きた。初めてイグナイトを使われた相手が示す反応ではない。

「その可能性も充分に考慮すべきだろう。まだ確定したわけじゃない  
が、S・O・N・G・内にスパイがいると考える必要があるかもしれ  
ないね。大道克己、君はその内通者に心当たりはあるのかい？」

「ああ」

キツパリと即答した克己に、その場にいた者達の視線が集まる。

「内通者の正体は——エルフナインだろう」

「そんなッ！」

真つ先に反応したのは響だ。椅子から立ち上がり、拳を握り締めて克己に反論する。

「エルフナインちゃんは絶対に裏切り者なんかじゃありませんッ！  
あの子、全然そんな素振りしてないじゃないですかッ！」

「潜伏先にバレるようなスパイなんて三流もいいところだ。チフオー  
ジユ・シャトーなんていう代物を用意している以上、向こうもそれな  
りの準備を整えているはずだ。そんな時に敵方に送り込むスパイが  
三流なはずがない」

「確かに、エルフナインちゃんが内通者である確率は極めて高い」  
「おい、フィリップッ！」

克己の意見に賛同したフィリップに翔太郎が声を荒げるが、フィ  
リップは臆する事無く「わからないのかい？」と問いかける。

「イグナイトモジュールの完成にはダインスレイフが必要不可欠だっ  
た。それを敵から逃げてきたエルフナインちゃんが持ってきて、尚且  
つキャロル・ラメンター陣営への対抗手段として『Project  
IGNITE』を推奨してきた。暴走という危険性を孕んではいた  
が、彼らへの対抗手段がほとんどなかったせいで、僕らはその選択肢  
を取らざるを得なかった。ところが、敵方はイグナイトモジュールの  
存在を把握していた。彼らが呪いの旋律を求めているのがその証拠  
だ。その旋律を奏でる事が出来るのは、ダインスレイフの力を宿した  
シンフォギアシステムだけだからね。ここまで話せばわかるだろう  
？ あまりにも出来すぎていると」

つらつらと並べられる言葉に、誰もが納得するしかない。まるで、  
自分達が何者かに敷かれたレールの上を走っているような気持ちに

なってくる。

「あまり考えたくない事だけど、今までの出来事のほとんどが、彼らの思い通りだとしたら………。これほど恐ろしい事はない」

「って事はなんだ？ あたしらは知らず知らずのうちに、連中のお手伝いしていたって事かよッ!？」

イグナイトモジュールを手に入れて、ようやくキャロル・ラメントー陣営に対抗できると思っていたのに、それすら向こうの狙い通りの展開だとしたら、という考えに苛立ったクリスが声を荒げた。

「どうするの、克己。エルフナインの事」

「許可を貰えるのなら拷問という手もあるが……。そんな目をするな。ボスからの指示が無い限り、俺達はその手段を取る事はない」

『拷問』という単語を聞いたNEVER以外のメンバーからの視線に、克己は軽く手を振って返す。雇い主である弦十郎が「そうしろ」と言わない限り、自分達がその手段を取るなどあり得ない。それはこれまでの生活の中でなんとなく理解できていた全員がわかっていた。

「気付かれないように監視するってのはどうだ？ プライバシーを侵害するのはどうかと思うけど、敵に情報を送られるよりはマシだろ？」

「司令に連絡を取ってみます。こちらの情報が敵に筒抜けなのは見過ごせませんかからね」

翔太郎に頷いた緒川は、本部にいる弦十郎に連絡を取り始めた。

――私が弱いばかりに、魔剣の呪いに抗えないなんて



……………)

一方、ビーチに一人佇んでいたマリアは、先の戦闘で暴走してしまった自分に対して怒りを感じていた。

オートスコアラを倒す為、そして敵の尖兵と化したセレナに人殺しをさせない為、イグナイトモジュールを使つたにも拘わらず、自分はダインスレイフの力に抗えず暴走状態に陥ってしまった。

呪いに吞まれてしまった弱い自分が、酷く情けない。

「……………強く、なりたい。……………?」

その時、足元になにかが転がってきた。拾い上げてみると、それはボールのようだ。

「あ、ごめんなさいッ！ 皆さんの邪魔をしないよう思ってたのに……………」

ボールを追って駆け寄ってきたのはエルフナインとミーナだ。響達の話し合いの場に自分達がいるのは少し違う気がしたのか、二人でビーチバレーの練習をしていたらしい。

「邪魔だなんて。練習、私も付き合うわ」

マリアを交えて、三人はサーブの練習を始める。ミーナがエルフナインが打ちやすいようにボールを上げ、それをエルフナインがマリアに向かってサーブを打つのだが、どうしても失敗してしまう。

「……………おかしいな。上手いかないな、やっぱり……………」

「最初から出来るわけじゃないからね。出来るようになるまで付き合っただけよ」

「私もよ。……………ねえ、エルフナイン」

「はい？」

ミーナが浮かせたボールを受け取ったエルフナインに声をかける  
マリア。

「色々な知識に通じている貴女ならわかると思うんだけど………  
強いって、どういう事かしら？」

マリアの問いかけに、エルフナインは一瞬黙った後、口を開く。

「それは、マリアさんがボクに教えてくれたじゃないですか」

「え………う？」

それはどういう事か、と訊ねようとした瞬間、突然海面から水柱が  
立ち昇った。そこから現れたのは、ガリイとセレナだ。だが、セレナ  
の様子がおかしい。昼間戦った時よりも、より凶悪な雰囲気纏って  
いる。

「おっ待たせ、ハズレ装者」

「ガリイ………ッ！」

「二人共、私の後ろにッ！」

「今度こそ歌ってくれるんでしょうね？」

エルフナインとミーナを背後にペンダントを握るマリアに笑いか  
け、ガリイはアルカ・ノイズを繰り出してくる。

「大丈夫ですッ！ マリアさんなら出来ますッ！」

「Sei | 溢 |  
li | れ |  
en | は |  
co | じ |  
ff | め |  
in | ー |  
ai | る |  
r | 秘 |  
ge | め |  
t | ー |  
la | た |  
m | 熱 |  
h | 情 |  
tr | 情 |  
on | 」

エルフナインの声援に応えるように、マリアは銀の左腕を用いてガ

リイとセレナ、そしてアルカ・ノイズを迎え撃つ。

## Sを取り戻せ／弱さを強さに

アルカ・ノイズを斬り伏せたマリアは、自分の首元へ迫ってくる短剣を防ぎ、セレナを蹴り飛ばす。そこへすかさずガリイの氷塊が飛んでくるが、それをバツクジャンプで回避し、ガリイ目掛けて蛇腹剣の如く剣を振りかざす。

空を裂きながら襲い来る刃を軽い身のこなしで避けたガリイが左手に術式を展開し、激流を発射してくる。

「くう……………ッ！」

「さつさと歌ったらどうなの？ ハズレ装者ッ！」

あくどい笑みと共に挑発するように言うガリイを強く睨みつけ、マリアはすぐに起き上がる。

「マリアさんッ！」

「マリアッ！」

「強く、強くあらねば……………ッ！ おおおおおおッ！」

足元の砂を蹴散らして駆け出したマリアが攻撃を繰り返すが――

「てんで弱すぎるッ！」

「ぐあッ！」

それを容易く受け流したガリイのカウンターを受けて吹き飛ばされたマリアに、今度はセレナが飛びかかってくる。右手に握られていた短剣を投擲すると、短剣は一本から三本に分裂してマリアを切り刻もうとするが、マリアは咄嗟に身を翻して短剣を避ける。

「……………やはり」

やはり、根性論でどうにかできるほど、彼女達は甘くない。それほどの実力差が自分達にはあり、このまま戦ってもいずれこちらの体力が尽きてしまうのは明白だった。

だが、自分にはこの状況さえ覆せる力がある。

「……………その力、弱いあんたに使いこなせるの？」

「……………ッ!?!」

マイクユニットを取り外そうとしたところに向けられた言葉に、マリアの動きが止まる。

そうだ。私はまだ弱いままだ。自分がなにに負けたのかわからぬまま、自分にとっての『強さ』がなにかをわからぬまま、この力を使えば、自分は再びあの闇に呑み込まれてしまうだろう。

どうしたら強くなれる——そう思った刹那、先程のエルフナインとの会話が思い浮かぶ。

『それは……………マリアさんがボクに教えてくれたじゃないですか』

エルフナインの言葉が何度も脳内に反復し、そこへ今の彼女の声が響く。

「マリアさんッ！ 大事なのは、自分らしくある事ですッ！」

「……………ッ！」

その時、マリアは思い出した。サーブを上手く打てずに落ち込んでいたエルフナインに、自分が告げた言葉を。

『弱く打っても大丈夫。大事なのは、自分らしく打つ事だから』

——ああ、そうか。

「答えなんて、とっくに見つけていたのね」

「ん……………う？」

どこか雰囲気が変わったマリアを訝し気に見つめるガリイ。

「弱くても、自分らしくある事。……………それが『強さ』。エルフナインは戦えない身でありながら、危険を顧みずに勇気をもって行動を起こし、私達に希望を届けてくれたッ！」

「……………へえ」

マリアの言葉に、ガリイが笑う。気付いたのだ。今自分の前に立っているのは、先程までのマリア・カデンツアヴナ・イヴではない、と。

「エルフナイン————そこで聴いてほしいッ！ 君の勇気に応える歌だッ！」

覚悟は決まった。今こそ、魔剣を引き抜く時。

「イグナイトモジュール————抜剣ッ！」

一度は自身を闇に呑み込んだ暴虐の針が、マリアの胸に突き刺さる。そこを起点に心の奥底に封じ込められていた邪悪な意思が増幅され、全身を漆黒のオーラで覆いつくす。

「ぐ、うう……………ッ！ らしく、ある事が……………強さであるなら……………ッ！」

狼狽える度に現実から目を背け、虚構に縋りついていた昨日までの

自分——今まで押し殺そうと思っていたそれもまた、『マリア・カデンツァヴナ・イヴ』という人間に他ならない。

ならば、それを受け入れよう。弱い自分も許容した上で——  
——私は強くなるッ！

「私は弱いまま、この呪いに叛逆してみせるッ！」

新たな一步を踏み出す決意を叫んだマリアに呼応するように、ダインスレイフの呪いが彼女の戦装束を変貌させていく。

邪悪な力に染め上げられながらも、その輝きに一片の曇りなし。漆黒の刃を振るう、弱きままに戦う戦乙女<sup>フルキューレ</sup>。

「マリアさんの自我が……………」

「暴走を、抑え込んだ……………ッ！」

遂にマリアは、ダインスレイフの呪いを制御した。

「弱さが強さだなんて——頓智を利かせすぎだッ！」

「アッアッアッッ！」

ガリイとセレナが同時に動き出す。今までのマリアなら間違いなく防ぎ切れない威力を以て攻撃してくる二人に対して、マリアは——

「遅いッ！」

——回避もせず、そのまま迎撃を行って二人を吹き飛ばした。

「な……………ッ!? ……そうだよッ！ これだよこれえッ！」

「ガリイが一番乗りッ！」

想定外の行動に出たマリアの攻撃を受けた二人は即座に態勢を立て直し、セレナは今まで通りに、ガリイは凶悪な笑い声をあげた。

「——真の強さとはなにか？ 探し彷徨う」

弱いままで強くあり続ける事を決めた意志のままに旋律を奏で、ガリイとセレナの猛攻を防ぎつつ、的確な一撃を叩き込んでいく。殴り飛ばされたガリイが氷剣を装備して襲い来るが、マリアはそれを装束と同様黒く染まった短剣で迎撃し、背後からのセレナの攻撃は新たに取り出した短剣で防ぐ。

「それでこそイグナイトッ！ 万物を破壊する、呪いの旋律ッ！ これを待ってたんだよッ！」

——ふざけるな。この力の源が呪いの魔剣であろうと、私が振るうのは、命を救う輝きの歌ッ！

——お前に負けるほど、私の歌は柔じゃないッ！

ガリイとセレナの二人を相手にしても全く引けを取らずを二人を弾き飛ばし、飛び上がると同時に両手に持った短剣を投擲。これを回避したガリイは激流で、セレナは短剣を投擲して上空のマリアを攻撃するが、マリアは体を捻って両方の攻撃を紙一重で避け、着地するや否やセレナに接近し、腹部に拳を捻じ込んだ。

「ガア……………ッ!？」

殴り飛ばされたセレナだったが、まるで殴られた痛みを感じていないかのように即座に立ち上がり、二本の短剣を放り投げる。それは主の意思のままに自由自在に動き回り、マリアを切り裂こうと殺到する。



『DARK FAIRIAL†TRICK』

殺到する二本の短剣を前に、マリアは剣を両手で握る。すると、剣から無数の刃状のエネルギーが射出され、マリアに襲い掛かろうとした短剣を撃ち落とし、さらにセレナにも数弾着弾して後ずらせる。最後にマリアは拳を握り締め、勢いよく地面に叩き付ける。

『GLITTER†FLOOD』

拳から一直線に走った衝撃波が直撃し、吹っ飛ばされたセレナは壁に叩き付けられ、崩れ落ちると同時に武装が解除された。

「凄いパワー………………。これが、イグナイトツ！」

「マリアさんツ！ 来ますツ！」

凍えるような殺気に飛び退いたマリアの足元に氷の刃が突き刺さり、氷剣を手にガリイが迫る。マリアの短剣とガリイの氷剣が激突し、凄まじい剣戟が繰り広げられる。

「チィ……………ツ！」

何度目かの衝突の末、砕かれた氷剣に舌打ちし、一旦距離を取ろうとガリイがマリアの体を蹴って離れる。しかし、マリアもそれを許さない。

体を屈め、両足のバネを使って一気にガリイとの距離を詰める。風を切って迫り来る短剣の切っ先を前に、咄嗟にガリイは障壁を展開するが――

「な……………ツ!？」

突き立った切っ先を中心に砕け散った障壁に驚愕の声を上げたガ

リイの顔に、明らかな焦燥が浮かぶ。

明確な隙を見逃すはずも無く、マリアは左腕のアーマーに接続した短剣を大剣状に変形させ、ブースターで突撃する。

「この身は——炎となるッ！」

『SERE†NADE』

大剣の斬撃を受けて真つ二つに両断されたガリイは、最期の瞬間でさえ笑っていた。

「一番乗りなんだからあああああッツ!!」

断末魔の代わりに歓喜の声を上げ、ガリイは爆発の中に消えていった。

「勝ったの……………？」

「……………はい。マリアさんの勝利ですッ！」

エルフナインがマリアの勝利を断言し、それを聞いたマリアは安堵の息を吐く。だが、まだ終わりではない。

「セレナ……………」

倒れているセレナに近づき、また襲い掛かってもすぐに対処できるように警戒しながら体を揺さぶる。

「ん……………う……………」

微かに目を開けたセレナに、先程までの凶暴な意志はない。視界に入った光に目を慣れさせる為に何度か瞬きをした後、心配そうに自分を見つめるマリアを見て、あり得ないとばかりに目を見開く。

「マ、マリア……………姉……………さん……………う？」  
「……………ッ！ セレナ……………ッ！ セレナッ！」  
「わっ！ ね、姉さん……………。苦しいよ……………」  
「あ……………。ご、ごめんなさい」

強く抱き締めた妹の若干苦しそうな声を聴き、マリアはすぐに彼女を解放する。

「……………本当に、貴女なのよね？ セレナ」  
「……………うん。なんで、こんなところにいるのかだったり、姉さんがおつきくなってるのかだったり、わからないところはいっぱいあるけど……………。私は、セレナだよ」  
「……………ッ！ あ、ああ……………ッ！」

もう二度と会えないと思っていた妹が本物だと改めて理解し、マリアは再びセレナを抱き締めた。今度はセレナは抵抗せず、またこうして姉に出会えた事に感激して彼女の背中に手を回した。

「マリアさんッ！」

その時、アルカ・ノイズ出現の報せを受けた響達が到着する。だが、周囲にガリイやアルカ・ノイズの姿が無い事に、もしや、と翼が問いかける。

「オートスコアラーを、倒したのか？」  
「どうにかこうにかね」  
「暁さんッ!? 月読さんッ!?」  
「セ、セレナッ!? 調ッ！ セレナデスよッ！」  
「セレナッ！」

調と切歌がセレナに駆け寄り、セレナを抱き締めた。

「彼女は……………」

「セレナ。私の妹よ。後で色々説明しなきゃね。……………エルフナイン」

「はい？」

「……………教えてくれて、ありがとう。私が、私らしくある為の力を」

「……………はいッ！」

マリアの感謝に、エルフナインは満面の笑みを以て答えた。

「……………お疲れ様、ガリィ」

同胞の死を目の当たりにしたファラが、先程まで響達がいた施設の屋上でそう呟いた。

彼女の死は決して無駄ではない。彼女がアルカ・ノイズを召喚してくれたおかげで不安要素の装者達や仮面ライダー達はこの施設から離れ、その隙を突いてファラは目的を果たす事が出来た。

「貴方にも感謝を。黒芭燈迹」

「万象黙示録完成の為だ。いくらでも協力するさ」

ドーパントに変身しないまま職員を手際よく気絶させていた燈迹がひらひらと手を振る。

「お前も頑張れよな。こんなところで終わるわけにはいかないだろ？」

「ええ、もちろん。我々の目的は、果たされなければならないのだから」



すッ！」

「へえ。帰りがてら色々聞かせてくれるかい。彼らの事を」

「はいッ！ えつとですね——」

響がNEVERについて話そうとした、その時——

「……………あれ？ 未来ちゃん？」

「え？ あ……………」

声をかけられた未来が視線を向けると、そこにはコンビニの制服を着た男性がいた。

「どしたの？ 未来——」

未来の視線の先を追った響は、その男を見て絶句する。

「ひ、響……………」

「……………お父……………さん……………」

(響ちゃんの、父親……………?)

フィリップが男に視線を向けた直後、響はいきなり駆け出す。

「あ、響ちゃんッ！」

「響ッ！」

フィリップと未来が声をかけるも、響はなにも答えずに走り去ってしまった。

## Hの苦難／向き合う勇氣

「改めて自己紹介を。私はセレナ・カデンツアヴナ・イヴ。そちらにいるマリア・カデンツアヴナ・イヴの妹で、アガートラームの装者です」

翌日、S・O・N・G・本部に招かれたセレナは、弦十郎を始めたメンバー達に自己紹介をしていた。

数年前のアルビノ・ネフィリムの暴走事件。施設にいる家族を護る為にアガートラームのシンフォギアを身に纏い、自分の命さえ勘定に入れた絶唱で、純白の怪物を鎮めた少女。彼女はその際に間違いなく死亡したが、デスドローパントの能力によって蘇り、今こうして彼らの前にいる。

「以前、僕が地球ほしの本棚を使ってデスドローパントの能力を調べた時、彼は『蘇らせた対象に呪詛を刻み込み、意のままに操る』というものがあつた。呪詛——つまりは呪い。一般的な方法ではこの呪いは絶対に解けないものだったが、マリアが使ったのは呪いの魔剣ダインスレイフの力を応用したイグナイトモジュール。恐らくデスドローパントの呪詛にダインスレイフの呪いが打ち勝ち、こうしてセレナ・カデンツアヴナ・イヴに自我を取り戻させたのだろう」

「つまり、もうセレナは……………」

「僕らを襲う事はないだろう。彼女がそうしようと思わない限りはね」

「そんなッ！　しませんよ。そんな事」

「うう……………ッ！　嬉しいデスよッ！　またこうしてセレナと会えるなんてッ！」

「きやあッ!?　も、もう、暁さんッ！　いきなりすぎですよッ！」

いきなり切歌に抱き着かれて驚いたセレナだが、満更でもなさそうな顔をしている。彼女自身、もう会えないと思っていた少女達と再会

できたのは嬉しかったようだ。

「よかったな。マリア」

「ええ………………。本当によかった……………」

「ん？ 待ってください。セレナちゃんがこうして自我？ を取り戻せたのなら………………。ひよつとしたら、奏さんも……………」  
「……………ッ！」

響の言葉に、翼の目の色が変わる。

「フィリップ君、その辺については……………」

「こうして目の前に前例がある以上、確率が高いといってもいいだろう」

「……………ッ！ そうか………………。そうか……………ッ！」

フィリップに告げられた情報に、翼は堪らず笑顔になる。

マリア達と同じように、自分もまた喪った存在を取り戻す事が出来るかもしれないという可能性が見えたのだから、当然とも言えるだろう。

「セレナ君。君さえよければ、その力を我々に貸してほしい。今回の敵は強大だ。嫌ならば断わってくれても構わないが、どうだろうか？」

源十郎の問いかけに、セレナは少し考え込み、それから口を開いた。

「………………。私、戦います。誰かを傷つけるのは嫌ですが、私が戦わなくてマリア姉さん達が苦しむのなら、私は戦います」

「セレナ……………」

自分を見つめてくる姉を見て、セレナはニコツと笑った。



「協力、感謝する。君が過ごす部屋は現在準備中だ。それまで、マリア君達と話しているといい」

「ありがとうございます」

そうして、セレナはマリア達との数年越しの歓談を始める。

この後、セレナの要望に沿って彼女は調と切歌が通っているリディアンへの転入が決定され、これを聞かされた二人は大喜びするのだった。

「——まあまあ、といったところかな」

翌日。図書館から出てきたフィリップは少し晴れやかな気持ちで呟いた。

シンフォギアやノイズといった、自分達の世界には存在しない技術や存在がある異世界に飛ばされるという、通常では考えられない出来事に見舞われたが、フィリップはこれを良い機会だと捉えていた。

なにせ、別世界である。自分達の世界にはない本があるだろうし、もしかしたらこちら側とは違う、歴史の変化があるのではないか、と思ひ、この図書館を訪れたのである。

結果、自分達の世界とこちらの世界との違いはほとんどなかった事がわかった。けれど、違いもある。

科学技術の発達もそうだが、歴史や神話について調べてみると、興味を抱いたものがあった。

「僕らの世界と異なり、こちらの世界ではエンキとエンリルが協力関係にあったとはね。案外、調べてみるものだ」

エンキとエンリル。それはメソポタミア神話に登場する神々の兄弟の名である。詳細は省くが、フィリップ達の世界では、彼らは人類

の未来を決める為に争ったという伝説が残されているが、こちらの世界では彼らが手を取り合い、人類を支配していたと語られていたのだ。

そして興味深い事に、兄弟の片割れ、弟のエンリルが今も生きている可能性があるのだ。

メソポタミア文明が滅びた後に興った文明が新たに作り上げた数多くの伝説や伝記において、彼と思しき存在が記載されていたのだ。流石に名前こそ異なるが、微かに記されていた外見の特徴を照らし合わせてみると、そのキャラクター達の正体がエンリルである可能性が出てきたのだ。

伝説において、エンリルは青空のような蒼い髪の毛を生やし、一部の髪は空に浮かぶ雲のような白色らしい。

だが、今の時代、神の存在を信じる者は宗教云々を無しに考えればほとんどいない。このエンリルについてだって、『もしかしたらいるかもね』程度の話だ。本気にするつもりはない。

「了子さんに話してみるか？ 神について調べているそうだし、いい情報になればいいが……………ん？」

「へいき、へっちやら……………へいき、へっちやら……………へいき、へっちやら……………ッー！」

「響ちゃん……………？」

ぶつぶつと『へいき、へっちやら』と呟きながら走ってきている少女に気付き、声をかける。

「へいき、へっちやら……………あ、フィリップさん……………」

……………すみません」

「待ちたまえ」

頭を下げて走り去っていきこうとする響の腕を掴む。振り向いた響の目からは大粒の涙が零れ落ちていた。

「なにかあったのかい？ 僕でよければ話を聞こう」  
「……………はい」

小さく答え、響はフィリップに連れられて図書館に入り、その片隅に置いてある椅子に腰かけた。

涙も引つ込み、ある程度心の整理がついた響が言うに、彼女の父――立花洗は二年前のツヴァイウイングのライブ事件を生き残った響に謂われのないイジメが行われていた時、立花家の中で唯一その環境に耐え切れなかった男だそうだ。それまでは良識あるいい父親だったらしいが、事件が起こってからはなにもかも変わってしまった、今となつては自己中心性極まりない男となつてしまったらしい。

「私、逃げずに立ち向かおうって決心したのに………………。結局、駄目でした……………」

「……………響ちゃん自身は、どう思ってるんだい？」

「え？」

「君の父親は自己中心的な人物になってしまったが、それでも君は、彼とやり直したいと思ってるかい？」

男性のものにしては若干細く見える手を組んで見つめてくるフィリップに、響は少し俯きながらも答えを返す。

「……………やり直したい。やり直したいですよ………………。でも、どうすればいいのか、わからなくて……………」

「ふむ……………」

少し考え込む素振りを見せて、フィリップは口を開く。

「君には申し訳ないけど、僕は君が羨ましいよ」  
「え？」

「自己中心的とはいえ、君の父親はまだ生きています。僕の父親はもういないからね。やり直す方法を模索する君が、正直言って羨ましい」「フィリップさんは、お父さんを……………?」「聞いてくれるかい？　僕の父の話を」

コクリと頷いた響に、フィリップはぽつぽつと語り始める。

園崎琉兵衛。フィリップの父親にして、彼が翔太郎や竜と共に壊滅させた犯罪組織『ミュージアム』の総帥。『全人類を地球が存在し続ける限り滅びる事のない種族に進化させる』という目的を果たす為ならば、あらゆる犠牲を厭わない冷酷非情な人物。『恐怖』の記憶を司る最強のドーパント——テラードーパントでもあった彼は、その圧倒的な能力でミュージアムの頂点に君臨した。

だが、彼は根からの悪人ではなかった。

彼が人類の強制進化を望んだのは、『もう大切なものを失いたくない』という恐怖心からだった。かつてこの地球上に存在し、そして絶滅した恐竜や数多の古代生物と同じように滅亡に向かつていく人類を——己が愛する家族を『死』から救い出す為に、犯罪に手を染めてしまった、哀しき男だったのだ。

結局、彼の悲願とも言える野望は二人の仮面ライダーの活躍によって打ち砕かされたが、フィリップは生前の彼と和解する事は遂に叶わなかった。

だが、話はそれで終わらない。

フィリップがとある出来事によってこの世から消滅してしまった際、一本のメモリの中に広がる世界『ガイアスペース』で家族達と共に彼の前に現れ、和解する事が出来た。

最後の最後に、恐怖に苛まれ続けた男は、息子とわかり合う事が出来たのだ。

「僕が和解できたのは、彼が死んだ後だったけど、それは本当に奇跡のようなものだった。こんな事はもう二度と起こらないだろう。生前の彼とたくさん会話したかったし、家族と一緒に、その最期を看取り

たかった………………。僕は普通の家族になれなかったんだよ。でも、君はまだ、普通の家族に戻れる可能性がある。君の家族には、僕らのようになってほしくない」

幸せであるべき家族の絆が壊れていくのを見ているだけしか出来なかった自分みたいな人間をこれ以上出したくない。そんなフィリップの気持ちだが、響にはありありと感じられた。

「響ちゃん。君の父親は確かに一度は君達を見捨てたが、彼はきつと、本気で君達とやり直したいと考えてると思う。もしかた会う事があれば、ありのままの君の感情を伝えてみたらどうだい？ 彼はきつと、君の気持ちに応えてくれるはずだ」

「フィリップさん………………。……………はいッ！」

響が頷いた瞬間、二人がポケットに入れていた通信端末が震える。周りの人達の迷惑にならないように外に出てから通信を開いた二人に告げられたのは、アルカ・ノイズの出現だった。

「ふんふん♪」

翌日、本部で簡単な訓練を終わらせた調と切歌が街中を歩いていた。

「ご機嫌だね、切ちゃん」

「当然デスよ。さっきのシミュレーターの計測数値なら、イグナイトモジュールを使えるかもしれないデス。それに、もう会えないと思ってたセレナとも会えたし、これほど嬉しい事の連続はないデスッ！」  
「そうだけど、油断しちゃう駄目だよ？ 生半可な気持ちで挑んだら、私達も暴走しちゃうかもしれないし」



「ありがとうございます、照井さん」

「なに。お前達はその歳で人類を護っているんだらう？ 刑事として、その敬意に報いなければな」

「そういえば照井さん、刑事さんだった」

「という事は、これまでいっぱい悪者を捕まえてきたデスか？」

「ああ。ガイアメモリ犯罪を取り締まっている。左達の助力を得る事もあるが、彼らのお陰で、俺達の街『風都』でのガイアメモリ犯罪は全て解決されている。……………ラーメンターの事件以外は、な」

「みんな、大丈夫かな？ 竜君達がいらないんじや、ドーパントと戦えないよ……………」

「ああ。一刻も早くこの事件を片付け、『風都』に戻らねばな」

「アタシ達も協力するデスよッ！」

「うん。なるべく早く、この事件を解決しよう」

「……………助かる」

拳を握って言う二人に竜が微笑んだ瞬間、彼らの通信端末からアラームが鳴り響いた。

『アルカ・ノイズの反応を検知したッ！ 場所は地下68メートル、共同溝内であると思われるッ！』

「きよーどーこー？」

「なんデス？ それは」

「電線を始めたエネルギー経路を埋設した地下溝の事だ。行き方は？」

『すぐ近くにエントランスがある。今、ナビに送信した。我々も現場に向かって航行中だ。既に響君とフィリップ君を向かわせている』

『照井さん、調と切歌をお願いッ！』

『我々も到着次第加勢するッ！』

「わかった。所長はシエルターに。お前達、行くぞッ！」

「うんッ！」

「了解」

「了解デスッ！」

通信を切り、竜はアクセルドライバーを腰に巻き、調と切歌はペンダントを握る。

『アクセル！』

「変……………身ッ！」

『アクセル！』

「Zei<sup>夜</sup>os<sup>を</sup>ig<sup>引</sup>al<sup>き</sup>ima<sup>裂</sup>ra<sup>く</sup>izen<sup>曙</sup>tron<sup>光</sup>tron<sup>の</sup>tron<sup>ご</sup>tron<sup>と</sup>tron<sup>く</sup>」

「Var<sup>純</sup>ious<sup>心</sup>shul<sup>は</sup>shagan<sup>突</sup>atron<sup>き</sup>tron<sup>立</sup>tron<sup>っ</sup>tron<sup>牙</sup>tron<sup>と</sup>tron<sup>な</sup>tron<sup>り</sup>」

アクセルに変身した竜と、それぞれのシンフォギアを纏った二人の少女がアルカ・ノイズが現れた地下溝のエントランスに到着すると、その奥から何度か甲高い音が聞こえてきた。既に響達が戦っているようだ。

地下溝に入ると、彼らの到着を予期していたのか、大量のアルカ・ノイズが襲い掛かってきた。

「邪魔だッ！」

「調ッ！」

「うんッ！」

アクセルがバイクフォームを解除すると同時にジャンプした切歌は鎌を投げ、調はヘッドギアから丸鋸を射出する。瞬く間にアルカ・ノイズが炭化して消えていき、二人が討ち漏らしたアルカ・ノイズもアクセルがどこからともなく取り出したエンジンブレードで斬り捨てていく。



「待ってたぜえ？ アクセルッ！」

「……………ッ！ 貴様は、黒芭燈迹ッ！」

アルカ・ノイズの大群の奥にいる男に気付き、アクセルはエンジンブレードを構える。

『風都』から目を付けてたんだ。今日も遊ぼうじゃないかッ！ ハッ  
ハアッ！」

愉快に笑いながら、燈迹はポケットからT2ファイターメモリを取り出す。

『ファイター！』

T2ファイターメモリを喉元に挿し、燈迹は『戦闘機』の記憶を象徴する怪人へと変貌する。

「出たデスねッ！ デイセプティコンッ！」

「誰ガデイセプティコンダッ！ 喰ラエッ！」

機関銃に変化した右掌から無数の弾丸が発射されるが、三人は横に飛び退いてそれを回避する。

「オオオオオオオオッ！」

「ハッ！ 温イナ、仮面ライダーッ！」

振り下ろされたエンジンブレードを剣に変形させた左腕で受け止め、鏝迫り合いに派生する。

「こいつは俺が抑えるッ！ お前達は先に行けッ！」

「はいデスッ！」

「どうか無事でッ！」

「行カセルカ——」

「どこを見ているッ！」

「……………ッ！ チッ！」

調と切歌を撃ち抜こうと銃口を向けかけたところをアクセルに斬られ、ファイタードローパントの体から火花が飛び散る。

「お前の相手は、俺だッ！」

「……………ハッ！ イイゼ、ヤツテヤルヨッ！」

振るわれた二本の刃が交わり、散った火花が地下溝を一瞬明るく照らした。

## 遠きP／男達の契約

アクセルがファイタードールパントと交戦し始めた頃、ガングニールを纏った響とファンングジョーカーに変身したフィリップは、共同構内に出現したミカと戦っていた。

「せえいッ！」

「わああッ！ 凄い威力だゾッ！ だけど、今日はお前達の相手をしてる場合じゃないんだゾッ！」

「悪いけど、君達の都合に付き合ってもらえる程、僕らは甘くない」  
『シオルダーファンング！』

空を切り裂いて迫るシオルダーセイバーを前に、響を蹴り飛ばしたミカはカーボンロッドを射出。シオルダーセイバーの軌道を逸らし、さらに撃ち出したカーボンロッドでWを攻撃する。

『こんなもの、効かねえぜッ！』

翔太郎の声と共に振るわれた拳がカーボンロッドを打ち砕き、態勢を立て直した響と一緒にミカへ攻撃を仕掛ける。対するミカも新たに生成したカーボンロッドを手に迎撃し、二人の拳と打ち合う。

「同時攻撃……………中々いいぞッ！」

「せいッ！」

響の渾身の一撃が叩き込まれ、カーボンロッドが砕ける。がら空きになったミカの胴体に今度はWが追撃を仕掛けようとするが――

「燃えるがいいゾッ！」

「……………ッ！ 響ちゃんッ！」

「え？ うわあッ！」

自分達に向けられた掌の奥から赤い輝きを見たWが咄嗟に身を翻して響を庇った瞬間、ミカの掌から火炎が放射された。吹き飛ばされた二人だが、Wが庇ってくれたお陰で肌が露出している響に火傷は無く、代わりに超至近距離から火炎放射を受けたWの体が若干焦げていた。

『あつつツ！ 今の季節考えてくれねえのかよッ！』

「向こうにその気はないよ。気にしたら余計質が悪いけどね」

「あ、ありがとうございます、フライリップさん」

「なに。君も女の子だ。君を火傷させたりしたら、亜樹ちゃんに大目玉を喰らいそうだったからね」

「あらら、失敗しちゃったゾ。でも、まだ倒れてなくて嬉しいゾッ！」

一瞬残念そうに肩を落としたが、次の瞬間には気持ちを切り替えたミカの両掌から火炎が放たれる。先程は片手での火炎放射だったが、今度は両手。その熱量も速度も倍になっており、二人を焼き尽くそうと迫るが――

「そうは、させないッ！」

突如として現れた二つの巨大な丸鋸が、灼熱の業火を阻む。調だ。

「調ちゃんッ!?!」

「切ちゃんッ！」

「任されたデスッ！」

「な……………ッ!?!」

調の声に応え、同じく響達に追いついた切歌の鎌がミカに迫り、ミ

力は咄嗟に飛び退いて回避する。

「シウルシャガナとイガリマ……………。これは少し、いや、かなり分が悪いゾ」

響とWでさえ互角だったのに、調と切歌まで到着したとなると、如何に戦闘特化型のオートスコアラーとして設計されたミカといえど敗北は免れられない。

「預けるゾ。次会う時は、ちゃんと歌ってもらうゾ」

去り際にそう言い残し、ミカはテレポートジェムを砕いて姿を消した。

「……………オラオラドウシタアツ！ ソンナモンカ、仮面ライダーツッ！」

間隔を開けずに次々と撃ち出される銃弾を走りながら回避し、アクセルはエンジンブレードをファイタードローパント目掛けて投擲する。寸分変わらず一直線に向かってくるエンジンブレードをファイタードローパントが剣で弾き飛ばすと、そちらに意識を向けた影響で僅かに銃弾を撃ち続ける右腕の動きが一瞬鈍る。

「今だッ！ ……とうツッ！」

その隙を突き、ジャンプしたアクセルはファイタードローパントに弾かれたエンジンブレードを手に取ると、重力に引き寄せられるままそれを振り下ろし、ファイタードローパントを切り裂いた。

火花を散らせるファイタードローパントが怯み、その間にアクセルはエンジンメモリをエンジンブレードのメモリスロットに挿し込む。

『エンジン・マキシマムドライブ!』

「ハア————ッ!」

立ち上がりぎまに斬り上げ、間髪入れずに振り下ろし、最後に遠心力を加えた一閃を繰り出すと、ファイタードールパントの体に赤い『A』の文字が浮かび上がる。

『ダイナミックエース』

超威力の必殺技を受けて吹き飛ばされたファイタードールパントが壁に叩き付けられ、ずるずると地面に落ちる。

(これでまだ解除されないのか……………)

しかし、ファイタードールパントの変身が解ける様子は見えない。より強力な一撃を加えなければ、彼は倒せないのだろう。トライアルを使おうかと考えた瞬間、アクセルに緑色の竜巻が襲い掛かってきた。

「な……………ッ!? ぐあッ!」

防御が間に合わず、竜巻に吹き飛ばされたアクセルが起き上がると、そこには剣を振り抜いた状態のファラが立っていた。

「道草は良くないわ、黒芭」

「…………ハッ! ソノ言葉遣イ、才前ガ使ウト気持チ悪イナ」

斬りつけられた場所を擦りながら立ち上がったファイタードールパントはファラと共にテレポルトジェムを砕き、瞬時に姿を消す。

「……………? なんだ、今の違和感は……………」

追撃はないだろう、と判断したアクセルは変身を解除するが、先程の二人の会話に感じた違和感に首を傾げるのだった。

「おっとり刀で駆けつけたが……」

「間に合わなければ意味がねえよなあ……」

その後、遅れて克己を始めとしたメンバー達が到着したが、既に事件を起こしたミカとファイタードローパントは撤退しており、参戦する事は叶わなかった翼とクリスは悔し気に歯噛みする。

「人形はなにを企てていたのか……」

「大きく破損した箇所は……よかった、左程ありませんね」

軽く周囲を観察していた緒川の顔が綻ぶ。完全に無傷、というわけではないが、問題になる程破壊されたものはない。

本部に報告しようとしたその時、緒川が目が気になるものを見つけた。

「これは……」

緒川が見つけたのは、電力メーターだった。そこに表示されているデータをみて、緒川は「まさか」と思うのだった。

『ねえ、エルリン』

思い起こされるは、数百年前の記憶。遠い彼方へと消えていった時代の風景。

『もしも、僕になにかあった時、キャロルを頼めるかい？』  
『あん？ どうして。子を護るのは、いつだって親だろ？』

あらゆる命が寝静まった頃、窓から見える満点の夜空を眺めていた男の視線が向けられる。

いつの時代だって、子を護るのは親の仕事だ。いつか子が巣立つその日まで、彼らを護る責務を背負うのは、いつの時代だって親だ。それをなぜ、居候の俺に頼むのか。

『近頃、街の様子がおかしい。僕を見る目が変わってきてるんだ。嫌な予感がするんだよ』

『？ だったら、逃げればいいじゃねえか。錬金術を扱うお前を異端扱いする奴らの住む街なんざ、とっとと出るに限る』

なんだったたら、以前ここに訪れた女が所属する『結社』とやらに匿ってもらおうという手もある。多くの錬金術師を抱え込むあそこなら、自分達も満足な生活を送る事ができるだろう。

最善の手だと思うのに、男は静かに首を横に振った。

『ここは僕の故郷だ。僕が生まれ育った街なんだ。死ぬのなら、ここがいい』

『……………馬鹿な奴だ。死ぬ事がわかってるのに居座るのか？ 遺されるあいつの気持ちを考えてないのか？』  
『……………』

俺の問いかけに、男は答えない。彼自身、わかっているのだろう。自分が死んで、たった一人の愛娘がなにを思うのか。父親である彼が知らないはずが無い。

『いいか？ 人間ってのは常識外の存在と直面すると豹変する種族だ。たとえ間違っていたとしても、一度お前を邪悪の使徒だと認識す



れば、その血を引くあいっだって狩りの対象にされるぞ。親子揃って燃やされたいのか?』

『……………ッ! そんな事は——』

『あり得ない、とでも言いたいのか? 甘えぞ、小僧。テメエは人間の本質を理解していない。テメエの理想は、決して叶う事はない』

俯く彼から視線を外し、天上に座する満月を見上げる。あの男によつて施された呪いは、未来永劫続くだろう。解ける事のない呪いが存在し続ける限り、人類は平和に殺し合う。

『まだ年端のいかぬ子どもであろうと、殺ると決めた人間は殺るぞ。悪い事は言わねえ。とつとどこから逃げるぞ』

『……………それでも、僕は——』

顔を上げた男を見る。その瞳に、怯えの色はない。むしろ、輝いてさえいた。

『僕は——人間を信じている。頼む、■■■■。僕が彼らの標的になっているうちに、あの子を連れて逃げてくれ』

『……………ハッ。ハハ……………ハハハハハハッ!』

滑稽だ。自分の命を惜しまず、我が子が傷つく事を知っていても尚、その身を狂気に駆られた者達に捧げるといふのか。ああ、滑稽だッ! 実に、実に愚かしいッ! だが——

『流石、我らが素晴らしき愚息だッ! いいだろうッ! その願い、この■■■■が聞き届けたッ!』

それでこそ、愛おしい。

どのみち、『■■■■』という名が出された事で、俺の目標は決定された。

いいだろう、愛しくも愚かな人間よ。傲慢な貴様の願い、この俺が叶えてやる。

『君があの子にとっての騎士になれる事を願うよ、  
『言つてくれるな、イザーク。この俺が剣を取るの、真に護ろうと思つた者の為だけだ』』

その答えの真意を悟つたのか、男——イザーク・マールス・  
デインハイムはふつと微笑んだ。  
そこで、俺の意識は覚醒へ向かう。

「……………んは」

知らない天井を見上げ、ゆっくりと体を起こす。

知らない壁。知らない空気。知らない部屋。——いつた  
い、どれぐらいの時間が経っているのか。十年か？ 百年か？ それ  
とも、千年か？

「……………おはよう。蒼い騎士様」

「……………ッ！」

いつの間にそこにいたのか。先程まで自分以外誰もいなかったはずの部屋に、一人の子どもが立っていた。

「……………お前、何者だ？」

「私は……………津神叶。お願いがあるの、騎士様……………」

幽鬼の如く、人間とは思えないような気配を纏うその少女は、氷の冷たさを彷彿とさせる瞳で俺を見る。

「……………私を、ここから連れ出して」

その少女の願いは、どこか哀し気なものだった。

「——これで、どやあゝッ！」

未だ王が帰らぬ王室。ミカが腕を振り上げると、彼女を含めた三体のオートスコアラーの中心に地図のようなものが映し出される。

「派手にひん剥いたな」

「当然だゾッ！ 邪魔が入る前に完了出来てよかったゾッ！」

地図の一角、先程ミカがファイタードローパントとアルカ・ノイズを率いて出現した共同構を見たレイアが感心する。キャロルによって創造されたオートスコアラーのうち、ミカは誰よりも子どもに近い性格の持ち主だ。そのぶん、どれほど残酷な手段だろうと躊躇いなく実行する。時折道草を食う時もあるが、やるべき仕事はキチンと果たしたようだ。

これで、万象黙示録の完成はまた一歩——

「ん？」

その時、レイアはどこかへ向かおうとしているミカの姿を視界に収めた。レイアと同様、彼女がどこに行くのか気になったのか、ファアラが声をかける。

「どこへ行くの、ミカ？ 間もなく想い出のインストールは完了する  
というのに」

「自分の任務くらいわかってるゾッ！ キチンと遂行してやるから、  
後は好きにさせてほしいゾッ！」

そう言ってミカは王室から出ていく。

「万象黙示録の完成……………それこそがマスターの望み。お前の邪魔はさせないぞ、ミカ」

「あら、どちらへ?」

「地味なのは性分に合わないが、ミカの助太刀だ。可能な限り、派手にやる」

「よくやるわね。妹も連れていったらどうかしら?」

「当然」

レイアも退室し、ファアラだけが残される。王室に一人佇むファアラは、自分の掌を見下ろして何度か握ったり開いたりする。

「もう少し、だな……………」

普段とは異なる口調で呟くファアラの視線の先には、炎に捲かれて消えた姫君の玉座があった。

「————念の為としてLINKERを貰ったデスが、平和デスねえ……………」

夕方、ふらふらと調と街を練り歩いていた切歌がポツリと零す。

大した傷を負う事無く戦闘を終えたので、二人は軽い身体検査を受ける程度で終わったが、万が一という事を予期したエルフナインが二人にLINKERを渡したのだ。エルフナインとフィーネの合同作業の下急ピツチで開発されているが、二人専用のLINKERが完成するまでもう少し時間がかかるらしいので、渡されたのは奏用のものだ。自分達用に調整されていないので体にかかる負荷もそうだが、まず本部にあるLINKERにも限りがあるので、投与する時は慎重に考えてから決めよう。

最初はそれを使わず、訓練用のLiNKERを使うという考えもあつたのだが、オートスコアラーを相手にして訓練用で持ちこたえられるはずが無い。故に、負荷はかかるし在庫も減るが、訓練用よりも大きな効力を有する奏用LiNKERが渡されたのだ。所謂、苦肉の策というものである。

「平和なのはいい事だよ。このままのんびりできたら——」

その時、どこからともなく轟いた爆発音が調の言葉を遮った。

「今の音は……………ッ!？」

「あそこデスッ！」

切歌が指差した先には、両手から放ったカーボンロッドで破壊の限りを尽くしているミカの姿があつた。その破壊の仕方は、まるで自分達を誘っているようにも思える。

「アタシ達を焚きつけるつもりデスッ！」

「足手纏いだと、軽く見てるのならッ！」

畏の可能性もあるが、それでも目の前で暴れる存在に対抗できる力を持つ二人は、それぞれの想いに応えてくれたシンフォギアを身に纏う。

「夜Zeios を引igali 裂ma 曙r 光ai のzen とtron  
「純心Various は突shul 立sh っagan とa なtron」

戦装束を装備して飛び出した二人に気付いたミカが無邪気な笑みを浮かべる。

「思ったよりも早く来たゾッ！ 今度こそ決着、つけてやるゾッ！」

「それは――」

「こっちのセリフデスッ！」

カーボンロッドを構えるミカに、二人の戦姫が挑む。

## Zの共鳴／Just Loving X—Edge

調と切歌がミカと交戦し始めたのと同時刻。彼女達が戦いを始めた事に気付いた本部では弦十郎が二人に通信を送ろうとしたが、その瞬間、本部全体がなんらかの攻撃を受けたのか大きく揺れた。

「な、なんだッ!?!」

「し、司令ッ! モニターをッ!」

衝撃に驚きながらもしつかり本部を攻撃した者の正体を探った藤堯に言われてモニターを見ると、そこには海底に立つ、巨大な人影が映し出されていた。

「なんだ、こいつは……………ッ!?!」

「……………ッ! 新たなエネルギー反応を検知ッ! ファイタードローパントですッ!」

友里が叫んだ途端、先程よりも軽いが、それでも明確な振動が潜水艦内に走った。

「くう……………ッ! 海底と上空からの奇襲か……………ッ!」

「ボス。一瞬だけでいい。潜水艦を浮上させてくれ。ファイターは俺と賢が相手する。……………左」

声をかけられて反応した翔太郎に、克己は一本のガイアメモリを投げ渡す。そこに記されているイニシャルのデザインから、それが地球のどの記憶を内包しているかを理解した翔太郎が不敵な笑みを浮かべた。

「海底にいる敵はお前達に任せた」

「……………へッ！ 任されたぜ。フィリップッ！」  
「あぁッ！」

克己と賢、翔太郎とフィリップが司令室から出ていき、弦十郎は彼らの助力になりそうな手段を思案し、ある人物に通信を開いた。

『なんだ？』

「クリス君。君の力を借りたい」

「……………」 わかった。あたしに任せてくれ」

「調と切歌が襲撃されたタイミングで本部が襲われるなんて……………。まさか、計画的な攻撃なの？」

「……………ッ！ 姉さんッ！」

弦十郎の指示に頷いて通信を切ったクリスを見て、彼らの会話を聞いていたマリアが呟いた直後、セレナが叫ぶ。すると次の瞬間、彼女達目掛けて無数のコインが飛来し、三人は咄嗟に回避行動を取る。

「……………ッ！ レイア・ダラーヒムッ！」

「邪魔はさせない。シンフォギア装者」

軽やかな動きで着地したレイアがコインを連結させて完成させたトンファアを両手に襲い掛かってくる。マリアが駆け出し、レイアと同じように両手に短剣を構えて彼女の攻撃を受け止める。

「クリスッ！ ここは私達に任せてッ！」

「やられんじゃねえぞッ！」

「逃がすかッ！」



マリアを蹴り飛ばしたファアラが左手のトンファアをコインに分解。即座に指で弾いてクリスを狙い撃つ。しかし、それが彼女に直撃する刹那、コインとクリスの間に割り込んだセレナが複数の短剣を使って作り出したエネルギーの障壁で阻む。そのお陰でクリスは少しのダメージを受ける事無く本部へと向かうのだった。

「行くわよ、セレナッ！」

「はいッ！ 姉さんッ！」

アガートラームを纏う二人のシンフォギア装者がレイアに同時攻撃を仕掛けた。

「くう……………ッ！」

カーボンロッドの爆発に吹き飛ばされた調が片膝をつき、彼女を護るように切歌が前に立つ。

「やっぱり強いデスね……………ッ！」

「これっぽっち？ これじゃあギアを強化する前の方がマシだったゾ」

「そんな事……………あるもんかデスッ！」

流石、戦闘特化型というところだろうか。装者の中でも最も連携プレイに長けた二人の攻撃を受けても尚、ミカは平然として反撃してくる。その証拠に二人は所々傷ついており、対するミカは無傷に近かった。そんなミカの挑発を受けて切歌が飛び出す、ミカがなにを企んでいるのかを察知した調が「駄目ッ！」と叫ぶが、もう切歌の攻撃は止められず、ミカが吹き飛ばされた。

「どんなもんデスッ！」

「こんなもんだゾッ！」

ミカの片手から大量のカーボンロッドを放たれる。一旦上空に打ち上げられたそれらは重力に引かれて落下してくる。回避させる気など毛頭ない数のカーボンロッドを前に切歌が怯むが、咄嗟に動き出した調がヘッドギアを四枚の丸鋸に変形させた。瞬時に組み立てられた即席の障壁に大量のカーボンロッドが直撃する。

「調ッ!？」

「ぐ、くう……………ッ!？」

「アハハッ! オマケいくゾ〜?」

「えッ!?! きゃあッ!?!」

カーボンロッドによる爆撃が終わったのか、衝撃が収まったと思った調を、丸鋸の盾を打ち砕いてきたミカが蹴り飛ばした。

「ついでにお前もだゾッ!」

「が、はッ!?!」

着地したミカの手からゼロ距離でカーボンロッドが射出され、切歌の体が吹き飛ばされた。

「なんとなくで勝てるほど、アタシは甘くないゾ。アタシを倒したいなら、もつともつと強くなるんだゾッ!」

嬉々として叫ぶミカを前に二人が起き上がる。大ダメージを受けたも尚、彼女達の女には明確な闘志が宿っており、射殺さんとはかりの眼光をミカに注いでいる。

「……………切ちゃん、いける?」

「……………当然デスッ!」

視線を通わせなくとも、相棒がなにを考えているかは手に取るようにわかる。二人はマイクユニットに手を伸ばし、それを掴み取る。ナスターシャが遺してくれたこの世界で、このまま終わるわけにはいかない。だったら、格好よく生きるしかない。

「イグナイトモジュールッ！」

魔剣の柄に手をかけ、叫ぶ。

「抜剣ッ！」

「抜剣デスッ！」

放り投げられたマイクユニットが胸元に刺さり、途轍もない速度で心の闇が広がっていく。

「こんなのに………負けている場合じゃない………ッ！」

「マムの遺した世界で生きていく………ッ！ その為に、強くなるデスッ！」

しかし、如何に心の闇が強かろうと、今の二人にそれを御せないはずが無い。強力な意志の力でそれを捻じ伏せた二人の戦装束が、禍々しい邪悪な鎧に変貌していく。それを見たミカは、「ようやく引きずり出した」と言わんばかりに笑った。

——潜水艦のハッチが開き、そこから一羽の巨大なハチドリが飛び立つ。しかし、それは本物のハチドリなどではなく、エターナルに変身した克己がT2ナスカメモリを挿し込んだ事で変形し、飛行能力を獲得したトウモルシーカーである。

「賢、頼むぞ」

ゲームスタート  
「了解。状況開始」

こちらに気付いたファイタードーパントの機銃から無数の弾丸が飛んでくる。エターナルが巧みにトウモルシーカーを操作する事でそれを掻い潜り、彼の後ろに座ったトリガードーパントがトリガーマグナムから光弾を発射する。

連続して弾丸を撃ってくるファイタードーパントに対して、トリガードーパントが撃つ光弾の数は少ない。しかし、それでトリガードーパントは相手の動きが読めたのか、さらに撃ち出された光弾は徐々にファイタードーパントに命中していくようになってくる。

「……………ッ！ リーダーッ！」

「わかってるッ！」

一旦ハチドリから距離を取ったファイタードーパントが変形したのが見え、エターナルはハンドルを切る。瞬間、ファイタードーパントから高出力のエネルギー砲が放たれ、目標を取り逃したそれは海面に直撃。大爆発を起こした。

「エネルギー砲か。厄介な……………」

「マサカNEVERト戦エルナンテナッ！ 嬉シイゼ」

戦闘機から人型に変形したファイタードーパントが嬉々とした様子で口を開く。

「最強ノ傭兵チーム、NEVER。俺ハアンタラト戦ウノヲ楽シミニシテナンダ」

「悪いが、傭兵時代にお前の名前を聞いた事はなかったな。黒芭燈迹」

「当然ダ。俺ガソツチノ世界ニ入ツタノハ、アンタラガ仮面ライダーニ負ケタ後ダツタカラナ」

「時と場合によつては共闘していたかもしれないが、そんな機会はもう二度と来ないだろうな。お前は俺達の敵だ。ここで倒す」

「ソレハコツチノ台詞……………ト、言イイタイトコロダガ。生憎今ノ俺ノ仕事ハアンタラノ始末ジャナインデナ。ココデ撤退サセテモラオウ」

「逃がすと思うか？」

「思ワナイネ。コレツポツチモ」

戦闘機形態に変形したファイタードローパントが上昇し、それを追つてエターナル達も上昇した。

——その頃、海底では。

『オーシャンメモリ……………。まさかこんな事までできるなんてね』

「ああ、まるでモーセになった気分だぜ」

地面に降り立ったWが周囲にできた海水の壁を見て、克己から受け取ったガイアメモリの力に感嘆する。

彼らを使用したのは、T2オーシャンメモリ。『大洋』の記憶を司るそのメモリが水を操れるというのは以前のキャロル戦でも知っていたが、まさかこうして海水を退かす事もできるとは思わなかった。これはマキシマムスロットからT2オーシャンメモリを引き抜くまで持続するらしく、しかもマキシマムドライブ発動時の負荷がそれほど感じられない。

『マキシマムドライブは封じられているが、身動きが取れないよりはマシだ。行けるよね？ 翔太郎』

「当たり前だ。こんなデカブツ。すぐにノックアウトしてやんよ」

Wの前には、彼の数倍もある巨体を誇る、包帯を巻かれた人形があった。他のオートスコアラーと違って発声する機能がないのか、無言で持ち上げた腕でWを叩き潰そうと攻撃してくる。それを軽く飛び退いて回避したWは腕を伝って巨人の顔面に接近。拳で連続で殴打を繰り返す。

顔面を殴られた巨人が大きく身じろぎし、それにWが振り下ろされると、彼を踏みつぶそうと足を下ろしてくる。それを転がって避けたWはダブルドライバーからジョーカーメモ리를引き抜き、トリガーメモ리를挿し込む。

『サイクロントリガー!』

「そらそらそらッ!」

トリガーマグナムから発射された風弾が次々に巨人に命中し、巨人は顔を護るように片腕を持ち上げて防御する。しかし、巨人もただ防御しているだけではなく、そのままW目掛けて突っ込んできた。

「うおおおッ!?!」

自分の何倍もの体躯を誇る存在が突進してくるのだ。そのプレッシャーに気圧されたWを巨人が撥ね飛ばそうとした瞬間――

「ちよっせえッ!」

突如上空から飛来したミサイルが巨人に直撃し、巨人の動きが止まる。

「クリスちゃんッ!?!」

「加勢に來たぜッ!」

ミサイルに乗ってきたクリスがWの傍に着地し、黒煙が晴れた先に佇む巨人を見上げる。

「いやデケエな、おい。こいつもオートスコアラーか？」

『そうでなくとも、それに近い存在だろう。フォルムから考えられるに、レイア・ダラーヒムとほぼ同じ設計だろう。相違点としてはコインを使う向こうと違って、こっちは物理的な攻撃を主体にしているところだろう』

「解説どうも。来るぞッ！」

繰り出された拳を躲し、Wとクリスは左右から巨人に攻撃を仕掛けた。

「——危険信号点滅 地獄極楽どっちがイイDeath!？」

調のヨーヨーが奔る。従来と比べて何倍にも増した速度で襲い来るそれを躲すと、今度は切歌が黒く染め上げられた鎌を手に襲い掛かる。

「最強のアタシには響かないゾッ！ もっと強く激しく歌うんだゾッ！」

それも躲したミカがカーボンロッドを発射するが、それを調と切歌はそれぞれ別方向に動いて避ける。だが、ただ逃げているだけではない。突然動きを止めた二人は、そのまま一直線にミカ目掛けて走ってくる。これにはミカも一瞬動きが鈍る。

自分を中心に回っていた二人がいきなり迫って来たのだ。それに驚いたミカに隙が生じた瞬間を突き、切歌の両肩のアーマーが展開。そこから伸びたワイヤーアンカーがミカを拘束する。

「攻撃……………じゃないッ!？」

(調ッ！)

(切ちゃん……………受け取ったよッ！)

切歌のアーマーから伸びたワイヤーが調のギアと連結し、両者共にミカへと迫る。

『禁殺邪輪乙あ破刃エクレイプ s s S S』

誰にも負けない二人の絆が故に完成へと至ったコンビネーションアーツを前に、ミカは諦観にも似た感情を抱く。

「……………ひひ、歌えるじゃないかゾ」

寸分違わずにミカを打ち砕いた必殺技は大爆発を起こし、最強のオートスコアラ―は遂に倒れたのだった。

「……………こっちの気も知らないでッ!」

「たまには指示に従ったらどうだ?」

戦闘終了後、現場にやって来た弦十郎とクリスが開口一番に二人を叱りつける。

ミカが調と切歌に撃破された直後、なぜか他の装者達や仮面ライダーと交戦していたレイアと巨人が撤退し、何人かはそのままこちらへやって来ていた。クリスもその内の一人である。

そして、彼らが怒るのも御尤もである。この前の無断でシンフォギアを纏つての出撃もそうだが、今回も今回だ。この二人はあまりに自分勝手が過ぎていたのである。

「……………独断が過ぎました」



「これからは気を付けるデス……………」

「お、おう……………」

「珍しくしおらしいな。だが、わかればそれでいい」

珍しく素直に謝罪した二人に微かに驚くも、クリスと弦十郎はそれで彼女達を許した。

(それにしても……………あいつらは強いな)

念の為にフィーネの検査を受ける事になり、この場を後にする二人の後姿を見て、クリスは目を伏せる。

彼女達は自分の足で踏み出せたのに、自分はどうかだろうか。……………できなかつた。自分は、翼達の助けがなければ踏み出せなかつた。

(あたしは、あいつらよりも弱いのか……………?)

拳を握り締めて歯噛みするクリスを、事後処理に当たっていた賢はじっと見つめていた。

——チフォージュシヤトー、王室。今まで空席だった玉座が動き出し、その奥から煙と共に一人の少女が出てくる。

「お目覚めになられましたか」

「……………」

一糸纏わぬ裸体で立つ少女——キャロルはゆっくりと瞳を開け、吊るされた天幕を見上げる。

ガリイに続いてミカが敗れた。ここに残るオートスコアラーは、ファラとレイアの二機のみ。

「ガリイとミカがやられたか」

「派手に散りました」

「これから如何がなされますか？」

「言うまでもない。万象黙示録を完成させる。この手で奇跡を皆殺す事こそ、数百年来の大願」

なぜ死亡したはずのキャロルがここにいるのかというと、彼女が以前使用していたものとは違う肉体を得ているからだ。

数百年を世界の解剖という目標を完遂する為に費やしてきた彼女は、完璧以上に完成されたホムンクルスに自身の記憶を転写・複製するといったやり方で常人を超えた寿命を誇っていた。方法は違うが、ファイネのラインカーネイションに似たものである。

「マスター。お伝えしたい事が一つ」

「なんだ？」

「団長が目覚められました」

「……………ツッ！　そ、そうかつ！　やっと、やっと目覚めたのかツッ！」

先程までは達観していた表情をしていたのに、レイアから告げられた朗報を前にしたキャロルの顔はぱあっと明るくなった。それを見たレイアとフアラは「あのマスターがこんな顔を……………」と心中で驚いていた。そんな家臣の視線に気付いたのか、キャロルはハツとした後に「ご、ごほんっ」とわざとらしく咳払いをする。

「そ、それで？　奴はどこに？」

「客間でございます。ですが、まずはお召し物を――」

レイアが言葉を終えるよりも早く動いたキャロルはすぐに王室を飛び出し、長い廊下を走る。



「み、見るなああああああああッ!!」

「俺はなにも悪くぶべらッ!」

茹蛸の如く顔を真っ赤にしたキャロルの平手打ちが、エルリンの顔面に直撃した。

## Tの苦悶／夢の途中

「大丈夫か？」

「……………ああ」

S・O・N・G 保有の車から外を眺めている翼に声をかけた克己に帰ってきたのは、どこか強張った返事だった。

現在、彼らは緒川と共に、翼や弦十郎の実家である風鳴邸に向かっている。

これまでの調査の結果、キャロル陣営の狙いはこの地域一帯に存在する電力の供給地点と、レイラインのコントロールを担っている場所である事を突き止めたS・O・N・Gは、最後の要石が設置されている風鳴邸に装者達を派遣する事を決定した。そこに向かうメンバーに最初に立候補したのが翼だった。

「緊張しているのか？」

「当然だ。十年顔を合わせていない親族と会うのだぞ？ 緊張しないはずがない」

以前、克己と話し合った時から、いつかこの時が来るのでは、と思っていた。しかし、いざその時となると、やはり緊張してしまう。

「翼ちゃん、緊張してたらいつもの自分は出せないわ。まずは深呼吸よ。深呼吸」

「長年会ってなかった父親に会うんでしょう？ こいつの言う通りよ」

「ありがとう、羽原、泉」

風鳴邸に向かうのは、翼と克己と緒川だけではない。京水とレイカも加わっている。彼らに礼を言い、翼は克己に視線を動かす。

「大道、私は上手くやれるだろうか？」

「俺に訊かれても困る。それは、お前しかわからない事だ。翼」

「……………そう、だな」

「そろそろ到着します」

「わかった。行くぞ」

「ああ」

そうして扉を開け、克己達は緒川に連れられて石造りの階段を上っていく。

「……………?」

その時、緒川はなにかの気配を感じて振り返る。しかし、彼の視線の先にある車にはこれといった怪しいところは見受けられず、気のせいだと割り切り、そのまま階段に足をかけるのだった。

——引き金が引かれ、銃口から弾丸が発射される。しかし撃ち出された弾丸は跳び回るレイアを捉えられずに彼方へと飛んでいき、舌打ち混じりにクリスは『闘士』の記憶を発動。接近と共にガントンファアによる殴打を打ち込もうとするが、それすらもレイアに受け流され、その勢いを殺さぬまま投げ飛ばされた。

「この……………ッ！ な……………ッ!」

立ち上がったクリスがガントンファアから弾丸を放とうとした瞬間、いつの間に距離を縮められたのか、レイアのトンファアがクリスの顔面まで迫っており——

ピーツという音と共にクリスの前で制止、そのまま霧のように消え去った。

「……………」

先程まで戦っていたレイアは、これまでの戦闘データから形作られた偽物。いずれ来る彼女との対決に備え、シミュレーシヨールームで対策を行っていたのだが、まるで攻撃が当たる気になれなかった。

「クリス。焦っているのか？」

「……………賢」

モニタールームから彼女の様子を観察していた賢がシミュレーシヨールームに入ってくる。

現在、彼らは風鳴邸に向かった翼達とは別行動を取り、キャロル陣営が風鳴邸以外に狙っているであろう場所に向かっていた。

行き先は『深淵の竜宮』——異端技術に関連した危険物や未解析品を封印した絶対禁區であり、秘匿レベルの高さからS・O・N・G・にも詳細な情報が伏せられている拠点中の拠点。そこに保管されているものは、そのほとんどが人の手に余る代物であり、現在の人類が扱えるものなど数える程度しかない。

そしてそこは、かつて二課であったS・O・N・G・を苦しめた仮面ライダーと、彼を兵器として活用しようとした男が収容されている場所でもある。

「焦りは集中力を散らせる。それは遠距離戦を得意とする我々には致命的だ。なにがあった？」

「……………なあ、賢。これまでのあたしってさ、一人で踏み出せてたか？」

「？ それは……………」

もちろんだろう、と言いかけて口を止める。思えば彼女は、自分について思い詰めている時、決まって誰かの助けを受けて立ち上がった

いた。賢としてはそれでもいいのではないかと思っはいるが、いつまでもそれではいけない、と考える自分がいるのもまた事実だ。

「あたしはあの二人の先輩だったのに、こんなんでいいのかって思っちまうんだ。あの二人はさ、自分達だけで踏み出せただろ？ なのに、あたしは……………」

背景も消え、元の簡素な一室に戻ったシミュレーションルームの片隅に腰を下ろし、「はあ……………」と重い溜息を吐いて顔を手で覆う。

「後輩の方が先に行つて、自分は自立する事も出来ずにいるなんてよ。これじゃあ、先輩失格かもな……………」

「それでも、いいじゃないか」  
「なんでだよ。あたしはあいつらの誇れる先輩になりたいのに……………」

「先輩というものは、焦つてなるものではない。あるがままの自分でいればいい。そうしていれば、いずれ彼女達の光になっているだろう。……………いや、もう既に……………」

「……………？」  
「……………なに。こちらの話だ」

そう言つて、賢はクリスに背を向けて出入り口に歩を進める。

「お前の行動方針を決める事はできない。これからどうするかは、お前自身が決める事だ。クリス」

扉のスライド音が聞こえる。どうやら先程の言葉を置き土産に賢はシミュレーションルームを出て行ったのだろう。

「あるがままの自分、か……………」



ポツリと零れた眩きは、誰に聞かれる事もなく消えていった。

「……ここが翼の実家か。それで、あれが……………」

門を潜った克己は、その先に広がる歴史を感じさせる外観など目もくれずに視線を彷徨わせ、一つの物体を見る。

要石。要所要所に存在するレイラインのコントロールを行っている楔だ。

その時、風鳴邸から数人の男達が出てくる。黒服のSP達に護られながら出てきたのは、壮年の男性。その姿を見た翼が微かに息を呑んだ様子から、あれが翼の父親かと推測する。

「ご苦労だったな、慎次」

「恐れ入ります」

開口一番にまず緒川に労いの言葉をかけた男——風鳴八紘は、次に克己に視線を向ける。

「それに、大道克己だったな。二課時代の頃からの君の活躍は聞いている。もちろん、羽原レイカ、京水、君達の事もな」

「ああ」

「こんな渋いイケメンにそんな事言われるなんて、感激だわッ！」

「あんたは黙ってなさい」

軽く返した克己の後ろで京水がくねくねと体を振らせるが、即座にレイカに蹴られる。そんな光景を視界の片隅に置き、八紘は緒川に口を開く。

「アーネンエルベの神秘学部門より、アルカ・ノイズに関する報告書も

届いている。後で開示させよう。では、務めを始めたまえ」  
「お、お父様ッ！」

そのまま屋敷の中に戻ろうとした八紘の背中に、翼の声が投げかけられる。振り向いた八紘の目は、実の娘に対して向けるようなものではなかった。

「……………沙汰もなく、申し訳ありませんでした」

「お前がいなくとも、風鳴の家に揺らぎはない」

「あ……………」

「務めを果たし次第、戦場に戻るがいいだろう」

冷たく突き放すように言い残し、そのまま屋敷へ足を進めて、

「……………なにやっとなんじゃ己はあッツ!!」

「……………ツ!?!」

S・O・N・Gのメンバーの間を通り抜けていったスリッパが、勢いよく八紘の後頭部に命中した。

「あ、な、鳴海ッ!?!」

振り向いた翼の視界に、僅かに肩を上下させて八紘を睨む亜樹子の姿が映った。なぜここに彼女が、と誰もが思う中、ゆつくりと振り向いた八紘が亜樹子を睨みつける。

「……………誰だ。お前は」

「も、申し訳ありませんッ!　すぐに……………」

「私は鳴海亜樹子ッ!　鳴海探偵事務所の所長ッ!　そこにあんたッ!  
!　翼ちゃんのお父さんなんですよッ!?!　なんで実の娘に対してそんな態度が取れるのよッ!」

般若の如き形相で怒気を纏った状態で八紘に掴みかかろうとするが、すぐさま動いた克己が彼女の前に立ち塞がる。

「退いてよッ！ 私、そいつをもつかい叩かなきゃ気が済まないッ！」  
「なにをやってるんだ、お前は。相手はこの国の権力者だぞ。それを相手をスリッパを投げつける奴があるか」

八紘の足元に転がるスリッパを見る。そこには金文字で『このアホンダラ』と書かれていた。本当になにをしているのか、この女は。

「鳴海亜樹子……………。そうか、お前が異世界からこちらに飛ばされてきた人間か」

「私の質問に答えなさいよッ！ このドアホッ！」

「ドアホ……………。言ってくれるじゃないか。だが、お前にそう言われるほど、私は馬鹿ではない」

「家族に関してはそれ以外思いつかないわッ！ あんたみたいな奴が翼ちゃんの父親なんて……………ッ！」

「……………なに？」

亜樹子の一言に、ピクリと八紘の眉が動く。

「お前に、お前になにがわかるッ！ 異邦者のお前にッ！ 私の気持ちかわかるものかッ！」

「わからないよッ！ まだ子どもだった翼ちゃんを実家から追い出すなんて、なに考えてんだって思うよッ！」

「小娘が……………ッ！ 私が、私になにを思っつて翼をここから追い出したのか、わかるはずもないッ！ 私はただ、翼に——」

「……………ッ!? 誰だッ！」

その時、何者かの気配を感じ取った克己が片足に装着していたホル

スターから取り出した拳銃を発砲。銃口から撃ち出された弾丸は、しかし鋭い切れ味を誇る刀身を前に両断された。

「野暮ね。親子水入らずを邪魔するつもりなんてなかったのに。いえ、もう既に邪魔されていたわね」

「オートスコアラァー………フアラ・スユーフかッ！」

彼らの前に突如現れたのは、残る二機のオートスコアラァーの片方、フアラだった。

「要石の破壊に来たか」

「当然。——ダンスマカブル」

フランス語で『死の舞踏』を意味する言葉を口にし、フアラはジエムから多数のアルカ・ノイズを出現させる。

「死の舞踏か。俺が出るに相応しい名前じゃないか」

「緒川さん、お父様達をッ！」

「はいッ！」

ロストドライバーが腰に巻かれ、ペンダントが握り締められる。

『エターナル！』

「変身」

『エターナル！』

「羽 | 撃 | き | は | 鋭 | く | 風 | 切 | る | 如 | く |  
I m y u t e u s a m e n o h a b a k i r i t r o n

漆黒の外套をはためかせ、エターナルはエターナルエッジを構える。

「アルカ・ノイズは任せろ。お前は奴を倒せ」

「あぁッ！」

「ふふふ、返り討ちにして差し上げますわ」

八紘達に向かっていたアルカ・ノイズをエターナルが消滅させている間に、翼はフアラに攻撃を仕掛けた。

「——先程、風鳴邸にてオートスコアラの一機、フアラ・スユーフが出現したという報せが入った」

各自それぞれのやり方で時間を潰していた面々が司令室に集まった事を確認した弦十郎から告げられた情報に、一同は『遂に動いたか』とばかりに気を引き締める。

「現在、克己君と翼が交戦している模様だ。現場にはなぜか亜樹子君もいたのだが、恐らく我々の目を掻い潜って彼らの後を追ったのだろう。今は緒川君に任せて安全な場所に避難させているから安心してくれ」

「やっぱり追ってやがったのか……………」

呆れたように溜息を吐く翔太郎。克己達が風鳴邸に向かった時からなぜか亜樹子の姿が見当たらず、どこに消えたのかと心配していたのだが、まさか彼らについていったとは。彼女の行動力を失念していた。自分達がまだミュージアムと争っていた頃、単独で園崎家にメイドとして乗り込んだ時の事を思い出して、もう少し強めに監視しておくべきだったと反省する。

とにかく、緒川に任せているのなら安心だろう。弦十郎が最も信頼を置いている者の一人である彼なら、無事に亜樹子を護り通してくれるだろう。

「それと、我々が向かっている深淵の竜宮にも侵入者が現れた。藤堯」  
「はい」

キーボードが操作され、モニターに深淵の竜宮の内部を撮影している監視カメラの映像が映し出される。そこにはレイアと黒芭に前後を挟まれる形で通路を歩くキャロルの姿が映っていた。

「キャロル・マールステイン・ハイム？ なぜ彼女が……………」

「恐らく、あれはフィリップさん達が戦ったものとは違う体です。キャロルは完璧以上に完成されたホムンクルスの肉体に、自身の記憶を転写、複製して数百年の時を生きてきましたから」

「疑似的な不死というわけね。まるで私のリインカーネーションみたいじゃない」

「奴らの策に乗るのは小癪だが、見過ごすわけにもいくまい。過剰戦闘力になってしまいが、リーダー格である彼女を倒す絶好のチャンスだ。頼んだぞ、お前達」

今この場には五名の装者に加え、不死身の傭兵である剛三と賢、そして二人の仮面ライダーがいる。この戦力ならば申し分ないだろう。弦十郎の言葉に、その誰もが頷くのがあった。

「……………よろしかったのですか、マスター」

一方その頃。深淵の竜宮では、周囲の観察を怠らずにレイアがキャロルに声をかけていた。

「なにがだ？」

「団長の事です。聖遺物の回収であれば、我々に任せていただければよろしかったのですに……………」

「仕方ないだろう。エルリンの申し出だ。私も極力拒みたくない」

目覚めて早々外の世界に出るわけにはいかないらしく、エルリンが最初に取り組んだのは情報収集だった。自分が眠りに就いてからどれほどの時間が経過しているのか、また人類の文明はどのような発展したのかを調べたいのだそうだ。それなら自分が教えても良かったのだが、長らく結社に引き籠もっていた自分にその役目が務まるのかと言われると、務まらないと言う他ない。

「それに、相手は仮面ライダーやドーパントだ。もしあいつが傷でも負ったらどうする。私はもう、あいつが傷つくところを見たくない……………」

「……………甘々ですね、マスター。もしこの場にガリイがいたら、間違はなくからかわれていましたよ」

「だ、誰が甘々だッ！」

「おいおい、その話は帰ってからしてくれよ。今はすべき事があるだろう？」

黒芭に諫められて、その通りだなとキャロルは気を引き締め直す。この先にあるとある聖遺物が手に入れば、計画達成に近づくのだ。

世界の解剖まで、あと数歩。





無防備となった翼に、奏が容赦ない一撃を叩き込む。並々ならぬ威力を前に、何本も木を押し折りながら翼の体が吹く飛ばされ、ようやく落下した翼は、全身に走る激痛に顔を歪める。そんな彼女に追い打ちをかけるように、フアラが剣を振るって三つの緑色の竜巻を向かわせてきた。それを見た翼は新たに剣を取り出して迎撃しようとするが、間に合わない。

「翼ッー！」

しかし、竜巻に呑み込まれかけた刹那に駆けつけたエターナルによって、翼は間一髪助けられた。

「翼、大丈夫か？」

「……助かった。アルカ・ノイズは？」

「もう全滅させた」

「仮面ライダーですか。では、余興もここまで。閉幕とさせていただきますましう」

フアラがエターナルと翼に唸り声を上げて威嚇している奏を一瞥すると、雄叫びと共に奏が跳躍。右手に持った槍を投擲すると、それが大量に複製され、エターナル達に襲い掛かる。

『BLACK STARDUST&FOTON』

怒涛の勢いで降り注ぐ槍の雨を睨み上げ、エターナルはT2アイスエイジメモリを取り出す。

『アイスエイジ・マキシマムドライブ！』

手を掲げたエターナルの前方に、巨大な氷の壁が形成される。瞬時に作り上げられた障壁に次々と槍が衝突し、その度に決して無視でき

ない衝撃がエターナルに襲い掛かってくる。その威力に僅かに眉を顰めるエターナルだが、この程度ならば防げる、と確信していた。

だからこそ――

「――アルケウス」

「なに……ッ!？」

その闇牙の一撃が振るわれるとは、思わなかった。

振り下ろされた闇の魔爪は、これまでの衝撃で綻びが出ていた氷壁を、奥にいたエターナルごと切り裂いた。

「ぐああああッ!」

「大道ッ!」

切り裂かれた箇所から火花を散らしたエターナルが膝をつき、翼が叫ぶ。仮面の奥で苦痛に顔を顰めた克己は、先程の言葉を口にしたであろうフアラを見る。正確には、彼女が持っているソードブレイカーを。

ソードブレイカーの刀身には、以前倒したはずのドーパントの半身を構成していた、黒い靄がまとわりついていた。

「その靄は、アルケウスの……」

「邪魔はさせない。その要石は破壊させてもらおう」

いつものような丁寧な口調ではなくなったフアラを見て、エターナルは確信する。

ガイアメモリは本来、仮面ライダーのマキシマムドライブかそれと同等の攻撃を受ければ大抵は使用者の体内から排出される。翔太郎達が使うガイアメモリは試作品のT1であるので、その完成形であるT2ガイアメモリの内の一本に当てはまるアルケウスメモリが破壊できないのはわかるが、あの時はT2ガイアメモリを使う自分もマキ

シマムドライブを発動したのだ。本当ならば、あそこで排出され、砕け散ってもいいはず。しかし後にフィリップが調査した結果、砕かれているはずのT2アルケウスメモリは発見されなかった。しかし、アルケウスドーパントを撃破した直後、メモリが排出されていなかったとしたら。誰かの体に移動していたとしたら。

あの時、アルケウスドーパントに変身していた青年に触れた者は、一人しかいない。そんな事が可能なのか、と疑問に思うが、他者の体に憑依するという特性上、不可能と断ずる事などできはしない。

つまり、今自分達の目の前にいる彼女は――

「貴様……津神真一かッ！」

既に、あの男によって意識を殺されている。

「体を失っても尚生き足掻くか。関心と通り越して呆れるな」

「呆れてもらっても結構。俺が未だに現世うつつよに留まり続けるのは、万象黙示録の完成の為。それが完成すれば、全ての命が救われるッ！」

暗黒のオーラを纏ったソードブレイカーを手に飛びかかってきた  
フアラ――津神真一の攻撃を受け止める。しかし、勢いをつけていた分、威力は真一の方が上で、エターナルが押し負けた。

「亡霊め……ッ！　ここで討つッ！」

「貴様にも邪魔はさせないぞ、風鳴翼ッ！」

態勢を立て直して自分に向かってくる翼に気付くと、真一はパチンツと指を鳴らす。すると、それに反応したかのように奏が動き出し、真横から翼に攻撃を仕掛けた。

「ぐッ、奏……ッ！」

「オ〃オ〃オ〃オ〃オ〃オ〃ッ！」

獯猛な野獣のような咆哮を轟かせ、奏は理性など微塵も感じさせない連撃を叩き込む。反撃される事を度外視した攻撃がもたらす威力を前に翼が飛び退こうとするが、それで開きかけた距離を一瞬で縮めた奏の刺突が炸裂した。

「ぐは……ッ！」

「オ〃オ〃オ〃オ〃オ〃オ〃オ〃ッ！」

突き飛ばされた翼に、奏は大上段に構えた槍を勢いよく振り下ろす。

『BLACK POWER∞SHINE』

「ぐあああああッッ!!」

高出力のエネルギーの斬撃を受けた翼が吹き飛ばされるが、斬撃はそれで終わらず、彼女の背後にあった要石を破壊してしまった。

「しまった……ッ！」

「どうやら、この戦いは俺達の勝ちのようだ。だが、まだだ。まだ足りない」

真一の視線が翼に向く。先の一撃の当たり所が悪かったのか、武装が解除された彼女は気を失っているようだ。

「そいつに伝えておけ。目が覚めた時、お前の歌を聴かせてもらおうとな」

バックステップでエターナルから距離を取り、奏の傍に降り立った真一は懐から取り出したテレポトジエムを砕き、姿を消したのだった。

——場所は変わって、深淵の竜宮。キャロル達より少し遅れて到着したS・O・N・G.の面々が通路を走っていると、彼らに与えられた通信機に弦十郎からの連絡が入る。その内容は、風鳴邸での要石の防衛に失敗した事。そして、ファラ・スーフに津神真一が憑依していたというものだ。

『やはり、彼はまだ倒れていなかったというわけか』

「しぶてえ野郎だな。あん？　って事は、つまり……」

『津神真一の本当の肉体は、既に失われていると考えていいだろう。今の彼は魂だけの存在。アルケウスのメモリの中に自分の魂を保存しているんだろう。彼を倒すには……』

「今度こそ、メモリブレイクする他にないって事か」

どれだけ強力なドーパントであっても、ガイアメモリを破壊してしまえば変身できない。

「でもそれって、人殺しデスよね……？　アタシ、殺人なんてしたくないデスよ……」

切歌がポツリと零した言葉に、誰もが暗い表情をする。顔を仮面で覆っているWやアクセルでさえ、そんな表情を浮かべているのが気配で分かった。

「……それでもな、やらなきゃいけないんだよ」

しかし、そんな彼らに、剛三——メタルドーパントが告げる。

「これ以上奴を野放しにしたら、被害者はもっと増えるし、万象黙示録

の完成も着実に進行しちまう。それなら、やるしかねえんだよ」

『これまでの君達の戦いの話は聞かせてもらっている。誰一人殺さずに、よくここまでやれたと思う。僕らも君達みたいに、誰一人殺さずに事件を解決したい。けれどね、世界を護る為には、時には誰かの命を奪う事だつて必要だという事も理解している』

「しかし、『倒して終わり』では駄目だ。『奪った命に責任を持つ』事が、彼らに対する贖罪になる。それさえ忘れてしまった奴は、最早人間ではない」

それは、『悪魔』だ——と、アクセルがかつて憎んだ宿敵を思い返しながら言った。

井坂深紅郎。シルバーの上位メモリであるウエザーメモリを使い、己が欲望を満たす試す為だけに多くの命を奪ったマッドサイエンティスト。あの男もまた、それに当てはまる存在だった。

「たとえ相手がどのような存在であろうと、倒さねばならぬ相手であれば倒す。そして、相手の願いを踏み躪った責任を背負って、前に進み続けるんだ。俺達は、そうして戦ってきた」

「照井さん……」

「……それでも、お前達が戦いたくないのなら、それでもいい。お前達はまだ若い。ここから先は、俺達に任せて——」

「なに言ってるんだよ」

アクセルの言葉を、クリスが遮る。イチイバルを纏って廊下を駆ける彼女は、真っ直ぐ前を見据えながら続ける。

「命を奪う事は、確かにしたくねえけどさ。あたし達が止めなきゃ、誰があいつらを止められるってんだ。……やってやるぞ、あたしは。無力な連中を護る為に、あたしはこのイチイバルを身に纏ってんだからな」

聖遺物の欠片を用いて形作られた、超常の存在への対抗手段。それを手に取る以上、戦いの輪廻に巻き込まれるのは百も承知。いずれは、この手で誰かの命を奪う日が来るかもしれない。そんな日なんて、一生来なくていいという考えは変わらないが、本当に倒さなくちゃいけない相手が現れたら、その時は、この引き金を引こう。

「……アタシも、やるデスよ。人殺しなんて御免被るデスけど、それでもやらなくちゃいけない時は、戦うデスよ」

「……私も、切ちゃんと同じ。マリアは？」

「貴女達がやるのなら、私だってッ！」

「マリア姉さん、私も同じですッ！」

『……本当に強いね、君達は』

「装者を舐めないでもらいたいデスッ！」

決意が漲っている瞳をしている装者達に、仮面ライダーとドールパント達は感心し、同時に少し心が苦しめられた。

『お話の最中申し訳ないけど、キャロルが狙う聖遺物の目星がついたわ』

その時、本部に残ったフィーネからの通信が入り、全員が彼女からの情報に耳を傾ける。

フィーネが言うに、深淵の竜宮に侵入したキャロルの狙いは、ヤントラ・サルヴァスパなるものらしい。現存する完全聖遺物の一つであるそれは、あらゆる機械の起動・制御を可能とする情報集積体らしく、キャロルはこれを手に入れる事で、ワールド・デストラクターであるチフォージュ・シャトーを完成させるつもりらしい。

『既にキャロル達はヤントラ・サルヴァスパの管理区画へ侵入しているわ。こちらも対抗手段は用意しているけど、貴方達も急ぎなさい』  
「対抗手段？ フィーネ、それは……」

その正体に心当たりがあるのか、問いかけたマリアに、フィーネはふっと微笑みながら返す。

『ええ、ようやく上から許可を貰えてね。彼も動いてくれるそうよ』

————ファイタードールパントに変身した黒芭が右腕をブレードに変形させて扉を斬りつける。保管しているものの特質故に頑丈な作りであり、多少時間はかかってしまったが、超威力のエネルギー砲で撃ってしまったては中にあるヤントラ・サルヴァスパごと破壊してしまいそうなので、これで良しとする。

切り裂かれた扉が轟音を轟かせながら崩れていき、明確な破壊行為を察知した警報装置が甲高いサイレンを鳴らし始める。脳をがんがんと震わせる音量に顔を顰めながらもキャロルは扉だったものの上を歩き、簡素な室内に保管されていた板のようなものを手に取る。それこそが今回の獲物、ヤントラ・サルヴァスパである。

「目的のものは手に入れた。撤収するぞ」

そう言って、部屋から出た直後——

「……ッ！ マスターッ！」

「……ッ!?!」

咄嗟に動いたレイアが一枚のコインを放ち、キャロルに向けられて放たれた銃弾を弾き、続けて無数のコインを同時に撃ち出し、襲撃者を排除しようと試みる。

しかし、襲撃者は、それを軽く体を動かすだけで難なく回避し、改めて拳銃の引き金を引く。今度はファイタードールパントの機銃も加わり、常人ならばまず視認する事すら不可能な速度で、弾丸とコイン



の雨が襲撃者に襲い掛かるが、あろう事か襲撃者はそれさえも回避し、時には発砲した弾丸で襲い来る弾丸やコインを弾き、軌道を逸らす事で他の弾丸やコインに直撃させ、自分の身を護らせたりしたのである。

「ナンダ……アイツツ!？」

「気を付けろ。奴も……仮面ライダーだツ！」

とても人間業とは思えぬ動きを見せた襲撃者に身構えるレイアとファイタードールパントに、キャロルが叫ぶ。

彼らの目の前で、その男は懐から取り出したベルト————  
克己の頼みを受けてフィーネが複製したロストドライバーを腰に巻き、取り出したT3ガイアメモリのスイッチを押す。

『イクシードー!』

『進化』の記憶を宿すメモリをバックルに挿し込み、待機音声の流れ始める。男は右手を胸元に押し当て、なにかに対して祈るように瞼を閉じ、カッと見開く。

「変身」

『イクシードー!』

胸元に当てていた右腕を振り払うと、彼の足元から発生した突風が、彼の体を銀色の素体で覆い尽くしていく。それが完了すると、今度はその上に漆黒の外装が出現し、それが完全に装着されると、そこから大量の蒸気が噴出された。

「貴様は……ツ！」

その姿に、キャロルが歯噛みする。

まさか、その戦士を再誕させる道具を、S・O・N・G・が開発していたとは。よりもよつてこの状況で、現状最も厄介な存在が現れるとはッ！

「自由な世界を築く為、私はこの力を振るおう」

男の名は、ケアン・デイクス。またの名を――

「さあ――――進化わたしを乗り越えてみせろ」

仮面ライダーイクシード――――ッ！

## D 登場／狂気の英雄

『ごめんください〜いッ!』

『邪魔するぜ』

自分のものではない視界、そこに映る少し太った女性が自分の声に振り向き、パアツと表情を明るくする。

『おお、キャロルちゃんにエルリンッ! 今日も来てくれたんだね。それで? 今日はなにが欲しいんだい?』

『えつと、これとこれ、一つずつください』

『あいよお』

自分——キャロルが女性から果物を受け取り、代金を置く。その値段がちゃんと適当なものか確認した後、「毎度ありッ!」と言って女性はキャロル達を見送る。キャロルは両手に持っていた果物を傍らに歩く青年——エルリンが背負っている袋に入れ、次の店に向かう。

『んで? 次はどこに行くんだ?』

『次はトレバーさんのところ。借りてた本の貸出期間を延長してもらいに行くの』

『て事はあの本か。好きだねえ、お前も』

『もちろんッ! エルリンはかっこいいって思わないの? 傷だらけになってもお姫様を助けようとする騎士様の事』

『思うに決まってるだろ? 今思い出しても、あいつはカツコよかった。俺なんか屁でもねえぐらいにな』

『ふふっ、なにそれ。まるでその戦いを見てたみたいにな』

『……あ、あゝ。うん、まあ、あれだよ。読んでて引き込まれたんだ。それであの騎士を身近に感じたのさ』

そんな事を話しながら、出かけた目的を果たしていく。買うものを全て買い終え、帰路についた頃。

『エルリンはさ、色んなところを旅してたんだよね？』

『ん？ おお、そうだな。それが？』

『この街の外って、どんな世界が広がってるの？ 私はさ、街の外に行った事がないから』

彼女達がいたのは数百年前だ。交通機関などまるでないし、山道を行くのなら今以上に動物に襲われないように用心しなければならぬいし、ひよつとしたら山賊に襲われてしまう可能性だってある。父親のイザークは錬金術に精通しているし、エルリンは武術に長けているが、だからといって子どものキャロルを護り通せるわけではない。必然的に、キャロルはこの街から出られない。不満があるというわけではないが、好奇心旺盛な年頃の彼女としては、この街の外にはどんな世界が広がっているのか、気になって仕方ないのだろう。

『……それなら、いつか出てみるか？ 外の世界に』

『え？』

『今は無理だけどよ。お前が大人になったら、イザークと一緒に旅に出るか？』

その言葉に、キャロルは嬉しくなった。自分はまだ子どもだけけれど、大人になるまではあつという間だ。大人になったら、父と、エルリンと、旅に出れる。その未来を想像し、キャロルは笑った。

『うんッ！ 絶対に行こうねッ！ パパとエルリンと一緒に、世界を知りたいッ！』

その顔は見れなくても、エルフナインは確信していた。その時彼女

は、太陽のような笑顔をしていた、と……。

(……キャロル)

瞳を開け、己が創造主の名を心中で零す。

既に遠いものとなってしまった記憶から、彼女の思いが痛いほど伝わってきた。そして感じてしまった。彼女がああ青年に抱く、燃えるような恋心を。

(やっぱり、貴女は……)

チフォージユシャトーから脱出した時、ダインスレイフの欠片と共に持ち出したものを脳裏に浮かべる。

キャロルはきつと、愛する男の為に用意したあれを他人に使われたくないが故に、自分に託したのだろう。それが後に、自分を苦しめるかもしれないと理解しておきながらも。彼の気持ちを理解しているからこそ、彼女は苦渋の決断を下したのかもしれない。

……いや、今はそれを考えている場合ではない。

司令室を見渡す。誰もが真剣な表情をし、新たに入ってきた情報を深淵の竜宮に侵入した装者達に伝えている。

「エルフナインちゃん？　大丈夫？」

「はい。大丈夫です」

心配気に見つめてくる響に笑って返し、エルフナインはモニターを注視する。そこには、今まで深淵の竜宮に隔離されていた仮面ライダーが、ファイタードールパントとレイアを相手に奮戦している映像が映し出されていた。

——空を切り裂いて迫る剣の刀身に手を押し当てる。軌

道が逸らされた剣の持ち主であるファイタードールパントの態勢が崩れると、押し当てた勢いを殺さずに彼の腕を掴み、引き寄せる。瞬間、イクシードを狙ってレイアが弾いたコインの雨がファイタードールパントに殺到し、その鋼鉄の体に直撃する。

衝撃に力が抜けたファイタードールパントの体をレイア目掛けて投げ飛ばす。しかし、ファイタードールパントは空中で自身を戦闘機形態に変形させ、反撃とばかりに機銃を発射してくる。それを走って避けながら、イクシードは変身前に持っていた拳銃をファイタードールパントに投げつける。すぐさま機銃から発射された弾丸が拳銃を木端微塵にするが、彼が拳銃に意識を向けた隙についてイクシードは壁を蹴り、頭上からファイタードールパントに飛び蹴りを喰らわせようとする。が、しかし、それをコインを連結させて作ったトンフアーを装備したレイアが迎え撃った。

右足とトンフアーが火花を散らし、攻撃を防がれたイクシードは左足も使ってレイアから離れ、彼らより少し離れたところに着地する。そこへファイタードールパントとレイアが同時に攻撃を仕掛けるが、それはイクシードの背後から飛んできた攻撃によって阻まれた。

「ケアンツ！」

駆けつけたWとアクセル、そしてS・O・N・Gの装者達がイクシードを護るように立ち、キャロル達と対峙する。

「あいつは……」

『仮面ライダーイクシード。『進化』のガイアメモリ、イクシードメモリを使って変身する仮面ライダーよ』

「こちらの世界で誕生した仮面ライダー、というわけか」

「……？ お前達は？」

「俺は左翔太郎。二人で一人の仮面ライダー、Wだ。こっちの緑色の方がフィリップ。それで、この赤いのが……」

「照井竜。仮面ライダーアクセルだ」

「お前達がファイネの言っていた、異世界の仮面ライダーか。私はケアン・デイクス。仮面ライダーイクシードだ」

「チツ、S.O.N.G.にも追いつかれたか……ッ！　こうなったら——」

「逃がすかよッ！」

この状況はあまりにも分が悪すぎると判断したキャロルがすぐにテレポートジェムを砕いて逃げようとするが、クリスのクロスボウから放たれた矢が地面に落ちかけたテレポートジェムを撃ち抜き、続けて放った一射は彼女が持っていたヤントラ・サルヴァスパを的確に撃ち抜いた。

「な……ッ！　おのれ、よくもッ！　ぐ……ッ!?!」

チフオージユシャトー完成に必要なヤントラ・サルヴァスパを破壊された怒りで反撃しようとするが、キャロルは突然頭を抱えて呻き始める。新たな躯体への負荷を度外視した強制的な記憶のインストールに、以前の戦いで自決した記憶による拒絶反応である。それがキャロルに致命的な隙を生じさせてしまい、そこへクリスがミサイルを撃ち込んだ。

「大当たりデスッ！」

「……ッ！　待ってッ！」

爆音が響き渡り、ミサイルがキャロルに直撃したと確信した切歌に反し、黒煙の奥から現れたのは、大型の鎌を振り終えた状態で立つ怪人だった。

「……助かった」

「貴女に倒れてもらうわけにはいきません。万象黙示録の完成は、我々の理想を果たす為に必要な条件ですからね。ああ、それと、面白

「情報が入りましたので、『彼』を連れてきました」

「彼……う？」

「んっんっん〜？ これはまた久しい顔ぶれが揃ってますねえ？」

「な……ッ!? 貴方は……ッ！」

誰を連れてきたのか、と思った時、ゆったりとした動きで背後から誰かが歩いてきた。その男の姿を見たマリア達の表情が驚愕に染まる。

「げえッ！ ドグサレドクターッ！ なんでここにいるデスカッ!？」

「誰がドグサレドクターだッ！ 英雄と呼べッ！ それがこの僕——

——ドクター・ウエルに相応しい名称だッ！」

唾を吐き散らして叫ぶ男——ジョン・ウエイン・ウエルキ  
ンゲトリクスは人間のものとは思えない左腕で自分を指差した。

「……誰だ？ こいつは」

「なんでも、ネフィリムと呼ばれる聖遺物の細胞を自身に移植した人間だとか。フロンティア事変……私達には与り知らぬ出来事ですが、それが解決された後、彼は『人』ではなく『物』として政府に扱われ、この場所に隔離されていたそうですよ」

「周りにいるのは馬鹿ばっか……。誰も僕の価値を理解しようとしな  
いッ！ ですが、このドーパントが助けてくれたおかげでなんとかな  
りましたよ。彼に僕の事を話した奴には感謝しますね」

「こいつの事をお前に教えたのは誰だ？」

「名前まではわかりませんが、自分が協力者だという事は明か  
していました。『統制局長』、と言えはわかるようですが……」

「……あいつか」

脳裏に自分達が所属する結社のトップを思い浮かべ、小さく溜息を  
吐く。だが、彼がこの男を紹介した以上、ヤントラ・サルヴァスに



代わるなにかをこの男が持っている可能性がある。となると、この男を見捨てるわけにはいかない。

「黒芭、フアラ。ここは一時撤退するぞ。ウエル、と言ったか。お前もついてこい」

「英雄である僕が指図を受けるなんて御免被りますが、いいでしょう。この状況では多勢に無勢ですからね」

「では、ここは彼らに任せるとしましょう」

言うが早いか、デスドーパントがフアラとファイタードーパントと共にアルカ・ノイズを召喚する。さらに、デスドーパントが片手の指先に出現させた三つの人魂を放つと、それは徐々に人型に変わっていき、怪人の姿を取った。

「さあ、行きなさい」

「「オオオオオオオオオツ！」」

再生怪人としてデスドーパントに召喚されたドーパント——  
——アノマロカリスドーパント、コックローチドーパント、エナジードーパントがアルカ・ノイズの大群と組んでW達に襲い掛かる。

「ぎゃあッ!? ゴ、ゴキブリッ!?」

「気持ち悪い……」

「人間大のゴキブリ怪人なんて御免被りますデスよッ！」

生理的に受け付けられない生物の記憶を体現した怪人に堪らず悲鳴を上げたセレナ、調、切歌がコックローチドーパントに攻撃を仕掛けるが、コックローチドーパントは如何にもゴキブリらしい素早さでそれを躲し、三人に接近する。

「「ぎゃああああああッ!!」」

「この子達に近づくんじやないわよッ！」

戦闘中だということにも関わらず抱き合って今にも泣きだしそうな三人にコックローチドーパントが飛びかかった瞬間、彼女達の前に出たマリアが短剣で切り裂いた。そこへアノマロカリスドーパントが口元から弾丸に変えた歯を発射してくるが、メタルドーパントがその鋼鉄の体でマリアを護った。

「ハハッ！ 甘えなあッ！」

メタルシャフトを振りかぶったメタルドーパントによってアノマロカリスドーパントがアルカ・ノイズごと薙ぎ払われる。

しかし、彼らがそうしている間にキャロル達は壁に穴を開け、そこから逃げてしまった。

「クソッ！ あいつら逃げやがったぞッ！」

「左、フィリップ。ここは任せるぞ」

『頼んだよ、照井竜』

エナジードーパントのレールガンから発射される加速超電導弾を躲して殴り飛ばしたWに頷き、アクセルがその穴に入る。

「私も行こう。マリア」

「ええッ！ 調、切歌ッ！ セレナを頼んだわよッ！」

「合点承知デスッ！」

「任せて」

「賢ッ！ クリスを連れていけッ！ ここは俺達に任せろッ！」

「頼む」

「やられんじやねえぞッ！」

アルカ・ノイズと三体のドーパントの相手をW達に任せ、イクシー

ドを筆頭にマリア達は次々とキャロル達を追い始めた。

「――万象黙示録……世界の解剖、か」

その頃、キャロルの自室。彼女が計画完遂に乗り出した影響で長らく主が帰らない部屋に叶と共に入ったエルリンは、綺麗に整えられた資料から、キャロルがなにを目論んでいるのかを知った。叶に「ここから連れ出してほしい」と頼まれたが、まずはこの数百年の時をキャロルがどのように過ごしてきたかを知る為に、この部屋に訪れたのである。

外観はわからないが、内部構造からして大型のものだと察したのでこの部屋を見つけるまでは時間がかかるかと思われたので、案外早く見つかってよかった。

「変わっちゃまったな、キャロルの奴……」

そう呟くエルリンの瞳には、数百年の時を経て変わり果ててしまったキャロルに対する憐憫があった。常人では決して生きられぬ年月を生きたが故に摩耗した彼女を、最後の騎士は憂いだ。

そして、エルリンはついに決心したのだ。

「叶、お前の申し出、受けさせてもらうぜ。これは、俺が対処しなくちゃならねえ事みたいだ」

「……うん……。わかった……」

「でも、いいのか？ 俺もそうだが、お前がいなくなれば、俺に取り憑いていた奴や、その仲間達はお前を血眼になって探すはずだ。とんでもない迷惑をかける事になるが、それでもいいのか？」

「……いいの。……これが……私が思う……正しい事……」

「……わかった」

幽鬼のようにコクリと頷いた叶に頷き返し、「頼む」と一言。叶が空中に手を翳すと、そこを中心に空間が捻じれ、ブラックホールが如き穴が出現する。当然だが、ブラックホールそのものではない。しかし光を逃さぬその漆黒の色は、エルリンにあの死の穴を連想させた。

足を踏み出す。小さな少女と共に踏み出した一步は漆黒の穴の中に消え、そのまま二人は空間の捻じれへと身を投じるのだった。

## Kの覚悟／呪われし記憶

本部から送られてきた深淵の竜宮の各ブロックの障壁やパージス  
イツチの場所を脳裏に浮かべながら進むアクセルに、イクシード達が  
追隨する。

「それにしても、なんかおかしくねえか？ 入り組んでいるとはいえ、  
こんなに追いつけないなんてよ」

「いい加減、追いついてもいいのだが……」

しかし、彼らは未だにキャロル達に追いつく事は叶わないでいた。  
キャロル達と違って、自分達は現在進行形で本部からのサポートを受  
けているというのに、これはどういう事だろうか。

「キャロル達の居場所は？」

『そこから左に曲がって、上に直進してください。そこにいますッ！』

「ここは手分けして動いた方がいいだろう。マリア」

「ええ。私達はこっちから行くわ」

「では、俺はここから行こう」

遠回りにはなるが、それでキャロル達を挟撃する為にイクシードと  
マリア、アクセルがそれぞれ別方向に走っていく。残されたクリス、  
トリガードーパントは先程友里から伝えられた道順に沿って行動す  
る事となった。

「——それにしても解せんな……。この動き、まるでこちらがどう  
行動するのかが見えているような……」

モニターに映し出された、W達を表す点が散開していく様子を眺め

ながら、弦十郎は顎に手を当てる。

「……ッ！ 敵反応、進路を変更ッ！ こちらのメンバー達との距離を放していきますッ！」

「アルカ・ノイズ反応増加ッ！ こちらの進行を阻むように配置されていますッ！」

「ねえ、弦十郎君。これって……」

オペレーター達の報告に嫌な予感を感じたフィーネが声をかけると、「うむ」と呻くように弦十郎が小さく答えた。

「やはり、敵はこちらの動きを把握しているな」

「……ッ！ まさか、本部へのハッキング……？」

「そんなのあり得ないわ。この私が設計したセキュリティよ？ 正攻法じゃまず突破できないはずないわ。不正なアクセスがあればすぐにファイアウォールが発動するわ」

「だけど、現に向こうはこっちがどうするかわかってるんですよね？

これってどういう事ですか……？」

難しい話はわからないが、非常にまずい状況だという事は理解できた響に、フィーネは爪を噛む。

「純粹にシステムに介入しているわけじゃない……かといって通信を傍受されている様子もない……。これはいったい……。……まさか」

蛇のような瞳が動き、モニターを凝視していたエルフナインを捉える。フィーネの射抜くような視線に気付いたのか、エルフナインは咄嗟に首を横に振る。

「ち、違いますッ！ ボクはなにも……ボクじゃありませんッ！」

『いいや、お前だよ——エルフナイン』

その時、否定するエルフナインの気持ちを嘲笑うかのように、この場にいる者達全員の鼓膜に、その少女の声が響いた。

驚く一同の前に、エルフナインの体からキャロルが出てくる。本物ではない。半分透けているように見えているため、幻影に近いものだろう。

「……キャロル？ そんな、ボクが……？」

『ああ。だが、お前が自分を責める必要は無い。なにしろ、お前自身が自分が仕込まれた毒であると把握していなかったんだからな。オレがお前の目を、耳を、感覚器官の全てを一方的にジャックしていたのだからな』

「ボク感覚器官が、勝手に……」

淡々と告げられる事実には、エルフナインはショックを受ける。次第に顔が青白くなつていくエルフナインを見て、キャロルは続ける。

『同じ素体から造られた、ホムンクルス躯体だからこそ出来る事だ』

「……ッ！ お願いですッ！ ボクを拘束してくださいッ！ 誰も接触できないよう、独房にでも閉じ込めて……いいえ。キャロルの企みを知らしめ、ライダーシステムを持ち出すという、ボクの目的は既に果たされています……。だから、いっそ——」

「……エルフナインちゃん」

目を細めた響が近づいてくる。自分も知らなかったとはいえ、それでもS・O・N・Gの内部情報をリークし続けてしまっていたという事実を突きつけられ、エルフナインに怒りを感じているのか。それでも自分はなにも言えないと思いつつも、響から来るであろう罵倒を悔恨の気持ちと共に待っている——

「……よかつたあッ！ エルフナインちゃんが敵じゃなくてッ！

ですよね？ 師匠」

「ああ。迂闊だったな、まさか種明かしをしてくれるとは」  
「……………え？」

自分の想像とは正反対の反応を見せた響達に、エルフナインは思わず呆気にとられてしまった。幻影のキャロルも僅かに眉を動かした程度だが、その瞳には明らかな驚愕が宿っていた。

「あの、ボクはこの情報を、キャロルに教えていたんですよ……………」  
「貴女にその意思があったなら容赦しなかったけど、知らなかったんでしよう？ なら、それでいいのよ。知らず知らずのうちに敵に利用されていた……………それで決着よ」

「フイーネさん……………」

「君の目的は、キャロルの企みを止める事。そいつを最後まで見届ける事ッ！ 装者達への通信手段をパターンβに変更ッ！ 表示も最小限に変更しろッ！」

「わかりましたッ！ 通信手段をパターンβに変更ッ！」

エルフナインが硬直している間にも、着々と準備が整えられていく。それを横目に、弦十郎はエルフナインにニツと笑ってみせた。

「と、こんなところだ。S・O・N・Gにだって、それなりのやり方が用意されている。だからここにいろ。敵に覗き見されようとも、構うものかッ！」

「は、はいッ！」

そんな会話を交わす彼らを見ていたキャロルは、自分が想像したような事にならなかつた事に不満そうに舌打ちし、そのまま消えていってしまった。



——エルフナインを通してキャロルがこちらの内部情報を入手していたという報告を聞いたW達は誰もが驚いたが、エルフナインが欠片の悪意も無かった状態でS・O・N・Gに助けを求めた事を聞くと、キャロルに内部情報を知られてしまっている事などお構いなしに安堵した。

『事情がわかればこっちのものねッ!』

『暗号の解読パターンを変更。マリア、この先にはアルカ・ノイズがいる。油断はするな』

『もちろんよッ!』

『こちらにも戦闘を開始する』

通信越しに上げられる報告を聞いていると、クリス達の前にもアルカ・ノイズの姿が見えてきた。それなりの数だが、今の彼らの敵ではない。

「こちらも肉眼で確認した。クリス、好きに暴れろ」

「つたりめえだッ! このまま一気に追いついてやるッ!」

トリガーマグナムから光弾が、クリスのハンドガンから銃弾が放たれ、次々とアルカ・ノイズを消滅させていく。アルカ・ノイズの大群を前にしても決して足を止めずに進んでいくと、その奥にキャロル達の姿を捉えた。

「見つけたぞッ!」

「追いつかれたか。だが、既にシャトー完成に必要な最後のパーツの代わりは入手している。レイア、オートスコアラーとしての務めを果たせ」

「お任せを。派手に果たしてみせましょう」

「我々も残りましょう。黒芭様」

「オウヨ。ココデ潰ス」

レイア、デスドーパント、ファイタードーパントがクリス達と対峙し、その間にキャロルはテレポートジェムを砕き、彼女とウエルの足元に陣が形成される。

「待ちやがれッ！」

「派手に妨害！」

今にも消えてしまいそうなキャロル目掛けてクリスが引き金を引こうとするが、その寸前にレイアが投擲したコインがハンドガンの照準をズレさせ、発砲された弾丸はあらぬ方向へ飛んでいった。その間にキャロル達は消えてしまった。

「逃がしたか……。ならば」

「こいつらを倒すッ！」

「俺ラガソウ簡単二負ケルト思ウナヨッ！」

飛び上がったファイタードーパントが機銃に変形させた両腕から放たれた弾丸を躲し、クリスとトリガードーパントが同時に弾を撃ち出す。クリスの二丁拳銃から放たれた弾丸はレイアとデスドーパントに、トリガードーパントの光弾はファイタードーパントに向かうが、彼らはそれを容易く回避し、レイアはコイン、デスドーパントは人魂型の火球、ファイタードーパントは機銃で反撃する。それさえ飛び退いて避けたクリス達だが、今度はレイアがコインを連結させたトンファーを持ってクリスに襲い掛かり、デスドーパントも鎌でトリガードーパントに攻撃を仕掛ける。

クリスは咄嗟に『闘士』の記憶を引き出す。両手に握られていた二丁拳銃がガントンファーに切り替わり、レイアの攻撃を受け止める。受け止めた影響で僅かに動きが鈍ったレイアの腹を蹴り飛ばし、ガントンファーの銃口から無数の弾丸を撃ち出す。それはレイアが弾いたコインによって相殺されてしまった。

一方、トリガードーパントはデスドーパントの振るう鎌の刃を片腕で受け流し、トリガーマグナムを発砲する。がら空きの背中に至近距離からの光弾が直撃し、火花と共に吹き飛ばされるデスドーパントだが、着地して振り向くと同時に鎌を投擲してくる。

上半身と下半身を両断するかと思える勢いで迫り来るそれを転がるように紙一重で躲したトリガードーパントが銃口をデスドーパントに向けるが、唐突に感じた殺気に圧され、ほぼ無意識にそこから飛び退く。次の瞬間には彼の頭部があつた場所に、ファイタードーパントがデスドーパントが投擲した鎌を振り下ろしていた。あと一歩遅ければ頭を串刺しにされていたところだっただろう。

起き上がりざまに光弾でファイタードーパントを吹き飛ばすが、彼は吹き飛ばされながらも鎌を放り投げており、それをジャンプして受け取ったデスドーパントが、光弾を撃つたばかりのトリガードーパントの背を斬りつける。

背中に切り裂かれた痛みを感じて小さな呻き声を漏らしたトリガードーパントの態勢が崩れ、そこを今度はファイタードーパントの機銃から撃ち出された弾丸が襲う。

「ぐああああッー！」

「賢ッー！」

全身から火花を散らして吹き飛ばされたトリガードーパントが倒れ、それを見かねたクリスがレイアが蹴り飛ばし、その反動を利用してトリガードーパントの隣に降り立つ。

「おいッー！ 大丈夫かッ!？」

「あ、ああ……。……。ッ!？」

クリスに助け起こされるトリガードーパントだが、デスドーパントとファイタードーパントの奥にいるレイアが両腕を広げ、その先に二枚の巨大なコインを出現させるのを見た。

「危ないッ！」

「えッ!？」

「はああッ！」

トリガード。パントが咄嗟にクリスを押し飛ばした刹那、レイアが投擲した巨大なコインがトリガード。パントを挟み込んだ。

「が、は……ッ」

「あ、ああ……ッ！ け、賢ッ！」

コインが消滅し、そこから現れた彼は、あまりのダメージに体内からT2トリガードメモリが排出されてしまい、ドーパント態ではなくなってしまう。

「な、なにやってんだよッ！ あたしなんかを庇いやがってッ！」

「ぐ、う……。俺は、NEVERだ……。この程度では、死なない……」

「そんな問題じゃねえよッ！ クソッ！」

「滂沱の暇があれば歌えッ！」

「は……ッ!？」

悪態を吐くクリスに背後からトンファアを手にレイアが攻撃を仕掛けてくるが、無理矢理体を動かした賢が太もみに巻いたホルスターから拳銃を取り出し、クリスの背後に見える、トンファアを持った右手首を狙い撃ちする。

ノイズまでとはいかないが、ドーパントにはある程度通用するよう加工された弾丸がレイアの手首に直撃し、レイアは僅かに顔を顰めて舌打ち混じりに彼らから距離を取った。

「賢……」

「自分を、責めるな……クリスッ！」

叱りつけるように叫んだ賢に、クリスの体が強張る。

「一人で全部解決できると思うな……ッ！ 『あたしなんか』とか言うな……ッ！ 自分自身を、過小評価するな……ッ！」

所々から血を流し、今にも崩れ落ちてしまいそうだというのに、賢の瞳には今も熱い炎が宿っており、その視線は変わらずクリスを捉えている。

「クリス……。お前は、お前だ。雪音クリスという一人の人間だ。そして、あの少女達の先輩だろうッ!?」

「……ッ！」

「彼女達は、お前が先輩でいてくれる事を願っている……。特別な事なんて、なに一つ求めていないんだ……」

後輩が先輩を慕うのは当然。自分は先輩だからと、無理に力む必要などないのだ。ただ、クリスはクリスのままでいるだけで、彼女達の先輩になれるのだから。

「……そっか」

賢の言葉に、クリスは今まで背負っていた重圧がすつと消えていくのを感じた。

「あたしみたいのでも、先輩やれるんだな……。あたしは、あたしのままで、あいつらの先輩になれるんだな……ッ！」

調かのじよたちと切歌かが先を行くのなら、自分は自分のままで、そのさらに先に行く。それが、先輩として彼女達の目標になれるのなら――

「……ありがとよ、賢。お前のお陰で吹っ切れたッ！」

ニツと不敵な笑みを浮かべたクリスは、賢に背を向けてレイア達を見据える。

「あたしはもう、迷わねえッ！」

瞬間、T2トリガーメモリから眩い蒼い光が放たれた。その輝きはクリスの体に吸い込まれたかと思うと、彼女の武装をアズウテイラー・イチイバルのものへ変化させる。しかし、変化はそれだけに留まらず、ツインテールにまとめていた髪の毛は解け、左肩には無かったダメージを軽減するマントが装備される。

『フォニックゲインの上昇を確認……。覚醒したようね、クリス』

通信越しにフィーネの声が聞こえる。神獣鏡シエンシヨウジンを纏った未来と戦った響、迷っていたクリスに居場所があると伝えた翼と同じように、クリスは遂に己が身に宿るガイアメモリの力を覚醒させたのだ。

「まだまだ、まだ終わらねえよッ！」

しかし、それでクリスは止まらない。胸のマイクユニットを手に取り、叫ぶ。

「イグナイトモジュール——抜剣ッ！」

放り投げたマイクユニットが刺さり、凄まじい激情がクリスを呑み込もうとする。だが、この衝動を一度体験しているクリスにとって、こんなものは最早障害たりえない。

「あたしは、あいつらの先に行くぞッ！ あたしはあッ！ あいつら

の、先輩だからなアツツ!!」

叫んだ瞬間、クリスの全身を漆黒のオーラが包み込み、その身を邪悪で禍々しいものへと変貌させた。

ガイアメモリの力を纏ったシンフォギアに、イグナイトモジュールの重ね掛け。後にこの姿は、フィーネによってこう名付けられる事となる。

その名も——ガイアイグナイト。呪われし地球の記憶を操る、シンフォギアの新たな戦闘形態であるツツ!!

## Fの最期／ガイアイグナイト

「――鉛玉の大バーゲン　馬鹿に付けるナンチャラはねえ」

従来のものよりも細く、そして禍々しく変異したマグナムを装備したクリスがレイア達に銃弾を発射する。それを躲し、三方向から同時に攻撃を仕掛けるが、クリスは彼らを一瞥しただけで彼らの攻撃を回避し、距離を開けると同時にカウンターで銃弾の雨を浴びせる。

デスドローパント、ファイタードローパントと違ってほぼ生身といってもいい状態のレイアはそれを受けて吹き飛ばされ、即座に態勢を立て直したドローパント達が動き出す。

左右からの同時攻撃を仕掛けようとする二体のドローパントだが、彼らの背後に迫る影が三つ。

背後の存在に気付いたドローパント達が咄嗟に防御態勢を取るのと、彼らの攻撃が繰り出されるのは同時。衝撃波が走り、攻撃の勢いに押された怪人達が床に叩きつけられた。

「クリスッ！　デスとファイターは私達に任せなさい。貴女はオートスコアラーツ！」

短剣を構えるマリアに頷き、クリスはトンファアを手に襲い来るレイアを回避し、転がりながら引き金を引く。狙いを定めずに放たれた弾丸はしかし、あらぬ方向へと飛んでいく。

「どこを狙っている……ッ！」

起き上がった瞬間に出来る隙を狙ってレイアが突っ込んでくる。しかし、絶えず歌を紡ぎ続けるクリスの口元には、不敵な笑みがある。それに嫌な予感を感じた時には、後の祭りだった。



「ぐッ!?!」

突如背中に激痛が走り、レイアの態勢が崩れる。そこに一時的に銃を消滅させたクリスの正拳突きが繰り出され、レイアは壁に叩きつけられた。

いったいなにが、と思つてレイアが背中に感じる痛みから弾丸が飛んできた方角を割り出して見上げると、そこにはジエムのようなものが浮遊しているのが見えた。

「リフレクター……!? 派手な真似をしてくれる」

「——なれねえ敬語でも どしやぶる弾丸でも ブチ込んでやるから」

『MEGA DEATH FUGA』

腰部アーマーから撃ち出されたミサイルがレイアに迫る。巨大な質量を誇る二つのミサイルを前にしたレイアも、これに直撃してはまらずいとジャンプして躲すが——

「な……ッ!?!」

自分の周囲に展開された、リフレクターの檻に驚愕する。すぐに回避を試みるが、今の自分が空中にいる状態であるため回避行動は取れない。しかも完全に不意を突かれた形であるため、コインで迎撃も出来そうにない。

「——フ、まさか、これほどまでとはな……」

「——笑顔達を護る 強さを教えろ」

ギラリと甯猛な眼光が煌めき、クリスがマグナムをガトリング砲に変形させ、引き金を引いた。一秒の間にも銃口から無数に発射された

弾丸がレイアを閉じ込めた檻に入ったかと思えば、リフレクターにより反射され、凄まじい速度を以て全方位からレイアを撃ち抜いた。

『BLADE DEADRY RAIN』

暴虐と呼ぶべき銃撃の嵐に揉まれたレイアは、一瞬の間を置いて爆散した。

「——ゼエエリヤアッ！」

「オオ——ッ！」

気迫の籠った斬撃が交差し、アクセルとファイタードローパントの体から火花が飛び散る。互いに距離が空き、再び斬りかかろうとしたアクセルだが、ファイタードローパントは片腕を機銃に変形させており、真正面からゼロ距離で弾丸を発射した。

「ぐああああッ！」

吹き飛ばされたアクセルにデスドローパントが襲いかかるが、それの間一髪で駆けつけたマリアが短剣で斬り払い、鎌を弾かれた隙にイクシードの飛び蹴りが直撃し、デスドローパントが蹴り飛ばされた。

「大丈夫か？」

「……助かった」

イクシードに差し伸べられた手を取り、アクセルが立ち上がる。胸部装甲に阻まれたが、超至近距離から攻撃を受けたので今も激痛が走っているが、それで倒れるほど、アクセル照井竜は柔ではない。

マリア、イクシード、アクセルの三人と対峙し、ファイタードローパントは傍らに立つデスドローパントを横目に、彼らには聞こえない声で

話しかける。

「シアン、俺ハココデヤルゾ」

「……そうですか」

「ドウセナラ大道克己ニ殺ラレタカツタガ、ナニ。NEVERト戦エタダケヨシトスルサ」

「……では、最後の戦い、楽しんでください」

「……オウヨツ！」

それぞれの得物を構えるドーパント達。彼らの気迫に圧されかける三人だが、イクシードは彼らに対する警戒心を上げる事で、マリアとアクセルは持ち前の不屈の闘志でそれを弾いて構えを取る。

「オラアツ！」

両足に出現させたブースターを噴射して一気に加速したファイタードーパントの斬撃が迫る。スピードを乗せて威力を増しているそれは、まともに受け止めれば容易く押し切られてしまいそうなものになっている。彼の標的となったアクセルは咄嗟に身を振る。僅かに刀身が掠った肩部パーツの一部が斬り落とされ、そのまま振り下ろされた剣は床に巨大な斬撃痕を残した。

『トライアル！』

肩部パーツが斬り落とされても、アクセルは構わずにドライバーからアクセルメモリを引き抜き、トライアルメモリを挿し込む。

『トライアル！』

ランプが点灯している間に走り出し、完全に三色のランプが点灯すると、装甲が弾け飛んだアクセルが、エンジンブレードを振るって

ファイタードーパントを切り裂いた。ファイタードーパントが怯んでいる隙にエンジンブレードを投げ捨てたアクセルの連続蹴りが炸裂し、ファイタードーパントが大きく蹴り飛ばされた。

一方、マリアとイクシードはデスドーパントが放つ人魂型のエネルギー弾の弾幕を掻い潜って距離を縮めており、顔面に直撃しかけていたエネルギー弾を短剣を突き、片手に持っていた短剣を投擲する。真っ直ぐ心臓を狙って飛来するそれをデスドーパントが鎌の柄で弾くが、その間は僅かに弾幕の密度が薄くなり、その瞬間を突いてイクシードが肉薄。握り締められた拳がデスドーパントの腹部に刺さり、その衝撃が背中から突き抜けていく。

「ぐう……ッ!?!」

「フ——ッ!」

前のめりになったデスドーパントの髑髏の顔面にイクシードの膝蹴りが命中し、弾けるように天井を向くデスドーパント。そこへイクシードの回し蹴りが炸裂し、ボロボロのローブに包まれた体が蹴り飛ばされる。

「マリア」

「ええッ!」

蹴り飛ばされたデスドーパントに接近したマリアが蛇腹剣でデスドーパントを十字に斬りつけ、左腕ユニットを爪状に変形させて突き出す。瞬間、無数の十字架型のエネルギーがデスドーパントに襲い掛かった。

『DIVINE†CALIBER』

「ぐうう……ッ!?!」

大量の火花を放って倒れたデスドーパント。鎌を杖代わりに立ち

上がるが、そこへ情け容赦なくイクシードが追撃を仕掛ける。デスドーパントは咄嗟に鎌を振るってイクシードを牽制し、反撃とばかりに鎌を振るった遠心力を利用して回転斬りを繰り出し、イクシードを切り裂いた。

続いて人魂型のエネルギーを手元に出現させたデスドーパントがそれを鎌に取り込ませると、鎌の刃が人魂と同じ色のエネルギーを纏い、デスドーパントはそれを勢いよく振った。

無数の炎の斬撃が放たれるが、イクシードは徒手空拳でそれを弾き、マリアは長剣で斬撃を打ち払っていった。

「合わせなさい、ケアンツ！」

「了解した」

今度はイクシードがマリアに合わせる番になる。マリアが長剣を分解して鞭のように振るうと、分かたれた無数の刃は壁や床を斬りつけながらデスドーパントに襲い掛かる。それを的確に弾きながらもデスドーパントは鞭の如くしなる刃を躲して迫ってくるイクシードに人魂を放つが、イクシードがそれを視認した瞬間に、彼に備えられたAIが視界に入っている全ての情報から次にどう動くべきかを即座に判断し、彼の全身に命令を伝達。まるで未来が見えているかのような動きで人魂を回避したイクシードがジャンプし、デスドーパントがそちらに注意を向けた瞬間、無数の刃が彼の体を切り裂いた。さらに、よろめく彼の背後に降り立ったイクシードがバク転し、錐揉み状に回転しながら飛び蹴りを喰らわせた。

蹴り飛ばされたデスドーパントが立ち上がると、彼の隣にアクセルに殴り飛ばされたファイタードーパントが落ちてくる。

「黒芭様……ッ！」

「へへッ、ヤッパリ強エナ、仮面ライダー……ッ！」

「これで最後だッ！」

追い詰められたドーパント達にトドメを刺すべく、アクセルはトリアルメモリのマキシマムカウンターを起動する。

『トリアル・マキシマムドライブ！』

両腕を合体させて作ったファイタードーパントがレールガンを発射する。高出力のエネルギーがアクセル達を呑み込もうとするが、二人の仮面ライダーの前に出たマリアが剣を収納した左腕アーマーを砲身に変形させ、砲撃を放つ。

『HORIZON+CANNON』

衝突したレールガンとエネルギー砲が大爆発を起こし、両者の間に黒煙が生み出される。それを突き破ってきたイクシードが、マキシマムスロットにT3イクシードメモリを挿し込む。

『イクシード・マキシマムドライブ！』

白銀の輝きを纏ったパンチが直撃し、間髪入れずに内部に送り込まれたエネルギーが爆発した。

『ブロークンイクシード』

超威力の必殺技をファイタードーパントが膝をつく。続いて黒煙から飛び出してきたのは、トリアルメモリを頭上に放り投げたアクセル。目にも留まらぬスピードでデスドーパントに迫るが――

「ソウハ……サセネエツ！」

内臓が弾けているはずなのに、ブーストをかけて飛び出したファイタードーパントがデスドーパントを突き飛ばす。次の瞬間、アクセル



「…………お任せを」

重々しく頷いたデスドーパントに満足げに微笑んだ後、黒芭はその身を塵に変えて消えていった。

誰もがその光景に息を呑む中、デスドーパントは床に落ちたガイアメモリを手に取り、ゆつくりと立ち上がる。

「…………お見苦しいところをお見せしましたね。ですが、ありがとうございます。これで彼は、ようやく眠れましたから」

「…………憎くないのか？ 私達が」

「憎んでおりません。ようやく彼は眠れた、それだけしか思えないのですよ、私は。…………では、私はこれにて。また会いましょう」

テレポートジェムを砕いてデスドーパントが姿を消すと、本部にいる弦十郎から連絡が入る。

『…………ご苦労だったな。お前達』

「…………ええ。セレナ達は？」

『先程報告が入った。アルカ・ノイズ、ドーパント、共に撃破したようだ。各自、潜水艦に帰投するよう——』

その瞬間、通信越しに轟音が轟き、本部との通信が一瞬途切れた。

「な…………ッ!? 弦十郎さんッ!?!」

『ぐう…………ッ! なにがあつたッ!?!』

『海底に巨大なエネルギー反応を確認ッ! これは、以前翔太郎さん達が戦った人型兵器ですッ!』

『奴か…………ッ! すまないが、脱出は君達に任せるッ! 友里ッ!』

『潜水艇の位置を検索—— 出ましたッ! 転送しますッ!』

友里がそう言った頃には既にマリア達の端末に潜水艇の場所が表示



示され、それを確認した彼らは領き合う。

『人型兵器は我々が引き付ける。君達はその隙に脱出してくれッ！  
響君、了子君、頼めるか？』

『はいッ！』

『ええ。本部を潰させるわけにはいかないわ』

響とフィーネの会話を最後に通信が切られ、マリア達は潜水艇に急ぐのだった。

——S. O. N. G. 潜水艦。レイアの妹の襲撃を躲す為に全速力で海面に浮上した頃、ハッチを開けてガングニールを纏った響と、ネフシユタンの鎧を纏ったフィーネが甲板に出てきていた。

「まさか、こうして了子さんと一緒に戦えるなんて思いませんでしたよ」

「私もよ。貴女の戦い、間近で見させてもらおうよ?」

『二人共、来るぞッ！』

弦十郎の声に二人が気を引き締めると、海面を突き破って、彼女達の数十倍の体軀を誇る巨人が現れた。巨人は自分を見上げる響達を視認すると、彼女達ごと潜水艦を撃沈させようと腕を振り上げるが、それが振り下ろされるよりも早く動いたフィーネが、右手の鞭をしながらそれを弾き、さらに左手の鞭を巨人の首に巻きつける。

「そう簡単に潰させるわけじゃないじゃない。響ちゃん、行きなさい」  
「はいッ！」

鍛え上げられたバランス感覚で鞭の上を駆けた響を狙って巨人が腕を伸ばしてくるが、それを勢いよく跳び上がって回避し、右腕ア―

マーを強く引き、腰に備え付けられたブースターを片方だけ噴射させる。

「どおおりやあああッツ!!」

凄まじい勢いで回転した響は、遠心力を活かして鞭に首を拘束されて動かさないでいる顔面に強力な一撃を喰らわせた。

「やっぱり凄まじいわね、あの子は。私も負けてられないわね」

巨人の体を大きく揺らがせた響の一撃に感嘆の息を漏らしたフィーネは鞭を巨人から離れた後、その先に二つのエネルギー球を作り出す。

「消えなさい」

『NIRVANA GEDDON』

放たれたエネルギー球は巨人の胸部に直撃し、周囲にあるものを巻き込みながら大爆発した。

「……強すぎないですか？ 了子さん……」

「これが欠片の聖遺物と完全聖遺物の力の差よ。しかと目に焼き付けておきなさい」

響の一撃も中々のものだったが、フィーネの攻撃はそれを遥かに凌駕するものであり、響は改めて、彼女が敵じゃなくてよかったと思うのだった。

## C 飛翔／夢に羽撃け

「う、うう……」

小さく呻いて起き上がると、まず最初に見慣れた木造の部屋が目に入り、「……そうか」と呟く。

記憶は奏の攻撃を受けたところで途切れている。きっと、あの後気を失ってしまったのだろう。となると、決着はどうなったのだろうか。あの時は確か克己が駆けつけてくれたはずだが、彼が二人を撃退したのだろうか……。

「あ、目が覚めたんだね」

「……鳴海」

「無理しないようにね。重傷じゃなかったみたいだけど、怪我人なんだからね。なにか飲み物いる？」

「水を頼む。……戦いは？」

「向こう側から撤退したみたいだよ。歌を聴きたいのに、それを歌うはずの翼ちゃんがいなきや意味が無いからって」

「私の歌を？ なぜ……」

「うくん、私にはわからないなあ。フィリップ君ならなにかわかるかもしれないけど」

むむむ、と唸る素振りを見せるも、やはりわからないと亜樹子が肩を竦めた直後、襖を開けてレイカが入ってくる。

「あら、起きたのね。……うん、様子を見るに、しばらく戦えるようじゃなくてよかったわ」

「羽原か。大道は？」

「克己はほとんど無傷よ。エターナルの装甲に護られていたからね。今八紘さんと話しているけど、あんたも聞く？」

「ちよつと。翼ちゃんは怪我人なんだよ？ そんな彼女に……」  
「大丈夫だ、鳴海。この程度の傷、大したものではない」

そう言つて立ち上がり、レイカと連れ立つて八紘の自室へ赴く。

「ッ！ 翼さんッ！」

「翼ちゃんッ！」

「目が覚めたか、翼」

「心配をかけたな。……それは？」

「アーネンエルベから送られてきた、キャロルらが使役しているアルカ・ノイズの材料をまとめた資料だ」

一通り読み終えたファイルを軽く叩いて克己が答えた。

アーネンエルベ。それはシンフォギアの開発に関わりの深い独国政府の研究機構である。此度の戦いにおいてキャロル達が繰り出してきた新たな脅威——アルカ・ノイズを前にS・O・N・G.が彼らの助けを求めたところ、アルカ・ノイズの体を構成する物質の名が判明した。

どうやら、アルカ・ノイズから放たれている赤い粒子の正体は、万能の溶媒であるアルカヘストによつて分解還元された物質の根源要素、プリママテリアというものらしい。

錬金術とは、分解と解析、そこからの構成によつて成り立つ異端技術の理論体系とされているが、そうになると、世界の解剖を目論むキャロルは、世界を分解した後になにを創造しようとしているのだろうか……。

「……翼」

誰もがキャロルの真意について考えていたその時、八紘がポツリと娘に声をかけた。

「は、はい」

「傷の具合はどうだ？」

「……？ 痛みは殺せますが……」

「ならばここを発ち、然るべき施設にて——」

「ガールルルル……ッ！」

「獣かお前は」

八紘がなにを言おうとしているのか理解した瞬間に唸り声をあげた亜樹子の頭を克己が叩く。風鳴邸に来て早々八紘にスリツパを投げつけるという所業を行った彼女だが、これ以上彼に危害を加えない事を条件に釈放してもらった。彼女の言葉に、八紘自身思うところがあつたのだろうか。

「……些細な傷でも、ふとした時に大きな痛手に変わる事もある。少しでも嫌な予感がした時は、無理せずに休むがいい」

「え？ あ、はい……」

厳しい言葉を浴びせられるのではないかと内心冷や冷やしていた翼は、その優しい言葉に思わず驚いてしまった。なんとなく、八紘の耳が赤く見えるのは気のせいだろうか。

「……ですが、今日だけ、せめて今日だけは、戦わせてください。一度失ってしまった光を、私はもう一度取り戻せるのかもしれないのです。どうか、この通り」

あの惨劇で、絶唱を歌って朽ち果てた一番の戦友。再びこの世に現れた彼女と言葉を交わす為にと頭を下げた翼を見つめ、「……そうか」と八紘は呟く。

「では、彼女達が襲撃するまでの間、可能な限り体力を回復させておけ。取り戻したいのなら、是が非でも取り戻せ。負ける事は許さん」

「……ッ！　ありがとうございます、お父様ッ！」

そんな事を言ったとしても「くだらない」と吐き捨てられるのではないか、と恐れていた翼は、彼の言葉に深々と頭を下げるのだった。

「翼さん。克己さん達には既に報告しましたが、クリスさん達がオートスコアラーの一機、レイアとラメンターのドーパントを撃破したそうです。残るオートスコアラーは残り一機です」

「そうかッ！　雪音達め、やってくれたな」

自分の後輩達が戦果を挙げてきた事を喜ばしく思う翼。しかし、次に緒川から伝えられた情報は、そんな彼女を驚愕させるものだった。ラメンターのメンバーの一人、ファイタードーパントこと黒芭燈迹が、克己達と同じNEVERだったという情報だ。克己達と同様、死を超越した戦士だった彼ならば、これまで仮面ライダーや装者達を苦しめてきたのも領けるが……。

「大道は、なにか思ったりするのか？　その……黒芭燈迹について」

「可笑しい事を聞くな、お前は。相手がNEVER同類だろうと、敵には変わりはない。……出会うのがもっと早ければ、仲間にしていたかもしれないが、そんなたられればの話は今する必要はないだろう。死んだ奴の事を考えるよりも先に、今後の事を考えた方がいい」

「……大分ドライなんだな、君は」

「NEVER俺達は本来、そういつた連中なのさ。そいつがいつNEVERになったかは知らないが、こんな体になって、誰かの為に尽くす、という気持ちを残したまま戦い続けるのは難しい」

「でも……大道達は人の心を残しているだろう？　それなら、お前達も……」

「……ハッ、言ってくれるじゃないか、翼」

その笑いは、人道より堕ちた者達でさえも信じる翼への驚きか、そ

れとも呆れか。口元を歪めて小さく息を吐くように笑った克己の手が翼の頭に乗せられる。

氷のような冷たさに一瞬身を竦めた翼だが、その冷たさの奥に、確かな温かさを感じ取り、どこか嬉しそうに微笑んで、彼に撫でられるのだった。

時間にしてみればほんの数秒に満たない時間だったが、それだけでも満足した翼は八紘達に一礼して退室する。

「よかったね、翼ちゃん。ちゃんとお父さんと会話できたんじゃない？」

「……ありがとう、鳴海。そして、すまなかった」

沈みかけている夕日が照らす廊下を歩く亜樹子に、翼は謝礼の言葉を述べる。

「本当なら、これは私自身で解決すべき問題だった。それなのに、客人である貴女に手伝わってしまった。少し、自分が情けなく思えてしまう」

「いいのよ。あたしも、貴方達の関係を見て思うところがあつたからね」

「……？ それは……」

「どういう事か、と訊ねようとした時、歩を止めた亜樹子が夕日を眺めて口を開く。

「あたしのお父さんはさ、もういないの」

「ッ！ それって……」

「うん。死んじゃったの。翔太郎君とフィリップ君を庇ってね」

そこから、亜樹子は亡き父親の話をし始めた。

鳴海壮吉——かつては仮面ライダースカルとして風都を護っていた

た探偵。如何なる事態にも冷静に対処し、自らの感情を押し殺してでも為すべき事を為した、ハードボイルドの体現者。そして彼は、人一倍に周りの人々を、風都を愛した人情家でもあった。

最初こそ、亜樹子は当時の自分を捨てて風都で戦い、散った彼を恨んでいた。しかしその感情は、とある事件によつて彼の真実を知った事で消えた。

父親は自身を裏切った相棒だった男が変身したドーパントによつて、最愛の人物に接触すると爆発する小型の爆弾を体内に埋め込まれてしまっていたのだ。それが原因で彼は最愛の娘である亜樹子に再会する事ができず、そのまま風都で命を落としてしまった。

結局、自分は最後まで彼に「ありがとう」と言えず、死に別れてしまった。それを亜樹子はとても悔しく思っていたのだが、同時に彼を誇らしく思つてもいる。

父親は探偵として、そして仮面ライダーとして、多くの人々の悩みを解決し、風都の平和を守り続けていた、一人の英雄であったのだと。

「私はもう、お父さんと話せないけど、翼ちゃんは違うでしょ？ 今もお父さんは生きている。生きている限り、色んな話が出る。翼ちゃんには、私みたいな思いはしてほしくないから……」

だから、仲直りしてね？ と言い終え、亜樹子は近くにあった襖を開けて、固まった。

「な、なに……これ……」

酷い有り様だった。ぬいぐるみや衣服の類が滅茶苦茶に乱雑しており、その光景を見た亜樹子は、これが翼に敵意を持つ何者かの襲撃によるものだと判断し、すぐに克己達を呼びに行こうとしたが、それを翼が止める。

「鳴海……これはな、私の不徳なんだ」



「だからって、ねえ？ ええ？ 緒川さんからこの事は聞いてたけど、まさかここまでなんて……」

「うう……ッ！ なんとも情けない……ッ！」

「ほら、泣いてないで片付けよう。ああもう、下着までこんなところに放っておいて……あれ？」

脱ぎ捨てられていた下着を手にとった亜樹子が違和感を感じたその時、突如として轟音が風鳴邸に轟いた。

「ぎよええええッ！ ななな、なにッ！」

「鳴海ッ！ 緒川さん達のところへ行けッ！ 私が見に行くッ！」

「う、うんッ！ 気を付けてねッ！」

亜樹子の叫びを背に受けて屋敷から飛び出すと、森から大量のアルカ・ノイズが溢れ出していた。

「これは……ッ!？」

「ファラ……津神真一が出現させたものだろう。この数は俺達総出で当たる必要がある。是が非でも、お前だけと戦いたいらしい」

「克己ッ！」

既にヒートドープントに変身していたレイカが上空から降り立つ。

「今回のアルカ・ノイズは大量の大量よ。このまま放置してたら、街にも溢れ出すわ」

「わかった。京水は？」

「もう戦ってる。あんたも手伝ってくれろ？」

「元からそのつもりだ。……翼、アルカ・ノイズは俺達が片付ける。オートスコアラーと旧友の相手をさせる事になるが、いけるか？」

オートスコアラーですら装者単独で撃破するのは困難だというの

に、今の彼女はガイアメモリの力を振るう状態になっている。さらにその傍らには、かつて戦場を共に駆け、友情を育んだ親友もいるのだ。彼らを相手に、翼が単騎で勝利できる確率は限りなく低いと言ってもいい。

「……ああ、任せろッ！」

しかし、戦力差などなにするものぞ。次は負けないとばかりに頷いた翼に、克己は不敵な笑みを以て返した。

「活路は俺達が切り拓こう。お前は、お前の為すべき事を為せッ！」

『エターナル！』

その身に漆黒の外套を纏って疾走したエターナルが自分達を襲おうとしたアルカ・ノイズを蹴散らしながら、T2ユニコーンメモリをマキシマムスロットに挿入する。

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

突き出された拳から放たれた竜巻状のエネルギー波が前方のアルカ・ノイズをまとめて消し飛ばし、一本の道を作り出した。

「行ってこい、翼ッ！」

「助かったッ！」

エネルギー波に挟まれた地面を駆け抜けていくと拓けた場所に出る。その中心に、月光を浴びて佇む二人の姿があった。

「フアラ、いや、津神真一ッ！」

「待っていたぞ、風鳴翼。さあ、貴様の歌を聴かせてもらおうかッ！」

「オ〃オ〃オ〃オ〃オ〃オ〃オ〃オ〃オッ!!」

最早、自身がフアラではないと豪語するようにフアラ津神の傍らに佇んでいた奏の眼がギリリと光り、翼に襲い掛かる。

「――Imyuteus 羽撃はamenohabakiri 風切tron 如」

振り下ろされたアームドギアを、天羽々斬を構えた翼が受け止める。

「奏……これまでは失敗してきたが、今度こそこの剣で、その呪いを断ち切ってみせるッ！」

「ならば、この剣殺しは砕けるかッ！」

飛びかかってきたフアラ津神の一撃を、奏を蹴り飛ばした後に脚部アーマーから取り出した剣で受け止める。一瞬はその剣はフアラ津神の刀身を受け止めたが、すぐにその身に亀裂が走り、砕け散ってしまった。

「く……ッ！」

「お前がそれを剣を認識し続ける限り、この哲学兵装はその概念を凌辱し続ける。さて、いつまで耐え切れるかな？」

まだ憑依される前の頃を彷彿とさせる軽やかな動きで攻撃を仕掛けてくるフアラ津神から距離を取れば、今度は奏が襲い掛かってくる。シンフォギアを纏って強化された脚力で奏の薙ぎ払いを回避すると同時に跳躍し、周囲に無数の剣を出現させる。

『千ノ落涙』

月光を受けて銀色の輝きを放つ刃雨が降り注ぐが、それを前にした奏は右手の槍を投擲する。槍が奏の手から離れた瞬間、大量に分裂して刃雨を迎え撃つ。

空中で激突した剣と槍が小規模な爆発を起こし、着地した翼は新たな剣を手津神にフアラ津神に攻撃を仕掛けようとするが、彼女彼はそれを読んでいたかのように剣殺ソートブレイカーしで打ち合い、翼の剣を破壊した。

「駄目か……ッ！」

「所詮は鈍らだったか。フ——ッ！」

「うわああああッ！」

反撃にと振るわれた大剣から放たれた突風に吹き飛ばされ、翼の体が地面に叩き付けられた。

「ぐ……ッ！ いったい、どうすれば……！」

どれだけ刃を振るっても、それを翼が『剣』と認識し続ける限り、フアラ津神の哲学兵装の前では無力に等しい。克己に啖呵を切ってきたのはいいものの、唯一の武器である剣の無い状態で、彼らに勝利する方法は果たしてあるのだろうか。

ゆっくりとにじり寄ってくるフアラ津神と奏津神に歯噛みする事しか出来ないでいると——

「——翼ッ！」

聞き慣れた声に、パアンツという銃声が続く。

フアラ津神を狙って放たれた銃弾はしかし、彼女彼の大剣によって簡単に切り裂かれてしまったが、それでも彼らの動きを止めるのは充分だった。

「な……お、お父様ッ!?! 緒川さんも、どうしてここにッ!?!」

翼の視線の先には、緒川を連れた八紘の姿があり、その眼光は確かな怒りを以てフアラを睨みつけていた。

「馬鹿な……。アルカ・ノイズに埋め尽くされた森を抜けてきただど？ いったいどうやって……」

「僕のお陰ですよ。僕は反対したのですが、彼にどうしても頼まれましたのでね」

「緒川さん……」

「翼」

スツと細められた瞳が、翼を見やる。

なにを言われるのかと不安になる翼に対し、カツと目を見開いて八紘が叫ぶ。

「歌え——歌うんだ、翼ッ！」

「……ッ!? お父、様……?」

「私個人の意思で、お前を傷つけてしまった事は許してくれなくてもいいッ！ だが、今ここで、私は叫ぼうッ！ 翼……私は、お前の歌が好きだッ！」

「ッ!!」

信じられない言葉が彼から飛び出し、驚愕に息を呑む翼。しかし、それでも彼女の心は、確かに父の叫び——『愛』を感じ取っていた。

「歌うんだ、翼。私の娘よ……。その歌で、お前の願いを叶えろッ！」

「言わせておけば……。ッ！ 貴様は黙っていろッ！」

フアラが大剣を振るって飛ばした斬撃で八紘を切り裂こうと迫る

が——

「な、にッ!？」

突如として上空から落ちてきた剣が斬撃を迎え撃ち、続けて落ちてきた剣がフアラ<sup>津神</sup>を切り裂いた。

「この人を傷つけるな……。この人は私の父だ。私の家族だ」

切り裂かれた箇所を押さえて翼を見やるフアラ<sup>津神</sup>。ゆつくりと立ち上がる彼女の周囲には、次々と上空から落ちてきた剣が突き立っており、刀身から回路のような光の道を地面に刻み込んでいっている。

「……お父様」

足元から立ち昇る風に蒼髪を揺らしながら、八紘に声をかける。

「私の歌を好きと仰ってくれて、ありがとうございます。ならば聴いてください、貴方の娘の——この風鳴翼の歌をッ!」

マイクユニットを掴み、叫ぶ。

「イグナイトモジュール——抜剣ッ!」

放り投げたマイクユニットが胸に突き刺さり、彼女の全身を黒いオーラが包み込む。

「いざ、尋常に——」

オーラが弾け飛ぶ。そこから現れた翼は、これまで誰も見た事なかった武装に身を包んでいた。

禍々しい漆黒の外装とはかけ離れた、漆黒の着物。完全燃焼を意味する蒼い炎のような装飾を施された袖に通された手が、地面に突き立

つ剣を握る。

その指に触れられた剣は瞬く間にその刀身を黒曜石の如く黒く染め上げ、冷徹な殺人鬼の双眸のように冷ややかな輝きを以て所有者の手に納まった。

「――勝負ッ！」

これこそ、天羽々斬・ガイアイグナイト。

漆黒の剣聖が、月夜に舞う――。

## 黒剣士T / 暗黒の疾風

「――邪鬼の遠吠えの残音が月下に呻き狂う」

黒刀を手に駆け出した翼を、フアラ津神と奏が迎え撃つ。

奏の攻撃を受け流し、真つ直ぐに突っ込んできた翼が黒刀を振るうが、首元まで迫りかけたそれはすんで大剣に阻まれ、哲学の牙によつて打ち碎かれる。

「――今宵の我が牙の切れ味に同情する」

指を巧みに動かす事で跳ねるように動いた大剣が翼を脳天から両断せんとするが、翼は軽く体を逸らす事で回避。フアラ津神を蹴つて距離を取ると同時に地面に突き立つ別の黒刀を掴み取った瞬間、彼女の背後に立つ奏が槍の穂先から光線を発射した。

「翼ッー！」

思わず八紘が叫ぶ。

完全な不意打ち。先にフアラ津神を仕留める事を考えているのか、翼が背後から迫る光線に気付いているようには見えない。

しかし、彼らの叫びは翼――否、彼女が身に纏う天羽々斬に届いていた。

「――其方の戒名に記す字をどう掘るか？ 明示せよ」

彼女の周囲に突き立っていた黒刀が独りで浮遊し、四角を描くようにそれぞれの切っ先を合わせると、そこを中心に発生したエネルギーが光線を阻んだ。



「グル——ッ!？」

完全な不意打ちであったはずなのに、それを阻まれて怯んだ奏に振り向いた翼が片手を振り下ろすと、突如上空に出現した剣型のエネルギー弾が殺到。奏の全身に着弾し、その体が大きく吹き飛ばされる。

「通常のイグナイトとは違う能力か。面白い。その歌、もう少しばかり聴かせてもらおうか」

新たに大剣を取り出し、二刀流となったフアラ<sup>津神</sup>が緑色の竜巻を放つてくる。

「——断末魔の辞世の句は 嗚呼 是非もなし」

巻き込まれたら間違いなく全身に深手を負うであろう二つの竜巻に対し、翼は柄を強く握り締めると同時に大きく踏み込む。

肺に溜めた空気を全て吐き出す勢いで振り下ろされた黒刀から発生した絶風が竜巻を呑み込み、竜巻以上の風力を以て破壊。そのままフアラ<sup>津神</sup>を袈裟斬りにした。

「ぐううッ!?! おのれ……ッ!」

火花を散らしながらも突っ込んできたフアラ<sup>津神</sup>の斬撃が迫る。空を切り裂き、緑色の軌跡を描いて喉元に喰らいつこうとする刀身を翼が黒刀で弾くも、T2アルケウスメモリの力で強化された一撃は黒刀を粉々に破壊してしまった。

続けて繰り返し出される斬撃。今度は地面を切り裂いて接近するそれをバク転で躲し、距離を取る間に追撃されぬように剣のエネルギー弾を射出する。フアラ<sup>津神</sup>はエネルギー弾を斬り裂きながら翼を追うが、今度は地面に突き立っていた無数の剣が浮かび上がり、左右から彼女<sup>彼</sup>を撃ち落そうとしてきた。

舌打ち混じりに体を回転させて繰り出した攻撃で左右の剣を粉碎するが、そちらに気を取られている一瞬の隙を突いて、翼は着地と同時に新たな黒刀を二本取って駆け出す。

「——所詮はケモノと変わらぬのか？ 鏑に折れゆくのか？」

「オ、オ、オ、オ、ツツ!!」

フアラ<sup>津神</sup>に突進する翼の前に奏が立ちはだかる。

剛槍を手に襲い掛かってくる奏と、双剣を交差させてそれを防ぐ翼。鏑迫り合いに派生した二人の間には絶え間なく火花が飛び散り、双方の激情を表しているかのようだ。

(奏……)

「オ、オ、オ、オ、ツ！」

翼の視界を埋め尽くす、狂気に吞まれた奏の双眸。見る者を皆委縮させてしまうような、理性の欠片も感じさせない凶悪な眼光に射抜かれながらも、翼はしっかりとその目を見つめ返す。

(待ってて、奏。今すぐに、貴女をその呪縛から救ってみせるツ！)

もう二度と会えないと思っていた相手に、こうして巡り合えた事に感謝する。我ながら、未だに彼女から卒業できてない事が恥ずかしく思えてくるが、今の自分がいるのは、彼女のお陰でもある。そんな、かつての自分にとっての光になってくれた彼女が闇に堕ちたのなら、それを救うのは、この風鳴翼を除いて他にいない。

鏑迫り合いを征したのは——翼だ。

押し切られた奏の両手から槍が離れて、甲高い音を立てて落下する音が聞こえる。

双剣が紅蓮の炎を纏う。地獄の業火を思わせる灼熱の刃が、友を蝕む呪いへと牙を剥く。

『絶刀双撃・羅生門』

紅蓮の双撃を受けた奏の体が吹き飛ばされ、二度、三度地面を跳ねた後に武装が解除される。峰内だったが、それでも威力はガイアメモリとイグナイトモジュールの力を完全に融合させたもの。骨や内臓を破壊しない程度に力を抜いて攻撃したが、倒れている奏が心配だ。だが、今はそれについて考えている場合ではない。

「フ——ッ！」

背後から斬りかかってくるフアラ津神から、身を翻して距離を取る。

両手に剣殺しの大剣を携えるフアラ津神が放った竜巻を躲し、右手の黒刀を投擲する。シンフォギアによって強化された腕力で投げられた黒刀は、弾丸に勝るとも劣らない速度で標的を貫こうとする。フアラ津神はそれを右手の大剣で弾くと同時に剣殺しソードブレイカーの能力で破壊してしまうようにするが——

「……ッ!? なんだと……?」

振るわれた斬撃は、黒刀を防ぐ事には成功した。しかし、破壊破壊されない。

剣殺しソードブレイカーの能力は間違いなく発動しているはずなのに、いったいどうして——そう疑問を抱いた時には、既に翼はフアラ津神に肉薄しており、左手に残った黒刀で斬りつけてきた。

噴き上がる炎。凄まじい熱気と共に繰り出された斬撃は寸分違わずにフアラ津神の胴体を捉え、緑色のドレスの奥にある躯体に深い傷を刻み付けた。

「く——オオッ！」

数歩後退りながらも、フアラの瞳に戦意は消えていない。傷から絶え間なく弾ける火花を無視し、再び斬りかかってくる。

それを防ぐ翼。上段より振り下ろされた双撃を受け止めた黒刀は、凶刃から主を護り抜いて碎け散った。しかし、翼が手を振るえば地に突き立っていた別の黒刀が彼女の手に収まり、反撃の一撃を加えた。辛うじて右手の大剣で防ぎ、剣殺しの能力を発動するも、やはり黒刀が壊れるまでの間隔が長くなっている。まるで、耐性を獲得しているかのよう。

碎かれた矢先に新たな黒刀を手に斬りかかる翼。それをフアラが捌き、破壊する度に、黒刀は徐々に剣殺しへの耐性を獲得すると同時により頑丈になり、その威力を増していく。

夢とは、幾度の挫折と再起を経て叶えるもの。何度となくあらゆる障害によつて願望を阻まれ、打ちのめされながらも、誰もが夢に向かつて羽ばたき続ける。

今の翼の戦い方は、まさにそれを象徴しているかのようだった。

「ハア——ッ！」

そして、遂に横薙ぎに振るわれた黒刀が、二本の剣殺しを粉碎したのだった。

「馬鹿な……。哲学の牙を砕いただとツ!?」

「貴様は、私を剣と呼ぶのか？」

根本から打ち碎かれた剣殺しに僅かに目を見開くフアラに、翼が問う。

「剣？ 否。私の名は風鳴翼。夢に羽ばたく、大いなる翼。貴様の哲学に、翼は折れぬと心得よ」

翼の足元から、突風と共に桃色の花びらが舞い上がる。それを目に

した八紘が思わず口を開く。

「これは、桜……？」

今の季節には咲くはずのない桜の花びらが舞い散る光景。その中心に佇む翼が軽く手を広げると、地面に突き立っていた全ての黒刀が砕け、炎の渦となって彼女の手元に集う。

炎の渦が消えた頃、翼の手には、彼女の身長を上回るリーチを誇る一本の野太刀が握られていた。

「燃え上がれ——黒疾風」

血肉を寄越せ、魂を寄越せと叫ぶようにギラギラと月光を反射する漆黒の太刀の柄を両手でしっかりと握り締め、ゆつくりと腰を落とす。

「——さらばだ、現世に留まりし魂よ。今、楽土へ送ってやる」

武器を砕かれたフアラ<sup>津神</sup>が、その身からアルケウスの力を象徴する黒い靄を噴き上げる。しかし、彼女<sup>彼</sup>が攻撃を繰り返すよりも、翼の方が数段早い。

『闇神刀・黒疾風』

振るわれた刀身から飛び出した紅蓮の焰を纏った絶風がフアラ<sup>津神</sup>を斬り裂き、大爆発が起きる。

しかし、翼は武装を解除しない。この黒煙の奥にいるであろう彼女<sup>彼</sup>は実にしぶとい存在だ。この一撃を受けても尚、自分に攻撃を仕掛けてくるかもしれない。

「……見事」

晴れた黒煙の先。今にも崩壊してしまいそうなほど、全身に亀裂が走ったフアラ<sup>津神</sup>が姿を現す。翼は注意深く彼女<sup>彼</sup>の様子を窺うが、最早今の彼女<sup>彼</sup>に戦う力は残されていないように見える。

「貴様のその生き様、敬意に値する。——だが、俺はここで倒れるわけにはいかない」

「——ッ！ 待てッ！」

テレポートジェムを取り出すフアラ<sup>津神</sup>を逃がすまいと剣型のエネルギー弾を撃ち出すが、時すでに遅し。フアラ<sup>津神</sup>はエネルギー弾が直撃する寸前でテレポートジェムを砕き、眩い輝きと共に消えてしまった。

追跡は不可能だと判断して悔し気に拳を握り締めるが、今はもう彼女<sup>彼</sup>を追うよりも——

「奏……」

技を受けて武装解除されたかつての戦友にして親友を抱き上げる。軽く揺すつてやると、僅かに呻き声を上げながら奏が目覚めます。

「っ、翼……っ？」

「……っ、奏……奏えッ！」

「おわッ!? お、おい……翼……」

強く抱き締められ、地面に押し倒されるような態勢になってしまった奏は翼に離れるよう促そうとしたが、涙ながらに自分の名前を繰り返し口にする戦友の姿にふっと微笑んだかと思うと、泣きじやくる子どもをあやす母親のように、優しく翼の頭を撫で始めるのだった。



『よくやったぞ、翼。オートスコアラーを撃破し、奏君も救出してくれたとはッ！』

『ありがとうございます、叔父様』

モニターに映る弦十郎に、頬に湿布を貼った翼がにこやかに笑う。現在、彼女は風鳴邸よりS・O・N・G本部へと連絡を取っている。奏も弦十郎達と話をしたがっていたが、デスドローパントの呪縛から解かれたばかりだからなのか、まだ十全に動けるといいうわけではなく、今は別室で休んでいる。

『克己君達もありがとう。君たちがいなければ、きっと街にも被害が出ていた事だろう。本当に感謝する』

『俺達はやるべき事をしたまでだ。報酬さえ忘れてくれなければ、それでいい』

『森を焼かないように気を付けたんだから、ちゃんと用意しなさいよ』  
『まったくその通りねッ！』

フアラが<sup>津神</sup>召喚したアルカ・ノイズの掃討に当たっていた克己達は口々に報酬の事を弦十郎に言うが、弦十郎は『当然だろ』と笑顔で答えた。しかし、その後方にいる翔太郎達はそれとは真逆だった。

『所長、無茶をしてくれたな』

『うっ、ごめんなさい……。翼ちゃんのお父さんの話を聞いてから、居ても立っても居られなくて……』

映像越しとはいえ、夫を始めた仮面ライダー達の鋭い視線に射抜かれた亜樹子が縮こまる。

『八紘兄貴もだ。緒川がいたとはいえ、アルカ・ノイズがひしめく森に入るのは止してくれ。流星に心臓に悪い』

『む……。すまない。翼の事が気になったものでな……』

『……兄貴、変わったな』

「な、なんの事だ？」

『はははっ』

「おいつ、なぜそこで笑うッ！ 弦ッ！」

声を上げて笑う弟に、兄が拳を振り上げて怒る。しかし、本気で怒っているわけではないらしく、少しした後には拳を下ろしたかと思えば、ふっと小さく淡い笑みを浮かべた。

しかし、この空気のまま話が終わる事はなく、フィリップが皆を現実に取り戻すべく口を開く。

『翼ちゃん。話を変えて申し訳ないが、訊きたい事がある。君が相手取ったオートスコアラ、フアラ・スーフ——津神真一の事だが、彼はその場で倒れず、撤退したんだよね？』

「はい。今にも倒れてしまいそうなくらい、满身創痕でしたが……」

『……まずいな。それは、本当にまずい』

『？ どういう事ですか、フィリップさん？』

『今の彼は魂だけの存在だ。根本まで繋がっているであろうT2アルケウスメモリを破壊しない限り不死身の彼が、取り憑いたオートスコアラの躯体が深手を負ったとしたら、次に起こすであろう行動は……』

「……まさか」

T2アルケウスメモリの能力を思い出した克己が目を細める。

彼とフィリップが感じた不穏な予感。それは、こことは別の場所で現実になろうとしていた——

◇ ◇ ◇

「なぜ戻ってきた。フアラ」



チフオージユ・シャトー王室。シンフォギア装者によって撃破されたオートスコアラアの墓標であるかのように天井から三色の天幕が見下ろす中、キャロルは眼下で膝をつく人形の騎士を睨む。

「貴様の目的は、彼のシンフォギア装者と戦い、その呪いの旋律を手に入れる事。死ぬまでが貴様の役目だというのに、よくもおめおめと戻ってこれたな」

「……申し訳ございません、マスター」

頭を下げたまま、謝罪の言葉を上げるファラ。その身に宿る精神が、既に彼女のものでない事を、主たるキャロルは気付いているのだろうか。

「まあ、いい。お前の機能が停止するまでの時間は長くない。早くて今日中には、お前は死ぬだろう。後はオレに任せろ。シンフォギアシステムも、ライダーシステムもどうに解析し終えた。苦戦はするだろうが、なに、オレの敵ではない」

己の手を握ったり開いたりしながら、「ああ、そうだ」とキャロルはわざとらしく口を開く。

「一つ、お前に言い忘れていた事があった」

「……？ それはどのようなもので？」

表情に変化こそ表さないが、キャロルの言葉を一言一句聞き逃さないと意識を集中させるファラに、キャロルは淡々と告げる。

「エルリンと津神叶が消えた」

「……ッ!？」

脳が揺さぶられる感覚を覚えて、ファラが顔を上げる。瞬間、「し

まった」と気付くも、後の祭り。

「やはりか。貴様、オレの騎士を殺したな」

目の前にいる存在の正体に確信を持ったキャロルが拳を握り締める。眉を顰めて皺を作った彼女の双眸には、明確な憤怒の炎が燃え盛っている。

「エルリンだけで飽き足らず、よくもそいつもオレから奪ってくれたな。津神真一イツ！」

愛する男の体を奪われた事、そして己を護る人形騎士の意識を喰らった事に対する憤慨を隠さずに立ち上がったキャロルが手を翳し、瞬時に魔法陣を構築。放たれた爆炎と暴風がフアラ津神の身を襲い、廊下まで吹き飛ばした。

「ガ、ハ——ッ！」

翼から受けたダメージがほとんど回復していない状態で受けた二撃はフアラ津神に絶大なダメージを与え、パラパラと欠片が溢れる壁から床に落ちた彼女彼は、堪らずその場で呻き声を上げる。

「思えば、オレの計画が狂ったのは貴様らが来てからだった」

その外見からは想像もつかぬ覇気を漂わせ、キャロルが王室から出てくる。

「異世界からの転移者。あの男なら興味を持ったかもしれないが、オレは最初から貴様らに興味は無かった。だがッ！」

指揮者のように腕を振るうと、今度は魔法陣から激流が放射され、

「<sup>津神</sup>ファアラを押し流した。

「貴様はッ！ オレの最愛の騎士<sup>エルリン</sup>を奪ったッ！ 貴様があんな事をしなければ、万象黙示録は既に果たされていたというのにッ！」

パヴァリア光明結社と財団Xの髓を結集して開発されたライダーシステム。あれさえあれば、オートスコアラ全機が役目を果たした後に、邪魔者となるシンフォギア装者も仮面ライダーも全滅させる事ができたはずだ。

なのに、いざ計画始動の時にラメンターが現れた。そして、こことは異なる並行世界からやって来た彼らのライダー……津神真一は、あろう事か最強の騎士エルリンの肉体を奪ってしまった。

数百年の時を費やして整えた準備が、こいつらの出現で全て滅茶苦茶になってしまったのだ。これを許せる者など、誰一人としてこの世にはいないだろう。

「だが、エルリンはもうここにはいない。お前という荷が降りた以上、あいつは自由だ。オレの敵になるのも……あいつの選択だと言うのなら……」

ここから離れたという事はつまりそういう事なのだろう、と理解すれど、キャロルの声は弱々しい。愛する男が敵になる。覚悟はしていたが、やはり堪えるものがある。

「貴様はここで殺す。貴様の執念は見上げたものだが、それもここまです。ファアラも、貴様なんぞに己の躯体を使われる事は到底我慢できんだろうよ」

これ以上は見過ごせない、とばかりにキャロルは己が持ち得る最強の攻撃手段を以て津神真一を殺そうと決意し、空中に手を翳す。

魔法陣から出現させた巨大なハープを奏で、ダウルダブラのファウ

ストローブを纏おうとした、その時——

「——シアン」

「——ッ!?!」

フアラ<sup>津神</sup>の音が嫌に響き渡った途端、ハーブを取ろうと伸ばした左腕の肘から先の感覚が消えた。

なにが起きた、と恐る恐る自身の左腕を見て、キャロルは驚愕に目を見開いた。

「あ——ああああッ!?!」

肘から先がなくなった己の左腕を見た瞬間、キャロルの脳が遅れて肉体が傷つけられた事に気づき、その痛みを全身に伝え始める。

切断面から血を撒き散らして苦悶の叫びを上げるキャロルだが、背後から回された腕が彼女の首を捉えた。

「よくやった、シアン」

「恐縮です」

「ぐ……ううッ！ シアン……ゴールデイス……ッ!」

いつの間に現れたのか、己を捕らえて離さない死神を睨み上げるも、シアン・ゴールデイス——デスドローパントはまるで意に介していない。

「この体にもう用はない。万象黙示録完成の為の呪いの旋律は、今回の戦いでようやく揃った」

立ち上がったフアラ<sup>津神</sup>が、全身から少量の火花を散らしながら歩み寄ってくる。

「次はお前だ。キャロル・マールス・デーインハイム。お前の肉体を手に入れ、我が願望を叶える」

全身から黒い瘴気を立ち昇らせ、フアラが津神キャロルの顔を掴む。  
デスドローパントの拘束から逃れ、フアラに津神反撃しようとしていた意志が徐々に弱まっていき、自分が深い奈落の底へと落ちていく感覚に襲われる。

（オレが、壊れる……。消える……。無くなる……。ッ！ 嫌だ、消えたくない……。ッ！ 消えたくない……。ッ！）

「エル……。リン……」

振り向きざまに不敵な笑みを浮かべる愛する男の姿が脳裏に浮かんだ瞬間、キャロルの意識は途絶えた。

「具合はどうですか？」

「ああ、悪くない。女の体に入るのは初めてだが、いずれ慣れるだろう。心は未だ碎けていないが、それも時間の問題だ。いずれ、アルケウスの力に屈する」

「酷な事を為さる。……して、次はどうしますか？」

「我が妹を取り戻す。エルリン・ラインハルトを殺し、忌々しき仮面ライダーを殺し、そしてシンフォギア装者を殺す。叶と、このチフォージュシヤトーさえあれば、俺達の願いは果たされる。エルリンと叶の搜索、頼まれてくれるか？」

「もちろん。貴方様のご指示であれば、如何様にも……」

「あと一歩だ……。あと一歩で、あらゆる命は平等になる。邪魔はさせないぞ、仮面ライダー共め」

## Sの目的／遭遇

走る。

奔る。

駆ける。

背後から聞こえる、憤怒と憎悪に塗れた叫び声に耳を塞ぎながら、固く閉じた両目から溢れる涙を噛み締める。

怖かった。この前までは別け隔てなく接してくれたはずの人々が、まるで人が変わったように彼女達を迫害し出したのが。

いや、きつと、それに気付いていなかったのは彼女だけで、炎に巻かれた父親や、今この体を抱えて走る青年は気付いていたのかもしれない。それほどまでに、かつての彼女は、人を信じられる性格だったのだろう。

でも、あの日常は終わった。唐突に、通り魔に刺されて死んでしまおうぐらいには、唐突に。

かつては笑顔で接してくれた人々は、もういない。今の彼女にとって、彼らは既に『ヒト』ではなく、『ヒトの皮を被った怪物』にしか見えなかった。

愛する父はもういない。咄嗟の判断で自分を助けてくれた青年に抱えられ、ただ涙を流しながら逃げる。

そうして彼が走り続けて、数秒程。

体感的には、それぐらいの時間しか経っていない。しかし、青年の高い身体能力が為せる技か、背後から聞こえていたはずの叫び声は聞こえなくなっていた。

『■■■■……もう、大丈夫だ』

頭上からかけられる、優しい声。

この場が安全である事を教えてくれる彼の言葉に安堵を覚えて、瞼を持ち上げる。

……綺麗な三日月だ。

森の中の拓けた場所で見上げたそれは、煌々と輝いて自分らを見下ろしている。

『この先には、お前の父親の旧友がいる。彼なら、お前を護ってくれるはずだ』

貴方はどうなるの？

そう問いかける彼女に、彼はなにも答えてくれない。それがどうしてなのかわからず、少しだけ深く聞こうとして……

『うふふっ、見つけましたわっ♪』

ゾツとする程に冷たい、狂ったような声に体が竦んだ。

『……やっぱりお前か。まだここにいたのか？』

『当然ですわ。私、貴方に会う為にずっと行動していましたのよ？  
なのに貴方ったら、全然私に会いに来てくたさらないから……』

青年が睨みつけた暗闇から現れたその姿は、わからない。姿も、服装も、なにかもがわからない。それが、『それ』を実際に見た彼女と、ボクの違いなのかもしれない。それとも、元からそういうものなのだろうか。でも、今のボクでもわかるのは、当時の彼女もまた、ボクと同じように『それ』に強い恐怖心を覚えている事だった。

『あら、貴女……』

その時、『それ』が僅かに身動きした。それが、彼女に視線を向けてきたのは、嫌でも理解できてしまった。

……いや、違う。『それ』が見ているのは、彼女じゃない。

『随分と遠くから見ていらつしやるのですね。ですが、それは駄目ですわ。だって、それは貴女みたいな出来損ないがするものではありませんもの。ですから……』

『それ』が再び身動きして、体が恐怖で固まる。

嗚呼、そうか。『それ』が視ていたのは、彼女なんかじゃなくて……

『さつさと、私と■■■■の世界から出ていけッッ!!』

遙か彼方にいるはずの、ボクだったんだ……。

◇ ◇ ◇

ラメンターのドーパント——ファイタードーパントと、キャロルが従えるオートスコアラアの最後の二機——レイア・ダラーヒムとファラ・スューフの撃破というニュースは、この戦況を大きく揺さぶる事となった。これまでの戦闘によってガリイとミカが破壊されているため、これでキャロル陣営は事実上の壊滅状態。彼女と同盟を組んでいるラメンター陣営は、ファイタードーパントの変身者であった黒芭燈迹の死亡により、その一角が崩れた。まだシアン・ゴールドイスが変身するデスドーパントと、恐らく今もどこかで生きているであろうラメンターのリーダーである津神真一が変身するアルケウスドーパントがいるが、とにかく、戦況はS・O・N・G・陣営に大きく傾く事となった。

翼がフアラ撃破と同時に救出したシンフォギア装者——天羽奏も、数日休ませれば完全に回復し、今ではかつてのような快活な笑顔を浮かべて翼と一緒に行動できるようになっている。

現在、S・O・N・G・の潜水艦は物資の搬入の為に港に泊められており、本日一杯は出港しない事から、装者達や克己達は休みを貰った。克己達大人組はなにか手伝える事は無いかと考えていたそうだが、弦十郎直々に「時にはお前達も休んで英気を養え」と言われてし



まった以上、それぞれの一日限りの休暇を楽しむ他ないだろう。

「あら、美味しそうなアイスクリームね。貴女も食べる？」

「あ、はい。戴きます」

そしてそれは、この二人も例外ではなかった。

久しぶりに外へと繰り出したくなったフィーネは、夏の時期に打つてつけないシンプルながらも女性としての魅力を感じさせる服装に身を包んでいる。その傍らで歩くエルフナインも、今日はいつもの白衣は研究室に置き、子どもの体型にも似合うワンピースを着ていた。

なにも知らなければ母娘のような外見を持つ二人は、チラリと見かけたアイスクリーム店で購入したアイスクリームを片手に、近くにあった公園のベンチに座って休憩していた。

「うう……頭がキンキンします……」

「ふふ、初めてだからって、あんなにがつつくからよ。それにしても、今日は暑いわね……」

麦わら帽子の隙間から差し込む日差しや、公園の外で暑そうに襟元を緩めて歩く人々を眺め、フィーネは思わずため息を吐いた。

しばらく潜水艦内で生活していたからか、いつもにも増して暑いと感じる以上、熱中症にならぬよう注意しなければならぬだろう。そんな事を考えながら隣を見やれば、なんとかアイスクリームの冷たさから脱出したエルフナインが、持参してきた水筒に入れていたお茶をごくごくと飲んでいた。そういうえば、自分は麦わら帽子を被っているのに対し、彼女はなにも被っていないではないか、と今更ながらに気付いた。

「エルフナイン、それが飲み終わったら、帽子を買いましようか。熱中症対策はしっかりしないと」

「わかりました」

エルフナインが十分に水分補給し終えた後、フィーネはエルフナインの手を取って歩き出す。

そうして二人が足を運んだ先は、この街でも最も巨大なシヨツピングモール。その外観に見合う多くの店が揃っており、その中にはもちろん女性用のブティックも存在する。

「はあく……涼しいです……」

「ふふつ、これぞ文明の利器ね」

シヨツピングモールに入るや否や、内部の温度を下げる為に作動しているクーラーのお陰で、先程までの酷暑などあつという間に忘れてしまう。それがあくまでこの中にいるだけのものだと思うと、些か憂鬱な気分になってしまうが。

「これなら、他にもなにか買っておいた方がいいかもしれないわね。弦十郎君達にもなにかしらお土産を買っていきましょ」

「そうですね。わかりました」

だが、まずはエルフナインの帽子を買うべく、フィーネは彼女を連れて二階へと移動しようとする。

二階へと続くエスカレーターに差し掛かろうとしたその時、エルフナインの動きが止まった。

「……？ どうしたの？」

「あの……人は……」

信じられないものを見ているかのような目で視線を固定させているエルフナインがなにを見ているかが気になり、フィーネがその方角へ視線を動かすと……

「……ッ!! あの、方は……ッ!」

それは、一人の男だった。

どこかライダーズーツに似た服装に身を包んだ、蒼髪の青年。隣にいるゴスロリ調の服を着ている少女は見覚えが無いが、その青年は、フィーネが慕っているとある男の弟と瓜二つだったのである。

彼女達の視線に気付いたのか、その青年も二人を見て固まった。

「フィーネ……? それに……キャロル?」

「……■■■■様……?」

予想だにしなかった出会いに、両者は目を見開くのだった。  
そんな彼らから離れた場所で――

「……見つけました」

髑髏の死神は、冷酷な笑みを浮かべた。

◇ ◇ ◇

「まさか、こうして貴方と一緒に歩くとは思わなかった」

「……ああ」

フィーネ達が青年達と出会う少し前、彼女達とは別の用でショッピングモールに訪れていた者達がいた。

「なにか欲しいものはあるか、ミーナ」

「いきなりショッピングモールに連れてきたと思ったら……そういう事だったんだね。意外だね、克己がそう言ってくれるなんて」

男……克己が隣にいる女性、ミーナにそう言われ、自嘲気味に口元

を歪めた。

「死神には似合わないか？」

「そういうわけじゃないわ。なんだか、克己達がこうして、少しでも平和な日常で暮らせているのが嬉しくて」

「……それは俺も常々思っていたところだ」

本来ならば、<sup>NEVER</sup>克己達にこのような平穏な時間などあり得ないものだった。

常に戦場に身を置き、血と硝煙の臭いを纏って敵の命を狩り続ける死神達。戦場から離れても、待っているのは訓練や次の任務の情報整理。その繰り返しだが、かつてのNEVERの日常だった。最後に克己が見た平穏な世界というのは、かつての生まれ故郷であり、自分達が混乱を齎す前の風都だった。

それが今はどうだ。

仲間達と共にラメンターの手によって蘇ったかと思えば、何の因果か仮面ライダーの存在しない異世界で目覚めた。デスドローパントの呪縛に囚われる事も無く、確固たる意思を持って行動し、ひよんな事からシンフォギア装者やS・O・N・Gと共に世界を救う戦いに身を投じている。

現にこれまで二度世界を救い、こうしてまた、世界を救おうとしている。

人生などというものはとうに終わり、自分達に在るのは過去と現在いましかないが、それでも、運命とは不思議なものだと思わざるを得ない。

「……克己、この戦いが終わったら、貴方達はどうするの？」

その時、ふと小さく訊ねられ、克己が眉を吊り上げる。

「どういう意味だ？」

「私達はきつと、この戦いが終わったら元の世界に帰る。正直に言う

と、私はあつちの世界に未練なんてものはないけど、翔太郎やフィリップ達は違う。彼らにとって、風都は帰るべき場所だから」

風都で克己達の真実を知ってほしかった翔太郎達には、既に真実を話した。克己達が完全な悪人でない事を知ってくれた以上、最早ミーナにとっての役割のようなものは終わったも同然だった。

しかし、それはそれとして自分の生まれ育った世界には愛着がある。この戦いが終われば、自分もきつと元の世界に帰るだろう。

では、克己達はどうするのだろうか。彼らもまた、自分と同じように帰るのだろうか。そう思って訊ねてみたミーナに対し、克己はスツと目を細めた。

「帰るつもりはないな」

「それは……」

「自分達が悪人として向こうに認知されているからじゃない。ただ、向こうに戻ってもあるのは再び傭兵として活動する現実だけだ。俺からすれば、それでも別にいいさ。元よりNEVERおれたちは戦う為に生まれたからな」

ただ——と、克己は懐から通信端末を取り出す。

電源ボタンを短く押されてスリープ状態から復帰したロック画面には、自分を含めたNEVERのメンバー達の写真が映っている。

「俺が思っていた以上に、俺はあの場所が気に入ってるようだ。俺以外の連中も同様に……」

それは、NEVERが全員揃っているところに通りがかった切歌が勝手に撮ったものだ。当初は盗撮されたと京水達が怒ったものの、写りやメンバーの配置が素晴らしく噛み合っていたもので簡単に許してしまった。

その後、許してもらえた事に気を良くした切歌は克己達にこの写真

を送ってきたのだが、克己はその写真をロック画面に設定していた。それが、昔では絶対にあり得ない光景だったからか、今でも他の写真に変えていない。

隣で克己が見つめる写真を覗き見たミーナは、一瞬呆けたように目を軽く見開き、そして小さく笑った。

「克己って、本当に仲間思いだよね」

「そうか？」

「そう。あまり態度には出ないけど」

「……そうか」

再び端末をスリープ状態にし、懐にしまう。

ふと近くにあつた時計を見やれば、そろそろ時計の針が三時を指そうとしていた。

「小腹は空いてるか？ なにか奢ってやる」

「それなら——」

丁度気になっているカフェがあつたので、そこに連れていってもらおうとしたミーナだが、その言葉は下の階から聞こえてきた爆発音と悲鳴によって遮られた。

瞬時に表情が引き締まった克己とミーナが吹き抜けから下の階を見下ろすと、そこには我先にと逃げ惑う人々の姿と、次にそれを追うように続々とやってくるアルカノイズの軍団があつた。

「ミーナ、お前は避難しろ。ここは俺に」

「わかった。無理はしないで」

「あいつら相手に無理はないさ」

ミーナと頷き合い、克己は吹き抜けから飛び降りる。

取り出したロストドライバーを腰に装着し、着地。直後に受け身を

取り、両足から全身に走る着地時の痛みを受け流すと同時にガイアメ  
モリを取り出す。

『エターナル！』

「変身ッ！」

『エターナル！』

全身に純白の鎧を装備した後、蒼い風と共に漆黒のマントを羽織つたエターナルが、近くにいた男性を襲おうとしていたアルカノイズを蹴り飛ばす。

仮面ライダーの脚力で繰り出された一撃を受けたアルカノイズはそれだけでその身を炭素に変えて消滅させる。

「さっさと逃げろ」

「あ、ああ……ありがとう！」

茫然としていた男性を助け起こし、彼が逃げていくのを確認した後、手元に出現させたエターナルエツジを構えて走り出す。

エターナルの存在に気付いたアルカノイズ達が次々に迫ってくるが、彼らなどエターナルにとっては敵ではない。巧みにナイフを振るい、徒手空拳でアルカノイズ達を蹴散らしていく。

「——大道君ッ！」

アルカノイズの体を形成していた炭をマントを靡かせて振り払ったエターナルに、遠くから誰かに声をかけられる。

声が聞こえた方角に視線をやると、そこにはネフシユタンの鎧を身に纏ったファイネが、エルフナインを庇いながらアルカノイズと交戦していた。

「ファイネッ！ エルフナインもいるのか」

「ええ、いきなり攻撃されてね。エルフナインは私に任せて。貴方は――」

鞭を駆使し周囲のアルカノイズを纏めて消滅させたフィーネは、そのまま別の方角へ右手で握っていた鞭を向かわせる。すると、なにかが切り裂かれるような音と「ぐっ」と苦痛に呻く声が聞こえてきた。

「今の鞭が行った方向へ行つてッ！　デス・ドーパントがいるわッ！」  
「……ッ！　わかった」

残るラメンターのドーパントの内の一体がここにいる事を教えられたエターナルは、先程フィーネが鞭を向かわせた廊下に出る。

「――ッ!?!」

そこでエターナルは、仮面の奥で目を見開いた。

「ハアッ！」

なんとそこには、幼い少女を両腕で抱えた男が、生身で複数のドーパントと交戦していたのだ。しかも劣勢というわけでは決してなく、寧ろ男性の方が押しているように思えるのだ。

男性に襲い掛かっているドーパントは、全部で四体。

伸ばした五指から白い冷気を放つ、アイスエイジ・ドーパント。その体躯に相応しい豪快な動きで攻撃を仕掛ける、ビースト・ドーパント。粘着性のある粘液で青年の動きを止めようとする、スイーツ・ドーパント。そして、彼らや青年の動きを少し離れた場所で見ながら、青年に攻撃を仕掛けるタイミングを狙う、デス・ドーパント。

「中々しぶとい……。ですが、いつまでそうしていられますかな？」  
「……ッ！」



背後から首を刎ねようと振るわれた鎌を間一髪で飛び退いて回避した男だったが、着地した隙を突かれてしまう。

スイーツ・ドーパントの腕から放たれた粘液が彼の足元を固め、次いでアイスエイジ・ドーパントの冷気が粘液をより強固にする。

「く、動けない……ッ！」

「その方は我らの計画において最も重要な存在。大人しく返していただけだと嬉しいのですが」

身動きが取れなくなった青年にドーパント達が迫る。

万事休すかと思われたその時、デス・ドーパントを飛び越えたエターナルが振り向きざまにエターナルエッジで斬り払った。

「な……ッ！ 仮面ライダーッ!？」

「一対四とは卑怯じゃないか、デス・ドーパント」

「お前は……」

「よく持ちこたえたな。後は俺に任せろ。……ん？」

周囲を囲むドーパント達への警戒を怠らずに青年に振り返ったエターナルだったが、彼が抱えている少女に気付いて仮面の奥の眉を顰めた。

「お前は……津神叶ッ!? なぜここに……」

「今は、気にしないで……白い死神……。来るよ……」

「——ッ！」

自分達を囲んでいたドーパント達が一齐に動き出した事に気づき、エターナルは即座に取り出したT2ガイアメモリをベルトのマキシマムスロットに挿し込んだ。

『サイクロン・マキシマムドライブ！』  
「フンッ！」

翡翠色の突風を纏わせた右足を勢いよく床に叩きつけた直後、エターナル達を覆う形で展開される風のドームが、ドーパント達を吹き飛ばした。

吹き飛ばされたデス・ドーパントが立ち上がった直後、飛び込んできたエターナルに斬りつけられて火花を散らす。その間にも他のドーパント達が青年から少女を奪おうと迫るが、次の瞬間、彼らの動きが止まった。

「克己ッ！」

頭上から聞こえる声。エターナルが顔を上げると、そこには上部から掌をドーパント達に向けているミーナの姿があった。

「ミーナッ！ 避難しろと言ったはずだッ！」

「ごめんなさい。でも、どうしても貴方の助けになりたかったのッ！」

ミーナが腕を振るえば、それに引つ張られるようにドーパント達の体が浮かび上がり、デス・ドーパントの方へと投げ飛ばされた。

「な……ッ!?!」

まさかドーパント達が自分目掛けて飛んでくるとは思わなかったのか、回避行動を取れなかったデス・ドーパントはそのまま自らが蘇らせた彼らによって弾き飛ばされた。

さらには、彼らの下敷きとなってしまい身動きが取れにくくなってしまった。

「ええい、退きなさいッ！ 何の為に貴方方を蘇らせたと思うので

すッ！」

自分に押し掛かるビースト・ドーパントを押し退けようと藻掻くが、彼らもまた周りにいるドーパント達を押し退けようと必死で思うように退かせない。

『ユニコーン・マキシマムドライブ！』

(しまったッ!!)

そこへ響く、マキシマムドライブの発動を意味するガイアウイスパー。

「——オオオオオオッ!!」

「く……ッ！」

遠くから聞こえてくる雄叫びに圧されるように、デス・ドーパントは全身からエネルギーの炎を噴き上がらせてドーパント達を浮かび上がらせ、速やかに彼らから距離を取った。

「オラァ——ッ!!」

デス・ドーパントがドーパント達から離れた直後、青白いドリル状のエネルギーを纏ったエターナルの拳がスイーツ・ドーパントの鳩尾に叩き込まれ、そのまま下にいるアイスエイジ・ドーパントとビースト・ドーパントも巻き込んで床に叩きつけた。

三体分の断末魔と共に爆発が起き、黒煙の奥からスナップをするエターナルが現れた。

「次はお前だ、デス・ドーパント」

「……はあ、まさかこう作用するとは」

目も当てられないとばかりに額に手を当てたデス・ドーパントは、エターナルから彼の背後にいる少女を見る。

スイーツ・ドーパントの粘液とアイスエイジ・ドーパントの凍結が消えた事で自由になった青年に抱えられている少女は、感情を感じさせない瞳でデス・ドーパントを見ており、その奥にある意志は窺い知れない。

「敵に回すと厄介な能力ですね……ここは一旦退くとしましょう」

殴りかかってくるエターナルに手元に灯した人魂を放つ。

エターナルが人魂を斬り裂いた事で小さな爆発が起こるが、その隙にデス・ドーパントはテレポトジエムを砕く。黒煙を突き破ったエターナルが辿り着いた頃には、そこにはデス・ドーパントの姿はなくなっていた――。

◇ ◇ ◇

チフォージユ・シャトー、玉座の間。

テレポトジエムの光から現れたデス・ドーパント――シアン・ゴールデイスは自らのドーパント化を解除し、玉座に座るキャロル――否、津神真一に跪いた。

「申し訳ございません、ご主人様。叶様の奪還に失敗しました」

「……………」

「…………ご主人様？」

頭を垂らすシアンが真一の様子を不審に思っこらへて声をかけると、真一はゆっくりと瞼を持ち上げた。

「…………ああ、シアンか。なにか、用か…………」

「叶様の奪還に失敗しました。力及ばず、大変申し訳ございません」

「……叶？ 叶とは……」

「ご主人様？ 叶様は貴方様の妹君です、お忘れになられたのですか……ッ!？」

「叶……妹……ぐ、うウ……ッ!？」

「ご主人様ッ!？」

突然自らの頭を押さえ苦しみ始めた真一にシアンが駆け寄ろうとした直後、真一の目が大きく見開かれた。

「貴様——シアン・ゴールディスッ！ よくもオレの腕を斬り落としたなッ!？」

「ッ、キャロル・マールス・デインハイムッ!？」

「キャロル？ 違うッ！ オレはキャロ……いや、違う、オ、わた、シ？ 誰ダ？ おれはなんだ……息子は……ちば<sup>が</sup>うッ！ あの子は娘はどこだ違う俺のいもおとだッ!？」

ガクガクと全身を痙攣させる真一の体から、無数の人物が分かれたる。

それは小さな少年であったり、壮年の男性であったり、そして、今彼が体に乗っ取っている少女のものであったり——彼がこれまで乗っ取ってきた者達の幻影が、真一の体より離れようとしている。

「ご主人様ッ!？」

「うるさい黙れ鬱陶しいッ！ お前達など俺ではない——俺の邪魔をするなッッッ!!！」

無数に混ざり合った声の中、一際大きな男性の叫び声が上がった直後、真一から分かれようとしていた者達の幻影が引きずり込まれた。大きく息を吐いた真一が、汗まみれの額を拭って顔を上げる。

「……どうしたシアン、そんな酷い顔をするな……。俺は、俺だ。津神

真一だ……」

「ご主人様……」

先程の現象を、シアンは知っていた。

アルケウスメモリによる多重心象の具現。これまで多くの肉体に憑依し、その魂を乗っ取ってきた津神真一は、それを経験する度に自我を喪失していく。先程は、一瞬気を抜いてしまったのだろう。その結果、これまで乗っ取ってきた魂が一気に反乱を起こしたのだ。

たとえ過去に憑依し、今は離れたものであつたとしても、その魂の写しは津神真一の魂に刻まれている。自らを捕えている男の元より逃れようとして起こったのが、先程の現象だ。

もし反乱に屈すれば、瞬く間に自我が崩壊してもおかしくない——  
—そんな戦いを乗り越えた真一の瞳が、シアンを捉える。

「叶の奪還に……失敗したそうだな……。大丈夫だ。あの子の能力だ  
としたら、仕方ない事だ……」

「……はっ」

感謝の意と共に頷き、シアンは片膝をつく。

「必ずだ……必ず取り戻す……。なぜ、わかってくれないんだ……。叶  
……」

玉座に背を預け、真一は逃げ出した妹の姿を脳裏に浮かべるのだつた。

◇ ◇ ◇

「先程は助けてくれて、感謝する。俺の名前は、エルリン・ラインハルト。キャロル・マールス・デインハイムを護る騎士達の長。この子の名前は……」

「私は……津神叶。ラメンターのリーダー……津神真一の、妹……」

シヨツピングモールでの戦闘後、S・O・N・G・潜水艦にて。

司令室に集まった者達の前で頭を下げたエルリンと、彼の傍に立つ叶を見て、切歌は調に耳打ちする。

「調、あの子、とつても綺麗デス。写真でも思っていました、まるでお人形さんみたいデス」

「そうだね。でも、今はそんな事を考えてる場合じゃないよ、切ちゃん」

脇腹を小突かれてしゅんとする切歌を他所に、「では」と弦十郎がエルリンを見る。

「君はキャロル・マールス・デインハイムのいるチフォーージュ・シャトーから逃げてきた……というわけか？ その女の子の力を借りて」

「そうだ。こことは別の次元にあるあの城からは、特定の手段を用いなければ出入りできない。この子の力が無ければ、あんなに簡単にこつちの次元に出られなかった」

「津神叶の能力、か」

エルリンに頭を撫でられた叶に、フィリップが目を細める。

「僕らの世界で本棚を使っても、君の能力を閲覧する事は叶わなかった。僕らに助けを求めたのなら、是非その能力について教えてほしい」

「……いいよ。だけど、その前に……私達の願いを聞いて……」

フィリップが弦十郎を見ると、彼は「もちろんだ」と答えた。

それに頷いたエルリンが、弦十郎達に頭を下げる。

「貴方方に頼みがある。どうか、キャロルの……いや、津神真一の野望の阻止してほしい。奴はこの世界と、死者の世界を融合させようとしているんだ」

エルリンから告げられた津神真一の目的に、弦十郎達は目を見開くのだった。